一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告　第 5 集

延永ヤヨミ園遺跡
－Ⅲ区Ⅱ－

福岡県行橋市大字延永・吉国所在遺跡の調査

第１分冊

２０１５

九州歴史資料館

一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告　第 5 集

延永ヤヨミ園遺跡
－Ⅲ区Ⅱ－

福岡県行橋市大字延永・吉国所在遺跡の調査

第 1 分冊

２０１５

九州歴史資料館

Ⅲ -AB 区方形周溝（上から）

1．Ⅲ -AB 区 27 号竪穴住居跡（北西から）

2．Ⅲ -AB 区 1 号墓（東から）

1．Ⅲ -C 区導水施設木樋（東から）

2．Ⅲ -C 区導水施設木樋槽部（東から）

1．Ⅲ -C 区 3009 号土坑準構造船竪板出土状況（南から）

2．Ⅲ -C 区 3003 号土坑臼出土状況（南から）

Ⅲ -AB 区 1 号墓出土鏡

巻頭図版 6

Ⅲ -C 区導水施設木樋

Ⅲ -C 区導水施設木樋・関連木製品

1．Ⅲ -C 区出土墨書土器

2．Ⅲ -C 区出土木簡

序

福岡県では、平成 20 年度から国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、一般国道 201 号行橋インター関連道路建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は、平成 20 ～ 25 年度にかけて行った福岡県行橋市延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡の発掘調査の記録で、国道 201 号行橋インター関連に伴う本遺跡の調査報告書の 4 冊目となります。

本遺跡は、京都平野に突き出す低丘陵上～斜面及び谷部に立地し、近隣には県指定史跡ビワノクマ古墳などが位置しています。

今回の調査では、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期を中心とした大規模な集落跡と古代～中世の遺構・遺物を確認しました。中でも古墳時代前期の導水施設や方形周溝が検出されたことから、本遺跡は当該期において拠点的な性格を有していたと考えられることなど、この地域の歴史を知る上で大変貴重な資料を得ることができました。

本書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 27 年 3 月 31 日

九州歴史資料館
館長　杉光　誠

例　言

1．本書は、一般国道 201 号行橋インター関連道路建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区の記録で、一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告の第５集にあたる。

2．発掘調査は国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課及び九州歴史資料館が実施し、整理報告は同所の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。

3．本書に掲載した遺構写真の撮影は吉村靖徳･大庭孝夫･城門義廣が、遺物写真の撮影は九州歴史資料館が行った。空中写真については、九州航空株式会社･東亜航空技研株式会社･有限会社空中写真企画に委託し、撮影を行った。

4．本書に掲載した遺構図の作成は、吉村・大庭・城門が行い、発掘作業員が補助した。

5．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲・城門・小川泰樹の指導の下に実施した。なお、一部の木製品の実測は公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

6．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7．本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「行橋」、1/50,000 地形図「行橋･蓑島･中津・田川」を改変したものである。

8．本書で使用した方位は、世界測地系による座標北である。

9．樹種の鑑定は小林啓が行い、Ⅳ章以外の獣骨は岩橋由季が同定した。木簡の釈文は松川博一と協議の上酒井芳司が執筆した。

10．本書の執筆は城門・大庭・吉村・小林・酒井・株式会社古環境研究所・パレオラボ株式会社が行い、城門が編集した。

目　次

巻頭図版
序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次
Ⅰ　はじめに（大庭）……1
　1　調査に至る経緯（大庭）……1
　2　調査・整理の組織（大庭）……4
Ⅱ　位置と環境……6
　1　地理的環境（大庭）……6
　2　歴史的環境（城門）……6
Ⅲ　発掘調査の記録……9
　1　遺跡の概要（城門）……9
　2　Ⅲ-AB 区の遺構と遺物（吉村・大庭・城門）……9
　　(1) 竪穴住居跡……12
　　(2) 掘立柱建物跡……56
　　(3) 土坑……63
　　(4) 溝……83
　　(5) 墳墓……122
　　(6) 不明遺構……125
　　(7) その他の遺構……125
　　(8) その他の遺物……128
　　(9) 小結……130
　3　Ⅲ-C 区の遺構と遺物（城門、釈文は酒井）……137
　　(1) 土坑……138
　　(2) 溝……159
　　(3) 水漬け遺構……170
　　(4) 導水施設……174
　　(5) その他の遺構……178
　　(6) 包含層……178
　　(7) その他の遺物……199
　　(8) 小結……224
Ⅳ　科学分析……228
　1　樹種同定（株式会社古環境研究所）……228

2　種実同定（株式会社古環境研究所）…… 230
3　導水施設の 14C ウイグルマッチング（パレオ・ラボ）…… 233
4　寄生虫卵分析（パレオ・ラボ）…… 236
5　花粉分析、プラント・オパール分析（パレオ・ラボ）…… 236
6　堆積物中の珪藻化石群集（パレオ・ラボ）…… 243
7　獣骨の同定（パレオ・ラボ）…… 250
8　Ⅲ -AB 区 27 号竪穴住居跡出土土器の顔料分析（大庭）…… 251
Ⅴ　総括…… 252
1　谷周辺の環境について（城門）…… 252
2　時期ごとの遺構（城門）…… 252
3　準構造船竪板について（城門）…… 255
4　船着場について（城門）…… 258
5　木製品について（城門）…… 260
6　方形周溝（方形環溝）について（予察）（大庭）…… 261
7　導水施設について（城門）…… 266
8　出土木製品の樹種同定（小林）…… 274
9　導水施設木樋の保存処理（小林）…… 279
10　おわりに（城門）…… 282

図版目次（第 2 分冊）

巻頭図版 1　Ⅲ -AB 区方形周溝（上から）
巻頭図版 2　1．Ⅲ -AB 区 27 号竪穴住居跡（北西から）2．Ⅲ -AB 区 1 号墓（東から）
巻頭図版 3　1．Ⅲ -C 区導水施設木樋（東から）　2．Ⅲ -C 区導水施設木樋槽部（東から）
巻頭図版 4　1．Ⅲ -C 区 3009 号土坑準構造船竪板出土状況（南から）
　　2．Ⅲ -C 区 3003 号土坑臼出土状況（南から）
巻頭図版 5　Ⅲ -AB 区 1 号墓出土鏡
巻頭図版 6　Ⅲ -C 区導水施設木樋
巻頭図版 7　Ⅲ -C 区導水施設木樋・関連木製品
巻頭図版 8　1．Ⅲ -C 区出土墨書土器　2．Ⅲ -C 区出土木簡
図版 1　1．Ⅲ -AB 区調査区全景（北東から）　2．Ⅲ -AB 区調査区全景（南西から）
図版 2　1．Ⅲ -AB 区調査区北全景（上から）　2．Ⅲ -AB 区調査区西全景（上から）
図版 3　1．Ⅲ -AB 区調査区南全景（上から）　2．Ⅲ -AB 区調査区南西全景（上から）
図版 4　1．Ⅲ -AB 区基本土層（東から）　2．Ⅲ -AB 区 1 号竪穴住居跡（西から）
　　3．Ⅲ -AB 区 1 号竪穴住居跡出土状況（南西から）
図版 5　1．Ⅲ -AB 区 2 号竪穴住居跡（北西から）　2．Ⅲ -AB 区 3 号竪穴住居跡（上から）
　　3．Ⅲ -AB 区 4 号竪穴住居跡（南から）
図版 6　1．Ⅲ -AB 区 5 号竪穴住居跡（北から）　2．Ⅲ -AB 区 6 号竪穴住居跡（北東から）
　　3．Ⅲ -AB 区 7 号竪穴住居跡（東から）

図版７　１．Ⅲ-AB 区 10 号竪穴住居跡東側（南西から）
２．Ⅲ-AB 区 11 号竪穴住居跡（南西から）
３．Ⅲ-AB 区 13 号竪穴住居跡（上から）
図版８　１．Ⅲ-AB 区 13 号竪穴住居跡（西から）
２．Ⅲ-AB 区 13 号竪穴住居跡出土状況（南東から）
３．Ⅲ-AB 区 14 号竪穴住居跡（上から）
図版９　１．Ⅲ-AB 区 14 号竪穴住居跡（南南東から）
２．Ⅲ-AB 区 14 号竪穴住居跡カマド（南南東から）
３．Ⅲ-AB 区 21 号竪穴住居跡（上から）
図版 10　１．Ⅲ-AB 区 21 号竪穴住居跡（南から）　２．Ⅲ-AB 区 21 号竪穴住居跡（西から）
３．Ⅲ-AB 区 23 号竪穴住居跡（南から）
図版 11　１．Ⅲ-AB 区 23 号竪穴住居跡カマド(西から) ２．Ⅲ-AB 区 24 号竪穴住居跡(北東から)
３．Ⅲ-AB 区 25 号竪穴住居跡（南東から）
図版 12　１．Ⅲ-AB 区 27 号竪穴住居跡（上から）　２．Ⅲ-AB 区 27 号竪穴住居跡(北東から)
３．Ⅲ-AB 区 27 号竪穴住居跡（西から）
図版 13　１．Ⅲ-AB 区 27 号竪穴住居跡屋内土坑（西から）
２．Ⅲ-AB 区 27 号竪穴住居跡竪穴遺構（北から）
３．Ⅲ-AB 区 27 号竪穴住居跡竪穴遺構（北西から）
図版 14　１．Ⅲ-AB 区 28 号竪穴住居跡（北から）
２．Ⅲ-AB 区 28 号竪穴住居跡炭化物出土状況（北から）
３．Ⅲ-AB 区 28 号竪穴住居跡土層（東から）
図版 15　１．Ⅲ-AB 区 30 号竪穴住居跡（西から）　２．Ⅲ-AB 区 33 号竪穴住居跡（南から）
３．Ⅲ-AB 区 33 号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 16　１．Ⅲ-AB 区 33 号竪穴住居跡土層（南東から）
２．Ⅲ-AB 区 35 号竪穴住居跡（東から）　３．Ⅲ-AB 区 39 号竪穴住居跡（北から）
図版 17　１．Ⅲ-AB 区 39 号竪穴住居跡南壁溝（東から）
２．Ⅲ-AB 区 39 号竪穴住居跡東壁溝（東から）
３．Ⅲ-AB 区 40・42 号竪穴住居跡（北西から）
図版 18　１．Ⅲ-AB 区 40 号竪穴住居跡屋内土坑（北から）
２．Ⅲ-AB 区 41 号竪穴住居跡（南東から）
３．Ⅲ-AB 区 41 号竪穴住居跡壁溝（南から）
図版 19　１．Ⅲ-AB 区 42 号竪穴住居跡屋内土坑出土状況（北から）
２．Ⅲ-AB 区 43・44 号竪穴住居跡（東から）
３．Ⅲ-AB 区南側住居跡群全景（北東から）
図版 20　１．Ⅲ-AB 区南側住居跡群全景（西南西から）
２．Ⅲ-AB 区１・４・５号掘立柱建物跡（上から）
３．Ⅲ-AB 区１号掘立柱建物跡（西南西から）
図版 21　１．Ⅲ-AB 区２号掘立柱建物跡（北から）　２．Ⅲ-AB 区３号掘立柱建物跡（南から）

３．Ⅲ-AB 区４号掘立柱建物跡（南から）
図版 22　１．Ⅲ-AB 区５号掘立柱建物跡（南東から）２．Ⅲ-AB 区６号掘立柱建物跡（南東から）
３．Ⅲ-AB 区７号掘立柱建物跡（北東から）
図版 23　１．Ⅲ-AB 区９号掘立柱建物跡（南東から）
２．Ⅲ-AB 区９号掘立柱建物跡掘方土層（南から）
３．Ⅲ-AB 区９号掘立柱建物跡掘方土層（南から）
図版 24　１．Ⅲ-AB 区 10 号掘立柱建物跡（南西から）　２．Ⅲ-C 区２号掘立柱建物跡（西から）
３．Ⅲ-AB 区２号土坑（西から）
図版 25　１．Ⅲ-AB 区３号土坑（東から）　２．Ⅲ-AB 区５号土坑（南から）
３．Ⅲ-AB 区６号土坑（西から）
図版 26　１．Ⅲ-AB 区７号土坑（北から）　２．Ⅲ-AB 区８号土坑（北から）
３．Ⅲ-AB 区８号土坑出土状況（西から）
図版 27　１．Ⅲ-AB 区９号土坑（南から）　２．Ⅲ-AB 区 10 号土坑土層（東から）
３．Ⅲ-AB 区 11 号土坑（南から）
図版 28　１．Ⅲ-AB 区 11 号土坑土層（東から）　２．Ⅲ-AB 区 12 号土坑（南から）
３．Ⅲ-AB 区 13 号土坑（東から）
図版 29　１．Ⅲ-AB 区 15 号土坑（南から）　２．Ⅲ-AB 区 16・18 号土坑（南から）
３．Ⅲ-AB 区 20 号土坑（南から）
図版 30　１．Ⅲ-AB 区 22 号土坑（南から）　２．Ⅲ-AB 区 25 号土坑（北から）
３．Ⅲ-AB 区 25 号土坑土層（西から）
図版 31　１．Ⅲ-AB 区 26 号土坑（南から）　２．Ⅲ-AB 区 26 号土坑出土状況(南西から)
３．Ⅲ-AB 区 31 号土坑（東から）
図版 32　１．Ⅲ-AB 区 31 号土坑土層（東から）　２．Ⅲ-AB 区１・２・４号溝（上から）
３．Ⅲ-AB 区１・２号溝（北から）
図版 33　１．Ⅲ-AB 区１号溝南土層（北から）　２．Ⅲ-AB 区１号溝中央土層（北から）
３．Ⅲ-AB 区１号溝北土層（南から）
図版 34　１．Ⅲ-AB 区２号溝南東土層（北から）　２．Ⅲ-AB 区２号溝北土層（南から）
３．Ⅲ-AB 区２号溝中央土層（北から）
図版 35　１．Ⅲ-AB 区４号溝土層（西から）　２．Ⅲ-AB 区５～ 10 号溝（上から）
３．Ⅲ-AB 区９号溝出土状況（南から）
図版 36　１．Ⅲ-AB 区９号溝中央土層（西から）　２．Ⅲ-AB 区９・10 号溝土層（北から）
３．Ⅲ-AB 区 10 号溝北側（東から）
図版 37　１．Ⅲ-AB 区 10 号溝西端土層（東から）　２．Ⅲ-AB 区 10 号溝西土層（東から）
３．Ⅲ-AB 区 10 号溝中央土層（西から）
図版 38　１．Ⅲ-AB 区 10 号溝西出土状況（北東から）　２．Ⅲ-AB区10号溝西出土状況(南西から)
３．Ⅲ-AB 区 10 号溝土師器皿出土状況（北から）
図版 39　１．Ⅲ-AB 区 22 号溝出土状況（東から）　２．Ⅲ-AB 区 27 号溝土層（東から）
３．Ⅲ-AB 区 30 号溝出土状況（南西から）

図版 40　１．Ⅲ -AB 区円形周溝（上から）　２．Ⅲ -AB 区円形周溝（北北西から）
３．Ⅲ -AB 区円形周溝土層（南から）
図版 41　１．Ⅲ -AB 区円形周溝内土坑（北東から）　２．Ⅲ -AB 区円形周溝出土状況（西から）
３．Ⅲ -AB 区方形周溝（上から）
図版 42　１．Ⅲ -AB 区方形周溝北東（北東から）　２．Ⅲ -AB 区方形周溝東側溝（北西から）
３．Ⅲ -AB 区方形周溝西側溝（南から）
図版 43　１．Ⅲ -AB 区方形周溝南西角（南から）　２．Ⅲ -AB 区方形周溝陸橋部（南東から）
３．Ⅲ -AB 区方形周溝南側溝（西から）
図版 44　１．Ⅲ -AB 区方形周溝北西角土層（東から）２．Ⅲ -AB 区方形周溝北西角土層（南から）
３．Ⅲ -AB 区方形周溝西側溝土層（南から）
図版 45　１．Ⅲ -AB 区方形周溝西側溝土層（南から）　２．Ⅲ -AB 区方形周溝北側溝土層（東から）
３．Ⅲ -AB 区１号墓（東から）
図版 46　１．Ⅲ -AB 区１号墓（北から）　２．Ⅲ -AB 区１号墓出土状況（東から）
３．Ⅲ -AB 区２号墓（東から）
図版 47　１．Ⅲ -AB 区２号墓出土状況（南から）　２．Ⅲ -AB 区調査風景
３．Ⅲ -AB 区方形周溝実測風景
図版 48　Ⅲ -AB 区出土遺物①
図版 49　Ⅲ -AB 区出土遺物②
図版 50　Ⅲ -AB 区出土遺物③
図版 51　Ⅲ -AB 区出土遺物④
図版 52　Ⅲ -AB 区出土遺物⑤
図版 53　Ⅲ -AB 区出土遺物⑥
図版 54　Ⅲ -AB 区出土遺物⑦
図版 55　１．Ⅲ -C 区調査区全景（上から）　２．Ⅲ -C 区 3001 号土坑周辺（上から）
図版 56　１．Ⅲ -C 区調査区北西壁（西から）　２．Ⅲ -C 区 3005 号土坑（南から）
３．Ⅲ -C 区 3005 号土坑籠出土状況（南から）
図版 57　１．Ⅲ -C 区 3006 号土坑（東から）
２．Ⅲ -C 区 3006 号土坑編錘出土状況（東から）
３．Ⅲ -C 区 3007 号土坑出土状況（西から）
図版 58　１．Ⅲ -C 区 3008 号土坑（北から）　２．Ⅲ -C 区 3008 号土坑土層（北西から）
３．Ⅲ -C 区 3010 号土坑（南から）
図版 59　１．Ⅲ -C 区 3013 号土坑木質出土状況（東から）
２．Ⅲ -C 区 3014 号土坑土層（西から）　３．Ⅲ -C 区 3015 号土坑出土状況（西から）
図版 60　１．Ⅲ -C 区 3001 号土坑（北から）　２．Ⅲ -C 区 3002 号土坑（北から）
３．Ⅲ -C 区 3003 号土坑（南から）
図版 61　１．Ⅲ -C 区 3003 号土坑出土状況（南から）２．Ⅲ -C 区 3009 号土坑（西から）
３．Ⅲ -C 区 3009 号土坑土層（西から）
図版 62　１．Ⅲ -C 区 3009 号土坑出土状況（北から）

２．Ⅲ-C 区 3009 号土坑船出土状況（南西から）
３．Ⅲ-C 区 3011 号土坑（西から）
図版 63　１．Ⅲ-C 区 3011 号土坑（西から）　２．Ⅲ-C 区 3011 号土坑土層（西から）
３．Ⅲ-C 区 3001 号溝（西から）
図版 64　１．Ⅲ-C 区 3001 号溝（上から）　２．Ⅲ-C 区 3001 号溝編錘出土状況（西から）
図版 65　１．Ⅲ-C 区 3001 号溝最下層鞍出土状況（北から）
２．Ⅲ-C 区 3001 号溝土層（南東から）　３．Ⅲ-C 区水漬け遺構（西から）
図版 66　１．Ⅲ-C 区水漬け遺構（北東から）　２．Ⅲ-C 区導水施設木樋（東から）
３．Ⅲ-C 区導水施設木樋槽部（東から）
図版 67　１．Ⅲ-C 区谷部包含層土層（北西から）　２．Ⅲ-C 区谷部包含層土層（北西から）
３．Ⅲ-C 区谷部包含層梯子出土状況（東から）
図版 68　Ⅲ-C 区出土遺物①
図版 69　Ⅲ-C 区出土遺物②
図版 70　Ⅲ-C 区出土遺物③
図版 71　Ⅲ-C 区出土遺物④
図版 72　Ⅲ-C 区出土遺物⑤
図版 73　Ⅲ-C 区出土遺物⑥
図版 74　Ⅲ-C 区出土遺物⑦
図版 75　Ⅲ-C 区出土遺物⑧
図版 76　Ⅲ-C 区出土遺物⑨
図版 77　Ⅲ-C 区出土遺物⑩
図版 78　Ⅲ-C 区出土遺物⑪
図版 79　Ⅲ-C 区出土遺物⑫
図版 80　Ⅲ-C 区出土遺物⑬

挿図目次

第１図　延永ヤヨミ園遺跡の位置 …… 1
第２図　国道 201 号線行橋インター関連路線図と調査地点位置図（1/25,000）…… 2
第３図　調査区割図（1/2,000）…… 3
第４図　周辺遺跡分布図（1/70,000）…… 7
第５図　Ⅲ区遺構略配置図（1/800）…… 11
第６図　Ⅲ-AB 区基本土層実測図（1/30）…… 12
第７図　Ⅲ-AB 区１・２・４号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 15
第８図　Ⅲ-AB 区１・２号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 16
第９図　Ⅲ-AB 区３号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 17
第 10 図　Ⅲ-AB 区５～７号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 19
第 11 図　Ⅲ-AB 区３～５・７・10・11 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 21

第 12 図　Ⅲ -AB 区 8 ～ 10 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 22
第 13 図　Ⅲ -AB 区 11・12 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 23
第 14 図　Ⅲ -AB 区 13 号竪穴住居跡・土器出土状況実測図（1/60、1/30）…… 25
第 15 図　Ⅲ -AB 区 13 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 27
第 16 図　Ⅲ -AB 区 14 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）…… 28
第 17 図　Ⅲ -AB 区 16 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 29
第 18 図　Ⅲ -AB 区 16 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 30
第 19 図　Ⅲ -AB 区 17・18 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 30
第 20 図　Ⅲ -AB 区 14・18 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 31
第 21 図　Ⅲ -AB 区 21 号竪穴住居跡実測図（ 1 /60）…… 33
第 22 図　Ⅲ -AB 区 23 号竪穴住居跡・カマド実測図（ 1 /60、 1 /30）…… 34
第 23 図　Ⅲ -AB 区 21・23・24 ～ 26 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 35
第 24 図　Ⅲ -AB 区 24・25 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 37
第 25 図　Ⅲ -AB 区 27 号竪穴住居跡・出土状況実測図（1/60、1/30）…… 39
第 26 図　Ⅲ -AB 区 26・30 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 40
第 27 図　Ⅲ -AB 区 27・30 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 41
第 28 図　Ⅲ -AB 区 28・37・38 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 43
第 29 図　Ⅲ -AB 区 28 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）…… 44
第 30 図　Ⅲ -AB 区 28 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）…… 45
第 31 図　Ⅲ -AB 区 33 号竪穴住居跡実測図（1/60、1/30）…… 46
第 32 図　Ⅲ -AB 区 34・35・45 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 47
第 33 図　Ⅲ -AB 区 33・35・45 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 49
第 34 図　Ⅲ -AB 区 39・40 ～ 42 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 51
第 35 図　Ⅲ -AB 区 39・40 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 52
第 36 図　Ⅲ -AB 区 40 ～ 42 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 53
第 37 図　Ⅲ -AB 区 43・44 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 54
第 38 図　Ⅲ -AB 区 43・44 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 55
第 39 図　Ⅲ -C 区 11 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 56
第 40 図　Ⅲ -AB 区 1 ・ 2 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 57
第 41 図　Ⅲ -AB 区 3 ・ 4 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 59
第 42 図　Ⅲ -AB 区 5 ・ 6 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 60
第 43 図　Ⅲ -AB 区 2 ・ 6 ・ 9 号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）…… 61
第 44 図　Ⅲ -AB 区 7 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 61
第 45 図　Ⅲ -AB 区 9 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 62
第 46 図　Ⅲ -AB 区 10 号掘立柱建物跡実測図（1/80）…… 63
第 47 図　Ⅲ -C 区 2 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 64
第 48 図　Ⅲ -AB 区 1 ～ 4 号土坑実測図（1・3 は 1/30、2・4 は 1/40）…… 65
第 49 図　Ⅲ -AB 区 5 ～ 8 号土坑実測図（1/30）…… 67

第 50 図　Ⅲ -AB 区 2 ・ 4 ・ 5 ・ 7 ・ 8 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 69
第 51 図　Ⅲ -AB 区 9・10 号土坑実測図（1/30） …… 70
第 52 図　Ⅲ -AB 区 9 ～ 12 号土坑出土土器実測図（1/3） …… 71
第 53 図　Ⅲ -AB 区 11 号土坑実測図（1/30）…… 72
第 54 図　Ⅲ -AB 区 12 号土坑実測図（1/40）…… 73
第 55 図　Ⅲ -AB 区 13 ～ 19 号土坑実測図（1/60） …… 74
第 56 図　Ⅲ -AB 区 13 ～ 18 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 75
第 57 図　Ⅲ -AB 区 20・22・25 号土坑実測図（1/60）…… 76
第 58 図　Ⅲ -AB 区 22 号土坑出土土器実測図（1/3） …… 77
第 59 図　Ⅲ -AB 区 25 号土坑出土土器実測図（1/3） …… 79
第 60 図　Ⅲ -AB 区 26 ～ 29 号土坑実測図（26・27 は 1/60、28・29 は 1/30） …… 80
第 61 図　Ⅲ -AB 区 30 号土坑実測図（1/30）…… 81
第 62 図　Ⅲ -AB 区 31 号土坑実測図（1/30）…… 82
第 63 図　Ⅲ -AB 区 26・27・30・31 号土坑出土土器実測図（1/3） …… 82
第 64 図　Ⅲ -AB 区 1 ・ 2 ・ 4 ・ 9 ・22 号溝土層実測図（1/30） …… 84
第 65 図　Ⅲ -AB 区 1 号溝出土土器実測図（1/3）…… 85
第 66 図　Ⅲ -AB 区 2 号溝出土土器実測図（1/3）…… 86
第 67 図　Ⅲ -AB 区 4 ・ 5 号溝出土土器実測図（1/3）…… 87
第 68 図　Ⅲ -AB 区 9 号溝出土土器実測図（1/3）…… 89
第 69 図　Ⅲ -AB 区 10 号溝出土状況・土層実測図（1/60、土層は 1/30）…… 91
第 70 図　Ⅲ -AB 区 10 号溝出土土器実測図①（1/3） …… 93
第 71 図　Ⅲ -AB 区 10 号溝出土土器実測図②（1/3） …… 95
第 72 図　Ⅲ -AB 区 10 号溝出土土器実測図③（1/3） …… 96
第 73 図　Ⅲ -AB 区 10 号溝出土土器実測図④（1/3） …… 97
第 74 図　Ⅲ -AB 区 22 号溝出土土器実測図①（1/3） …… 99
第 75 図　Ⅲ -AB 区 22 号溝出土土器実測図②（1/3） …… 100
第 76 図　Ⅲ -AB 区 22 ～ 24・27 号溝出土土器実測図（1/3）…… 101
第 77 図　Ⅲ -AB 区 27 号溝実測図（1/60）…… 102
第 78 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝実測図（1/30）…… 103
第 79 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図①（1/3） …… 104
第 80 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図②（1/3、7 は 1/4）…… 105
第 81 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図③（1/3） …… 106
第 82 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図④（1/3） …… 107
第 83 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑤（1/3） …… 108
第 84 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑥（1/3） …… 109
第 85 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑦（1/3） …… 110
第 86 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑧（1/3） …… 111
第 87 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑨（1/3） …… 112

第 88 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑩（1/3）…… 113
第 89 図　Ⅲ -AB 区 32・34・35・37 号溝出土土器実測図（1/3）…… 115
第 90 図　Ⅲ -AB 区円形周溝・土層実測図（1/60、1/30）…… 116
第 91 図　Ⅲ -AB 区円形周溝出土状況実測図（1/30）…… 117
第 92 図　Ⅲ -AB 区円形周溝出土土器実測図（1/3）…… 117
第 93 図　Ⅲ -AB 区方形周溝・土層実測図（1/150、1/30）…… 119
第 94 図　Ⅲ -AB 区方形周溝出土土器実測図（1/3）…… 121
第 95 図　Ⅲ -AB 区 1・2 号墓実測図（1/20）…… 123
第 96 図　Ⅲ -AB 区 1・2 号墓出土土器・鏡実測図（1/3、4 は 1/2）…… 124
第 97 図　Ⅲ -AB 区 1 号不明遺構実測図（1/60）…… 125
第 98 図　Ⅲ -AB 区 1 号不明遺構出土土器実測図（1/3）…… 125
第 99 図　Ⅲ -AB 区ピット出土土器実測図（1/3）…… 126
第 100 図　Ⅲ -AB 区ピット・遺構面出土土器実測図（1/3）…… 127
第 101 図　Ⅲ -AB 区出土土・石製品実測図（1/2、5 ～ 7 は 2/3）…… 129
第 102 図　Ⅲ -AB 区出土石製品実測図（1/2）…… 131
第 103 図　Ⅲ -AB 区出土石・鉄製品実測図（1/2、29 ～ 31 は 1/3）…… 132
第 104 図　Ⅲ -AB 区出土鉄製品実測図（1/2）…… 133
第 105 図　Ⅲ -C 区遺構配置図（1/200）…… 135
第 106 図　Ⅲ -C 区調査区北西壁土層実測図（1/40）…… 138
第 107 図　Ⅲ -C 区 3004・3005・3007 号土坑実測図（1/30）…… 139
第 108 図　Ⅲ -C 区 3006・3008 号土坑実測図（1/30）…… 141
第 109 図　Ⅲ -C 区 3004 ～ 3007・3010 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 143
第 110 図　Ⅲ -C 区 3010・3012 ～ 3014・3021 号土坑実測図（1/30）…… 144
第 111 図　Ⅲ -C 区 3014・3015・3021 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 145
第 112 図　Ⅲ -C 区 3015 号土坑実測図（1/30）…… 146
第 113 図　Ⅲ -C 区 3015 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 147
第 114 図　Ⅲ -C 区 3016 号土坑実測図（1/30）…… 148
第 115 図　Ⅲ -C 区 3017 ～ 3019・3022・3025 号土坑実測図（1/30）…… 151
第 116 図　Ⅲ -C 区 3023・3024 号土坑実測図（1/30）…… 152
第 117 図　Ⅲ -C 区 3017 ～ 3019・3022・3023・3025 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 152
第 118 図　Ⅲ -C 区 3001・3002 号土坑実測図（1/30）…… 153
第 119 図　Ⅲ -C 区 3003 号土坑実測図（1/30）…… 154
第 120 図　Ⅲ -C 区 3001・3003 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 155
第 121 図　Ⅲ -C 区 3009・3011 号土坑実測図（1/30）…… 156
第 122 図　Ⅲ -C 区 3003・3009 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 157
第 123 図　Ⅲ -C 区 3009・3011 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 158
第 124 図　Ⅲ -C 区 3011 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 160
第 125 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝実測図①（1/80）…… 161

第 126 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝実測図②（1/30、1/60）…… 163
第 127 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図①（1/3）…… 164
第 128 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図②（1/3）…… 165
第 129 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図③（1/3）…… 166
第 130 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図④（1/3）…… 167
第 131 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図⑤（1/3）…… 168
第 132 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図⑥（1/3）…… 169
第 133 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図⑦（1/3）…… 170
第 134 図　Ⅲ -C 区水漬け遺構実測図（1/30）…… 171
第 135 図　Ⅲ -C 区水漬け遺構出土土器実測図①（1/3）…… 172
第 136 図　Ⅲ -C 区水漬け遺構出土土器実測図②（1/3）…… 173
第 137 図　Ⅲ -C 区導水施設実測図①（1/60）…… 175
第 138 図　Ⅲ -C 区導水施設実測図②（島状遺構）（1/40）…… 176
第 139 図　Ⅲ -C 区導水施設実測図③（木樋）（1/20）…… 177
第 140 図　Ⅲ -C 区導水施設木樋周辺出土土器実測図（1/3）…… 179
第 141 図　Ⅲ -C 区その他の遺構・遺構外出土土器実測図（1/3）…… 180
第 142 図　Ⅲ -C 区谷部土層実測図（1/40）…… 181
第 143 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図①（1/3）…… 182
第 144 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図②（1/3）…… 183
第 145 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図③（1/3、37 は 1/4）…… 184
第 146 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図④（1/3）…… 185
第 147 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図⑤（1/3）…… 186
第 148 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図⑥（1/3）…… 187
第 149 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図⑦（1/3）…… 188
第 150 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図⑧（1/3）…… 189
第 151 図　Ⅲ -C 区包含層 1 層出土土器実測図①（1/3）…… 190
第 152 図　Ⅲ -C 区包含層 1 層出土土器実測図②（1/3）…… 191
第 153 図　Ⅲ -C 区包含層 2 層出土土器実測図①（1/3）…… 193
第 154 図　Ⅲ -C 区包含層 2 層出土土器実測図②（1/3、13 は 1/4）…… 194
第 155 図　Ⅲ -C 区包含層 2・3 層出土土器実測図（1/3）…… 195
第 156 図　Ⅲ -C 区包含層 3 層出土土器実測図①（1/3）…… 196
第 157 図　Ⅲ -C 区包含層 3 層出土土器実測図②（1/3、17・18 は 1/6）…… 197
第 158 図　Ⅲ -C 区包含層 3 層出土土器実測図③（1/3）…… 198
第 159 図　Ⅲ -C 区出土ガラス・土・鉄・石製品実測図（1/2、1 は 1/1、4・17・18 は 1/3）… 200
第 160 図　Ⅲ -C 区出土石製品実測図（1/3）…… 201
第 161 図　Ⅲ -C 区 3004･3006･3010･3014･3021 号土坑出土木製品実測図（1/4、8 ～ 20 は 1/2）… 202
第 162 図　Ⅲ -C 区 3001 ～ 3003 号土坑出土木製品実測図（1/8、6 は 1/4）…… 203
第 163 図　Ⅲ -C 区 3003 号土坑（包含層？）出土木製品実測図（1/4）…… 204

第 164 図　Ⅲ -C 区 3009 号土坑出土木製品実測図（1 は 1/8、2 ～ 4 は 1/4）…… 205
第 165 図　Ⅲ -C 区 3009・3011 号土坑出土木製品実測図（1/4）…… 206
第 166 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土木製品実測図（1/4、7・8 は 1/2）…… 207
第 167 図　Ⅲ -C 区水漬け遺構出土木製品実測図（1 は 1/8、2 ～ 4 は 1/4、5・6 は 1/2）…… 208
第 168 図　Ⅲ -C 区導水施設木製品実測図①（1/8）…… 209・210
第 169 図　Ⅲ -C 区導水施設木製品実測図②（1/6）…… 211
第 170 図　Ⅲ -C 区 9 号土坑、4・5 号井戸出土木製品実測図（1/4）…… 212
第 171 図　Ⅲ -C 区 3 号井戸出土木製品実測図（1/4）…… 213
第 172 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図①（1/4）…… 215
第 173 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図②（1/4）…… 216
第 174 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図③（1/4）…… 217
第 175 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図④（1/4、10 ～ 13 は 1/8）…… 218
第 176 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図⑤（1/8）…… 219
第 177 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図⑥（1/4、16・19 は 1/8）…… 220
第 178 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図⑦（1/4）…… 221
第 179 図　Ⅲ -C 区出土木簡類実測図（1/2）…… 222
第 180 図　Ⅲ -C 区既報告分遺構出土鉄製品実測図（1/2）…… 223
第 181 図　ウイグルマッチング結果…… 235
第 182 図　延永ヤヨミ園遺跡における花粉分布図…… 240
第 183 図　延永ヤヨミ園遺跡における植物珪酸体分布図…… 240
第 184 図　堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示）…… 248
第 185 図　赤色顔料元素分布図…… 251
第 186 図　周辺地形復元図（1/2,500）…… 253
第 187 図　Ⅲ区遺構変遷図（1/800）…… 254
第 188 図　準構造船竪板（1/15、各報告書より再トレース）…… 257
第 189 図　Ⅳ -C 区検出船着場？遺構実測図（1/200）…… 259
第 190 図　Ⅲ -C 区出土木製品割合 …… 260
第 191 図　延永ヤヨミ園遺跡方形周溝および関連遺跡（1/2,500、1/1,200）…… 263
第 192 図　浄水施設の変遷図（消 2005 より転載）…… 268
第 193 図　導水施設の系譜（坂 1996 より転載）…… 268
第 194 図　井泉の存在形態モデル（穂積 2012 より転載）…… 268
第 195 図　南郷大東遺跡導水施設（1/150、報告書より転載）…… 270
第 196 図　導水施設と方形周溝（1/1,000）…… 271
付図　Ⅲ -AB 区遺構配置図（1/200）

表目次

第 1 表　一般国道 201 号行橋インター関連埋蔵文化財調査地点一覧…… 2
第 2 表　延永ヤヨミ園遺跡の調査区と期間…… 4

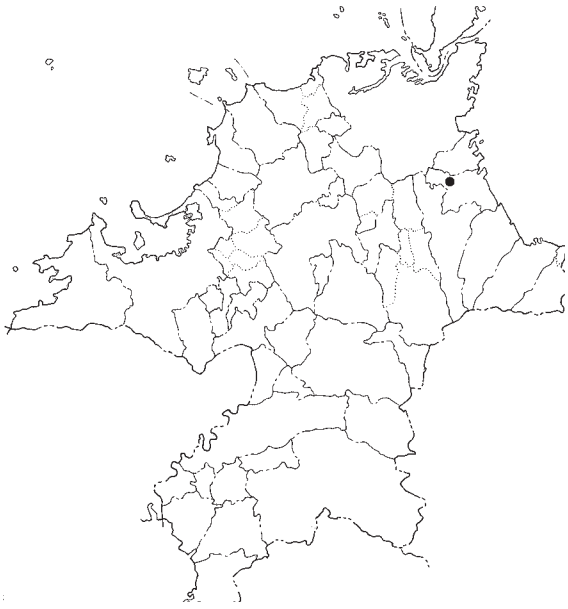
第３表　Ⅲ -AB 区遺構一覧・対照表 …… 13
第４表　Ⅲ -AB 区出土特殊遺物一覧表 …… 134
第５表　Ⅲ -C 区遺構一覧表・対照表 …… 138
第６表　Ⅲ -C 区出土特殊遺物一覧表 …… 225 ～ 227
第７表　延永ヤヨミ園遺跡における木材同定結果 …… 228
第８表　延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ -C 区における種実同定結果 …… 230
第９表　延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ -C 区出土種実（モモ）計測値 …… 231
第 10 表　ウイグルマッチング測定試料および処理 …… 233
第 11 表　放射性炭素年代測定、暦年較正、ウイグルマッチングの結果 …… 234
第 12 表　寄生虫卵分析に用いた試料の計量値 …… 236
第 13 表　産出花粉化石一覧 …… 237
第 14 表　試料 1g 当たりのプラント・オパール個数 …… 237
第 15 表　珪藻分析を行った試料 …… 243
第 16 表　堆積物中の珪藻化石産出表 …… 246・247
第 17 表　出土準構造船竪板一覧表 …… 257
第 18 表　導水施設・湧水点祭祀および埴輪の類例 …… 267
第 19 表　ラクチトールとトレハロースの基本的な物性（2010 伊藤） …… 280

気球による空中写真撮影

竪穴住居跡掘削状況

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯



第１図　延永ヤヨミ園遺跡の位置

一般国道 201 号は、福岡県福岡市を起点として飯塚市・田川市などの４市８町を経由し、福岡県京都郡苅田町に至る、延長約 64㎞を測る福岡県中央部の横断幹線道路である。当路線は、古くは篠栗街道として栄え、明治以来の日本の近代化・工業化を支えた筑豊炭田の幹線道路としての役割を果たしてきた。その後、昭和 30 年代以降の石炭から石油への転換に伴う産業基盤の著しい衰退により、現在当路線は九州縦貫自動車道福岡インターや国道 200・211・322 号、東九州自動車道行橋インター等と連結し、かつ近年では緊急輸送ネットワークに位置づけられる主要な幹線道路となっている。

一般国道 201 号行橋インター関連は、国道 201 号の終点部に位置し、国道 10 号と連絡する。当路線は、行橋市及び苅田町市街地の交通混雑の緩和並びに東九州自動車道や新北九州空港と筑豊地域とを結ぶ重要な路線として、平成 12 年度に事業着手された延長 4.5㎞の区間である。

道路建設に係る文化財関連の経緯としては、平成 14 年９月に当路線の建設計画についての説明が初めて国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所から福岡県教育庁総務部文化財保護課にあったが、日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）の民営化の問題もあり、具体的に事業が動き始めたのは平成 19 年度からである。平成 19 年５月に行橋市大字吉国の終点側の試掘調査を行ったのを契機として、平成 20 年３月 24 日付国九整北調第 57 号で行橋インター関連予定地の埋蔵文化財の確認について依頼があった。その依頼に対し、平成 20 年７月 20 日付 20 教文第 2474 号で、同路線を任意に７地点に分割し、その取り扱いについて回答している（第１表、第２図）。

延永ヤヨミ園遺跡が所在する丘陵については､埋蔵文化財の包蔵地として周知化されていたこと、その当時すでに近接する東九州高速自動車道予定地の発掘調査が文化財保護課を担当として実施され、非常に高い密度で遺構が分布していたことから、丘陵全体に遺構が所在すると判断し、確認調査は行わず、平成 20 年６月より本調査を行うこととなった。発掘調査は、平成 25 年度まで継続して実施した（第２表）。

本遺跡の発掘調査は路線内の用地買収が終了し、発掘調査が実施可能な地区から調査を進めた。本遺跡付近は東九州自動車道行橋インター予定地北側の隣接地であることから、西日本高速道路株式会社が施工する東九州自動車道とそのアクセス道路で福岡県行橋土木事務所（現京築県土整備事務所）が施工する県道直方行橋線バイパスと本路線の３路線が複雑に入り組む形となる（第３図）。そのため、当初に大きく事業ごとにⅠ～Ⅴ区という区分けを行い（第２表）、本路線は台地と谷の落ち際でⅢ･Ⅳ区と区分けを行った。またその区の中で、調査を実施した順番と現道などを考慮し、Ⅲ区は北からＡ・Ｂ・Ｃ区に、Ⅳ区も北からＡ・Ｂ・Ｃ区に小区分けを行っている。

第２図　国道 201 号線行橋インター関連路線図と調査地点位置図（１/25,000）

地点	遺跡名	所在地	地点範囲	回答(H20.7.10)	試掘年度	発掘調査面積	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	その後の対応
1		行橋市大字吉国	行橋インター交差点(現国道201号、終点)～山崎川	遺跡なし	H19･20					遺跡なし
2	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市大字吉国・延永	山崎川～県道直方行橋線	発掘調査		約19,000㎡	H20～25	H24・26	第1、3～5集	発掘調査
3		行橋市大字吉国	県道直方行橋線～長音寺団地横	要試掘調査	H21					遺跡なし
4	上片島遺跡群	行橋市大字延永 京都郡苅田町上片島	長音寺団地横～小波瀬川	要確認調査	H24	約900㎡	H24	H26	第2集	発掘調査
5		京都郡苅田町上片島	小波瀬川～都市計画道路猪熊行橋線	要試掘調査	H21					遺跡なし
6		京都郡苅田町下片島	都市計画道路猪熊行橋線～JR日豊本線	要試掘調査	H22					遺跡なし
7		京都郡苅田町新津	JR日豊本線～国道201号接続部(下新津ランプ、始点)	要試掘調査	H23					遺跡なし

第１表　一般国道 201 号行橋インター関連埋蔵文化財調査地点一覧

第３図　調査区割図（１/2,000）

事業主体	事業名	調査担当	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25
国土交通省北九州国道事務所	国道201号行橋インター関連	進村		Ⅲ-C	Ⅲ-C、Ⅳ-C				
		下原			Ⅳ-A	Ⅳ-A・B	Ⅳ-B		
		城門		Ⅲ-C		Ⅲ-C		Ⅲ-B	
		大庭					Ⅳ-B Ⅲ-A・B	Ⅲ-B	
		吉村							Ⅲ-B
西日本高速道路株式会社福岡工事事務所	東九州自動車道	飛野	Ⅰ区	Ⅰ-1、Ⅰ-3、Ⅰ-4、Ⅰ-5	Ⅰ-1、Ⅰ-3、Ⅰ-4	Ⅰ-2、Ⅰ-3、Ⅰ-4、Ⅰ-7			
		城門		Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-1～3	Ⅱ-4		
福岡県京築県土整備事務所	県道直方行橋線	岡田			Ⅴ-A・B				
		宮地				Ⅴ-2～4			
		飛野					Ⅴ-5・6	Ⅴ-5・6	

第２表　延永ヤヨミ園遺跡の調査区と期間

２　調査・整理の組織

平成 20 ～ 25 年度の発掘調査関係者及び平成 23 ～ 26 年度の整理作業関係者は以下のとおりである。なお、平成 23 年度からは組織改革により、九州歴史資料館にて事業者との契約から整理報告までを行っている。

国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
所長	後藤　徹	後藤　徹	世利正美	世利正美	赤星文生	赤星文生	鶴　敏信
副所長	柳田誠二	上村一明	上村一明 大成和明	大成和明	大成和明	大成和明 福崎昌博	福崎昌博
建設監督官	樋口洋一	松永鉄治	松永鉄治	松永鉄治 松木厚廣	松木厚廣	松木厚廣	二口卓史
調査課長	池田稔浩	池田稔浩	大榎　謙	大榎　謙	大榎　謙	森山安夫	森山安夫
専門職	渡辺幹夫	渡辺幹夫	渡辺幹夫	渡辺幹夫	東　昌毅	東　昌毅	羽田史郎
専門調査員	徳重俊博	徳重俊博	徳重俊博	徳重俊博 秋田賢一	秋田賢一	秋田賢一	猪井知明
国土交通技官			山本陽子	山本陽子			
工務課長	今田一典	谷川征嗣	谷川征嗣	谷川征嗣	松元勝美	松元勝美	松元勝美 桜井敏郎
専門官			鍬　淳司	鍬　淳司	児玉祐一	児玉祐一	石橋　正

福岡県教育委員会（平成 23 年度の機構改革により、発掘調査業務は九州歴史資料館に移管）

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
総括							
教育長	森山良一	森山良一	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠	城戸秀明
教育次長	楢崎洋二郎	亀岡　靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明	西牟田龍治
理事兼総務部長							川添弘人
総務部長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治	西牟田龍治	
副理事兼文化財保護課長	磯村幸男						
文化財保護課長		平川昌弘	平川昌弘	平川昌弘 伊崎俊秋	伊崎俊秋	伊崎俊秋	赤司善彦
同　副課長	池邉元明	池邉元明	伊崎俊秋	伊崎俊秋			
参事兼課長技術補佐	小池史哲	小池史哲	小池史哲				
課長補佐	前原俊史	前原俊史	日高公徳				

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
参事補佐兼調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文				
調査第一係地域担当	岸本　圭	小澤佳憲	宮地聡一郎				
庶務							
管理係長	富永育夫	富永育夫	富永育夫				
主事	野田　雅	野田　雅	仲野洋輔				
調査							
調査第二係							
主任技師	進村真之	進村真之	下原幸裕				
		下原幸裕	城門義廣				
技師	城門義廣	城門義廣					

九州歴史資料館	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
総括				
館長	西谷　正	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠
副理事兼副館長				伊﨑俊秋
副館長	南里正美	篠田隆行	篠田隆行	
参事（文化財調査室長）			飛野博文	飛野博文
企画主幹（総務室長）	圓城寺紀子	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲
企画主幹（文化財調査室長）	飛野博文	飛野博文		
企画主幹（文化財調査室室長補佐）		吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
技術主査（文化財調査班長）	小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹	秦　憲二
技術主査（保存管理班長）	加藤和歳	加藤和歳	加藤和歳	加藤和歳
庶務				
企画主査	塩塚孝憲	長野良博	長野良博	山﨑　彰
事務主査		青木三保	青木三保	南里成子
				宮崎奈巳
主任主事	熊谷泰容			
	近藤一崇	近藤一崇		
主事	谷川賢治	谷川賢治	三好洸一	秦　健太
調査				
企画主幹			吉村靖徳	
主任技師	大庭孝夫	大庭孝夫		
		城門義廣		
整理報告				
企画主幹				吉村靖徳
参事補佐	小池史哲	小池史哲		
技術主査				小川泰樹
				松川博一
				酒井芳司
				大庭孝夫
主任技師	大庭孝夫	大庭孝夫	大庭孝夫	
		小林　啓	小林　啓	小林　啓
	城門義廣	城門義廣	城門義廣	城門義廣
整理指導員（獣骨同定）				岩橋由季

なお、発掘調査・整理報告にあたっては、地元の吉国区、延永区の方々、発掘調査に参加された方々、国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所、同行橋建設監督官詰所、戸田建設（株）延永作業所、行橋市都市政策課国道・高速道対策室、行橋市教育委員会文化課の皆様よりご協力を賜った。その他、以下の個人にご指導いただいた。記して感謝いたします。（順不同・敬称略）山口譲治・小田裕樹・中野咲・北山峰生・穂積裕昌・山崎孝盛・坂口圭太郎・内山伸明・二宮満夫・吉田和彦・古澤義久・渡部芳久・原田昌浩

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

行橋市は、福岡県北東部の周防灘（瀬戸内海）に面した場所にあり、東経 130° 54′ ～ 131° 3′、北緯 33° 40′ 20″～ 32° 45′、面積は 68.65㎢を測る。東は周防灘、北は京都郡苅田町と北九州市小倉南区、西は京都郡みやこ町、南はみやこ町と築上郡築上町に接する。行橋市は昭和 29 年 10 月に行橋町、蓑島村、今元村、仲津村、泉村、今川村、稗田村、延永村、椿市村の９町村が合併し、成立した自治体で、人口は現在 70,000 人余りを数える。

行橋市は、地形的には臨海盆地に位置づけられ、その中央部には京都平野が発達し、市街地を形成している。その盆地の周囲を見てみると、北西部は国指定天然記念物である平尾台カルストに接し、周防変成岩類、平尾花崗閃緑岩類が広く分布する。この平尾花崗閃緑岩類の風化・浸食面上には第四紀更新統の河川堆積層が高～低位段丘地形を形成し、本遺跡は東・南を長峡川、北を小波瀬川によって形成された平尾花崗閃緑岩類を基盤とする砂礫台地である河成の低位段丘上に立地する。本遺跡が立地するこの低位段丘は、河川堆積物である黒添砂層が約 5.5 m堆積し、その上には阿蘇４火砕流堆積層が約 0.5m ～３mの厚さで堆積し段丘を形成する。

長峡川・小波瀬川流域の低湿地の地下には海成層である行事層が分布するが、この海成層は行橋市草野の地下２mでも確認されていることから、推定旧海岸線は深く湾入していることが判明している。

2　歴史的環境

延永ヤヨミ園遺跡は、先に述べたように国道 201 号の他、東九州自動車道、県道直方行橋線に伴う発掘調査を行っており、報告書冊数は国道４冊、東九州道４冊、県道２冊の計 10 冊を数え、今年度で全ての刊行を終える。本遺跡周辺の歴史的環境は、国道 201 号に係る本遺跡調査報告書第１集『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅰ』(2013) で旧石器時代～古墳時代、第５集の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅱ』(2015) で古代、第３集の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区Ⅰ』(2015) で中世、第４集の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区Ⅱ』(2015) で近世～現代について概観する。以下では、先述のとおり古代の歴史的環境について概観することとしたい。

官衙関連遺跡

旧京都郡内においては、本遺跡で７世紀後半の掘立柱建物が検出され、「京都大」や「天平六年」と書かれた墨書土器・木簡が出土している。苅田町雨窪遺跡群では遺構は見つかっていないものの、萬年通宝銭、銅鋺、緑釉陶器、土馬、墨書土器、製塩土器などが出土しており、「刈田駅」との関係が示唆されている。苅田町谷遺跡では唐三彩の陶枕片、行橋市高来井正丸遺跡・同市天生田矢萩遺跡では石帯が出土しているなど、地域の重要性が窺われる。旧仲津郡内では、みやこ町国作地区において豊前国府跡が確認されている。9世紀後葉～10世紀後葉の掘立柱建物跡が検出されており、築地塀によって囲まれていたことが確認されている。行橋市福原長者原遺跡では８世紀前半を中心とした大型掘立柱建物跡が検出されている。１辺 150m 規模の区画や建物跡を囲む回廊状遺構および八脚門が確認されていることから、国府クラスの規模を持つ官衙関連遺跡として注目される。ま

１延永ヤヨミ園遺跡　２谷遺跡　３椿市廃寺　４高来井正丸遺跡　５延永水取遺跡
６崎野遺跡　７天生田矢萩遺跡　８天生田大池遺跡　９大谷車堀遺跡　10御所ヶ谷神籠石
11福原長者原遺跡　12豊前国府跡　13豊前国分寺　14皆見樋ノ口遺跡　15カワラケ田遺跡
16上坂廃寺　17徳政瓦窯跡

第４図　周辺遺跡分布図（１/70,000）

た、行橋市崎野遺跡では廂付きの掘立柱建物跡が検出され、郷程度を管理する有力者の居館や海運に伴う物資の集積施設と想定されている。その他、上毛町大ノ瀬官衙遺跡（上毛郡衙跡）、大分県中津市長者屋敷遺跡（下毛郡衙跡）が豊前国南部で見つかっている。

寺院関係遺跡

旧京都郡内に四天王寺式伽藍配置をもつ行橋市椿市廃寺が創建され、平城宮の軒丸瓦と同笵の瓦が出土している。旧仲津郡内ではみやこ町木山廃寺、同町上坂廃寺、同町豊前国分寺が創建される。

また旧築城郡内には豊前国府や国分寺に瓦を供給した築上町船迫瓦窯跡、旧上毛郡内には垂水廃寺、友枝瓦窯跡などが見つかっている。

山城

西側の山麓には国指定史跡である行橋市御所ヶ谷神籠石が作られ、約 2,900 mの列石と土塁線を有し、七箇所の門が確認されている。中門は幅 30m、高さ 10m、西門は幅 40m 以上、高さ７m の規模であり、版築土塁に被覆される列石や前面の柱穴が確認されるなど構造の解明が進んでいる。

交通関連遺跡

旧京都郡から仲津郡にかけて行橋市天生田大池遺跡、天生田矢萩遺跡、大谷車堀遺跡、みやこ町呰見樋ノ口遺跡、カワラケ田遺跡で官道跡が検出されている。苅田町内には西海道の「刈田」駅が設置され、その位置は『和名抄』に見える京都郡刈田郷付近に比定する説が有力となっている。京都郡内ではみやこ町大久保付近と想定される多米駅から刈田駅へと向かう官道が山裾に想定されているものの、現在のところ発掘調査で確認された事例はない。築城郡では越路二月田遺跡・坂本正毛田遺跡で官道が検出されている。同じ交通関係として、行橋市延永水取遺跡では草野津と椿市を結ぶ運河である可能性が示唆される大溝が検出されている。また、『延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区Ⅱ』で詳細は触れるが、「郡符木簡」や「津」字の墨書土器が見つかっていることから、当地が『類聚三代格』に記載のある「草野津（かやののつ）」である可能性が高く、船着場の可能性がある溝、丘陵を横断する道路状遺構が見つかっている。

以上のように、古代において遺跡周辺は重要な意味を持っていたことが想定され、また近年の発掘調査によって続々と大きな成果が上がっており、歴史の解明が進んでいる。

【参考文献】

石松好雄・高橋章編　1980『椿市廃寺』行橋市文化財調査報告書　行橋市教育委員会
伊藤昌広・中原博編　2010『行橋市内遺跡等分布地図』行橋市文化財調査報告書第 37 集　行橋市教育委員会
岡田諭ほか編　2013『延永ヤヨミ園遺跡―Ⅴ区―1・2・3 区―』福岡県文化財調査報告書第 238 集　九州歴史資料館
岡田諭編　2014『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 13　福原長者原遺跡第 3 次調査　福原寄原遺跡第 2・3 次調査』九州歴史資料館
小川秀樹編　2001『崎野遺跡』行橋市文化財調査報告書第 28 集　行橋市教育委員会
小川秀樹ほか編　1996『椿市廃寺Ⅱ』行橋市文化財調査報告書第 24 集　行橋市教育委員会
城門義廣編 2012『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 2　延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区 1』 九州歴史資料館
末永弥義編　2000『呰見樋ノ口遺跡』豊津町文化財調査報告書第 22 集　豊津町教育委員会
末永弥義編　2003『豊前国府跡御所地区』豊津町文化財調査報告書第 30 集　豊津町教育委員会
末永弥義ほか編　2010『みやこ町内遺跡等分布地図』みやこ町文化財調査報告書第 6 集　みやこ町教育委員会
飛野博文・小池史哲編　2001『農林漁業用揮発油税財源身替農免農道関係埋蔵文化財調査報告』福岡県文化財調査報告書第 159 集　福岡県教育委員会
長嶺正秀編　2010『苅田町歴史資料館特別展　豊前地方の遺宝　律令時代と豊前国』 苅田町教育委員会
行橋市史編纂委員会編　2004『行橋市史　上巻』 行橋市
行橋市史編纂委員会編　2006『行橋市史　資料編：原始・古代』 行橋市
吉村靖徳編　1999『天生田大池遺跡』福岡県文化財調査報告書第 137 集　福岡県教育委員会

Ⅲ　発掘調査の記録

1　遺跡の概要

延永ヤヨミ園遺跡は、現在の海岸線から約５km 内陸に入った標高 10 m前後の低・中位段丘上に位置している。北側は小波瀬川、東・南は長峡川による低地が広がっている。丘陵は、中央が東に向かって開口する馬蹄形をしており、古墳時代においてはすぐそばまで海岸線が入っていたことが推定される。現在の地形も東九州自動車道と国道 201 号が交差する部分で東に開けた谷地形が見て取れ、北側は広い田園地帯が広がっている。現在は県道直方行橋線により丘陵が切られているものの、本来はビワノクマ古墳を含み長尾方面まで続く丘陵地帯の東端にあたると考えられる。また、丘陵の東側先端には吉国木実堂古墳が現存している。

遺構および遺物は、概ね弥生時代終末～古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中近世の４時期に分かれている。主要な遺構については、弥生時代終末～古墳時代前期及び古墳時代後期は竪穴住居跡や井戸、溝など、古代には井戸、掘立柱建物跡、溝など、中近世には溝などが検出されている。

竪穴住居跡はⅢ -AB 区で 38 軒が検出された。ほとんどが調査区北側の丘陵上に位置しており、他の調査区と同様切り合いが著しい。逆に南側は既報告のⅢ -C 区分を含め、井戸や土坑が検出されており、馬蹄形丘陵中央の谷部分が含まれる。特筆すべき遺構として、古墳時代前期の方形周溝ならびに導水施設が挙げられ、当時の拠点集落であったことが窺われる。また、古代においても丘陵上で掘立柱建物跡が検出され、谷に近い位置では木簡出土の井戸・船着き場の可能性がある溝などが検出されている。

2　Ⅲ - ＡＢ区の遺構と遺物

以下に、Ⅲ -AB 区から検出された遺構と遺物についての報告を行う。調査開始当初は中央に宅地へ向かうための道路が走っていたことからＡ・Ｂと区分していたものの、方形周溝が検出されたことから現道下部分も調査を行うこととなり、ＡＢ区の境がなくなってしまったことからまとめて報告する。なお、一部の遺構は『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅰ』で報告したⅢ -C 区の遺構と繋がることから、繋がる遺構に関してはここで共に報告する。

調査の経過

平成 23 年度の調査は、Ⅲ - Ａ区東側に立木が残っていたことから、北九州国道事務所と協議し、北九州国道事務所による立木の伐採を８月から開始した。その後Ⅲ - ＡＢ区周囲には宅地が近接していたため、文化財サイドで防塵ネットにより調査区を囲う作業を行い、その作業が終了した 11 月４日から、仮にⅢ - Ａ区としたⅢ -AB 区北側より表土剥ぎを開始した。11 月 11 日にはⅢ - Ａ区の遺構検出を開始し、11 月 16 日にはⅢ -AB 区１号溝から掘削を開始した。12 月 12 日にはⅢ - Ａ区東側の空中写真を撮影した。また同日にⅢ -AB 区１号墓から湖州六花鏡が出土した。１月 18 日にはⅢ -AB 区南側であるⅢ - Ｂ区の遺構検出を開始し、またⅢ - Ａ区西側については重機による反転作業を開始した。

Ⅲ - Ｂ区は地山面である弥生・古墳時代の遺構面約 10㎝上に中世の遺構面１面が確認でき、当初表土剥ぎも中世の遺構面で止めたが、遺構検出と撹乱の掘削を進めていくと、遺構密度が非常に高

く、検出が難しいこと、中世の遺構面と弥生・古墳時代の遺構面とのレベル差があまりないこと、調査期間の関係などから、１月 24 日に再度Ⅲ - Ｂ区に重機を入れて表土剥ぎを行い、弥生・古墳時代の遺構面まで掘り下げた。その後、Ⅲ - Ａ区西側とⅢ - Ｂ区の遺構掘削を同時並行で進め、反転後のⅢ - Ａ区西側については、２月 22 日に空中写真を撮影した。

平成 24 年度の調査は、23 年度からの継続ならびに現道下部分の約 800㎡を対象として行った。なお平成 23 年度からの継続分については大庭が、現道下部分については城門が調査を行った。平成 24 年度当初は、前年度の会計検査院の指摘に基づく、埋蔵文化財調査費内の給与費の関係で当初の予定より大幅に契約が遅れたことから、５月８日にプレハブ・機材搬入等を行い、調査を始めた。５月 10 日には国立歴史民俗博物館の林部均准教授と太宰府市教育委員会井上信正氏の来訪を受けた。５月 12 日にはⅢ -AB 区 20 号溝が南側に陸橋部を伴う、古墳時代前期の方形周溝（環溝）であることを確認した。５月 18 日には発掘現場安全パトロールがあり、杉光誠教育長、今田義雄総務部長、西谷正九州歴史資料館長他の来訪を受けた。５月 22 日には行橋市教育委員会文化課の小川秀樹課長・伊藤昌弘・中原博・山口裕平氏の来訪を受けた。５月 24 日には空中写真を撮影した。５月 30 日には延永小学校３年生 80 名による体験発掘を行った。５月 31 日に掘削作業は終了、その後実測作業を行い、６月８日に終了した。

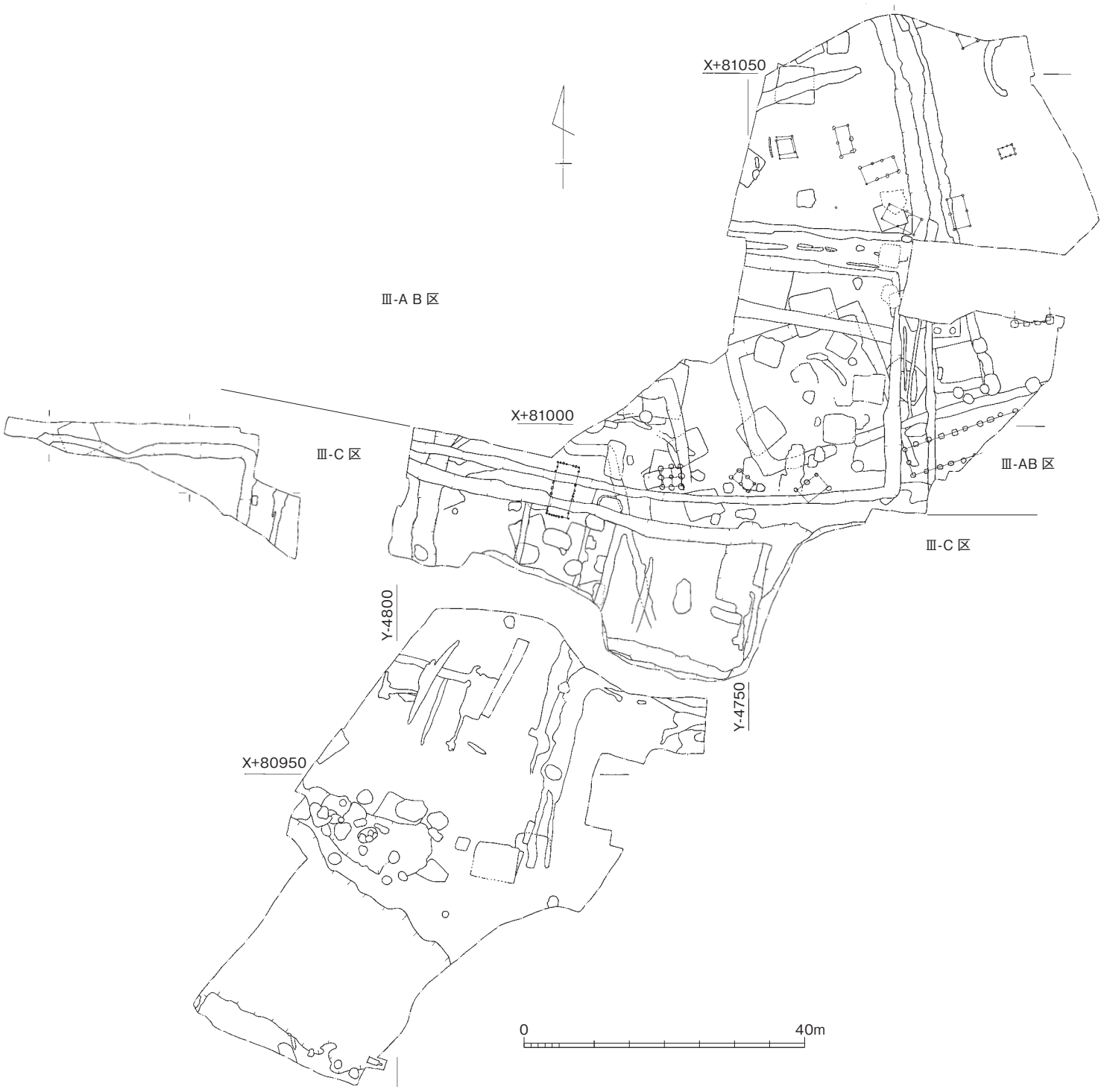
現道下の調査は、西側に宅地が残っていることから、仮設道路の設置を待ち、８月 20 日から開始した。20 日に重機を搬入し、アスファルトの撤去ならびに表土除去作業を開始した。南北両側を調査しているため、遺構面は比較的容易に検出でき、22 日には建機を搬入し、24 日より人力による掘削を開始した。周辺を調査していることから遺構認識が容易に可能であると考えていたが、中央付近は溝と、大きい住居跡が重なっており、遺構の認識に時間を要した。また、深くて埋土が堅く締まったピットが多く、掘削に時間を要した。９月 19 日には空中写真を撮影し、追加の掘削を行った後、25 日より重機を搬入し、埋め戻しを行い、28 日に終了した。

平成 25 年度の調査は未買収部分であった住宅地部分および側道拡張部分の約 600㎡を対象として行った。宅地部分については３月までに用地買収と住宅の撤去が完了していたが、民地と用地を跨ぐブロック塀の取扱いが懸案として残っていた。この協議が４月 25 日に整ったため、４月 30 日から重機を搬入し、水路撤去及び表土除去作業を開始した。５月１日に建機を搬入し、８日には作業員を投入し人力による掘削を開始した。溝内に投棄された遺物が多量であったことやピットの残りが非常によかったことなどから掘削に時間を要したが、６月 18 日には空中写真を撮影し、土層観察用ベルトの掘削や下層の精査を行った後、７月９日までに埋め戻し、建機撤収を行い本事業に係る全ての調査を完了した。

調査区の概要

延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ -AB 区は、馬蹄形を呈する丘陵の北側に位置する。用地内では北端部に位置しており、2013 年に本館が刊行した『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅰ』で報告された地点が南接している。本調査区では、地表面から 0.5 ～ 0.7m ほど下位で遺構面が検出され、住居跡や溝跡などの集落が検出された。中央から南端部にかけては遺構が密集しており、北側丘陵端部に近づくにつれて密度が低くなる状況が見られる。

検出した遺構は、住居跡 38 軒、掘立柱建物跡 10 棟、土坑 28 基、溝 22 条、円形周溝と方形周溝



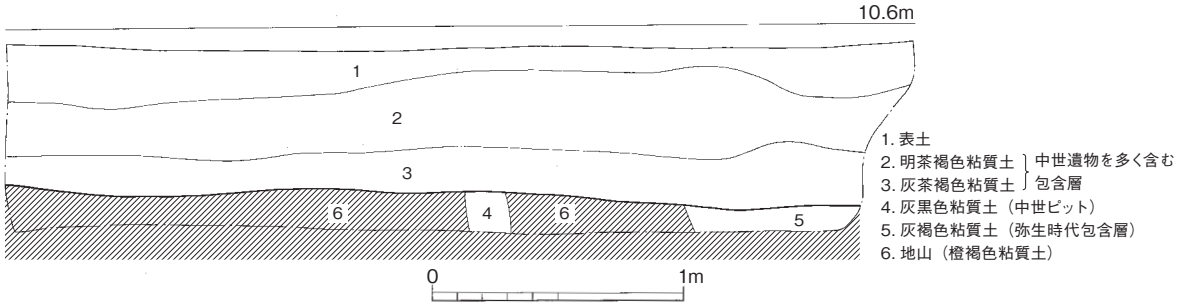
第 5 図　Ⅲ区遺構略配置図（1/800）

各１基、不明遺構１基である。時期は弥生時代終末～古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世、近世に属しており、他の調査区の傾向と同一である。注目すべき遺構として、調査区中央南寄りで検出された古墳時代前期の方形周溝が挙げられる。以下に、遺構ごとの報告を行うが、調査及び整理担当者が大庭・吉村・城門の３名であるため、文末に筆者名を付している。

基本土層（図版４、第６図）

この基本土層図は、Ⅲ - ＡＢ区南西の調査区壁面で図化したものである。

表土（１層）直下の２・３層は中世の遺物を多く含む包含層である。昭和 49 年以前の国土地理院の空中写真（『Ⅲ区Ｉ』参照）で確認できる、畑の旧表土や床土などは全く検出できなかった。このことから､その後の宅地造成時に畑の旧表土や床土はすき取ったものと考えられる｡中世のピットの一部は、３層の上面から掘り込んでおり、３層上面に中世の遺構面１面が確実に存在するが、調査期間の制約と中世に属する遺構の多くは深かったこと、かつ３層の厚さが 10㎝程度であったため、弥生･古墳時代の遺構面かつ地山面である６層まで重機で表土剥ぎを行い、調査を実施した。また４層は中世のピットであるが、６層上面から掘り込むもので、中世の遺構は３・６層から掘り込むものがある。５層は弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を含む包含層で、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構はすべて６層の地山を掘り込んでつくられている。（大庭）



第６図　Ⅲ -AB 区基本土層実測図（1/30）

（１）竪穴住居跡

本調査区では 38 軒の竪穴住居跡が確認された。時期は弥生時代終末～古墳時代前期、古墳時代後期に分かれており、いくつか古墳時代中期および飛鳥時代の住居跡が見られる。

１号竪穴住居跡（図版４、第７図）

調査区の北西隅に位置し、住居北西部は調査区外となる。規模は東西 3.02 ｍ×南北 3.16 ｍ、深さ 0.23 ｍの隅丸の正方形住居跡である。住居東側床面直上でほぼ完形の土師器壺・甕・高坏がまとまって出土した。埋土には焼土・炭の混じりが少ないことから、これらの土器は住居廃絶時に意図的に置かれた可能性がある。主柱穴については、Ｐ１・２が深さから可能性があるものの、位置的に北側に偏りすぎているため、２本柱となるかどうかは確実ではない。炉跡も不明である。また土層では、１層に混じる地山は住居周堤の崩落土である可能性がある。住居床下掘り込みを４ヶ所確認した。住居外北東のピットは住居外ピットの可能性があるため、深さを示している。

出土遺物（図版 48、第８図１～ 14）

１・２は土師器直口壺である。１は肩部内面に粘土継ぎ目痕が残る。２は完形に近いもので、口

区	報告時 遺構名	調査時 遺構名	備考 (名前は報告者)
ⅢA	住1	住1	大庭
ⅢA	住2	住2	大庭
ⅢA	住3	住3	大庭
ⅢA	住4	住4	大庭
ⅢA	住5	住5	大庭
ⅢA	住6	住6	大庭
ⅢA	住7	住7	大庭
ⅢA	住8	住8	大庭
ⅢA	住9	住9	大庭
ⅢA	住10	住10	大庭
ⅢA	住11	住11	大庭
ⅢA	住12	住12	大庭
ⅢA	住13	住13	大庭
ⅢA	住14	住14	大庭
	欠番	住15	
ⅢA	住16	住16	城門
ⅢA	住17	住17	大庭
ⅢA	住18	住18	大庭
	欠番	住19	
	欠番	住20	
ⅢB	住21	住21	大庭
	欠番	住22	
ⅢB	住23	住23	大庭
ⅢB	住24	住24	大庭
ⅢB	住25	住25	大庭
ⅢB	住26	住26	大庭
ⅢB	住27	住27	大庭
ⅢB	住28	住28･36	城門
	欠番	住29	
ⅢB	住30	住30	大庭
	欠番	住31	
	欠番	住32	Ⅲ-C区住11と同一
ⅢB	住33	住33	城門
ⅢB	住34	住34	城門
ⅢB	住35	住35	城門
ⅢB	欠番	住36･28	城門
ⅢB	住37	住37	城門
ⅢB	住38	住38	城門
ⅢB	住39	住39	吉村
ⅢB	住40	住40	吉村
ⅢB	住41	住41	吉村
ⅢB	住42	住42	吉村
ⅢB	住43	住43	吉村
ⅢB	住44	住44	吉村
ⅢB	住45	住45	城門、住37重複分
ⅢBC	住11	住32	大庭
ⅢA	建物1	建物1	大庭
ⅢA	建物2	建物2	大庭
ⅢA	建物3	建物3	大庭
ⅢA	建物4	建物4	大庭
ⅢA	建物5	建物5	大庭
ⅢB	欠番	建物1	Ⅲ-C区建物2に
ⅢB	建物6	建物2	大庭
ⅢB	建物7	建物3	大庭
ⅢB	建物9	建物1	吉村
ⅢB	建物10	建物2	吉村
ⅢBC	建物2	建物1	大庭
ⅢA	土坑1	土坑1	大庭
ⅢA	土坑2	土坑2	大庭
ⅢA	土坑3	土坑3	大庭
ⅢB	土坑4	土坑4	大庭
ⅢA	土坑5	土坑5	大庭
ⅢB	土坑6	土坑6	大庭
ⅢB	土坑7	土坑7	大庭

区	報告時 遺構名	調査時 遺構名	備考 (名前は報告者)
ⅢB	土坑8	土坑8	大庭
ⅢB	土坑9	土坑9	城門
ⅢB	土坑10	土坑10	城門
ⅢB	土坑11	土坑11	城門
ⅢB	土坑12	土坑12	城門
ⅢB	土坑13	土坑13	吉村
ⅢB	土坑14	土坑14	吉村
ⅢB	土坑15	土坑15	吉村
ⅢB	土坑16	土坑16	吉村
ⅢB	土坑17	土坑17	吉村
ⅢB	土坑18	土坑18	吉村
ⅢB	土坑19	土坑19	吉村
ⅢB	土坑20	土坑20	吉村
ⅢB	欠番	土坑21	吉村
ⅢB	土坑22	土坑22	吉村
ⅢB	欠番	土坑23	
ⅢB	欠番	土坑24	
ⅢB	土坑25	土坑25	吉村
ⅢB	土坑26	落ち1	大庭
ⅢB	土坑27	落ち2	大庭
ⅢB	土坑28	土坑28	大庭
ⅢB	土坑29	土坑29	大庭
ⅢB	土坑30		大庭
ⅢB	土坑31	土坑8	城門
ⅢA	溝1	溝1､31	遺構：大庭、遺物：吉村
ⅢA	溝2	溝2､29	遺構：大庭、遺物：吉村
ⅢA	欠番	溝3	円形周溝に
ⅢA	溝4	溝4	大庭
ⅢA	溝5	溝5	大庭
ⅢA	溝6	溝6	大庭
ⅢA	溝7	溝7	大庭
ⅢA	溝8	溝8	大庭
ⅢA	溝9	溝9､33	吉村
ⅢA	溝10	溝10	大庭
	欠番	溝11	方形周溝に
	欠番	溝12	
	欠番	溝13	
	欠番	溝14	
	欠番	溝15	
	欠番	溝16	
	欠番	溝17	
	欠番	溝18	
	欠番	溝19	
	欠番	溝20	方形周溝に
ⅢB	溝21	溝21	大庭
ⅢB	溝22	溝22	城門
ⅢB	溝23	溝23	大庭
ⅢB	溝24	溝24	城門
ⅢB	溝25	溝25	城門
ⅢB	欠番	溝26	
ⅢB	溝27	溝27	城門
ⅢB	溝28	溝28	城門
ⅢB	欠番	溝2､29	吉村
ⅢB	溝30	溝30	吉村
ⅢB	欠番	溝1､31	吉村
ⅢB	溝32	溝32	吉村
ⅢB	欠番	溝9､33	吉村
ⅢB	溝34	溝34	吉村
ⅢB	溝35	溝35	吉村
ⅢB	溝36	溝36	吉村
ⅢB	溝37	溝37	吉村
ⅢA	墓1	墓1	大庭
ⅢB	墓2	土坑21	吉村
ⅢAB	方形周溝	溝11･20	大庭
ⅢA	円形周溝1	溝3	大庭
ⅢB	1号不明遺構	SX01	城門

第３表　Ⅲ -AB 区遺構一覧・対照表

径 10.6㎝、器高 14.8㎝を測る。外面胴部中位以下は縦ハケメ後ナデを施す。外面に黒斑あり。３～５は土師器甕である。３は完形に近いもので、やや内湾気味に開く長めの口縁部を持つ。口径 14㎝、器高 16.4㎝を測る。外面底部に黒斑あり。４は肩が張る球形の胴部に、逆「ハ」の字状に開く口縁部を持つ。内面頸部までケズリを施す。５は口縁部が強く外湾するもので、歪みが顕著である。６～ 12 は土師器高坏である。６はほぼ水平の坏底部から口縁部が強く屈曲しながら開く器形である。口縁部と坏部との接合部分にはハケメを円形に施し、接合しやすくしている。またその接合部の隙間には粘土を充填する。外面には煤が付着する。７・８・10 はほぼ完形のもの。７・９は屈折部が明瞭で、口縁部が強く外反するタイプである。７は内外面とも剥離が進み、調整は不明である。外面には薄く煤が付着する。口径 17.4㎝、器高 13.0㎝を測る。８は坏部の屈折部が接合により突帯状になるもので、７に比べ、口縁部も脚裾部も開かないもの。口径 16.3㎝、器高 13.0㎝を測る。９は屈折部がナデにより凹線状に窪むもの。口縁端部には黒斑あり。10・11 は坏部と口縁部との境が不明瞭でそのまま開くもの。10 は口径 16.4㎝、器高 12.6㎝を測る。11 は深さがない浅い坏部で、口縁部には黒斑あり。12 は小型高坏の脚部である。13 は指頭圧痕が良く残る粗製土師器外反口縁鉢で、ほぼ完形品。口径 8.2㎝、器高 7.6㎝。口縁部内面に黒斑あり。14 はＶ様式系の甕か壺底部で、混入品。外面には右上がりのタタキが残る。

出土遺物での時期判断は難しいが、古墳時代中期に属すると考えられる。（大庭）

２号竪穴住居跡（図版５、第７図）

調査区の北西隅に位置し、住居北側の大半は調査区外となる。規模は 4.47 ｍ× 1.2 ｍ以上、深さ 0.32 ｍの方形住居跡である。Ｐ１・２は形態から主柱穴になる可能性があるが、浅いため自信がない。住居床面直上で住居床面の一部に敷いた可能性がある灰白色粘土の塊を検出した。Ｐ４は住居床下掘り込みの可能性がある。埋土は灰茶褐色粘質土である。住居外南東ピットは住居外ピットの可能性があるため、深さを示す。

出土遺物（第８図 15）

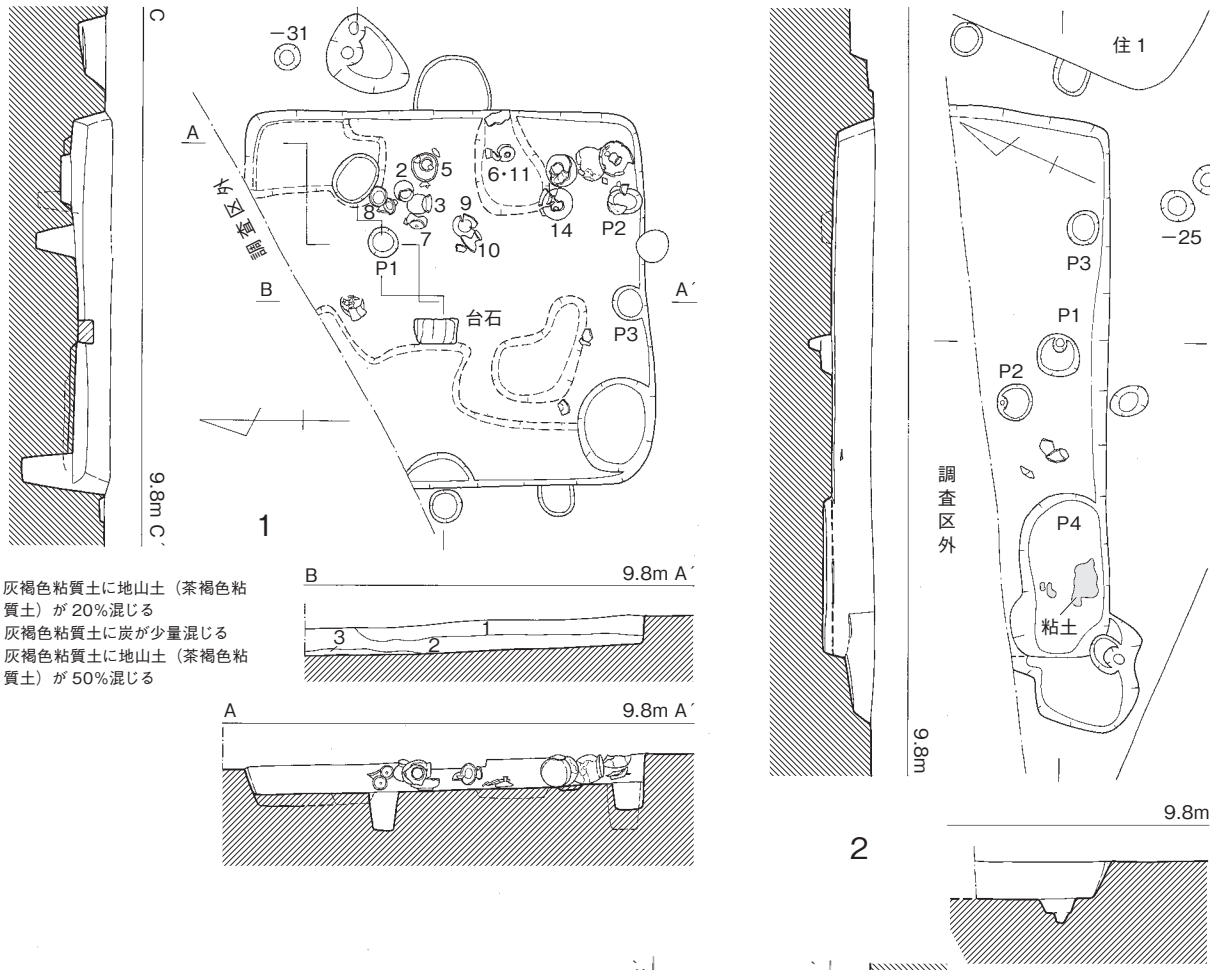
出土遺物で図示できたものは、15 のみである。15 は須恵器坏底部で、底部外面にはヘラケズリは施さず、ヘラ切りのままである。

埋土と出土遺物から、古墳時代後期末に属するものと考えられる。（大庭）

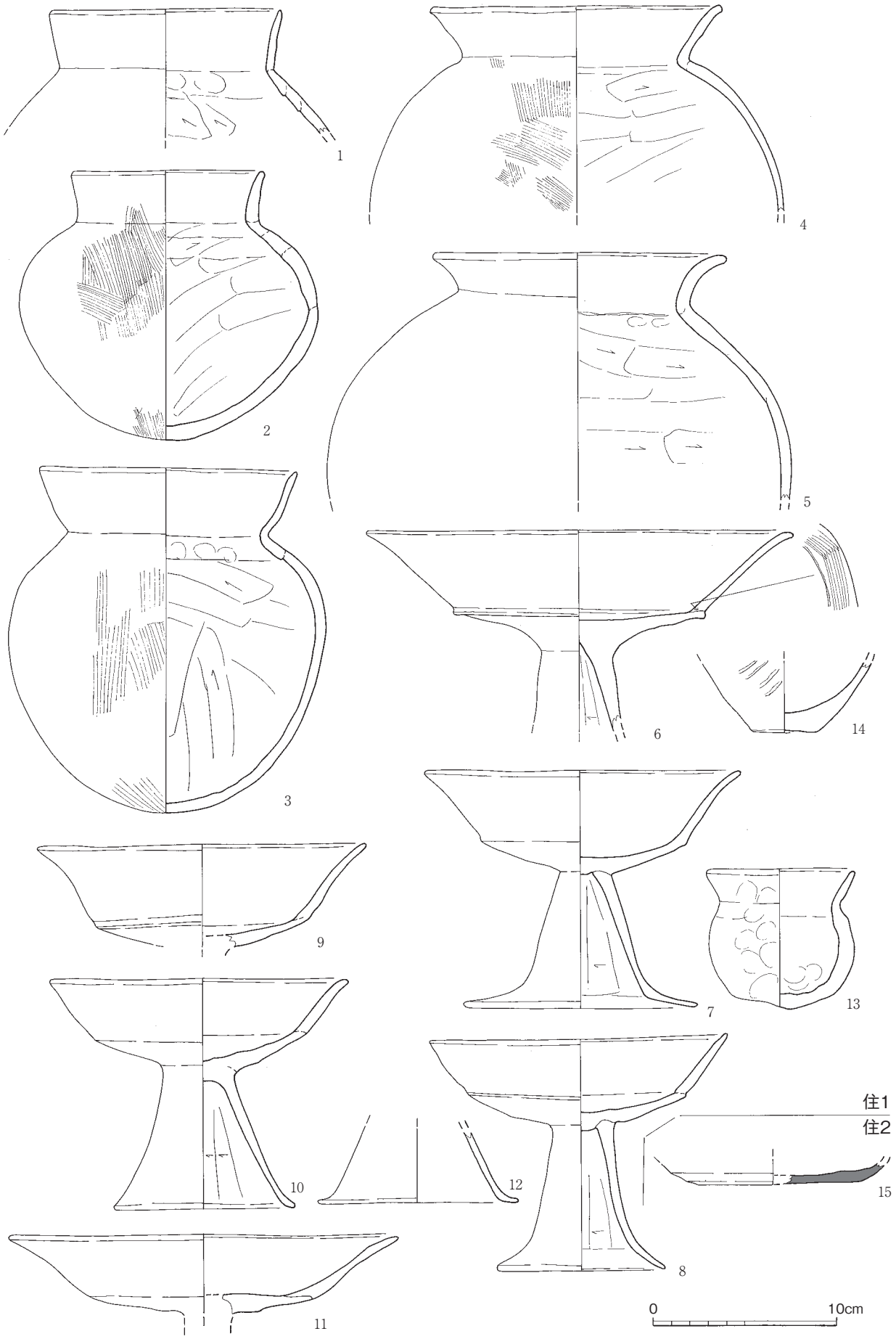
３号竪穴住居跡（図版５、第９図）

調査区の北西隅に位置し、４号溝に住居中央を切られる。規模は東西 5.68 ｍ×南北 5.77 ｍ、深さ最大0.5ｍ、隅丸の正方形住居跡である。壁周溝が切れる住居南中央が入口と想定され、入口にあったと思われる梯子下には深さ 0.6 ｍの屋内土坑が存在し、そのすぐ北にはその梯子を支える穴の可能性がある小ピットが２基存在する。このような事例は、本遺跡Ⅱ区 44 号竪穴住居跡でも発見されており、その報文で集成と検討がされているので、参照いただきたい（城門義廣 2014 「Ⅴ - 4 住居跡の深さおよび住居跡入口の構造について」『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -11- 延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区２』 九州歴史資料館　pp.290 ～ 294）。

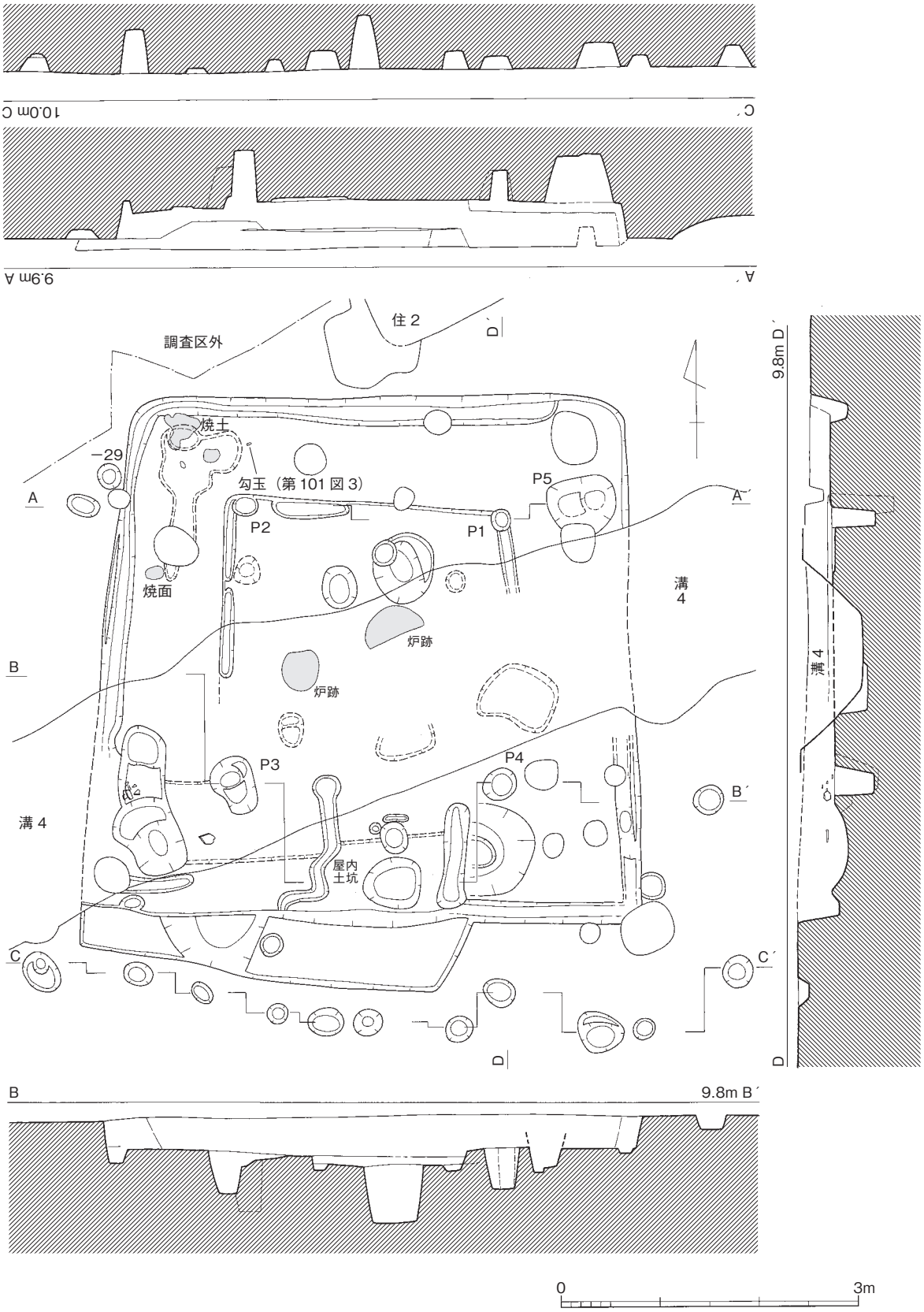
この入口部以外はベッド状遺構を付設し、ベッド状遺構の内外には壁周溝を巡らす。竪穴部床面中央付近にはしっかり焼けた焼面が２ヶ所あり、炉跡と想定される。住居北西隅ベッド状遺構上で、



第７図　Ⅲ-AB 区１・２・４号竪穴住居跡実測図（１/60）



第８図　Ⅲ -AB 区１・２号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第９図　Ⅲ-AB区３号竪穴住居跡実測図（１/60）

焼面及び焼土の塊を検出したが（図中のトーン）、住居廃絶時に柱材の一部を燃やした痕跡である可能性がある。主柱穴は竪穴部とベッド状遺構間の壁周溝の４隅に配置されたＰ１～４で、また住居周囲には住居跡外ピット列が特に南側で多く検出されており、当住居の補助柱的な役割を持ったピットと考えられる。またベッド上で検出されたピットは、規模と深さから屋内土坑的な役割を果たした可能性があるＰ５を除けば浅いため、床下掘り込みの可能性が高い。住居の埋土は上層

が暗灰褐色粘質土、下層が灰褐色粘質土である。住居床下掘り込みは５ヶ所確認した。

出土遺物（第 11 図１～９）

１は長い口縁部の土師器直口壺。２・３は逆「く」の字状に口縁部が強く屈曲する土師器甕で、頸部内面の稜が明瞭である。２の内外面にはコゲが付着する。３は口縁部内外面が剥離しているため、本来より薄くなっている。４は肩が張らない胴部から短い口縁部が内湾気味に開くもの。口縁端部はナデで面取りする。焼成は悪い。５は土師器高坏口縁部。６は土師器外反口縁鉢で、外面底部にはケズリを施す。焼成は悪く、外面は黒変する。７～９は混入品。７・８は須恵器坏蓋。７は宝珠つまみが付く。外面には回転ヘラケズリを施し、自然釉が付着する。８は嘴状の口縁部を持つ。９は片口の土師質土器の鍋である。小片のため、復元径には自信がない。焼成は悪い。住居埋土から土製勾玉１点（第 101 図３）、砥石１点（第 101 図 13）、混入品の鉄釘１点（第 103 図 32）、埋土上層から混入品の鉄滓３点（第 104 図 73 ～ 75）が出土した。

住居形態及び出土土器から、古墳時代前期に属するものと考えられる。（大庭）

４号竪穴住居跡（図版５、第７図）

調査区の北西に位置し、北側でカマド焼面及び西側で住居壁周溝、また主柱穴と思われるピットが確認されたことから、住居跡と判断した。規模は壁が残っていないため不明であるが、東主柱穴と思われるピットと西側の壁周溝、東側２ヶ所にある住居床下掘り込みと思われる浅い掘り込みから、4.5 m四角の正方形住居になる可能性がある。

カマドを有するため基本的に４本柱となると思われるが、主柱穴の候補となるピットは２セット存在するため、住居建替を示している可能性がある。

出土遺物（第 11 図 10）

出土遺物で図示できたものは、10 の周溝から出土した土師器壺頸部のみである。

住居形態から、古墳時代後期に属すると考えられる。（大庭）

５号竪穴住居跡（図版６、第 10 図）

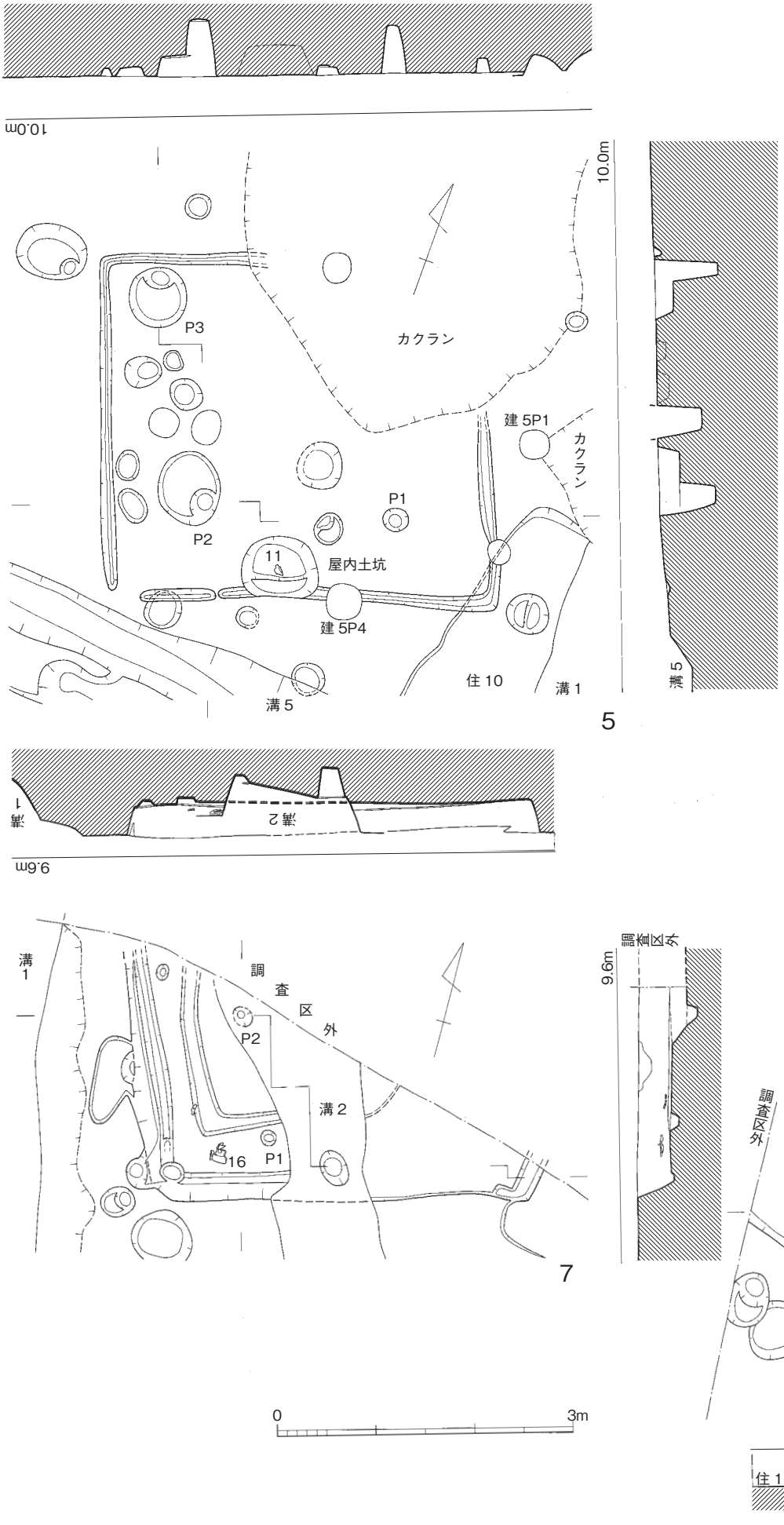
調査区のほぼ中央に位置し、５号掘立柱建物跡・５号溝に切られ、10 号竪穴住居跡を切る。住居北東側は攪乱を受けており、また住居壁はほとんど削平された状態で検出された。検出できた壁周溝から、規模は東西４ｍ×南北 3.5 ｍの、やや東西に長い正方形住居跡である。住居の時期から、住居東西にベッド状遺構を付設した可能性がある。

住居南中央やや西寄りで、埋土が灰褐色粘質土、規模が 0.75 ｍ× 0.6 ｍ、深さ 0.26 ｍの屋内土坑を検出した。図示した土器はいずれもこの屋内土坑から出土したものである。床面には多数のピットがあるが、深さからＰ１～３が主柱穴の４本柱の住居跡となるか。炉跡は検出できなかった。

出土遺物（図版 48、第 11 図 11 ～ 14）

11 ～ 14 はいずれも屋内土坑内からの出土である。11・12 は器壁の薄い小型の土師器甕である。11 の胴部内面には粘土接合痕が顕著に残る。また 11 の外面には二次加熱痕あり。13・14 は手づくね土器。13 は完形品で、口径 3.5㎝、器高 1.7 ～ 2.2㎝を測る。

住居形態と出土遺物から、古墳時代中期に属すると考えられる。（大庭）



第 10 図　Ⅲ -AB 区５～７号竪穴住居跡実測図（１/60）

６号竪穴住居跡（図版６、第 10 図）

調査区の北西端に位置し、11 号竪穴住居跡を切る。しっかり硬化したカマド焼面を検出したのみで、規模と主柱穴等は不明である。おそらく北壁中央にカマドを付設した古墳時代後期の住居跡となると思われるが、確証はない。遺物は出土しなかった。（大庭）

７号竪穴住居跡（図版６、第 10 図）

調査区の中央北端に位置し、住居北側大半は調査区外で、住居中央を２号溝に切られる。規模は東西 4 ｍ×南北 2.7 ｍ以上、深さ 0.34 ｍの、現状ではやや歪な方形住居となる。東西及び南側の一部には壁周溝を巡らし、住居西側では外側の壁周溝内側にもさらに深さ８㎝程度の溝が巡るが、この内側の溝は住居内の仕切り溝となる可能性がある。Ｐ２が深さから主柱穴の可能性があるが、位置的には住居中央に偏り、自信がない。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（図版 48、第 11 図 15 ～ 18）

15 は口縁端部がわずかに外反する椀状の土師器坏である。底部付近には手持ちヘラケズリを施す。外面には二次加熱痕あり。16・17 は土師器高坏である。16 は口縁部が強く外反する深い椀状の坏部に、裾部が内湾しながら広がる形態となる。復元口径 19.4㎝、器高 13㎝を測る。17 は「ハ」の字状に開く高坏脚部。18 は短い口縁部の土師器直口壺。胴部外面は右上がりの粗いタタキ、その他はハケメを施す。口縁部外面のハケメから粘土が生乾き状態でハケメを施していることがわかる。外面は全体的に二次加熱が顕著である。混入品。

出土土器から、古墳時代後期に属すると考えられる。（大庭）

８号竪穴住居跡（第 12 図）

調査区の北東端に位置し、繋ぐと正方形になる主柱穴と思われるピット３基が確認されたことから、住居跡と判断した。住居北東の半分以上は調査区外で、規模は壁が残っていないため不明であるが、ピットから規模は東西 2.8 ｍ以上×南北 2.45 ｍ以上の正方形住居になるか。

出土遺物はないが、古墳時代後期の住居跡になるか。（大庭）

９号竪穴住居跡（第 12 図）

調査区の中央北西寄りに位置し、弱く焼けたカマド焼面を検出したのみで、規模と主柱穴等は不明である。おそらく北壁中央にカマドを付設した住居跡となると思われるが、確証はない。

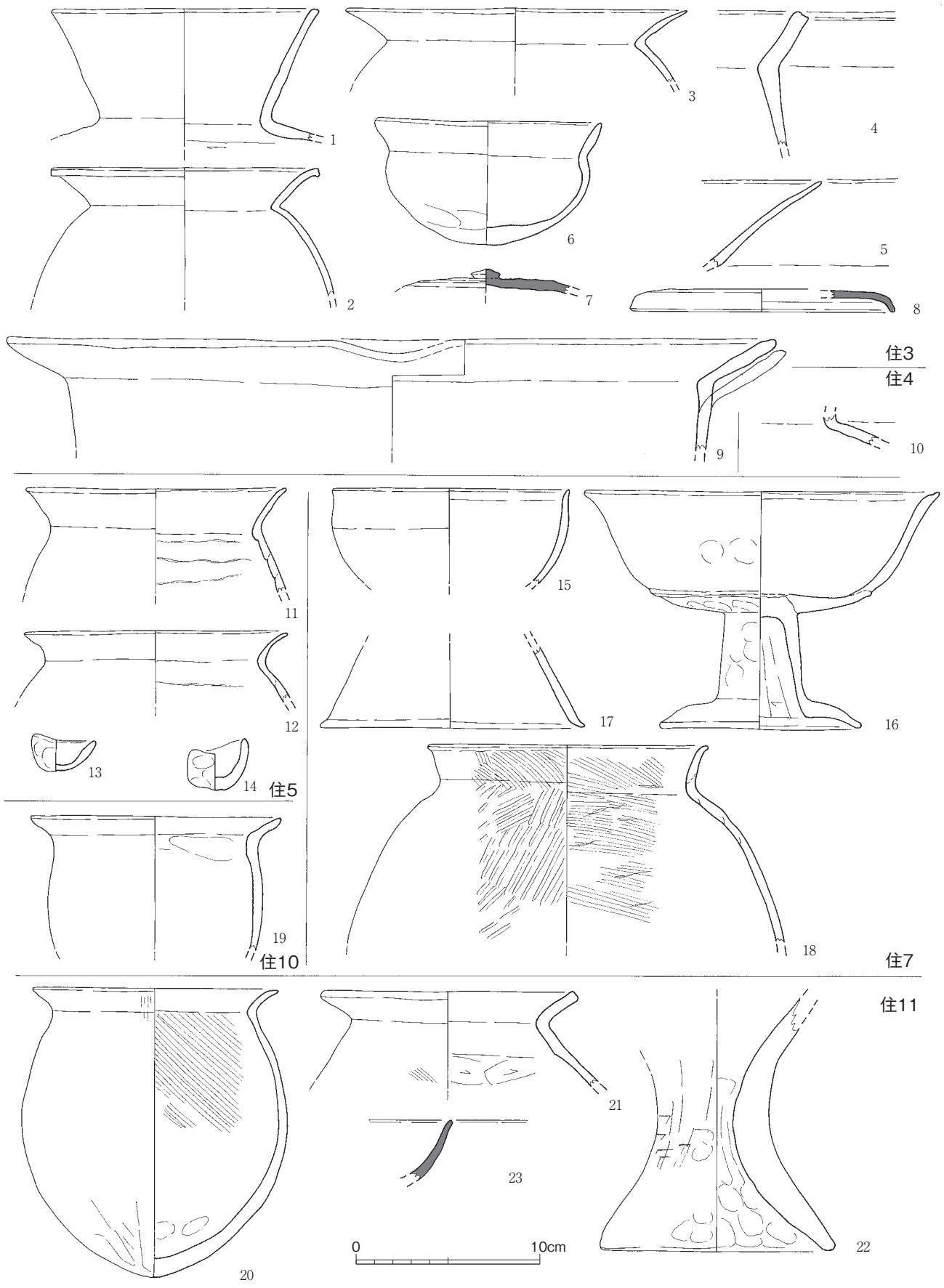
出土遺物もないが、カマドの存在から古墳時代後期の住居跡である。（大庭）

10 号竪穴住居跡（図版７、第 12 図）

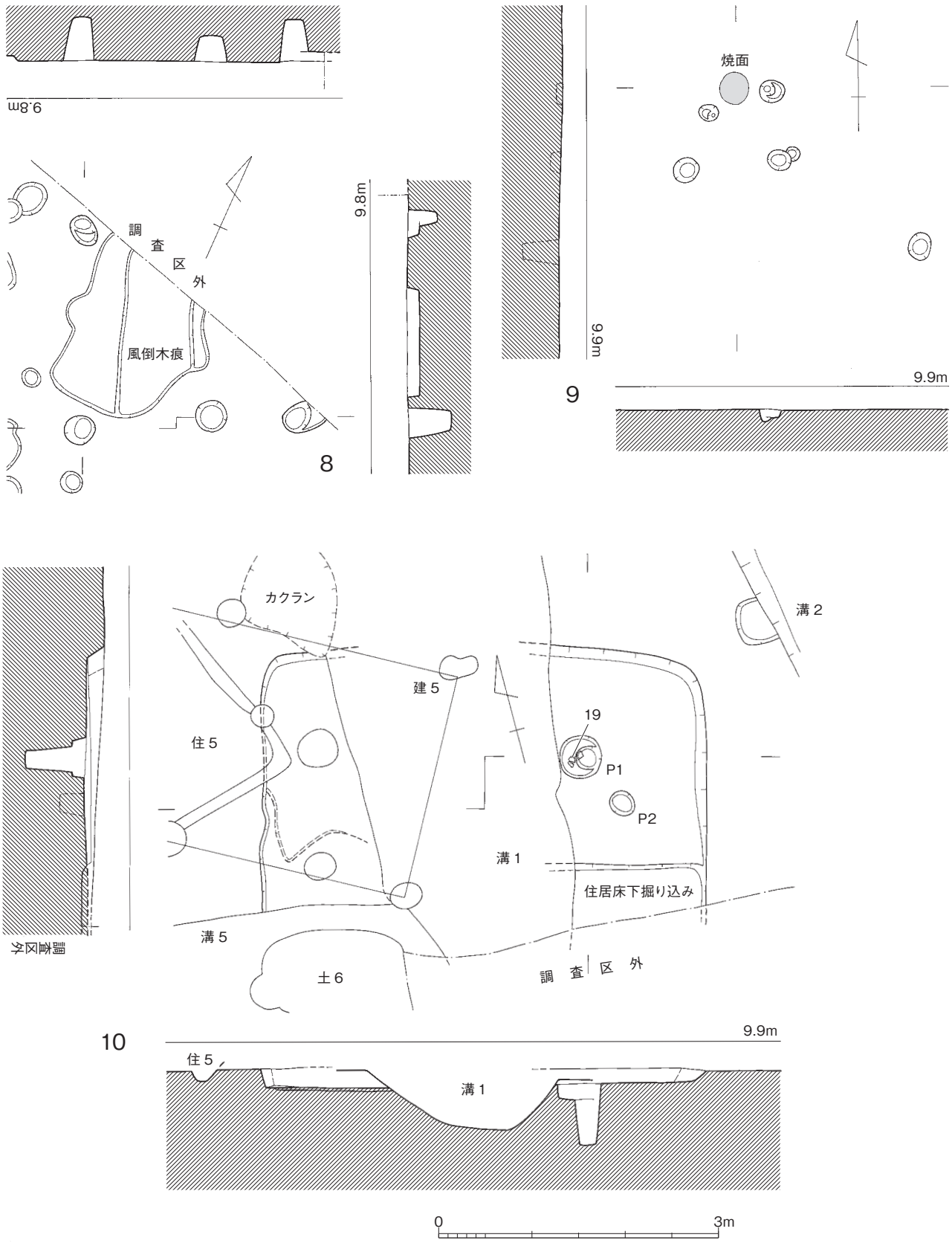
調査区のほぼ中央に位置し、５号竪穴住居跡、５号掘立柱建物跡、６号土坑、１・５号溝に切られ、住居南側は調査区外まで延びる。規模は東西 4.8 ｍ×南北３ｍ以上、深さ 0.23 ｍの隅丸方形住居である。Ｐ１が形態と深さから北東側の主柱穴になる４本柱の住居跡となる可能性が高い。埋土は灰茶褐色粘質土である。住居床下掘り込みを１ヶ所確認した。

出土遺物（第 11 図 19）

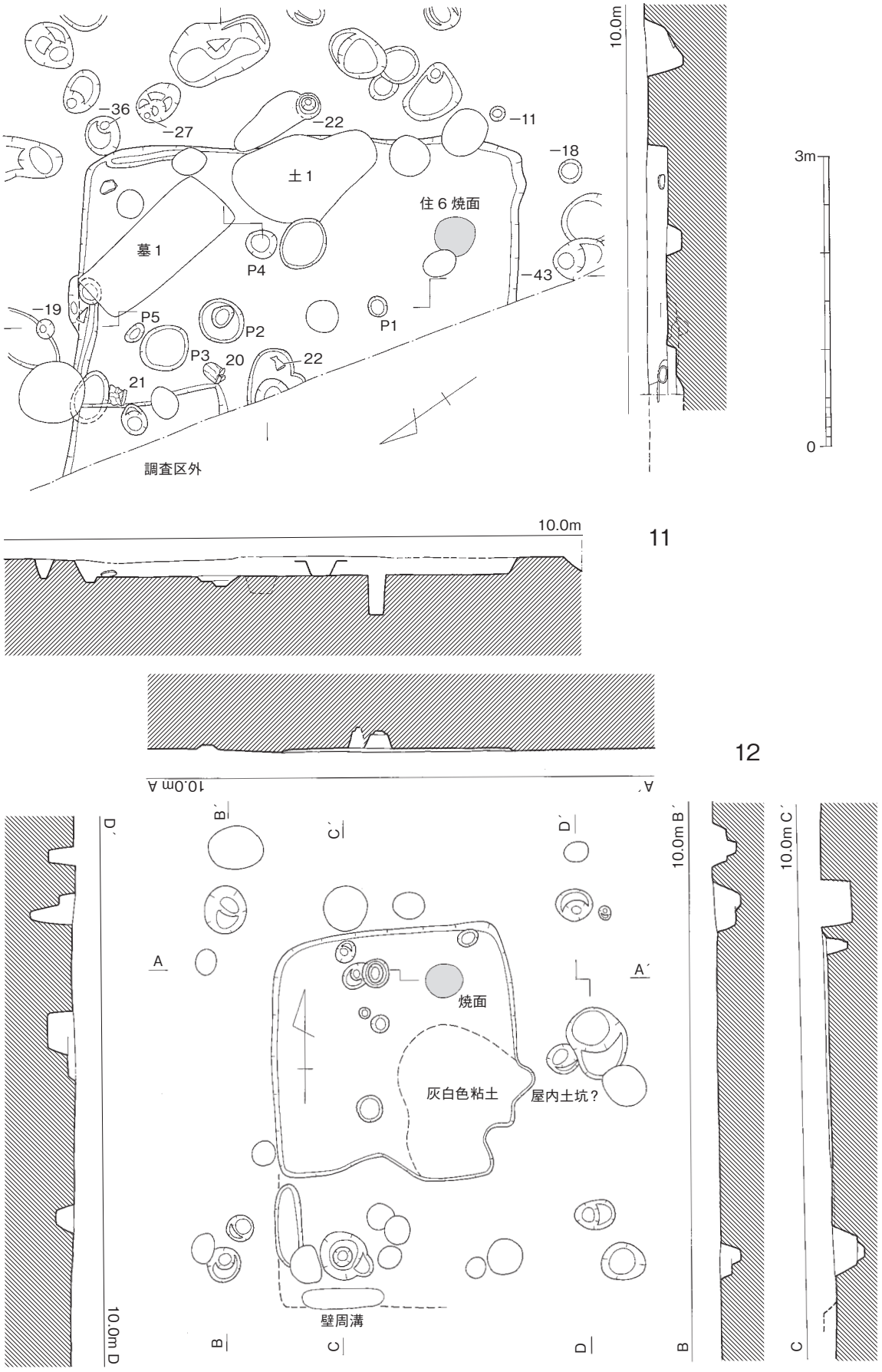
図示できた遺物は、19 の小型の土師器甕のみである。強く屈曲する口縁部で、内面頸部のみへ



第 11 図　Ⅲ -AB 区３～５・７・10・11 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 12 図　Ⅲ -AB 区８～ 10 号竪穴住居跡実測図（１/60）



第 13 図　Ⅲ -AB 区 11・12 号竪穴住居跡実測図（1 /60）

ラケズリを施す。外面には煤が付着する。

出土遺物から、古墳時代後期に属すると考えられる。（大庭）

11 号竪穴住居跡（図版７、第 13 図）

調査区の北西端に位置し、６号竪穴住居跡及び１号土坑、１号墓に切られる。西側の半分近くは調査区外まで延びる。規模は東西 3.45 ｍ以上×南北 4.55 ｍ、深さ 0.2 ｍの方形住居跡である。住居東及び北壁の一部には壁周溝を巡らし、北西側は一段高く地山の高まりを確認できたことから、地山削り出しのベッド状遺構になると考えられる。このベッド状遺構の周辺の床面直上で甕（20・21）及び器台（22）が出土した。主柱穴については、Ｐ１が深さと位置から主柱穴となる可能性があるが､その他の主柱穴は不明である。また炉跡も検出できていない。埋土は灰褐色粘質土である。住居周囲には住居外ピットが並び、当住居の補助柱の可能性がある。

出土遺物（図版 48、第 11 図 20 ～ 23）

20 は尖底の土師器甕。外面底部は板ナデを施す。外面底部には黒斑あり。復元口径 13.4cm、器高 15.8cm を測る。21 は器壁の厚い土師器甕で、口縁端部には煤が付着。22 は土師器器台で、外面中位には工具ナデ痕が残る。外面底部には二次加熱痕あり。23 は須恵器坏口縁部で、混入品。

出土遺物と住居形態から、古墳時代前期前半に属すると考えられる。（大庭）

12 号竪穴住居跡（第 13 図）

調査区の中央の西寄りに位置する。住居はほとんど削平された状態で検出され、竪穴部の床面と焼面、また南西部で壁周溝を一部検出したことから、住居跡と判断した。

壁周溝及び東側の主柱穴列から、規模は東西 3.5 ｍ以上×南北 4.35 ｍの４本柱の方形住居跡となると思われる。住居西側にも当住居と並行する柱穴列が確認できたことから、西側の柱穴列は住居建て替えに伴い、住居を拡張した痕跡と思われる。竪穴部の焼面はしっかり焼けており、竪穴部床面南東には薄く灰白色粘土を貼っている（図中の破線）。埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器はないが､住居形態から弥生時代後期後半～古墳時代前期の住居跡と考えられる。（大庭）

13 号竪穴住居跡（図版７・８、第 14 図）

調査区の中央西端に位置し、９・10 号溝に切られ、14 号竪穴住居跡と接し、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器及び住居形態から 14 号竪穴住居跡が切る。住居西側は調査区外まで延びるが、規模は東西 7.2 ｍ以上×南北 5.88 ｍ以上、深さ 0.24 ｍで、壁は東壁のみしか検出できていないものの、東西に長い大型の長方形住居跡となると思われる。

住居東壁には壁周溝を巡らし、東側床面を中心に住居仕切り溝と思われる溝を複数検出した。住居床面は厚さ５㎝ほどのやや締まる灰褐色粘質土で貼り床を行い、その貼り床直上で大型二重口縁壺（１）が出土し、その西側で径 0.5 ｍ程度の円形を呈する焼面を検出した。その貼り床を外すと住居北側で床面を深くピット状に掘り込み、埋土が灰褐色粘質土に焼土・炭が多く混じる屋内土坑を検出した。その規模は 1.47 ｍ× 0.75 ｍ、深さ 0.7 ｍ前後となる。また同じく貼り床下からピットを多数検出した。このピット群は主柱穴となりうる深いピットも少なくないが、位置的にＰ１～４が主柱穴の４本柱となると考えられる。住居埋土は灰褐色粘質土が基調で、上層には橙褐色粘

第 14 図　Ⅲ -AB 区 13 号竪穴住居跡・土器出土状況実測図（1 /60、1 /30）

質土ブロックが多く混じり、下層には炭が混じる。

出土遺物（図版 48、第 15 図）

１～３は二重口縁壺である。１は大型品で、胴部の大きさの割に口径が 20㎝と小さい。山陰系二重口縁壺の系譜を引くタイプか。胴部外面には黒斑あり。２は器壁が非常に厚く、口縁部が逆「ハ」の字状に広がるもの。畿内系の系譜を引くものか。３は二重口縁状になる中型壺で、口頸部外面には横ミガキを施す精製品。４～９は土師器高坏である。４～６は口縁部を逆「く」の字状に屈曲させたもの。４は摩滅により、調整不明。５の坏部外面はハケメ後ミガキを施す。外面には黒斑ないしは黒化が認められる。６は小型の深さがある坏部である。外面には横ミガキを施す。また外面には黒斑あり。７～９は裾部が「ハ」の字状に開く高坏脚部である。10 は直口の粗製土師器鉢である。底部は欠けるが、胴部との境には稜を持ち、平底に近い形態となるか。11 は脚付土師器鉢の脚部。脚内面にハケメを施す。12 は上面が嘴状になる小型の支脚である。上部には黒斑があり、内外面には二次加熱痕が顕著である。13 ～ 19 は混入品で、13 ～ 16 は古墳時代後期～古代、17 ～ 19 は中世に属する。13 は器壁が厚い土師器甕で、外面頸部にはハケメが残る。14 は土師器甑把手。外面下部には二次加熱痕あり。15 は外面にナデによる凹凸が顕著に残る須恵器坏身で、外面には自然釉がかかる。16 は須恵器直口壺で、外面底部は手持ちヘラケズリ、胴部内面は横ナデの稜が残る。焼成は甘い。17 ～ 19 は土師器皿で、いずれも二次加熱痕が認められる。17・18 の底部はヘラ切り、19 は静止糸切りである。口径は、17 は 9.8㎝、18 は 9.7㎝、19 は 8.6㎝を測る。埋土から土製紡錘車１点（第 101 図４）、砥石１点（第 102 図 21）が出土した。

出土遺物と住居形態から、古墳時代中期に属すると考えられる。（大庭）

14 号竪穴住居跡（図版８・９、第 16 図）

調査区の中央西寄りに位置し、10 号溝に切られ、方形周溝を切り、13 号竪穴住居跡と接し、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器から 13 号竪穴住居跡を切る。規模は東西 6.4 ｍ×南北 5.58 ｍ、深さ 0.28 ｍのやや東西に長い方形住居跡である。

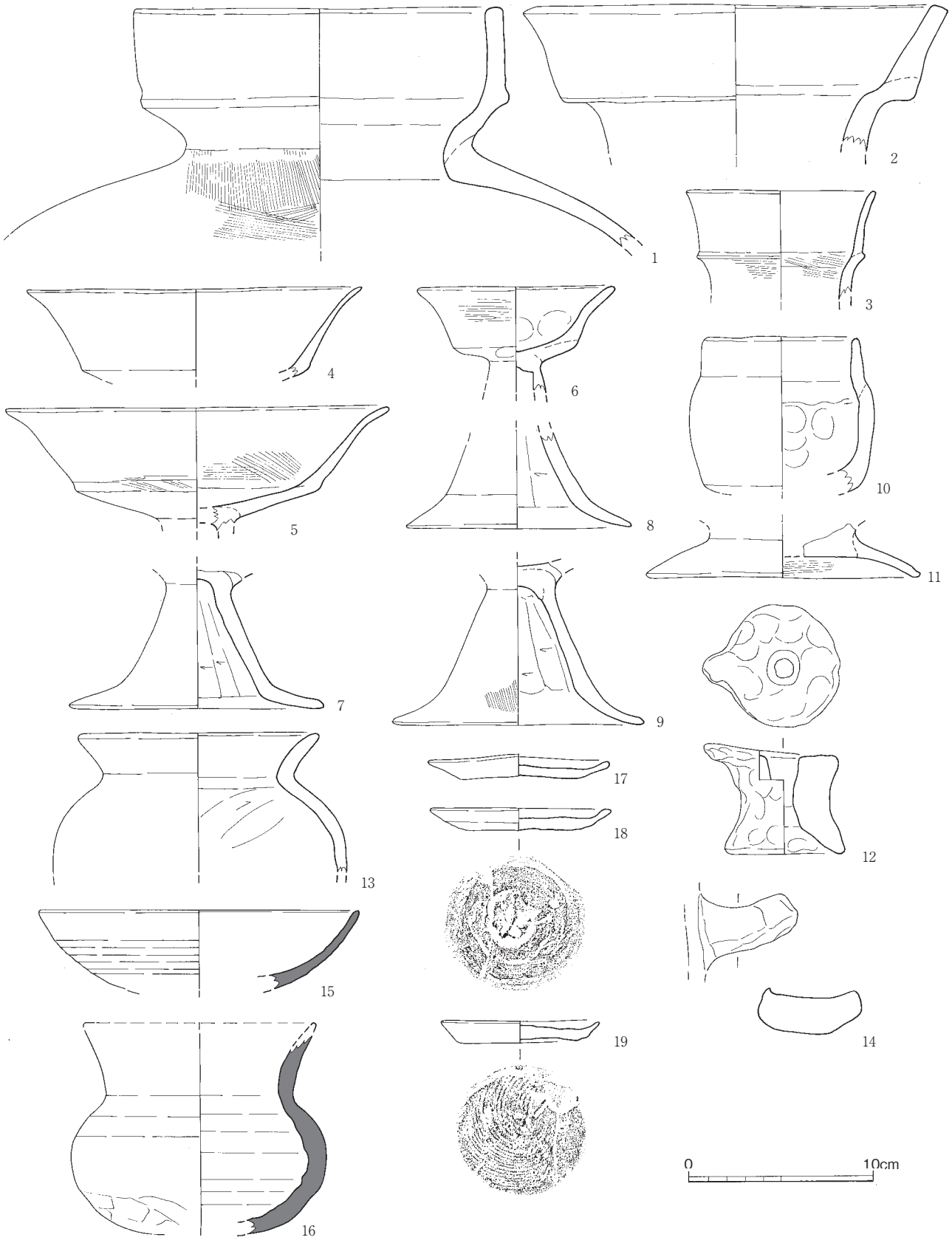
北壁ほぼ中央にカマドを付設し、壁周溝はほぼ全周すると思われる。床面ではピットを多数検出したが、Ｐ１～３は主柱穴で、南東側はＰ４かＰ５のいずれかが主柱穴となる４本柱の住居跡である。住居北側で床下掘り込みを確認した。埋土は暗灰褐色粘質土である。住居周囲で住居跡外ピット列を検出し、当住居の補助柱であった可能性がある。

カマド（図版９、第 16 図）

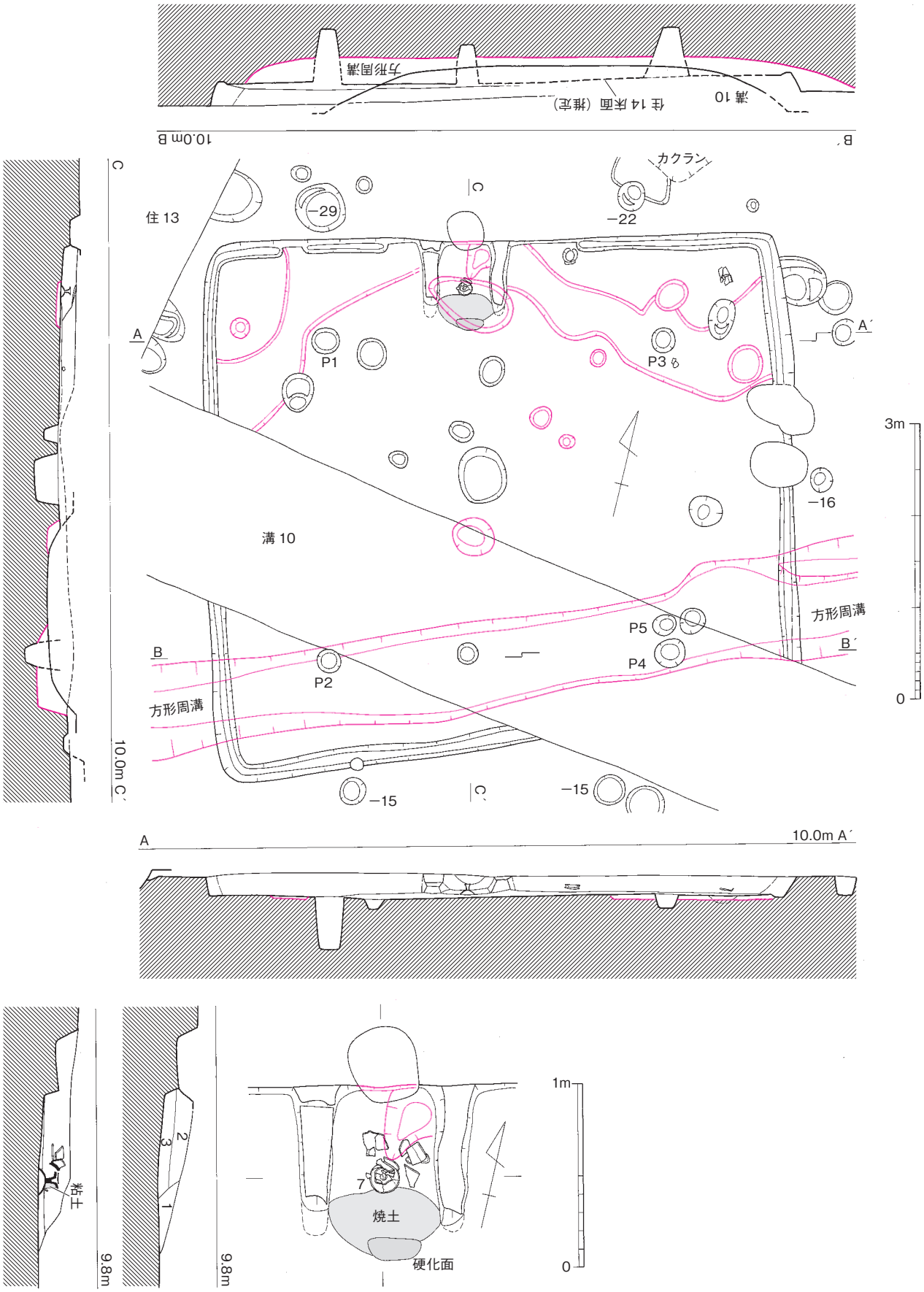
住居跡のほぼ北壁中央で検出した。いずれも袖は灰白色粘土で構築し、先端は掘りすぎてしまっているが、壁から 0.8 ｍ突出する。支脚は土師器高坏（７）を天地逆に設置し、高坏脚部の補強として粘土を貼り付けていた。支脚部分での袖間は 0.57 ｍである。カマド床面は支脚から 0.2 ｍほど前面が最も焼け、硬化する。カマド埋土は２・３がカマド天井部崩落土が主体となる土である。カマド北東部で、カマド構築前の下層掘り込みを検出した。

出土遺物（図版 48、第 20 図１～ 27）

１～３は土師器壺である。１は器壁が厚く、頸部が強く屈曲する大型壺頸部である。２は口縁部が長めの直口壺。口縁内端部はナデにより窪む。３は二重口縁の精製中型壺。図上復元であるが、復元口径 11.6㎝、器高 16.2㎝を測る。口縁部は長く、肩の張る丸い胴部を持つ。口縁部外面及び外



第 15 図　Ⅲ -AB 区 13 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



1. 灰褐色粘質土に焼土・炭多く混じる
2. 灰褐色粘質土＋灰白色粘質砂
3. 2 に焼土・炭多く混じる。

第 16 図　Ⅲ -AB 区 14 号竪穴住居跡・カマド実測図（1 /60、1 /30）

面底部には丁寧なナデ、胴部内面も丁寧なヘラケズリを行っている。外面には煤が付着し、口縁部外面は一部黒化する。４は口縁部が短く屈曲する土師器甕で、外面には二次加熱痕あり。５～10は土師器高坏。５は緩やかに逆「ハ」の字状に開く口縁部で、外面はハケメ後横ナデを施す。６は口縁端部を短く外反させる椀状の坏部を持ち、外面底部～中位にかけてヘラナデを施す。完形に近い７は口縁端部が外反する坏部を持ち、中実の脚柱部から裾部が「ハ」の字状に緩やかに広がるもの。脚裾内面上位は工具ナデを施す。外面には二次加熱痕あり。口径16cm、器高13cmを測る。８は口縁端部が短く外反するもので、土師器坏身の可能性もある。焼成は甘い。９は裾部が屈曲するもの。外面には横ミガキ、脚柱部内面は横ケズリを施す。10は「ハ」の字状に開く脚部。胎土は精良。11・12は土師器甑把手。13・14は手づくね土器。直口鉢状となる13はほぼ完形で、口径5.9cm、底径3.2cm、器高6.2cmを測る。内外面には粘土継ぎ目痕が残る。外面には黒斑が認められる。14もほぼ完形で、口径６cm、外面には黒斑あり。15は須恵器坏蓋。口縁端部は嘴状になり、口縁部と天井部との境の稜は痕跡程度に残る。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリを施す。外面には自然釉あり。復元口径15.6cm。16はかえりのある須恵器坏身で、外面底部はかえり付近まで反時計回りの回転ヘラケズリを施す。17は口縁端部にナデ凹線の突帯を巡らす須恵器壺口縁部。外面には自然釉あり。

18・19は弥生時代後期土器で、混入品。18は甕で、外面頸部にはハケメが残る。19は器台底部片か。

20～27は土師器皿で、いずれも胎土に金雲母や赤色粒を含む。20のみ完形品で、底部はヘラ切り。その他の底部は、22は摩滅のため不明であるが、23～27は糸切りを行う。27は回転糸切り。口径は20・21は9.3cm、22は9.4cm、23は10.1cm、24・25は10.2cm、27は9.4cm。埋土より砥石２点（第101図12・20）、不明鉄製品１点（第103図61）が出土した。

出土遺物と住居形態から、古墳時代後期後半に属すると考えられる。（大庭）

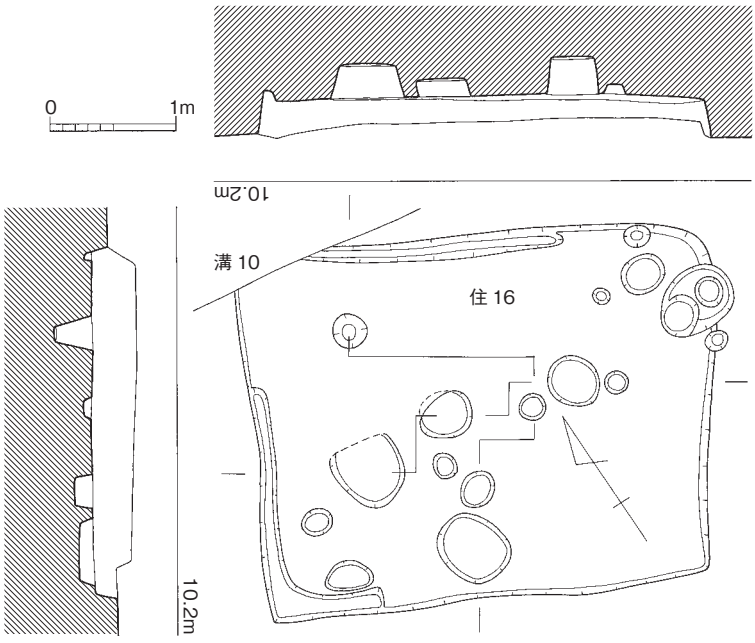
16号竪穴住居跡（第17図）

調査区の中央やや南寄りに位置し、10号溝に切られる。規模は3.7×2.9m、深さ0.4mの長方形住居跡である。周縁の３分の１ほどに壁溝が巡る。いくつかピットが検出されているものの、主柱穴は不明である。時期的にベッド状遺構をもつ可能性が高い。

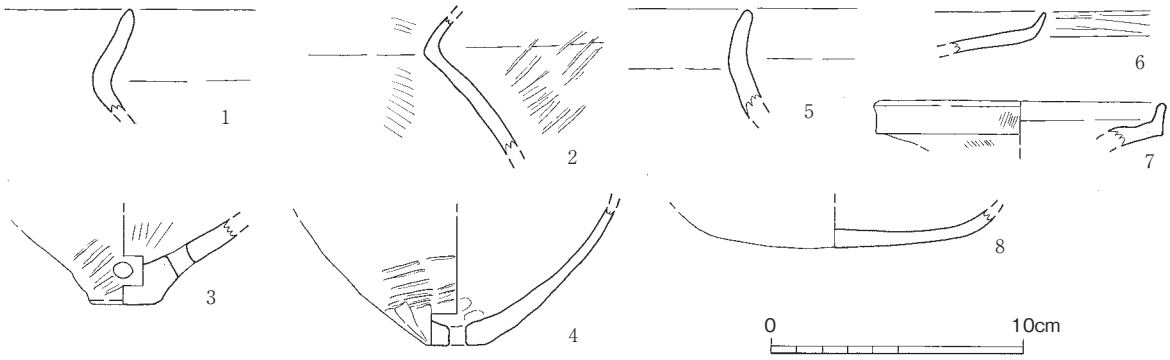
出土遺物（第18図）

１は土師器の小壺か。摩滅のため調整は不明である。２～５は甕である。２は外面タタキ、内面ハケメを施す。３は側面に１孔が穿たれ、外面タタキ、内面ハケメを施す。４は底部に孔が穿たれる。摩滅するが、外面にタタキが残る。外面に黒斑が見られる。５は口縁の屈曲が弱く、外面ナデ、内面ハケメを施す。６・７は器台か。６は口縁部外面に工具痕、他はナデを施す。７はハケメ後ナデを施す。８は椀か。器面剥落のため調整は不明である。

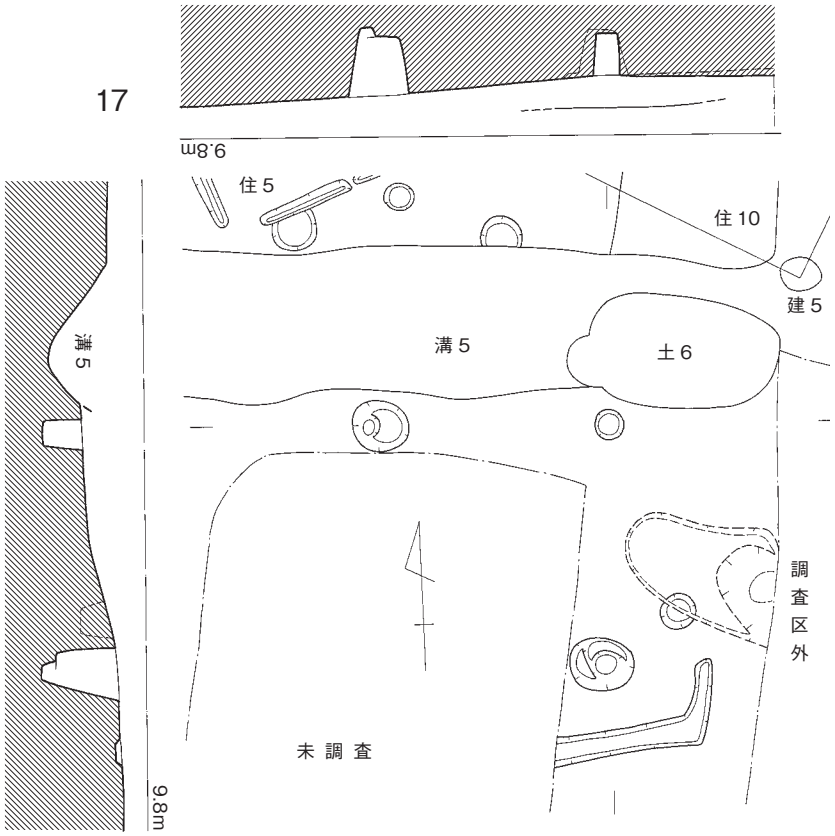
切り合いと出土遺物から古墳時代初頭～前期に属すると考えられる。（城門）

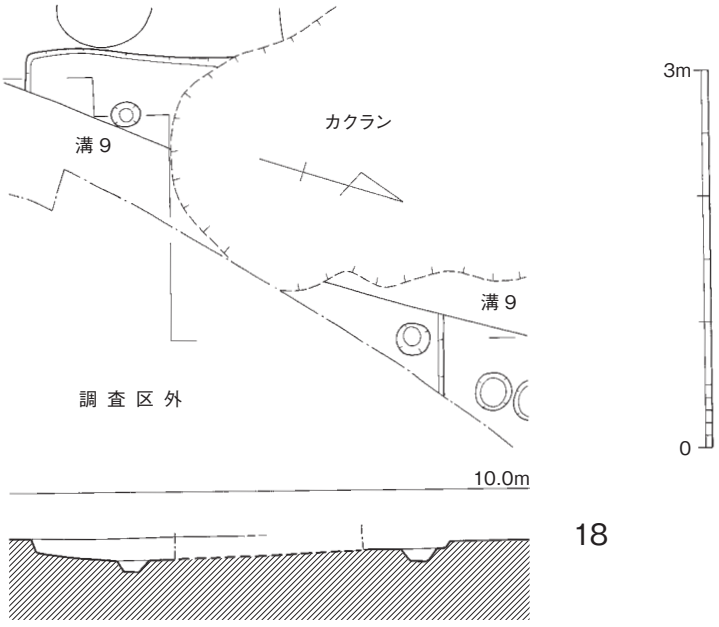


第17図　Ⅲ-AB区16号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 18 図　Ⅲ -AB 区 16 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）





第 19 図　Ⅲ -AB 区 17・18 号竪穴住居跡実測図（1 /60）

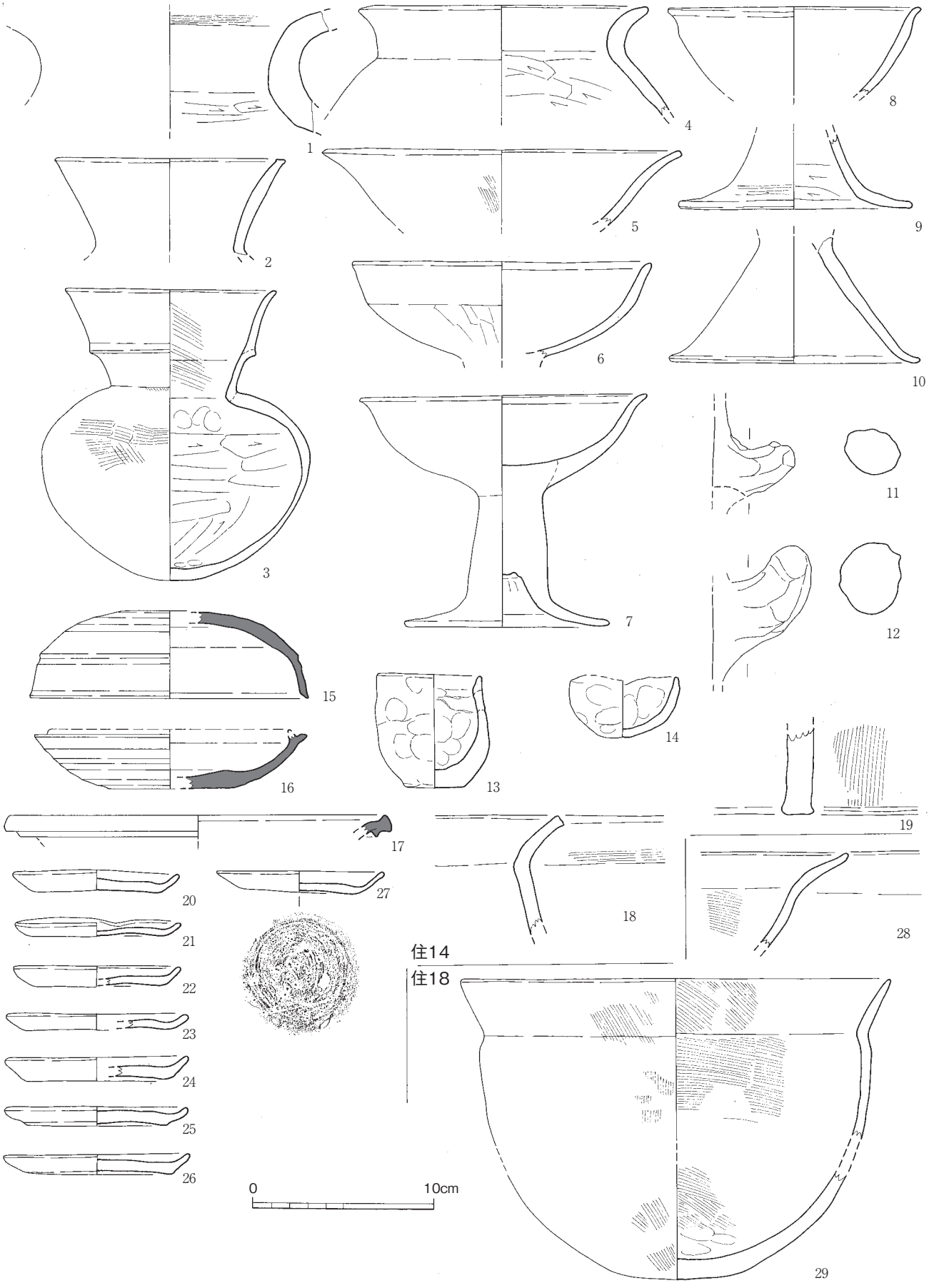
17 号竪穴住居跡（第 19 図）

調査区のほぼ中央に位置し、10 号竪穴住居跡、6 号土坑、5 号溝に切られる。住居中央部のほとんどは既設電柱により調査できなかったが、住居南東の壁周溝と南西部を除く主柱穴 3 基を確認した。住居は削平された状態で検出し、検出できた壁周溝と主柱穴から、規模は東西 2.74 m以上×南北 3 m以上の方形住居跡になると考えられる。なお住居東側の浅い掘り込みが当住居に伴う床下掘り込みとすれば、さらに東側にベッド状遺構を伴う可能性があり、住居規模は大きくなる。埋土は暗灰茶褐色粘質土である。

出土遺物はないが、住居形態から弥生時代後期後半～古墳時代前期の住居跡になると思われる。（大庭）

18 号竪穴住居跡（第 19 図）

調査区のほぼ中央に位置し、9 号溝と撹乱に切られる。当住居は北と南西部の一部を



第 20 図　Ⅲ -AB 区 14・18 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

検出したのみで、ほとんどが調査区外まで延びる。規模は東西 2.7 m以上×南北 3.3 mの方形住居跡になると考えられる。住居床面で浅いピットを検出したが、主柱穴になるかどうかは不明である。埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土遺物（第 20 図 28・29）

28・29 は土師器外反口縁鉢。28 は口縁端部をややつまみ出す。29 は大型品で、復元口径 24cm、器高 16.7cmを測る。平底の痕跡を残す丸底で、底部外面には黒斑が認められる。

出土遺物と住居形態から、弥生時代後期終末に属すると考えられる。（大庭）

21 号竪穴住居跡（図版９・10、第 21 図）

調査区の中央南西寄りに位置し、方形周溝に切られ、21 号溝を切る。25 号竪穴住居跡とも接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器から当住居が古いと思われる。

規模は東西 5.88 m×南北 5.35 m、深さ最大 0.65 mの、やや東西に長くなり、全体的にやや丸みを帯びた正方形住居跡である。住居北西側を除く住居４分の３には、高さ約 20cm弱のベッド状遺構を巡らし、その外側には壁周溝を巡らす。壁周溝が切れる住居南西側か、南壁中央やや東寄りで検出した三角形の掘り込みが住居入り口になる可能性がある。竪穴部床面で６基のピットを検出し、竪穴部隅のＰ１・２は深さ・位置から主柱穴と考えられる。西側２基の主柱穴は方形周溝に切られているため不明であるものの、４本柱の住居跡となるであろう。住居周囲には住居跡外ピット列が存在し、補助柱的な役割を持ったピットと想定される。また東側ベッド状遺構上で検出したＰ５・６も住居主軸と並行することから、補助柱であった可能性がある。

竪穴部床面中央やや南西寄りで検出した、炭のみで充填された 0.9 m× 0.47 mの長楕円形を呈するＰ３は炉の可能性がある。その東側のトーンで示した２ヶ所は火を受けて硬化した範囲である。竪穴部の壁周溝は北東側と北西隅、南西は未検出で、東から南にかけての壁周溝は掘り直しが認められるが、住居の建て替えを示しているかは不明である。埋土は上層が暗灰茶褐色粘質土、竪穴部埋土が灰茶褐色粘質土で、竪穴部床面近くでは焼土層と炭層が確認できる。住居床下掘り込みは４ヶ所確認した。

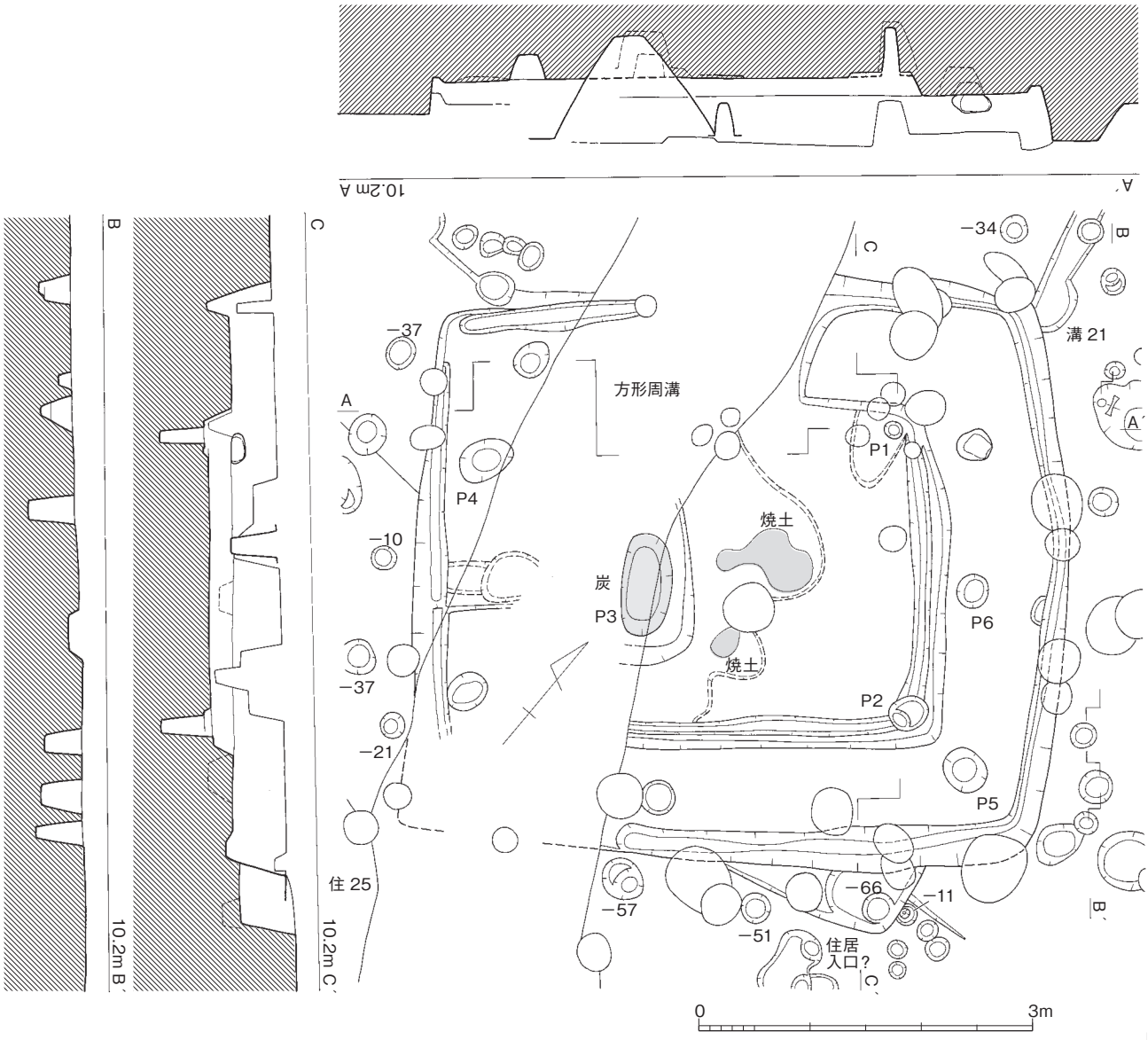
出土遺物（図版 49、第 23 図１～９）

１・２は在地系甕。１は口縁端部を丸く収める口縁部で、焼成は甘い。２は脚付甕脚部。外面には二次加熱痕・黒斑あり。３は底部と体部との境が不明瞭になる段階の凸レンズ底部の直口鉢。外面には黒斑あり。復元口径 14.5cm、器高 10.1cm。４は上面に抉りを入れた器台である。口縁上端部はナデで面取りし、下部内面には工具ナデ痕が残る。外面には黒斑・二次加熱痕あり。上面の復元径は 17.7cmである。５・６は手づくね土器で、いずれも焼成は甘い。５の外面には黒斑あり。７は環状の把手片であるが、器種は不明。８・９は混入品。８は須恵器坏口縁部。外面口縁部下には１条のナデ凹線が巡る。９は土師器皿で、口径８cm、底部は静止糸切り痕が残る。埋土から磨石２点（第 102 図 24・28）が出土した。

出土遺物と切り合い関係から、弥生時代後期終末に属すると考えられる。（大庭）

23 号竪穴住居跡（図版 10・11、第 22 図）

調査区の中央南寄りに位置し、方形周溝を切り、27 号土坑と接し、切り合い関係を持つと考え



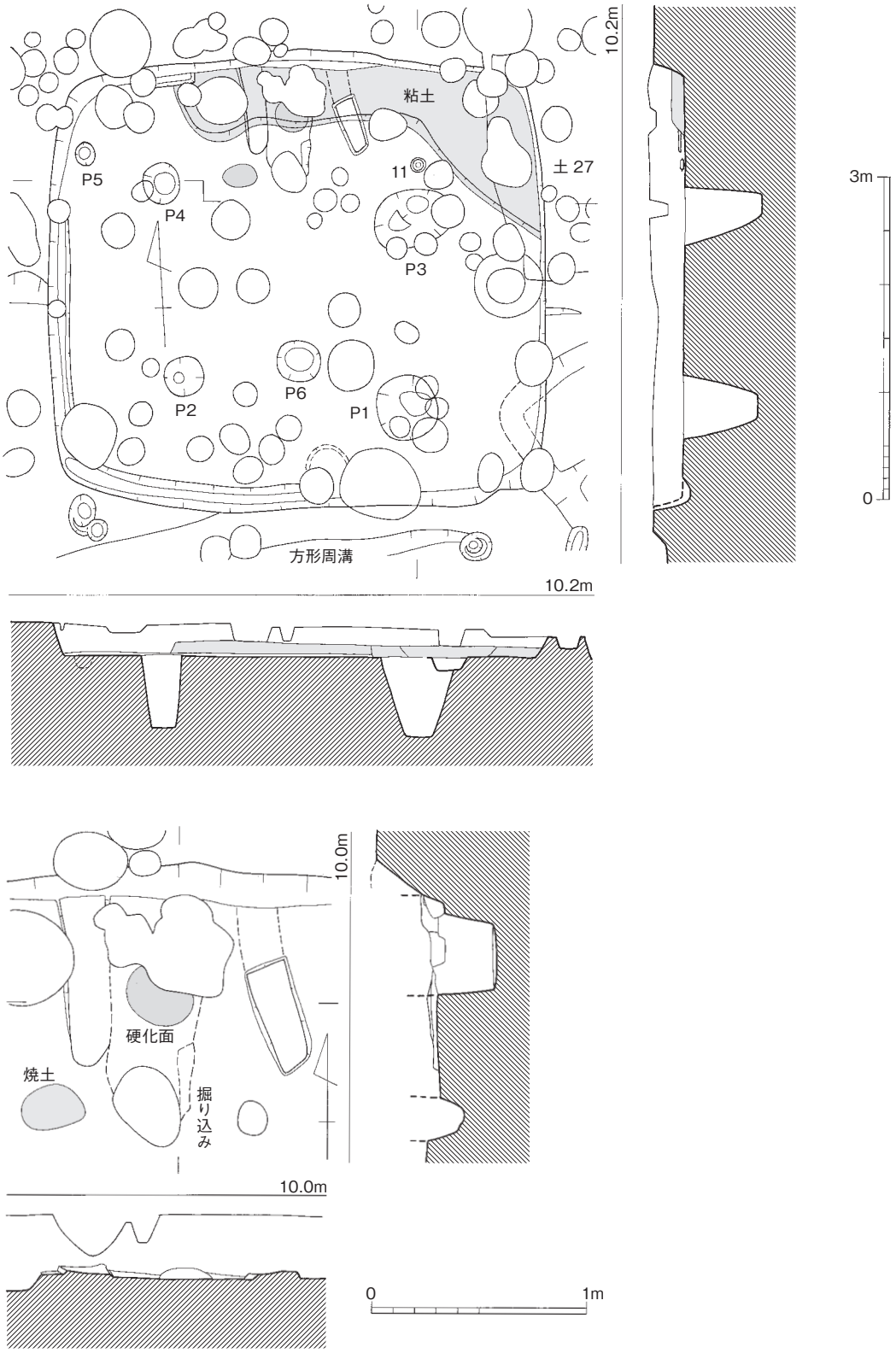
第 21 図　Ⅲ -AB 区 21 号竪穴住居跡実測図（１/60）

られるが、埋土から 27 号土坑に切られる可能性が高い。上端だけ図化したピットは埋土からほとんどが中世に属するピットと考えられる。規模は東西 4.63 m × 南北 4.3 m、深さ 0.34 mのやや東西に長い隅丸正方形住居跡である。

北壁ほぼ中央にカマドを付設するが、住居廃絶時に大きく壊されてしまっており、さらにその後カマドから住居北東隅にかけて白色粘土で厚さ 10㎝ほど覆い、カマド封じと思われる行為を行っていると思われる。この行為の検討は『Ⅳ区Ⅱ』で行っているので参照いただきたい。壁周溝は北側と南西側の一部巡り、Ｐ１～４が主柱穴の４本柱の住居跡になる。住居北東部床面直上で完形の須恵器坏身（11）が出土した。埋土は暗灰褐色粘質土である。

カマド（図版 11、第 22 図）

住居跡のほぼ北壁中央で検出した。いずれも袖は灰白色粘土で構築するが、住居廃絶時に袖をほとんど壊しており、袖は高さ５㎝ほどしか残っていない。左袖は直線、右袖は「ハ」の字状に開き、両袖とも壁から 0.9 mほど突出する。壁から 0.32 m前という近い位置に硬化面があり、この位置で

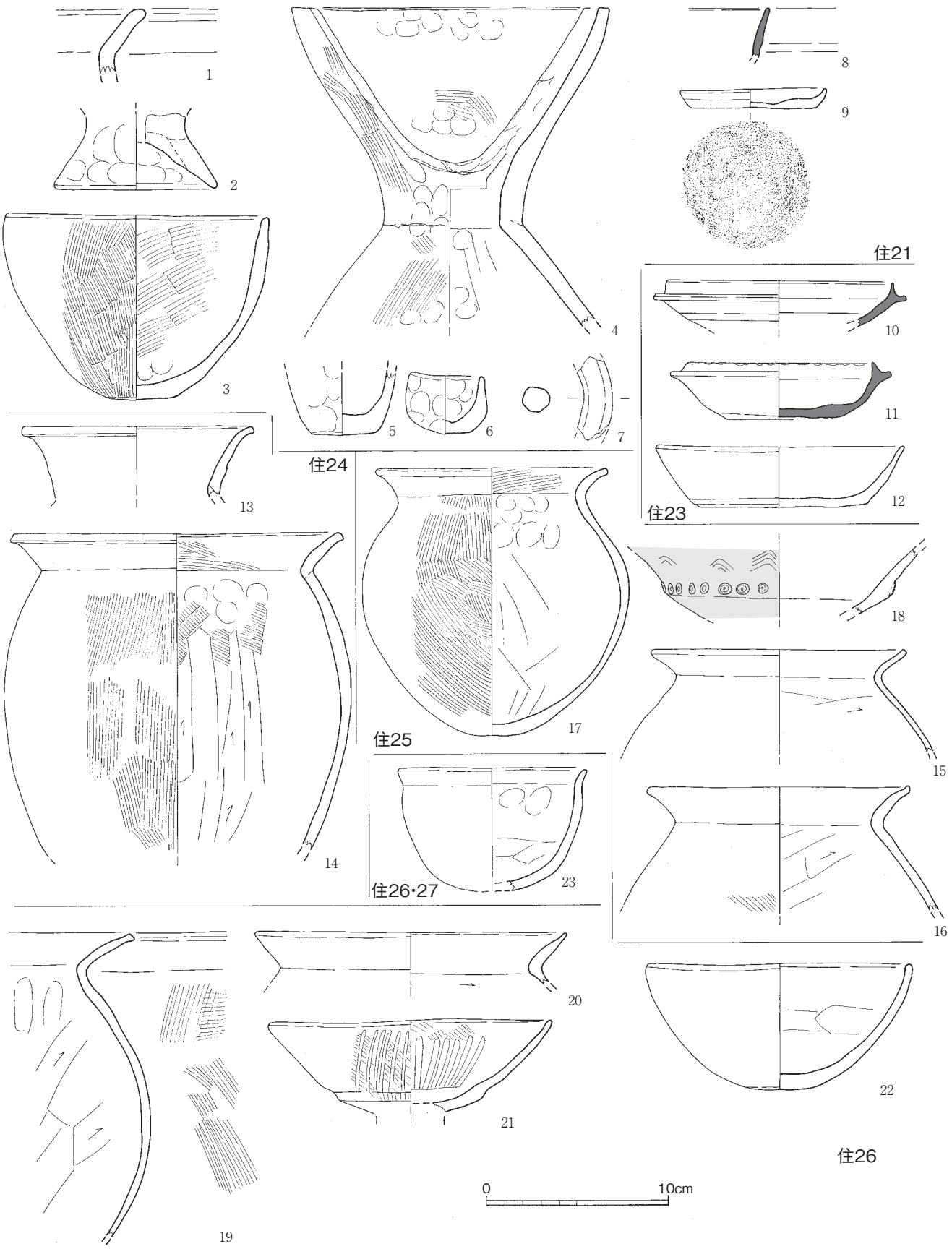


第 22 図　Ⅲ -AB 区 23 号竪穴住居跡・カマド実測図（1 /60、1 /30）

の硬化面の存在はカマドの使用上疑問が残る。この硬化面部分で袖間は 62㎝である。硬化面前面に深さ 2 ㎝ほどのカマド掘り込みがあり、埋土は焼土と炭のみで構成される。左袖の 10㎝ほど手前にも焼土が面的に広がるが、床面からやや浮いており、カマド廃絶時にカマド構築土の一部をこの場所で投棄した痕跡である可能性がある。

出土遺物（図版 49、第 23 図 10 ～ 12）

10・11 は須恵器坏蓋。11 の底部はヘラ切りのままである。口縁端部には打ち欠きを行う。内外



第 23 図　Ⅲ -AB 区 21・23・24 ～ 26 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

面には斑点状の自然釉が付着する。12 は土師器坏で、混入品。底部には板状圧痕が認められる。

出土遺物と住居形態から、７世紀前半に属すると考えられる。（大庭）

24 号竪穴住居跡（図版 11、第 24 図）

調査区の中央南端に位置し、30 号土坑、９・10 号溝、方形周溝に切られる。規模は東西 4.45 m 以上×南北 5.4 m、深さ 0.5 mを測り、９・10 号溝を挟んだ東側まで当住居は延びないため、東西幅６mほどの方形住居跡になると考えられる。住居西及び南壁にはベッド状遺構を付設し、西壁には壁周溝を巡らす。なお、住居南壁は 30 号土坑及び多数の中世ピットと削平により、壁上端の一部を検出したにとどまる。また住居北西部で13㎝ほど残る北壁を一部検出した。主柱穴については、Ｐ１・２が深さと位置から主柱穴となる可能性がある。東側の主柱穴及び炉跡は不明であるものの、おそらく４本柱の住居跡になると考えられる。埋土は灰褐色粘質土で、床面直上には暗灰色砂が広がることから、床面にまかれたものと想定される。住居床下掘り込みは３ヶ所確認した。

出土遺物（第 23 図 13・14）

13 は逆「ハ」の字状に開く在地系壺口縁部。14 は在地系甕で、胴部内面はハケメ後縦方向のヘラケズリを施す珍しいもの。外面には二次加熱痕と煤が認められる。埋土から不明鉄製品（第 103 図 55）が出土した。

出土遺物と切り合い関係から、弥生時代後期終末に属すると考えられる。（大庭）

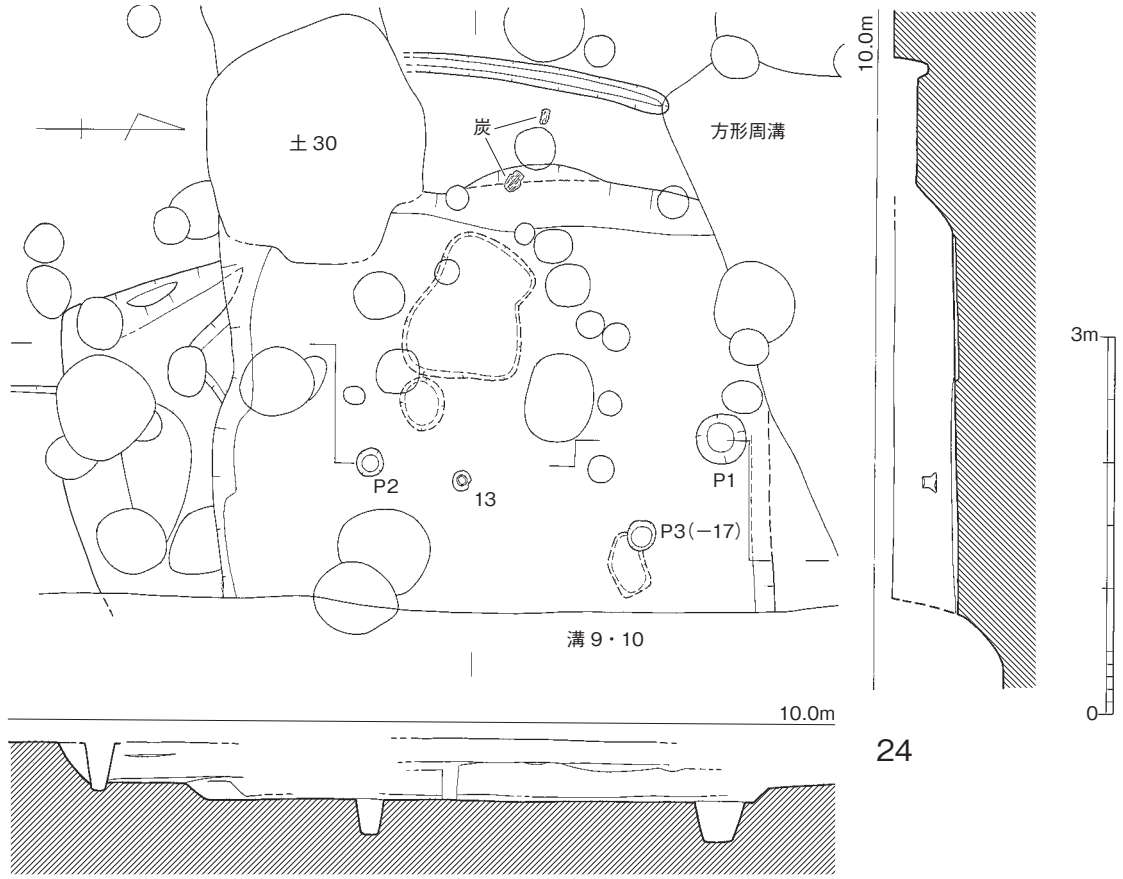
25 号竪穴住居跡（図版 11、第 24 図）

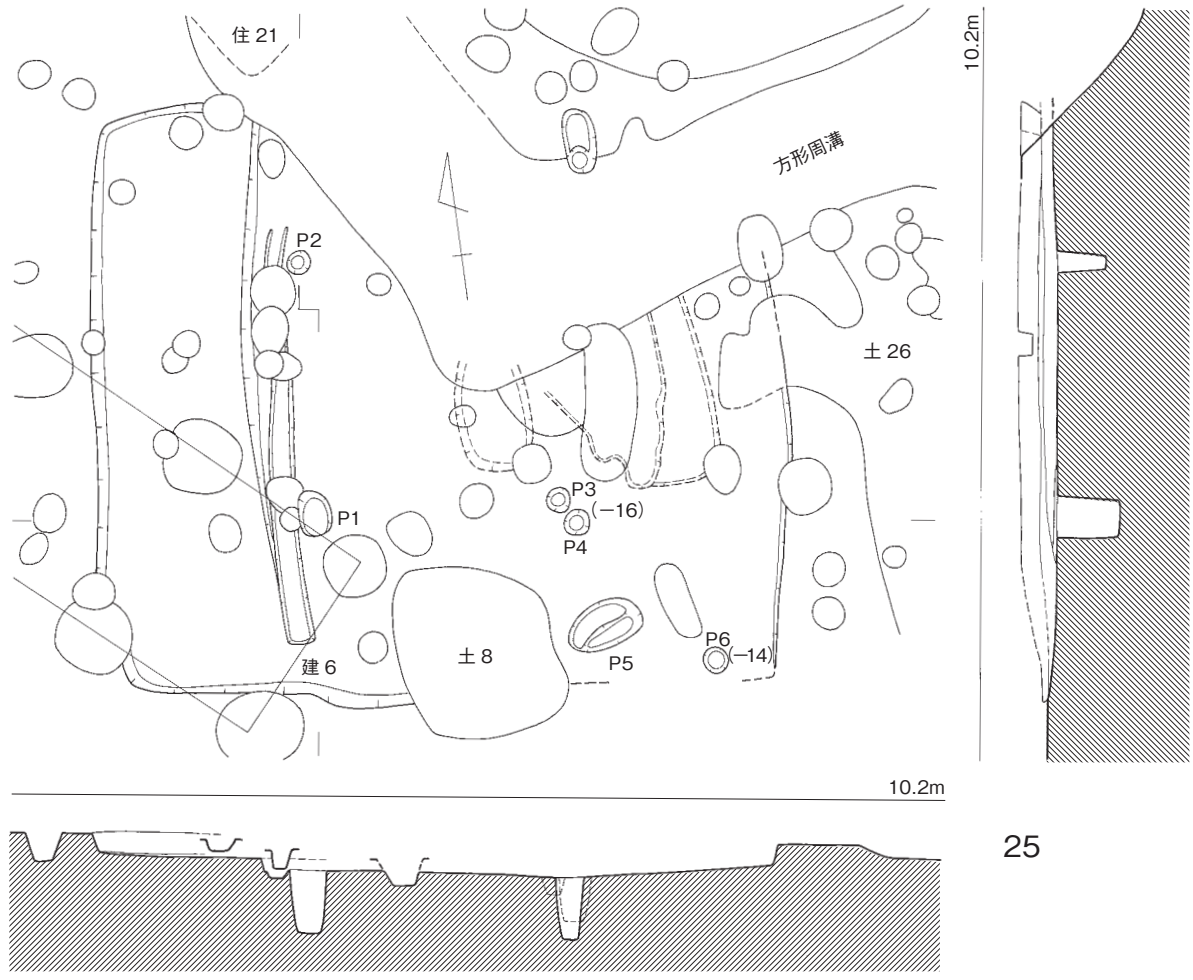
調査区の中央南端の西寄りに位置し、６号掘立柱建物跡、８・26 号土坑、方形周溝に切られる。21 号竪穴住居跡とも接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器から 21 号竪穴住居跡を切ると思われる。住居南壁のほとんどは削平され、東壁は 26 号土坑と方形周溝に切られるため、不明確である。規模は東西 6.4 m以上×南北 4.7 m、深さ最大 0.32 mの東西に長い隅丸長方形住居である。住居東西で高さ８㎝程度のベッド状遺構を検出し、住居北側も壁周溝が延びないこと、ベッド状遺構の下端と思われるラインが認められたため、北側もベッド状遺構を付設し、南側以外はベッド状遺構を持つと考えられる。壁周溝は、竪穴部西側のみ巡らす。竪穴部床面でピット６基を検出し、Ｐ１・２が西側の主柱穴列になると考えられるが、東側の主柱穴列は確認できなかった。埋土は灰茶褐色粘質土である。住居床下掘り込みは２ヶ所確認した。

出土遺物（図版 49、第 23 図 15 ～ 18）

15・16 は布留系甕で、いずれも口縁内端部を上方につまみ出したものである。15 は外面に二次加熱痕あり。16 は内面頸部まで丁寧なヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。17 はほぼ完形の在地系土師器甕で、主柱穴であるＰ１内出土。口径 12.7㎝、器高 14.7㎝を測る。内面下位には工具ナデの工具痕が残る。外面下位は二次加熱痕が顕著で、その上位には煤が付着する。内面胴部上位にはコゲが良く残る（図版 49）。18 は畿内系加飾有段高坏である。逆「ハ」の字状に強く開く口縁部との屈曲部に竹管を押し付けた円形浮文を密に巡らす。円形浮文上部に４条程度の櫛描波状文を巡らすが、浅く施されかつ後の摩滅のため、現状では一部しか確認できない。外面にはスリップを塗布する。

出土遺物では、古墳時代前期前半であるが、切り合い関係から弥生時代後期終末に属すると考え





第 24 図　Ⅲ -AB 区 24・25 号竪穴住居跡実測図（1 /60）

られる。（大庭）

26 号竪穴住居跡（第 26 図）

調査区の南西に位置し、Ⅲ -C 区２号掘立柱建物跡、22 号溝に切られ、30 およびⅢ -C 区 11 号竪穴住居跡を切る。住居南側の大半は削平され、東側は 22 号溝で壊されており、住居は北壁と床面で浅いピット２基を検出したにとどまる。規模は東西 4 ｍ以上×南北 1.6 ｍ以上、深さ 0.1 ｍの方形住居跡である。住居西側床面上で焼土を検出した。埋土は灰茶褐色粘質土である。住居北側で住居外ピット２基を検出し、補助柱的な役割を持ったピットの可能性がある。

出土遺物（第 23 図 19 ～ 23）

19 は布留系甕で、外面肩部には縦ハケメのち横ハケメ、後横ナデを施す。外面胴部下位には煤が付着し、口縁部外面には二次加熱痕が認められる。20 は短い口縁部の在地系土師器甕で、内面頸部までヘラケズリを施す。焼成は甘い。21 は土師器高坏である。坏部内外面にはハケメ後暗文状の縦ミガキを施すことと器形から、在地系の系譜を引くと考えられる。22 は丸底の土師器鉢。内面中位のみヘラケズリを施す。23 は 26・27 号竪穴住居跡上面遺構面出土の、短く外反する土師器鉢。内面下位にヘラケズリを施す。埋土から打製石鏃１点（第 101 図７）、石包丁１点（第 101 図 11）が出土した。

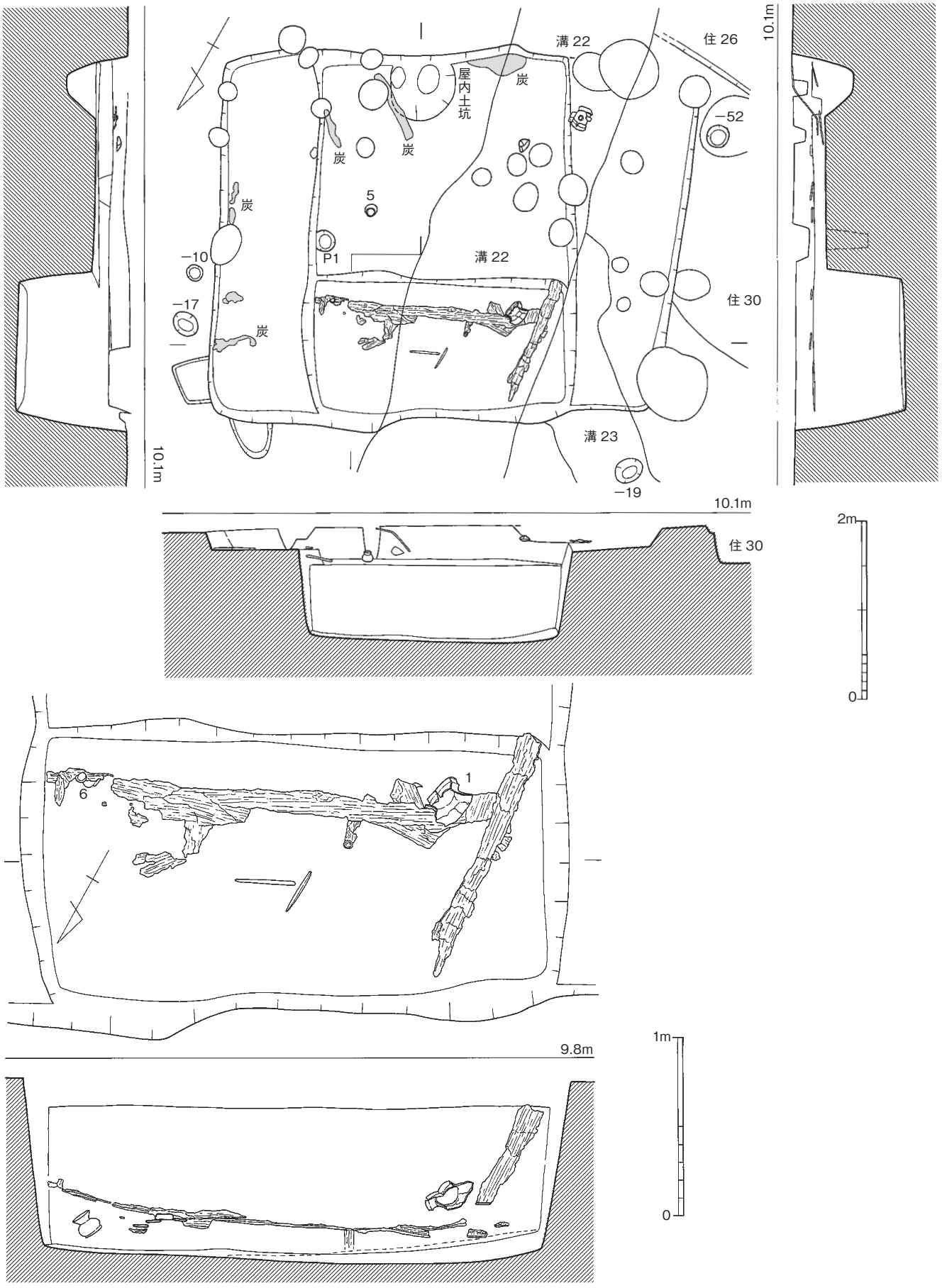
出土遺物と住居形態から、古墳時代前期前半に属すると考えられる。（大庭）

27 号竪穴住居跡（図版 12・13、第 25 図）

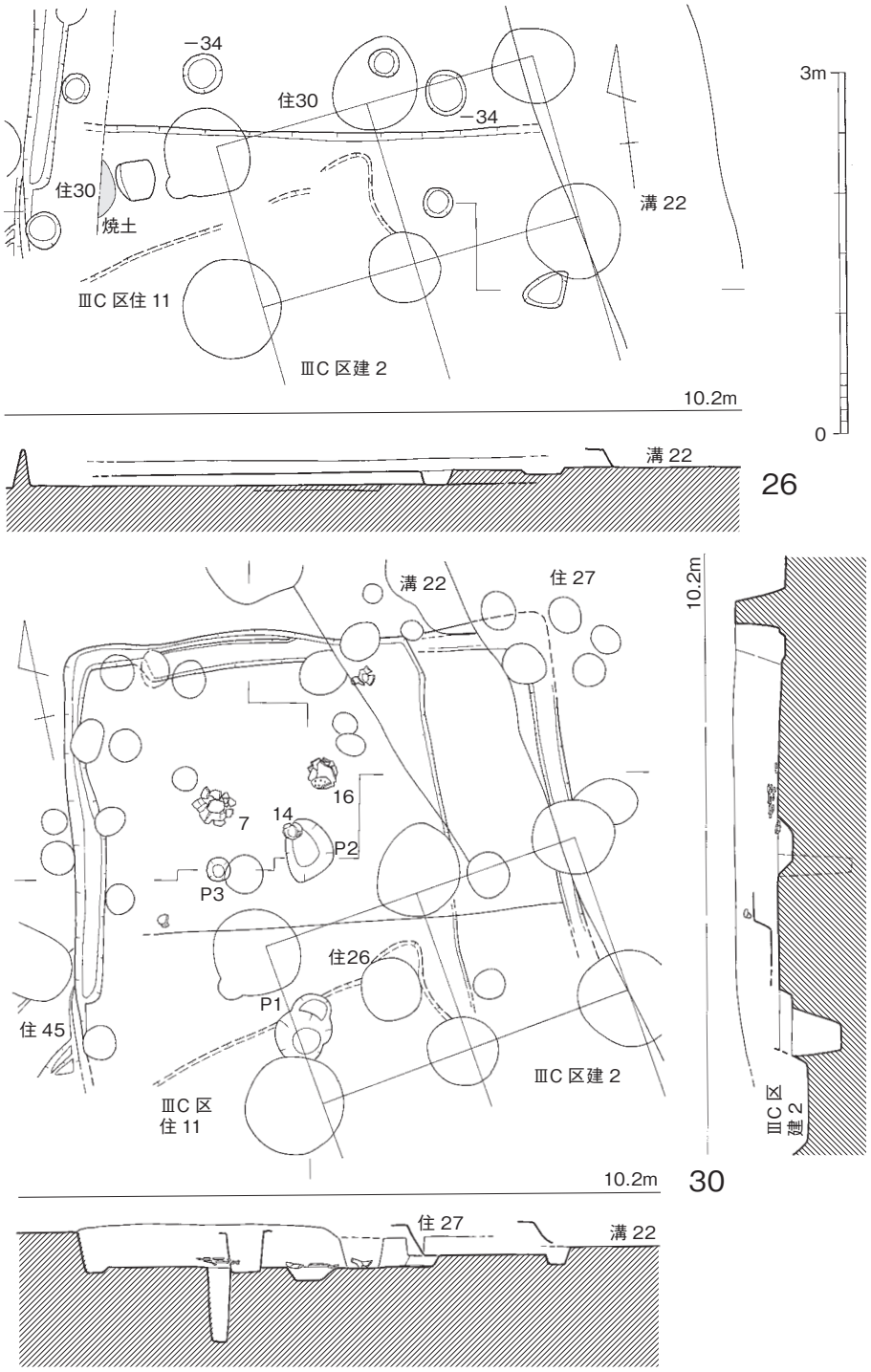
調査区の南西に位置し、Ⅲ -C 区２号掘立柱建物跡、22・23 号溝に切られ、30 号竪穴住居跡を切る。26 号竪穴住居跡とも切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器から 26 号竪穴住居跡を切ると考えられる。規模は東西 5.8 ｍ×南北 4.05 ｍ、深さは竪穴部で最大 0.37 ｍの東西に長い長方形住居跡である。住居南西隅は複数のピットが切り合うことから、住居壁を検出できなかった。

住居東西には、高さ 12㎝前後のベッド状遺構を付設し、竪穴部南壁中央には径 0.7 ｍ程度、深さ 0.35 ｍの暗灰黄褐色粘質土が埋土の屋内土坑を検出した。竪穴部床面直上近く及びベッド状遺構床面近くには、住居柱材の一部と思われる炭化材が多く残る。竪穴部床面で検出したピットはＰ１のみで、深さと位置から主柱穴となるが、対は中世のピットと重複している可能性があり、そうすると２本柱の住居跡となるか。住居周囲には住居跡外ピット列が存在し、当住居の補助柱であった可能性がある。竪穴部床面直上で小型土師器直口鉢（５）が出土した。住居埋土は上層が暗灰褐色粘質土、下層が灰茶褐色粘質土に炭が多く混じる。

竪穴部北側で、ちょうど竪穴部幅に収まるように、東西 3.16 ｍ×南北 1.8 ｍ、住居床面からの深さが最大 0.93 ｍの大型方形土坑を確認した。ほぼ水平となる土坑床面から 20㎝ほど浮いた状態で、いずれも厚さが１～２㎝と非常に薄い住居柱材の一部と考えられる炭化材が東西と南北方向で２材、また径５㎝程度の炭化した木杭などが出土した。この南北方向の柱材が竪穴部床面から大型土坑床面にむけて倒れ掛かるように傾斜していること、土坑埋土が住居埋土と同じ灰褐色粘質土を基調とすること、大型土坑幅と竪穴部幅が同じであることから、当住居に伴う大型土坑であると判断した。この東西及び南北方向炭化材は、樹種同定により、東西方向の材がコナラ属アカガシ亜属、南北方向の材がヒノキ科のもので、いずれも焼き膨れの著しい軟質の消し炭状態であることから、

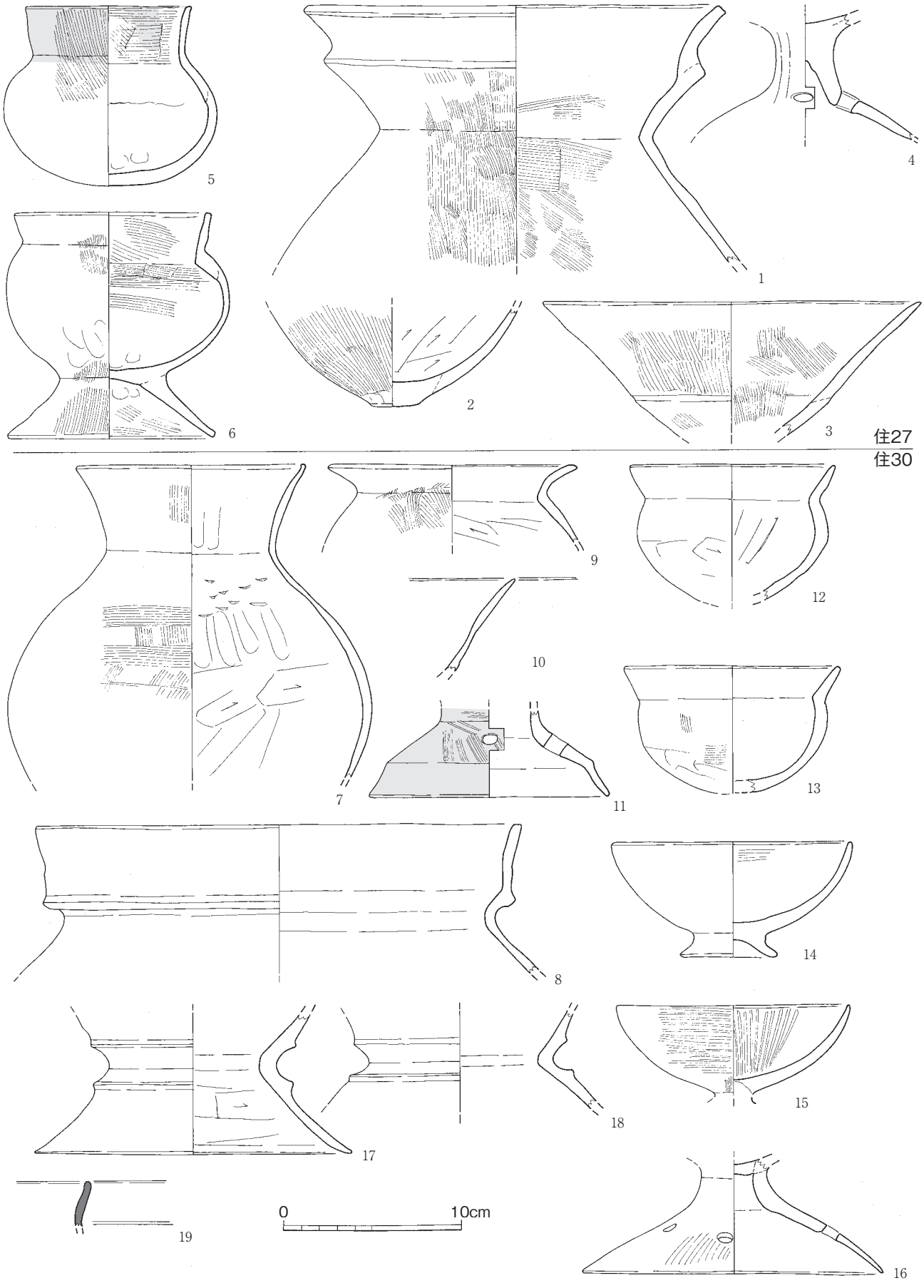


第 25 図　Ⅲ -AB 区 27 号竪穴住居跡・出土状況実測図（1 /60、1 /30）



第 26 図　Ⅲ -AB 区 26・30 号竪穴住居跡実測図（1 /60）

燃焼した後に埋まったものと想定されている（Ⅳ章 1 参照、pp.228 ～ 230）。この土坑断面の破線は、その破線より上が灰褐色粘質土に橙褐色粘質土ブロックと焼土及び炭が多く混じる土、破線より下が地山である橙褐色粘質土に炭のみ混じるという埋土との境を示したものである。この堆積状況と完形の脚付鉢（6）及び炭化材の出土状況から、まずこの方形土坑床面上で再利用しなかった住居の小部材を燃やした痕跡が最下層である地山に炭のみ混じる層であると考えられる。その上にある東西・南北方向の炭化材は土圧で変形するものの部材の形状を保っていること、また南北方向の炭化材は土坑南壁にもたれかかるような状態であることから、床面部分で厚さ 10㎝程度、土坑南側は南北方向の炭化材の傾斜に合わせたように土が流入し、その後東西･南北方向の炭化材を燃やし、



第 27 図　Ⅲ -AB 区 27・30 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

住居床面レベルまで短期間で埋め戻したと想定される。なお、この土坑の機能は不明であるため、類例があればご教示いただきたい。

出土遺物（図版 49、第 27 図１～６）

１は口縁部が「く」の字状に屈曲する在地系二重口縁壺である。胴部内外面は細かいハケメ後一部ナデを施す。口縁部外面は黒化する。胎土は精良で、灰黄色を呈する。胎土から当遺跡産のものでなく、搬入品の可能性がある。２は小さな平底の甕底部。３・４は在地系高坏。３はナデによりわずかに屈曲部を作り出したもの。４は生乾き状態で４ヶ所穿孔を施す。脚柱部外面はナデによる稜が認められる。５は完形の小型土師器直口鉢で、口径 9.2cm、器高 10cmを測る。底部には黒斑あり。口縁部外面及び内面にはベンガラが付着することから、ベンガラの容器として利用されていたものと想定される（図版 49、Ⅳ章８に分析、p251）。完形である６は直口鉢に「ハ」の字状に開く脚部を付けた形の脚付鉢で、口径 10.9cm、底径 11.6cm、器高 12.5cmを測る。外面は縦ハケメのちナデを施し、外面には黒斑あり。竪穴部埋土から打製石鏃（第 101 図６）が出土しているが、混入品。

出土遺物と住居形態から、古墳時代前期前半に属すると考えられる。（大庭）

30 号竪穴住居跡（図版 15、第 26 図）

調査区の南西端に位置し、26･27 号竪穴住居跡、Ⅲ -C 区２号掘立柱建物跡、22･23 号溝に切られ、45 号竪穴住居跡及びⅢ -C 区 11 号竪穴住居跡を切る。後の削平のため住居南壁は残っていないが、規模は東西 4.2ｍ×南北 3.5ｍ以上、深さ 0.36ｍの方形住居跡である。住居東側には高さ約 10cmのベッド状遺構を付設し、東西北壁の３方向に壁周溝を巡らす。竪穴部床面では３基のピットを検出し、深さからＰ１・３は主柱穴となる可能性があるが、２・４本主柱どちらになるのかは不明である。炉跡も不明である。住居床面直上で土師器脚付鉢（14・16）が、やや浮いた位置で直口壺（７）が出土した。埋土は灰茶褐色粘質土である。

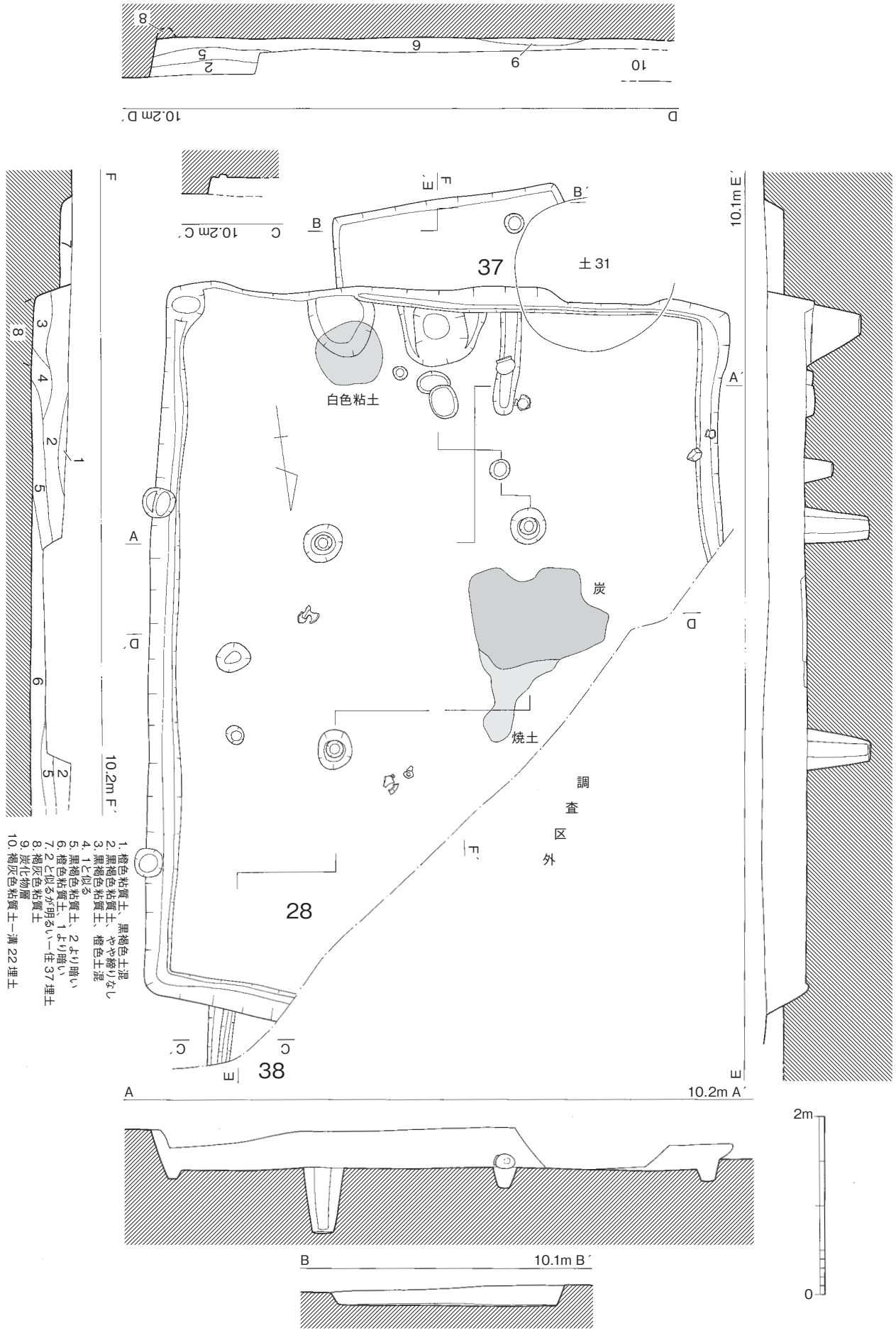
出土遺物（図版 49、第 27 図７～ 19）

７は器壁が薄い畿内系直口壺である。外面肩部は縦ハケメ後横ハケメを施す。内面のヘラケズリは胴部中位まで施し、胴部上位には工具痕が多数認められる。８は山陰系二重口縁壺か鉢口縁部。外面には黒斑あり。９は在地系甕。外面に煤が付着する。10 は布留系高坏口縁部。11 は脚部が逆二重口縁状になる畿内系有段高坏脚部。外面には粗いミガキを行い、スリップを塗布する。生乾き前に４ヶ所穿孔を施す。12・13 は在地系外反口縁鉢で、いずれも底部外面にはヘラケズリを施す。12 の体部内面には工具痕あり。14・15 は畿内系脚付鉢である。14 の鉢内面にはミガキを施す。口径 13.4cm、器高 6.4cmを測る。15 は内外面にミガキを施し、内面は縦ミガキで暗文状になる。精製品。16 は高坏である。穿孔部を上面からみると、正方形に８ヶ所施す特殊な事例である。17・18 は山陰系鼓形器台である。17 は内面下部にケズリを施す。18 の内面はナデを施す。19 は須恵器高坏口縁部で、混入品。１条の凹線を巡らす。

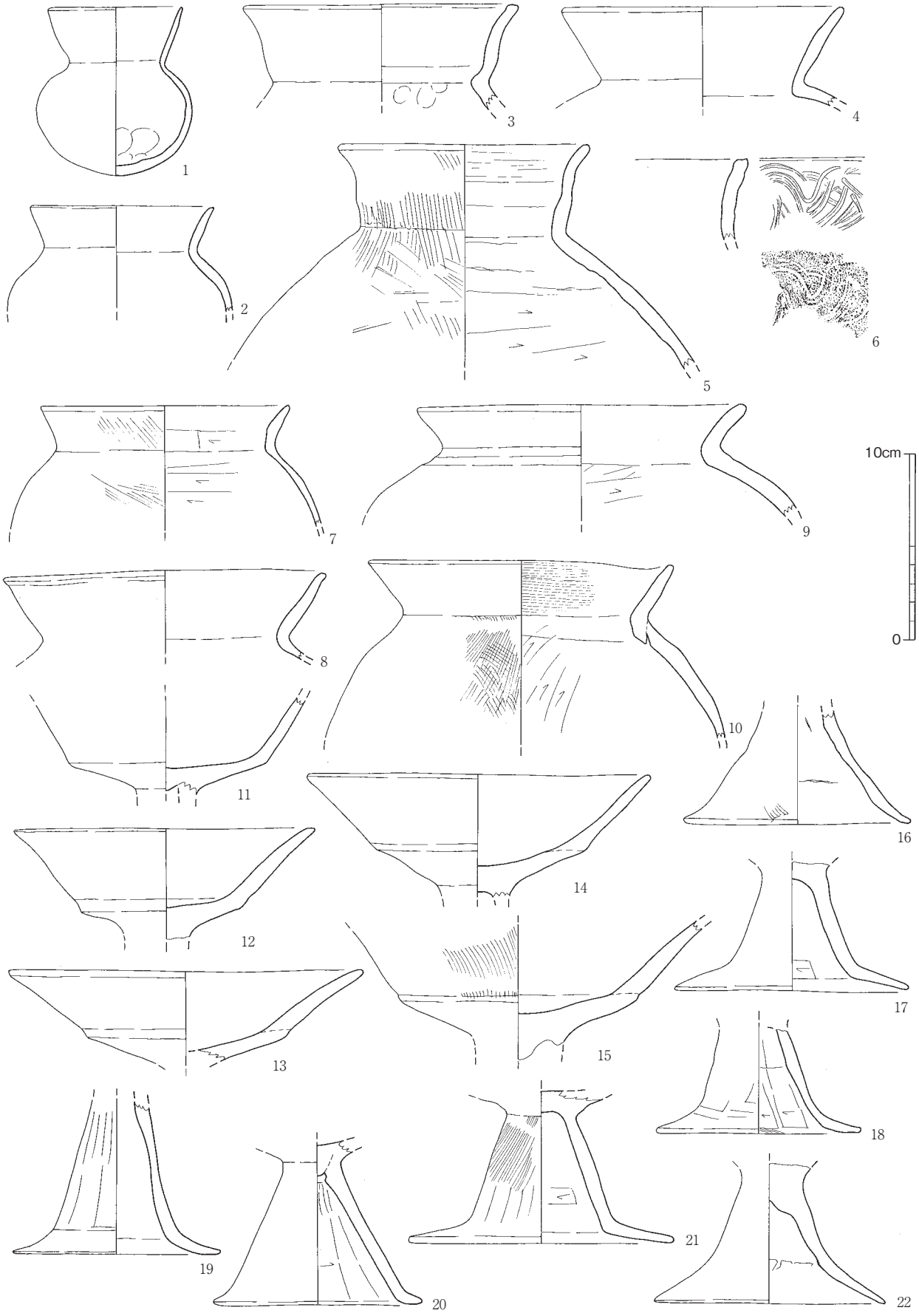
出土遺物と住居形態から、古墳時代前期前半に属すると考えられる。（大庭）

28 号竪穴住居跡（図版 14、第 28 図）

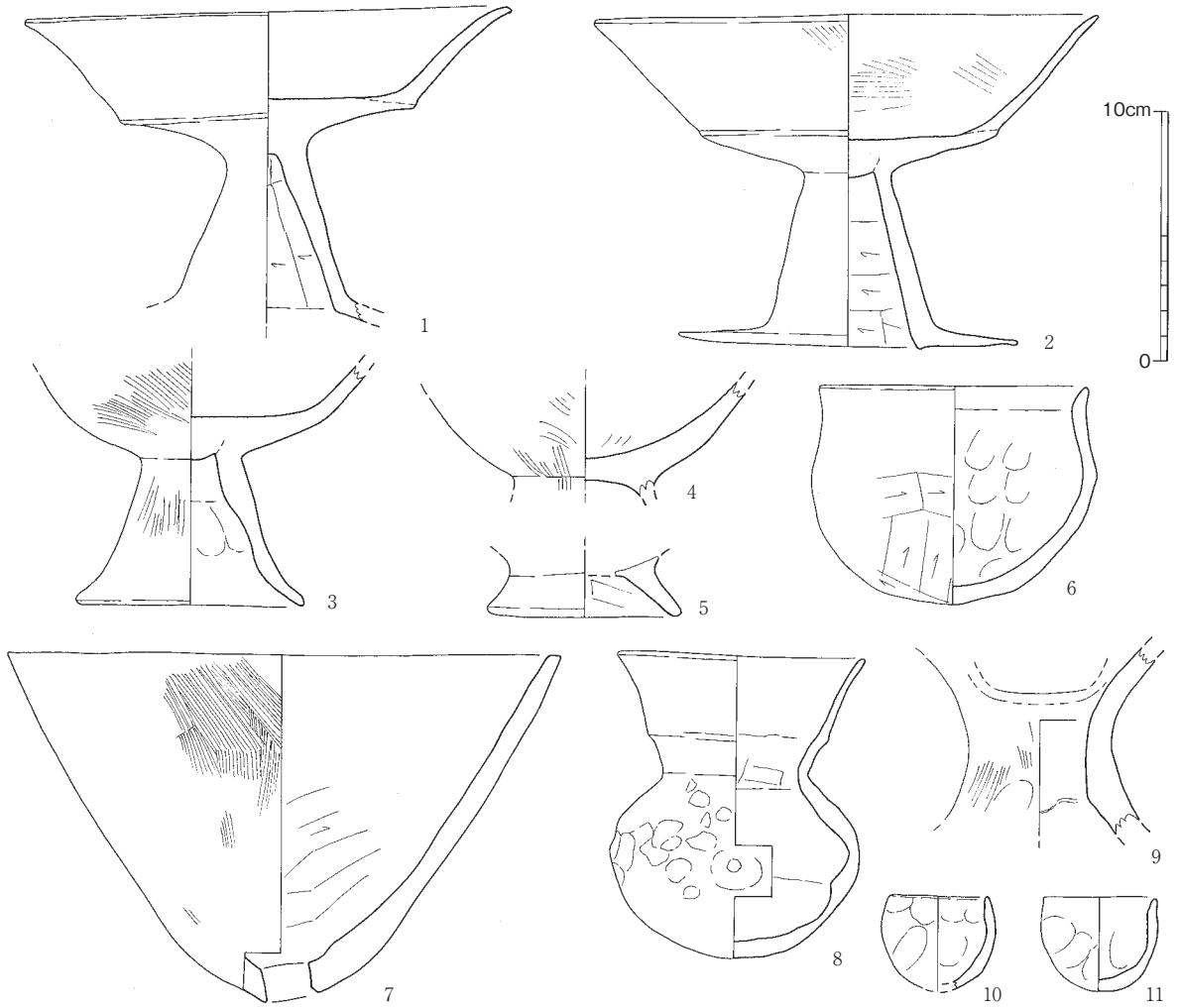
調査区の南西側に位置しており、34・35 号竪穴住居跡、31 号土坑、22 号溝に切られ、37・38 号竪穴住居跡を切る。規模は 8.3ｍ× 6.4m、深さ 0.4m の長方形住居跡である。４分の１ほどが調査



第 28 図　Ⅲ -AB 区 28・37・38 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 29 図　Ⅲ -AB 区 28 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）

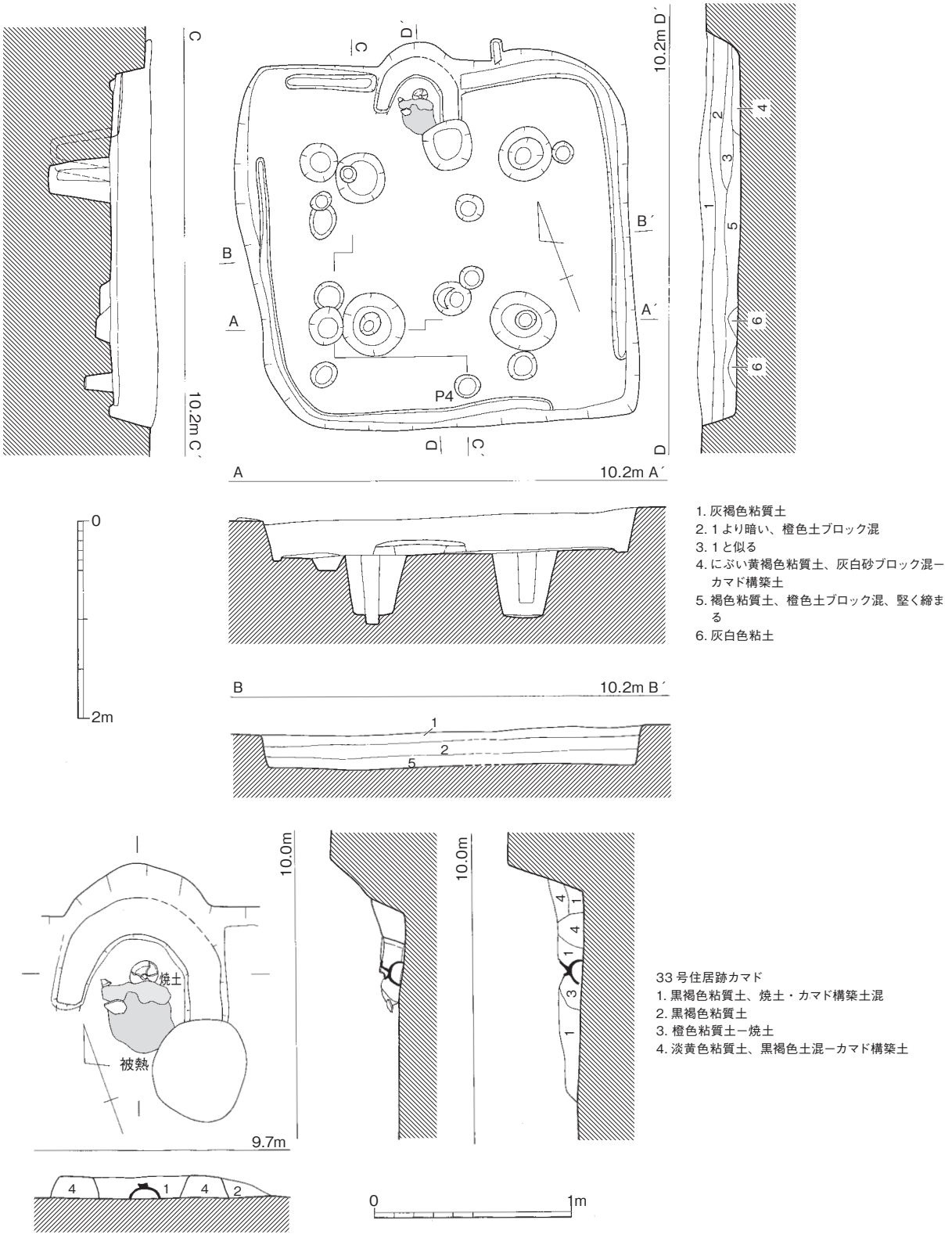


第 30 図　Ⅲ -AB 区 28 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）

区外に延びる。南壁中央部に径１ｍ× 0.6m、深さ 0.6m のピットが検出され、屋内土坑と考えられる。屋内土坑の西側には溝が切られ、北側（室内側）には浅いピットが検出されている。梯子の痕跡の可能性がある。中央やや西寄りでは床面から多量の炭化物が検出された。主柱穴は１本が用地外に延びる４本柱になるものと考えられる。

出土遺物（図版 49、第 29・30 図）

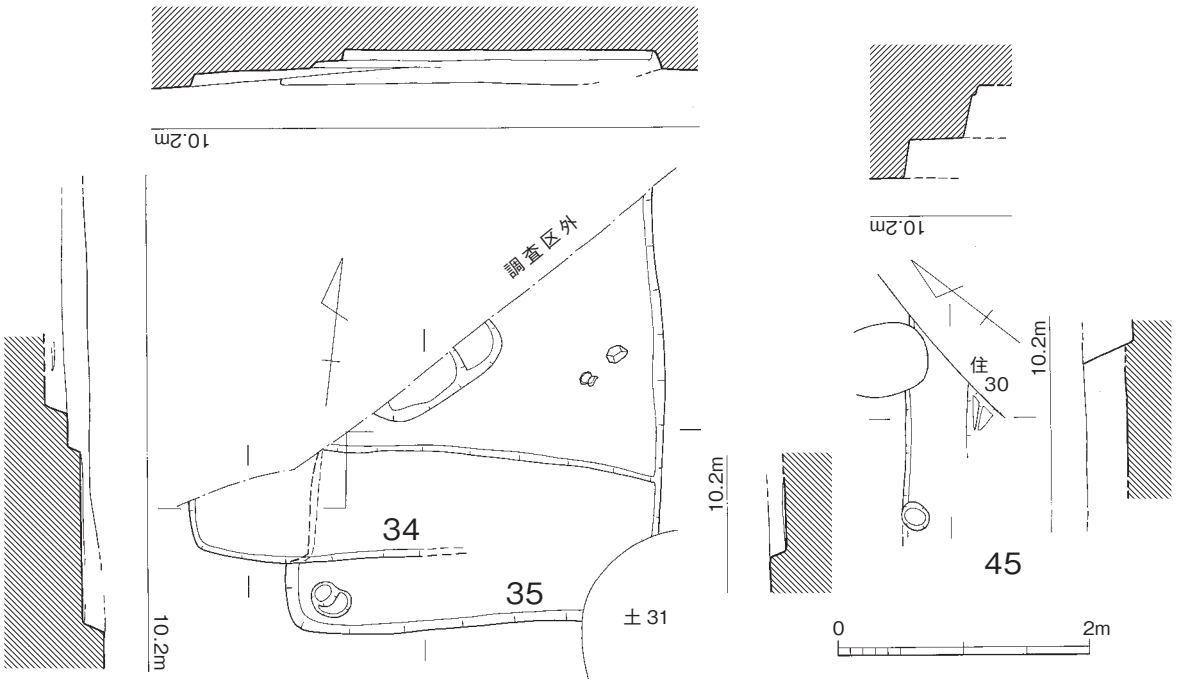
１・２は土師器の小壺である。共に摩滅するが、１は口縁部ヨコナデ、胴部内面ナデが残る。１の外面に黒斑が見られる。３～６は壺である。３は口縁部が緩いＳ字状を呈し、ヨコナデを施す。４はヨコナデを施す。５は口唇部外面ヨコナデ、口縁から胴部外面ハケメ一部工具痕、口縁部内面ハケメ、胴部内面ケズリを施す。６は口縁部のみが遺存し、波状文を施す。混入品か。７～ 10 は甕である。摩滅するが概ね外面ハケメ、内面ケズリを施す。７は外面に黒斑が見られる。11 ～第 30 図３は高坏である。11 ～ 15 は坏部のみが遺存しており、摩滅するが、15 は外面ハケメ、内面ナデが残る。11 は内面に朱塗りが見られる。16 ～ 22 は脚部のみが遺存し、概ね外面ナデ、内面ケズリを施す。16・21 は外面にハケメが見られる。17・18・22 は外面に黒斑が見られる。第 30 図１は脚部内面ケズリ、他はナデを施す。２は坏部内外面一部ハケメ、脚部内面ケズリ、外面ナデを施す。３は坏部が丸い椀形を呈し、外面ハケメ、脚部のみ一部ケズリ、内面ナデを施す。４・５は脚付鉢か。４は外面ハケメ、内面工具痕を施す。５は外面ヨコナデ、内面工具痕を施す。６・７は鉢である。６は口縁部が緩やかに屈曲し、口縁部ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面指頭圧痕を施す。



第 31 図　Ⅲ -AB 区 33 号竪穴住居跡実測図（1/60、1/30）

7は底部に孔を穿ち、外面ハケメ、内面上位ナデ、下位ケズリを施す。8は甑の模倣品か。摩滅するが、口縁部ヨコナデ、胴部内面ナデが残る。胴部中位に穿孔前の印と思われる弧状の沈線が見られる。9は器台である。径が細く、小型品か。混入品と考えられる。10・11はミニチュア土器である。共にユビナデで成形する。

出土遺物は古墳後期のほか、古墳前期のものも見られる。住居形態としては古墳前期に属するとしたほうがよいか。（城門）



第 32 図　Ⅲ -AB 区 34・35・45 号竪穴住居跡実測図（1/60）

37 号竪穴住居跡（第 28 図）

調査区の南西側に位置しており、28 号竪穴住居跡、31 号土坑、22 号溝に切られる。規模は 2.6m × 1.0m 以上で、深さ 0.2m を測る。28 号竪穴住居跡に大きく切られており、構造は不明である。

出土遺物はなく、切り合いから古墳時代前期以前に属するものと考えられる。（城門）

38 号竪穴住居跡（第 28 図）

調査区の南西端に位置し、28 号竪穴住居跡に切られる。そのほとんどが切られるか調査区外に延びており、一辺のみが遺存している。規模は不明で、深さは 0.2m を測る。壁溝が見られるほかは大きく切られており、詳細は不明である。

出土遺物はなく、切り合いから古墳時代前期以前に属するものと考えられる。（城門）

33 号竪穴住居跡（図版 15・16、第 31 図）

調査区の南側に位置し、方形周溝を切る。規模は 4 m × 3.8m、深さ 0.4m の正方形住居跡である。北辺のほぼ中央の位置でカマドが検出された。主柱穴は径 0.5m、深さ 0.7m の 4 本柱で、いずれからも径 0.2m ほどの柱痕が確認された。北辺中央部がやや膨らんでいるように認識されたことから、煙道の存在が示唆されたものの、壁面に被熱痕は認められなかった。

カマド（図版 15、第 31 図）

住居跡の北辺で検出された。右袖 0.6 m、左袖 0.4m が遺存し、袖間は 0.5m を測る。袖間中央部には高坏が天地逆に据えられており、支脚として使用したものと考えられる。高坏の前面には焼土が検出され、その手前の床面は被熱痕跡が認められた。

出土遺物（図版 50、第 33 図 1 ～ 3）

1 は須恵器の蓋である。回転ナデを施し、外面に灰被りが見られる。P 4 出土。2 ・ 3 は高坏で

ある。２は摩滅が著しく、孔が穿たれる。混入品か。３は摩滅しているが、坏部外面強いナデおよび工具痕、脚部内面ケズリが残る。共にカマド周辺出土である。

切り合いと出土遺物から、古墳時代後期後半に属するものと考えられる。（城門）

34 号竪穴住居跡（第 32 図）

調査区の南西端に位置し、31 号土坑に切られ、28・35 号竪穴住居跡を切る。規模は 2.8m 以上× 2.8m、深さ 0.2m の方形住居跡である。半分以上が調査区外に延びる。南辺から 0.8m ほどの位置で、0.1m の段が認められ、ベッド状遺構になるものと考えられる。調査区境には径 1.2m、深さ 0.2m のピットが検出され、位置的に炉跡の可能性があるが、焼土等は確認できなかった。その他に検出されたピットはなく、主柱穴等は不明である。

土師器片が出土しているが、図化に耐えうる資料はない。

切り合いと出土土器小片から、古墳時代後期に属するものと考えられる。（城門）

35 号竪穴住居跡（図版 16、第 32 図）

調査区の南西端に位置し、34 号竪穴住居跡、31 号土坑に切られ、28 号竪穴住居跡、28 号溝を切る。規模は 2.5m 以上× 1.6m 以上、深さ 0.1m の方形住居跡である。大部分を他の遺構ならびに調査区外に切られており、主柱穴等詳細は不明である。

出土遺物（第 33 図４・５）

４は須恵器の壺か。外面タタキ、内面ナデを施す。５は土師器の甑である。外面粗いハケメ、内面ケズリを施す。２つの長楕円形孔になるもので中央部に木葉文と考えられるスタンプが付される。

切り合いと出土遺物から、古墳時代中期に属するものと考えられる。（城門）

45 号竪穴住居跡（第 32 図）

調査区の南西端に位置し、30 号竪穴住居跡に切られる。大部分を他の遺構に切られ、規模は不明、深さ 0.3m を測る。既報告のⅢ -C 区に延びるものと考えられるが、確認できなかった。端部分が 0.4m 深くなっており、ピットと考えられる。

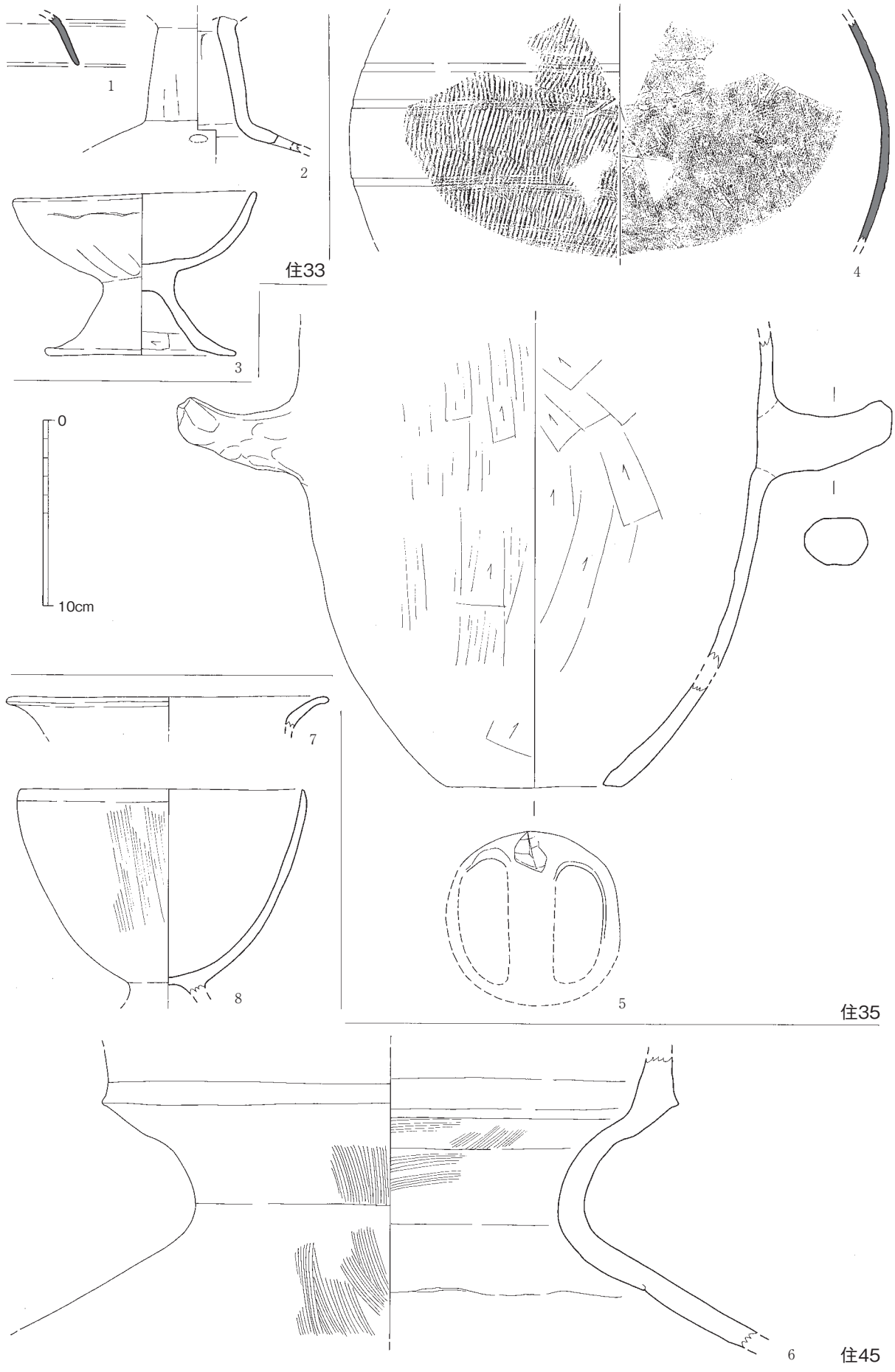
出土遺物（第 33 図６～８）

６は壺である。摩滅するが、内外面共にハケメが残る。７は甕か。摩滅のため調整は不明である。８は脚付鉢である。摩滅が著しいが、外面にハケメが残る。

切り合いと出土遺物から、弥生時代終末期に属するものと考えられる。（城門）

39 号竪穴住居跡（図版 16・17、第 34 図）

調査区の中央部に位置し、住居跡の南東部分を検出した。北側は調査区外となる。41 号竪穴住居跡、19・20 号土坑、１号溝に切られる。規模は 4.2 ｍ以上× 2.7 ｍ以上を測るが、中央土坑の位置から復元すると方形に近いプランであったと思われる。深さは 0.15 ｍである。中央部に炉跡と考えられる焼土がある。また、南壁際の中央に 0.9 ｍ× 0.65 ｍ、深さ 0.4 ｍの屋内土坑がある。上部は蓋を設置するためであろうか、浅い段掘りとなっている。埋土は黒茶色土で自然堆積を示す状況であった。この土坑北側の南北の主軸上（南壁から 0.6 ｍの距離）で径 9cm、検出面からの深さ



第 33 図　Ⅲ -AB 区 33・35・45 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

15cm の杭状の痕跡を検出し、出入口の構造材の一部であることも考えられる。また、壁溝が伴い、壁溝の底面には概ね 25cm 間隔で、径３cm ほどの杭痕跡を確認した。床面でピットを確認したが明確に主柱穴とできるものはない。

出土遺物（第 35 図１・２）

１は甕の頸部の小片、２は底部である。

出土遺物から、古墳時代中期に属するものと考えられる。（吉村）

40 号竪穴住居跡（図版 17・18、第 34 図）

調査区の南東部に位置し、１・２号溝、14・15・18 号土坑、２号墓に切られ、42 号竪穴住居跡を切る。規模は 7.1 m× 6.6 m、深さ 0.25 mの大型の長方形住居跡である。幅 0.15m ほどの壁溝がまわる。主柱穴は径 30cm ほどを測るが（P ２～４）、P １は小さい。住居跡の埋土は茶褐色土。40 号竪穴住居跡は後述するように 42 号竪穴住居跡の建て替えと考えられる。

出土遺物（図版 50、第 35・36 図３～ 31）

３～ 17 は土師器の壺である。３～５は球形の体部に直線的な口縁がつく。いずれも摩滅が著しいが胴部内面はケズリである。３は頸部がすぼまり、外傾する短い口縁がつく。６は二重口縁壺である。器壁が分厚く、また、屈曲部に明確な稜がみられず、だれた感じを受ける。７～ 16 は小形の壺である。7 は長胴の体部に外反する短い口縁がつくもの。８は肩部の器壁が異常に厚みをもつ。調整がわかるものでは 15 の内面がヘラケズリ、17 の外面がハケメである。口径 6.4 ～ 8.3cm。18 は焼成前底部穿孔のある甕である。19 は口縁部が外反する。内面の調整はケズリ。20 ～ 31 は高坏。杯部はいずれも上半が緩く外反する。調整は不明なものが多いが、脚柱部内面のケズリが横位のもの（27・29）と縦位のもの（26・31）がみられる。口径 18.0 ～ 18.9cm。32 は鉢である。短い砲弾形を呈し、口縁部が丸く収める。底部は凸レンズ状を呈し、平底に近い。調整は外面がハケメ、内面はナデを施す。

出土遺物から、古墳時代中期前半に属するものと考えられる。（吉村）

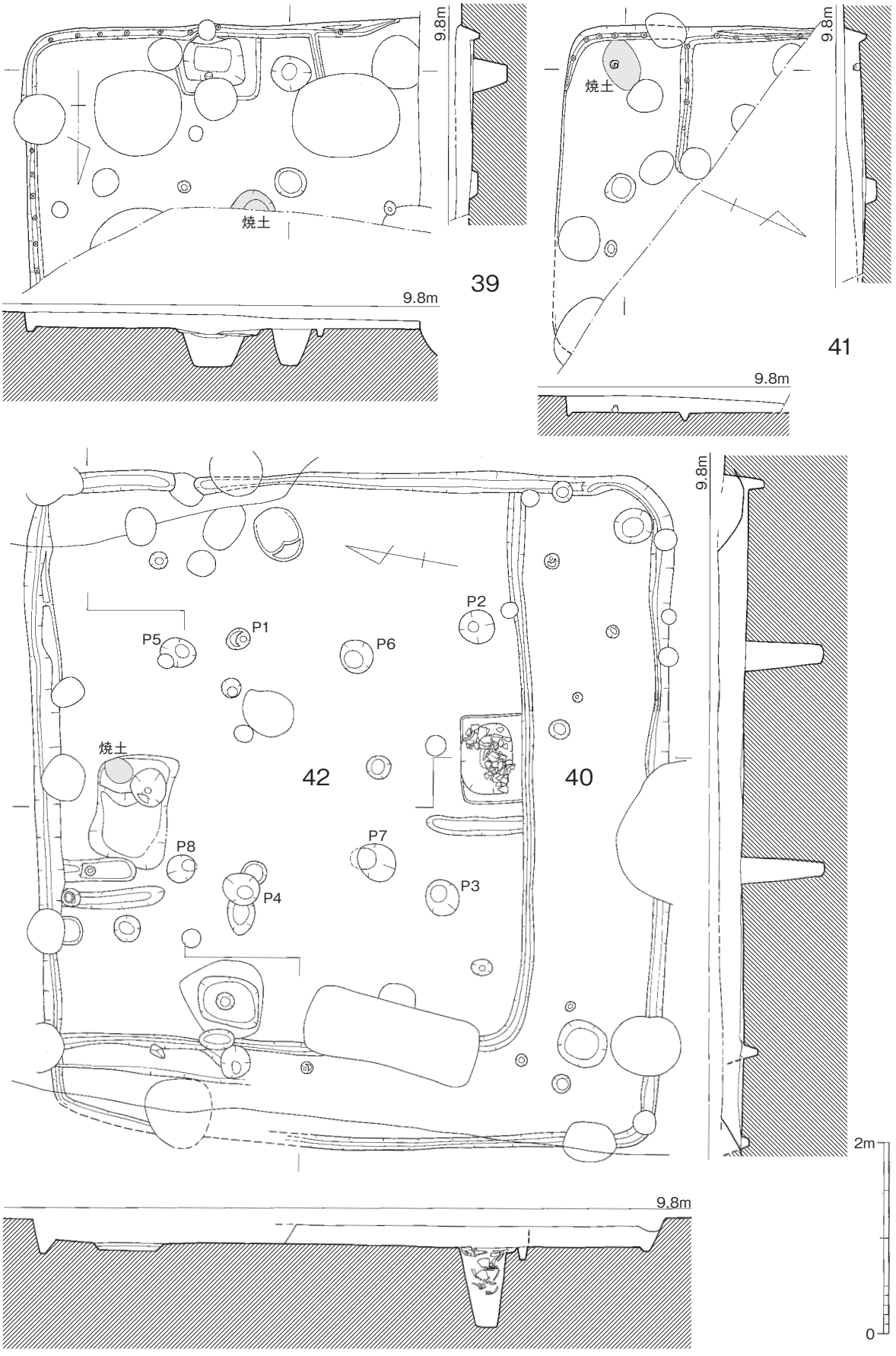
41 号竪穴住居跡（図版 18、第 34 図）

調査区の中央部に位置し、住居跡の南西隅部を検出した。北側は調査区外に延びる。39 号竪穴住居跡を切り、１号溝に切られる。規模は 3.2 m以上× 2.6 m以上、深さ 0.15 mである。南西隅部床面で 50cm × 35cm の焼土の広がりを確認した。また、住居跡の西辺壁際とそれに直交する溝の底面で、39 号竪穴住居跡と同様の、概ね 25cm 間隔の杭跡を確認している。杭痕跡の径は３cm ほどである。

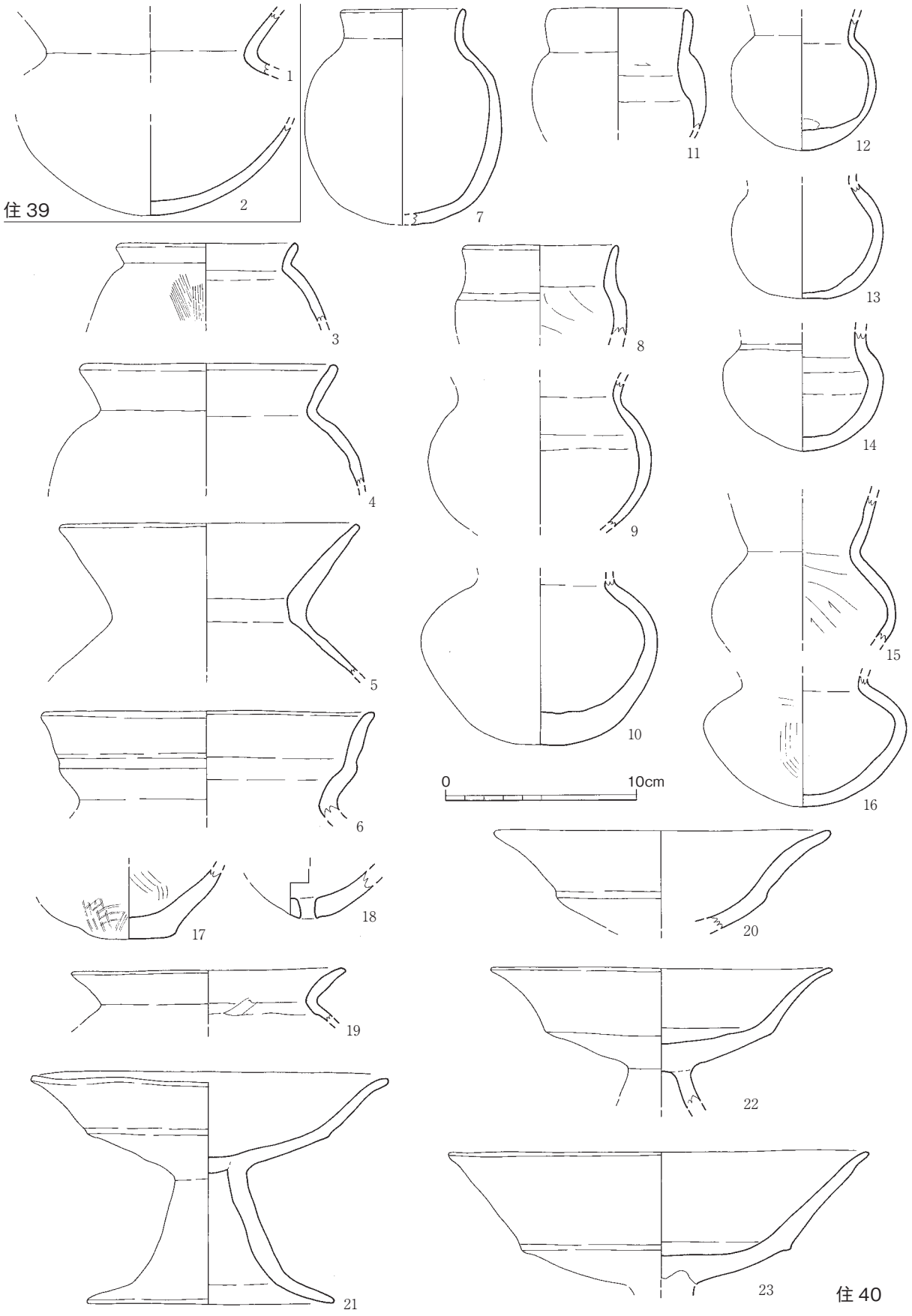
出土遺物（図版 50、第 36 図 33 ～ 36）

33 は小型の丸底壺である。調整はナデ。器壁が厚い。口径 6.6cm、器高 8.0cm。34 は小形の直口壺である。35 は口縁部が短く外反し、球形の体部を持つ。調整は外面がハケメ、内面はケズリ。36 は高坏である。

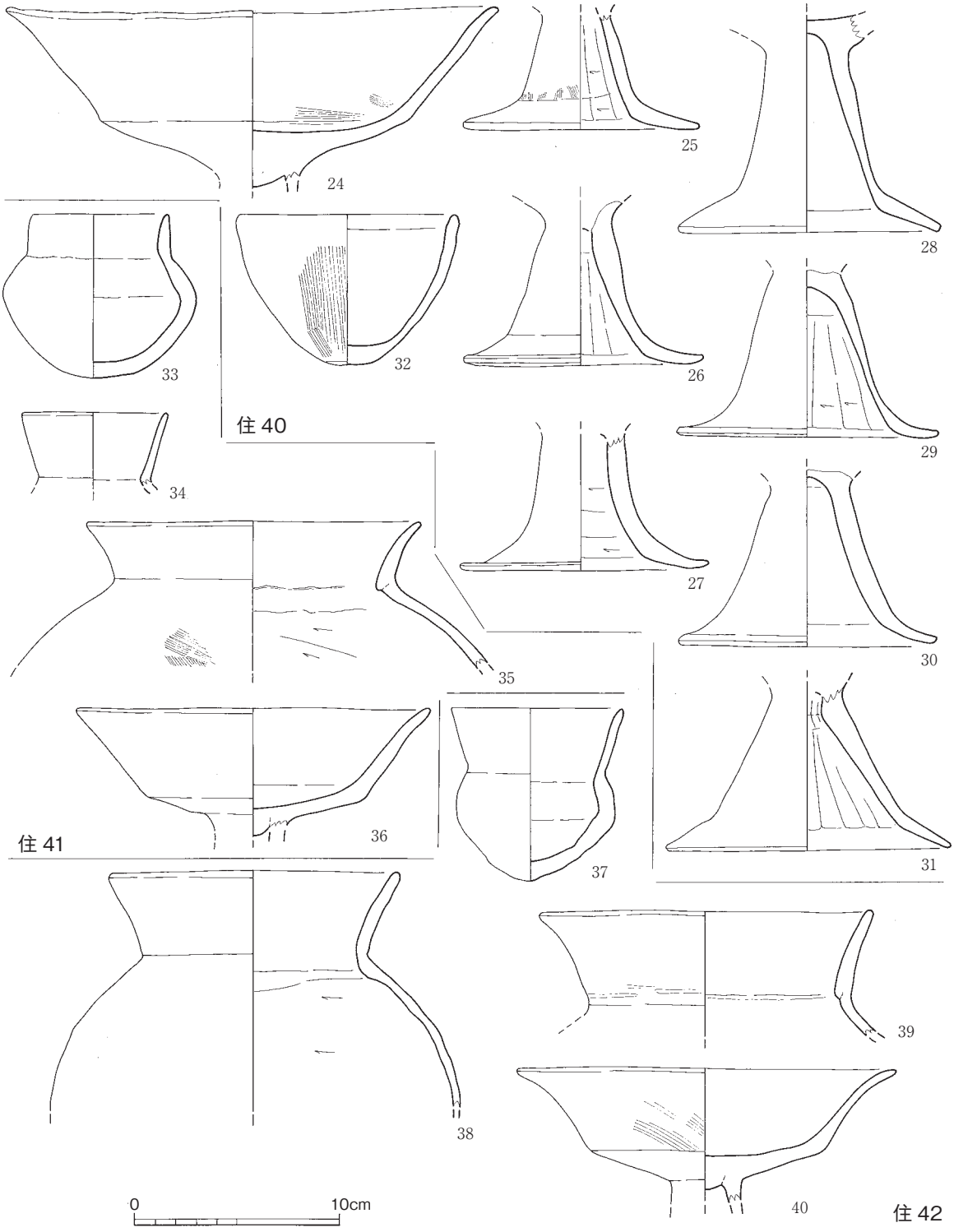
出土遺物から、古墳時代中期前半に属するものと考えられる。（吉村）



第 34 図　Ⅲ -AB 区 39・40 ～ 42 号竪穴住居跡実測図（1/60）



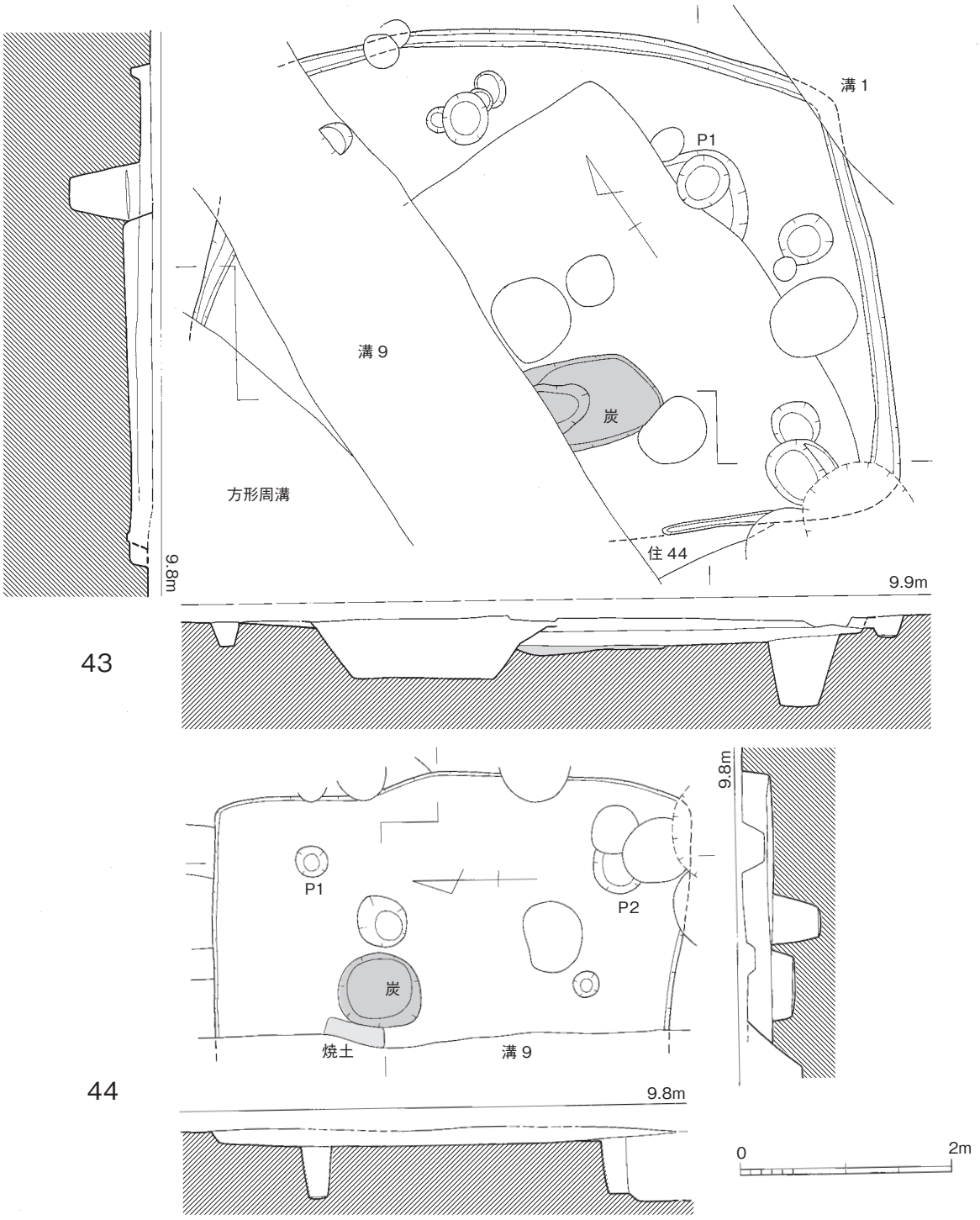
第 35 図　Ⅲ -AB 区 39・40 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 36 図　Ⅲ -AB 区 40 ～ 42 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

42 号竪穴住居跡（図版 17・19、第 34 図）

調査区の南東部に位置し、40 号竪穴住居跡、１・２号溝、14 号土坑に切られる。40 号竪穴住居跡と北壁・東壁が重複し、床面レベルもほぼ同じである。北辺中央で焼土を検出し、焼土周辺には炭化物が薄く残っていた。その対面の南辺中央部の屋内土坑は 0.9 m × 0.6 m、深さ 0.85 mで、上部は段掘りとなる。土坑内からの上層からは甕が潰れた状態で出土した。この屋内土坑の西側の辺に沿って長さ 1.0 m、幅 0.15 mの溝が延びるが、対面の北側にも同様の溝が存在する。また、壁溝を伴うが、その位置は北辺･東辺で 40 号竪穴住居跡の壁溝と重複し、42 号竪穴住居跡の壁溝を切っ



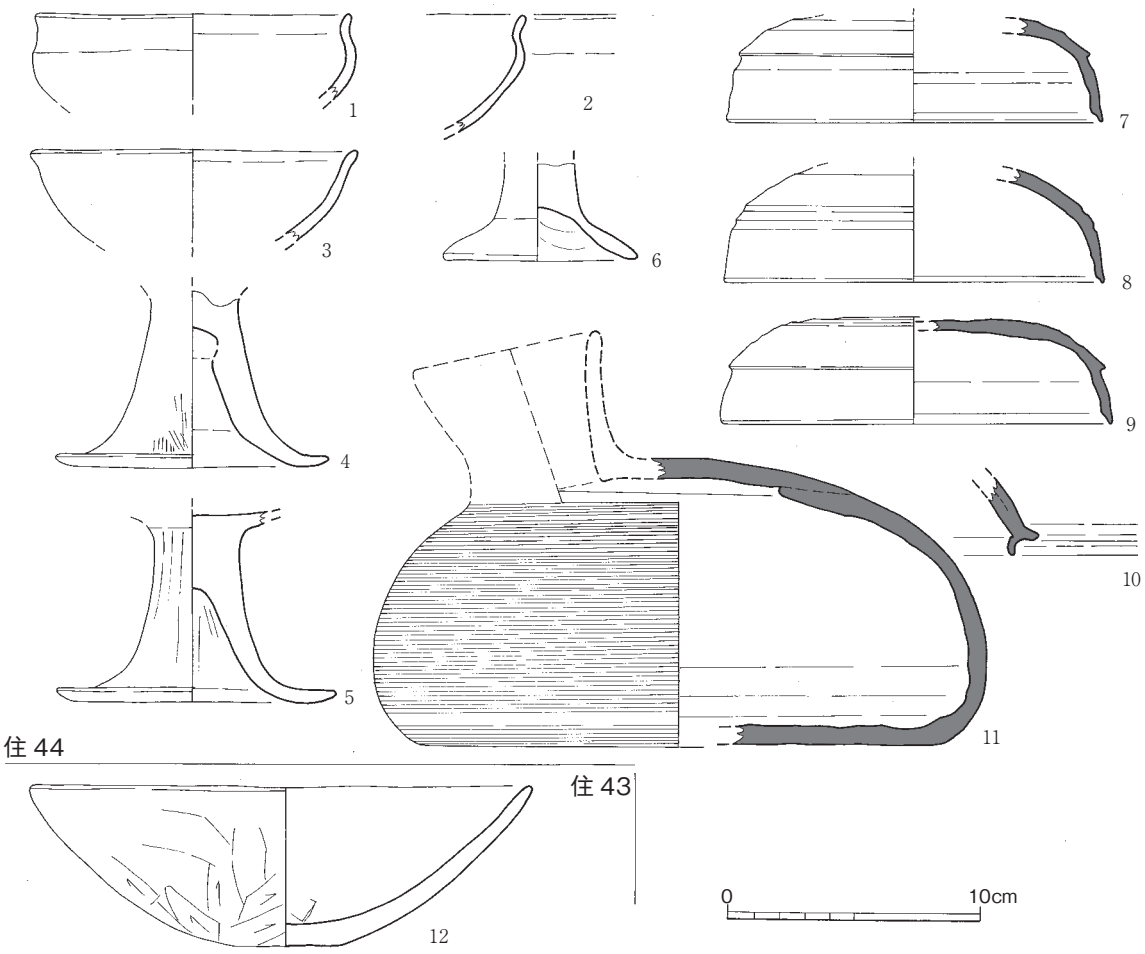
第 37 図　Ⅲ -AB 区 43・44 号竪穴住居跡実測図（1/60）

ている。主柱穴は径 30cm ほどで 4 本柱（P 5 ～ 8）である。埋土は茶褐色土。

出土遺物（図版 50、第 36 図 37 ～ 40）

37 は小型の丸底壺である。口径 14.2cm、器高 8.3cm を測る。底部は尖底気味で、体部の器壁が厚い。38・39 は直口壺である。摩滅が著しいが 38 の内面の調整はヘラケズリ。40 は高坏である。口縁部が大きく外反する。調整は外面がハケメ。いずれも屋内土坑から出土した。

出土遺物から、古墳時代中期前半に属するものと考えられる（吉村）



第 38 図　Ⅲ -AB 区 43・44 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

43 号竪穴住居跡（図版 19、第 37 図）

調査区の南半部に位置し、44 号竪穴住居跡、１・９・32・34 号溝に切られる。規模は 4.7 m× 5.3 m以上、深さ 0.25 mを測る長方形プランであるが、北辺がやや膨らむ。西側は１号溝によって削平され西壁溝の一部を確認したのみである。中央部南寄りに長さ 1.1 m以上、幅 0.85 m、深さ５cmほどの炉跡を確認した。炉跡の埋土は炭層である。主柱穴の可能性がある径 50cm ほどのピットを床面で確認しているが（P １）、対応する柱穴は検出できなかった。

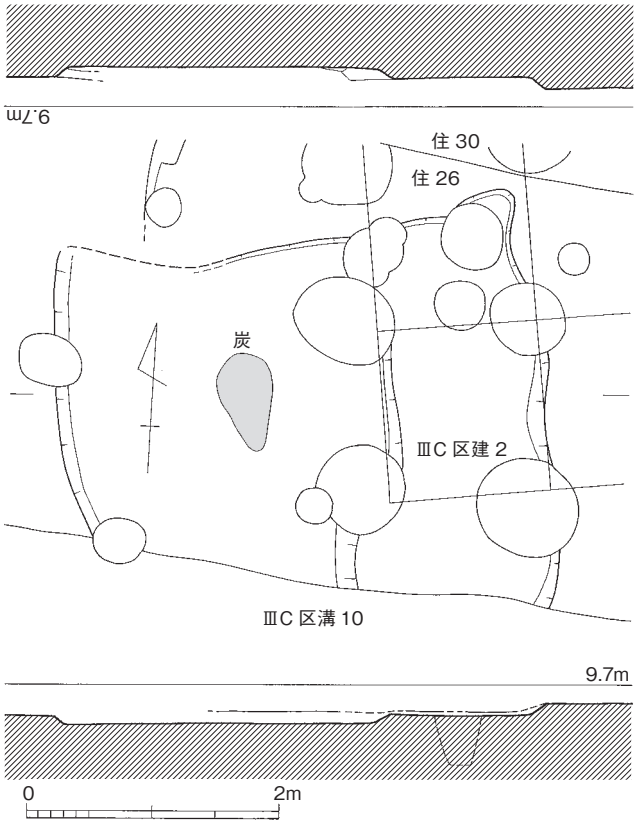
出土遺物（第 38 図 12）

12 は鉢である。底部は平底で調整は外面がケズリ、内面は摩滅が著しい。埋土から有孔円盤（第 101 図 10）が出土している。

出土遺物は土師器小片が出土しているものの時期の特定ができない。切り合い関係や周辺の遺構の状況から古墳時代中期前半頃と考えられようか。（吉村）

44 号竪穴住居跡（図版 19、第 37 図）

調査区の中央部に位置し、９・32・34 号溝に切られ、43 号竪穴住居跡を切る。規模は 4.5 m× 2.2 m以上、深さ 0.25 mを測る長方形または方形の住居である。中央部北寄りで焼土と、それに接して径 0.7 m、深さ 0.2 mの土坑を検出した。土坑の埋土には炭と焼土が含まれている。主柱穴は東辺際で２つ確認した（P １・２）。共に壁に寄っていることが気になるが４本柱の住居跡と考えて



第 39 図　Ⅲ -C 区 11 号竪穴住居跡実測図（1 /60）

よいものと思われる。当初、切り合いを認識できず、43 号竪穴住居跡埋土として掘削し遺物を取り上げたが、44 号竪穴住居跡出土分として報告する。

出土遺物（第 38 図 1 ～ 11）

1 ～ 3 は土師器の椀である。1 ・ 2 は膨らみをもった体部に S 字状に外反する口縁がつく。いずれも摩滅が著しいため調整は不明。3 は平底気味の底部から大きく開く形状である。4 ・ 5 は高坏の脚部である。6 は器台か。7 ～ 9 は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部の境が稜をなし、口縁端部内側に段をもつが 8 は沈線状になる。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。9 の天井部内面はナデ調整を施す。10 は高坏の蓋である。自然釉がかかる。11 は須恵器の平瓶である。口縁部を欠失する。調整は外面がカキ目、内面はヨコナデで、口縁部との接合部付近はナデ、底部内面はナデを施す。

出土遺物から、古墳時代後期前半に属するものと考えられる。（吉村）

Ⅲ - C区　11 号竪穴住居跡（第 39 図）

調査区の南西端に位置し、26 ・ 30 号竪穴住居跡、Ⅲ - C 区 2 号掘立柱建物跡、Ⅲ -C 区 10 号溝に切られる。住居南側は『Ⅲ区 I 』で報告済である。規模は東西 3.9 m × 南北 3 m以上、深さ 0.1 m の方形住居跡である。住居東側には高さ 7 ㎝前後のベッド状遺構を付設し、竪穴部中央には炭が広がるが、床面では住居に伴うピットは検出できなかった。埋土は明褐色粘質土である。

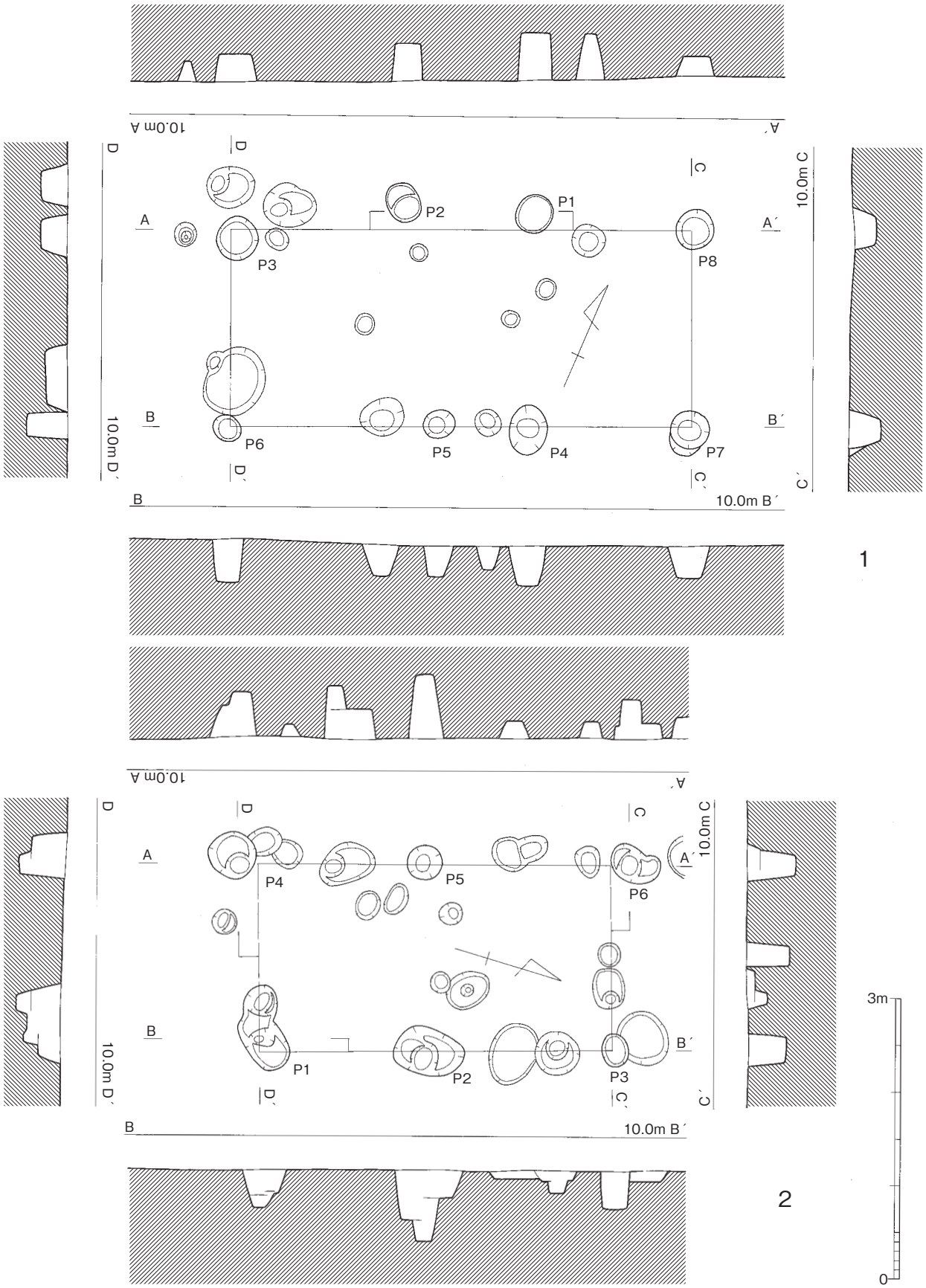
今回の住居北側の調査で図示できる土器はないが、南側の調査で出土した土器から、古墳時代後期に属すると考えられる。（大庭）

（2）掘立柱建物跡

1 号掘立柱建物跡（図版 20、第 40 図）

調査区の北中央に位置する。規模は 1 × 3 間の側柱建物で、柱間の心々距離で桁行 4.98 m × 梁行 2.1 mである。当初は建物跡となることに気付かず、ピットとして掘削したため、柱痕跡はいずれも確認できていない。径 0.4 m ～ 0.5 m、深さ 0.45 m前後の円形のピットで構成されるが、北側のピット列はやや北側にずれ、柱筋が合わない。方位は北より 23° 西に傾く。柱穴埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物で図示できるものはないが、埋土及び主軸から中世に属すると考えられる。（大庭）



第 40 図　Ⅲ -AB 区 1 ・ 2 号掘立柱建物跡実測図（1 /60）

２号掘立柱建物跡（図版 21、第 40 図）

調査区の北中央のやや北西寄りに位置する。規模は１×２間の側柱建物で、柱間の心々距離で桁行 3.78 m×梁行 1.98 mである。当初は建物跡になることに気付かなかったため、平面で柱痕跡は捉えていないが、柱穴４基で柱痕跡と考えられる一段深い掘り込みが認められる。柱筋があまり通らない、径 0.25 m～ 0.5 m、深さ 0.4 m～ 0.75 m前後の円形のピットで構成され、桁行の中央ピットが東西いずれも深くなる。方位は北より 17.5° 西に傾く。柱穴埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（第 43 図１）

図示できたものは、Ｐ４出土の須恵器鉢口縁部のみである。

出土遺物及び主軸、埋土から中世に属すると考えられる。（大庭）

３号掘立柱建物跡（図版 21、第 41 図）

調査区の北東に位置する。規模は２×３間の総柱建物で、柱間の心々距離で桁行 2.1 m×梁行 1.42 mである。径 0.25 m～ 0.3 m、深さ 0.05 m～ 0.4 m前後と深さにやや幅のある円形のピットで構成され、全体的に浅いピットのためか、柱痕跡と考えられる一段深い掘り込みを持つピットは２基のみである。方位は北より 20° 西に傾く。柱穴埋土は明灰褐色粘質土である。

また３号建物跡南側に主軸線が同一であり、かつ埋土が同じ明灰褐色粘質土となる北から３基、２基、２基の計３列のピット列を検出した。

この場所の小字名が宮ノ本であること、また調査中に地元の方よりこの場所にかつてお宮が存在したと聞いたことから、３号建物跡はお宮関連建物の可能性があり、そうするとこのピット列は鳥居などのお宮関連遺構となる可能性がある。

出土遺物はないが、埋土から中世よりも新しい近世以降に属する可能性が高い。（大庭）

４号掘立柱建物跡（図版 20・21、第 41 図）

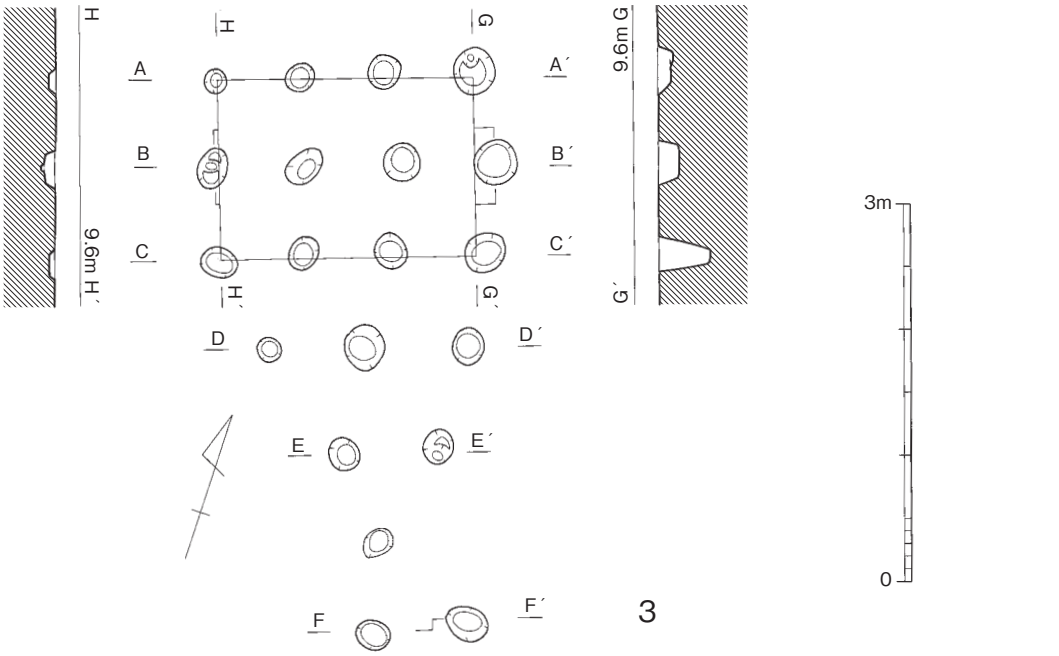
調査区の中央やや東寄りに位置し、２号溝に切られる。規模は１×２間の側柱建物で、柱間の心々距離で桁行 4.42 m×梁行 2.4 mである。当初はピットとして掘削したため、柱痕跡はいずれも確認できていない。径 0.3 m～ 0.4 m、深さ 0.45 m～ 0.6 m前後のやや深さのある円形のピットで構成される。方位は北より 15.5° 西に傾く。柱穴埋土は灰褐色粘質土である。

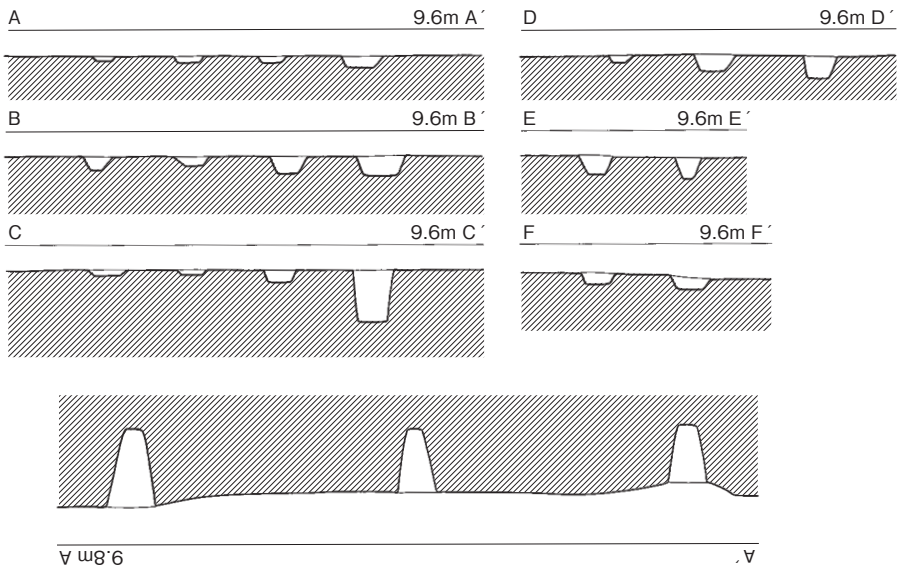
出土遺物は図示できないが、切り合い関係及び埋土から中世に属すると考えられる。（大庭）

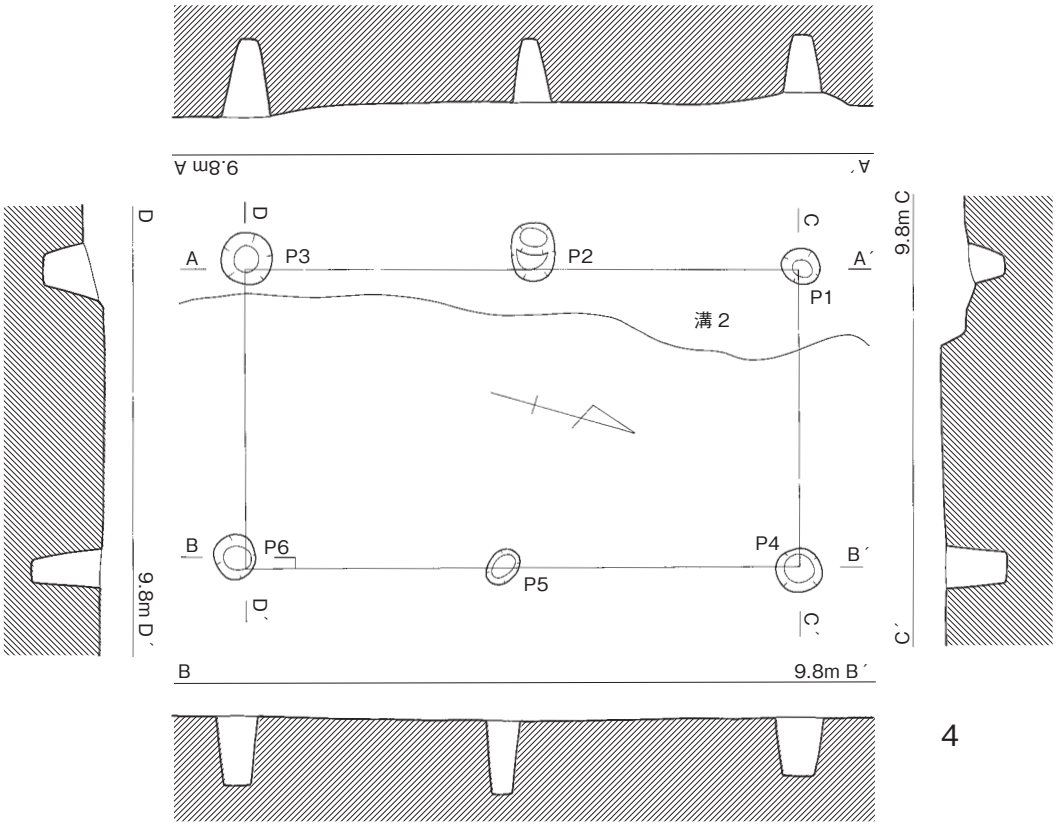
５号掘立柱建物跡（図版 20・22、第 42 図）

調査区のほぼ中央に位置し、１・５号溝に切られ、５・10 号竪穴住居跡を切る。規模は１×２間の側柱建物で、柱間の心々距離で桁行 5.2 m×梁行 2.4 mである。当初は建物跡となることに気付かず、ピットとして掘削したため、柱痕跡はいずれも確認できていない。径 0.3 m～ 0.4 m、深さ 0.4 m～ 0.9 m前後と深さに幅がある円形のピットで構成される。方位は北より 26.5° 東に傾く。柱穴埋土は灰褐色粘質土である。

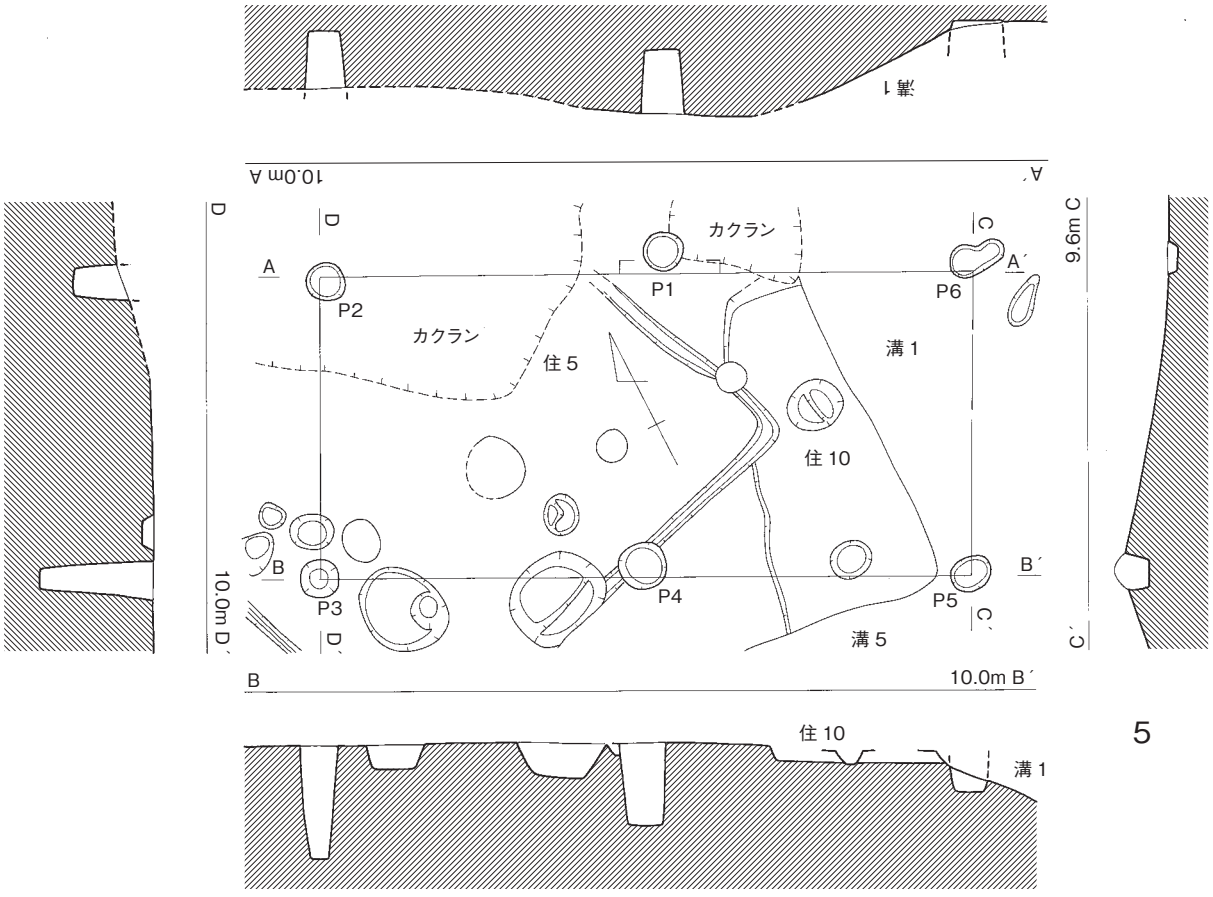
出土遺物で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土から古墳時代後期～古代のものと考えられる。（大庭）



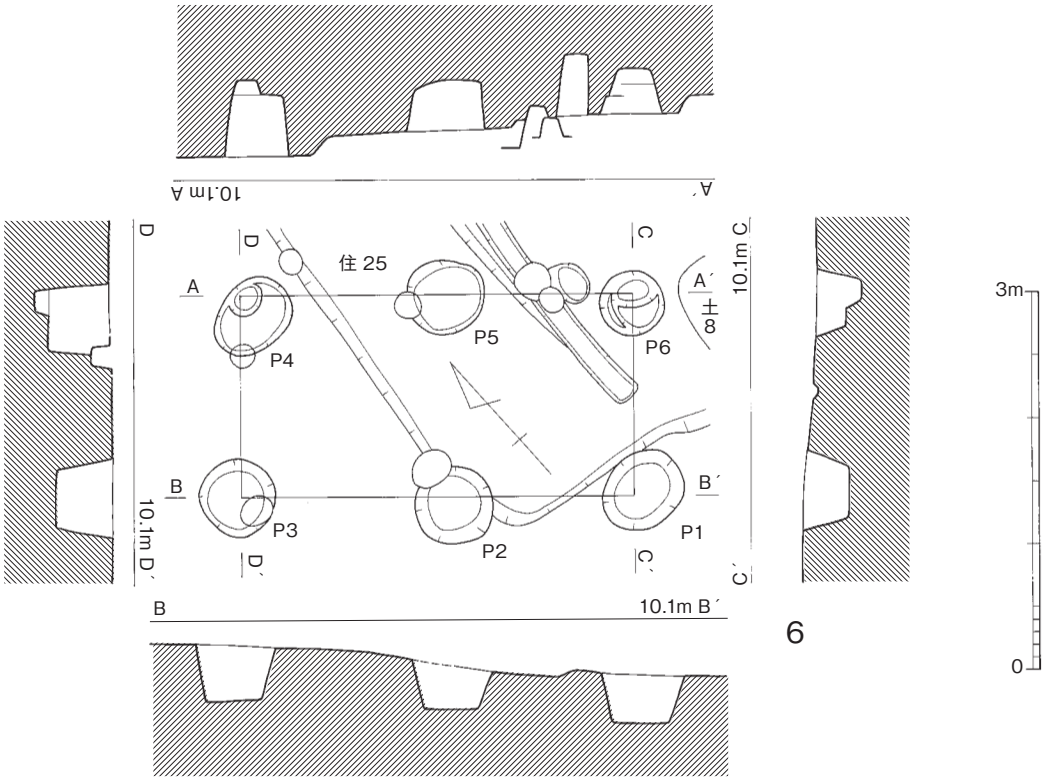




第 41 図　Ⅲ -AB 区３・４号掘立柱建物跡実測図（１/60）

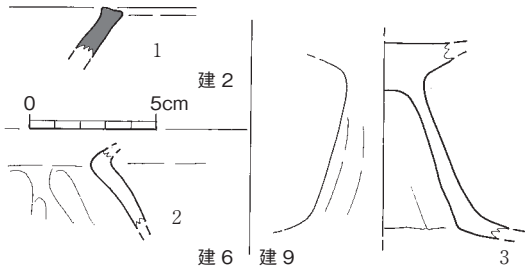


5



6

第 42 図　Ⅲ -AB 区５・６号掘立柱建物跡実測図（１/60）



第 43 図　Ⅲ -AB 区２・６・９号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）

６号掘立柱建物跡（図版 22、第 42 図）

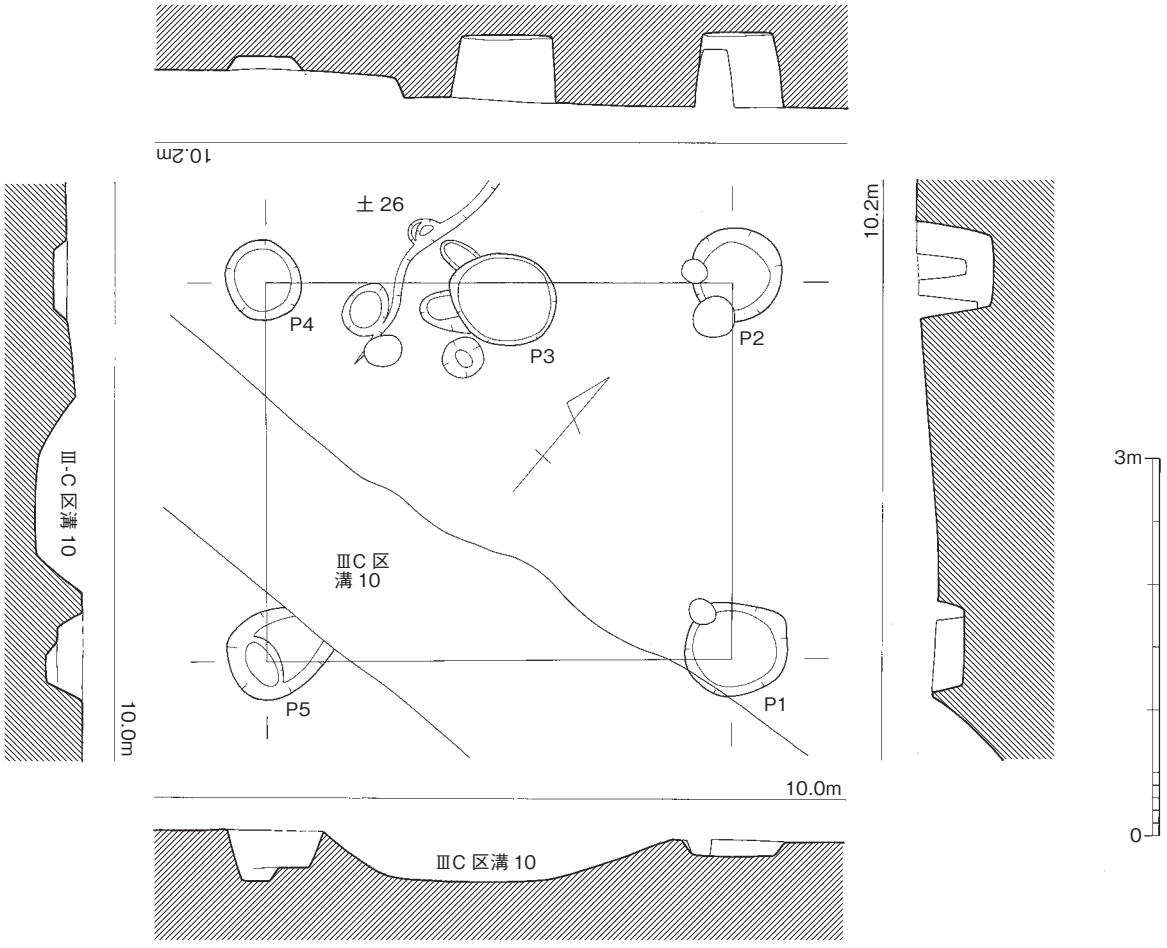
調査区の南端中央に位置し、25 号竪穴住居跡を切る。規模は１×２間の側柱建物で、柱間の心々距離で桁行 3.15ｍ×梁行 1.6ｍである。建物柱穴は径 0.5ｍ～ 0.6ｍ、深さ 0.4 ｍ～ 0.6 ｍ前後の円形のピットで構成される。方位は北より 42° 東に傾く。柱穴埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（第 43 図２）

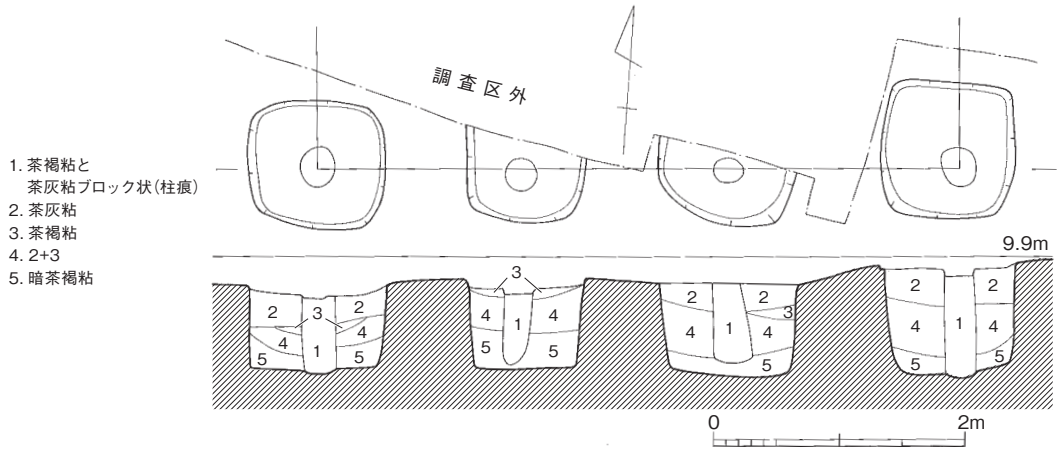
図示できたものは、Ｐ５出土の２の土師器小型壺肩部のみである。内面には縦ナデの稜が残る。出土遺物及び主軸から弥生時代後期終末～古墳時代前期に属すると考えられる。（大庭）

７号掘立柱建物跡（図版 22、第 44 図）

調査区の南端中央に位置し、26 号土坑およびⅢ - Ｃ区 10 号溝に切られる。Ⅲ -C 区 10 号溝により南側中央の柱穴を失っている。規模は１×２間の側柱建物で、柱間の心々距離で桁行 3.72 ｍ×梁行３ｍである。Ⅲ -C 区 10 号溝より南側は前回の調査対象であったため、当初は建物跡となることに気付かず、ピットとして掘削したが、南西隅ピットで柱痕跡となる一段深い掘り込みの存在を確認したため、建物跡と判断した。柱穴は径 0.6 ｍ～ 0.8 ｍ、深さ 0.25 ｍ～ 0.6 ｍ前後の円形のピットで構成される。方位は北より 40° 西に傾く。柱穴埋土は灰褐色粘質土である。



第 44 図　Ⅲ -AB 区７号掘立柱建物跡実測図（１/60）



第 45 図　Ⅲ -AB 区 9 号掘立柱建物跡実測図（1/60）

切り合い、埋土、主軸から弥生時代後期～古墳時代前期に属すると考えられる。（大庭）

9 号掘立柱建物跡（図版 23、第 45 図）

調査区の北東部に位置する３間×１間以上の掘立柱建物跡である。北側は調査区外に延びるが、レベルから考えると東西に走る道路によって削平され、遺存していないものとみられる。中世のピットに切られている。掘方は 1.15 m× 0.95 mほどの隅丸長方形で、深さは 0.95 mを測る。掘方の底面レベルは同一である。それぞれの掘方には柱筋が通る径 20cm の柱痕跡があるが、柱の底部が掘方の底に達していないものも見られる。柱間は柱痕跡の心々で、東から 1.85 m、1.65 m、1.6 mを測る。掘方は茶灰色ないしは茶褐色の粘質土が３～４層に分層されるが、さほど硬くたたき締められているとはいえない。

出土遺物（第 43 図 3）

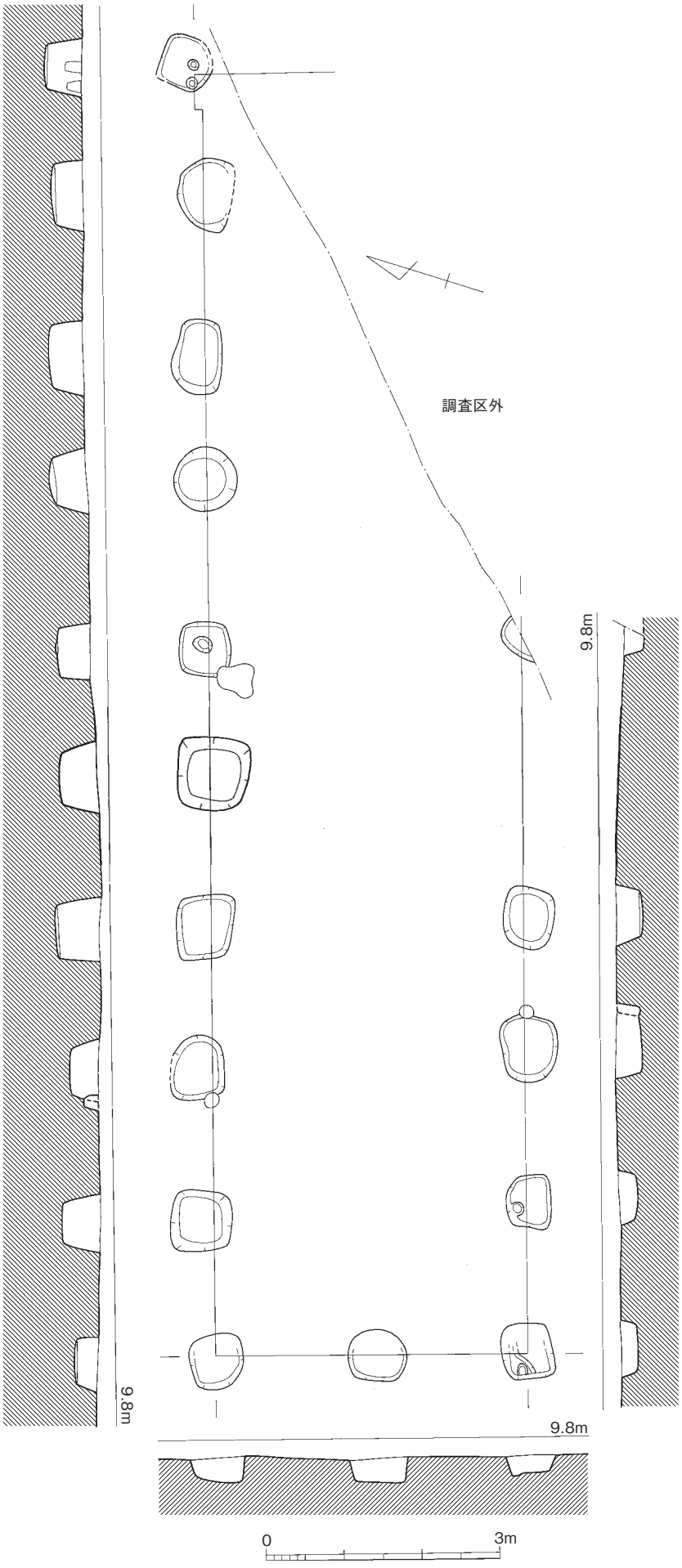
３は古墳時代の土師器高坏である。脚部の破片で５世紀代のものと考えられる。ほかに土師器小片が出土しているが図示できるものはない。

出土遺物は先行する遺構からの混入品と考えられる。切り合いと掘方の形状から７世紀～８世紀代に収まる可能性が高い。（吉村）

10 号掘立柱建物跡（図版 24、第 46 図）

調査区の南東部に位置する２間×９間の東西棟側柱建物跡で、南東隅部は調査区外に延びる。37 号溝を切り、１・９号溝、平安時代のピットに切られる。建物規模は梁行 4.02 m、桁行 15.06 mで、柱間は桁間が 188cm、梁間が 201cm 等間に復元される。柱掘方は隅丸方形ないしは円形で、規模は一辺 70 ～ 90cm を測り、深さは最も深いもので 55cm である。掘方は一部平面プランが乱れているものも存在し、柱は抜き取られたようで掘方の平面・断面観察では柱痕跡を確認することができなかった。また、掘方の底面で径 15cm ほどの浅いくぼみを確認した掘方もあり、これを柱のアタリと考えると概ね柱筋が通ることになる。柱掘方から土師器小片が出土したものの、時期を特定できる資料はない。

切り合い関係と柱掘方の形状などから、７世紀後半から８世紀代に考えられようか。（吉村）



第 46 図　Ⅲ -AB 区 10 号掘立柱建物跡実測図（1/80）

Ⅲ - C区　2号掘立柱建物跡

（図版 24、第 47 図）

調査区の南西端に位置し、22 号溝に切られ、26・30 号竪穴住居跡、Ⅲ - C 区 11 号竪穴住居跡を切る。南側の柱穴 4 基については、『Ⅲ区Ⅰ』で既に建物跡として報告したが、その後北側の調査区を調査すると、2 × 2 間の総柱建物となることが判明した。規模は柱間の心々距離で桁行 2.82 m × 梁行 2.7 m である。柱穴 3 基で柱痕跡となる一段深い掘り込みを確認した。径 0.7 m ～ 0.8 m、深さ 0.2 m ～ 0.6 m 前後の円形のピットで構成される。方位は北より 7.5° 西に傾く。柱穴埋土は灰褐色粘質土である。

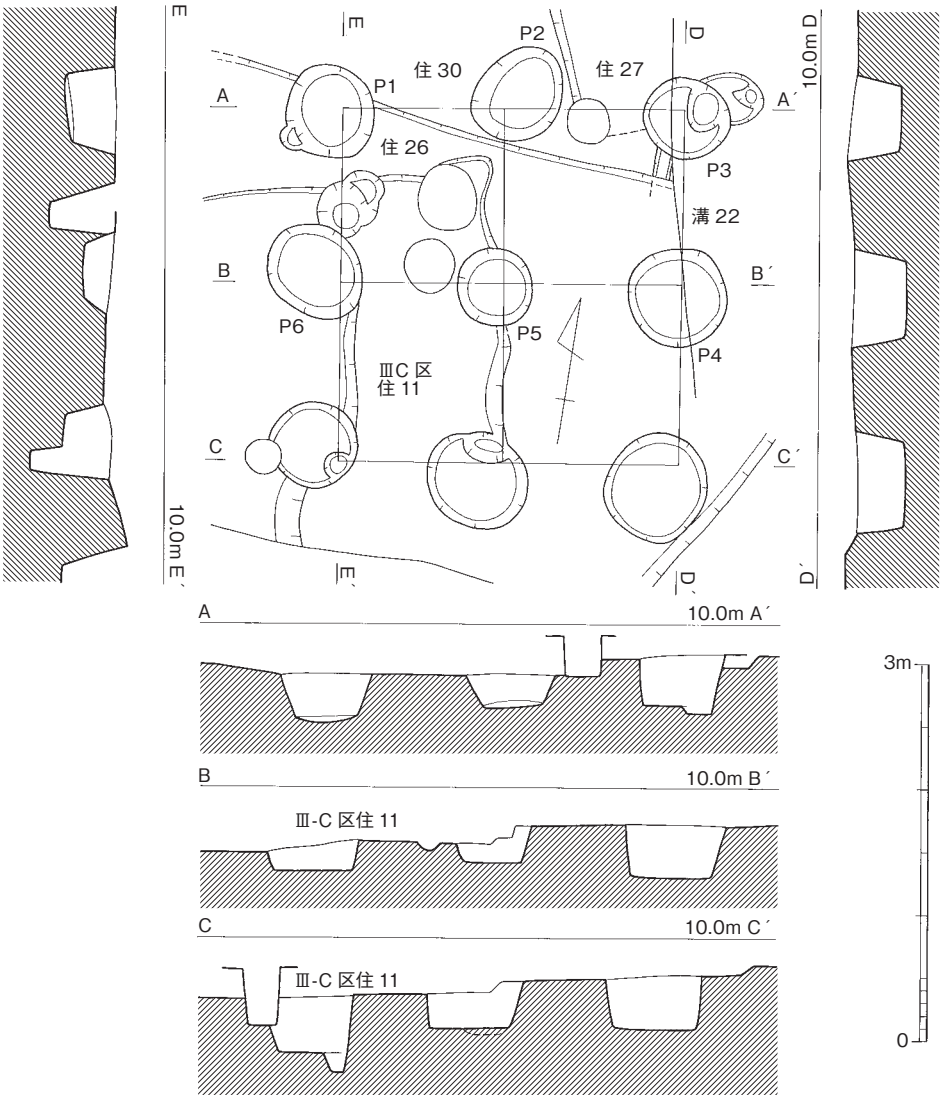
出土遺物で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土、主軸から古墳時代後期～古代に属すると考えられる。（大庭）

（3）土坑

本調査区では 28 基の土坑が検出された。性格は不明のものと井戸と想定されるものがある。

1 号土坑（第 48 図）

調査区の北西に位置し、11 号竪穴住居跡を切り、出土土器片から 6 号竪穴住居跡に切られる。規模は 1.53 m × 0.92 m、床面北側のピット状に最も深くなる部分で深さ 0.65 m



第 47 図　Ⅲ -C 区２号掘立柱建物跡実測図（１/60）

を測る三角状土坑である。北側のピット状に深くなる部分を囲むように、南側には広めのテラスを持つ。埋土は灰褐色粘質土である。

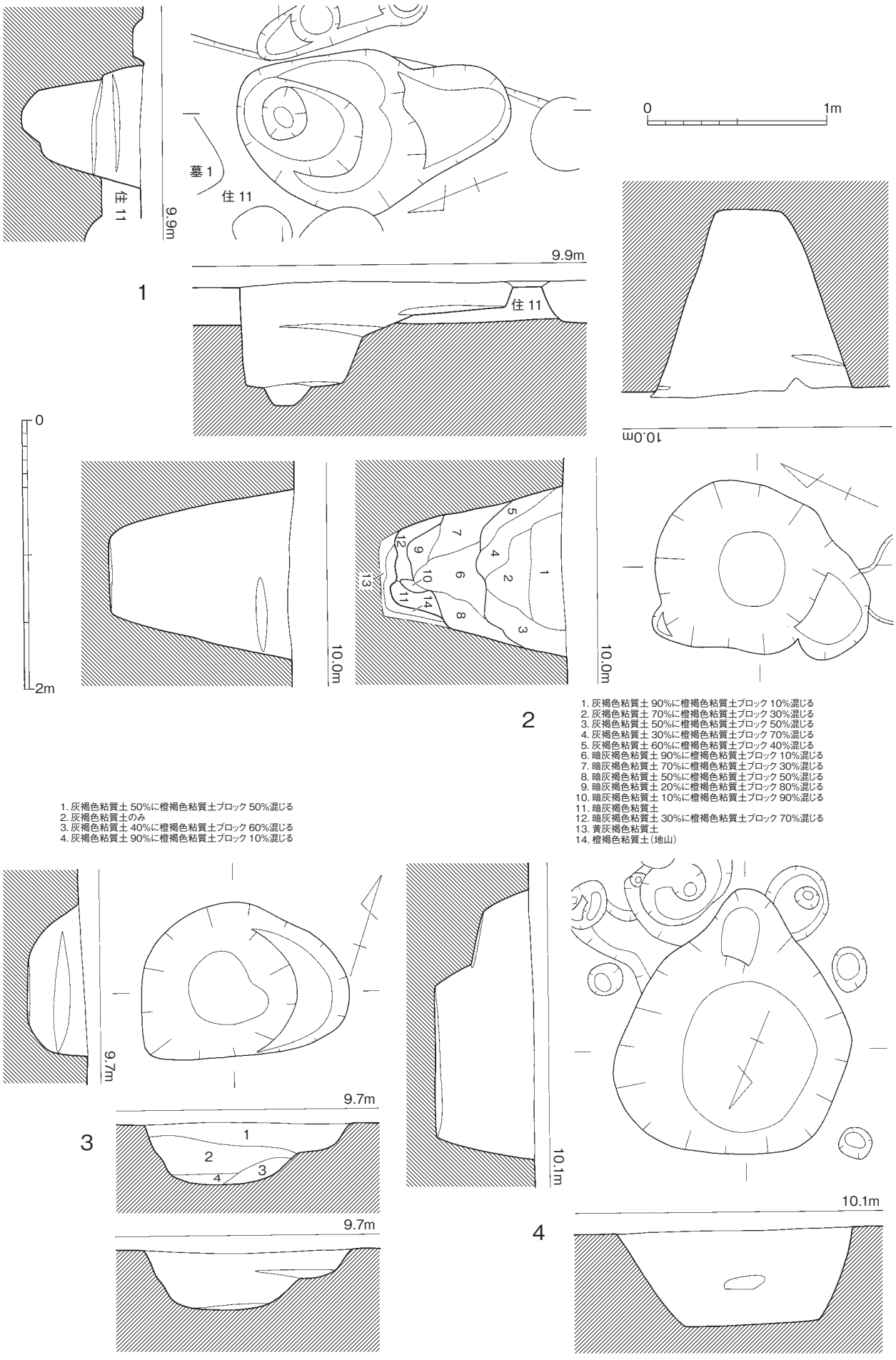
出土土器で図示できるものはないが、土器片から古墳時代前期前半に属すると考えられる。(大庭)

２号土坑（図版 24、第 48 図）

調査区の中央やや西寄りに位置する。規模は 1.17 m × 0.93 m、深さは 1.02 mを測る南側のテラス部分が突出する形状の楕円形土坑である。床面は円形で、土坑形態から井戸の可能性も考えたが、井戸が集中する谷部ではなく、立地が丘陵頂部にあること、床面からの湧水はなかったことから、土坑と判断した。埋土の観察から元々の堆積は 13 層のみで廃絶時にまず 14 層の地山の土が入り、11・12 層、６～ 10 層、１～５層と大きく３回土坑を埋め戻した状況が確認できる。

出土遺物（第 50 図１～６）

１は土師器皿である。内外面摩滅し、調整は不明である。口径 8.6㎝。２は深さのない土師器坏。底部には板状圧痕あり。３は瓦器椀である。内外面に粗い横ミガキを施す。内面口縁部は白黄色を呈するが、体部は灰色を呈する。４は土師器甕口縁部で、混入品。５は高台付須恵器坏身で、混入品。６は須恵器盤口縁部か。混入品。また埋土から鉄釘（第 103 図 52）が出土した。



第 48 図　Ⅲ -AB 区 1 ～ 4 号土坑実測図（1･3 は 1 /30、2･4 は 1 /40）

出土遺物から、13 世紀前後に属すると考えられる。（大庭）

３号土坑（図版 25、第 48 図）

調査区の中央に位置する。土坑付近では７号溝は削平され残っていないものの、位置と埋土から７号溝に切られると思われる。規模は 1.15 ｍ× 0.85 ｍ、深さ 0.34 ｍの楕円形土坑である。東側に三日月状のテラスを持つ。

出土土器で図示できるものはないが、埋土から中世に属すると考えられる。（大庭）

４号土坑（第 48 図）

調査区の中央南寄りに位置する。規模は 1.46 ｍ× 1.3 ｍ、深さ 0.55 ｍの楕円形土坑である。埋土は上層が灰褐色粘質土に焼土が多く混じる土、下層が暗褐色粘質土である。

出土遺物（第 50 図７～ 17）

７・８は糸切り底の土師器皿である。口径は、７は８㎝、８は 8.2㎝である。８の底部は静止糸切り痕が残る。９・10 は静止糸切り底の土師器坏。11 ～ 16 は瓦器椀である。12 ～ 16 については、口径が小⇒大、深さが浅いもの⇒深いもので割り付けている。11 ～ 13・15・16 は外面下位にケズリを施す。11 は深い椀形で、高台貼り付け痕が残る。12 は内外面に二次加熱痕あり。13 の内面は工具ナデ後ナデを施す。内面には工具痕あり。14 は内外面摩滅しており、調整不明。15 の外面下位はケズリ後ナデ、さらにその後縦ミガキを施す。内面は底部付近は茶灰色、内面上位は白灰色を呈する。腰が張る椀状の 16 は、内面布による丁寧なナデを施す。17 は龍泉窯系青磁椀。内面には櫛による片彫りの分割線が認められる。釉は厚く、深緑色を呈する。胎土は灰色。埋土上層から土錘１点（第 101 図２）、砥石１点（第 102 図 23）、刀子１点（第 103 図 62）、短刀１点（第 103 図 66）が出土した。

出土遺物から、13 世紀前後に属すると考えられる。（大庭）

５号土坑（図版 25、第 49 図）

調査区の中央南寄りに位置する。規模は 1.37 ｍ× 0.8 ｍ、深さ 0.25 ｍの南西部が突き出す形状の長楕円形土坑である。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（第 50 図 18 ～ 20）

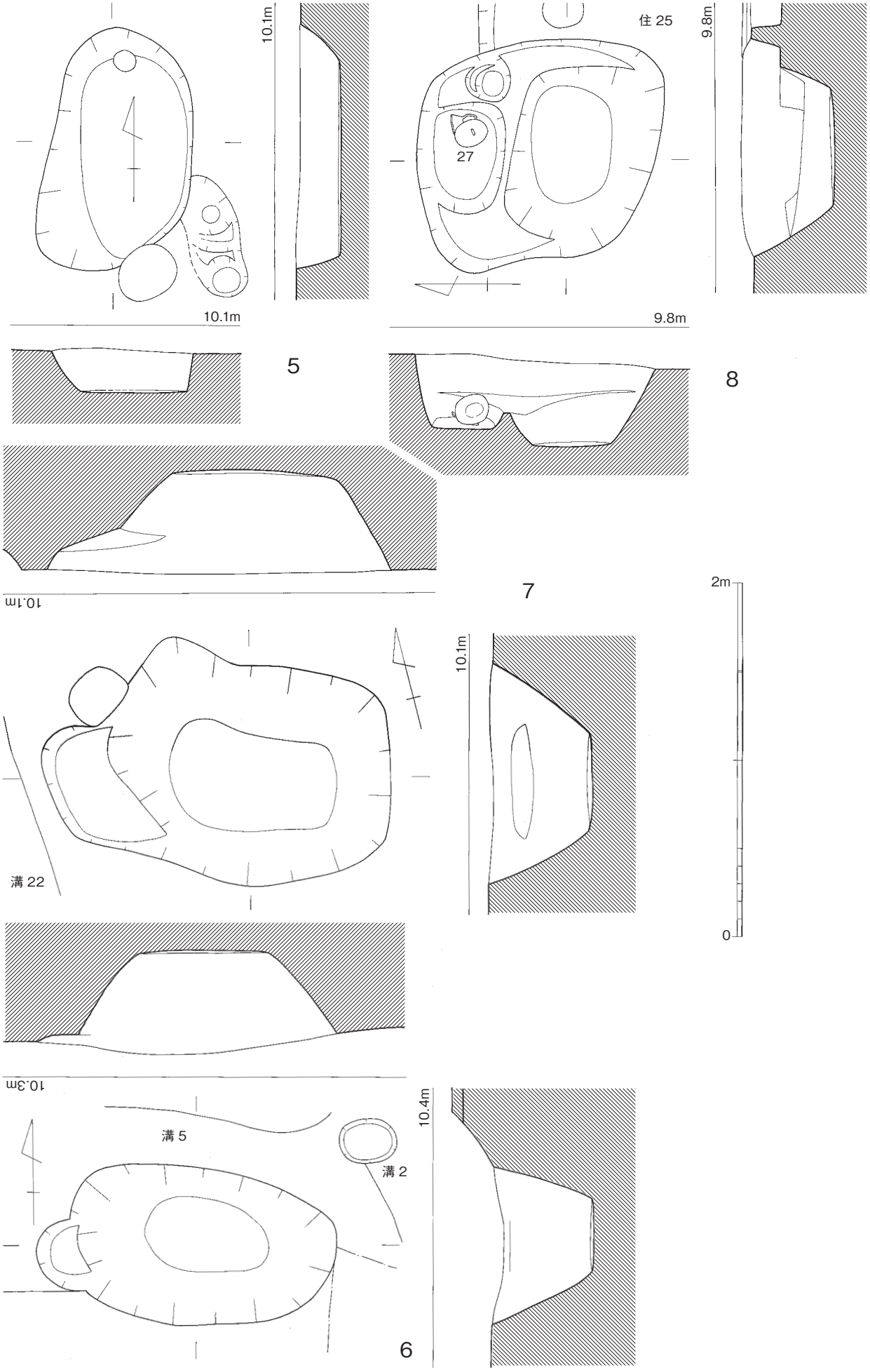
18・19 は瓦器椀の底部である。18 の内面にはミガキを施す。20 は復元口径 39.6㎝の土師質土器の鍋で、口縁部は外折する。外面には煤が付着する。埋土から石鍋片（第 103 図 29）が出土した。

出土遺物から、13 世紀前後に属すると考えられる。（大庭）

６号土坑（図版 25、第 49 図）

調査区の中央に位置し、５号溝に切られる。規模は 1.7 ｍ× 0.88 ｍ、深さ 0.57 ｍの楕円形土坑である。西側には半円形のテラスを持つが、上層の浅いピットの一部である可能性もある。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物はないが、埋土から中世に属する可能性がある。（大庭）



第 49 図　Ⅲ -AB 区５～８号土坑実測図（1 /30）

７号土坑（図版 26、第 49 図）

調査区の南西端に位置する。規模は 1.96 m × 1.25 m、深さ 0.57 mの西側のテラス部分が突出する楕円形土坑である。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（第 50 図 21 ～ 26）

21・22 は土師器皿である。21 の底部は糸切り後板状圧痕が認められる。口径は 8.4㎝。完形品である 22 の底部は糸切りか。口径は９㎝。23 は東播系須恵器鉢口縁部。24 は白磁皿底部である。釉は厚く、青色味がかった灰白色。胎土も青色味がかった灰色で、粗い。底部は露胎である。25・26 は龍泉窯系青磁椀。25 の外面は鎬蓮弁椀で、片彫りもの。内面は無文。釉は厚い深緑色で、胎土は青色味がかった灰色。26 の内面口縁部には片彫りの２条凹線を巡らし、その下に片彫りの雲文を施す。口縁部外面は玉縁状に肥厚させる。釉は深緑色で、胎土は灰白色。

出土遺物から、13 世紀前後に属すると考えられる。（大庭）

８号土坑（図版 26、第 49 図）

調査区の中央南端に位置し、25 号竪穴住居跡を切る。規模は 1.35 m × 1.24 m、深さは北で 0.46 m、南で 0.42 mの楕円形土坑である。床面には大中小のピット状の掘り込みがある形状となるが、南の掘り込み床面上で土師器中型直口壺が出土した（27）。埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土遺物（図版 50、第 50 図 27）

27 はほぼ完形の土師器中型直口壺である。口径は 8.5㎝、器高は 15㎝を測る。偏球状の胴部底部は、まず円盤状底部をつくり、成形した痕跡が残る。外面は縦方向のハケメのち左上がりの粗いミガキを施す。内面下位には工具ナデ状の浅いケズリを施す。外面には黒斑及び二次加熱痕と煤が認められる。また埋土上層から石鍋片（第 103 図 31）が出土したが、混入品である。

出土遺物から、古墳時代後期に属する土坑である。（大庭）

９号土坑（図版 27、第 51 図）

調査区の南西側に位置し、12 号土坑に切られ、28 号溝を切る。規模は 1.9m 以上 × 0.85m、深さ 0.3m の長方形土坑である。床面から浮いた位置で、石と瓦質土器が検出され、土壙墓の可能性もある。

出土遺物（図版 50、第 52 図１～３）

１・２は土師器皿である。摩滅のため調整は不明である。３は瓦器椀である。内外面共にやや粗いミガキを施す。

切り合いと出土遺物から、12 世紀頃に属するものと考えられる。（城門）

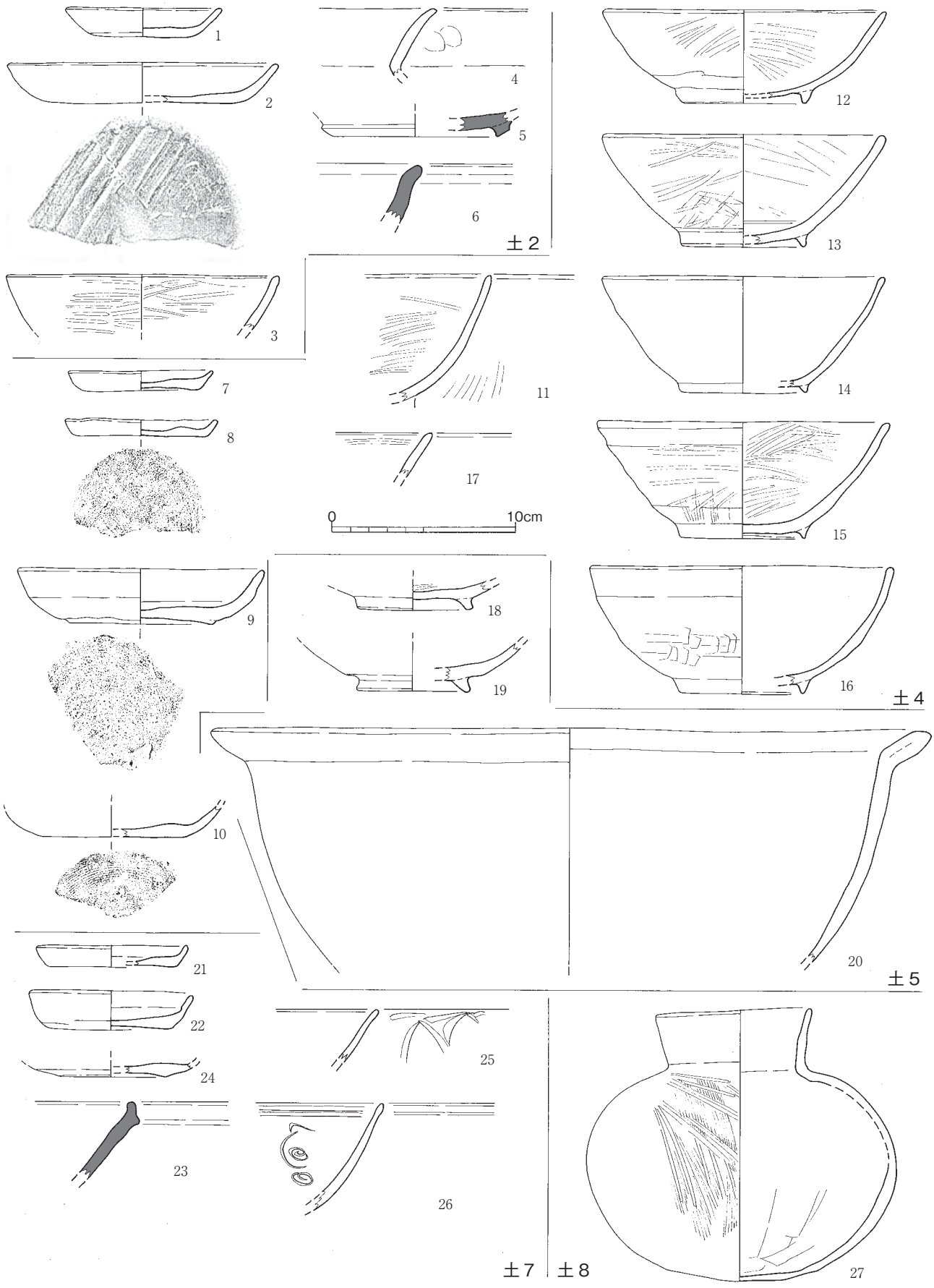
10 号土坑（図版 27、第 51 図）

調査区の南西側に位置する。規模は 1.45 × 0.85m、深さ 0.2m の長方形土坑である。床面南端で径 0.2m、深さ 0.1m のピットが検出された。

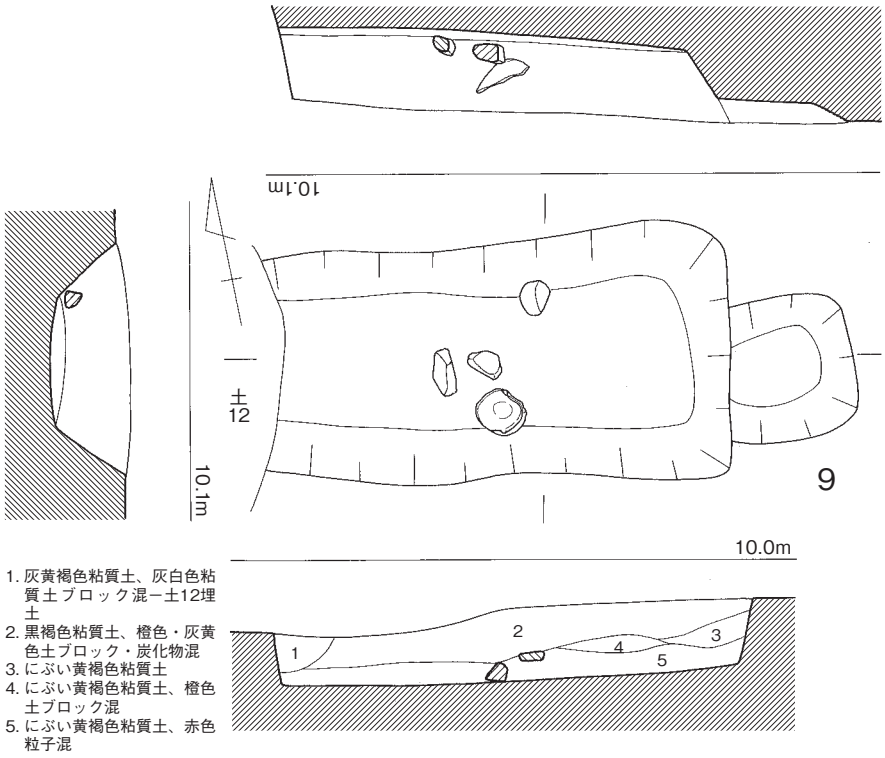
出土遺物（第 52 図４）

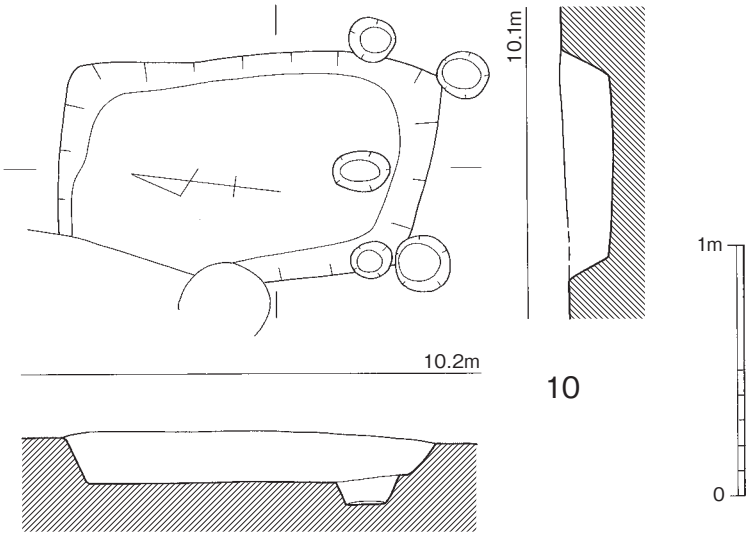
４は土師器の椀である。摩滅のため調整は不明である。

出土遺物から、中世前期に属するものと考えられる。（城門）



第 50 図　Ⅲ -AB 区２・４・５・７・８号土坑出土土器実測図（1/3）





第 51 図　Ⅲ -AB 区 9・10 号土坑実測図（1/30）

11 号土坑（図版 27・28、第 53 図）

調査区の南西端に位置し、27 号溝を切る。規模は 3.9m 以上 × 2.3m、深さ 0.2m の長方形土坑である。既報告のⅢ -C 区 10 号土坑と同遺構である。床面より径 0.2 ～ 0.3m のピット、溝等が検出された。

出土遺物（第 52 図 5 ～ 18）

5 ～ 9 は龍泉窯系青磁椀である。5 は蓮弁文、8 は櫛描文、9 は草花文が描かれる。10・11 は土師器皿である。摩滅が著しいが、糸切りの痕跡が見られる。12 ～ 17 は瓦器椀である。12 ～ 14 は摩滅のため調整不明である。15 ～ 17 は内外面に粗いミガキが施される。18 は土師器の鍋である。摩滅のため調整は不明である。

切り合いと出土遺物から、12 世紀中頃～ 13 世紀前半頃に属するものと考えられる。（城門）

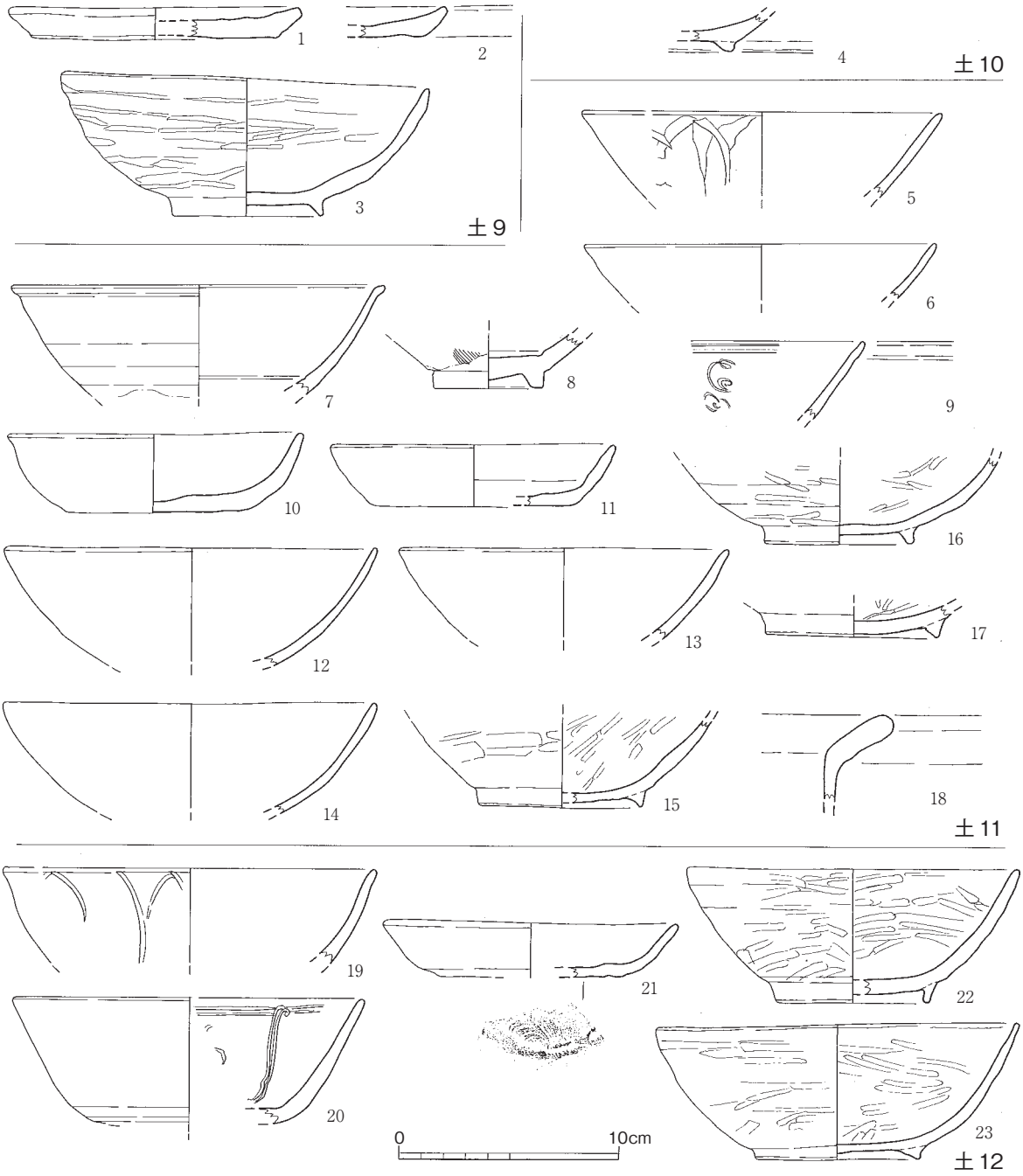
12 号土坑（図版 28、第 54 図）

調査区の南西端に位置し、9 号土坑を切る。規模は径 3.1m 以上、深さ 2.6m 以上で、井戸と考えられる。調査区外に延びているため、全体の大きさは不明で、深さは 2m を越えたため、重機による掘削で確認した。土層から井戸枠の存在が示唆される。

出土遺物（図版 50、第 52 図 19 ～ 23）

19・20 は龍泉窯系青磁椀である。19 は蓮弁文、20 は草花文が描かれる。21 は土師器皿である。摩滅するが、底部に糸切りが見られる。22･23 は瓦器椀である。内外面共に粗いミガキが施される。

切り合いと出土遺物から、13 世紀初頭～前半頃に属するものと考えられる。（城門）



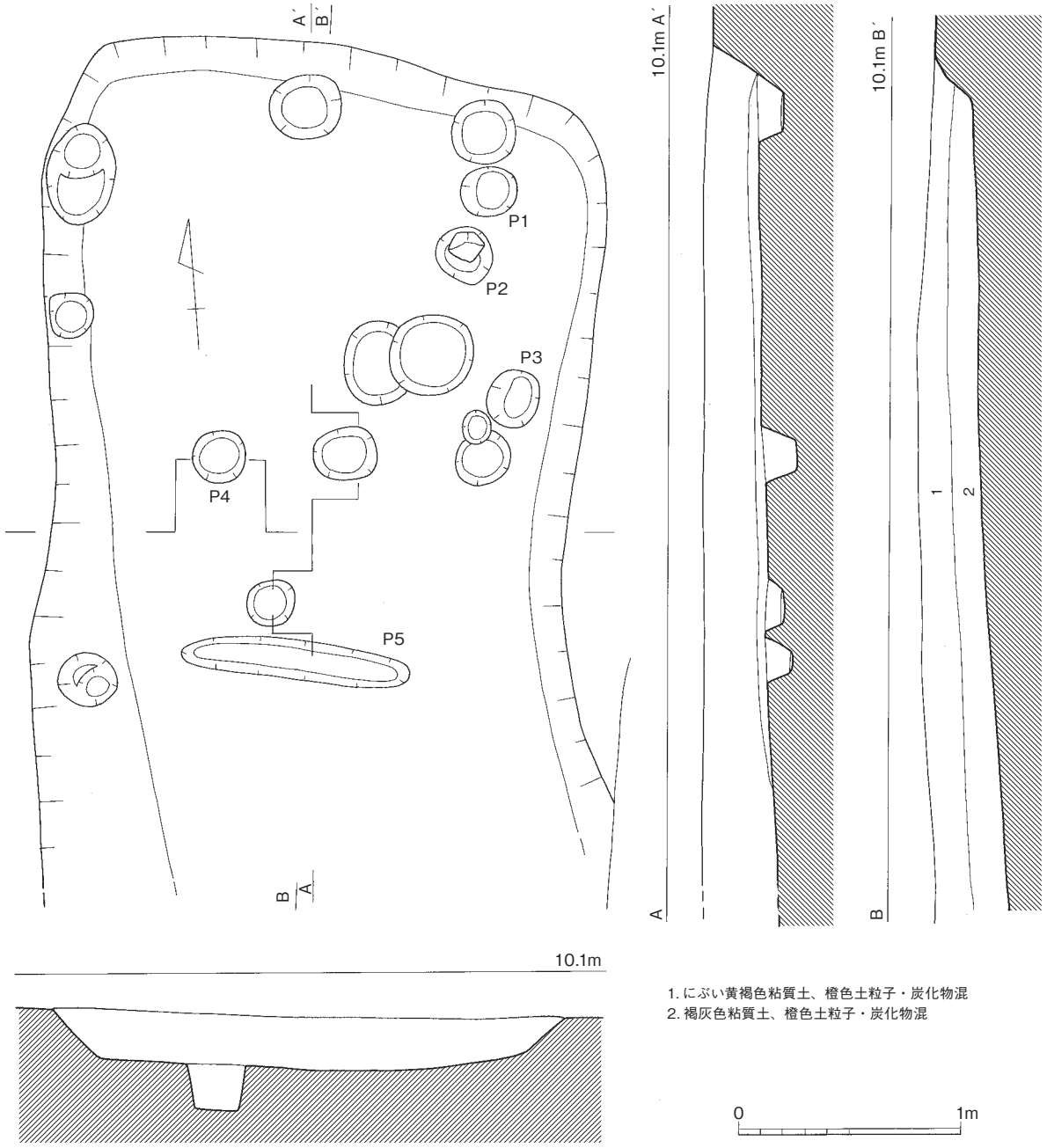
第 52 図　Ⅲ -AB 区 9 ～ 12 号土坑出土土器実測図（1/3）

13 号土坑（図版 28、第 55 図）

調査区の南東部に位置し、撹乱に切られ、30 号溝を切る。平面プランは円形で、規模は径 2.1 m を測る。床面はフラットで、壁はすり鉢状に緩く立ち上がる。埋土は黒灰色で、炭化物をわずかに含んでいる。

出土遺物（図版 50、第 56 図 1 ～ 11）

1 ～ 3 は土師器である。1 は小皿。法量は口径 9.6cm、底径 6.0cm、器高 2.0cm を測る。2・3 は坏である。3 は底径が小さく体部が開くタイプ。法量は 2 が口径 14.6cm、底径 9.3cm、器高 3.5cm、3 は口径 15.6cm、底径 9.0cm、器高 3.9cm を測る。すべて糸切り。4 ～ 7 は瓦器椀である。高台は 4 が台形でハ字形に開く。5 ～ 7 は断面三角形で調整は内外面ともミガキを施す。8・9 は土師器鍋である。8 は口縁部が肥厚する。調整は外面がナデ後ハケメで、指頭圧痕が残る。内面は摩滅が著しく不明。外面には煤が付着する。口径 41.0cm を測る。9 も 8 と同じ形状で外面に煤が付着



第 53 図　Ⅲ -AB 区 11 号土坑実測図（1/30）

する。口縁部外面に工具のアタリが残る。10 は青白磁合子の蓋である。肩部に葉文を、天井部には草花文を型押しする。胎は白灰色で、明灰色釉を施す。口縁部は釉をかき取り、内面は露胎となる。11 は青磁の皿である。見込みに櫛描きがある。胎は灰色で薄い緑色釉を施す。底部は露胎となる。貫入がみられる。埋土から打製石鏃（第 101 図 5）が出土している。

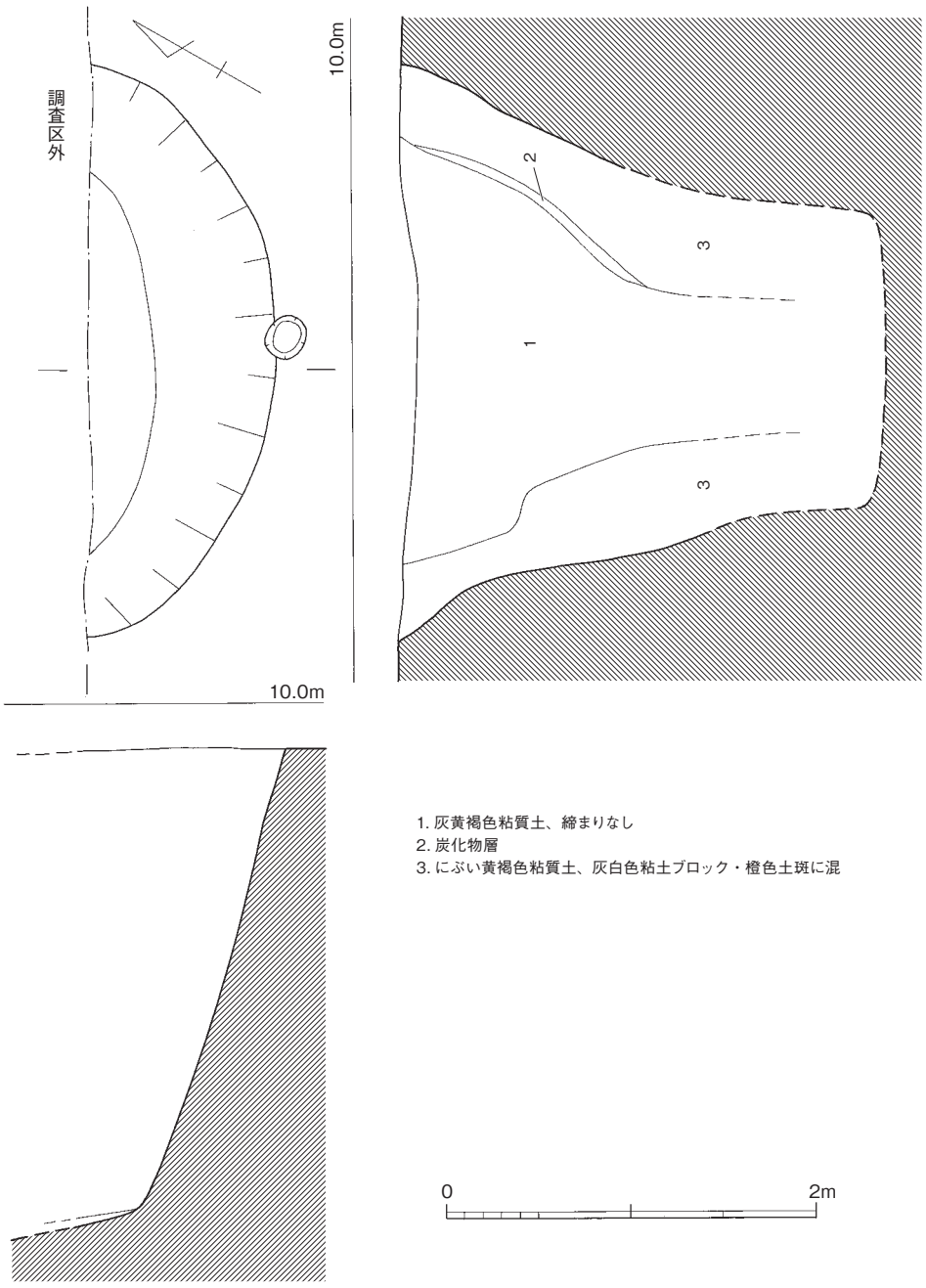
出土遺物から 12 世紀に属するものと考えられる。（吉村）

14 号土坑（第 55 図）

調査区の南東部に位置し、42 号竪穴住居跡、２号溝を切る。平面プランは隅丸方形で、規模は長辺 2.1 m、短辺 1.9 m、深さ 0.4 mを測る。底面はフラットで、壁は緩く立ち上がる。

出土遺物（第 56 図 12）

12 は小型の土師器壺である。混入品。



第 54 図　Ⅲ -AB 区 12 号土坑実測図（1/40）

切り合い関係と埋土から 12 世紀頃に属する可能性が高い。（吉村）

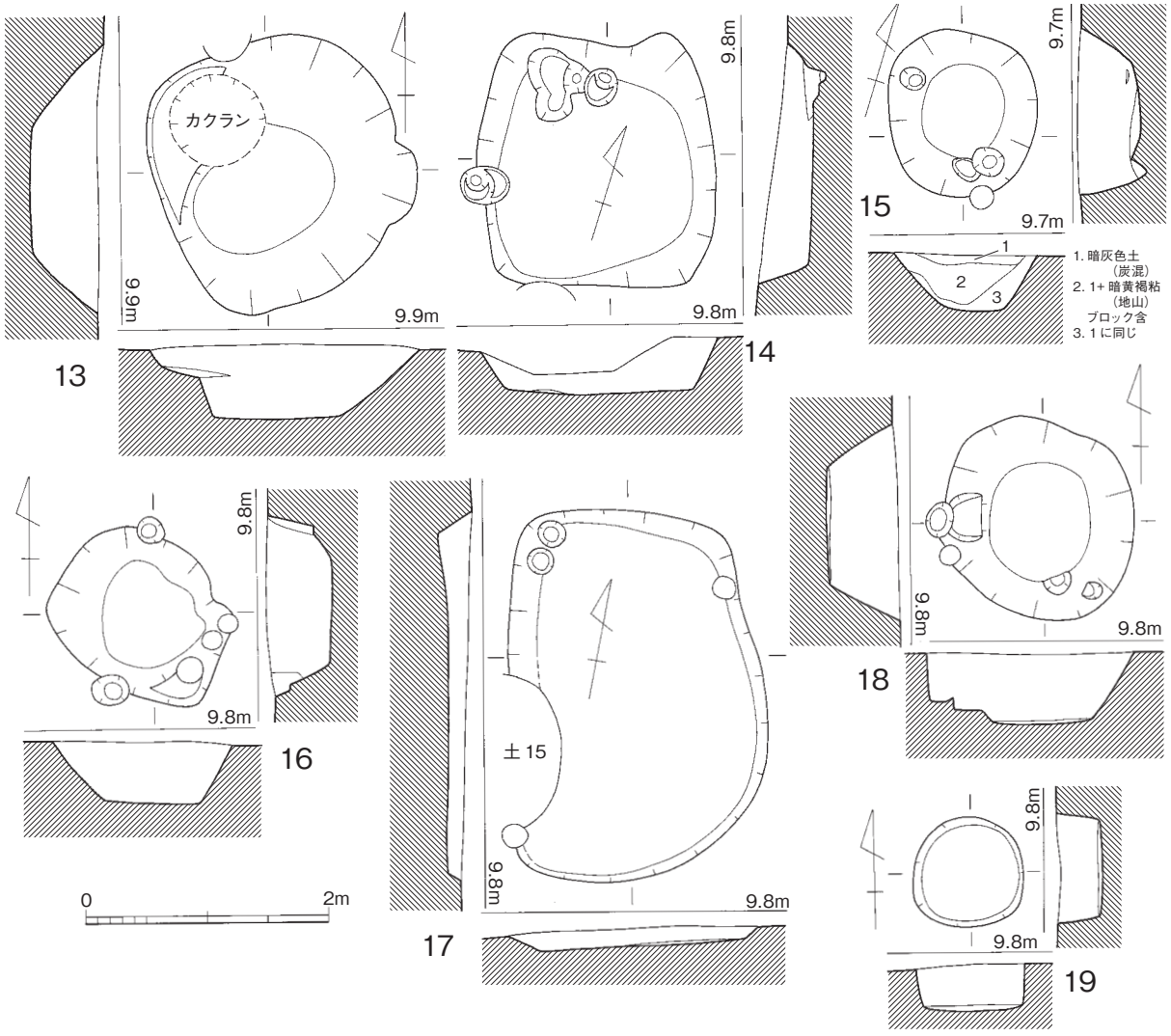
15 号土坑（図版 29、第 55 図）

調査区の南東部に位置し、40 号竪穴住居跡、17 号土坑を切る。平面プランは円形で、規模は径 1.4 m、深さ 0.5 mを測る。底面は中央部がもっとも深い。埋土は 3 層に分かれる。暗灰色土が主体で、土層は自然堆積を示す。

出土遺物（第 56 図 13 ～ 15）

13 は瓦器椀の高台部の破片である。調整は内面がミガキを施す。14・15 は白磁椀である。14 は内面の口縁部下に 1 条の沈線をまわす。灰色の胎に灰色の釉を施す。

出土遺物から 12 世紀頃に属するものと考えられる。（吉村）



第 55 図　Ⅲ -AB 区 13 ～ 19 号土坑実測図（1/60）

16 号土坑（図版 29、第 55 図）

調査区の南東部に位置し、30 号溝を切る。平面プランは円形で、南東部に小さなテラスをもつ。規模は 1.6 m × 1.4 m、深さ 0.6 mを測る。底面はフラットである。

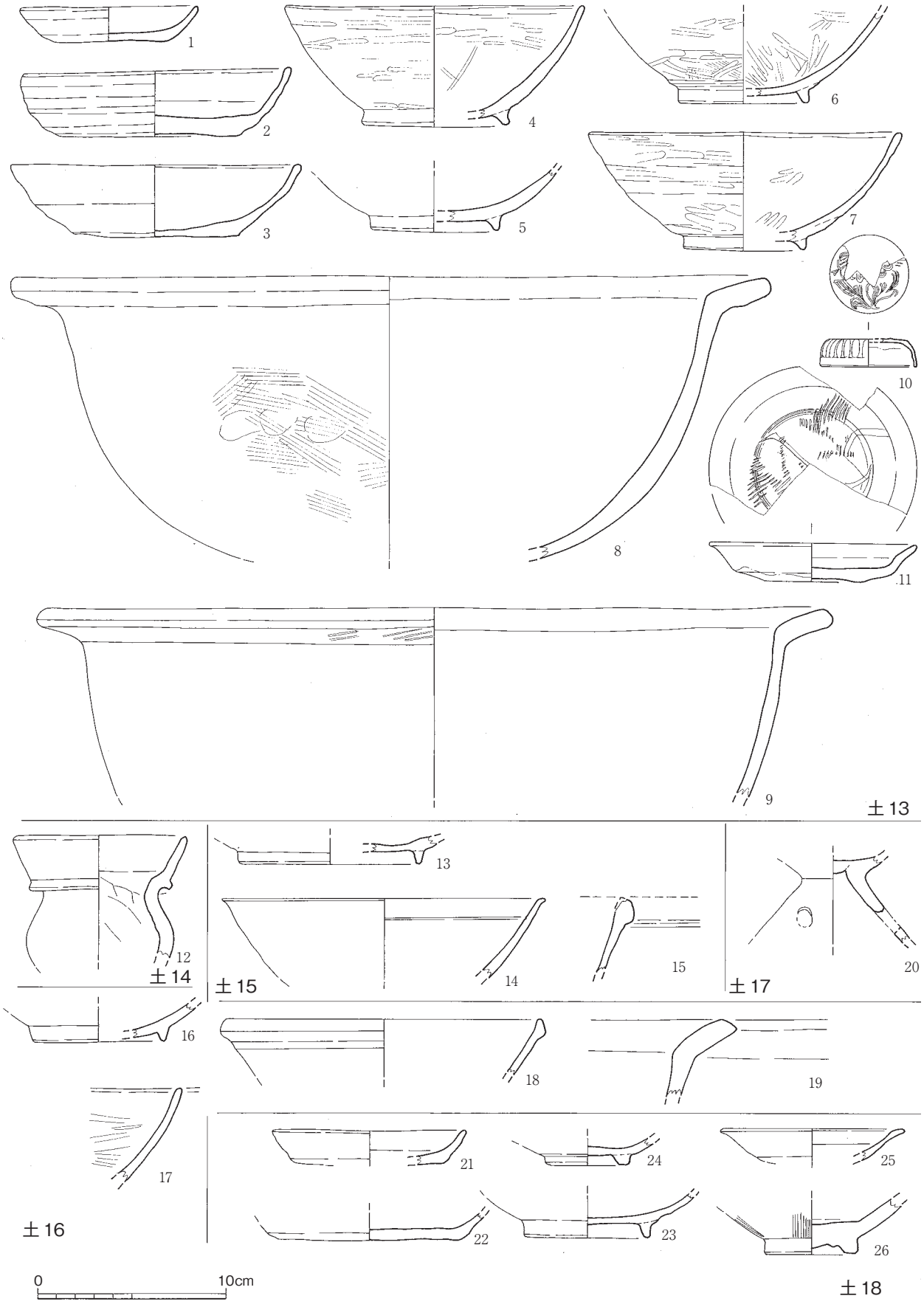
出土遺物（第 56 図 16 ～ 19）

16・17 は瓦器椀の小片である。18 は白磁椀で、口縁部は小さめの玉縁状になる。19 は土師器鍋の口縁部小片である。

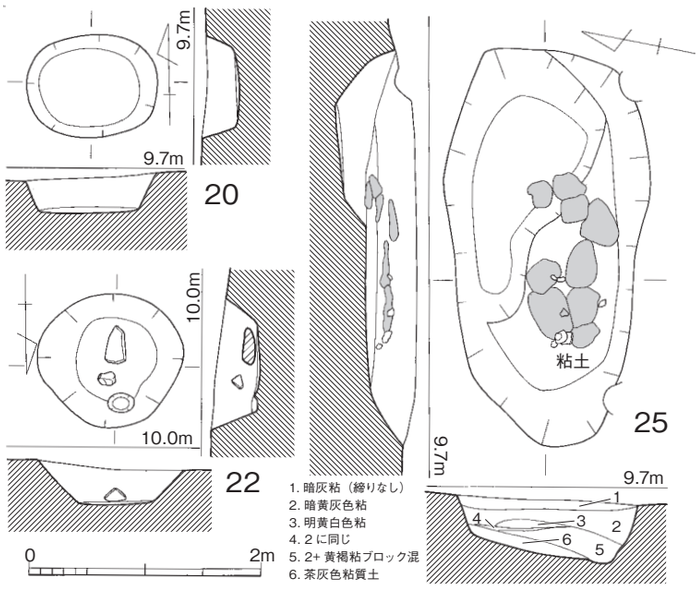
出土遺物から 12 世紀頃に属するものと考えられる。（吉村）

17 号土坑（第 55 図）

調査区の南東部に位置し、15 号土坑に切られ、２・30 号溝を切る。平面プランは縦長の不整円形で、規模は長軸長 3.1 m × 短軸長 2.1 mを測る。



第 56 図　Ⅲ -AB 区 13 ～ 18 号土坑出土土器実測図（1/3）



第 57 図　Ⅲ -AB 区 20・22・25 号土坑実測図（1/60）

出土遺物（第 56 図 20）

20 は土師器の器台である。脚部に三方に円孔を穿つ。

切り合い関係と埋土から 12 世紀頃に属する可能性が高い。（吉村）

18 号土坑（図版 29、第 55 図）

調査区の南東部に位置し、40 号竪穴住居跡を切る。平面プランは円形で、規模は径 1.6 m、深さ 0.6 mを測る。底面はフラットになり、壁は緩く立ち上がる。

埋土から 11 ～ 12 世紀に属する可能性が高い。（吉村）

出土遺物（図版 50、第 56 図 21 ～ 26）

21 ～ 23 は土師器である。21 は小皿で口径 10.4cm を測る。22 は坏の底部である。底部外面に板状圧痕が残る。23 は椀の高台部、24・25 は白磁の小皿、26 は椀である。胎は灰色で緑味がかった透明釉を施す。高台畳付から底部にかけては露胎となる。

出土遺物から 11 世紀に属するものと考えられる。（吉村）

19 号土坑（第 55 図）

調査区の中央部北壁際に位置し、39 号竪穴住居跡を切る。平面プランは円形で、規模は径 0.9 m、深さ 0.4 mを測る。底面はフラットで、壁は垂直に立ち上がる。

出土遺物はないが、埋土から 11 ～ 12 世紀に属する可能性が高い。（吉村）

20 号土坑（図版 29、第 57 図）

調査区の中央部北壁際に位置し、39 号竪穴住居跡を切る。平面プランは楕円形で、規模は長軸長 1.1 m、短軸長 0.9 m、深さ 0.3 mを測る。

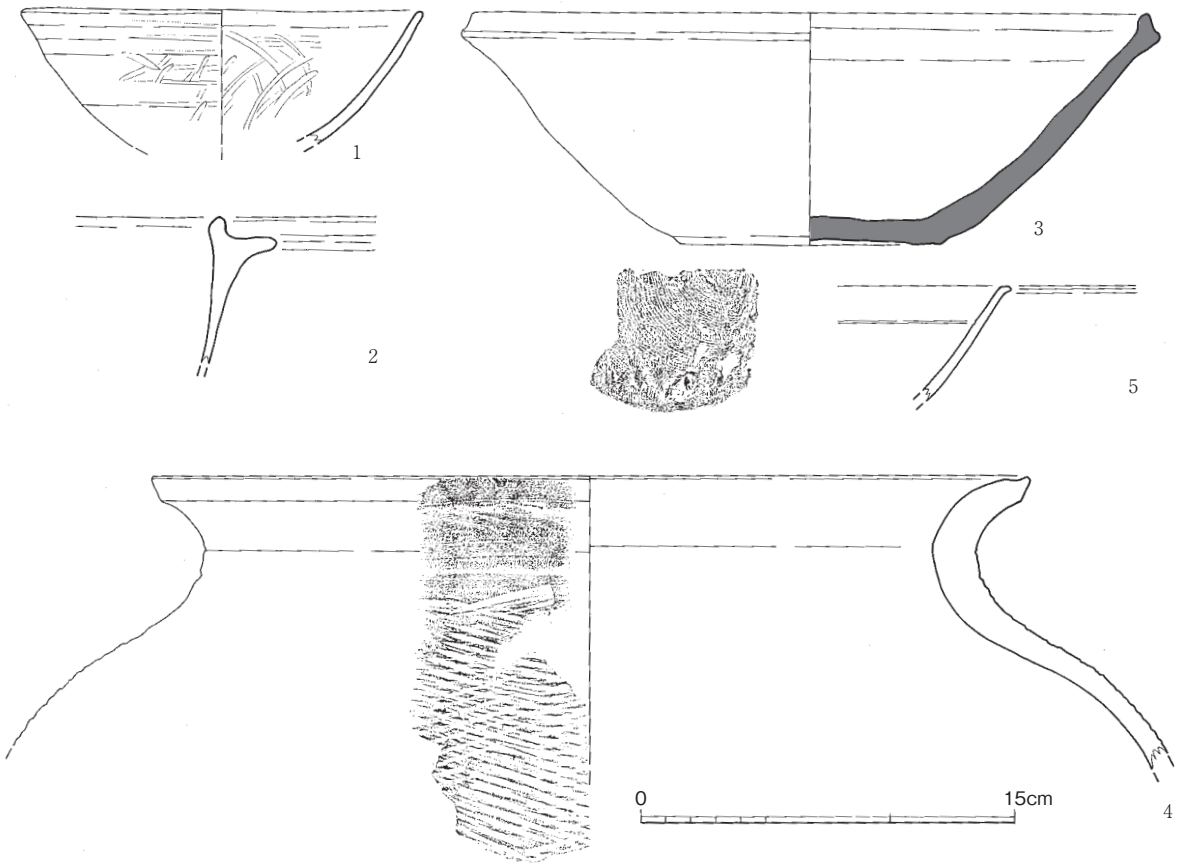
出土遺物はないが、埋土から 11 ～ 12 世紀に属する可能性が高い。（吉村）

22 号土坑（図版 30、第 57 図）

調査区の中央部の南西寄りに位置する。平面プランは円形で、規模は径 1.2 m、深さ 0.3 mを測る。底面はフラットである。底面から長さ 30cm ほどの河原石が出土した。

出土遺物（第 58 図）

１は瓦器椀である。内外面とも比較的細かいミガキを施す。２は土師質土器の鍋である。調整は内外面ともヨコナデ。３は須恵質土器の鉢で、口縁部は断面三角形になる。底部は糸切り。東播系か。４は陶器の甕である。強く外反する口縁で、肩部が張るものと考えられる。調整は外面が平行タタキ、内面は当て具痕跡がわずかに残るが、ナデ調整によってほとんどわからない。色調は内外



第 58 図　Ⅲ -AB 区 22 号土坑出土土器実測図（1/3）

面とも灰色で、口径 35cm を測る。５は青磁椀。

出土遺物から 12 世紀に属するものと考えられる。（吉村）

25 号土坑（図版 30、第 57 図）

調査区の南東部に位置し、１・34 号溝に切られ、37 号溝を切る。平面プランは長円形で、規模は長軸長 3.4 m、短軸長 1.8 mを測る。底面は北東側が一段低くなっており、壁はフラットな底面から緩く立ち上がる。土坑の北西側の床面から 10cmほど浮いた状態で、明黄白色の粘土ブロックが９つ出土した。粘土ブロックは大きなもので 47cm × 30cm、小さなものは 23cm × 21cm を測る。いずれも 6cm から 7cm ほどの厚みを持つ。土層観察から人為的に埋め戻されたとみられる。

出土遺物（図版 50、第 59 図）

１～ 14 は土師器である。１は坏蓋。口縁部が断面三角形状になる。つまみは扁平で小さい。調整はヨコナデ。２～４は坏。いずれも底部が丸みをもつ。調整は口縁部がヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。口径はそれぞれ 13.2cm、14.0cm を測る。４は体部の破片である。５は体部が丸みを持つ。調整は外面ナデ、内面ミガキ。６～８は皿。６は底部から丸みをもって口縁部に至るもので調整は摩滅が著しく不明。７・８は底部外面が回転ヘラケズリ、内面はミガキか。口径 16.0 ～ 19.2cm を測る。９は小形の短頸壺である。直線的な体部に短く直立する口縁部を持ち、肩部には稜を有する。高台はハ字形にしっかり踏ん張る。調整は内外面ともヨコナデを施す。10 ～ 12 は甕の小片で口縁部が短く外反する。13・14 は高坏の脚部である。13 の脚柱部は断面７角形に削って面取りを行う。内面にはシボリ痕が残る。摩滅が著しく調整は不明である。色調は茶褐色を呈する。畿内系の搬入品か。14 の端部は嘴状に仕上げる。15 ～ 24 は須恵器である。15・16 は坏蓋である。15 はつまみが宝珠形となる。天井部は回転ヘラケズリを施す。16 は口縁部が嘴状

をなす。17 ～ 23 は坏である。17 は口径 9.2cm と小形である。23 は外面に回転ヘラケズリを施す。高台は 21 のようにハ字形に開くしっかりしたものと、断面四角形のものが見られる。24 は高坏である。口縁端部は面をなす。杯部外面の調整は回転ヘラケズリ。25・26 は平瓦と思われる小破片であるが薄手である。外面に縄目のタタキが残る。

出土遺物から８世紀中頃に属するものと考えられる。（吉村）

26 号土坑（図版 31、第 60 図）

調査区の南端中央に位置し、25 号竪穴住居跡、７号掘立柱建物跡、方形周溝を切る。規模は南北 6.8 m以上×東西 3.68 m、深さ最大 0.2 mの大型であるが浅い長楕円形土坑である。床面には多数のピットがあるものの、当土坑に伴うかどうかは確認できていない。土坑南端で天地逆の状態の完形の瓦器椀（５）が出土した。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（図版 50、第 63 図１～ 10）

１・２は静止糸切り痕が残る土師器皿である。１は口径 9.2cm、器高２cm。２は口径 9.2cm、器高 1.9cmである。３～７は瓦器椀である。３～５は高台が高い⇒低いで割り付けている。深さのある３の外面はナデによる凹凸が顕著で、内面は丁寧なナデを施す。４は口縁部内外面のみ黒化する。５は完形のもので、外面下位には細かい工具ケズリ痕が残り、それ以外は横ミガキを施す。口径 16.4cm、器高 5.5 ～ 6.1cmを測る。６の内面にはミガキが残る。７は外面底部付近に二次加熱痕がある。８は同安窯系青磁皿で、内面見込みは凹線状に窪む。釉は透明なガラス質の黄色味がかった緑色で、外面下位は露胎である。胎土は灰色で硬質。口径 10cm、器高 2.1cm。９・10 は龍泉窯系青磁椀。９は鎬蓮弁椀で、内面は無文である。釉は厚い深緑色で、胎土は灰茶色。10 は内面に櫛による３条の片彫りの分割線で、５区画をつくり、その区画内に花文か雲文を描く。釉は厚い深緑色で、胎土は灰茶色。埋土から鉄釘２点（第 103 図 34・35）、鑷子（第 103 図 59）、不明鉄製品（第 103 図 54）が出土した。

出土遺物から、13 世紀前後に属すると考えられる。（大庭）

27 号土坑（第 60 図）

調査区の中央南寄りに位置し、23 号竪穴住居跡を切ると思われる。規模は南北 2.1 m以上×東西 2.5 m、深さ９cmを測る。北側は削平され壁は残っていないが、方形に近い形状になると思われる浅い土坑である。床面には多数のピットがあるものの、当土坑に伴うかどうかは確認できていない。埋土は灰褐色粘質土である。

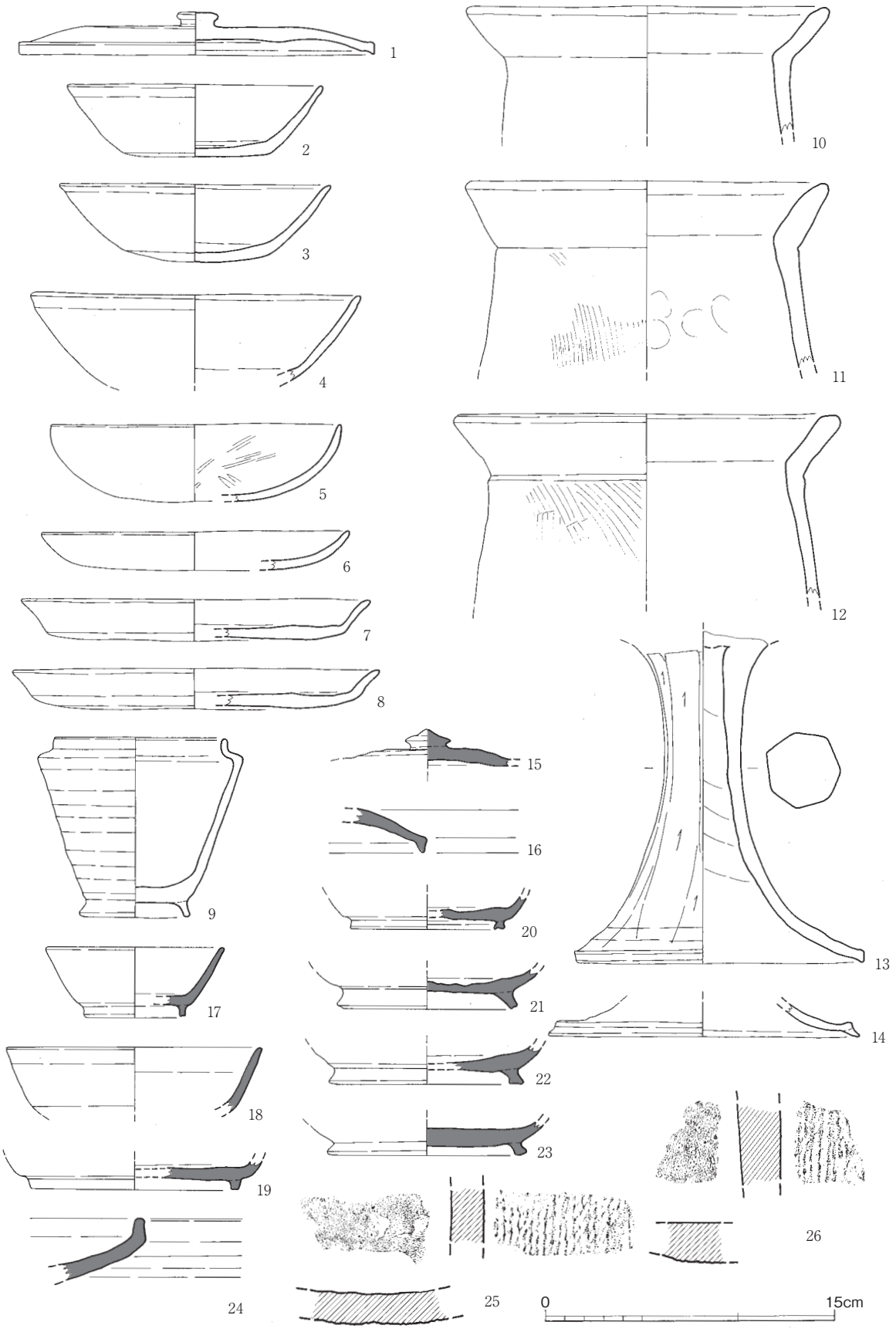
出土遺物（第 63 図 11・12）

11 は瓦器椀で、外面下位に顕著な指頭圧痕が、上位にはケズリ痕がある。外面には二次加熱痕あり。12 は口縁外端部を嘴状につまみ出した白磁椀。釉は厚い灰色味の透明釉で、胎土は灰白色。

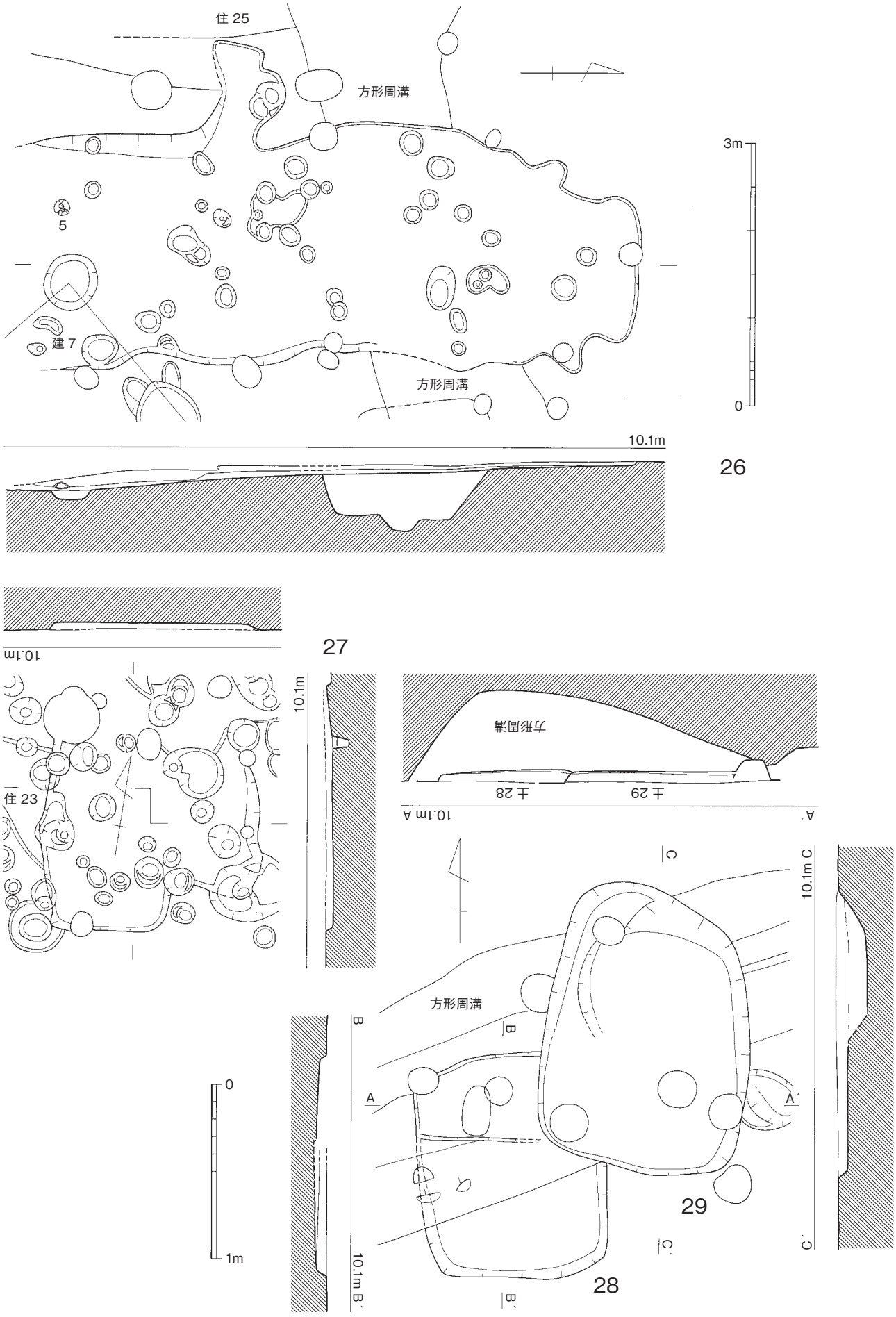
出土遺物から、13 世紀前後に属すると考えられる。（大庭）

28 号土坑（第 60 図）

調査区の中央南寄りに位置し、29 号土坑に切られ、方形周溝を切る。規模は 1.65 m× 1.2 mの隅丸方形土坑である。北側は一段下がるように図化しているが、誤って下層の方形周溝の一部を掘



第 59 図　Ⅲ -AB 区 25 号土坑出土土器実測図（1/3）



第 60 図　Ⅲ -AB 区 26 ～ 29 号土坑実測図（26・27 は 1 /60、28・29 は 1 /30）

削した可能性があるため、深さ５㎝の浅い土坑になると思われる。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物で図化できるものはないが、埋土から中世に属する。（大庭）

29 号土坑（第 60 図）

調査区の中央南寄りに位置し、28 号土坑、方形周溝を切る。規模は 1.26 m × 1.08 mの隅丸方形土坑である。床面中央は一段下がるように図化しているが、誤って下層の方形周溝の一部を掘削した可能性があるため、深さ６㎝の浅い土坑になると思われる。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物で図化できるものはないが、埋土から中世に属する。（大庭）

30 号土坑（第 61 図）

調査区の中央東寄りに位置し、24 号竪穴住居跡を切る。調査時に切り合い関係を誤り、24 号竪穴住居跡を先に掘削したため、東壁は一部掘り失っている。規模は 1.9 m × 1.74 m、深さ 0.43 mの楕円形土坑である。西側にはテラスとピット４基を持つが、このピットは上層から切り込んだピットの可能性がある。埋土は灰褐色粘質土である。

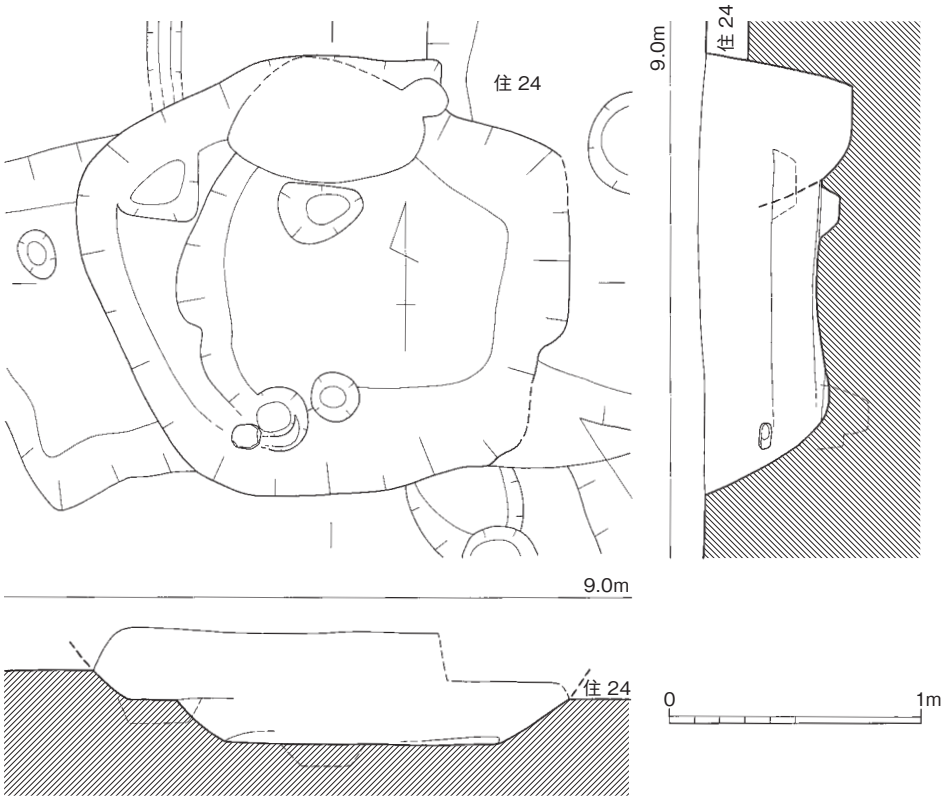
出土遺物（第 63 図 13・14）

13 は土師器坏で、外面にはナデによる凹凸が顕著である。14 は土師質土器鍋口縁部。外面には煤が付着する。

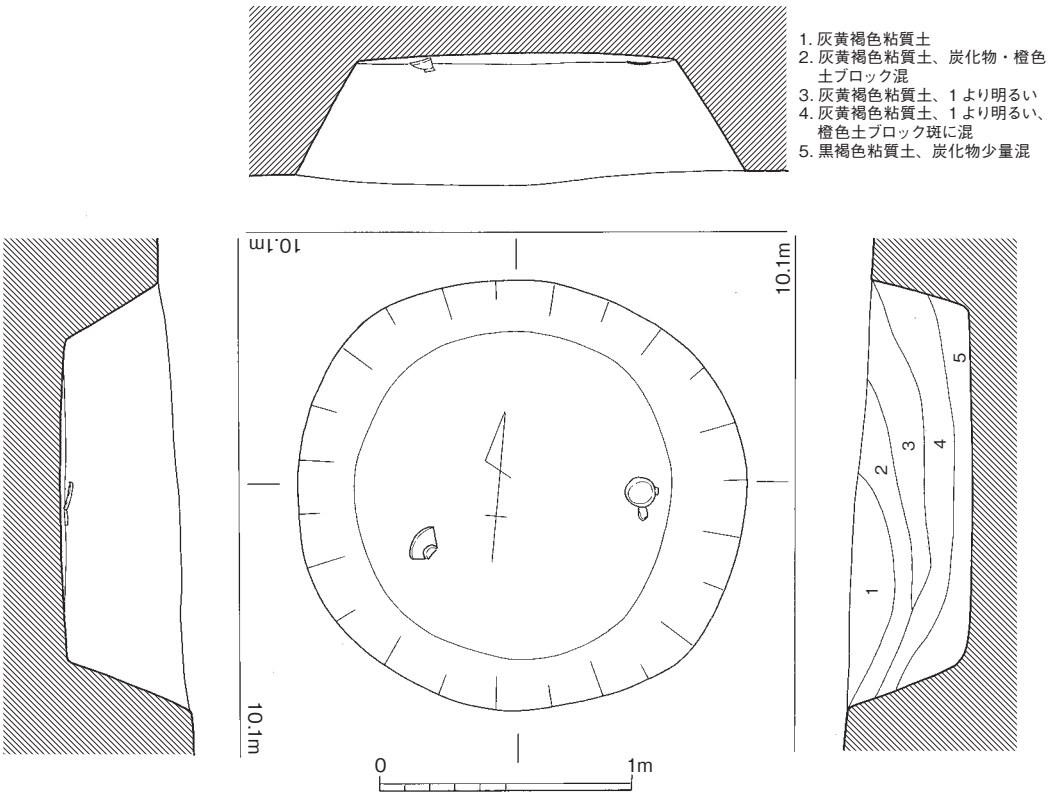
出土遺物から、13 世紀前後に属すると考えられる。（大庭）

31 号土坑（図版 31・32、第 62 図）

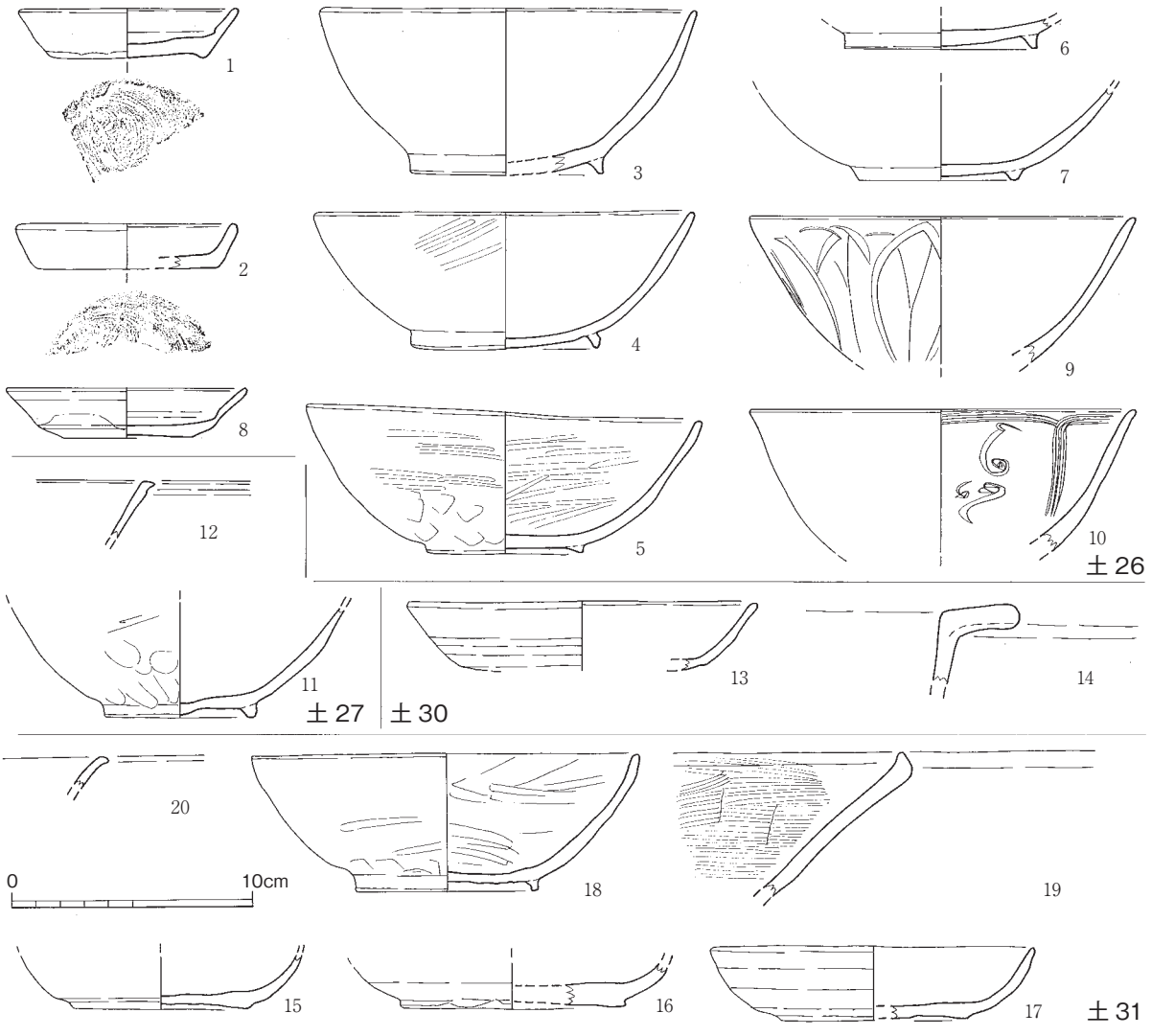
調査区の南西側に位置し、28・34・35・37 号竪穴住居跡、28 号溝を切る。規模は径 1.75m、



第 61 図　Ⅲ -AB 区 30 号土坑実測図（１/30）



第 62 図　Ⅲ -AB 区 31 号土坑実測図（1/30）



第 63 図　Ⅲ -AB 区 26・27・30・31 号土坑出土土器実測図（1/3）

深さ 0.5m の円形土坑である。断面台形で、床面から土器が検出された。土層から自然堆積したと考えられる。

出土遺物（第 63 図 15 ～ 20）

15 ～ 17 は土師器の椀である。摩滅が著しいが、いずれも糸切りと考えられる。18 は瓦器椀である。口縁部外面ヨコナデ､他はミガキを施す。19 は瓦質土器の鉢である。内面にハケメが施される。20 は青磁の椀である。

切り合いと出土遺物から、12 世紀後半～ 13 世紀頃に属するものと考えられる。（城門）

（4）溝

本調査区では 22 条の溝が検出された。特に中世期の方形区画など屋敷地と考えられる区画溝が検出されている。

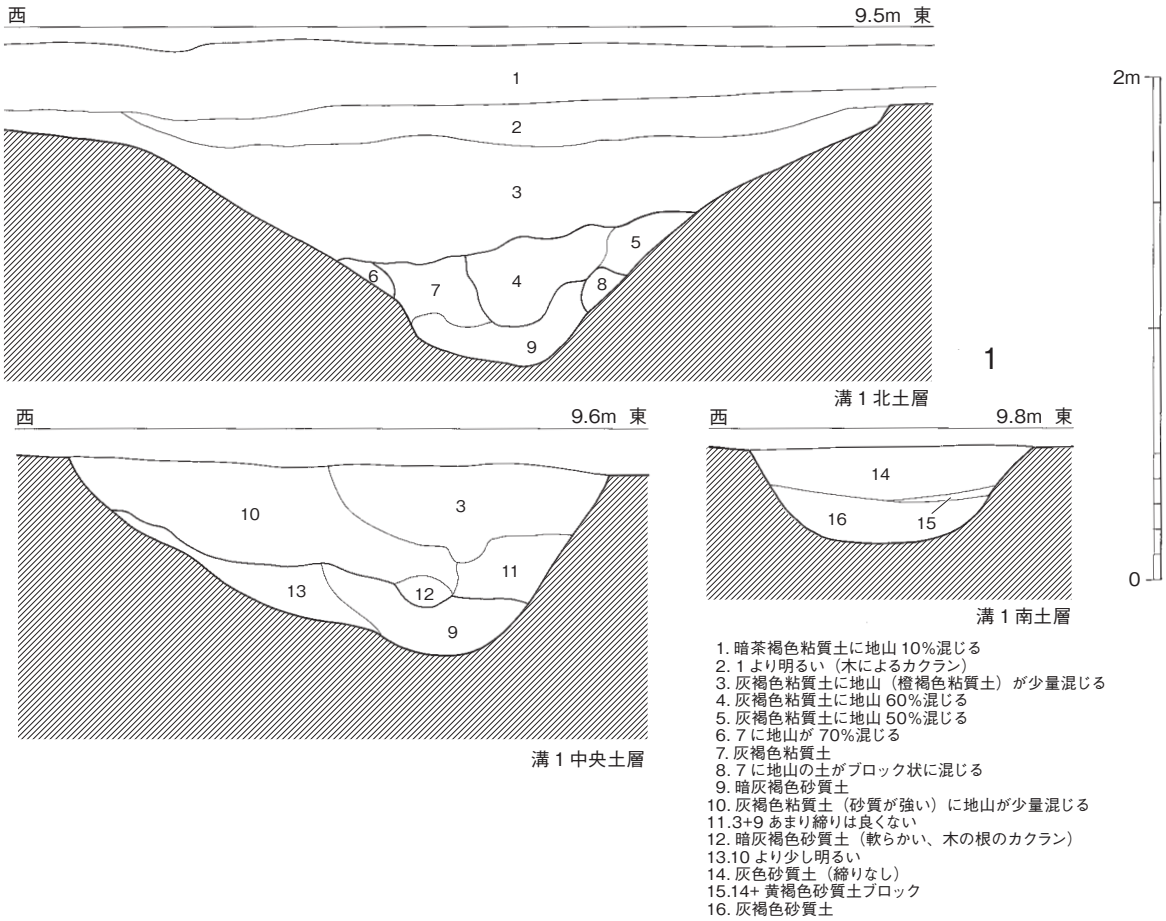
1 号溝（図版 32・33、第 64 図）

調査区の中央、２号溝の西に位置する南北溝で、10・39・40・41・43 号竪穴住居跡、５・10 号掘立柱建物跡、25 号土坑、30 号溝を切る。５号溝は当溝より東に延びないため、当溝と繋がる可能性もあるが、出土土器から当溝の方が古い。規模は長さ 68.5 ｍ以上、幅は北で 2.3 ｍ、中央で 2.3 ｍ、南で１ｍと南側の溝幅は狭くなる。遺構面からの深さは北から 0.9 ｍ、0.8 ｍ、0.7 ｍ、未調査区を挟んで、0.2 ｍ、0.3 ｍ、0.15 ｍを測る。断面は基本的に半円状の逆台形を呈する。また床面深さレベルは北から 8.5 ｍ、8.7 ｍ、8.9 ｍ、未調査区を挟んで 8.4 ｍ、8.3 ｍと、溝床面は溝中央部の 10 号竪穴住居跡付近を境に南北に緩やかな傾斜を持つ。北土層では、３と４・５、６～９、中央土層では３と 10 ～ 12、９・13 で大きく堆積が分かれるが、いずれも埋土が似ており、短期間に埋められた可能性がある。（大庭）

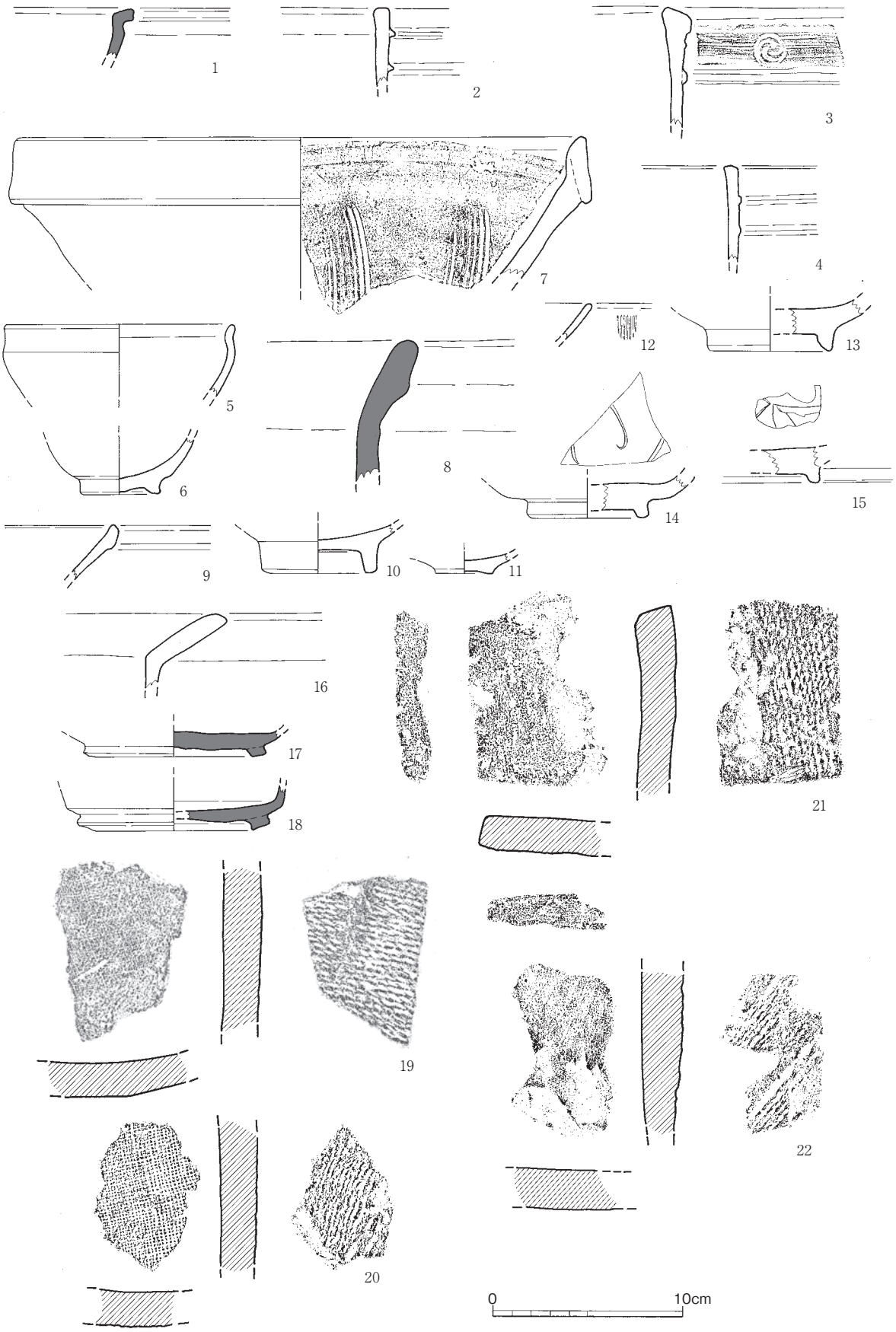
出土遺物（第 65 図）

１は須恵質の小形の鉢である。口縁部を外方に屈曲させ､口縁下に低い突帯状の稜をつまみ出す。２～４は瓦質土器。火鉢の口縁部から体部にかけての破片である。２は直立する口縁部下に２条の突帯をまわし､突帯間に菊花文のスタンプを施す。３は口縁部を肥厚させ､端部は外方に傾斜する。口縁下には断面蒲鉾形の突帯を貼付し、その間に巴文を配する。４は６弁の花文をスタンプする。５は陶器の鉢である。内外面に茶色の釉を施す。６は陶器椀である。胎は粗く、内外面とも青みがかった灰色釉を施す。高台から底部にかけては露胎となる。７は陶器の摺鉢である。７本一対の櫛目を入れる。胎土は粗く、砂粒を多く含む。８は須恵質の大型甕の口縁部である。口縁部は外反する。口縁下は肥厚させ、突帯状の稜を作り出す。頸部下半には格子タタキが残る。９は白磁椀である。小さな玉縁状の口縁となる。10 は白磁椀の高台部、11 は磁器小皿である。胎土は灰色で、内面に黄味がかった緑色釉を施す。12 は青磁の皿か。胎は灰色で緑色釉を施す。13 ～ 15 は龍泉窯系の青磁椀である。いずれも胎土は灰色で高台畳付は露胎となる。14・15 の見込みには花文を施す。16 は土師器甕の口縁部となる。胴は張らない。17・18 は須恵器高台坏で、高台はいずれも断面台形となる。18 は体部と底部の境が明瞭である。19 ～ 22 は平瓦である。凸面には縄目タタキが残る。19 ～ 21 は凹面に布目があるが、22 は板ナデ調整を行う。埋土から砥石２点（第 101 図 19・22)、鉄釘２点（第 103 図 33、53)、短刀２点（第 103 図 65・67）が出土した。

出土遺物から 15 ～ 16 世紀に属するものと考えられる。（吉村）



第 64 図　Ⅲ -AB 区１・２・４・９・22 号溝土層実測図（１/30）



第 65 図　Ⅲ -AB 区 1 号溝出土土器実測図（1/3）

２号溝（図版 32・34、第 64 図）

調査区の中央、１号溝の東に位置する南北溝で、14・15・17 号土坑に切られ、７・42 号竪穴住居跡、４号掘立柱建物跡を切る。規模は長さ 55 m以上、幅は北 0.8 m、中央 1.8 m、南 1.4 mを測り、南側は 17 号土坑で途切れる。深さは木の根による撹乱を受け、0.2 ～ 0.3 mと一定しないが、床面深さレベルは北から 9.2 m、9.2 m、9.5 mと北側に向かって緩やかに傾斜すると考えられる。（大庭）

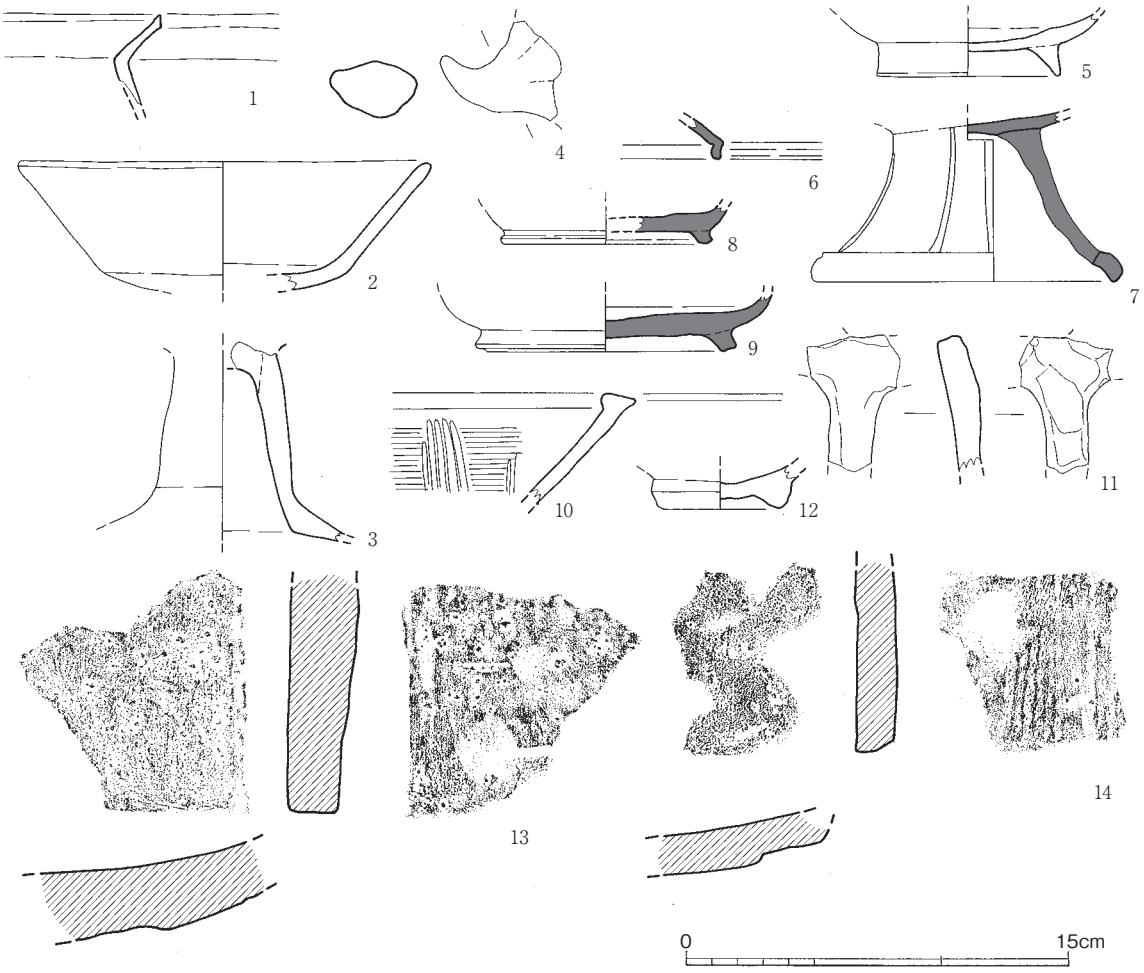
出土遺物（第 66 図）

１～５は土師器である。１は甕、２・３は高坏である。２の体部は直線的で、口縁端部を丸く収める。４は把手である。調整はナデ。５は椀の高台部である。６～９は須恵器である。６は蓋の口縁部である。下方に長く伸びた口縁端部は丸く収める。７は高坏。長方形の透かしが四方に入る。８・９は高台坏の底部である。いずれも断面四角形の高台がやや「ハ」字形に開く。10 は瓦質の擂鉢である。内面に４本一対の櫛目が残る。調整は内面が横方向のハケメ、外面はヨコナデ。口縁端部は肥厚し、平坦面を作り出す。11 は瓦質で鉢の脚部と思われる。上面に透かし状のケズリがあり、全形が知れない。脚部は両側面を削って成形する。12 は陶器椀の高台部。内外面とも緑釉がかかる。13・14 は平瓦。ともに縄目タタキ。埋土から磨石１点（第 102 図 25）が出土した。

出土遺物から 15 ～ 16 世紀に属するものと考えられる。（吉村）

４号溝（図版 32・35、第 64 図）

調査区の北西に位置する東西溝で、３号竪穴住居跡を切り、調査区外の西まで延びる。規模は長



第 66 図　Ⅲ -AB 区２号溝出土土器実測図（1/3）

さ 18.7 m以上、幅は西から２m、中央 1.8 m、東 0.5 mを測り、東側は削平のため、途切れている。深さは西端で 0.3 mを測り、床面深さレベルは東端で９㎝ほどで、床面は緩やかに西に傾斜する。溝断面は基本的に逆半円形を呈する。

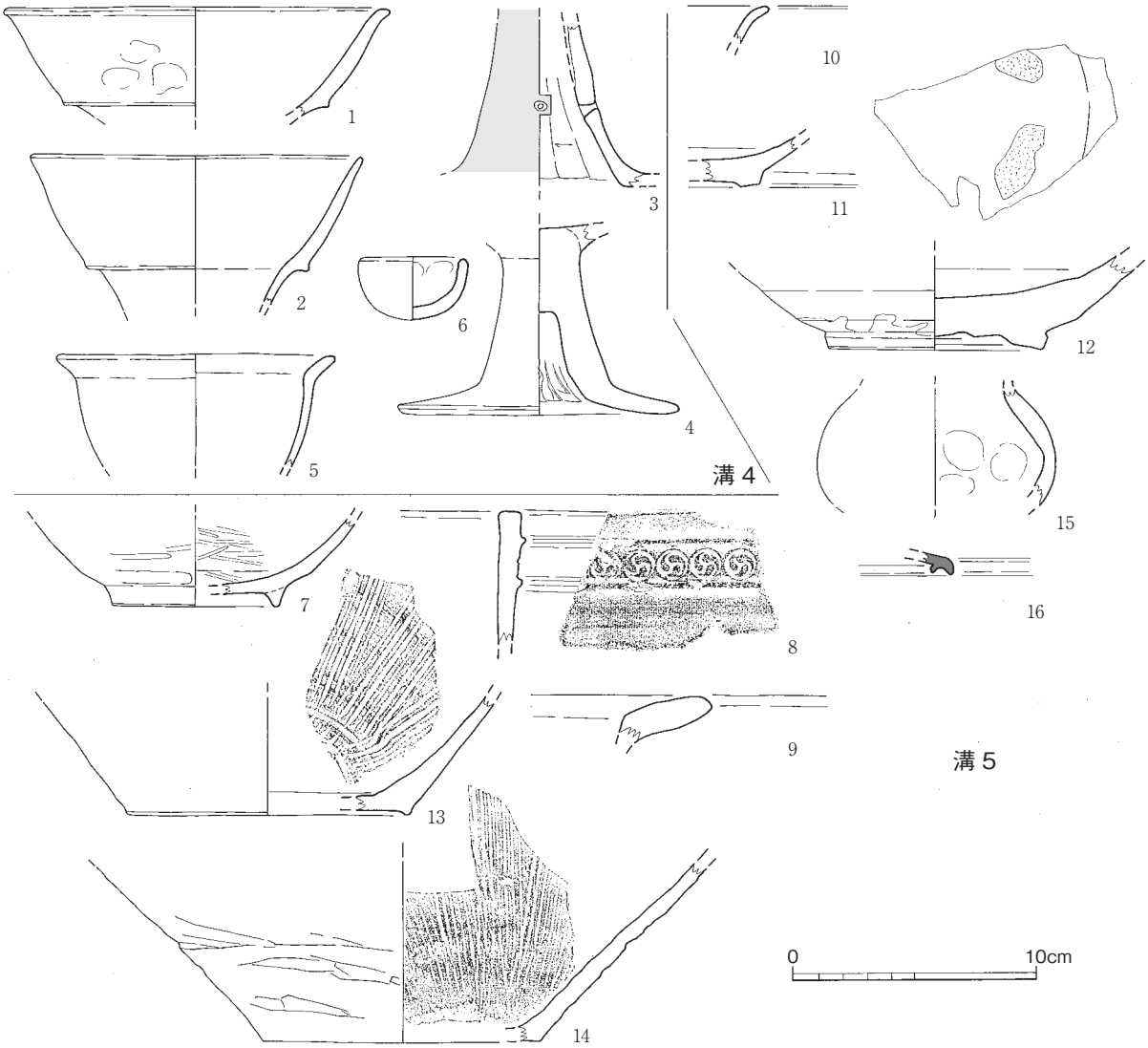
出土遺物（第 67 図１～６）

１・２は口縁部が長く、二重口縁状になる土師器壺口縁部。１は口縁外端部を外につまみ出した形態である。２は二重口縁下端部を外方につまみ出したもの。３・４は土師器高坏脚部。３はほぼ乾燥した時に１ヶ所穿孔を施す。外面にはスリップを塗布する。４の脚柱部内面にはナデ絞り痕が残る。焼成は不良。５は土師器外反口縁鉢。外面には黒斑あり。６は手づくね土器である。

出土遺物から、古墳時代後期後半～末に属すると考えられる。（大庭）

５号溝（図版 35）

調査区の中央に位置する東西溝で、１号溝と繋がる可能性もあるが、切り合い関係と出土土器から１号溝を切る可能性がある。また 10 号竪穴住居跡、６号土坑を切る。規模は長さ 26 m以上、幅は西から 1.6 m、中央 0.7 m、東 1.0 mを測り、西端は調査区外に延びるが、東端は現状で１号溝の東まで延びない。深さは西から 0.19 m、0.15 m、0.2 mであり、床面レベルでは溝床面は緩やかに東側に傾斜する。埋土は灰褐色粘質土の１層のみである。



第 67 図　Ⅲ -AB 区４・５号溝出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第 67 図 7 ～ 16）

7 は瓦器椀で、外面下位にはヘラケズリを施す。外面上位と内面にはミガキを行う。8 は瓦質火鉢口縁部。二条の突帯間には巴文のスタンプを施す。9 は土師質土器の鍋口縁部である。10 は口縁部が外反する白磁椀である。椀Ⅳ類か。釉は灰白色で、胎土は灰白色を呈する。11 はかなり低い高台を有する白磁椀である。内面見込みには段があり、底部は露胎となる。白磁椀Ⅸ類。釉は灰色で、胎土が黄色味がかった灰白色を呈する。12 は陶器大皿で、高台は露胎となる。内面見込みには目跡が顕著に残る。釉は未発色の灰色で、胎土は褐色を呈する。13・14 は陶器擂鉢である。13 は 7 条前後の櫛目を 1 単位とする。14 は外面下位に工具によるナデを粗く施しているため、削りとったような荒れた器表となる。内面には 7 条前後の櫛目を 1 単位として施す。15･16 は混入品。15 は球状の土師器小型壺胴部である。内面には指頭圧痕あり。16 はかえりのある須恵器坏蓋口縁部。埋土から鉄鋤先（第 103 図 60）が出土した。

出土遺物から、17 世紀前後に属すると考えられる。（大庭）

6 号溝（図版 35）

調査区の中央に位置する東西溝で、7 号溝に切られる。元々浅い溝で、削平も受けているため、溝底のみ 4 ヶ所分かれた状態で確認した。規模は検出できた全体で長さ 19 m以上、溝幅は西で最大 0.85 m、西端は調査区外まで延びる。床面レベルは 9.7 m前後となるが、残り具合から東から西に流下したと考えられる。溝断面は逆半円形を呈する。埋土は灰褐色粘質土の 1 層のみである。

出土遺物で図示できるものはないが、埋土から中世以降に属すると考えられる。（大庭）

7 号溝（図版 35）

調査区の中央に位置する東西溝で、6 号溝を切る。6 号溝と同じく元々浅い溝で、削平も受けているため、溝底のみ 2 ヶ所分かれた状態で確認した。規模は検出できた全体で長さ 5.8 m以上、幅は西側で最大 0.3 mと東西端とも削平のため全容は不明である。床面レベルは、西側は 9.65 m、東は 9.7 mとわずかに西に傾斜する。埋土は灰褐色粘質土の 1 層のみである。

出土遺物で図示できるものはないが、埋土から中世以降に属すると考えられる。（大庭）

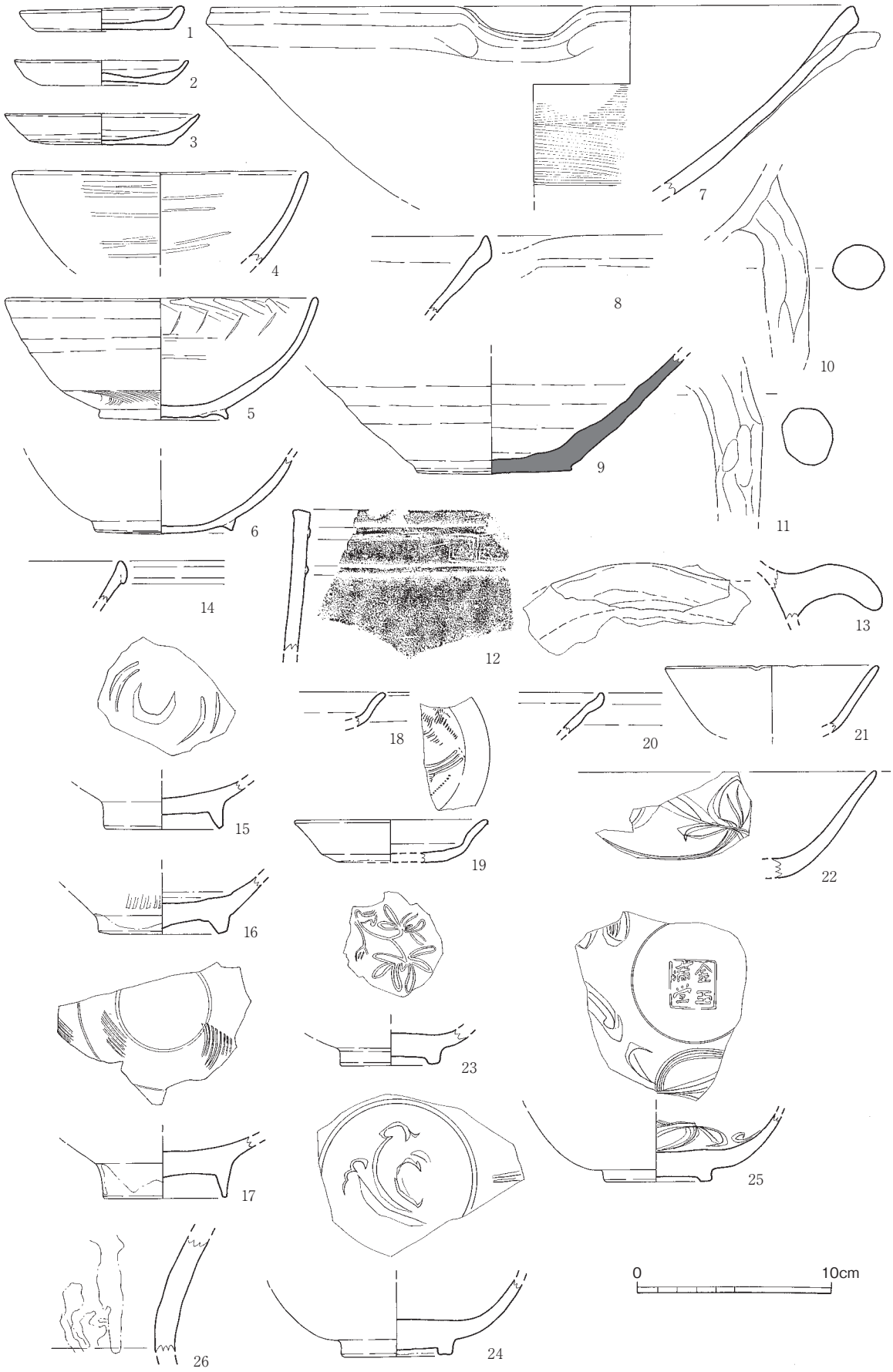
8 号溝（図版 35）

調査区の中央に位置する東西溝で、9 号溝を切る。6 ・ 7 号溝と同じく元々浅い溝で、後に削平も受けているため、2 ヶ所に分かれた状態で検出した。規模は検出できた全体で長さ 17.5 m以上、幅は西 0.3 m、東 0.15 m、深さは西 13㎝、東 7 ㎝で、溝床面は西側に緩やかに傾斜する。溝断面は逆半円形を呈する。埋土は灰褐色粘質土の 1 層のみである。

出土遺物で図示できるものはないが、埋土から中世以降に属すると考えられる。（大庭）

9 号溝（図版 35・36、第 64 図）

調査区の南西部でコ字形に巡る溝で、中央部と南壁際で鍵形に折れる。北辺溝は西側の調査区外に延び、南辺溝はⅢ -C 区の 10 号溝に接続する。8 号溝に切られ、13・18・24・43・44 号竪穴住居跡、10 号溝、方形周溝を切る。区画は溝の外側の上端間で南北長 35 m、東西長 70 m以上となる。



第 68 図　Ⅲ -AB 区 9 号溝出土土器実測図（1/3）

溝の規模は上端幅 0.9 ～ 1.25 m、下端幅 0.45 ～ 0.6 m、深さ 0.4 mを測る。断面形状は上部が開いたＵ字形を呈し、底面のレベルはほぼ水平である。土層は自然堆積の状況を示し、下層の茶褐色粘質土・灰色粘質土の上に茶褐色土が厚く堆積する。北辺溝の北側には５号溝が、東辺溝の東側には１号溝が平行して走る。また、南辺溝はⅢ -C 区の 11 号溝と平行して走っている。

出土土器（図版 50、第 68 図）

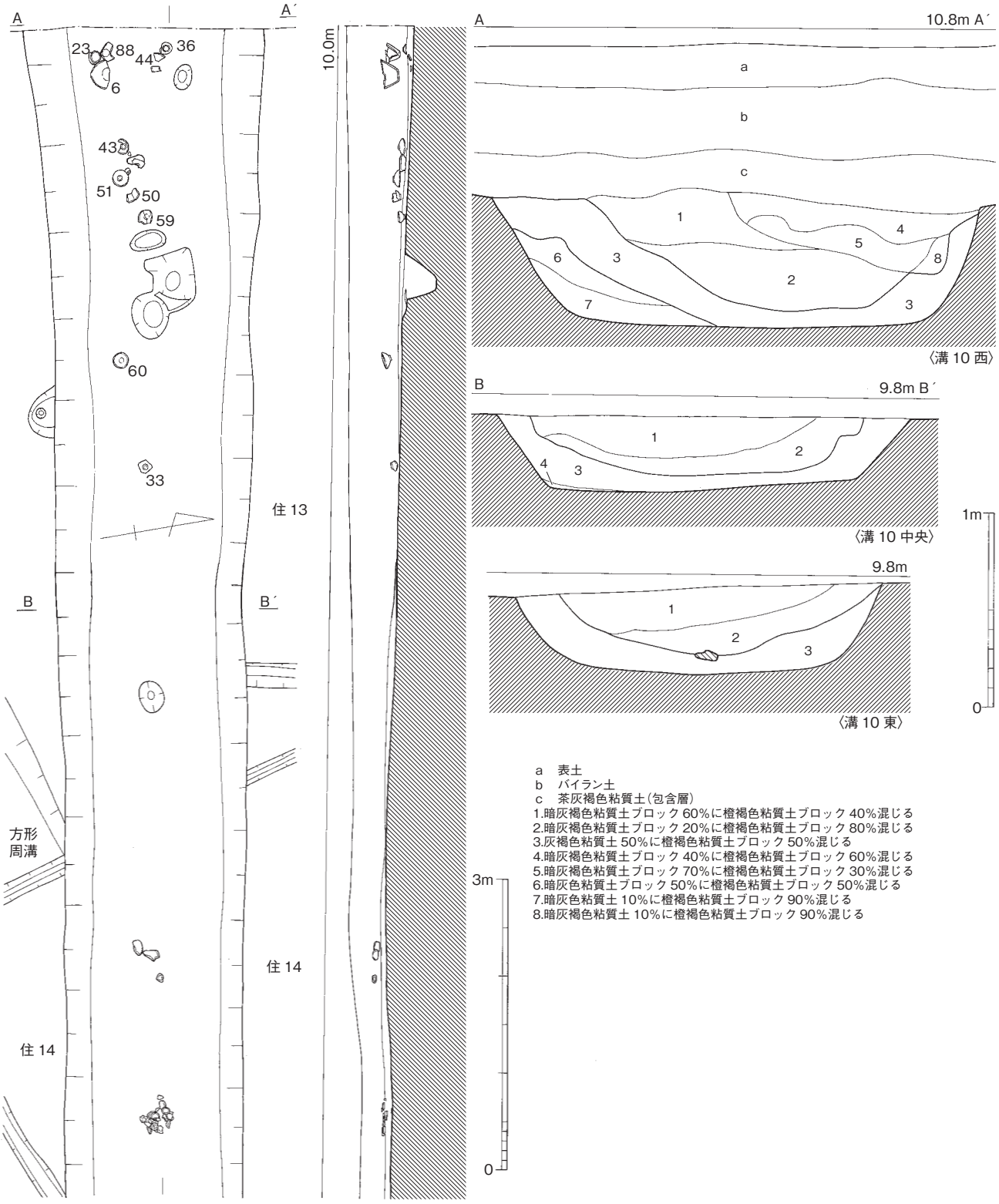
１～３は土師器小皿である。１・２は糸切り。共に底部内面はナデ調整で、１の底部外面には板状圧痕が残る。法量は口径 8.5 ～ 10.0cm、底径 7.0 ～ 7.2cm、器高 1.3 ～ 1.6cm を測る。４～６は瓦器椀である。緩く内湾する体部に断面三角形の高台を貼付する。調整は４が内外面とも横方向にミガキ、５・６の内面がミガキ、５の内面上位にはコテ当て痕が残る。法量は口径 15.2 ～ 16.1cm、高台径 6.7 ～ 7.4cm、器高 6.2cm を測る。７～９は鉢である。７は瓦質の片口鉢で、調整は外面がナデ、内面には横方向のハケメが残る。口径は 33.7cm を測る。８も片口部分で口縁部は断面三角形となる。９は須恵質鉢の底部である。調整は外面がナデ、内面はヨコナデを施す。底部内面は使用により摩滅する。10・11 は土師質土器の三足鍋の脚部で同一個体と考えられる。指ナデによって成形される。12 は瓦質土器鉢の口縁部で、口縁下の２条の突帯間に雷文を施す。13 は移動式カマドの把手である。調整はナデを施し、胎土に微砂粒を含むが精良である。14 ～ 17 は白磁椀である。14 は口縁部が小さな玉縁状となるもの。15 ～ 17 は高台部であるが 14 と同様の玉縁口縁となる。いずれも胎は灰色で灰味を帯びた透明釉を施す。15 の見込みには片彫りによる花文、17 の見込みには櫛描きによる施文を行う。18 ～ 25 は青磁である。18 ～ 20 は皿である。18 は見込みに櫛描きがある。ともに灰色の胎に緑味を帯びた釉を施す。底部は露胎となる。21 は坏である。口縁部を外側に屈曲させて端部を上方につまみ上げる。21 は輪花の小椀である。灰色の胎に緑味を帯びた透明釉を施す。22 ～ 25 は椀である。23 は見込みに草花文を型押しする。24 ～ 25 は内面に草花文を彫る。25 は「金玉満堂」のスタンプがある。いずれも高台畳付は露胎となる。龍泉窯系。26 は壺の頸部である。内面に釉垂れが見られる。

出土した遺物は 13 世紀代を中心とするが、15 世紀に下る遺物もわずかではあるが出土している。９号溝に接続するⅢ -C 区の 10 号溝や、平行して走る１号溝が 15 ～ 16 世紀代に最終埋没していることを勘案すると９号溝と同時期に属する可能性が高い。（吉村）

10 号溝（図版 35 ～ 38、第 69 図）

調査区の中央南寄りの西端から、９号溝と切り合う地点で直角に折れ曲がり、そこから９号溝と重複しつつ南側に延び、９号溝のように西側に直角に折れ曲がることなく、そのまま立ち上がる、逆Ｌ字形の溝である。９号溝に切られ、14・16・24・43・44 号竪穴住居跡、30・36・37 号溝、方形周溝を切る。溝西側は調査区外まで延びる。規模は東西 24 m以上、南北は 22.5 m、溝幅は北側は西から 2.5 m、1.9 m、2.1 m、東側は９号溝と重複し、南端で幅 1.5 m程度となることから、９号溝に切られる東の溝幅は北側の幅と同程度と考えられる。深さは北側で西から 0.62 m、0.45 m、0.4 m、東側で北から 0.5 m、0.43 m、0.5 mを測り、床面レベルでは９号溝と同じく北から南に向かって床面は緩やかに傾斜するが、溝東側の 43・44 号竪穴住居跡付近で、南への傾斜がややきつくなり、南端で急に立ち上がる。溝断面は基本的に逆台形を呈する。

溝土層図から北側の溝西側では、１・２・４・５・８と３、６・７と大きく３回、北側の溝中央



第 69 図　Ⅲ -AB 区 10 号溝出土状況・土層実測図（1 /60、土層は 1 /30）

では、1・2と3で大きく2回の堆積、東側では1・2と3の2回の堆積が確認できる。また溝北側西端では溝床面から少し浮いた状態で多数の瓦器椀、東播系須恵器、龍泉窯系青磁等が、北側の中央ではほぼ床面直上で多数の土師器皿がまとまって出土した。

出土遺物（図版 51・52、第 70 ～ 73 図）

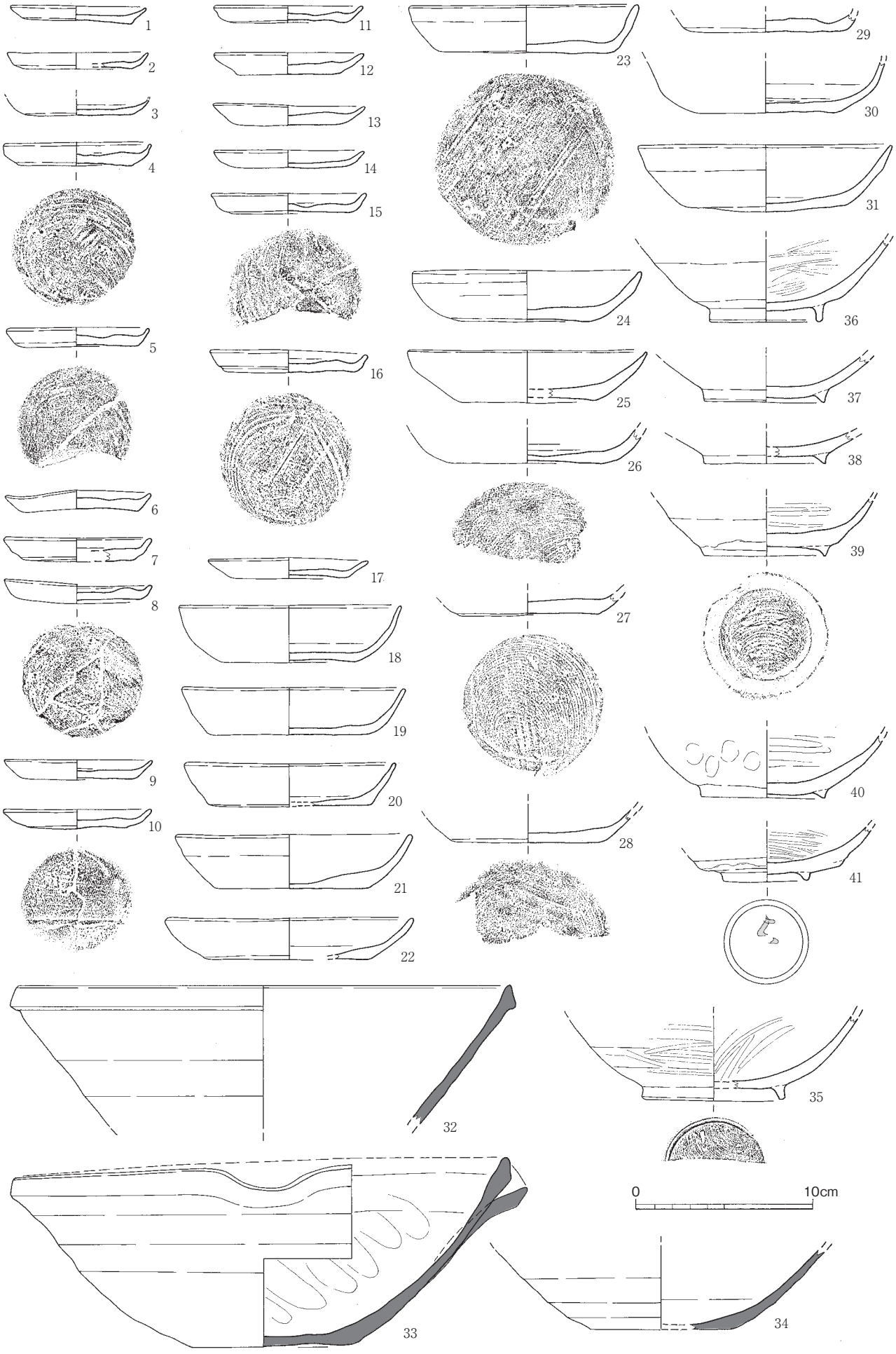
1 ～ 17 は土師器皿で、胎土にいずれも当地域の特徴である金雲母・赤色粒を含む。1 の口径は 7.8㎝、17 の口径は 9.1㎝と、口径の小⇒大に割り付けている。糸切り底は3～5・8・9・11～

13・15 ～ 17 で、そのうち静止糸切りは４・15 ～ 17、回転糸切り底は５、ヘラ切り底は７で確認できる。また底部の板状圧痕は１・７・９・10・15 で残る。煤は９・13 に付着する。二次加熱痕は６に認められる。18 ～ 31 は土師器坏である。土師器皿と同じく金雲母・赤色粒を含む胎土のものがほとんどである。口径は 12cm～ 14.4cm、器高は 2.5 ～ 3.8cmである。18･19 は丸みを帯びた平底、20 ～ 23 は平底、24 ～ 27 は上げ底。28 ～ 30 は完形に復元できない丸みを帯びた平底、31 は丸底として分類し、割り付けた。糸切り底は 18 ～ 21・23・26 ～ 31 で、そのうち静止糸切りは 21・23・26・27、回転糸切りは 28 で確認された。また底部の板状圧痕は 22・23・27・28 で残る。二次加熱痕および煤が 18 に認められる。19 は完形品で、口径 12.6cm、底径９cm、器高 2.7cmを測る。23 は板状圧痕が残る。27 の内面は布によるナデを行う。最も大きい 31 は口径 14.4cm、器高 3.8cmを測る。

32 ～ 34 は須恵器鉢である。32・33 は東播系須恵器片口鉢である。32 の外面はナデによる凹凸が顕著で、口縁部には自然釉が付着する。33 は復元口径 27.8cm、器高 9.6 ～ 10.7cmを測る。底部は静止の糸切り底で、あまり乾いていない状態で成形したため、外面下位には粘土塊が飛び散っている。34 も静止糸切り底である。

35 ～ 54・56 ～ 62 は瓦器椀である。35 ～ 41 は底部片で、高台が高く四角形なものから低いものへと割り付けている。35 は底部に静止糸切り底が残る。36 の外面はケズリ後ナデを施す。39 は底部に静止糸切り底が残り、底部と体部との境にはケズリを行った際の段が付く。40 は内面に太いヘラナデを施し、外面には二次加熱痕あり。41 は外面の粘土処理が雑なため、接合痕が顕著に残る。高台内見込みには「上」と思われる墨書が認められる。43 ～ 54 は体部下部の腰の膨らみが少ない、直口タイプを口径の小さい順に割り付けたものである。43 ～ 51 は特に低い高台である。43 の口径は 14.6cm、54 の口径は 17cmである。42・45・46・49 の外面下位はヘラケズリ痕、44・50・54 はヘラナデが認められる。47 の高台内見込みには板状圧痕、53・54 は静止糸切り痕が残る。44 の内面は下から放射状にミガキを施す。45 の口縁部内外面は白灰色で、それ以外は黒化する。47 は口縁部外面のみ黒化する。49 は外面中位にハケメを施す。51 の口縁部内外面は白灰色、それ以外は黒化するが、内外面とも剥離が顕著なため、調整は不明である。53 の内面は炭素を吸着させた状況が良く残る。54 は外面にヘラナデを施したもの。56 ～ 62 は体部下部が膨らむ椀状タイプを、口径の小さい順に割り付けたもの。56 の口径は 13.8cm、62 の口径は 16cmである。58・59・61 の高台は三角形を呈する。56 ～ 58・61 は外面下位にヘラケズリ痕が残る。55 は白色研磨土師器椀の可能性がある。56 は口縁部内外面が黒化、それ以外は灰色を呈する。57 の外面は斑状かつ内面全体に煤が付着する。59 は口縁部内外面が黒化、それ以外は淡灰色を呈する。59 は外面下位にはヘラナデを施す。60 ～ 62 はほぼ完形のもの。59 は口縁部内外面が白色、それ以外は灰色を呈する。61 の内面には煤が付着し、外面には二次加熱痕がある。62 の外面は粗いミガキを施し、内面には放射状にミガキを施す。高台との境には粘土継ぎ目痕が残る。63 は大型の瓦質鉢。外面は指頭圧痕が顕著で、内面にはハケメを密に施す。64 ～ 69 は短い口縁部が外折し、外面に指頭圧痕、内面にハケメを施す土師質土器の鍋である。64 ～ 66、68 は口縁内端部を上方につまみ出した形態である。67・69 の体部は直立気味で、それ以外は緩やかに曲がり底部へと至る。いずれも外面には煤が多量に付着し、64・66・67・69 には二次加熱痕が認められる。66・67 の内面にはコゲが付着する。口径は 64 が 29.8cm、69 が 41.7cmとかなり幅がある。

70 ～ 72 は３足の土師質土器の足鍋である。70・71 は足片で、いずれも煤が付着し、70 は二次



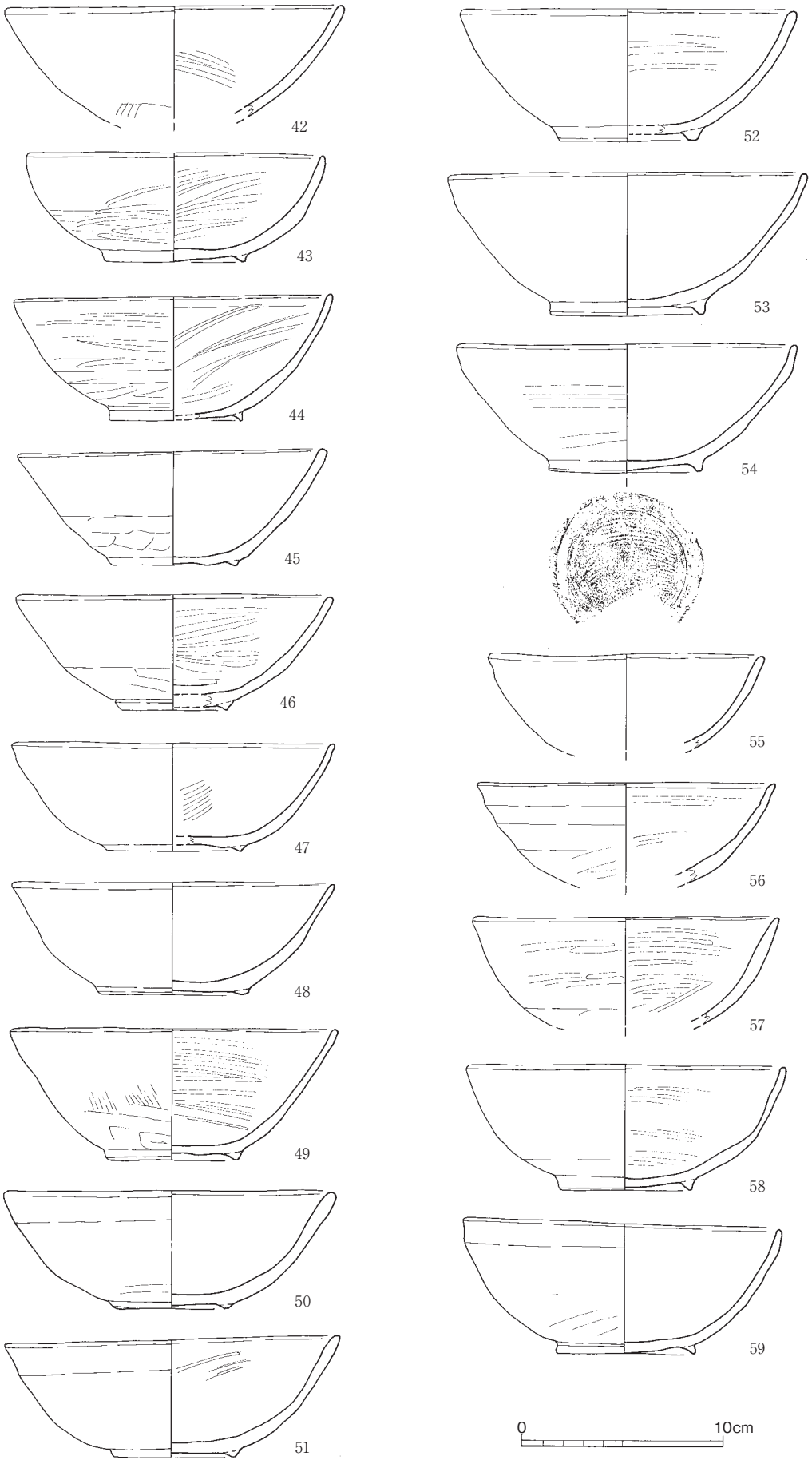
第 70 図　Ⅲ -AB 区 10 号溝出土土器実測図①（1/3）

加熱痕がある。72は図上で復元できたもので、復元口径25.8cm、器高21.7cmとなる。口縁部は外折し、足と鍋の貼り付け部にはハケメを密に施す。足先は外側に曲げる。外面には斑状に煤が付着する。

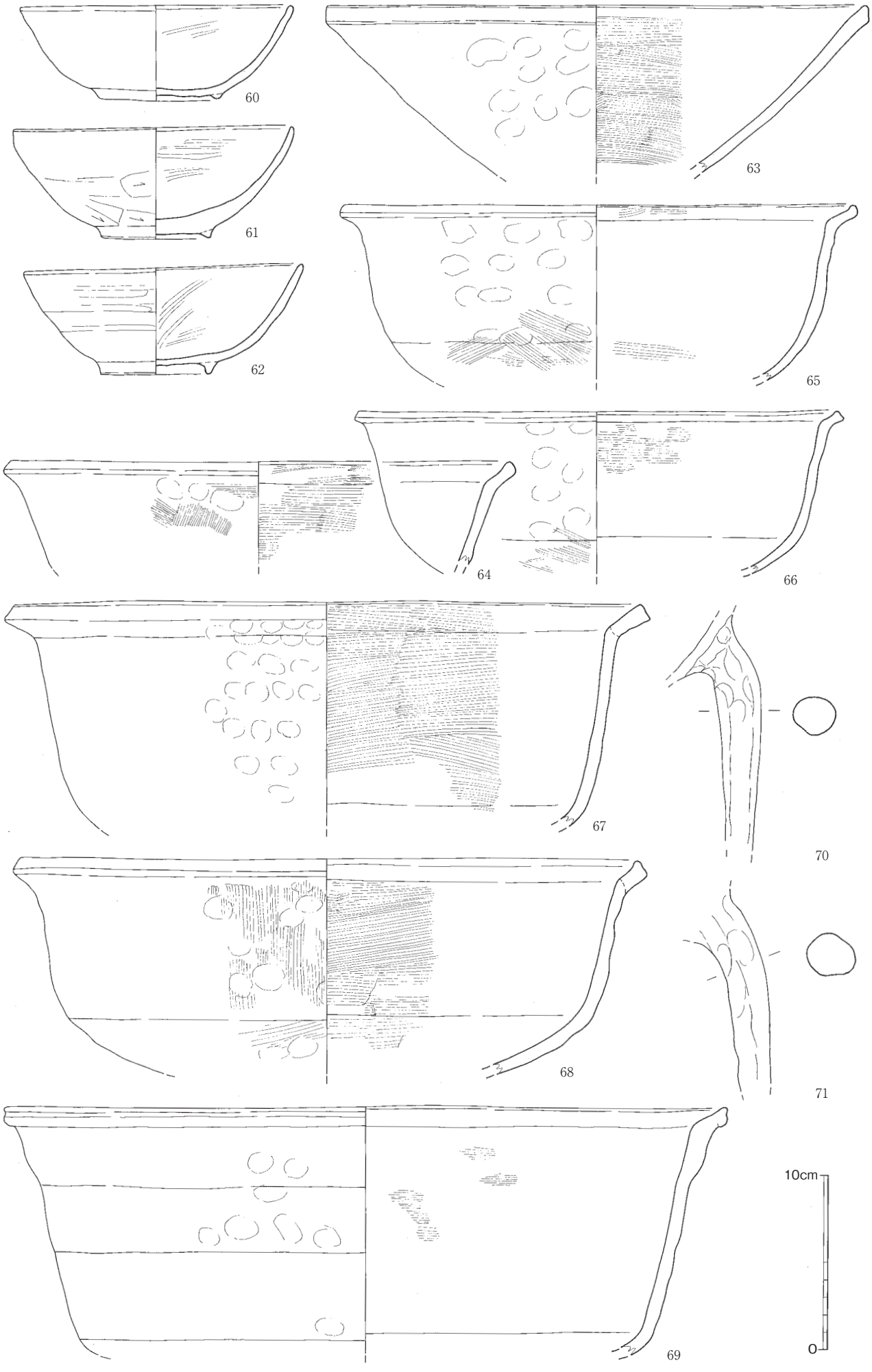
73～78は白磁椀である。73は口縁部が水平に折れ曲がる白磁椀Ⅴ類。釉は灰色味の暗い透明で、胎土は灰白色を呈する。74は玉縁口縁のもので、体部上位は釉の重ね掛けを行う。釉は厚い淡緑白色で、胎土は灰白色。白磁椀Ⅺ類。75・76は高い高台の白磁椀Ⅴ類。75は内面および高台外側中位まで釉を掛け、それ以外は露胎である。釉は白灰色で、胎土は淡灰色。76は内面見込みに1条の界線が巡り、内面には淡灰色の釉を掛け、外面はすべて露胎である。胎土は灰白色。77・78は低い高台の白磁椀Ⅸ類か。77の内面見込みは段状に窪み、外面は露胎である。釉は発色のよい乳白色で、胎土は灰白色。78は内面見込みにヘラ描き文が認められるが、何の文様になるかは不明である。釉は水色味を帯びる白色、胎土は青色味を帯びる淡灰色である。79・80は白磁皿である。79の外面は露胎で、内面には淡白灰色の釉を掛け、胎土は淡灰色である。白磁皿Ⅱ類か。80は平底の白磁皿Ⅸ-1c類。口縁部内面は釉剥ぎを行う。釉は淡灰色で、胎土は硬質の灰色。口径10.4cm、底径3.2cm、器高2.8cmを測る。81は口径5.6cm、器高1.8cmの型づくりの白磁合子の蓋で、天井部には菊花弁の刻みが廻る。釉は発色が悪い灰黄緑色で、胎土は黄灰色を呈する。82は同安窯系皿で、外面には櫛目、内面には2条のヘラによる花文を施す。釉は黄色味の緑色で、胎土は灰白色である。

83～93は龍泉窯系青磁椀である。83～86は内外面無文、87～90は外面のみ無文、91～93は外面蓮弁文、内面無文として分類し割り付けを行った。83は腰が張る小椀Ⅱ類か。釉は青色味を帯びた緑色で、胎土は粗く、灰色を呈する。84は椀Ⅳ類か。釉は黄色味が強い薄黄緑色で、胎土は粗く、白灰色を呈する。85は椀Ⅱ類か。釉は厚く、灰緑色で、胎土は灰色。86は口径16.5cm、底径6.5cm、器高6.9cmを測るもので、特に底部の器壁は厚い。外面下位には生地のケズリ痕が認められる。内面見込みは段状になる。釉は厚い深緑色で、口縁部は重ね掛けを行う。高台内は露胎である。胎土は粗く、灰色を呈する。87は内面上位に2条の片彫り分割線を入れ、その中に片彫りの草花文を施す。釉は厚く深緑色で、胎土は灰色を呈する。椀Ⅱ-3a類か。88の口縁部外面には黄色味がかった緑色の釉を重ね掛けし、内面は櫛により4分割し、その中に飛雲文を施す。胎土は灰色。高台内まで釉がかかる。口径15.9cm、底径7cm、器高7.1cmを測る。89は内面上位に片彫りで3条の分割線を入れ、その中に3個の略化した花文を施す。釉は黄緑色で、胎土は黄灰色を呈する。90は内面に分割線を入れ、その中に飛雲文を施し、見込みには片彫りの雲文を彫るもの。高台内は露胎、釉は黄色味がかった黄緑色で、胎土は淡灰色。椀Ⅰ-4類か。91は外面にわずかに片彫りの蓮弁文が残る。高台内は露胎。釉は半濁化した灰黄緑色で、胎土は赤灰色を呈する。92の外面は鎬がある鎬蓮弁文で、椀Ⅱ-b類。高台内は露胎、釉は青味を帯びた緑色で、胎土は灰白色。口径16cm、底径5.8cm、器高9cmを測る。93は鎬がない片彫りの蓮弁文で、釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。94の外面はナデ、内面には布目痕がある丸瓦。混入品。95は弥生中期前半の甕で、底部のみ後に支脚として再利用したものと考えられる。外面には顕著な二次加熱痕があり、内面には黒斑がある。混入品。埋土から砥石1点（第101図16）、石鍋片1点（第103図30）、刀子1点（第103図63）、鉄塊2点（第104図69・72）、鉄滓1点（第104図76）が出土した。

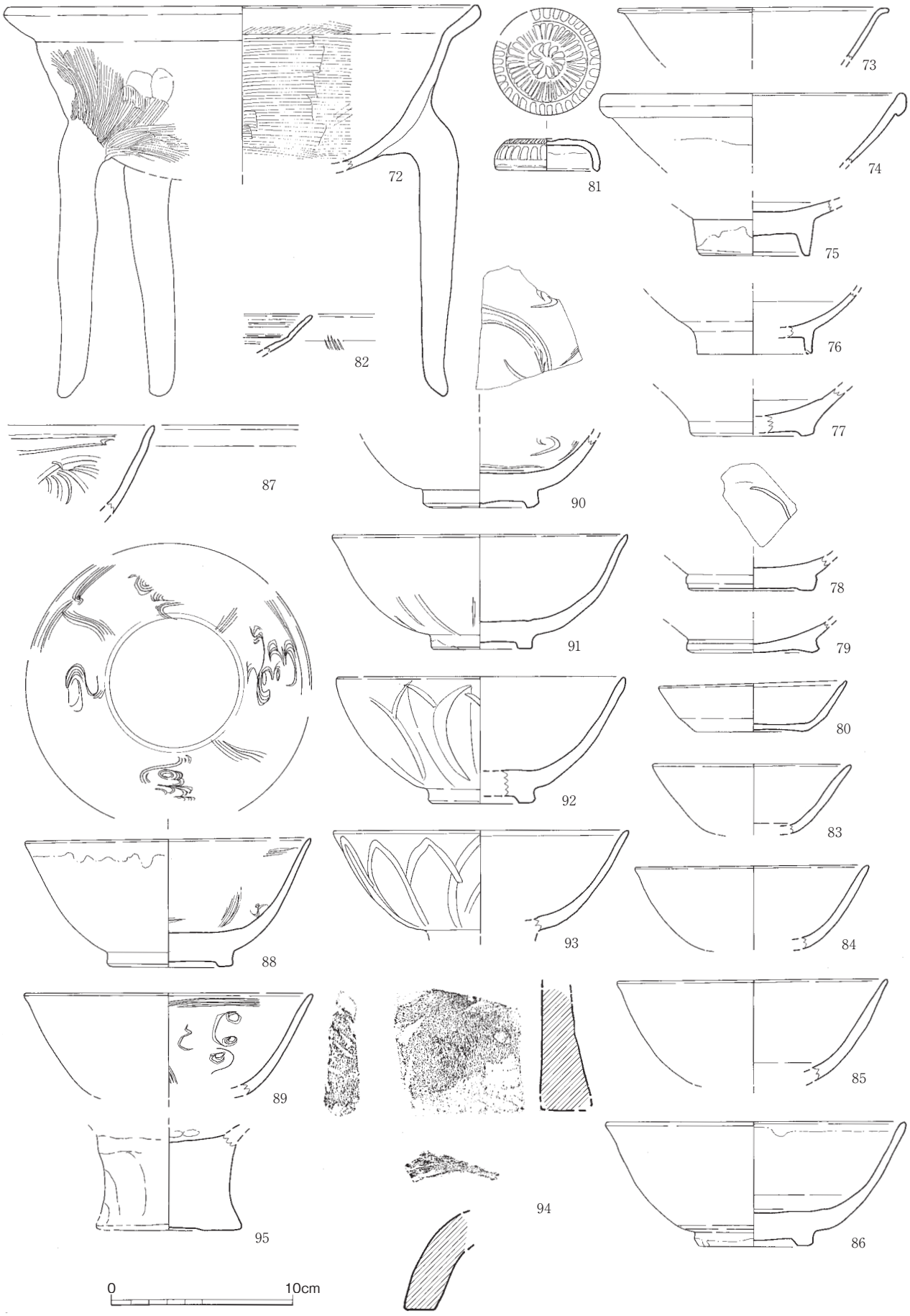
出土遺物から14世紀前後に属すると考えられる。（大庭）



第 71 図　Ⅲ -AB 区 10 号溝出土土器実測図②（1/3）



第 72 図　Ⅲ -AB 区 10 号溝出土土器実測図③（1/3）



第 73 図　Ⅲ -AB 区 10 号溝出土土器実測図④（1/3）

21 号溝

調査区の南西寄りに位置する南北溝で、21 号竪穴住居跡に切られ、北側は削平のためか途切れている。規模は検出できた全体で長さ 2.4 m以上、幅は 0.12 m前後、深さは 0.12 mの浅い小溝で、溝床面はわずかに南に傾斜する。埋土は暗灰褐色粘質土の 1 層のみである。

出土遺物はないが、切り合い関係から弥生時代後期終末以前の溝である。（大庭）

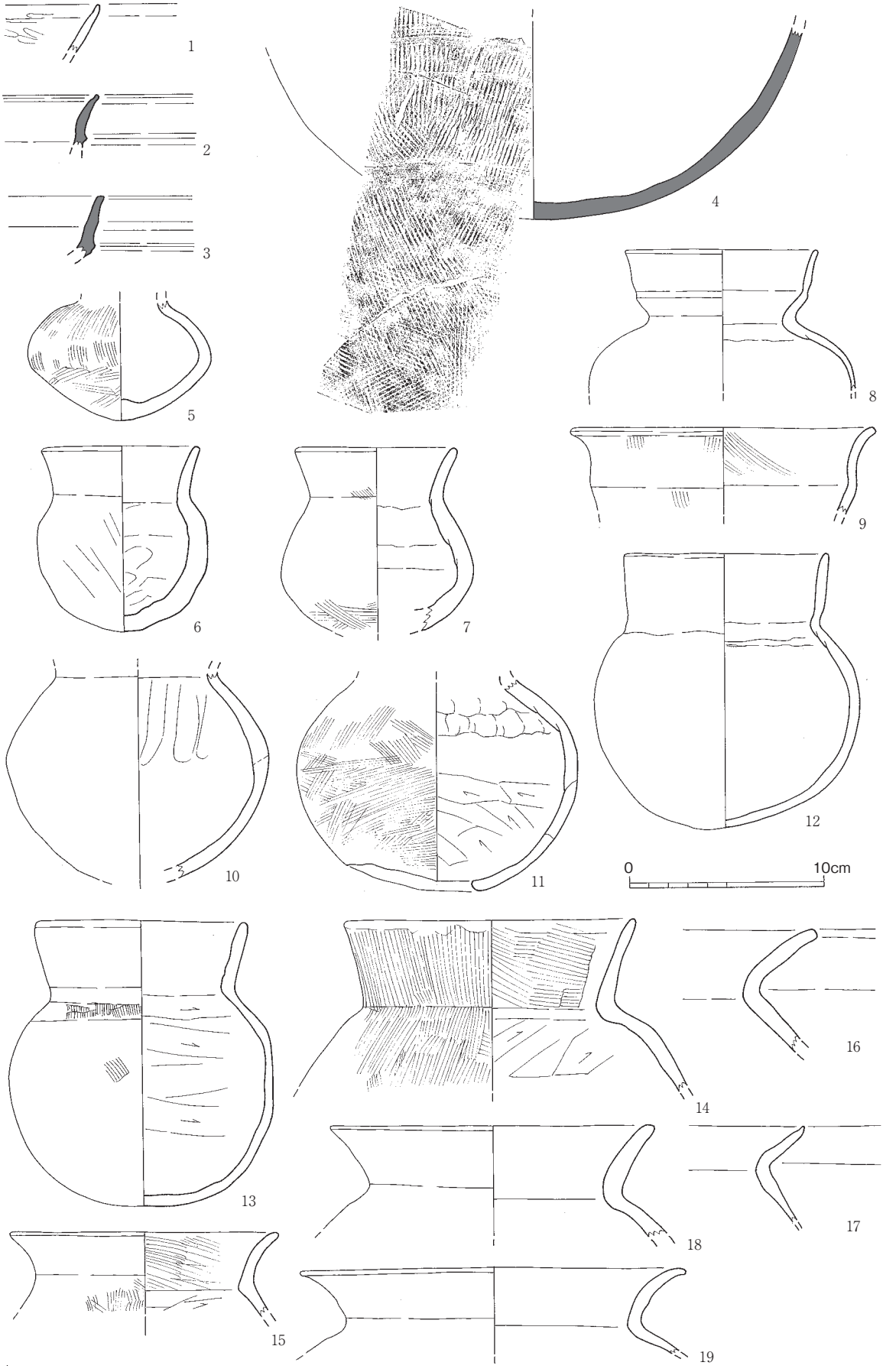
22 号溝（図版 39、第 64 図）

調査区の南西寄りに位置し、26・27・28・30・34 号竪穴住居跡、Ⅲ -C 区 2 号掘立柱建物跡、23 号溝を切る。規模は長さ 18m、幅 1.6m、深さ 0.25m で、床面は凹凸がありどちらに流れるか不明である。埋土は上層が暗灰茶褐色粘質土、下層が灰黒色粘質土である。

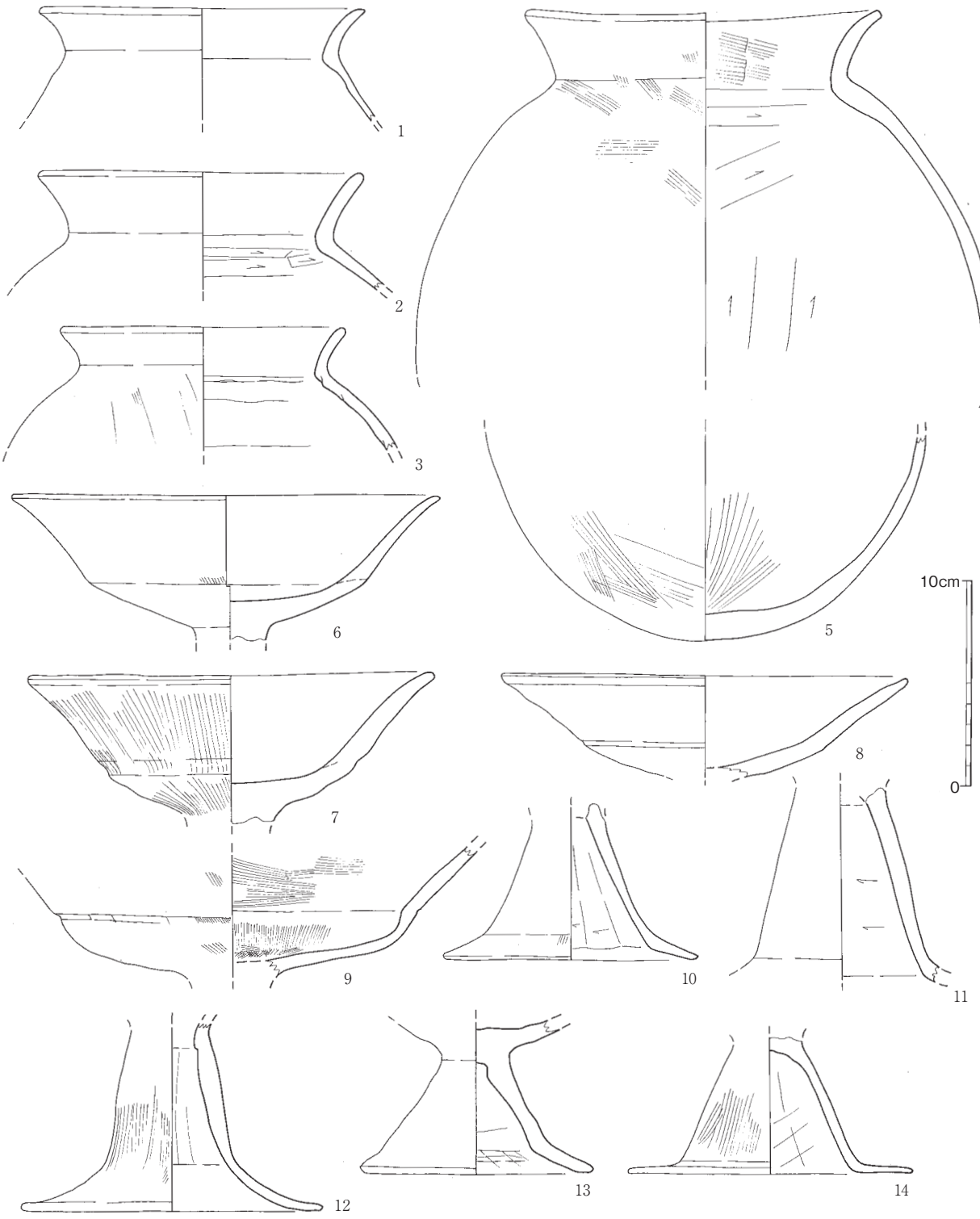
出土遺物（図版 52、第 74・75・76 図）

第 74 図 1 は瓦器椀である。内面ミガキ、外面ナデを施す。２・３は須恵器の甕か。口縁下に断面三角形の突帯が付される。共に回転ナデを施し、２の内面に灰被りが見られる。４は甕である。外面タタキ、内面ナデを施す。内面に灰被りが見られる。５～ 13 は土師器壺である。５～７は小型壺で、５は摩滅が著しいが外面にハケメが残る。６は口縁部ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面工具によるナデを施す。外面に煤が付着する。７は摩滅するが、胴部外面および頸部にハケメが残る。外面に黒斑が見られる。８・９は口縁が中位で屈曲する。共に摩滅するが、９は外面にハケメ後ナデ、内面一部工具痕が残る。10 は摩滅するが内面上位にユビナデが残る。11 は底部の中央からややずれた位置に穿孔が施される。外面ハケメ、内面上位ナデ、下位ケズリを施す。胴部には焼成時の破裂痕と考えられる孔が見られる。12 は口縁部ヨコナデ、胴部内外面ナデが残る。13 は口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部内面ケズリが残る。口縁部外面に黒斑、胴部外面に煤が付着する。14・15 は甕か。14 は口縁部が直線的に伸び、胴部内面ケズリ、他はハケメを施す。15 は口縁部外面ヨコナデ、胴部内面ケズリ、他はハケメを施す。16 ～ 19、第 75 図 1 ～ 5 は甕である。16 ～ 19 はいずれも摩滅するが、17 の内面で器壁が薄くなることからケズリを施すか。第 75 図 1 ～ 3 はいずれも摩滅するが、２の胴部内面にケズリ、３の胴部外面にハケメが残る。4 は摩滅が著しいが、胴部内面ケズリ、他はハケメを施す。５は内外面共にハケメが残り、外面に黒斑が見られる。６～ 14、第 76 図 1 ～ 3 は高坏である。６～８は摩滅するが、６・７の外面にハケメ後ナデが残る。９は外面ナデ、内面ハケメを施す。10 ～ 14 は脚部のみが遺存し、摩滅するものの、いずれも内面にケズリが施される。12･14 は外面にハケメが残る。第 76 図 1 は外面ハケメ後ナデ､坏部内面ハケメ、脚部内面シボリを施す。２は摩滅が著しいが坏部外面にハケメ、脚部内面にケズリが残る。3 は摩滅が著しいが、脚部内面にケズリが残る。４は椀である。わずかに平底気味を呈し、口縁端部が外反する。摩滅するが内面に工具痕が残る。５はミニチュア土器である。ユビナデで成形する。６は羽口である。被熱のため灰色に変色している部分が認められ、先端に近い部分と考えられる。

出土遺物は、弥生時代終末～古墳時代前期、古墳時代後期に属するものが多いものの、下層の住居跡等からの混入品ないしは床面を誤認したための混入品と考えられる。埋土および第 74 図 1 の土器から中世に属するものと考えられる。（城門）



第 74 図　Ⅲ -AB 区 22 号溝出土土器実測図①（1/3）



第 75 図　Ⅲ -AB 区 22 号溝出土土器実測図②（1/3）

23 号溝

調査区の南西寄りに位置する溝で、22 号溝に切られ、27・30 号竪穴住居跡を切る。北側は削平のためか途切れている。規模は検出できた全体で長さ 3.1 m、幅は 0.9 m前後、溝床面は二段掘りとなるが、深さは 0.12 m前後と浅い。溝床面は緩やかに南に傾斜する。埋土は灰褐色粘質土の 1 層のみである。

出土遺物（第 76 図 7）

図示できたものは 1 点のみである。7 は須恵器椀体部と考えられる。1 条の凹線下に最大 8 条程

度の櫛描波状文を施す。混入品である。

埋土から中世に属する可能性が高い。（大庭）

24 号溝

調査区の中央南寄りに位置し、25 号溝を切る。規模は長さ 3.1m、幅 1m、深さ 0.3m で東流する。

出土遺物（第 76 図８）

８は土師器の壺である。摩滅が著しいが、外面にミガキが残る。

切り合いと出土遺物から、古墳時代に属するものと考えられる。（城門）

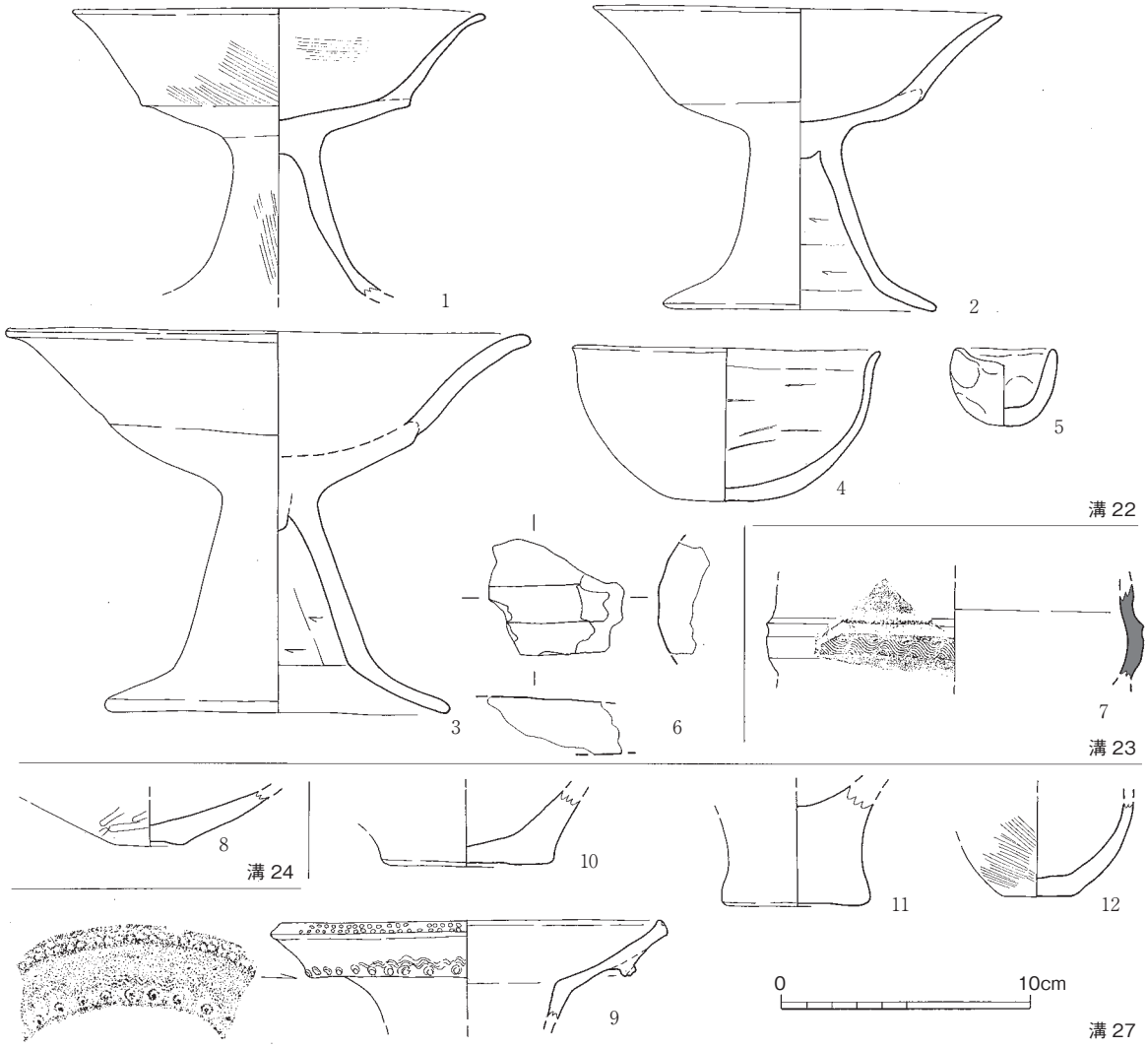
25 号溝

調査区の中央南寄りに位置し、24 号溝に切られる。規模は長さ 5.3m、幅 0.6m、深さ 0.3m で南東に流れる。南東側の端部がやや南方向に屈曲する。

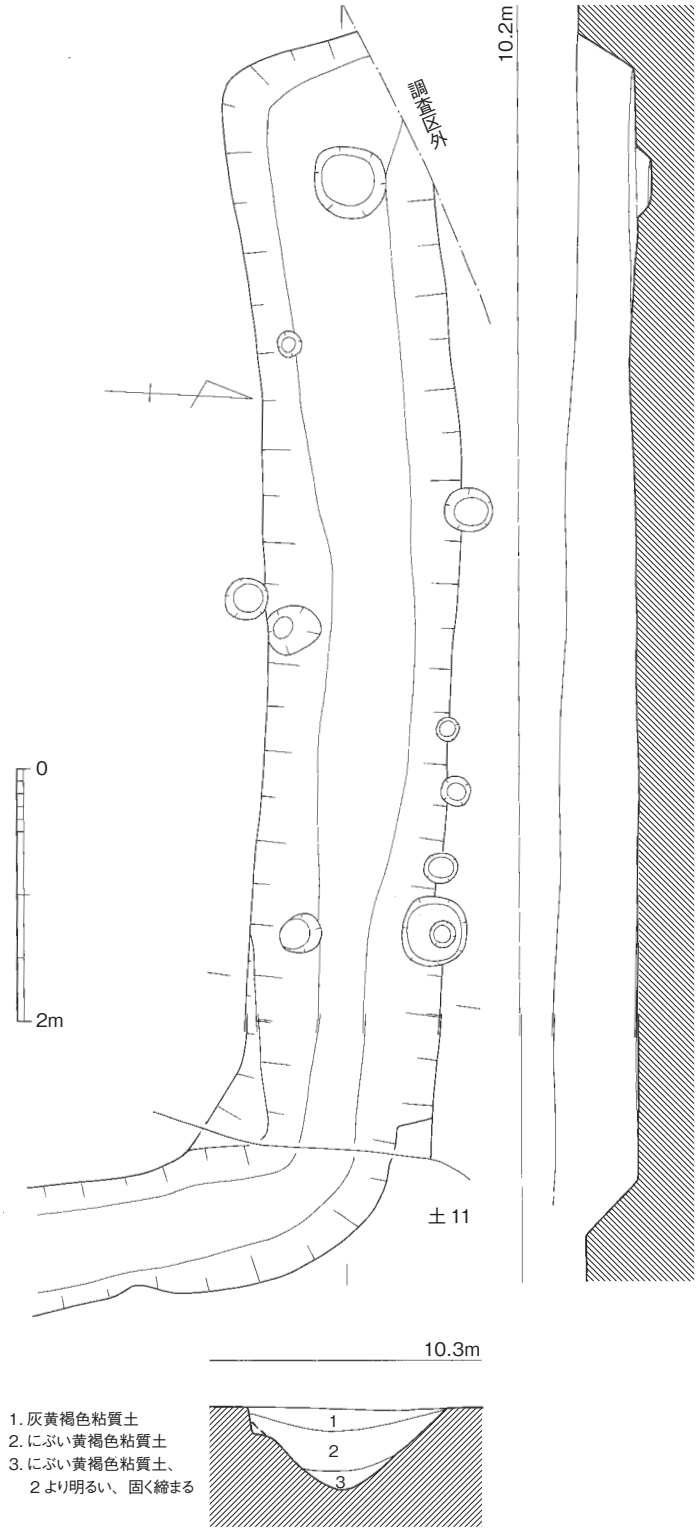
出土遺物はなく、切り合いから古墳時代以前に属するものと考えられる。（城門）

27 号溝（図版 39、第 77 図）

調査区の南西端に位置し、11 号土坑に切られる。規模は東西長さ 9.4m、南北長さ 2m 以上、幅 1.6m、深さ 0.6m で床面の高さは一定しない。Ⅲ -C 区の 18 号溝と同一遺構で、南北長が 30m 弱に



第 76 図　Ⅲ -AB 区 22 ～ 24・27 号溝出土土器実測図（1/3）



第 77 図　Ⅲ -AB 区 27 号溝実測図（1/60）

なる。西端部では調査区外に延びるものの、下端からさらに溝が北側に向かうもしくは陸橋部になる可能性がある。床面や壁面からいくつかのピットが検出されているものの明確に並ぶものは認められない。

出土遺物（第 76 図 9 ～ 12）

9 は壺である。口縁部に浮文ならびに波状文、口唇部に 2 列の列点文が施される。10・11 は甕である。共に摩滅のため調整は不明である。12 はミニチュアの壺である。外面ハケメ、内面ナデを施す。

切り合いと出土遺物から、弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。（城門）

28 号溝

調査区の南西側に位置し、35 号竪穴住居跡、9・31 号土坑に切られる。規模は長さ 6m、幅 0.6m、深さ 0.05m で、床面はほぼ水平である。弧状を呈し、約 1.8m 東側に離れた 23 号溝と同一遺構の可能性がある。

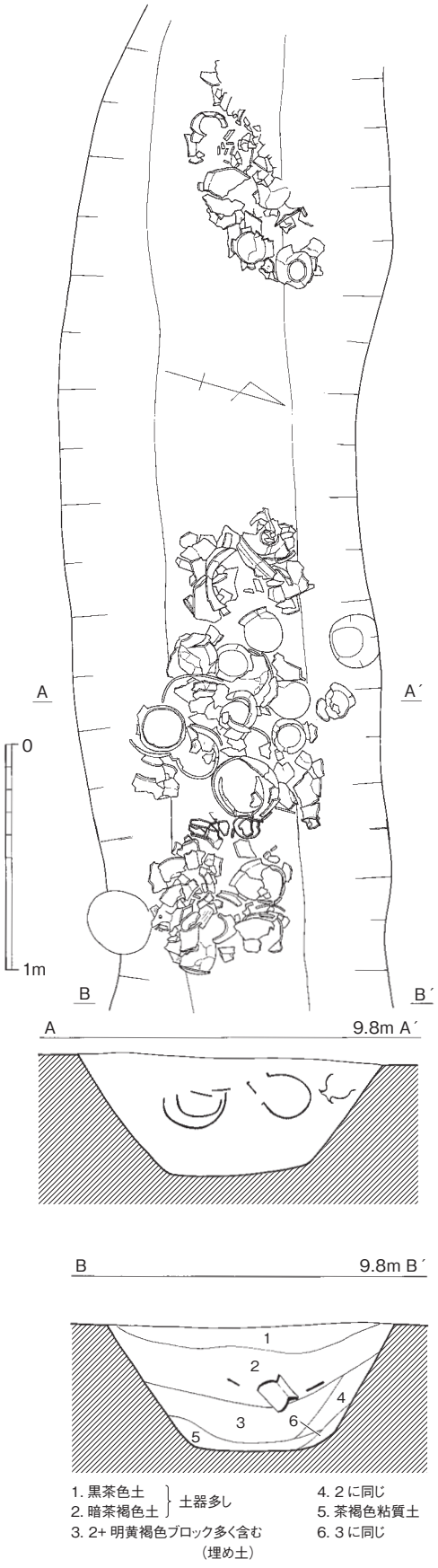
出土遺物はなく、切り合いから古墳時代以前に属するものと考えられる。（城門）

30 号溝（図版 39、第 78 図）

調査区の中央南寄りに位置する。13・16・17 号土坑、1・9・10・34 号溝に切られる。東側は調査区外に延び、西側は 9・10 号溝によって切られているが方形周溝の南辺溝と筋を揃える。断面形状は台形を呈する。まず南側から堆積が始まり、溝の中位まで埋まった段階で、特に東寄りの上層で土器が一括投棄されたように出土している。底面は東側に向かって緩く傾斜する。上端幅 1.2 m、下端幅 0.6 m、深さ 0.6 mを測る。

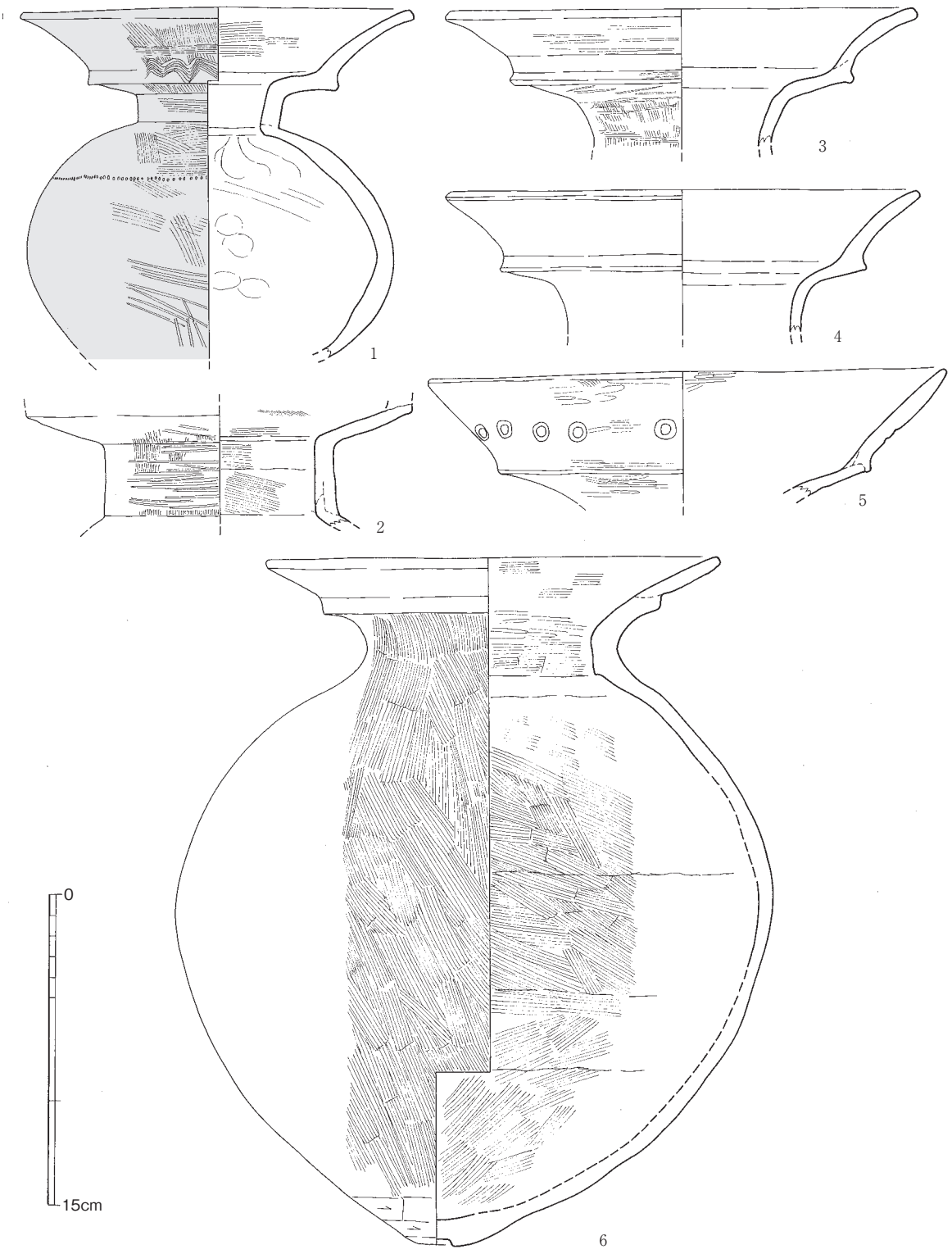
出土遺物（図版 52・53、第 79 ～ 88 図）

1 ～ 9 は二重口縁壺である。1 は扁球形の体部に直立する頸部をもち、口縁部が大きく開く。調



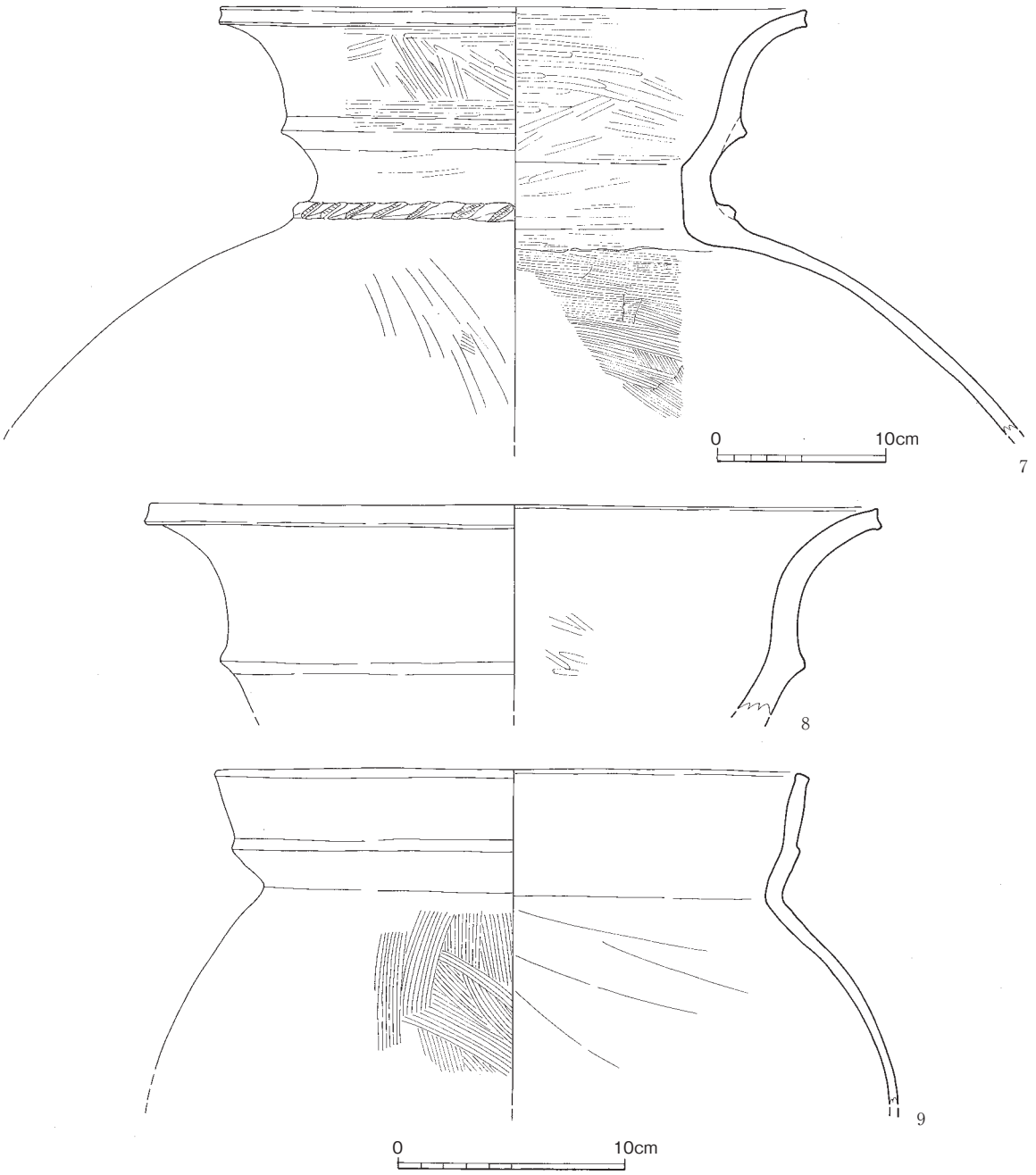
第 78 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝実測図（1/30）

整は外面上半が細かいハケメ、下半がミガキで、肩部には貝の押圧による列点文を施す。内面は口縁部が横方向の細かいハケメ、体部がナデで指頭圧痕が残る。色調は橙褐色。２は頸部の破片で形状は１と同様である。３～５は口縁部から頸部にかけての破片で、３・４の頸部は外反しながら立ち上がる。５は口縁部外面に竹管文を施す。５の調整は内外面とも細かなミガキである。６は口縁部を一部欠く。倒卵形の体部に短い頸部を経て口縁部が直線的に開く。調整は内外面とも細かいハケメである。胴部内面には３ヶ所に粘土帯の継ぎ目が残る。底部は平底で、調整はヨコ方向のケズリである。口径 22.1cm、胴部最大径 27.2cm、器高 33.4cm を測る。７は直立する短い頸部に大きく外反する口縁部をもつ。頸部と体部との境に斜位に刻みを入れた突帯をまわす。調整は口縁部内外面がミガキ、胴部外面がハケメ後ナデ。胴部内面は細かいハケメ。８は７と同じタイプ。９は口縁部が直立するもので、端部は面をなす。調整は摩滅が著しいが、胴部外面が縦方向のハケメ。10 ～ 21 は直口壺である。口径 14.4 から 18.0cm。口縁端部は丸く収めるものが多いが、11 のように端部を肥厚させて丸く収めるものや 13 のように面をなすものもある。13 は倒卵形の体部に短く外反する口縁がつく。調整は内外面ともハケメで、内面の下半にはケズリが残る。15 は尖り底。16・17 は長頸となる。18 ～ 21 は扁球形の体部を持つ小型の壺である。22 は平底で調整は外面がミガキ、内面は細かいハケメ。色調は橙褐色を呈する。23 ～ 78 は甕である。口縁部の形状は、短く外反するもの、長く、大きく開くもの（24・26）などがある。口縁端部の形状は丸く収めるものの他、玉縁状に肥厚させるもの（32）、端部をつまみあげるシャープなつくりのもの（29・37・48・57・58 など）がある。口径は 12.0 ～ 19.4cm を測り、大小二種の法量が存在するようである。底部はすべて丸底である。調整は外面タタキとなるもの（28・38・52・55・56・58・71）がみられるが、その他はハケメによる最終仕上げとなる。内面の調整はケズリを施す。稀にハケメ調整（44・47・54 など）やナデアゲ調整（28・58）が存在する。67 の肩部には波状文が櫛



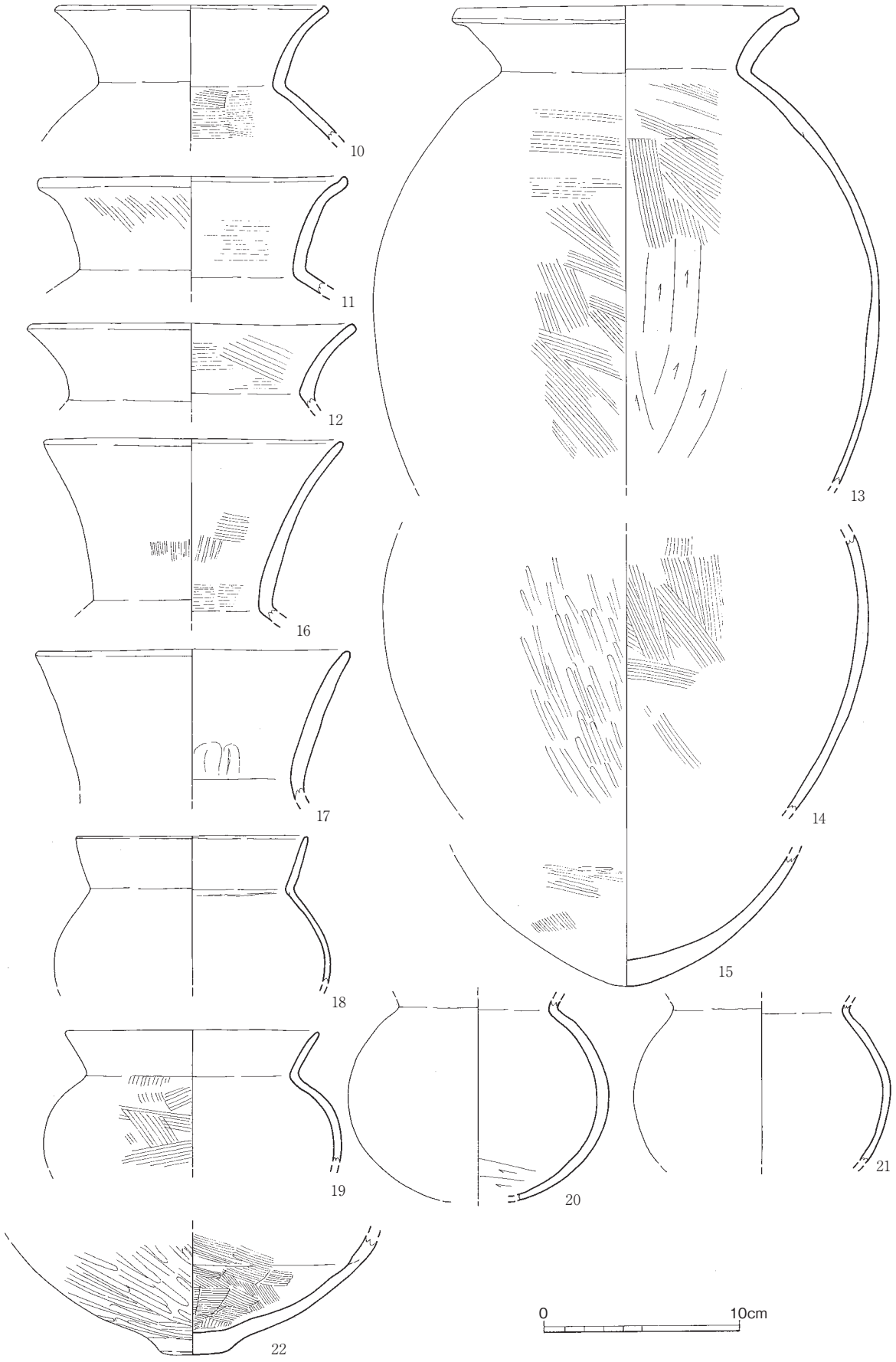
第 79 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図①（1/3）

描きされる。72 ～ 76 は外来系の甕である。72 の口縁部は内傾し、屈曲部に稜をもつ。色調は黄灰色。73 は口縁部外面に 4 条の凹線を巡らせる。摩滅が著しく調整は不明である。胎土に砂粒を多く含む。色調は明黄茶色。75 は外傾する口縁の端部を上方につまみ上げる。外面に縦方向のハケメが残る。72 は防長系、73 は吉備系、74・76 は山陰系、75 は西部瀬戸内系か。77・78 は脚付甕である。脚部はいずれも「ハ」字に開く。78 は口縁部と体部の境が不明瞭な形状で、上部に載る甕が傾いている。調整は全面ハケメである。口径 13.8cm、脚部径 10.3cm、器高 20.0cm を測る。79 ～

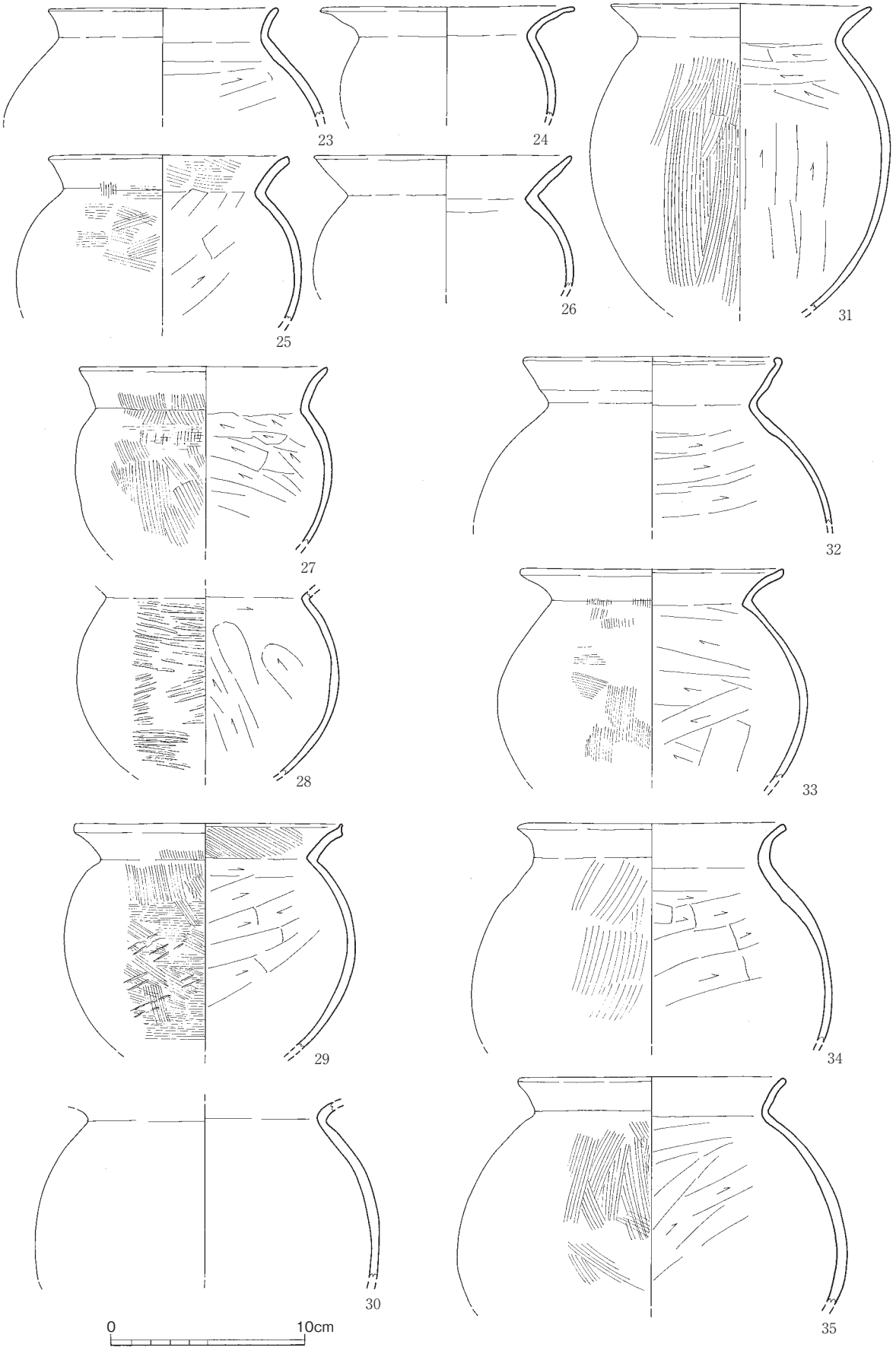


第 80 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図②（1/3、7 は 1/4）

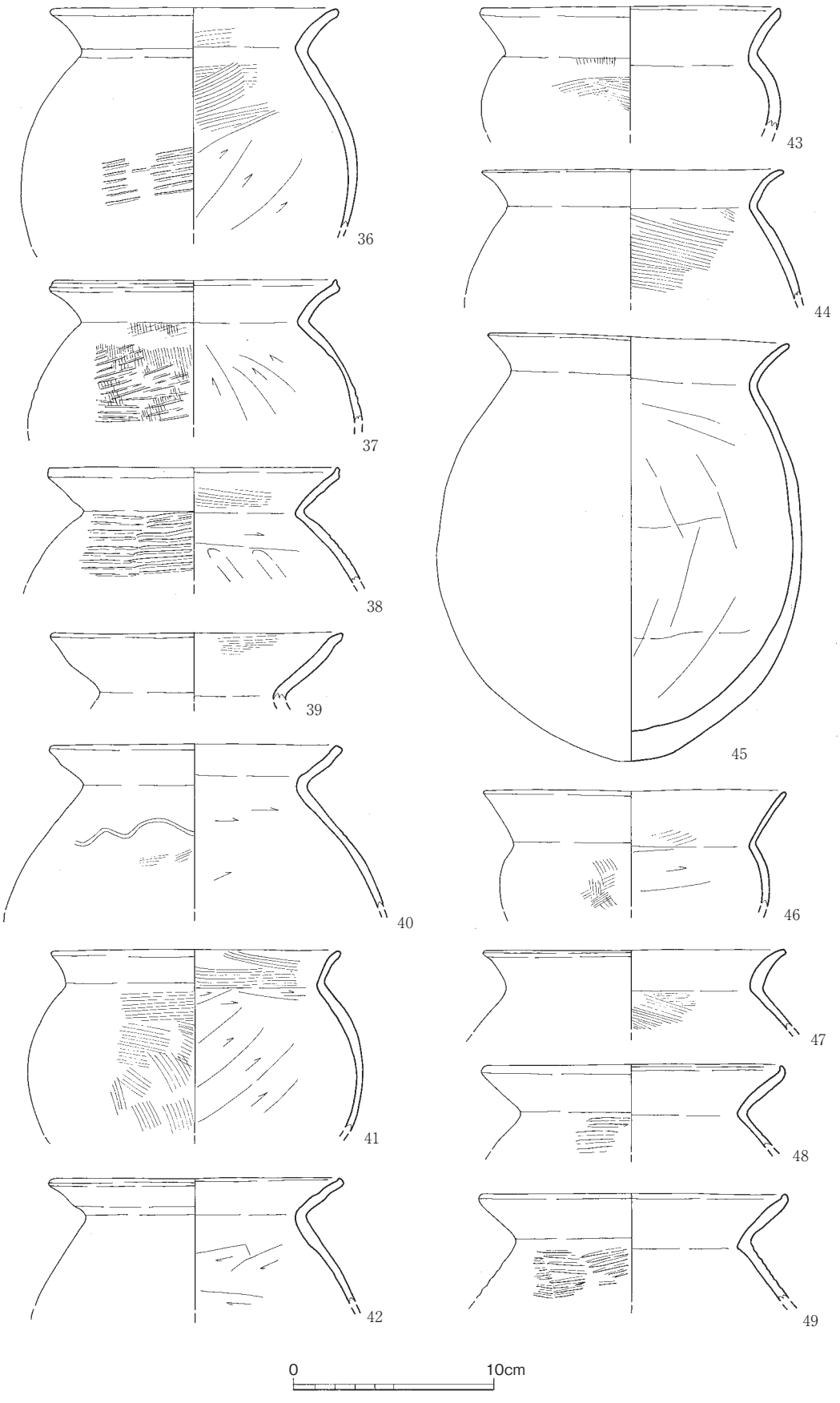
88 は高坏である。79 ～ 81 は坏部で口径 21.2 ～ 22.4cm を測る。79 は内外面とも細かいハケメ調整で、内面に放射状にミガキを施す。82 ～ 86 は脚部である。82・85・86 は３方に、83・86 は４方に円孔を穿つ。84 の調整は外面がミガキ、内面の脚柱部がヨコ方向のケズリ、裾部はハケメを施す。他は摩滅が著しく調整不明。87・88 は坏部が段をもって二重になるタイプである。畿内系。87 の坏部は口縁端部をつまみ上げる。脚部の穿孔は４ヶ所に復元される。坏部内面の中央部に径９mm ほどのくぼみがあり、これに対応する脚柱との接合部に径１mm、深さ５mm ほどの細い棒状の工具端による刺突が見られ、焼成後穿孔を意図したものと考えられる。調整は摩滅が著しく不明である。88 も 87 と同様の形状であるが坏部内面の屈曲部分に稜をなさない。調整は内外面ともミガキを施す。脚部の穿孔は３ヶ所である。坏部中央には脚柱部に抜ける焼成後の穿孔がみられる。89 ～ 100 は鉢である。89・90 は底部から丸みをもって開くもので、共に丸底である。調整は摩滅



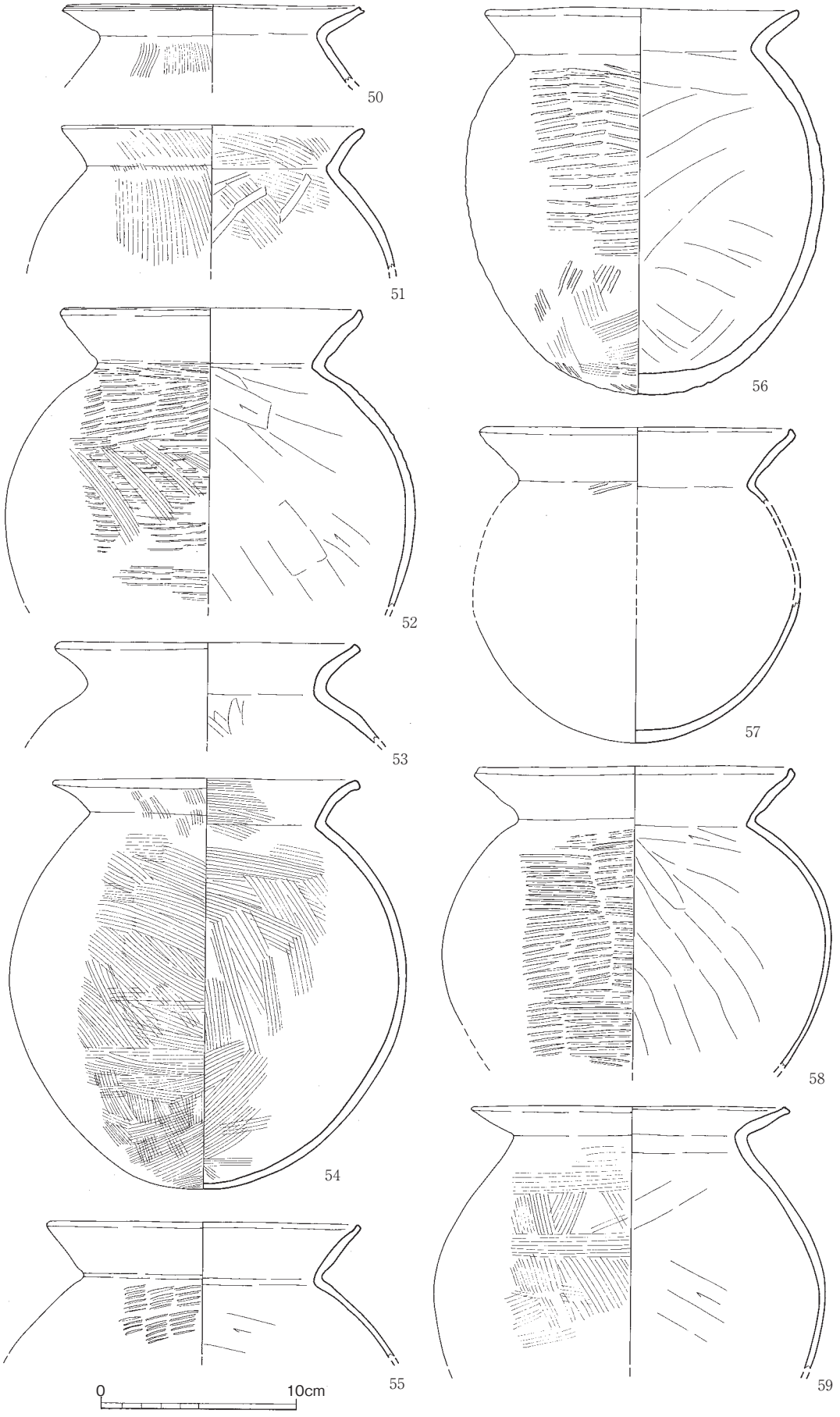
第 81 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図③（1/3）



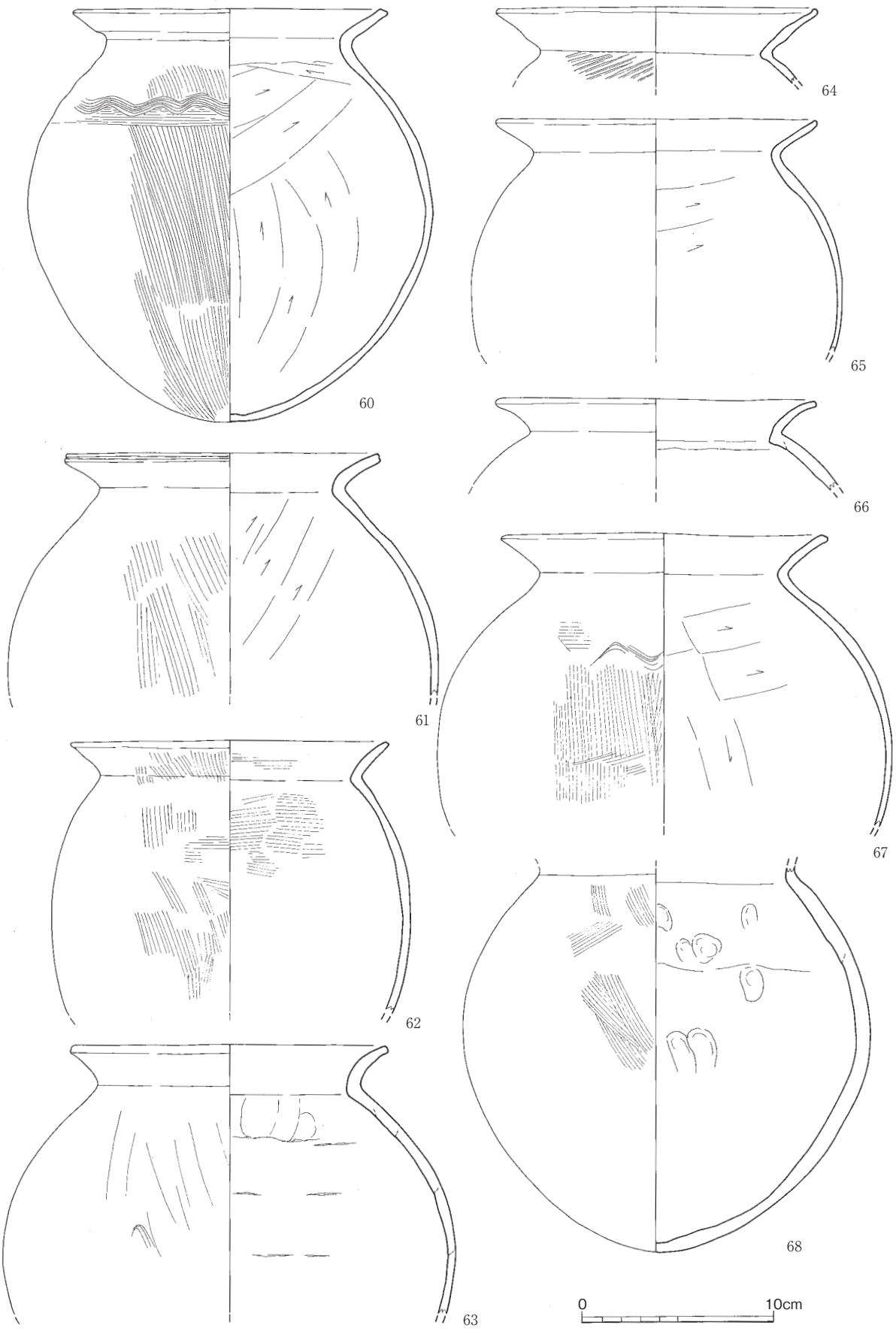
第 82 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図④（1/3）



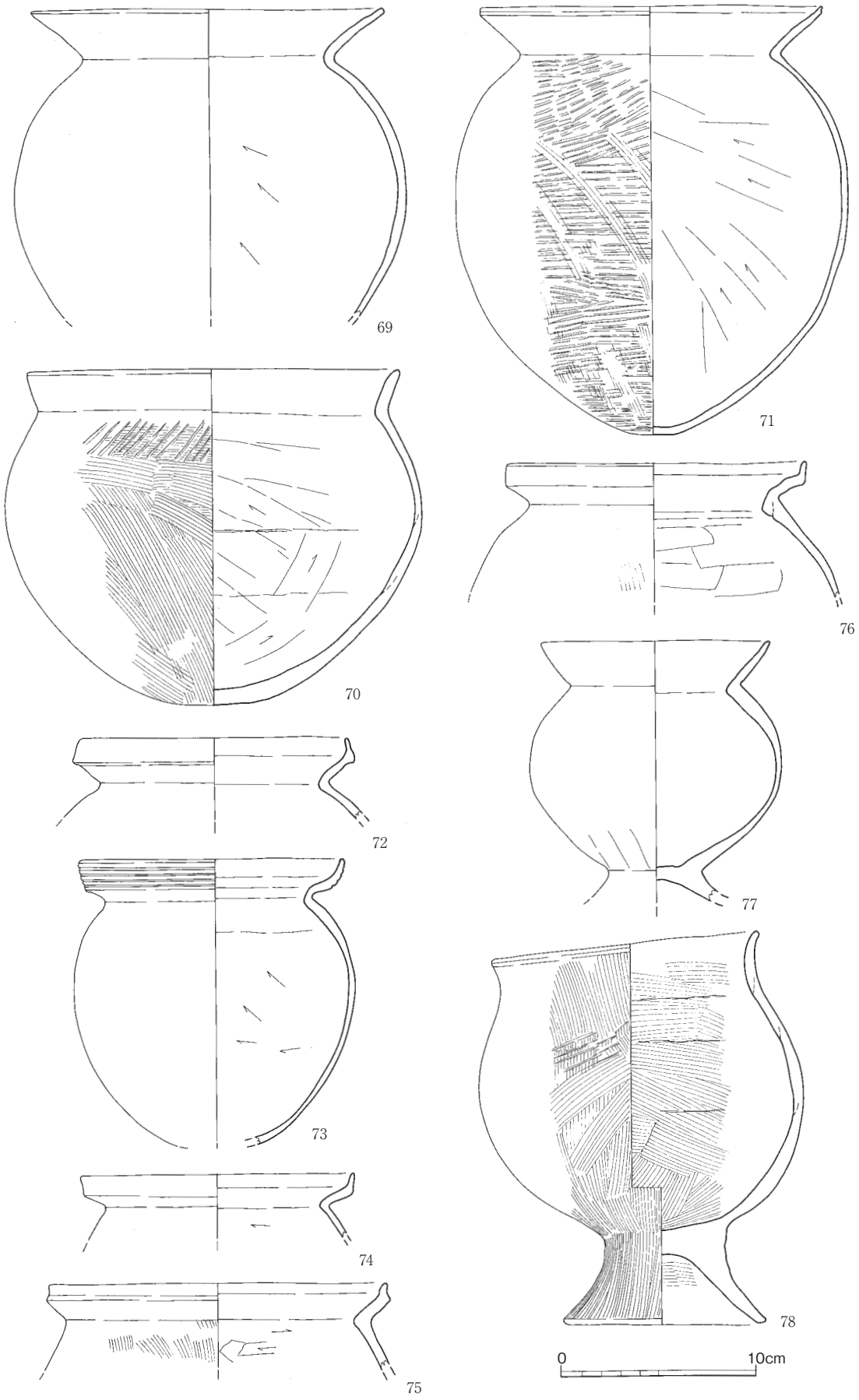
第 83 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑤（1/3）



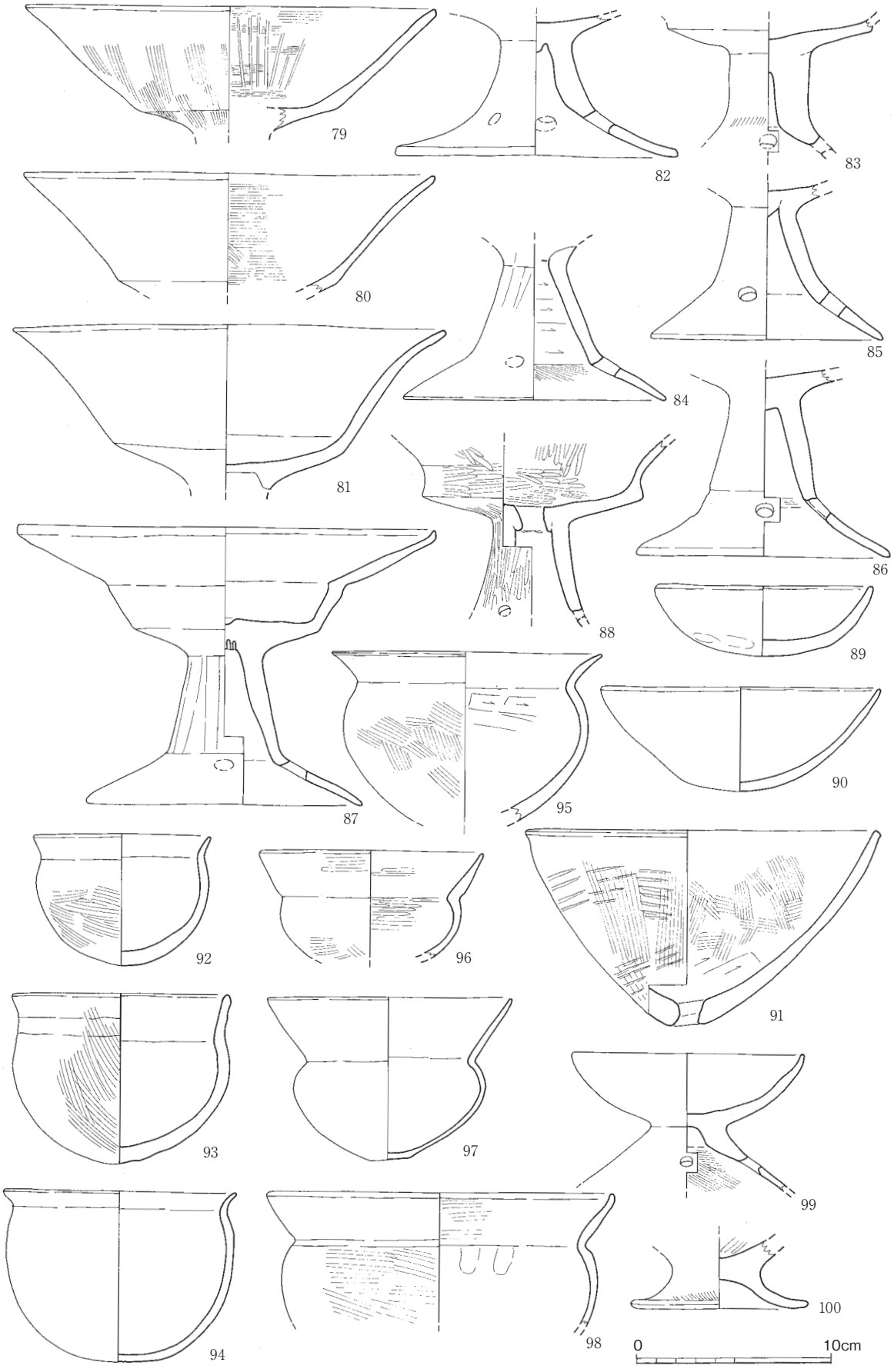
第 84 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑥（1/3）



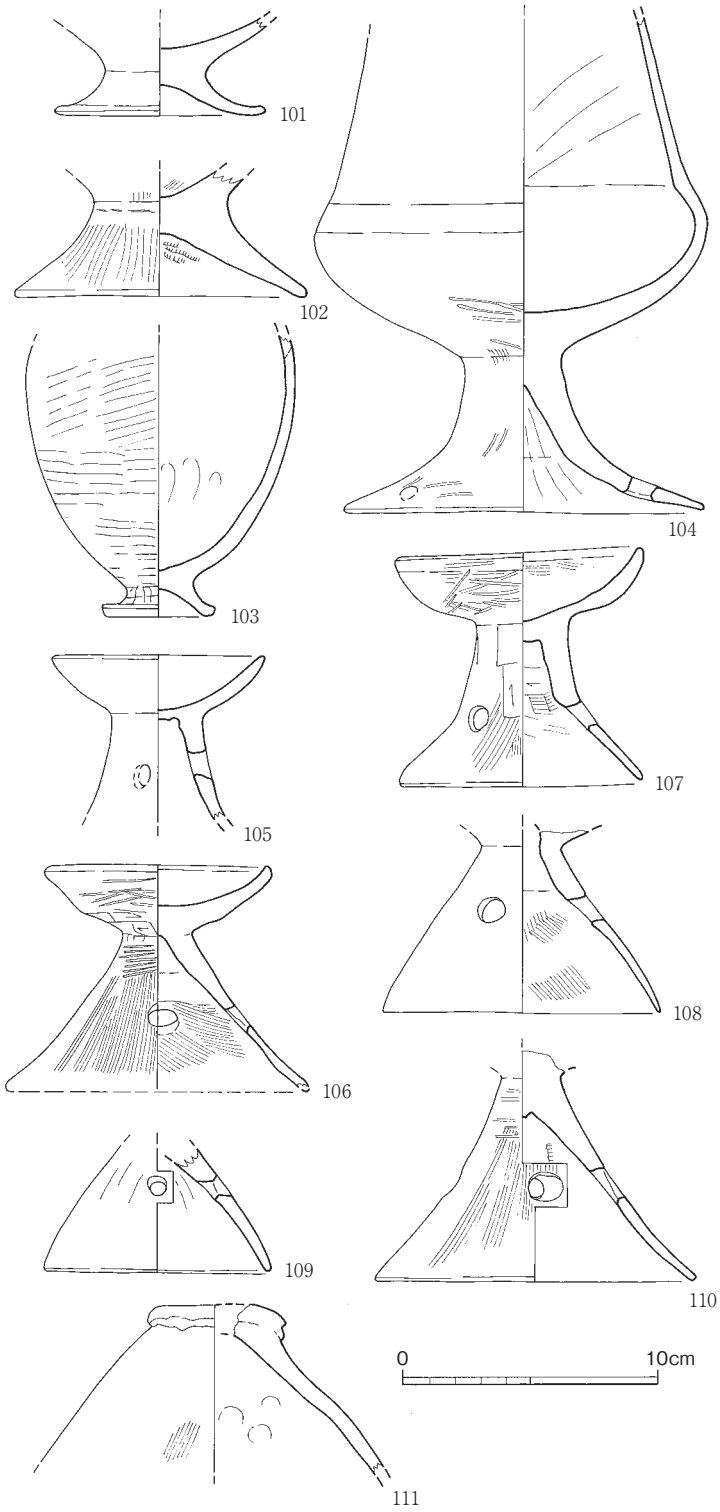
第 85 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑦（1/3）



第 86 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑧（1/3）



第 87 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑨（1/3）



第 88 図　Ⅲ -AB 区 30 号溝出土土器実測図⑩（1/3）

が著しく不明。口径はそれぞれ 9.6cm・14.4cm を測る。91 は尖底の壺の底部と同一形状である。口縁端部は面をなし、底部は焼成後に穿孔する。調整は外面がハケメ、内面はケズリ後ハケメを施す。92 ～ 98 は球形の体部に外方に開く口縁がつく。口縁部が短いものと大きく開く 96･97 のようなタイプがある。97 は平底、95 は平底気味の丸底である。口径は 9.1 ～ 14.0cm、器高は 6.7 ～ 8.9cm を測る。調整は外面がハケメで、体部内面はナデを施す。96 のみは体部下半がハケメ調整で他の部位は横方向のミガキを施す。99 ～ 102 は脚付鉢である。99 の脚部の穿孔は 1 ヶ所のみ残存する。100 ～ 102 はハ字形に大きく開く脚がつく。102 の脚部は直線的である。100 の坏部内面の調整はミガキを施す。103 はグラス形の体部にハ字形に開く脚が付くが上部は欠失する。脚の端部は跳ね上げる。器壁が薄い。調整は外面がタタキ、内面はナデ調整で下半には指ナデの圧痕が残る。口径 10.5cm、脚部径 4.5cm、器高 11.3cm を測る。104 はワイングラス形を呈する。体部は上部がすぼまった壺形で、体部下半が膨らむ。摩滅が著しく調整の残りは悪いが、体部・脚部とも細かなミガキを施している。脚部には焼成前に 4 方に円孔を穿つが間隔は不均等である。体部最大径は 15.6cm を測る。105 ～ 110 は器台である。脚部の形状には外反するもの（105・106・107・110）と内湾するもの（108・109）が見られる。調整がわかるものは、台部が内外面とも細かいミガキ、脚部はハケメ調整となる。脚部には 106･110 が 4 方に、他は 3 方に円孔を穿つ。法量は口径 8.4 ～ 9.9cm、脚部径 9.7 ～ 12.8cm、器高 9.0 ～ 9.5cm を測る。111 は支脚である。調整は内外面ともナデで、内面には指頭圧痕が残る。

出土遺物から古墳時代前期前半に属するものと考えられる。（吉村）

32 号溝

調査区の北半部中央に位置する。43・44 号竪穴住居跡を切る。長さ９ｍにわたって直線的に検出した。規模は上端幅 0.3 ～ 0.4 ｍ、下端幅 0.2 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。溝の底面は北端が南端よりも８cm ほど低いため、北流するものと思われる。埋土は灰褐色土。

出土遺物（第 89 図１・２）

１は土師器椀である。体部は球形で、口縁部は短く外方に屈曲させる。調整は外面が横方向のミガキ、下半部には手持ちケズリ痕が残る。胎土は精良。混入品である。２は白磁の高台部分の小片である。

出土した遺物とピットなどとの切り合い関係から、13 世紀頃の遺構と考えられる。（吉村）

34 号溝

調査区の中央部、１号溝と 32 号溝の間に位置する。長さ 15.5 ｍにわたって検出した。43・44 号竪穴住居跡、25 号土坑、30 号溝を切る。直線的ではなく、僅かに弧を描きながら走る。上端幅 0.45 ｍ、下端幅 0.3 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。

出土遺物（図版 53、第 89 図３・４）

３は緑釉陶器椀の高台部分の小片である。断面四角形のハ字形に踏ん張る高台を貼付する。焼成は土師質で、精良な胎土にやや黄味がかった緑釉を施す。復元高台径 7.6cm を測る。４は龍泉窯系の青磁椀で内面に花文を片彫りする。胎は明灰色で、灰味を帯びた緑色釉を施す。器壁には貫入が見られる。底部と高台畳付は露胎となる。口径 16.4cm、高台径 6.3cm、器高 6.7cm を測る。

出土遺物と切り合い関係から 13 世紀頃に属するものと考えられる。（吉村）

35 号溝

調査区の南端部に位置する鍵形の浅い溝状遺構で、東端は調査区外に延びる。上端幅 0.15 ～ 1.1 ｍ、下端幅 0.7 ～ 1.0 ｍ、深さ 0.15 ｍを測る。底面レベルは西端部と東端部で 11cm ほどの差があり、東流する。底面はフラットである。

出土遺物（第 89 図５・６）

５は瓦器椀の高台部で、調整は内面ミガキを施す。６は須恵器高台坏で、調整は内面にナデを施す。

遺構の切り合いと埋土から、11 ～ 14 世紀頃に属するものと思われる。（吉村）

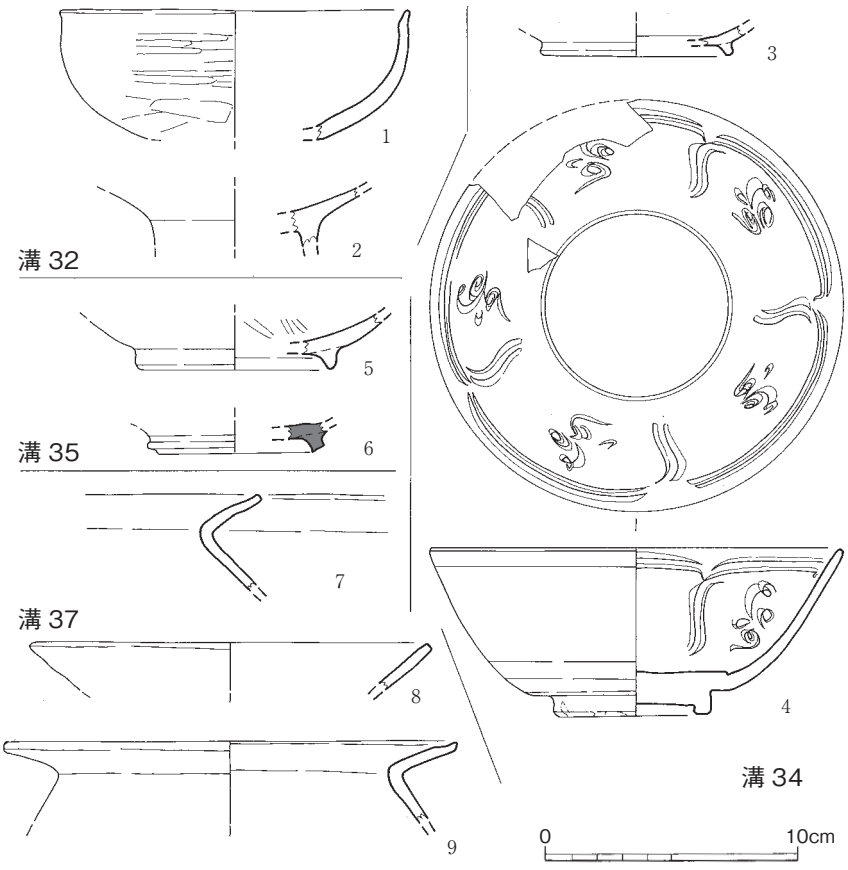
36 号溝

調査区の南端部に位置し、1・9 号溝に切られる。上端幅は 0.2 ～ 0.3 ｍ、下端幅 0.15 ｍ、深さ 0.15 ｍを測る。底面はフラットである。

遺構の切り合いと埋土から、11 ～ 14 世紀頃に属するものと思われる。（吉村）

37 号溝

調査区の南半に位置する。25 号土坑、１・９・10 号溝、10 号掘立柱建物跡に切られる。30 号溝との切り合いはない。この溝は 30 号溝との交点から 5.8 ｍ南側で収束する。規模は上端幅 0.95 ｍ、下端幅 0.7 ～ 0.75 ｍ、深さ 0.25 ｍを測る。また、後世の遺構によって切り合い関係が確認できて



第 89 図　Ⅲ -AB 区 32・34・35・37 号溝出土土器実測図（1/3）

はいないが、方形周溝の東辺溝の延長にあたり、断面形状も同一であるため一連のものとして大過ないだろう。

出土遺物（第 89 図７～９）

７～９は土師器甕の口縁部である。７は口縁端部を丸く収め、８は端部に面をなし、９はつまみ上げる。

出土遺物から古墳時代前期前半に属するものと考えられる。（吉村）

円形周溝（図版 40・41、第 90・91 図）

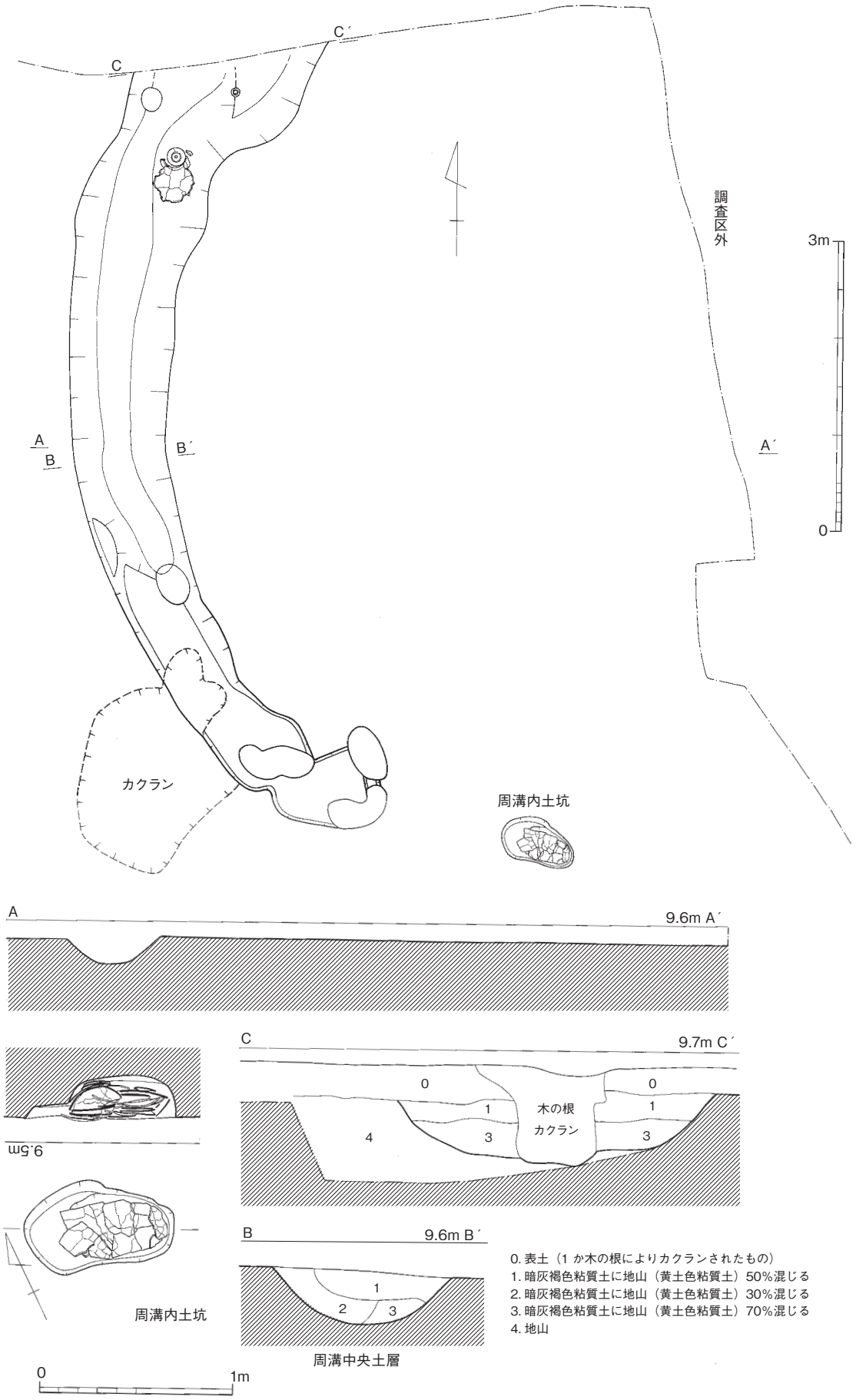
調査区の北東隅に位置する弧状を呈する溝で、南東側は後の削平のため溝が途切れていると考えられる。周溝内を掘り込み、幾重にも土師器片を重ねたと判断した周溝内土坑まで含めると、規模は南北 8.1 m×東西 5.26 mである。この周溝内土坑の規模は 0.78m × 0.48m、深さ 0.2m を測る。溝の幅は北 1.8 m、中央 0.5 m、深さは北 0.4 m、中央 0.24 mを測る。

溝北側で溝床面から 0.2 mほど浮いた状態で二重口縁壺（１）と高坏坏部（５）が出土した。溝土層及び土器が溝床面からかなり浮いていることから、溝は短期間で埋められたものではなく、溝が埋没してしばらく後、溝内側から落ち込んだように埋まったものと想定される。さらにこの周溝の時期は出土土器から古墳時代前期前半と考えられること、かつ溝が弧状であること、その出土状況から、この周溝は古墳時代前期の古墳の周溝の可能性がある。なお古墳であったとすると、墳丘は周溝の形態から円形を呈する可能性が高く、主体部は削平されて残っていないことになる。

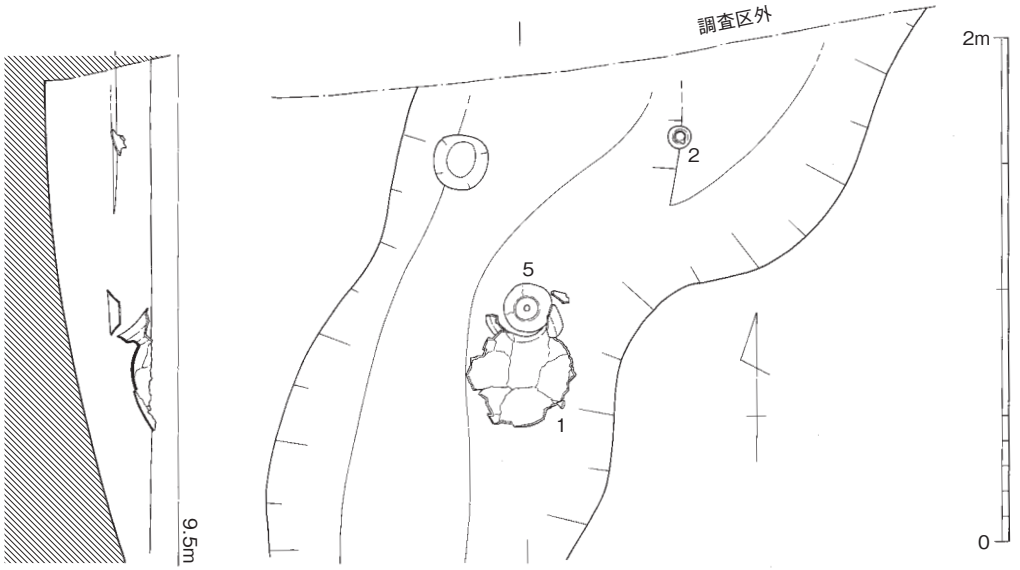
出土遺物（図版 53、第 92 図）

１は大型の畿内系二重口縁壺であるが、口縁端部をさらに外反させるという在地系要素も加味されたものである。復元口径 36.8cmを測る。内外面とも摩滅のため、調整は不明。２は小型の二重口縁壺口頸部で、内外面にはスリップが認められる。３は大型の直口壺。４は弥生後期土器の壺底部。底部はやや上げ底状になる。５は畿内系高坏坏部で、外面はハケメ後粗い横ミガキ、内面は横方向のハケメ後暗文状の縦ミガキを密に施し、その後坏底部にミガキを施す。６は弥生中期甕底部、７は高台付須恵器坏身、８は縄目タタキの平瓦で、内面には布目が残る。６～８は混入品である。

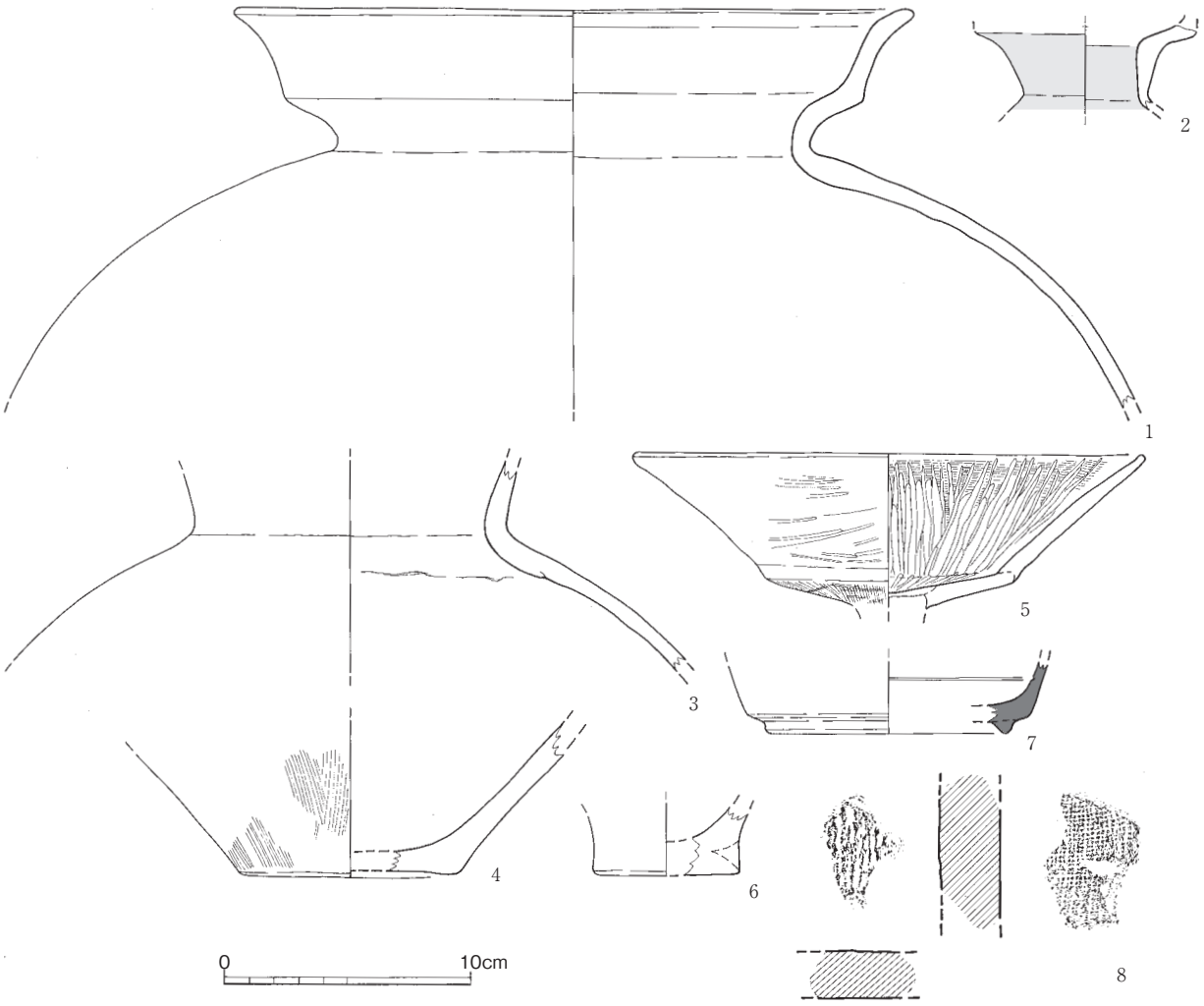
出土遺物から、古墳時代前期前半に属すると考えられる。（大庭）



第 90 図　Ⅲ -AB 区円形周溝・土層実測図（1 /60、1 /30）



第 91 図　Ⅲ -AB 区円形周溝出土状況実測図（1 /30）



第 92 図　Ⅲ -AB 区円形周溝出土土器実測図（1/3）

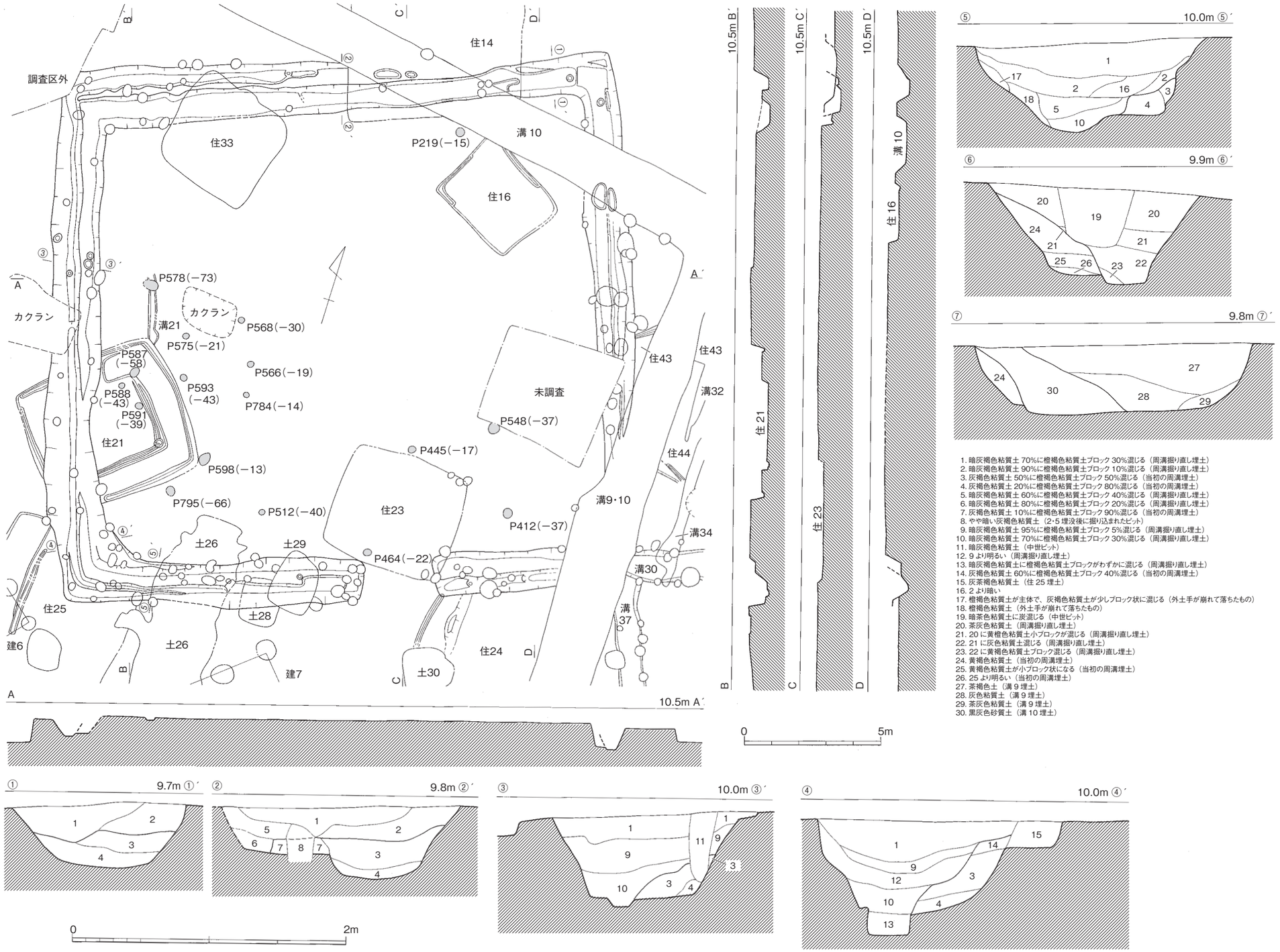
方形周溝（図版 41 ～ 45、第 93 図）

当周溝は、武末純一氏が定義する「方形環溝」に相当するものと考えられるが、後のⅤ章６（pp.216 ～ 265）で検討するので、ここでは調査当初に付けた方形周溝で報告する。

調査区の中央南側に位置する方形に巡る溝で、14・23・33 号竪穴住居跡、26・28・29 号土坑、９・10 号溝に切られ、21・24・25・43・44 号竪穴住居跡を切る。当周溝南東隅と繋がるかのように東に位置する 30 号溝と切り合う部分が、ちょうど９・10 号溝に切られているため、30 号溝との切り合いの前後関係は不明である。出土土器から当周溝および 30 号溝とも、古墳時代前期前半の同時期に埋没したと思われるが、溝の掘削時期は当周溝が弥生時代後期終末と、古墳時代前期前半の土器が主体の 30 号溝より古くなると考えられる。当周溝は南溝中央やや東寄りに幅 2.5 m～ 3 mの陸橋部を持ち、周溝自体は後に若干外側に掘り直しによる拡張を行っている。掘り直し前の当初の規模は、溝の心々で東西 19.5 m前後、南北 18 m、掘り直し後は東西 20 m前後、南北 18.5 m前後となる。また拡張後の溝外側上端での規模は、最大東西 21.5 m、南北 20 mである。溝内側の規模は、北辺長 17.5 m、南辺長 18.5 m程度、東辺長 16.5 m程度、西辺長 16.5 mで、北辺に比べ南辺の方が若干長く、東西方向が長くなる、ややいびつな正方形となる。この内法での面積は 310㎡を測る。方位は北より 15° 西に傾く。検出面での掘り直し後の周溝幅は溝上端で、北で 1.9 ～ 2.3 m、西で 1.8 m前後、南で 1.5 ～ 1.8 m、東で 1.5 m前後を測り、掘り直し前の周溝幅はいずれも溝上端で 1.2 m前後に想定される。また掘り直し前の周溝の深さは、北と西は 0.45 m前後、南と東で 0.4 m～ 0.7 m前後となる。当区周辺は北西から南東に傾斜する地形と想定され、溝床面レベルからも南・東側の方がその他に比べ５～ 10㎝程度低い。一方掘り直し後の周溝の深さは、北は 0.4 m前後、西は 0.6 ～ 0.9 m前後、南は 0.8 m前後、東は 0.7 m前後と、溝床面レベルでは西側の溝がより深く掘削されている。当周溝を切る 23 号竪穴住居跡の残存状況などから、上面は削平されており、本来の深さはより深く、幅はより広かったものと考えられる。周溝の断面は、掘り直し前後ともに逆台形状を基調とし、掘り直し後は溝底部をさらにもう一段掘り込む形状となる。

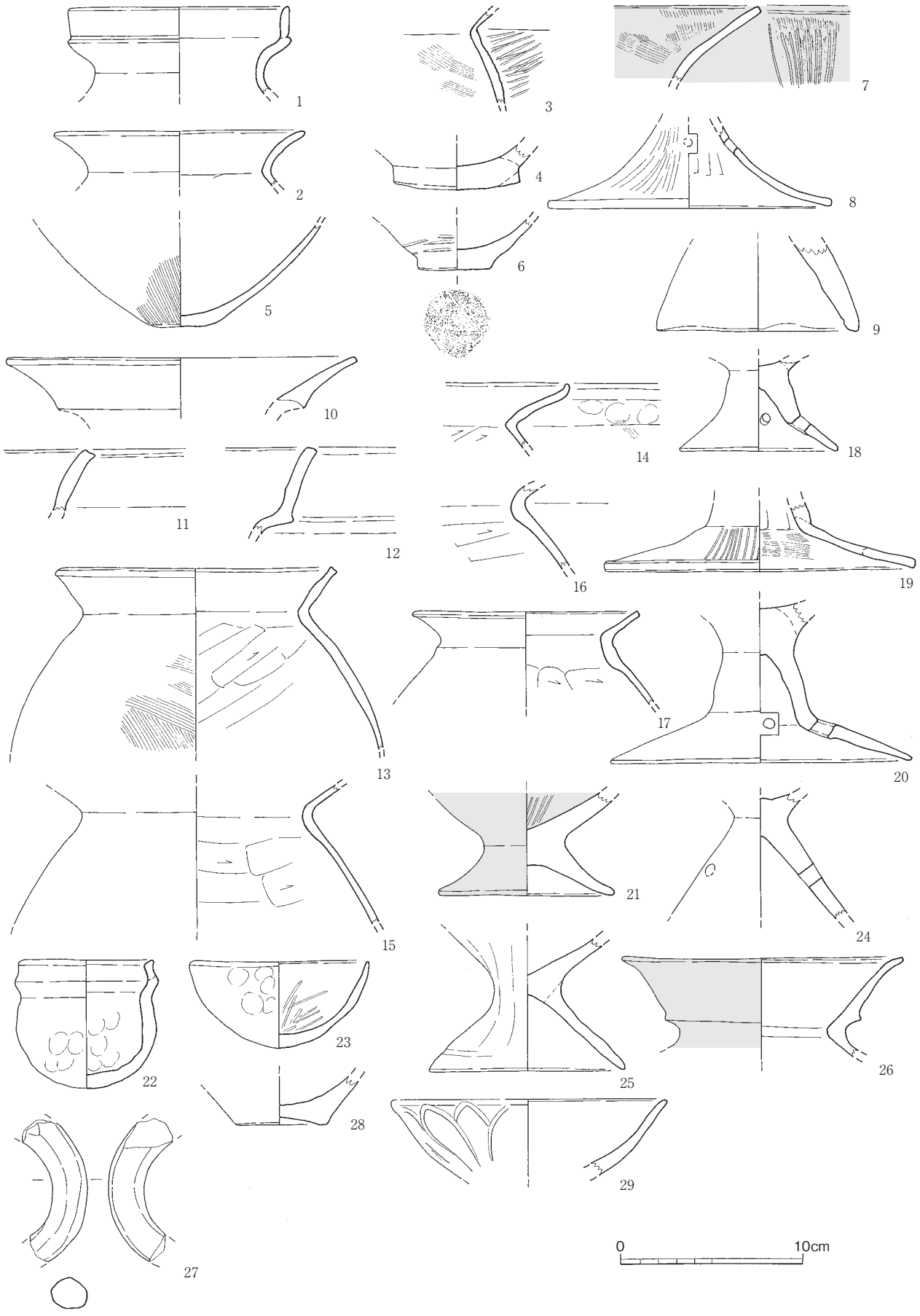
周溝埋土の土層図はいずれも周溝外側が左、内側が右に割り付けているが、この土層図からもいずれも外側に掘り直しを行い、拡張していることが確認できる。この掘り直しについては、北側の溝は当初の溝より同じレベルかやや浅くなる掘り直しが認められるが、他の西・南・東側周溝は当初の溝より深い掘り直しを行っている。また③～⑤の土層から、掘り直し溝の埋土上層である１・２・９・16 はある程度の期間をかけて埋没したと考えられる一方、その下層の埋土は⑤からまず周溝外土手構築土と考えられる 17・18 が一度に流入していることと、下層埋土の土質が似ていることから、上層に比べ短期間に埋没している可能性がある。この外土手は⑤で確認したのみであるが、陸橋部以外の周溝外を巡っていた可能性が高い。この外土手は少なくとも 14・33 号竪穴住居跡が造られた古墳時代後期には削平され、かつ溝上に 14・33 号竪穴住居跡も造られていることから、その時には周溝は完全に埋没していたものと想定される。周溝内には多数のピットが存在するが、そのほとんどが暗灰褐色粘質土が埋土の中世ピットである。ピット内から出土した土器及び埋土から、当周溝の時期である弥生時代後期終末～古墳時代前期に属する可能性があるピットはトーンで示し、またそのピットの遺構面からの深さも括弧内に示した。

この弥生時代後期終末～古墳時代前期の可能性があるピットの分布状況から、周溝内で確実な掘立柱建物および柵跡は確認できない。なお南東側のＰ 548 とＰ 412 などは深さも同じであることか



1. 暗灰褐色粘質土 70%に橙褐色粘質土ブロック 30%混じる（周溝掘り直し埋土）
2. 暗灰褐色粘質土 90%に橙褐色粘質土ブロック 10%混じる（周溝掘り直し埋土）
3. 灰褐色粘質土 50%に橙褐色粘質土ブロック 50%混じる（当初の周溝埋土）
4. 灰褐色粘質土 20%に橙褐色粘質土ブロック 80%混じる（当初の周溝埋土）
5. 暗灰褐色粘質土 60%に橙褐色粘質土ブロック 40%混じる（周溝掘り直し埋土）
6. 暗灰褐色粘質土 80%に橙褐色粘質土ブロック 20%混じる（周溝掘り直し埋土）
7. 灰褐色粘質土 10%に橙褐色粘質土ブロック 90%混じる（当初の周溝埋土）
8. やや暗い灰褐色粘質土（2・5 埋没後に掘り込まれたピット）
9. 暗灰褐色粘質土 95%に橙褐色粘質土ブロック 5%混じる（周溝掘り直し埋土）
10. 暗灰褐色粘質土 70%に橙褐色粘質土ブロック 30%混じる（周溝掘り直し埋土）
11. 暗灰褐色粘質土（中世ピット）
12. 9 より明るい（周溝掘り直し埋土）
13. 暗灰褐色粘質土に橙褐色粘質土ブロックがわずかに混じる（周溝掘り直し埋土）
14. 灰褐色粘質土 60%に橙褐色粘質土ブロック 40%混じる（当初の周溝埋土）
15. 灰茶褐色粘質土（住 25 埋土）
16. 2 より暗い
17. 橙褐色粘質土が主体で、灰褐色粘質土が少しブロック状に混じる（外土手が崩れて落ちたもの）
18. 橙褐色粘質土（外土手が崩れて落ちたもの）
19. 暗茶色粘質土に炭混じる（中世ピット）
20. 茶灰色粘質土（周溝掘り直し埋土）
21. 20 に黄橙色粘質土小ブロックが混じる（周溝掘り直し埋土）
22. 21 に灰色粘質土混じる（周溝掘り直し埋土）
23. 22 に黄褐色粘質土ブロック混じる（周溝掘り直し埋土）
24. 黄褐色粘質土（当初の周溝埋土）
25. 黄褐色粘質土が小ブロック状になる（当初の周溝埋土）
26. 25 より明るい（当初の周溝埋土）
27. 茶褐色土（溝 9 埋土）
28. 灰色粘質土（溝 9 埋土）
29. 茶灰色粘質土（溝 9 埋土）
30. 黒灰色砂質土（溝 10 埋土）

第 93 図　Ⅲ -AB 区方形周溝・土層実測図（1 /150、1 /30）



第 94 図　Ⅲ -AB 区方形周溝出土土器実測図（1/3）

ら同一の建物の柱穴となる可能性があるが、対となるピットは確認できていない。このことから、周溝内には何らかの建物跡などの施設が存在した可能性は否定できないものの、ピット群の検討では施設の存在は認められない。以上のことから、当周溝に伴う確実な遺構は不明確である。

出土遺物（第 94 図）

１～９は弥生時代後期後半～終末に属し、当初に掘削された溝に伴うと考えられる。１は在地系二重口縁壺である。直口する口縁部と頸部との境には工具による１条の凹線を巡らす。２は在地系甕で、内面頸部までケズリを施す。外面には黒斑あり。３は在地系甕胴部で、外面は右上がりのタタキ、内面はハケメを施す。４は凸レンズ底の甕底部である。５はわずかに平底が残る甕底部。外面には黒斑があり、煤が付着する。６はＶ様式系甕底部。底部には木の葉痕が明瞭に認められる。７・８は在地系高坏である。７は高坏口縁部で、外面はハケメ後縦ミガキ、内面はハケメ後ナデで調整。口縁端部に黒斑が見られる。８はほぼ乾燥した時に施された穿孔が１孔確認できるが、孔数は不明。外面には縦ミガキを施し、内面には工具痕が残る。９は支脚である。10 ～ 27 は古墳時代前期前半に属し、掘り直し溝に伴うと考えられる。10 は畿内系二重口縁壺口縁部で、口縁端部内外面には二次加熱痕あり。11・12 は山陰系二重口縁壺口縁部。11 の口縁上端部はナデで面取りにより窪む。13・14 は布留系甕で、焼成や胎土は良く、色は茶褐色であることから、搬入品と考えられる。13 の口縁内端部はわずかにつまみ出したもので、口縁上端部はナデで面取りする。外面肩部はハケメ後ナデを施す。外面には二次加熱痕あり。14 は口縁端部を上方に少し折り曲げ、内面は頸部までケズリを施す。15 も布留系甕である。16・17 は在地系甕である。18 ～ 20 は土師器高坏脚部。18 は小型の高坏で、生乾きで施された穿孔が４ヶ所確認できる。内面上部は工具絞り痕が残る。19 は直立気味の脚柱部から裾部がかなり開く畿内系と思われる高坏で、裾部外面には暗文状の縦ミガキ、脚柱部内面にはケズリを施す。精製品。20 も畿内系で、生乾きで施された穿孔は５ヶ所か。裾部端部には黒斑あり。21 は畿内系脚付鉢で、外面全面及び鉢内面はスリップを塗布する。鉢内面にミガキを施す。22 は口縁部が二重口縁状になる粗製の小型鉢。内外面とも指頭圧痕が残る。23 は畿内系の椀状を呈する鉢で、内面には粗いミガキを施す。外面には指頭圧痕あり。24 は畿内系小型器台脚部か。ほぼ乾燥した時に施された穿孔が３ヶ所確認できる。25 は小型器台で、外面には縦ナデの稜が残る。26 は山陰系鼓形器台で、外面にはスリップを塗布するものか。27 は環状の土師器把手であるが、何に付けたものであるかは不明である。28 は上げ底の弥生時代中期壺底部。混入品。外面には二次加熱痕あり。29 は龍泉窯系青磁椀である。外面の蓮弁文には鎬がないⅣ類である。釉は半濁化した灰黄緑色を呈し、胎土は灰色である。混入品。埋土上層から砥石（第 101 図 14）が出土した。（大庭）

（５）墳墓

１号墓（図版 45・46、第 95 図）

調査区北西端に位置し、６･11 号竪穴住居跡を切る。墓壙の規模は長さ 1.7 ｍ、幅は南で 0.67 ｍ、北で 0.62 ｍと南側の方が広いため、被葬者の頭位は南にあったと考えられる。また深さは 0.1 ｍ前後であるが、墓壙北で出土した青磁椀レベルから、本来深さ 0.14 ｍ程度は残っていたと想定されるが、検出段階でやや掘りすぎてしまっている。

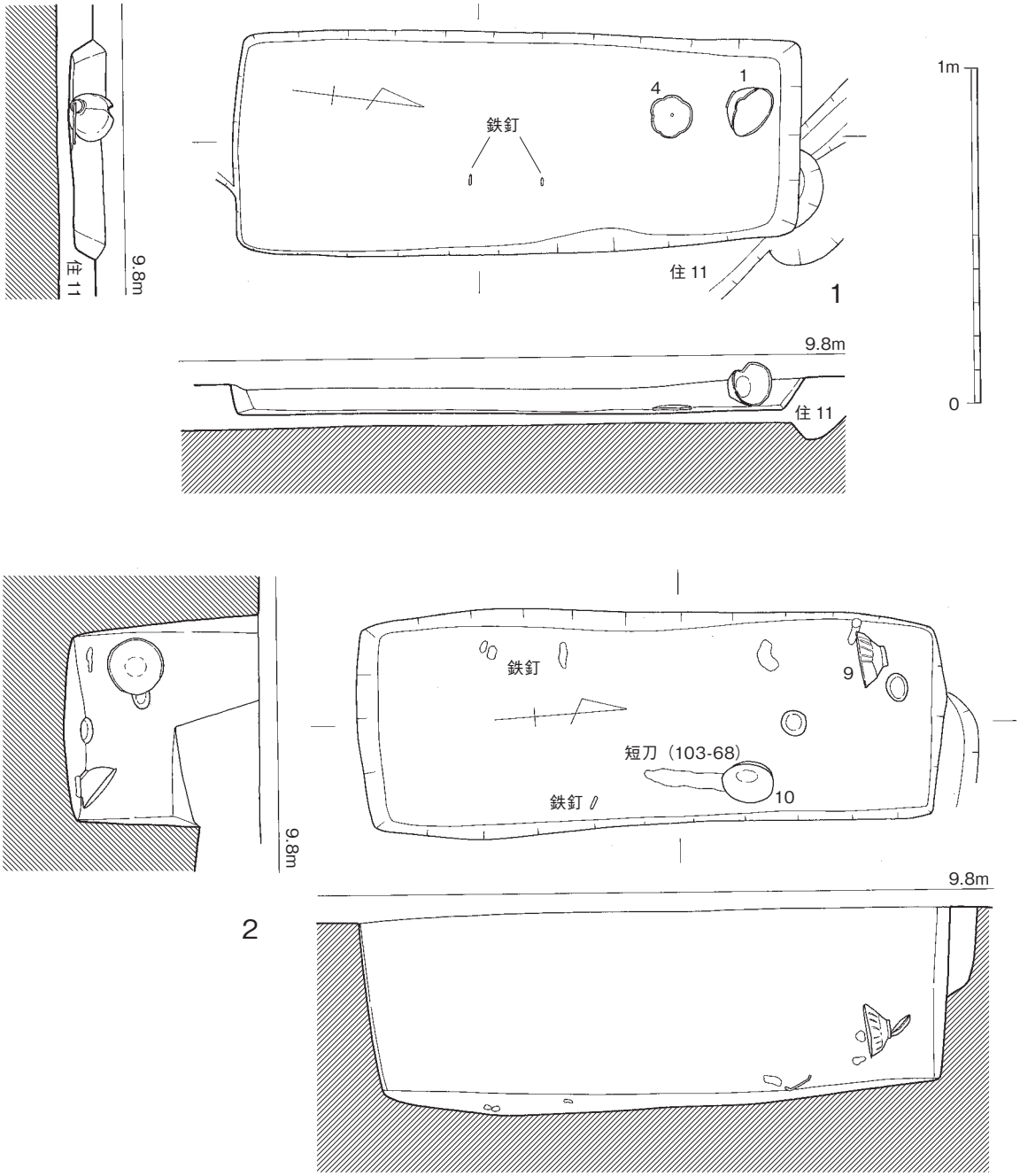
南側に頭位があったとすると、足元である北側で底部～体部を下にしたやや斜め状態の龍泉窯系

青磁椀（1）と鏡面を下にした水平状態の湖州六花鏡（4）が副葬されていた。

墓壙中央から南側にかけて鉄釘８点が集中して出土したことから（第 103 図 36 ～ 43)、木棺墓であると想定される。この木棺墓は副葬品である青磁椀と釘の位置、墓壙形状から墓壙下端とほぼ同じ規模の 1.6 m × 0.6 mの大きさであったと推定される。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（図版 53、第 96 図１～４）

１は口縁部の一部を欠く龍泉窯系青磁椀である。内外面無文であり、口縁部内外面に釉を重ね掛けし、高台部は露胎である。口縁端部は丸く、若干外反する。体部下部の腰は張り、重心は低い。高台は断面四角で、高台内部の刳りは浅く、底部は肉厚である。口径 15.8cm、器高 6.8cmを測る。釉は黄色味がかった緑色で、胎土は灰色。２は外面蓮弁文の龍泉窯系青磁椀。外面に片彫りの蓮弁文を施す。釉は黄色味のある深い緑色で、胎土は灰白色。３は須恵器坏身かえり部分。外面かえり以下には自然釉が付着する。混入品。４は湖州六花鏡である。最大径 12.2cm、鏡面の厚さ２㎜で、鈕はカマボコ状の小さなものである。縁取りはあるが素文である。重さ 105 ｇを測る。



第 95 図　Ⅲ -AB 区 1・2 号墓実測図（1/20）

出土遺物から 12 世紀後半に属すると考えられる。（大庭）

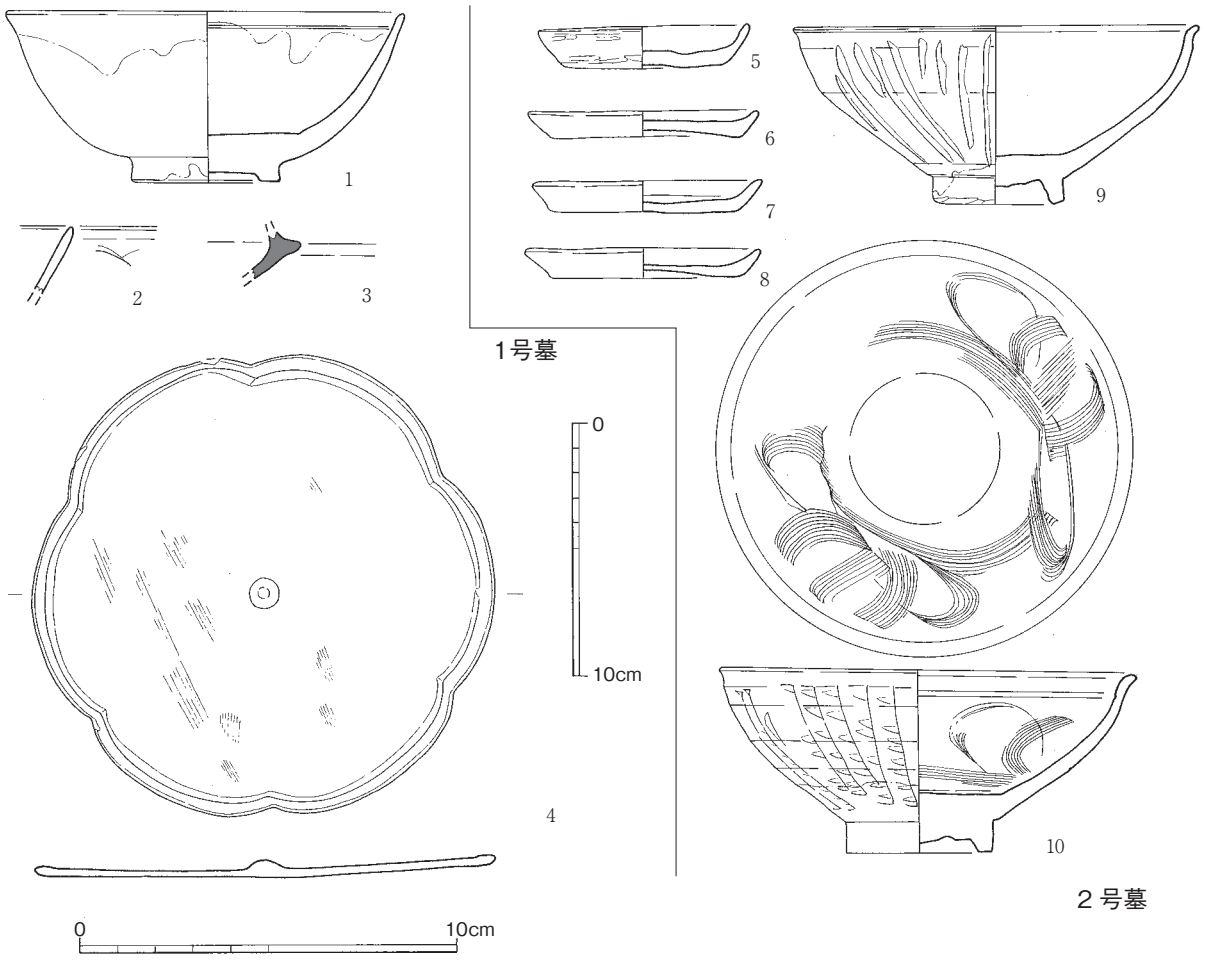
２号墓（図版 46・47、第 95 図）

調査区の南東部に位置し、40・42 号竪穴住居跡を切る。平面プランは長方形で、規模は長さ 1.76 m、幅 0.68 m、深さ 0.6 mを測る。棺の痕跡を確認することはできていないが、床面がフラットで壁が垂直に立ち上がることや、鉄釘（第 103 図 44 ～ 52）が出土していることなどから木棺墓であると考えられる。東壁寄りの床面直上から壁と平行して、切先を北に向けた短刀（第 103 図 68）が出土した。その他、白磁椀２点、土師器皿４点が副葬されていたが、北西隅部の一群は棺上に置かれていた可能性が高い。頭位は北であろう。

出土遺物（図版 53、第 96 図５～ 10）

５～８は土師器小皿である。口径が小さく器高が高いものと、口径に比して器高が低く浅くなるものがある。いずれも底部糸切りで、１は底部内面をナデ調整する。５・７には板状圧痕が伴う。法量は口径 8.4 ～ 9.4cm、底径 6.0 ～ 7.4cm、器高 1.2 ～ 1.8cm を測る。９・10 は白磁の椀。９は外面に片彫りを施す。胎土は灰色で灰色気味の透明釉を施す。畳付から底部外面にかけては露胎となる。10 は内面の口縁部下に１条の沈線を巡らせる。外面に工具端部押圧による施文を行い、内面には櫛描きによる花文を描く。胎は白色で、灰味の透明釉を施す。体部下半から底部にかけては露胎となる。５～９は墓壙北西部の上層から、10 は墓壙北東部の床面近くで短刀の上位から出土した。

出土した遺物から 11 世紀に属するものと考えられる。（吉村）



第 96 図　Ⅲ -AB 区１・２号墓出土土器・鏡実測図（1/3、4 は 1/2）

（6）不明遺構

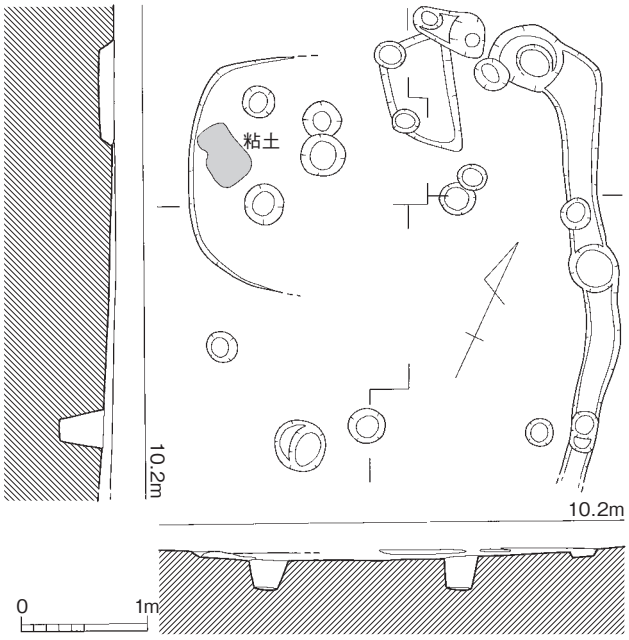
1号不明遺構（第97図）

調査区の中央南寄りに位置する。調査時は北西側の隅部分に黒褐色土が残存しており、不明遺構とした。東側の溝を東辺とすれば3.4m四方の住居跡である可能性もあるが、その場合主柱穴として並ぶものがないことから不明遺構としている。西壁際から粘土が検出された。

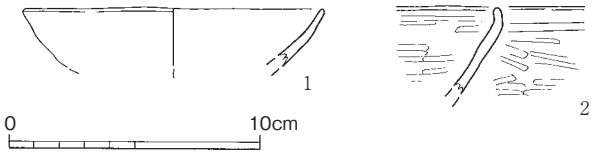
出土遺物（第98図）

1は土師器の椀である。摩滅のため調整は不明である。2は瓦器椀である。内外面共にミガキを施す。

出土遺物は中世に属するものであるが、埋土がほとんど残存していなかったため、遺構に伴わない可能性もある。（城門）



第97図　Ⅲ-AB区1号不明遺構実測図（1/60）

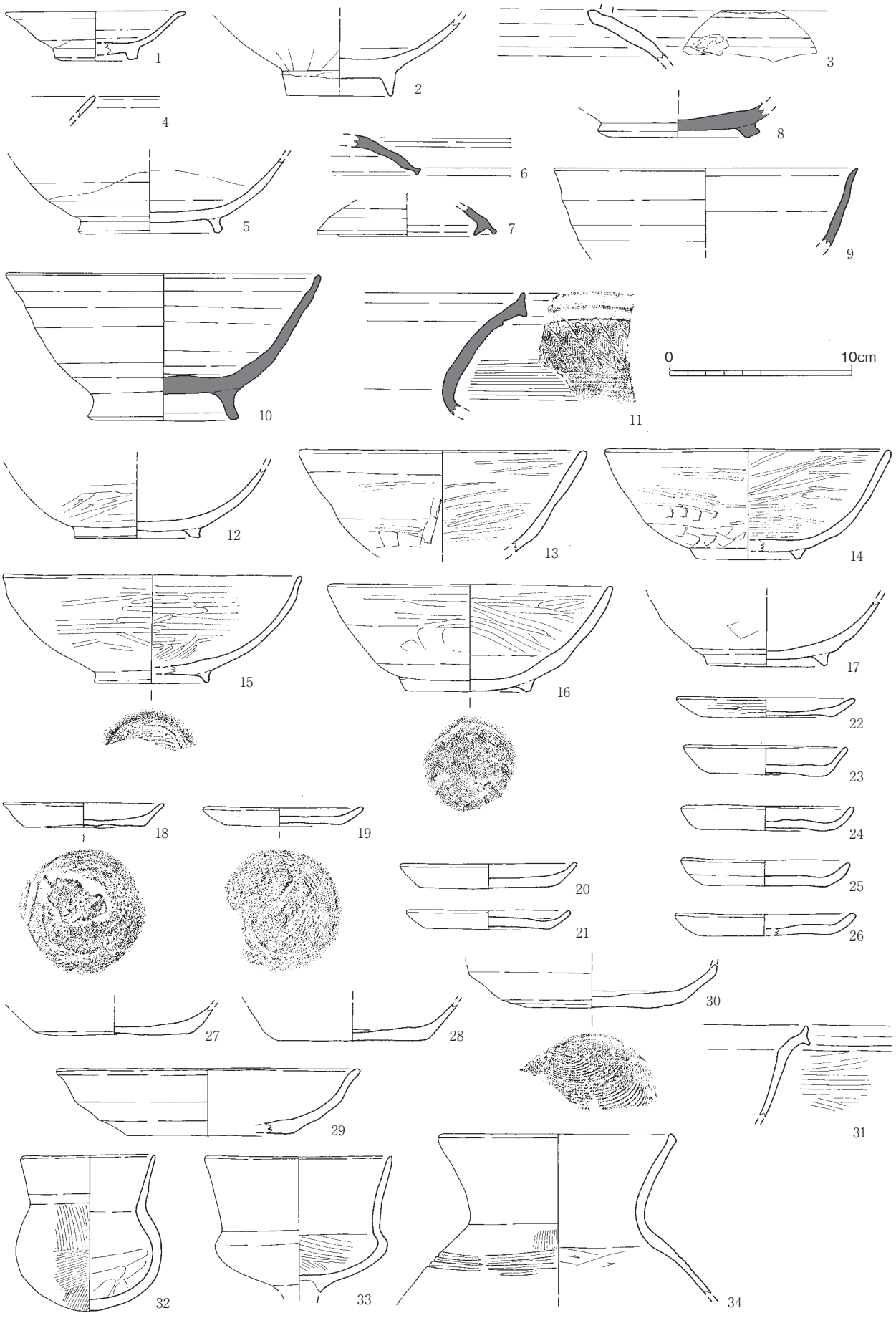


第98図　Ⅲ-AB区1号不明遺構出土土器実測図（1/3）

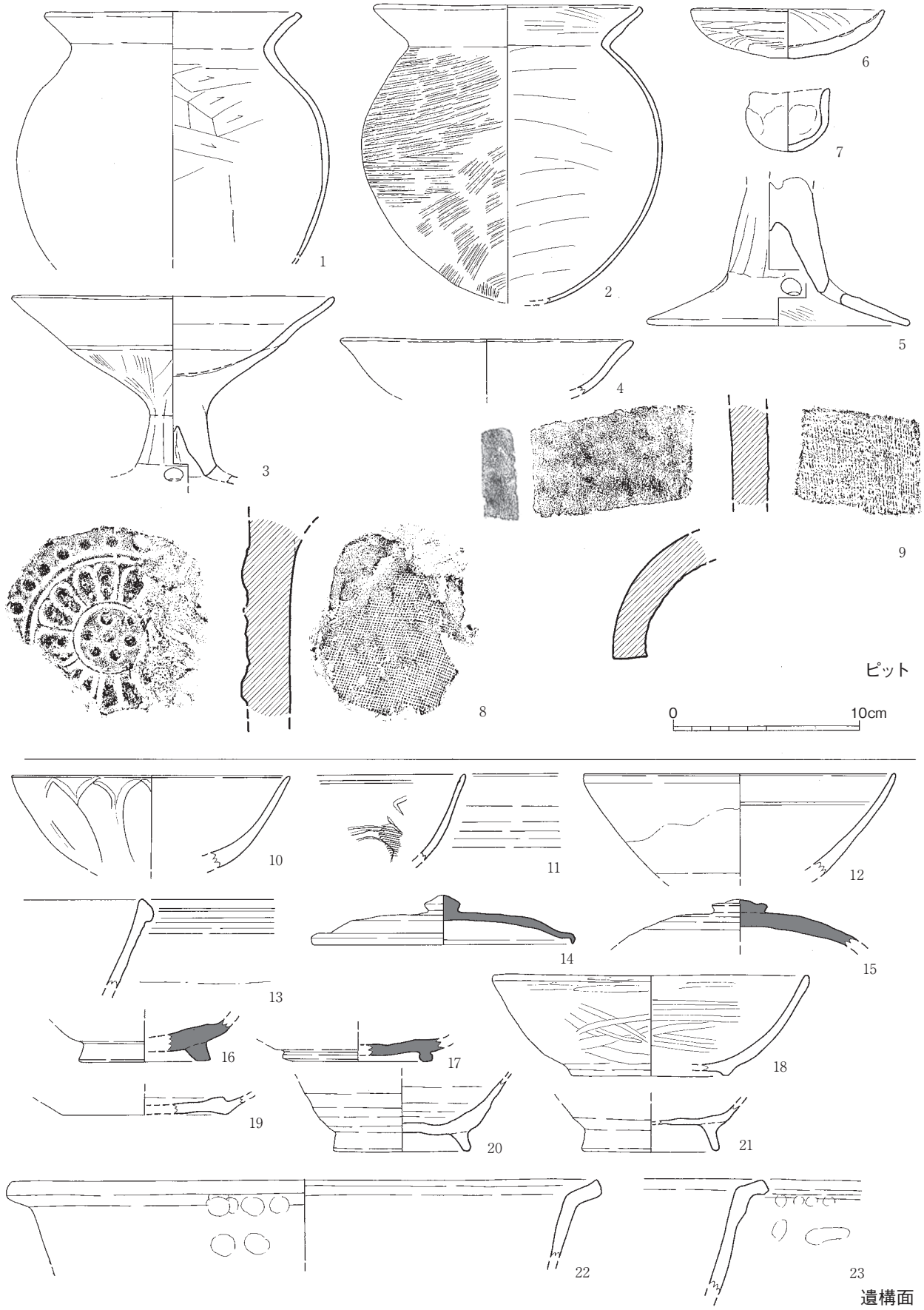
（7）その他の遺構

ピット出土遺物（図版53・54、第99・100図）

第99図1は白磁の皿である。内面の一部および高台部が露胎となる。P214出土。2は白磁の椀である。高台部が露胎となる。P152出土。3は白磁の壺である。耳および口縁部が欠損している。P691出土。4・5は緑釉陶器の椀である。5は底部内外面が露胎となる。4はP979、5はP529出土。6～11は須恵器である。6・7は蓋、9・10は坏、11は甕である。7はかえりが付き、壺蓋と考えられる。6・7共に天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。6はP530、7はP616出土。10は胴部外面下位および底部外面回転ヘラケズリ、底部内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。底部内面に磨耗が認められ、使用痕の可能性がある。8はP910、9はP316、10はP433出土。11は口縁部外面カキメ後波状文、他は回転ナデを施す。P705出土。12～16は瓦器椀である。概ね内面ミガキ、胴部外面上位ミガキ、下位ケズリないしは工具痕、底部外面ナデを施す。15は底部に糸切り、16はヘラ記号が認められる。12はP970、13・14はP329、15はP921、16はP775出土。17は土師器ないしは瓦器椀か。摩滅が著しいが胴部外面に工具痕が残る。P251出土。18～26は土師器皿である。全体的に摩滅が著しいが、18・22の底部外面に板圧痕、19の底部外面に糸切りの痕跡が見られ、22は外面にハケメ状の痕跡が残る。18・25はP306、19はP253、20・26はP302、21はP35、22はP247、23はP601、24はP241出土。27～30は土師器椀である。摩滅が著しいが、29の外面に回転ナデ、30の底部外面糸切り、30の内外面に回転ナデが残る。27はP927、28はP771、29はP247、30はP244出土。31は土師器の鍋である。摩滅するが外面ハケメが残る。P850出土。32～34は土師器の壺である。32は小型壺で口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデを施す。P982出土。33は脚付の小壺で、摩滅するが胴部内面にハケメが残る。P914出土。34は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメおよびタ



第 99 図　Ⅲ -AB 区ピット出土土器実測図（1/3）



第 100 図　Ⅲ -AB 区ピット・遺構面出土土器実測図（1/3）

タキ、内面ケズリを施す。P787 出土。第 100 図１・２は土師器の甕である。１は口縁部ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ケズリを施す。P102 出土。２は口縁部ヨコナデ、胴部外面タタキ、内面ケズリを施す。内面にコゲが認められる。P160 出土。３～５は高坏である。３は摩滅が著しいが坏部外面ハケメ、脚部外面ケズリが残る。脚部に孔が４つ穿たれる。P914 出土。４は口縁部のみが遺存し、摩滅のため調整は不明である。P184 出土。５は脚端部ヨコナデ、外面ケズリ、内面ナデを施す。やや位置がずれるが、孔が４つ穿たれる。P33 出土。６は坏である。内外面ミガキを施す。外面は４分割でミガキを行った単位が認められる。P787 出土。７はミニチュア土器である。ユビナデで成形する。P145 出土。８・９は丸瓦である。８は瓦当で複弁八弁蓮華文である。内面には布目が認められる。P131 出土。９は外面タタキ後ナデ､内面布目が認められる。P721 出土。（城門）

遺構面出土遺物（第 100 図）

第 100 図 10 ～ 12 は青磁椀である。10 は外面に蓮弁文、11 は内面に文様が施される。13 は白磁の椀である。口唇部が肥厚する。14・15 は須恵器の蓋である。つまみを有し、天井部付近外面回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。16・17 は須恵器の坏である。17 の内面に不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。18 は瓦器椀である。底部外面ヨコナデ、他はミガキを施す。19 は土師器の坏か。摩滅のため調整は不明である。20・21 は土師器の坏である。高台が外方に開き底部は直線的である。22・23 は土師器の鍋である。共に摩滅するが、一部指頭圧痕が残る。22 は外面に煤が付着する。（城門）

（８）その他の遺物

ここでは、Ⅲ -AB 区から出土した特殊遺物についてまとめて報告する。

土製品（図版 54、第 101 図１～４）

１・２は土錘である。孔径はそれぞれ６、５mm である。１は 25 号土坑、２は４号土坑出土。３は勾玉である。全体的に丁寧な作りをしており、胎土に砂粒が少ない。孔は外側が径４mm、内側が２mm と径が異なっており､凸形状の工具で穿孔したものと考えられる。３号竪穴住居跡出土。４は土製紡錘車である。外孔８㎜、内孔５㎜を測る。13 号竪穴住居跡出土。

石製品（図版 54、第 101 ～ 103 図）

５～７は打製石鏃である。いずれも凹基式で抉りは 3.5、７、６mm を測る。５・７は黒曜石、６は安山岩製。５は 13 号土坑、６は 27 号竪穴住居跡竪穴部、７は 26 号竪穴住居跡出土。８は勾玉である。全面に丁寧な研磨を施す。滑石製。P803 出土。９は紡錘車である。孔径６～９mm を測り、中央に段差が見られる。片岩製。P903 出土。10 は有孔円盤である。中央からややずれた位置に穿孔が見られる。緑色片岩製。43 号竪穴住居跡出土。11 は石庖丁である。杏仁形で片側から穿孔する。外孔４mm、内孔 2.5mm、孔間 20mm、背孔 15mm を測る。頁岩質砂岩製。26 号竪穴住居跡出土。12 ～ 23 は砥石である。12 は両面を砥面とし､側面は研磨により成形する。凝灰岩製。14 号竪穴住居跡出土。13 は３面の砥面が残り､金属製刃器の研磨痕が２ヶ所見られる。細粒砂岩製。３号竪穴住居跡出土。14 は４面を砥面とする。片岩系石材製。方形周溝出土。15 は２面を砥面とし、二次被熱のため煤が付着し､赤化が見られる。凝灰岩製か。P41 出土。16 は４面が砥面として残る。頁岩製。10 号溝出土。17 は４面を砥面とし、表面に金属製刃器の研磨痕が見られる。粘板岩製か。P141 出土。18 は４面が砥面として残る。頁岩製。P771 出土。19 は２面を砥面とするが使用の痕

第 101 図　Ⅲ -AB 区出土土・石製品実測図（1/2、5 ～ 7 は 2/3）

跡はわずかである。片岩製。１号溝出土。20 は表面にわずかに研磨痕が残るが、その他の痕跡は不明瞭である。砂岩製。14 号竪穴住居跡出土。21 は４面が砥面として残る。頁岩製。13 号竪穴住居跡出土。22 は６面を砥面とし、一部金属製刃器の研磨痕が見られる。砂岩製。１号溝出土。23 は２面が砥面として残り、裏面に金属製刃器の研磨痕が見られる。泥岩製。４号土坑出土。24 は磨石か。２面が平坦面を形成する。玄武岩製か。21 号竪穴住居跡出土。25 ～ 28 は磨石である。25 は表面が平滑である。斑岩系石材製か。２号溝出土。26 は花崗岩系石材製。P480 出土。27 は片岩系石材製。排土中出土。28 は右側がわずかに平坦面を形成する。火成岩製。21 号竪穴住居跡出土。29 ～ 31 は滑石製石鍋である。いずれも煤が付着する。29 は５号土坑、30 は 10 号溝、31 は８号土坑出土。

鉄製品（図版 54、第 103・104 図）

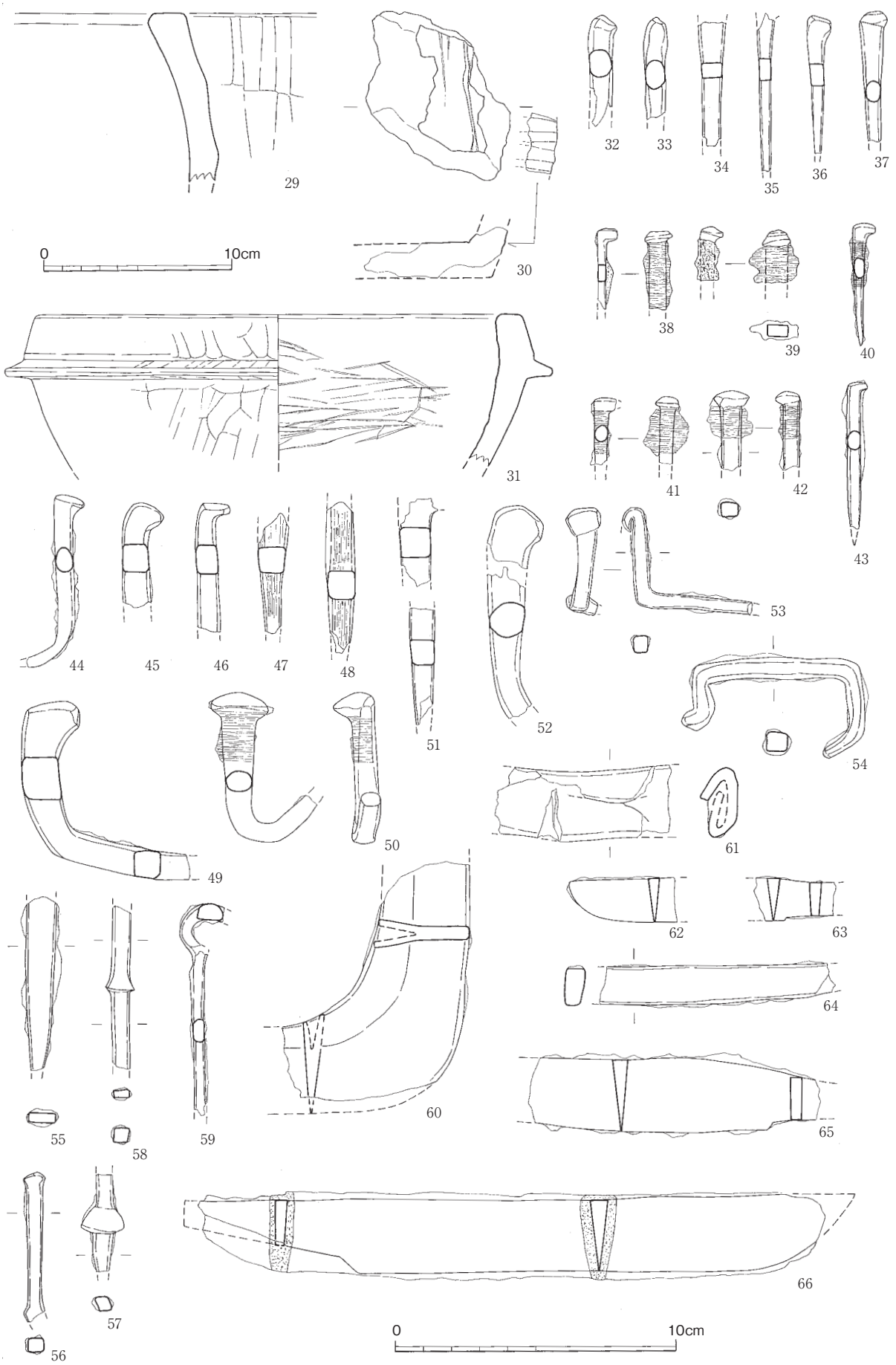
32 ～ 53 は鉄釘である。48 ～ 51 は大型品である。32・34・36・37・44・45・49・52 は頭部がやや膨れ、他の破損品以外は頭部がＬ字形を呈する。38 ～ 42 ・47・48・50 で木質が見られる。32 は３号竪穴住居跡、33・53 は１号溝、34・35 は 26 号土坑、36 ～ 43 は１号墓、44 ～ 51 は２号墓、52 は２号土坑出土。54 ～ 57 は不明鉄製品である。54 はワ字形を呈する。鏃などの可能性がある。26 号土坑出土。55 は棒状を呈する。刀子の柄などの可能性がある。24 号竪穴住居跡出土。56 は釘になるか。P152 出土。57 は円錐状のふくらみを持つ。P170 出土。58 は鉄鏃である。中位に篦被が見られる長頸鏃である。P975 出土。59 は鑷子か。26 号土坑出土。60 は鋤先である。一部錆膨れが著しい。５号溝出土。61 は不明鉄製品である。両側から鉄片を折り曲げており用途不明である。14 号竪穴住居跡出土。62・63 は刀子である。62 は切先で 63 は関部分である。62 は４号土坑出土、63 は 10 号溝出土。64 は刀子か。22 号溝出土。65 ～ 68 は短刀である。65 は関部分が遺存する。１号溝出土。66 は９割ほどが遺存し､刀身側に関が付く。錆膨れが見られるため鞘などがあったかどうかは不明である。４号土坑出土。67 は９割ほどが遺存し、刀身側に関が付く。１号溝出土。68 はほぼ完形で、背側に関が付く。全体的に木質が付着しており、鞘に入っていたものと考えられる。やや黒い光沢が見られることから、黒漆が塗布されていた可能性がある。２号墓出土。69 ～ 72 は鉄塊である。素材の可能性がある。69・72 は 10 号溝、70 は P223、71 は P184 出土。73 ～ 76 は鉄滓である。73 ～ 75 は３号竪穴住居跡、76 は 10 号溝出土。（城門）

（9）小結

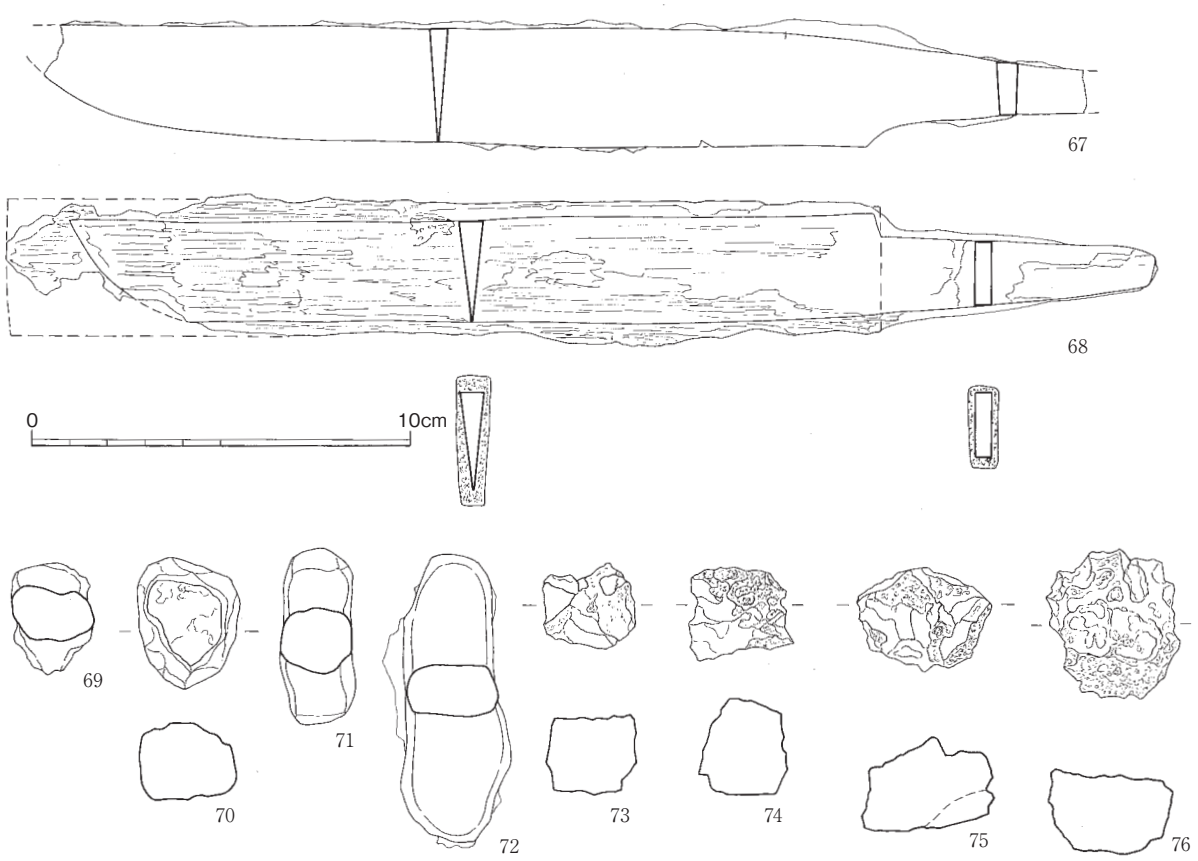
Ⅲ -AB 区は、遺跡の中でも最北端に位置しており、住居跡・土坑・溝などの遺構が検出された。住居跡は弥生時代後期～古墳時代前期および古墳時代中期・古墳時代後期を中心として検出されており、弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期の住居跡が中心となる。他の調査区では古墳時代後期の住居跡が多数を占めるのと異なっており、古墳時代前期の住居跡が最も多い。しかしながら、他の調査区において古墳時代後期の住居跡の方が浅いこと、方形周溝より北側では遺構密度が低くなっていることから、調査区の中央から北側にかけて削平されている可能性がある。

本調査区では、弥生時代後期以降に集落の形成が始まっており、古墳時代前期までに住居と掘立柱建物・溝が造られる。特に方形周溝は南南東側に入口を持ち、さらに東側にも同時期の 30 号溝が掘削されている。他の調査区でも当該時期に近い区画が検出されており、他区との比較を含め後に検討を行う。

第 102 図　Ⅲ -AB 区出土石製品実測図（1/2）



第 103 図　Ⅲ -AB 区出土石・鉄製品実測図（1/2、29 ～ 31 は 1/3）



第 104 図　Ⅲ -AB 区出土鉄製品実測図（1/2）

古墳時代中期には住居跡が５軒検出されているが、須恵器をほとんど含まず時期決定には若干の不安が残る。地域内の土師器の編年整理が今後必要となるだろう。後期になると、遺跡内の他の調査区と同じく、カマドを持つ住居が増加し、掘立柱建物、土坑、溝も造られる。

７世紀前半まで一部住居跡が残るものの、７世紀後半にはほとんど認められなくなり、代わって掘立柱建物、土坑が造られる。建物跡は、西側の延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ -2 区、Ⅴ -1b 区でも同時期の遺構が検出されており、当地が「草野津」であろうことを考え合わせても、丘陵全体の遺構配置の中で建物の意義や配置などを考える必要があろう。

中世以降では、掘立柱建物、土坑、溝が造られる。特に溝の中には方形区画となるものがあり、軸を同じくして並んでいることから、屋敷地の区画の可能性が高い。ただし内部に建物などの復元はできなかった。（城門）

挿図	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	残存	備考
101-1	54	3B	25号土坑	土製品	土錘	5.00	1.70	1.70	10.44	1	
101-2	54	3B	4号土坑覆土上層	土製品	土錘	(4.10)	0.90	0.90	(2.96)	0.9	
101-3	54	3A	3号竪穴住居跡	土製品	勾玉	4.80	1.60	1.70	16.40	1	
101-4	54	3A	13号竪穴住居跡	土製品	紡錘車	4.80	4.80	1.10	24.13	1	
101-5	54	3B	13号土坑	石製品	打製石鏃	(2.45)	1.80	0.70	(1.72)	0.9	黒曜石
101-6	54	3B	27号竪穴住居跡竪穴部覆土	石製品	打製石鏃	(2.50)	1.60	0.45	(1.28)	ほぼ完形	安山岩
101-7	54	3B	26号竪穴住居跡覆土	石製品	打製石鏃	(2.20)	(1.60)	0.50	(1.25)	0.6	黒曜石
101-8	54	3B	P803	石製品	勾玉	2.30	0.80	0.40	1.80	1	滑石
101-9	54	3B	P903	石製品	紡錘車	3.50	(4.20)	1.10	(17.02)	0.7	片岩
101-10	54	3B	43号竪穴住居跡	石製品	有孔円盤	2.50		0.30	(4.06)	0.6	緑色片岩
101-11	54	3B	26号竪穴住居跡覆土上層	石製品	石庖丁	10.30	5.40	0.70	62.82	1	凝灰岩
101-12		3A	14号竪穴住居跡覆土	石製品	砥石	(3.20)	3.70	1.70	(18.15)	0.2	凝灰岩
101-13		3A	3号竪穴住居跡覆土上層	石製品	砥石	(4.60)	(2.55)	4.40	(34.16)	0.1	砂岩
101-14	54	3B	方形周溝	石製品	砥石	6.60	2.70	2.10	64.47	1	片岩系？
101-15		3B	P41	石製品	砥石	(10.50)	3.40	2.40	(68.67)	0.6	凝灰岩系？
101-16	54	3A	10号溝西覆土	石製品	砥石	(6.60)	5.60	2.90	(201.82)	0.4	細粒砂岩
101-17	54	3B	P141	石製品	砥石	11.00	3.60	1.80	(88.09)	0.9	粘板岩
101-18		3B	P771	石製品	砥石	(4.50)	5.40	2.60	(72.55)	0.2	細粒砂岩
101-19		3B	1号溝	石製品	砥石	6.90	5.3	4.00	213.68	1	片岩
101-20		3A	14号竪穴住居跡覆土	石製品	砥石	(7.50)	5.00	0.90	(53.66)	0.7	砂岩
102-21	54	3A	13号竪穴住居跡	石製品	砥石	(7.90)	3.50	3.70	(121.70)	0.5	頁岩
102-22	54	3A	1号溝	石製品	砥石	9.30	5.10	4.60	231.90	ほぼ完形	砂岩
102-23	54	3B	4号土坑覆土上層	石製品	砥石	(17.10)	(7.90)	3.00	(490.50)	0.4	泥岩
102-24		3B	21号竪穴住居跡	石製品	磨石？	13.95	6.70	5.10	(690.70)	0.9	玄武岩？
102-25		3A	2号溝	石製品	磨石	(3.10)	(5.55)	(3.50)	(62.15)	0.1	斑岩系？
102-26		3B	P480	石製品	磨石	(7.10)	(6.90)	(2.30)	(137.98)	0.1	花崗岩系
102-27		3B	排土中	石製品	磨石	(9.60)	(5.90)	(6.80)	(382.20)	0.3	片岩系
102-28	54	3B	21号竪穴住居跡	石製品	磨石	10.00	8.70	6.00	792.10	1	火成岩
103-29		3B	5号土坑覆土	石製品	石鍋			(9.00)	-	0.1	滑石
103-30		3A	10号溝東覆土	石製品	石鍋			(2.70)	-	0.1	滑石
103-31		3B	8号土坑覆土上層	石製品	石鍋	25.70		(8.20)	-	0.1	滑石
103-32		3A	3号竪穴住居跡周溝	鉄製品	釘	(4.00)	1.00	0.95	(7.09)	0.4	
103-33		3A	1号溝埋土上層	鉄製品	釘	(3.60)	0.90	1.00	(6.82)	0.4	
103-34		3B	26号土坑	鉄製品	釘	(4.40)	(1.00)	(0.60)	(3.90)	0.6	
103-35		3B	26号土坑	鉄製品	釘	(5.60)	(0.60)	0.80	(5.47)	0.8	
103-36		3A	1号墓	鉄製品	釘	(4.85)	0.85	0.80	(4.14)	0.9	
103-37	54	3A	1号墓　覆土南	鉄製品	釘	(4.60)	1.00	0.80	(5.70)	0.8	
103-38	54	3A	1号墓	鉄製品	釘	(2.80)	0.80	0.90	(2.61)	0.5	
103-39	54	3A	1号墓	鉄製品	釘	(1.90)	1.00	0.80	(2.20)	0.3	
103-40	54	3A	1号墓　覆土南	鉄製品	釘	4.40	0.80	0.70	2.89	1	
103-41	54	3A	1号墓　覆土南	鉄製品	釘	(2.40)	(0.80)	0.80	(2.73)	0.4	
103-42	54	3A	1号墓	鉄製品	釘	(2.80)	1.30	0.90	(3.24)	0.3	
103-43	54	3A	1号墓　覆土南	鉄製品	釘	(5.20)	0.80	0.70	(4.50)	0.9	
103-44	54	3B	2号墓　No.8	鉄製品	釘	6.10	(2.10)	0.90	(7.85)	0.9	
103-45		3B	2号墓	鉄製品	釘	(3.70)	1.40	1.00	(6.36)	0.4	
103-46	54	3B	2号墓	鉄製品	釘	(4.60)	1.30	1.05	(8.39)	0.6	
103-47		3B	2号墓	鉄製品	釘	(4.30)	(1.10)	(0.90)	(5.17)	0.4	
103-48		3B	2号墓	鉄製品	釘	(5.25)	1.10	1.00	(10.09)	0.6	
103-49	54	3B	2号墓　No.6	鉄製品	釘	6.30	(6.00)	1.50	(36.29)	0.8	
103-50	54	3B	2号墓　No.10	鉄製品	釘	5.30	(3.80)	1.50	(13.55)	0.9	
103-51		3B	2号墓　No.9	鉄製品	釘	(7.20)	1.15	1.10	(16.39)	0.6	
103-52		3A	2号土坑覆土	鉄製品	釘	(7.60)	(2.00)	1.30	(25.52)	0.8	
103-53	54	3B	1号溝	鉄製品	釘	3.80	(4.60)	1.20	(8.26)	0.9	
103-54		3B	26号土坑	鉄製品	不明	3.60	6.55	0.85	(20.27)	0.8	
103-55		3B	24号竪穴住居跡	鉄製品	不明	(6.20)	1.00	0.35	(8.46)	0.6	
103-56		3B	P152	鉄製品	不明	(5.30)	0.70	0.50	(4.43)	0.8	
103-57	54	3B	P170	鉄製品	不明	(3.45)	1.50	1.50	(4.93)	0.2	
103-58	54	3B	P975	鉄製品	鉄鏃	(6.80)	0.60	0.60	(4.98)	0.3	
103-59		3B	26号土坑	鉄製品	鑷子	(7.50)	(1.55)	0.80	(8.11)	0.5	
103-60	54	3A	5号溝西覆土	鉄製品	鋤先	(8.30)	(6.65)	1.05	(99.36)	0.3	
103-61		3A	14号竪穴住居跡	鉄製品	不明	(6.20)	2.40	1.30	(33.84)	0.4	
103-62		3B	4号土坑覆土上層	鉄製品	刀子	(3.85)	(1.65)	0.40	(5.51)	0.1	
103-63		3B	10号溝	鉄製品	刀子	(2.90)	(1.55)	0.45	(5.95)	0.2	
103-64		3B	22号溝	鉄製品	刀子？	(8.35)	1.50	0.75	(22.11)	0.5	
103-65		3A	1号溝埋土上層	鉄製品	短刀	(10.40)	2.70	0.50	(44.35)	0.4	
103-66	54	3B	4号土坑覆土上層	鉄製品	短刀	(22.20)	2.70	0.60	(193.97)	0.9	
104-67	54	3A	1号溝北端	鉄製品	短刀	(27.40)	3.10	0.60	(125.87)	0.9	
104-68	54	3B	2号墓	鉄製品	短刀	28.80	2.80	0.60	191.70	1	
104-69		3B	10号溝東覆土	鉄製品	鉄塊	2.90	2.20	1.40	14.20	1	
104-70		3A	P223	鉄製品	鉄塊	3.50	2.70	2.00	28.70	1	
104-71		3A	P184	鉄製品	鉄塊	4.60	1.80	1.70	26.40	1	
104-72		3B	10号溝東覆土	鉄製品	鉄塊	7.50	2.40	1.30	92.70	1	
104-73		3A	3号竪穴住居跡覆土上層	鉄製品	鉄滓	2.30	2.40	2.15	20.20	1	
104-74		3A	3号竪穴住居跡覆土上層	鉄製品	鉄滓	2.50	2.80	2.55	22.20	1	
104-75		3A	3号竪穴住居跡覆土上層	鉄製品	鉄滓	2.80	3.55	2.50	22.10	1	
104-76		3B	10号溝	鉄製品	鉄滓	3.90	3.50	2.20	32.60	1	

（　）は残存値

第４表　Ⅲ-AB 区出土特殊遺物一覧表

第 105 図　Ⅲ -C 区遺構配置図（1/200）

3　Ⅲ -C 区の遺構と遺物

調査の経過

Ⅲ－Ｃ区南側の調査は平成 22 年度に行った。調査区の北側（2013 年報告部分）は前年度に調査が行われており、未買収地があったため１年遅れ、23 年１月より調査を開始した。

１月５日に重機を搬入し表土除去作業を開始した。表土下 1.5 m内外の部分で白色土の地山が検出されたため、それを基準として表土を除去していった。しかし、調査区端から１～３m 北側に剥いだ所で落ちが検出され､埋土から土器が検出されたため､落ち堆積土の上面まで掘り下げていった。表土掘削に際して、調査区の南東端で遺構面より上方に設置されていた 3001 号土坑の上部井戸枠を削平してしまっている。同 12 日より人力による遺構掘削を開始し、まずは落ちに直行してトレンチを設定し、浅い谷であることを確認した後、順次遺構を掘削していった。１月 21 日には 3003 号土坑から臼が出土、26 日には 3005 号土坑から籠、２月３日には 3009 号土坑から準構造船堅板が出土した。谷部分で周囲の丘陵の雨水がすべて流れ込んでくること、標高が低く湧水が激しいこと、井戸などの深い遺構が多いことなどから掘削に時間を要したものの、２月９日にラジコンヘリによる空中写真を撮影した。その後､3001 号溝の底部で確認された土坑の掘削､谷埋土の土器･木製品が多く出土する谷部の落ち際を中心として掘削を進めた。概ね遺物が密に出土する部分の掘削が終了したことから、３月４日には重機による埋め戻し作業を予定していた。しかしながら、前日の３日に南東端で導水施設の槽部が確認された。大部分が調査区東側の法面に続いていたことから、４日に調査区境まで重機で追加掘削した。当日が金曜日であったこと、調査区境まで、深さ２mほどを直で掘削しており、そのままにしておくと崩落する危険性があることから、当日中に図化および取り上げ作業を実施し、当日中に埋め戻しまで終了した。翌週７日に、導水施設を移動用パンケースに移し、撤収を行った。その後は、埋め戻し作業を続け、３月 18 日に終了した。

調査区の概要

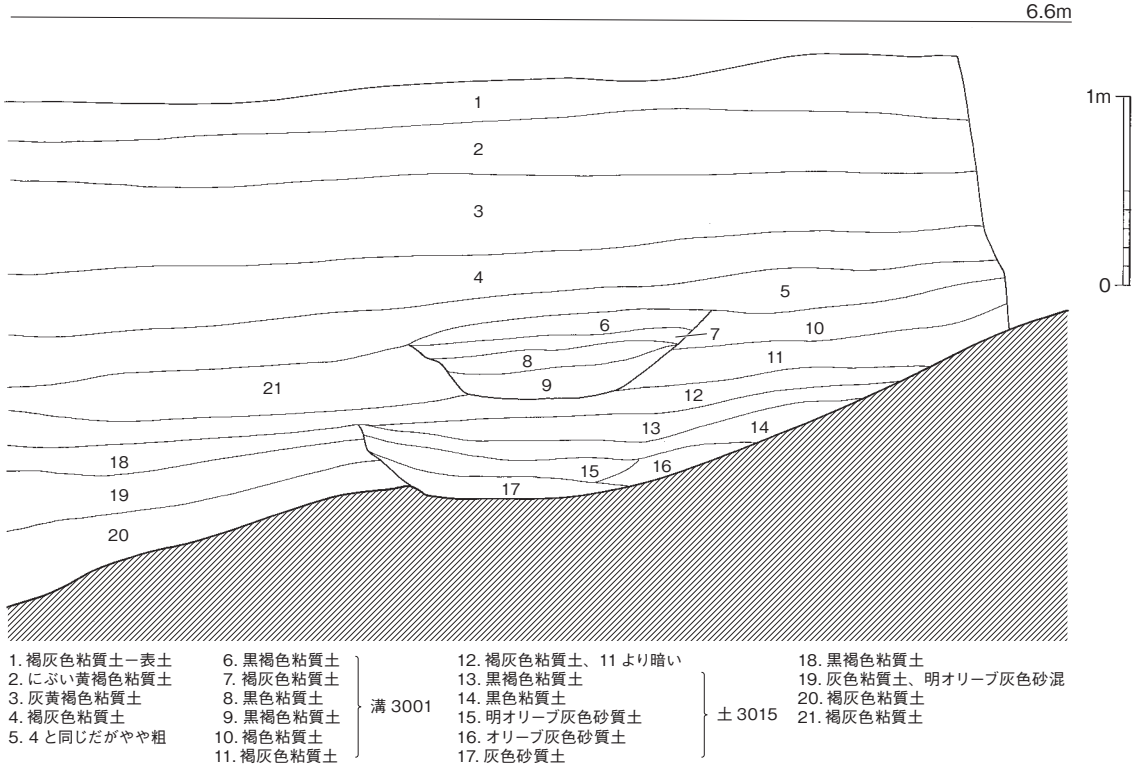
延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ -C 区は、馬蹄形を呈する丘陵の中央部、谷部分に位置する。用地内では中央部から北寄りにかけて位置しており、2013 年に本館が刊行した『延永ヤヨミ園遺跡－Ⅲ区Ⅰ－』で報告された地点が南北両側に位置している。本調査区では、地表面から１～ 1.5m ほど下位で遺構面が検出され、中央の谷部に向かって緩やかな傾斜が認められる（第 105 図）。中央谷部分が調査区の大半を占めており、本遺跡の中でも標高が最も低い部分にあたる。そのため、井戸と考えられる土坑が検出され、包含層からは多くの木製品が出土した。

検出した遺構は、土坑 24 基、溝２条、水漬け遺構１基、導水施設１基である。ここでは検出した遺構に伴う遺物の他、2013 年報告時点では整理が終了していなかった既報告遺構出土木製品についても（７）その他の遺物の項において共に報告する。なお､遺構番号については､調査時には「延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区」としか区分けしていなかったため、土坑・溝・ピット共に既調査分と判別がつくように 3000 番台の番号を付している。本報告にあたっては既報告部分と遺構の重複はほとんど認められないことから、調査時の番号をそのまま踏襲し報告する（第５表）。遺構面地山は灰白色の粘質土であり、遺構埋土は概ね黒色や黒褐色・暗灰色粘質土である（図版 56、第 106 図）。

区	報告時遺構名	調査時遺構名	備考
Ⅲ-C	土坑3001	土坑3001	井戸
Ⅲ-C	土坑3002	土坑3002	井戸
Ⅲ-C	土坑3003	土坑3003	
Ⅲ-C	土坑3004	土坑3004	
Ⅲ-C	土坑3005	土坑3005	
Ⅲ-C	土坑3006	土坑3006	
Ⅲ-C	土坑3007	土坑3007	
Ⅲ-C	土坑3008	土坑3008	
Ⅲ-C	土坑3009	土坑3009	井戸
Ⅲ-C	土坑3010	土坑3010	
Ⅲ-C	土坑3011	土坑3011	井戸
Ⅲ-C	土坑3012	土坑3012	
Ⅲ-C	土坑3013	土坑3013	
Ⅲ-C	土坑3014	土坑3014	
Ⅲ-C	土坑3015	土坑3015	

区	報告時遺構名	調査時遺構名	備考
Ⅲ-C	土坑3016	土坑3016	
Ⅲ-C	土坑3017	土坑3017	
Ⅲ-C	土坑3018	土坑3018	
Ⅲ-C	土坑3019	土坑3019	
Ⅲ-C	欠番	土坑3020	土3008と同一
Ⅲ-C	土坑3021	土坑3021	
Ⅲ-C	土坑3022	土坑3022	
Ⅲ-C	土坑3023	土坑3023	
Ⅲ-C	土坑3024	土坑3024	
Ⅲ-C	土坑3025	土坑3025	
Ⅲ-C	溝3001	溝3001	13年報告谷含む
Ⅲ-C	溝3002	溝3002	
Ⅲ-C	水漬け遺構	水漬け遺構	
Ⅲ-C	導水施設	SX3001	

第５表　Ⅲ-C 区遺構一覧・対照表



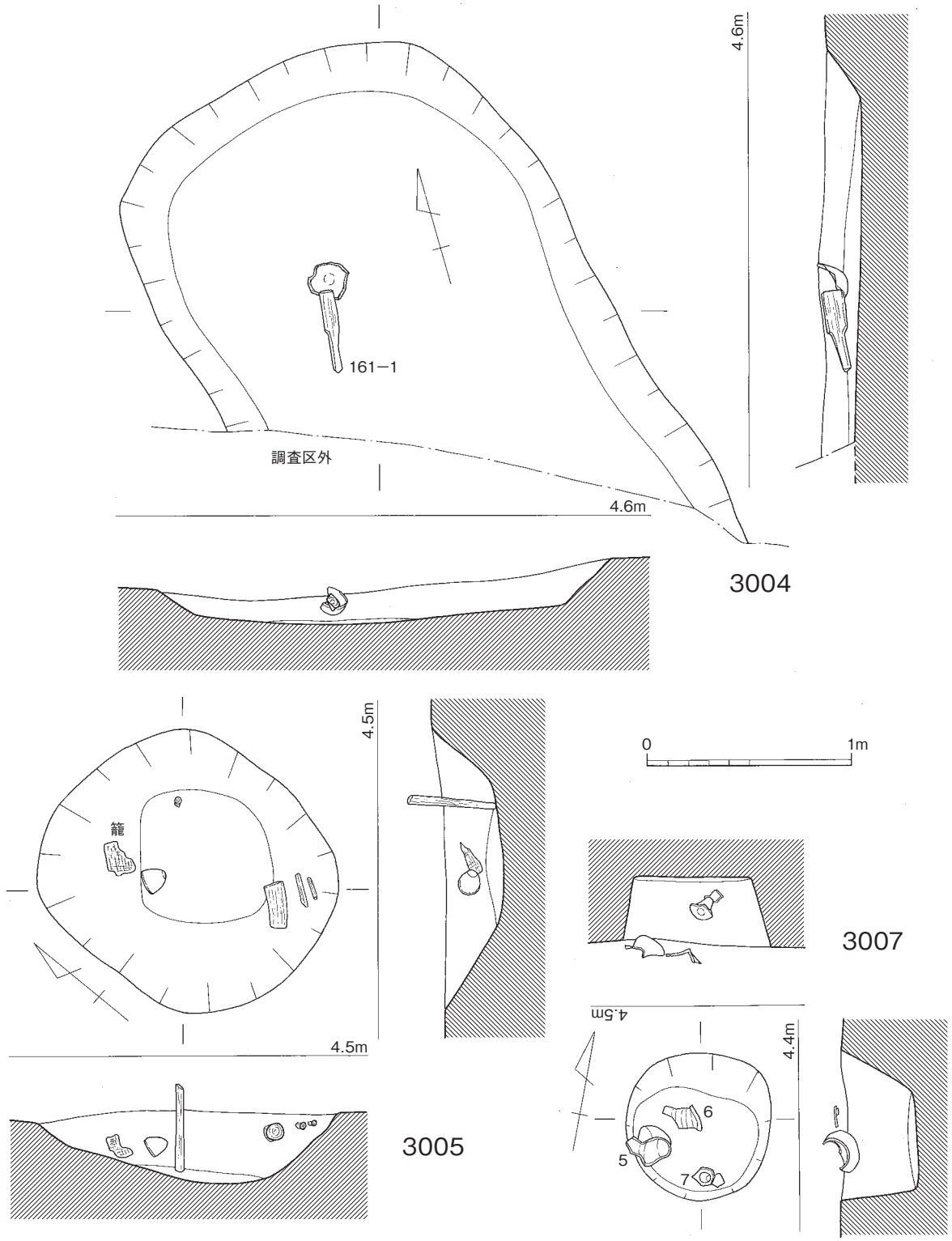
第 106 図　Ⅲ-C 区調査区北西壁土層実測図（1/40）

（1）土坑

本調査区では 24 基の土坑が検出された。性格は不明のものと井戸と想定されるものがあるため、分けて報告を行う。

3004 号土坑（第 107 図）

谷より南側、調査区の南端に位置する。規模は 3.2m 以上× 2 m、深さ 0.2m である。調査区外に延びるため不明確なものの、隅丸長方形を呈するものと考えられる。北側ほぼ中央の位置で、床面からわずかに浮いた状態で羽子板状木製品、土器が出土している。



第 107 図　Ⅲ -C 区 3004・3005・3007 号土坑実測図（1/30）

出土遺物（第 109 図 1 ）

1 は土師器の壺である。口縁のみが遺存し、外面にヨコナデが残る。この他、羽子板状木製品（第 161 図 1 ）が出土している。

出土遺物から古墳時代前期に属するものと考えられる。

3005 号土坑（図版 56、第 107 図）

谷より北側に位置し、3001 号溝に切られる。規模は 1.45 m × 1.4m、深さ 0.35m の隅丸方形土坑

である。南東側には径３～ 10cm、長さ 25cm 程度の木が横に並べられており、階段状を呈する。中央北寄りでは径５cm 程の杭が打ち込まれており、覆土より上方まで 15cm 程度が遺存していた。北西側の床面よりやや浮いた位置では、土器のほか籠が検出されたが、内容物等は検出されなかった。籠に関しては脆弱なため図化は行っていない。

出土遺物（図版 68、第 109 図２～４）

２は須恵器の坏身である。底部外面は工具によるナデ、内面は不定方向のナデ、胴部下位外面はケズリ、他は回転ナデを施す。３は高坏である。回転ナデを施す。４は土師器の壺である。頸部が窄まり、外面ケズリ後ミガキを施す。胴部下位付近に径 3mm 程度の孔が見られ、穿孔したものと考えられる。

切り合いと出土遺物から７世紀前半に属するものと考えられる。

3007 号土坑（図版 57、第 107 図）

谷より北側に位置し、3018 号土坑・3001 号溝に切られ、3019・3025 号土坑を切る。規模は、径 0.7m、深さ 0.45m の円形土坑である。表層近くおよび中層から土器が出土した。

出土遺物（第 109 図５～８）

５は須恵器の壺である。頸部および胴部外面カキメ、底部外面回転ヘラケズリ、底部内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。６は甕である。口縁端部は下方に突出し、２・３条の凹線間に波状文が施される。胴部外面タタキ、内面当て具痕、他は回転ナデを施す。内外面に自然釉が見られる。７は土師器の高坏である。坏部の接合面で剥離しており、脚部外面ハケメ、内面下位ハケメ、上位ケズリを施す。８は壺か。口縁部のみが遺存し、外面ハケメ、内面ナデと一部工具痕を施す。

切り合いと出土遺物から古墳時代後期後半に属するものと考えられる。

3006 号土坑（図版 57、第 108 図）

谷より北側に位置し、3001 号溝に切られ、3024 号土坑に切られる。規模は３ｍ× 2.2m、深さ 0.4m の不定形土坑である。西側の壁面近くで編錘（第 161 図２）、東側壁面近くで木が出土した。中央やや東寄りの位置からは、径５cm、長さ 40cm の杭が打ち込まれ、北西側床面では石が検出された。

出土遺物（第 109 図９）

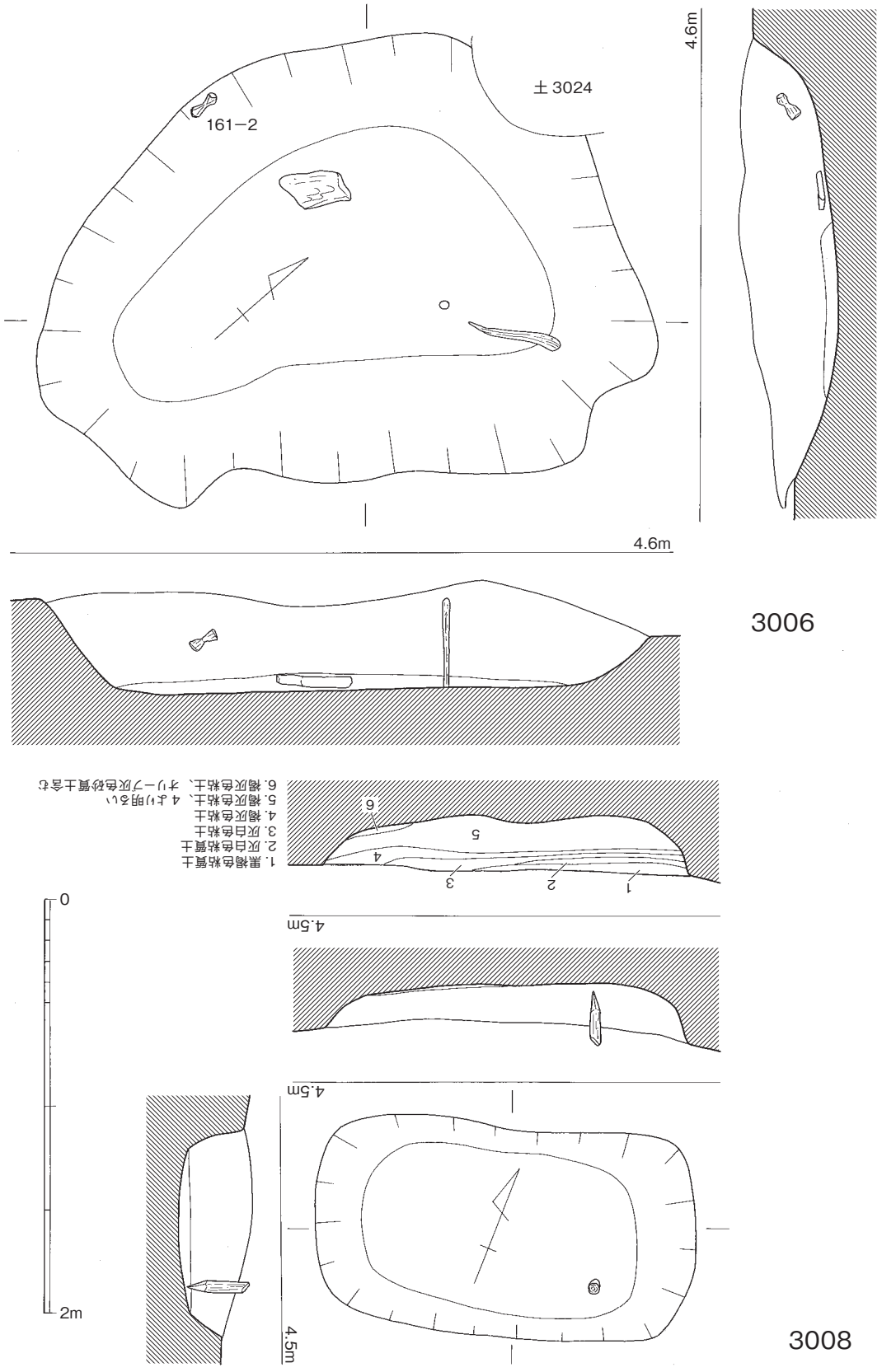
９は土師器の甕である。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデ後ハケメを施す。

切り合いと出土遺物から古墳時代後期に属するものと考えられる。

3008 号土坑（図版 58、第 108 図）

谷より北側に位置し、3001 号溝に切られ、3016 号土坑を切る。規模は 1.8 ｍ× 1.1m、深さ 0.3m の長方形土坑である。東側の角近くで径５cm、長さ 30cm の杭が埋土上面から打ち込まれた状態で検出された。土層は水平堆積しており、上層で粘土および粘質土を薄く重ねていることから杭の掘方である可能性もある。

出土遺物はないが、切り合いから古墳時代後期に属するものと考えられる。



第 108 図　Ⅲ -C 区 3006・3008 号土坑実測図（1/30）

3010 号土坑（図版 58、第 110 図）

谷より北側に位置する。規模は 1.5 m × 1.1m、深さ 0.4m の偏円形土坑である。西寄りの位置で土器・板・棒などが検出された。また、長辺の 25cm 北西側で径 5 cm、長さ 20cm 以上の杭が打ち込まれていた。周囲を撹乱に切られているため明確ではないものの土坑内に打ち込まれたものである可能性がある。

出土遺物（図版 68、第 109 図 10）

10 は土師器の甕である。平底を呈し、外面ナデ、内面工具痕後ナデを施す。粘土の継ぎ目が２ヶ所見られる。内面底部付近に黒斑、外面下位に煤が見られる。この他、棒状施設器具材（第 161 図３）が出土している。

出土遺物から古墳時代後期に属するものと考えられる。

3012 号土坑（第 110 図）

谷より南側、調査区の南西端に位置する。規模は 1.85m × 0.75m 以上、深さ 0.2m の長楕円形土坑である。床面よりやや浮いた位置で２枚の木が検出された。谷の落ち際に位置していることから、階段になる可能性がある。

出土遺物はなく、時期等は不明である。

3013 号土坑（図版 59、第 110 図）

谷より北側に位置し、3001 号溝に切られる。規模は 2.2 m × 1 m、深さ 0.35m の不定形土坑である。西側が 10cm ほど低くなっており、中央部には径５cm、長さ 35cm の杭が埋土に打ち込まれた状態で検出された。東側および南側では径５cm、長さ 30cm の杭が打ち込まれており、この他にも上層では４本の杭が検出された。土坑全体で７本の杭が検出されそのうち５本が埋土上層から打ち込まれていた。杭打設に関連する遺構である可能性もある。

出土遺物はないが、切り合いから古墳時代後期以前に属するものと考えられる。

3014 号土坑（図版 59、第 110 図）

谷より北側に位置し、3021・3023 号土坑を切る。規模は径 0.9m、深さ 0.2m の円形土坑である。床面より 10cm ほど浮いた位置で土器、木片、瓢箪果皮、人骨と考えられる脛骨が出土した。埋土は暗灰色粘質土である。

出土遺物（図版 68、第 111 図１～５）

１は須恵器の高台坏である。底部内外面ナデ、他は回転ナデを施す。２は坏である。底部外面回転ヘラ切り後ナデ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。３は高坏である。回転ナデを施す。４は土師器の坏である。摩滅が著しいが一部ナデが残る。５は甕である。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリ後ナデを施す。この他、木製品（第 161 図４～ 20）が出土している。

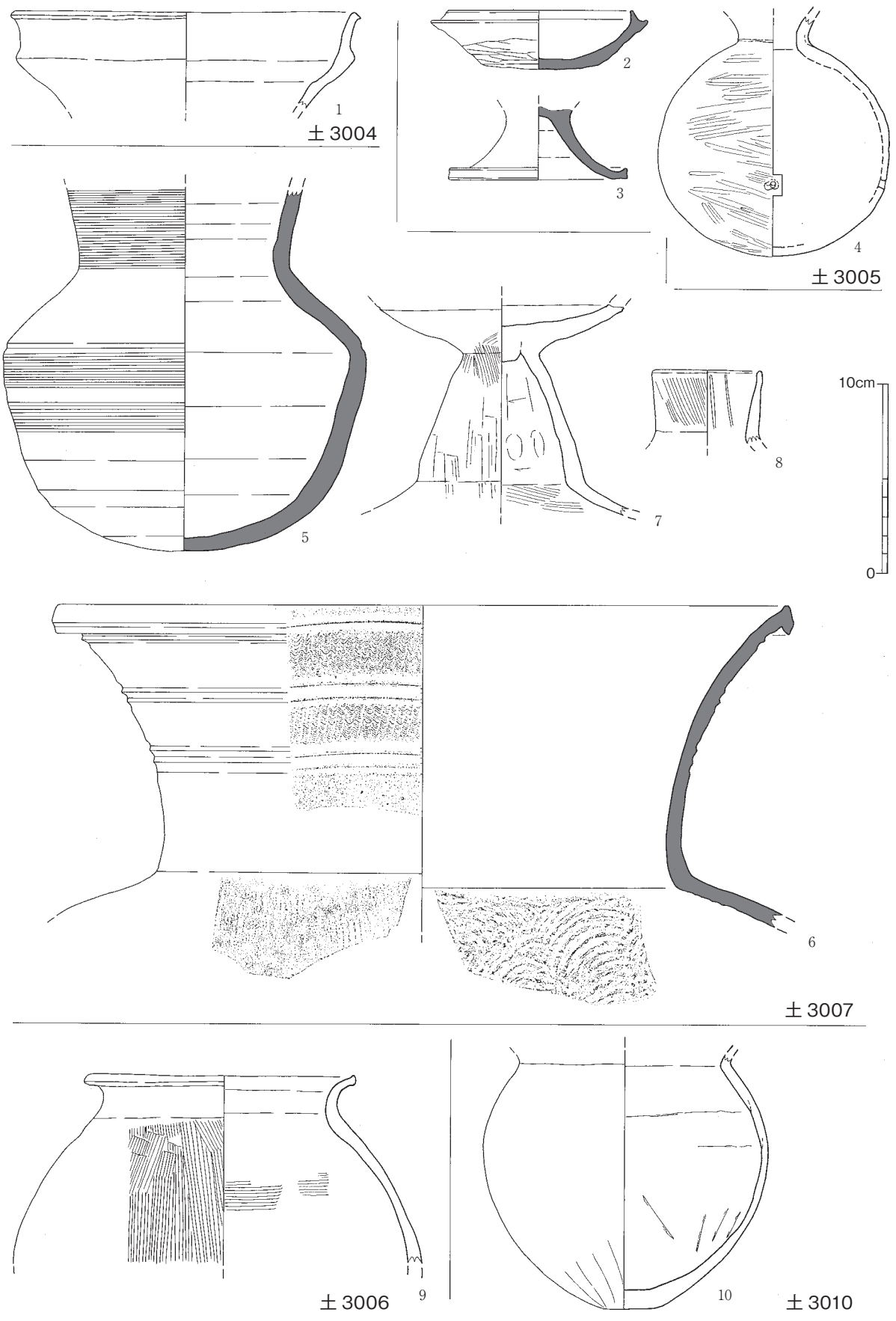
切り合いと出土遺物から７世紀後半～８世紀初頭に属するものと考えられる。

3021 号土坑（第 110 図）

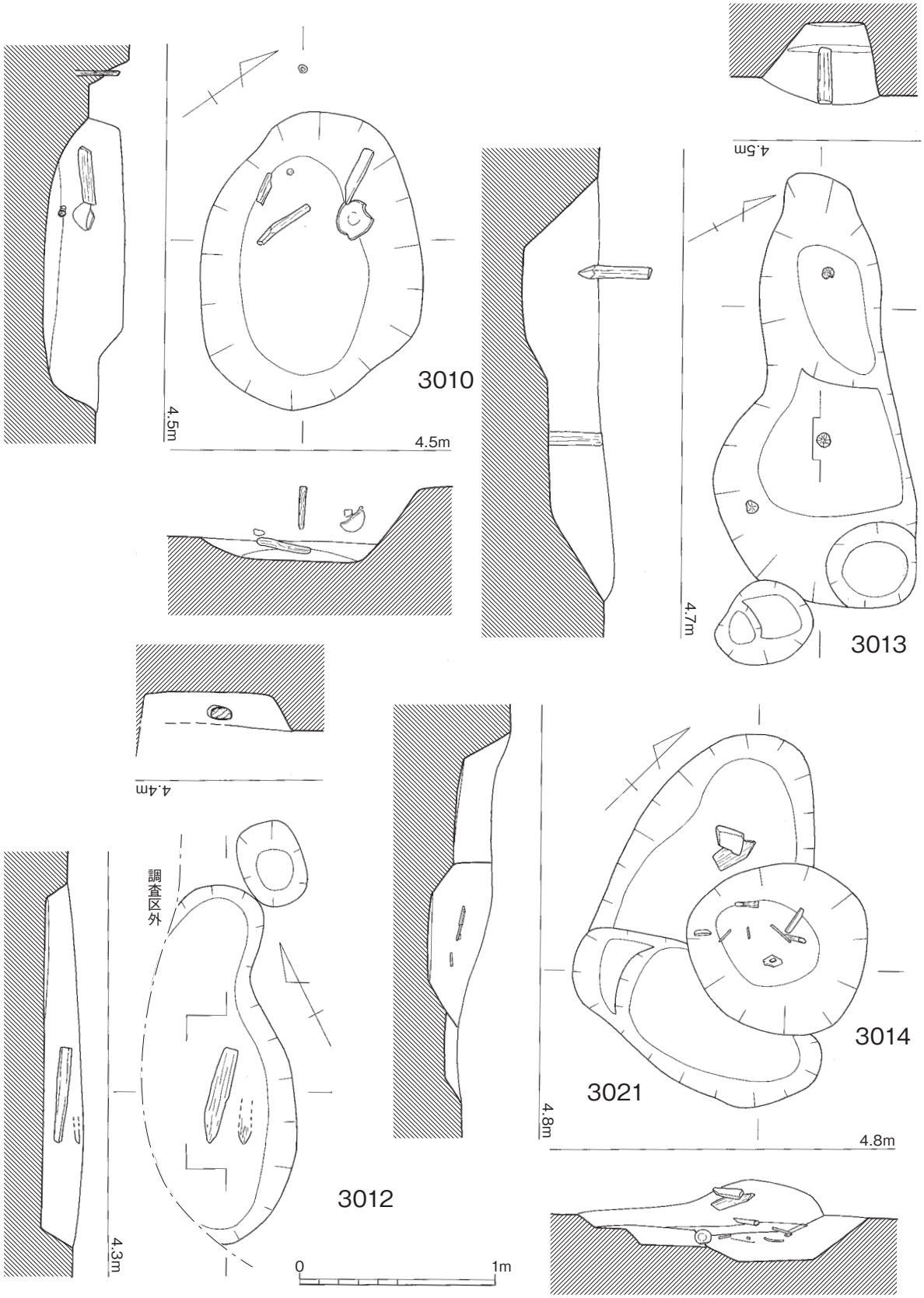
谷より北側に位置し、3014 号土坑に切られ、3022 ～ 3024 号土坑を切る。規模は 1.4 m × 0.6m、深さ 0.1m の長楕円形土坑である。北側にも土坑状の掘り込みが見られ浮いた位置で板および石が検出された。埋土は灰色粘質土である。

出土遺物（第 111 図６）

６は土師器の甑である。把手部分が遺存し、内外面ハケメ、把手はユビナデを施す。この他、板状施設器具材（第 161 図 21）が出土している。



第 109 図　Ⅲ -C 区 3004 ～ 3007・3010 号土坑出土土器実測図（1/3）

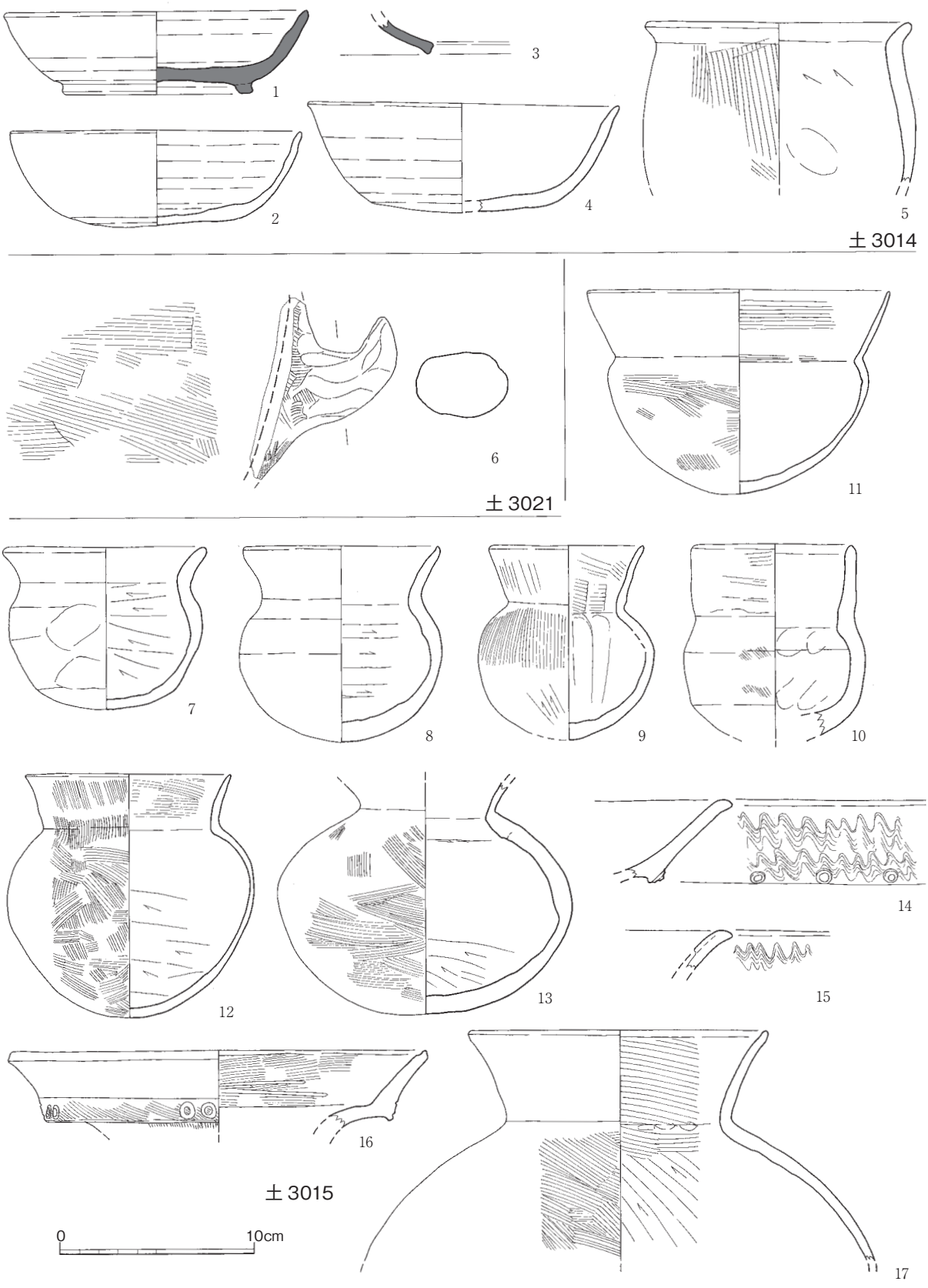


第 110 図　Ⅲ -C 区 3010・3012 ～ 3014・3021 号土坑実測図（1/30）

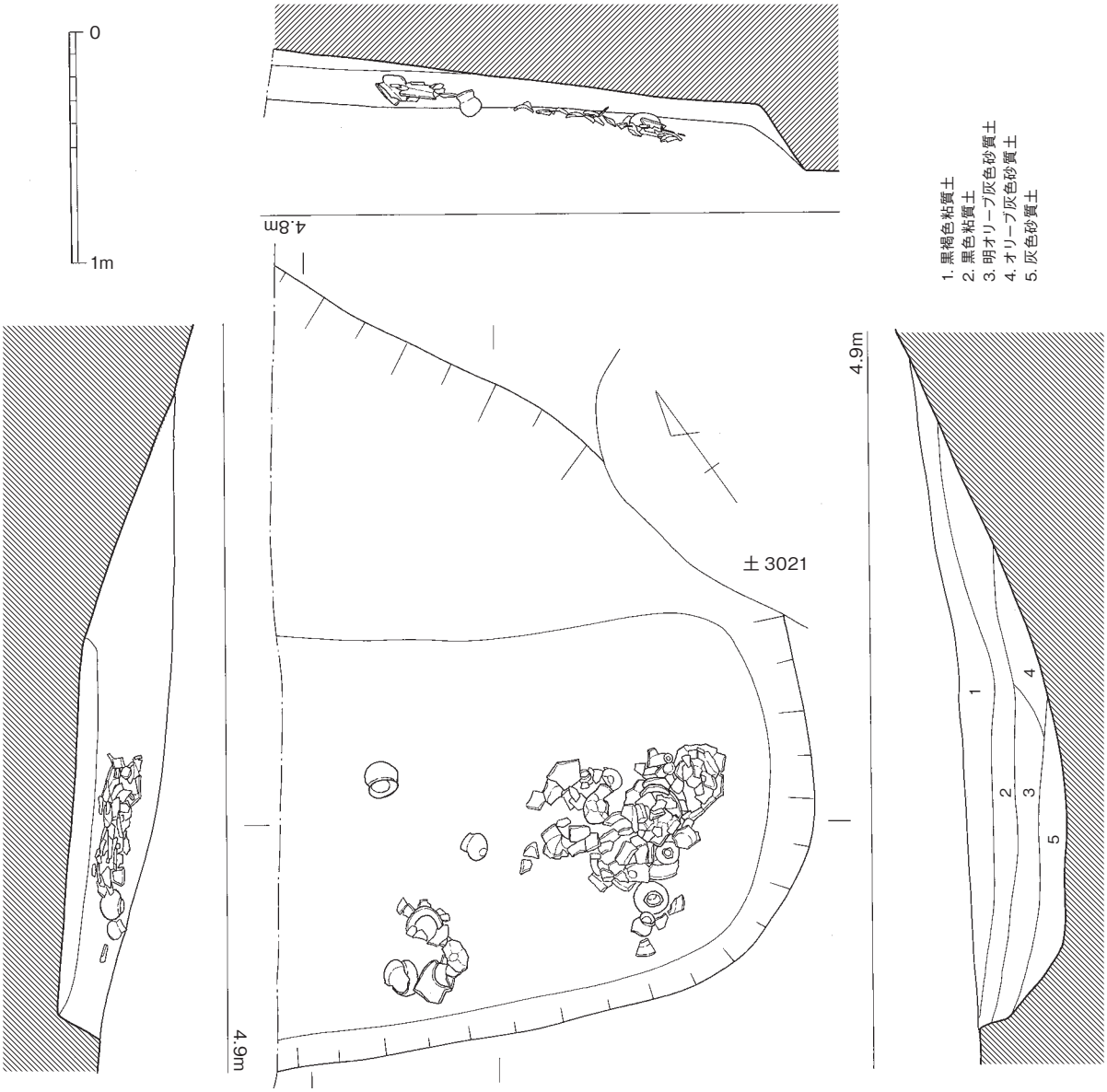
切り合いと出土遺物から古墳時代後期に属するものと考えられる。

3015 号土坑（図版 59、第 112 図）

谷より北側、調査区の北西端に位置する。規模は 3.5m 以上× 2.3m 以上、深さ 0.4m の土坑である。調査区外に延びるため、形態は明らかではないが、そのまま延びて溝状遺構になる可能性もあ



第 111 図　Ⅲ -C 区 3014・3015・3021 号土坑出土土器実測図（1/3）

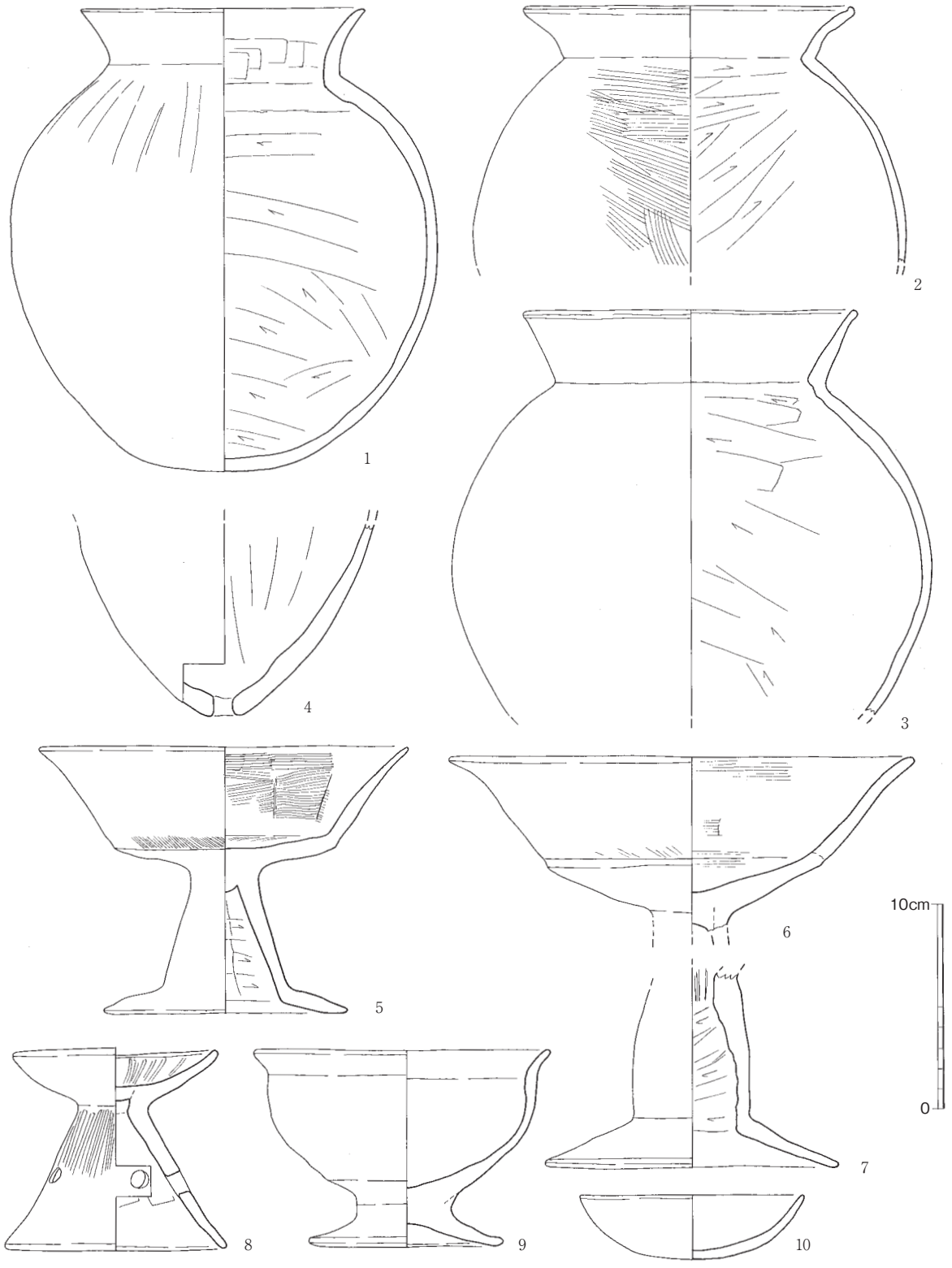


第 112 図　Ⅲ -C 区 3015 号土坑実測図（1/30）

る。床面から 5cm 内外浮いた位置で土器が多量に検出され、特に東側で顕著に見られた。ほぼ全ての土器が重なり合って出土していることから、一括廃棄の可能性が高い。出土位置から北ないしは東から廃棄したものと考えられる。また、埋土の状況から３回以上の掘り直しが想定され、土器廃棄は３層に伴う。

出土遺物（図版 68、第 111・113 図）

７～ 10 は小型の壺である。７は口縁が外湾、８・９は直線的に外反、10 は内湾する。７は口縁部ヨコナデ、胴部外面ケズリ後ナデ、内面ケズリ、８は口縁部ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ケズリ、９は口縁部ハケメ後ナデ、胴部外面上半ハケメ、下位ケズリ、内面ユビナデ、10 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ後ナデ、内面ユビナデを施す。11 は壺ないしは小型の鉢である。口縁が直線的に伸び、摩滅するが、口縁部内面および胴部外面にハケメが残る。内面に黒斑が見られる。12 ～第 113 図３は壺である。12・13 は中型で、12 は口縁部ハケメ、13 はヨコナデを施し、共に胴部外面ハケメ、内面下位ケズリ、上位ナデを施す。胴部外面に黒斑が見られる。14・15 は口縁部に２列の波状文および浮文を施す。同一個体か。16 は口縁部外面に２個１組の竹管文を付し、２ヶ



第 113 図　Ⅲ -C 区 3015 号土坑出土土器実測図（1/3）

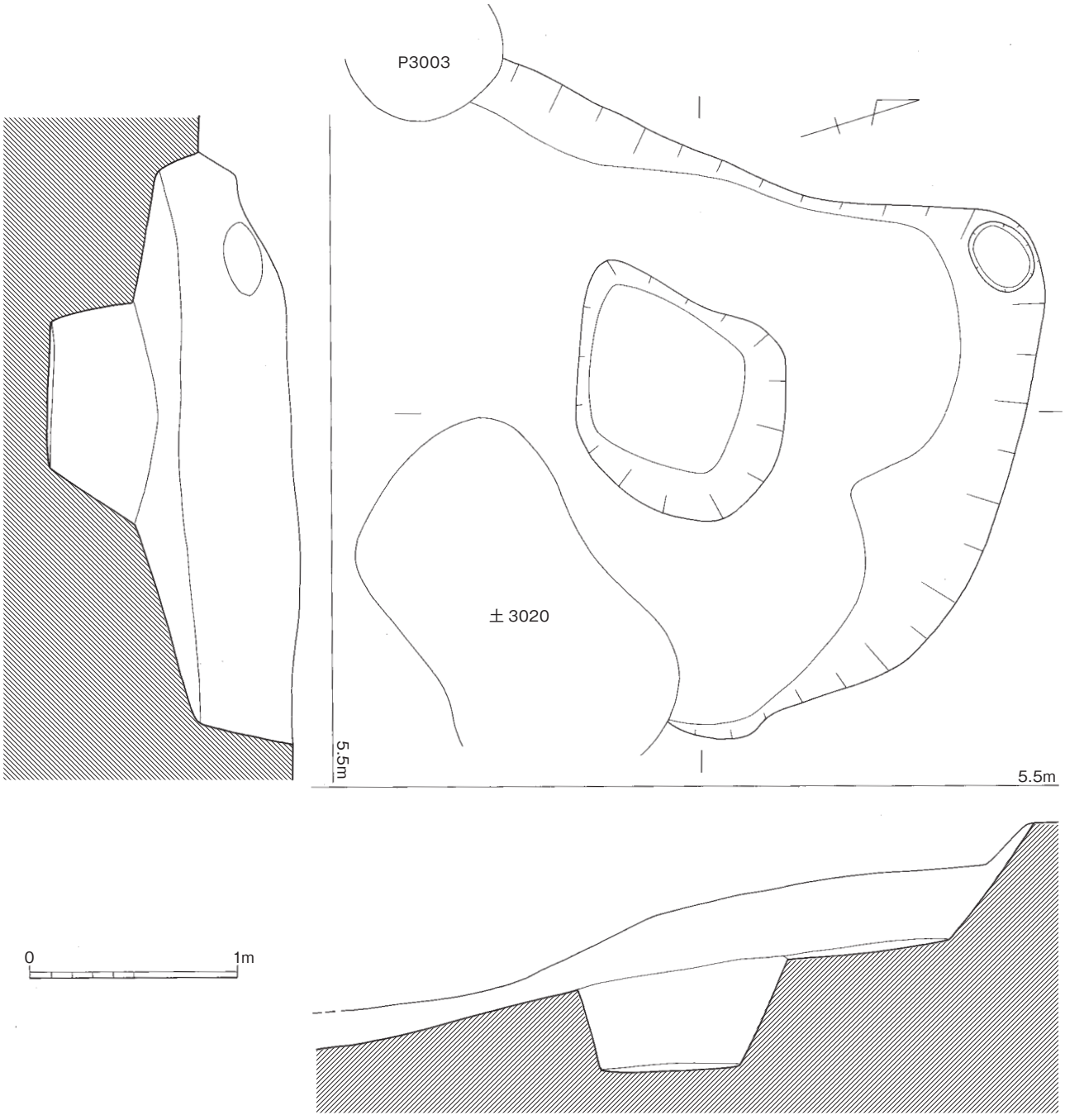
所に残る。17 は口縁部外面ヨコナデ、内面粗いハケメ、胴部外面ハケメ、内面ナデを施す。第 113 図 1 は口縁部外面ナデ、内面工具痕、胴部外面ナデ、内面ケズリを施す。外面に煤、黒斑および吹きこぼれ痕が認められ、甕として使用していたものと考えられる。２は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。胴部外面に煤が見られる。３は摩滅が著しいが、口縁部ヨコナデ、胴部内面ケズリが残る。外面に黒斑が見られる。４は穿孔のある甕である。底部に径 1cm の孔を穿つ。摩滅するが、内面に強いナデを施すか。５～７は高坏である。５は坏部が明確に屈曲し、内面ハケメ、

外面ヨコナデ、脚部外面ナデ、内面ケズリを施す。６は坏部のみ、７は脚部のみが遺存する。６は摩滅するが、ハケメが見られ、７は内面にケズリが残る。８は器台である。坏部内面ミガキ、外面ナデ、脚部外面ミガキ、内面ナデを施す。９は脚付鉢である。外面ヨコナデを施す。10 は椀である。外面ケズリ後ナデ、内面ナデを施す。

出土遺物に一部古墳時代後期に属する遺物が見られるものの、上層包含層からの混入の可能性があり、遺構自体は古墳時代前期に属するものと考えられる。

3016 号土坑（第 114 図）

谷より北側に位置し、3008 号土坑・3001 号溝に切られる。規模は３m 以上× 2.6m、深さ 0.55m の土坑である。中央部に１× １m、深さ 0.5m の穴が検出された。床面が南側に向かって傾斜することから、3001 号溝と一連の遺構である可能性もある。およそ５分の２は平成 20 年度に掘削され



第 114 図　Ⅲ -C 区 3016 号土坑実測図（1/30）

ており、谷として認識されていたものである。

土師器・須恵器片が出土しているが、図化に耐えうる資料はない。切り合いと出土土器小片から古墳時代後期に属するものと考えられる。

3017 号土坑（第 115 図）

谷より北側に位置し、3018 号土坑・3001 号溝に切られ、3025 号土坑を切る。規模は 1.5 m × 1.1m、深さ 0.2m の不定形土坑である。3025 号土坑と同一遺構である可能性もある。

出土遺物（第 117 図１・２）

１は弥生土器の壺か。ヨコナデを施す。２は土師器の甕である。ハケメを施し、内面に黒斑が見られる。

切り合いと出土遺物から弥生時代終末～古墳時代前期に属するものと考えられる。

3018 号土坑（第 115 図）

谷より北側に位置し、3001 号溝に切られ、3007・3017・3019・3025 号土坑を切る。規模は 1.05 m × 0.9m、深さ 0.35m の円形土坑である。南および西側にテラスを持つピット状の土坑である。

出土遺物（第 117 図３）

３は須恵器の蓋か。かえりは短く、回転ナデを施す。

切り合いと出土遺物から 7 世紀前半に属するものと考えられる。

3019 号土坑（第 115 図）

谷より北側に位置し、3007・3018 号土坑・3001 号溝に切られ、3025 号土坑を切る。規模は 0.9m 以上× 0.75m、深さ 0.45m の不定形土坑である。3025 号土坑と同一遺構である可能性もある。

出土遺物（第 117 図４）

４は土師器の甑である。口縁付近ナデ、外面ハケメ、内面ケズリ後ナデを施す。

切り合いと出土遺物から古墳時代後期に属するものと考えられる。

3025 号土坑（第 115 図）

谷より北側に位置し、3007・3017 ～ 3019 号土坑、3001 号溝に切られる。規模は 2.8m × 1.1m 以上、深さ 0.25m の楕円形土坑である。3017・3019 号土坑と同一遺構である可能性もある。

出土遺物（第 117 図６・７）

６は須恵器の甕か。回転ナデを施し、下位にはカキメが施される。７は土師器の高坏である。摩滅するが、外面屈曲部付近ハケメ、内外面ミガキが残る。

出土遺物は弥生時代終末および古墳時代後期に属するものと考えられ、切り合いから弥生時代終末に属するものか。

3022 号土坑（第 115 図）

谷より北側に位置し、3021 号土坑に切られ、3001 号溝を切る。3021 号土坑との切り合いは誤認した可能性がある。規模は 1.8m 以上× 1.2m、深さ 0.4m の偏円形土坑である。断面台形を呈する。

出土遺物（第 117 図５）

５は土師器の甕である。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。

切り合いと出土遺物から８世紀代に属するものと考えられる。

3023 号土坑（第 116 図）

谷より北側に位置し、3014・3021・3024 号土坑に切られる。他の遺構に大きく切られ明確ではないが、規模は 1.35m 以上× 1 m 以上、深さ 0.15m である。

出土遺物（図版 68、第 117 図８）

８は土師器の甕である。器面が大きく剥落するが、外面底部付近にタタキ、内面頸部にケズリが残る。外面に煤が付着する。

切り合いと出土遺物から古墳時代初頭に属するものと考えられる。

3024 号土坑（第 116 図）

谷より北側に位置し、3021・3022 号土坑に切られ、3006・3023 号土坑、3001 号溝を切る。他遺構の時期的に切り合いは誤認した可能性が高い。規模は 1.5m 以上× 1.4m、深さ 0.55m の楕円形土坑である。北側にテラスを持ち南側が 20cm ほど低くなる。

図化に耐えうる資料はなく、土師質土器片が出土している。切り合い誤認のため時期は不明である。

本調査区では井戸と考えられる土坑が5 基検出された。いずれも谷部に近い標高の低い位置で検出されている。

3001 号土坑（図版 55・60、第 118 図）

谷より南側、調査区の南東端に位置する。調査区端にあったため、表土剝ぎに際して、井戸枠を破壊してしまった。井戸枠の復元規模は 1.2m 角の正方形で、杭により井戸枠（第 162 図１～３）を留めていた。下の土坑部分は、1.5 m × 1.35m、深さ 1.15m の円形土坑である。谷の落ち際に作られており、掘削時は湧水が見られた。

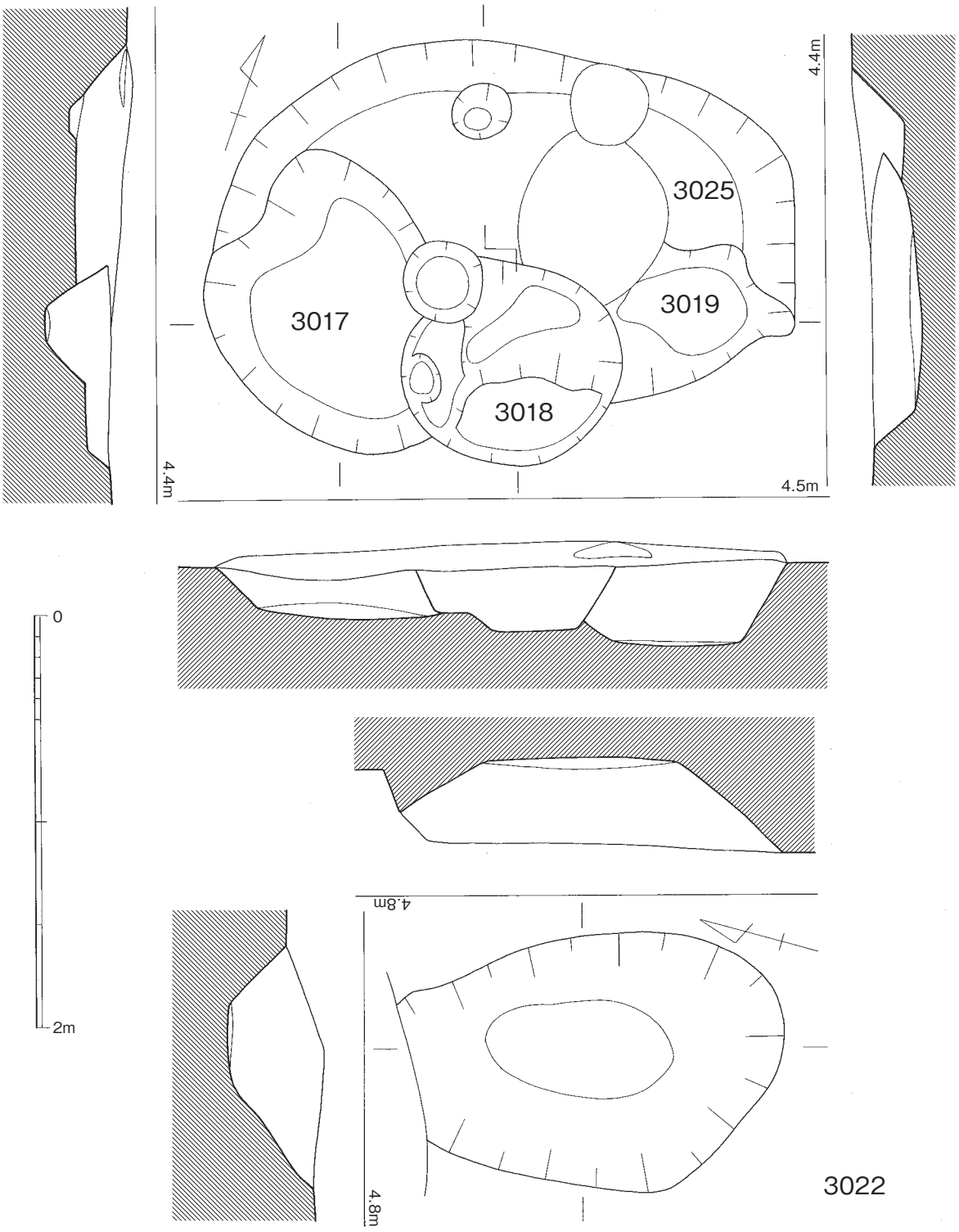
出土遺物（図版 68、第 120 図１～６）

１は土師器の小型壺である。底部は厚く、外面ハケメ、底部外面および内面ナデを施す。２・３は甕か。２は口縁部外面ハケメ後ナデ、胴部内面ナデ、他はハケメを施す。３は口唇部が外方に突出する。摩滅のため調整不明である。４～６は坏である。４は口唇部を細くし、外面ケズリ、内面ナデ一部ミガキを施す。５は口縁部が内湾し、外面ケズリ、内面ケズリ後ナデを施す。６は口縁部が内湾し、内外面共にミガキを施す。５は外面黒斑、６は外面ヘラ記号が見られる。

出土遺物から古墳時代後期後半に属するものと考えられる。

3002 号土坑（図版 60、第 118 図）

谷より南側、調査区の南東端に位置する。規模は 1.25 m × 1.15m、深さ 0.75m の円形土坑である。床面で幅 20cm、長さ 65cm、厚さ５cm の板が検出され、図化していないが小ぶりの板がもう一枚検出された。井戸枠としていた可能性もあるが、周囲に杭の痕跡は認められず、板の幅も足りない



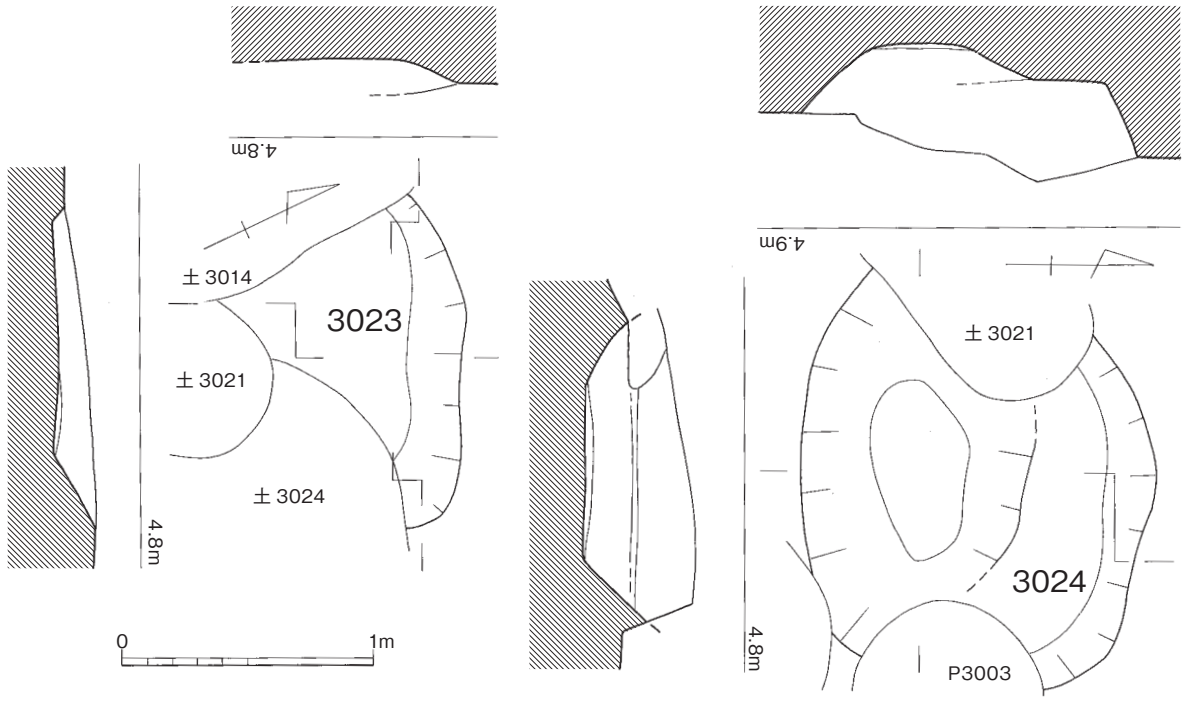
第 115 図　Ⅲ -C 区 3017 ～ 3019・3022・3025 号土坑実測図（1/30）

ことから不明である。掘削時は湧水が見られた。

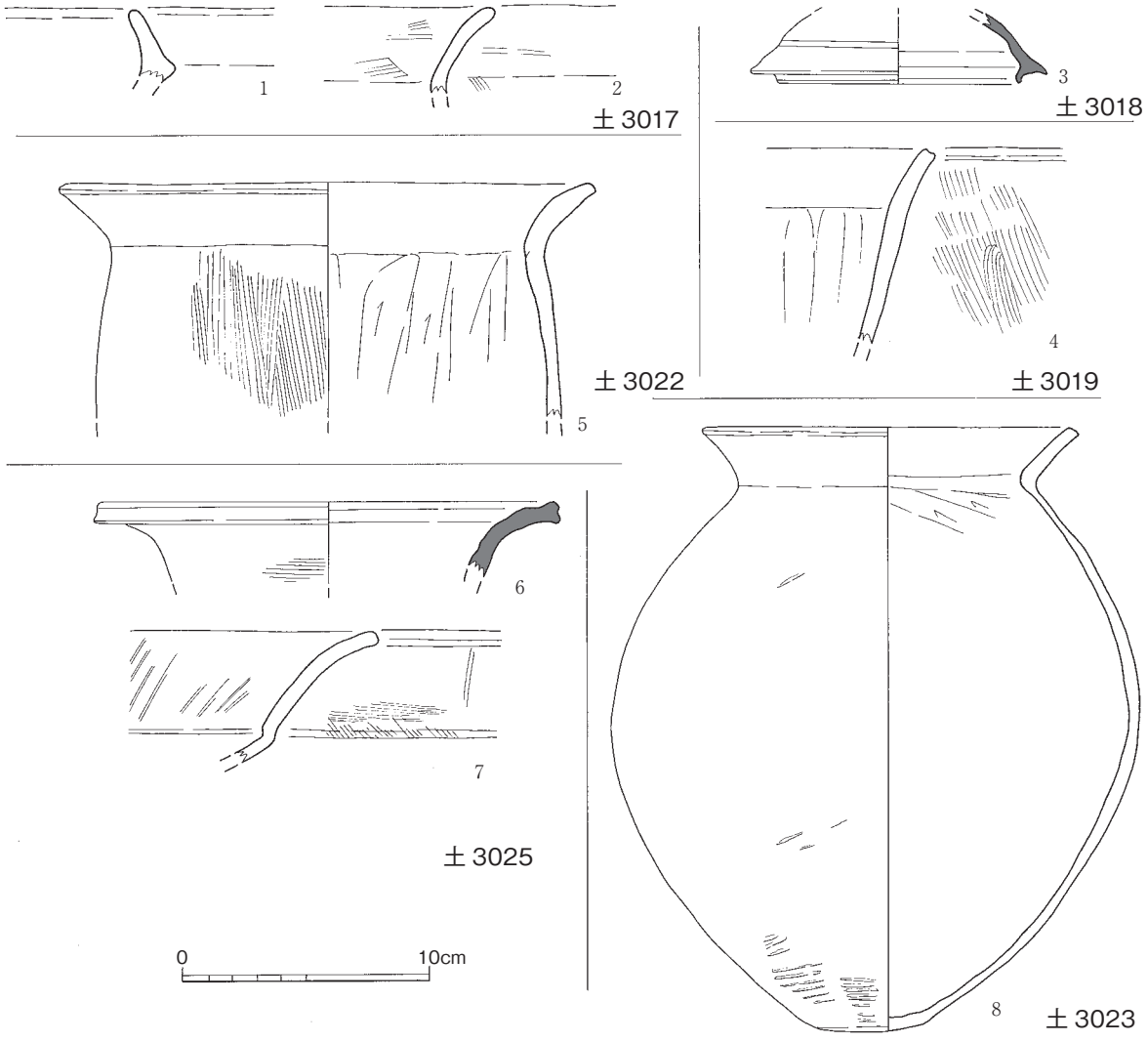
出土遺物は木製品（第 162 図 4）のみで、時期は不明である。位置から導水施設との関係が伺われる。

3003 号土坑（図版 60・61、第 119 図）

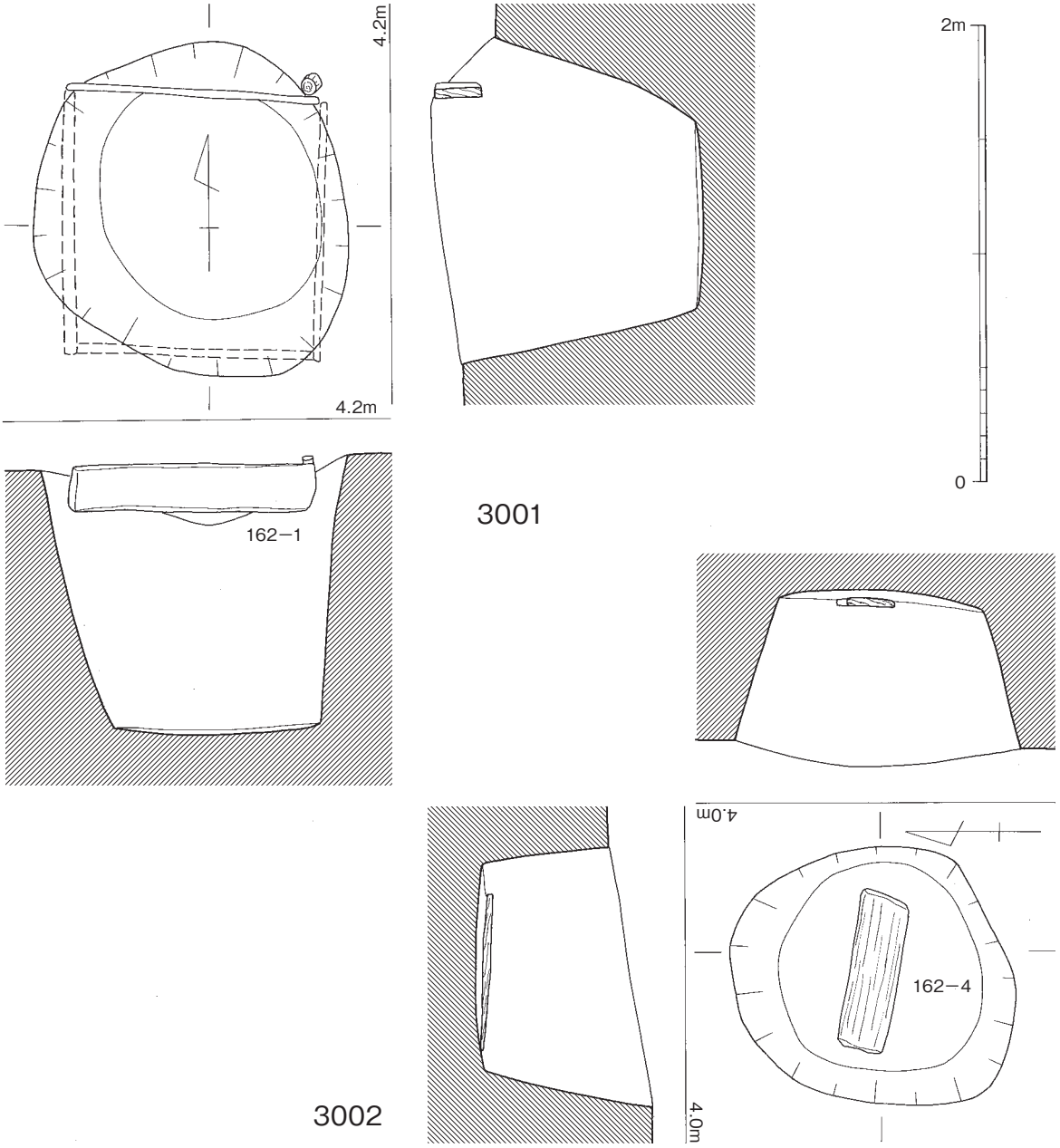
谷より北側に位置する。規模は 1.95 m × 1.7m、深さ 1.6m の偏円形土坑である。西側に高さ 15cm のテラスが認められた。床面から 75cm 程の位置で木製臼、板が検出され、その上層からは



第 116 図　Ⅲ -C 区 3023・3024 号土坑実測図（1/30）



第 117 図　Ⅲ -C 区 3017 ～ 3019・3022・3023・3025 号土坑出土土器実測図（1/3）

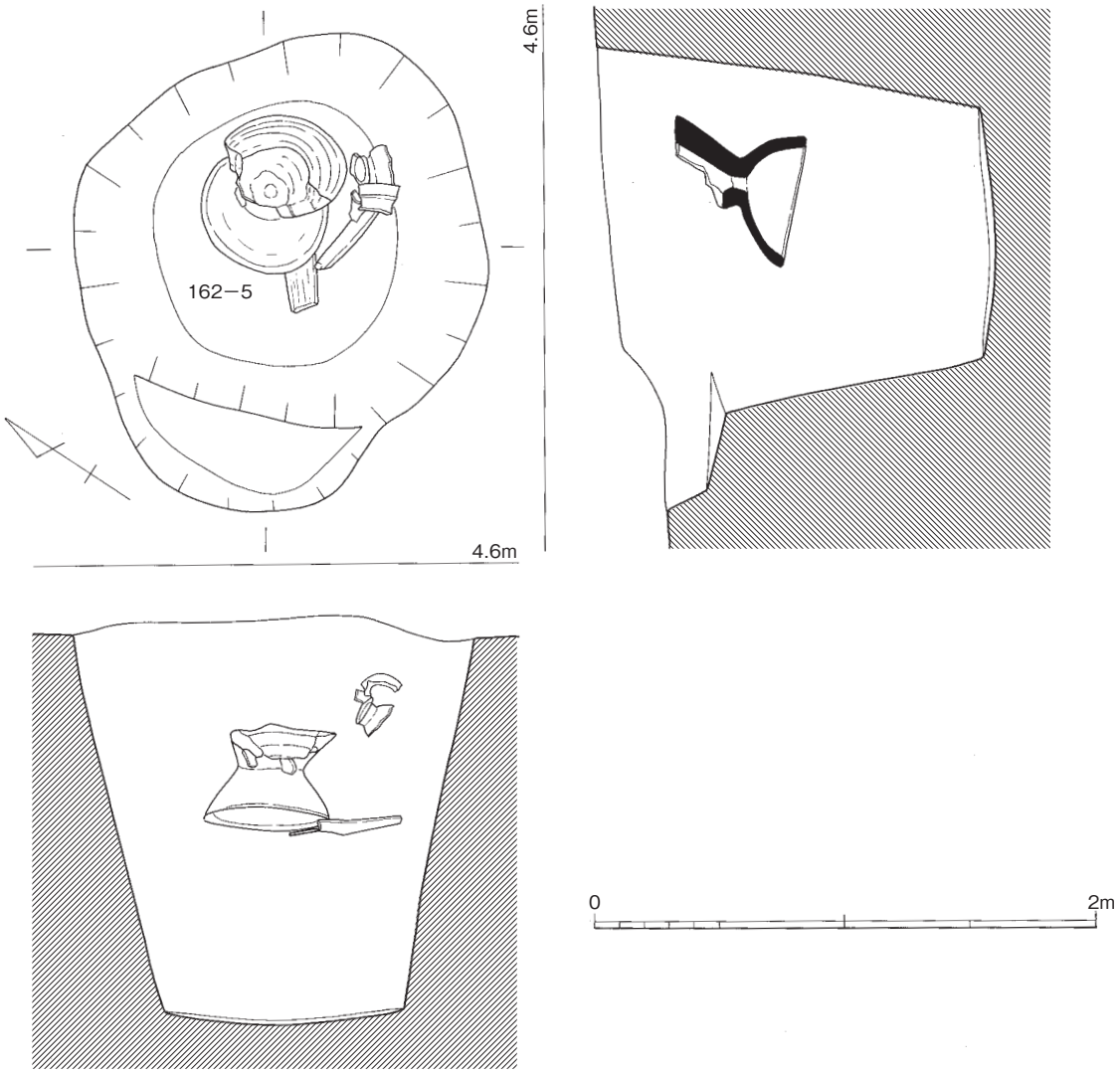


第 118 図　Ⅲ -C 区 3001・3002 号土坑実測図（1/30）

土器が出土した。臼は一部分のみが欠損しており、逆位置で出土した。井戸埋没後に廃棄土坑としたものと考えられる。谷の落ち際に作られており、掘削時は湧水が見られた。

出土遺物（図版 68・69、第 120・122 図）

7 ～ 11 は土師器の壺である。7 は口縁部が内傾し、摩滅するが一部ハケメが残る。8 ～ 10 は二重口縁壺で、いずれも口縁部ヨコナデを施し、10 は頸部外面ハケメ後ナデ、内面指頭圧痕、胴部内面ケズリを施す。9 の口縁付近に煤が付着する。11 は口縁部ヨコナデ、頸部および胴部外面ハケメ、内面ナデを施す。口縁付近に化粧土が見られる。12 ～ 14 は甕である。いずれも口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。14 の胴部下位はハケメ後ナデを施す。いずれも外面に煤が付着する。第 122 図 1 ～ 3 は高坏である。1 は坏部内外面、脚部外面に細かいミガキ、脚部内面ケズリ後ナデを施す。脚部に 4 つの孔を穿つ。2 は脚部端が上方に突出し、坏部内外面ナデ、脚部外面ハケメ後ナデ、内面ケズリを施す。3 は口縁部ヨコナデ一部指頭圧痕、坏底部内面ミガキ、外面ハケメ後ナデ、脚部内面ケズリを施す。外面は縦方向のケズリを施すか。2 ・ 3 は上層出土で



第 119 図　Ⅲ -C 区 3003 号土坑実測図（1/30）

混入品か。４は器台である。上方が抉れるタイプで、外面ハケメ、内面ナデを施す。５は鉢である。口縁部が緩やかなＳ字形を呈し、口縁部ヨコナデ、胴部内外面ハケメを施す。口縁下の外面に工具痕が見られる。この他、臼と杵（第 162 図５・６）が出土している。

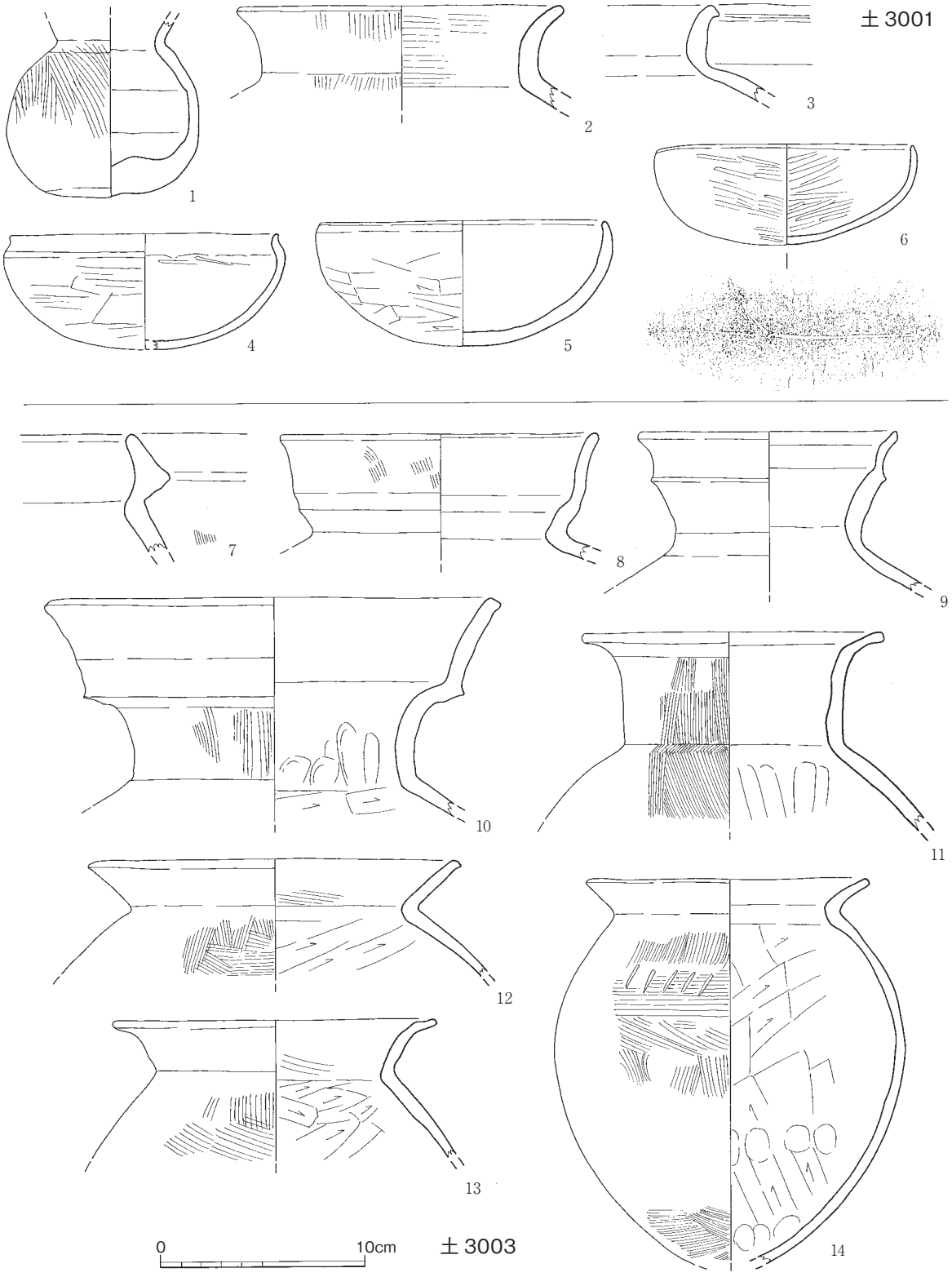
出土遺物から弥生時代終末～古墳時代前期前半に属するものと考えられる。

3009 号土坑（図版 61・62、第 121 図）

谷より北側に位置する。規模は 1.4 m × 1.25m、深さ 1.65m の楕円形土坑である。床面から 1.1m の位置で準構造船の竪板（第 164 図１）、土器、板が検出された。土層から木製品・土器は最終埋没時に廃棄されたものと考えられる。掘削時は湧水が見られた。

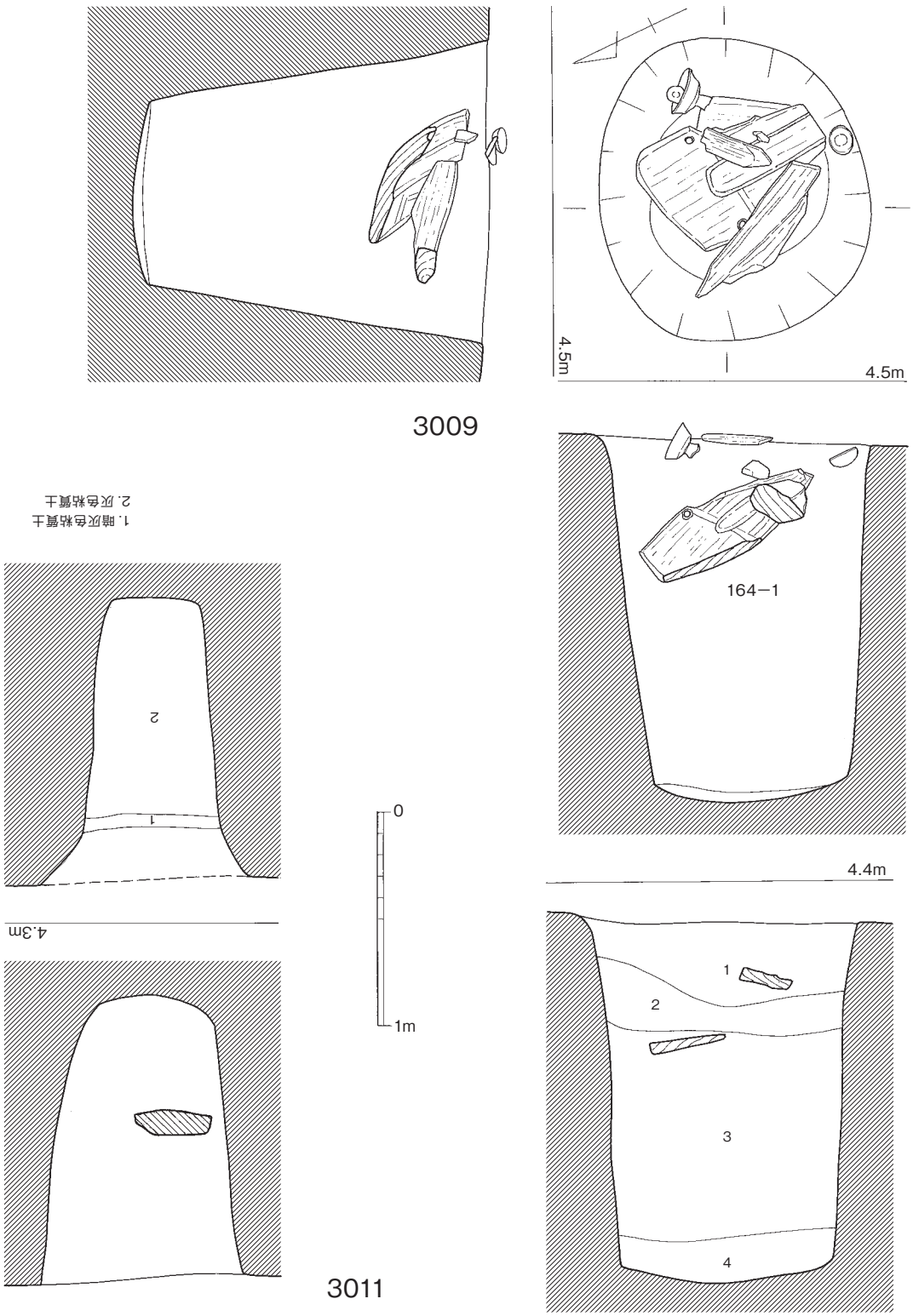
出土遺物（図版 69、第 122・123 図）

６・７は小型壺である。ともに口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデを施す。８～ 10 は中型の壺である。いずれも口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメを施し、８は胴部内面ケズリ、９は上半ヨコナデ、中位工具ナデ、下位指頭圧痕、10 はユビナデを施す。８は外面黒斑、10 は外面煤が見られる。９は外面全体に煤が付着するが、下半部は一部剥落し、内面にコゲが見られる。全て甕として使用していたものと考えられる。11 ～第 123 図２は高坏である。11 は坏部のみが遺存し、

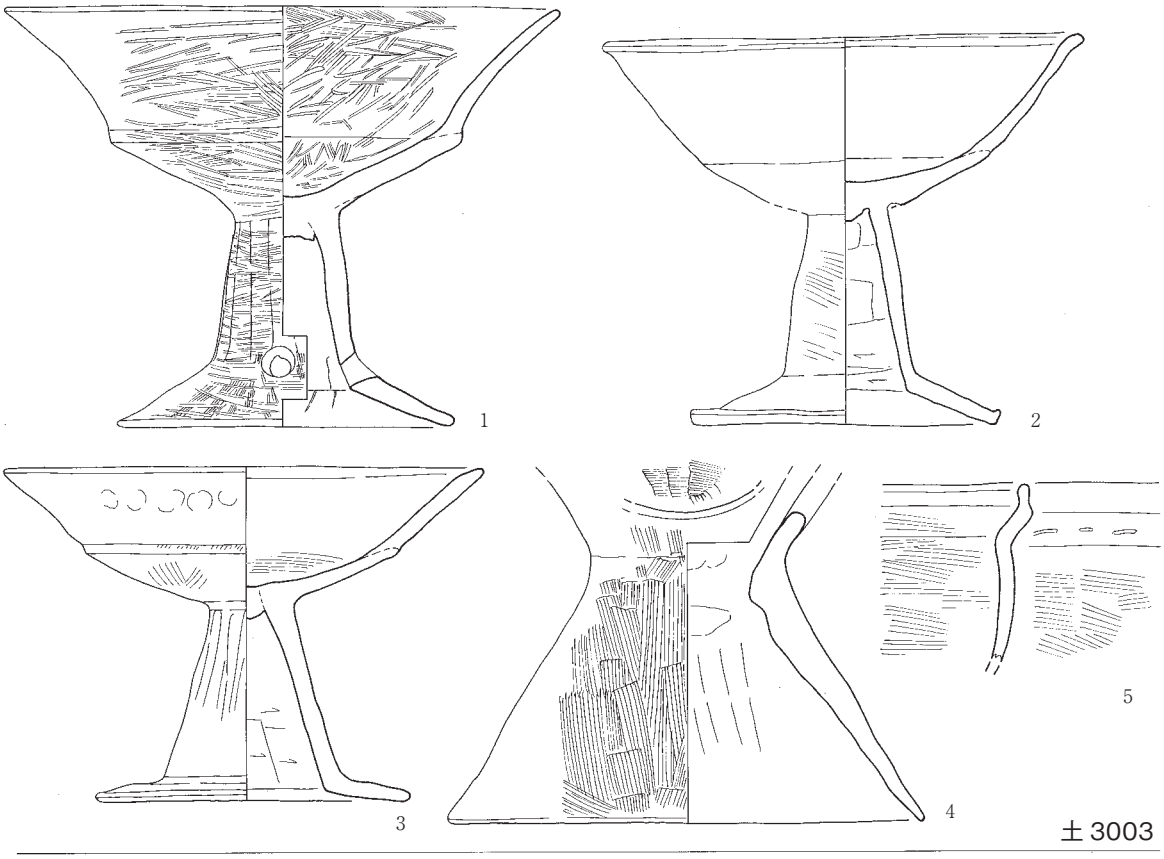


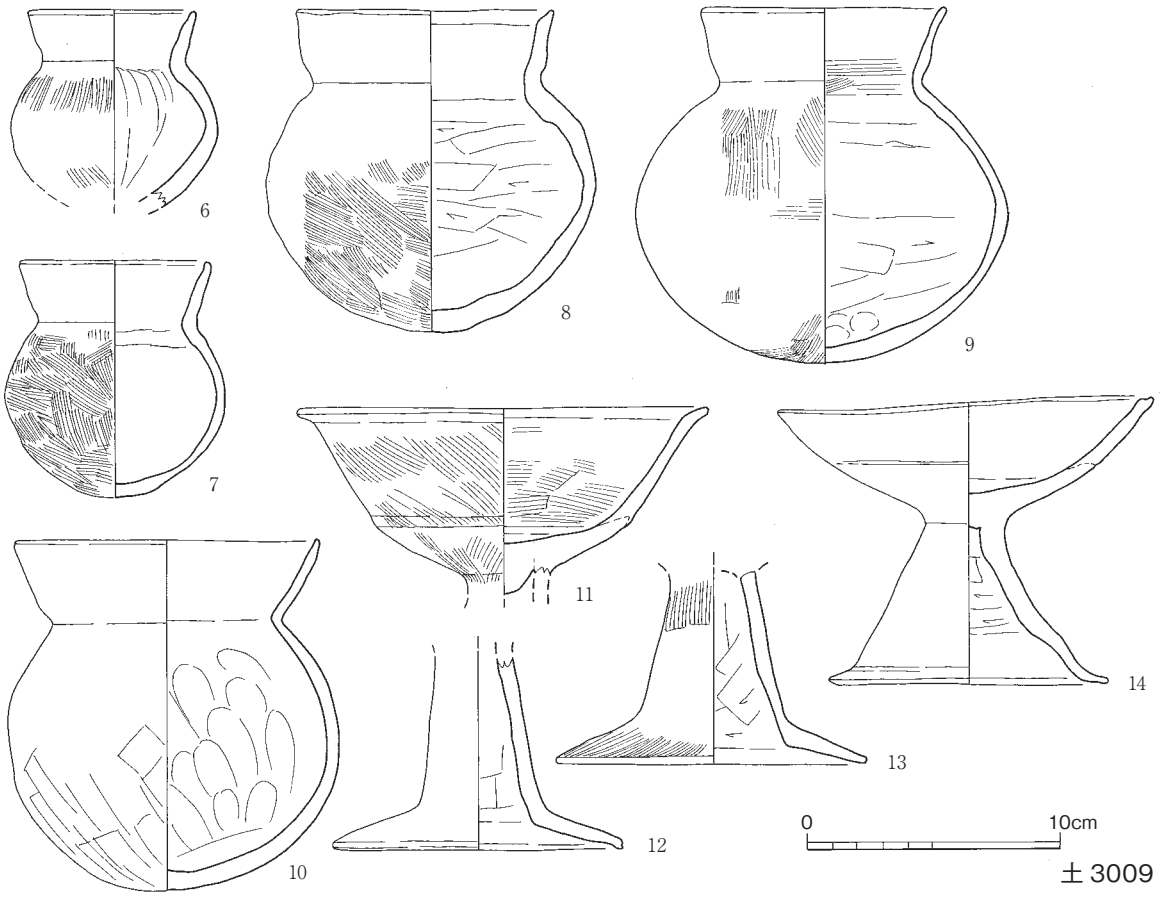
第 120 図　Ⅲ -C 区 3001・3003 号土坑出土土器実測図（1/3）

内外面共にハケメを施す。12･13 は脚部のみが遺存し、12 は外面ヨコナデ、13 は外面ハケメを施し、内面は共にケズリを施す。14 は摩滅が著しいが、脚部内面にケズリが残る。口縁上面に平坦面を持つ。第 123 図１・２は共に坏部ハケメ後ナデを施し、１の脚部は外面ナデ、内面ケズリ、２は外面ミガキ一部ハケメ、内面シボリ後ハケメを施す。２は脚部外面に黒斑が見られる。３・４は坏である。３は内外面共にナデ、４は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデを施す。いずれも外面に黒斑が見られる。５は甑である。外面ナデ、内面板ナデを施す。６～ 13 はミニチュア土器で



第 121 図　Ⅲ -C 区 3009・3011 号土坑実測図（1/30）





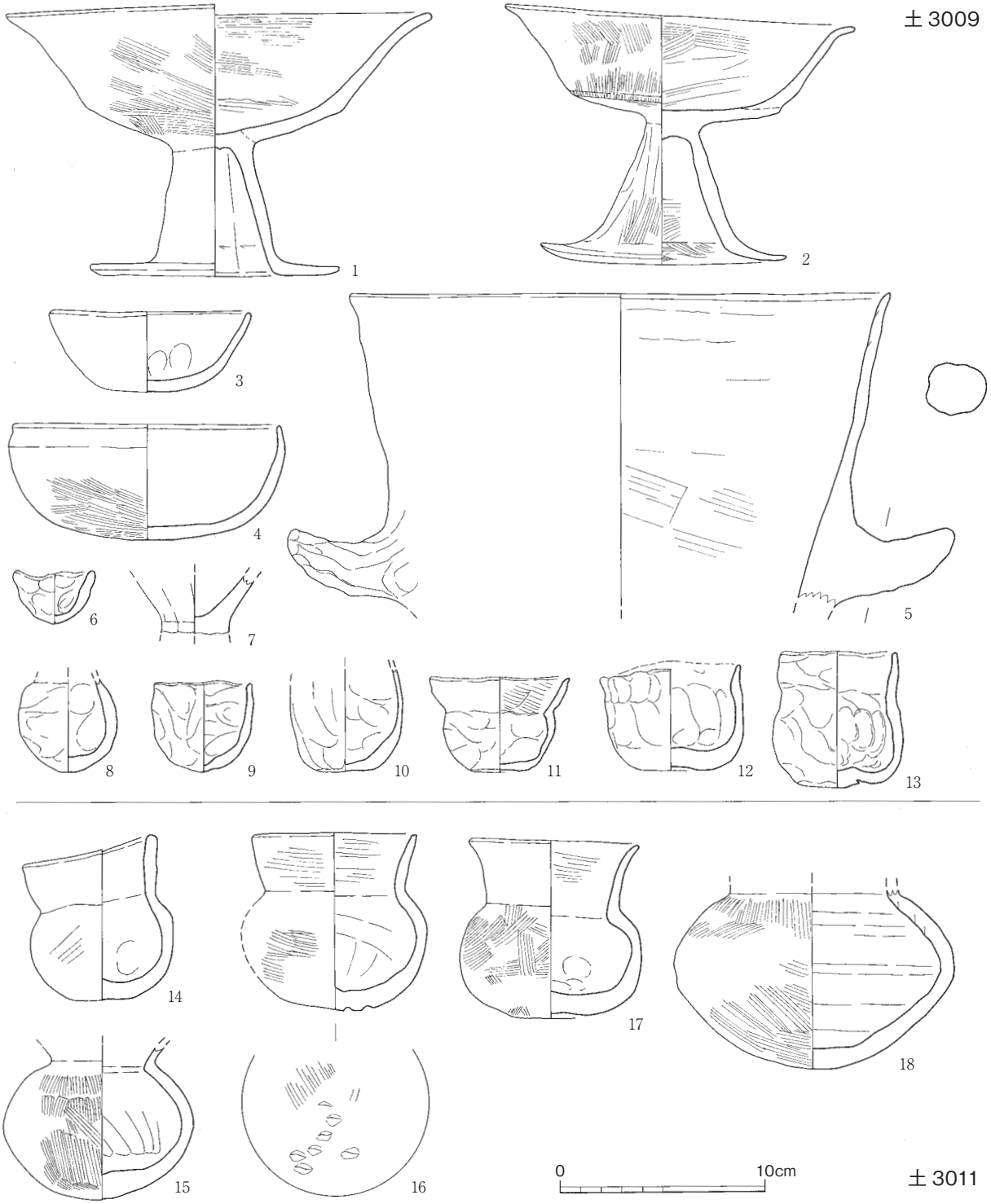
第 122 図　Ⅲ -C 区 3003・3009 号土坑出土土器実測図（1/3）

ある。7はナデ、11の口縁部内面ナデ、他はユビナデを施す。6・8～10は素口縁で11～13は口縁部が作られる。10～13は平底を呈する。この他、ガラス玉（第159図1）・木製品（第164・165図）が出土している。

出土遺物から古墳時代後期前半に属するものと考えられる。

3011号土坑（図版62・63、第121図）

谷より北側に位置する。規模は径0.95 m、深さ1.4mの円形土坑である。床面から50cmの位置で石ならびに土器が出土している。土層から一気に埋没したことが示唆される。掘削時は湧水が見



第123図　Ⅲ-C区3009・3011号土坑出土土器実測図（1/3）

られた。

出土遺物（図版 69・70、第 123・124 図）

14 ～ 17 は小型壺である。15 のみ丸底気味で、他は平底を呈する。14 は大きく歪み、口縁部ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面指頭圧痕を施す。15 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ユビナデを施す。16・17 は口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデ・指頭圧痕を施す。16 の底部に爪を押し付けたような痕跡が見られ、17 の外面に煤が付着する。18 は中型の壺である。外面ハケメ、内面ナデを施し、粘土紐接合痕が多数見られる。外面に煤が付着する。第 124 図１～３は壺である。１は外面ハケメ、口縁部内面ハケメ、胴部内面ケズリを施す。２は外面ハケメ後ナデ、内面ケズリを施す。３は口縁部が緩やかなＳ字形を呈し、口縁部ヨコナデ一部ミガキ、胴部外面ハケメ、内面ケズリ、底部外面指頭圧痕を施す。内面底部中央よりややずれた位置にコゲが付着する。甕として使用したものと考えられる。４は甕である。口縁部ヨコナデ、胴部内外面ハケメを施す。外面の一部に工具痕が見られ、煤が付着する。５・６は高坏である。５は外面ハケメ後ヨコナデ、内面ハケメを施す。６は外面ヨコナデ、内面ハケメ後ミガキを施す。この他、当て具と杭（第 165 図７・８）が出土している。

出土遺物から古墳時代後期に属するものと考えられる。

（2）溝

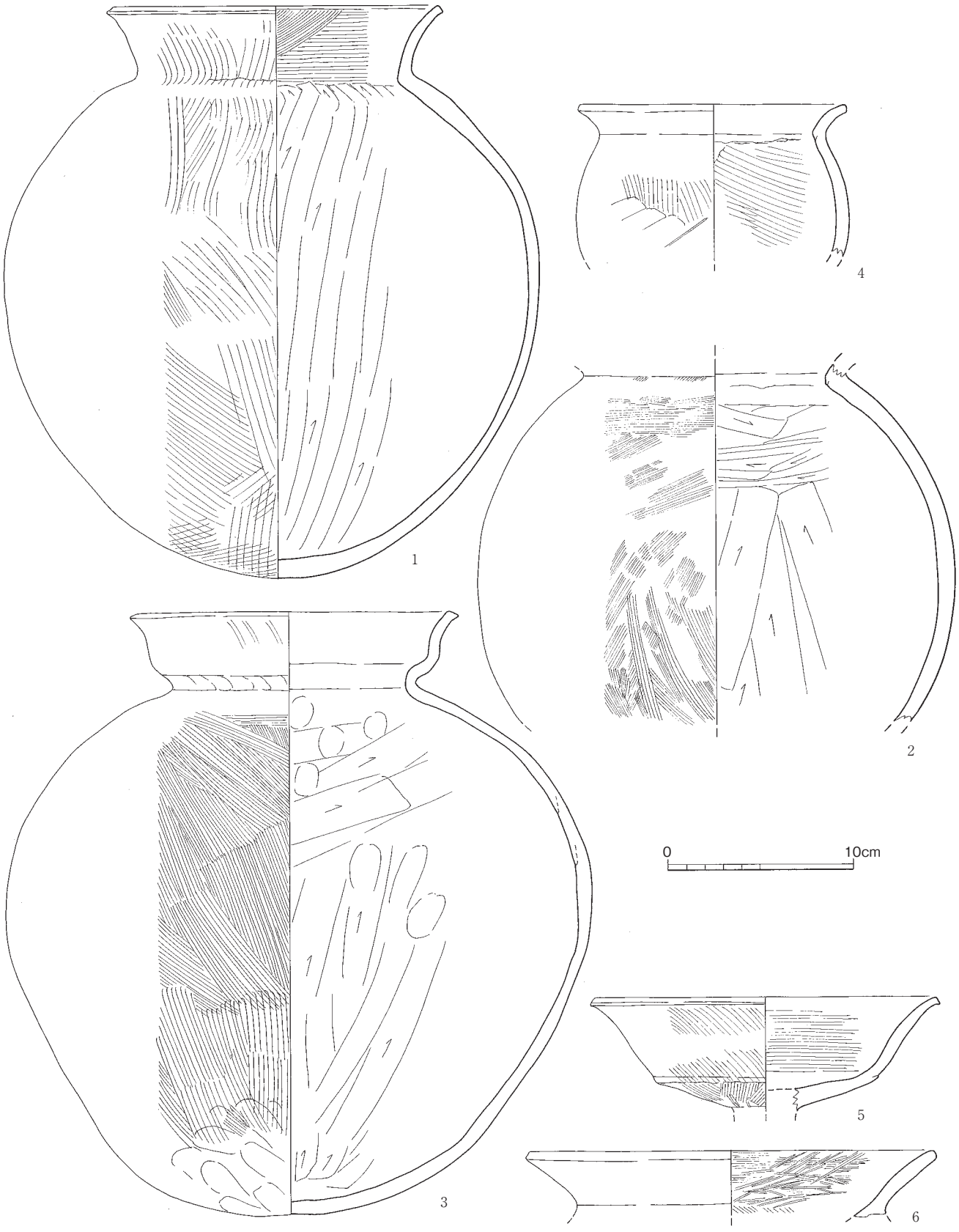
本調査区では２条の溝が検出された。

3001 号溝（図版 63 ～ 65、第 125・126 図）

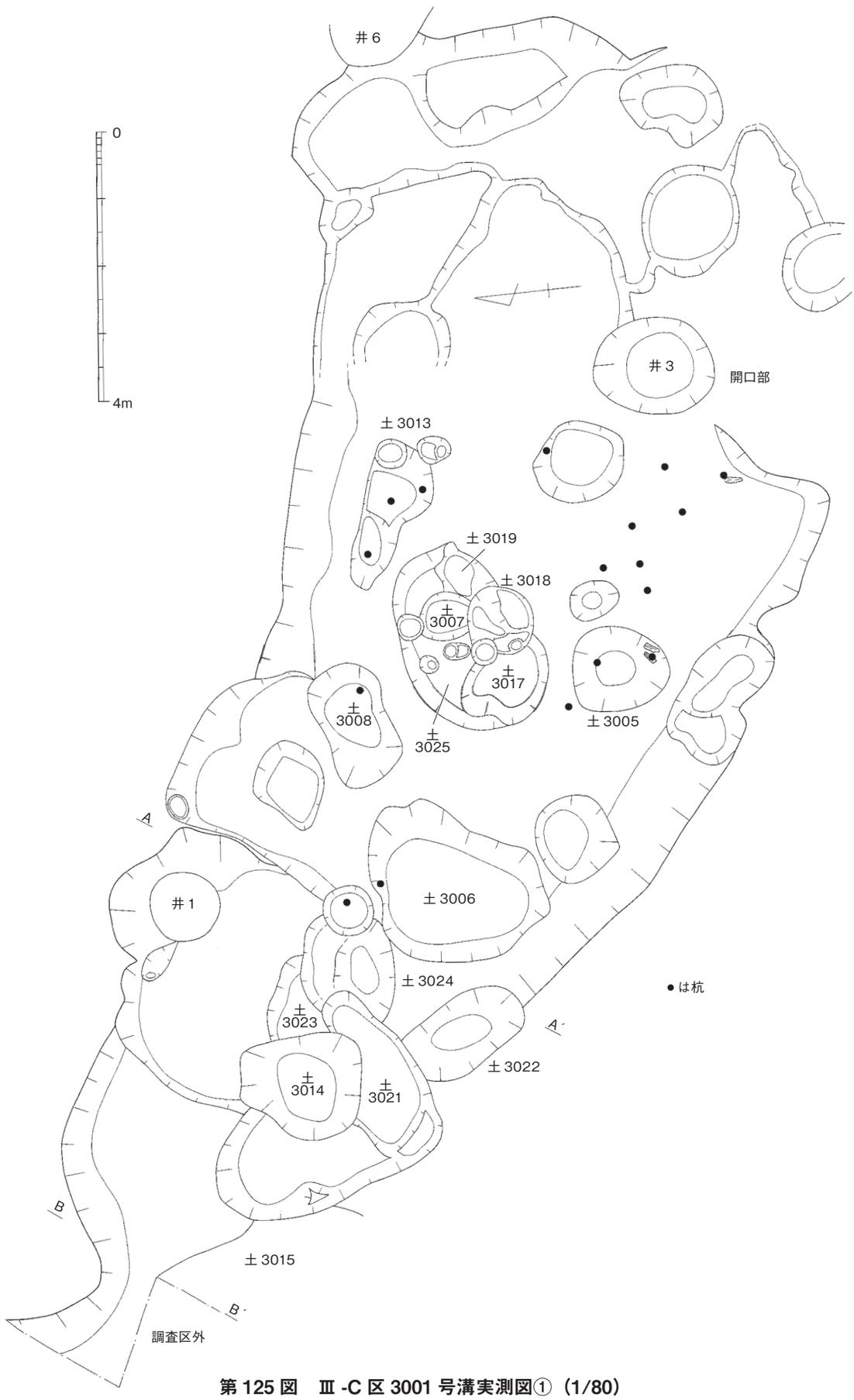
谷より北側に位置し、3014・3015・3021 ～ 3024 号土坑に切られ、3005 ～ 3008・3013・3016 ～ 3019・3025 号土坑を切る。既報告の１・３号井戸との切り合い関係は不明確である。規模は最大幅８m 程で、谷部に向かって開口する。上流側は大きく他の土坑が切っており明確ではないが、６m 程で徐々に幅を減じるものと考えられる。最西端で突出部が見られるが、南側が調査区外となり、詳細は不明である。谷に開口する部分で 10 本ほどの杭が地山面に打ち込まれた状態で検出された。いずれも径５cm ほどで、長さは 20 ～ 40cm である。図化した他に南側上場の外や付近の土坑からも杭が検出されており、溝内外で 20 本以上の杭が検出された。明確に並ぶものが認められないため不明であるが、桟橋のような施設ないしは小型の船を泊めるための柱が設置されていた可能性がある。谷部は東に向かって開口しており、外海から船で直接アクセス可能であると想定されることから、3001 号溝は谷から集落へ至るための船着場ないしは運河のような機能が想定される。

出土遺物（図版 70、第 127 ～ 133 図）

１～７は須恵器の蓋である。１～６はつまみが付くもので、２は宝珠形、３～５はつぶれた形態のものである。１・２はかえりを持ち、他は素口縁を呈する。全て天井部外面回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。２は内面に灰被りが見られる。７は天井部内外面ナデ、他は回転ナデを施す。天井部外面に工具痕が見られる。８・９は坏である。共に底部外面ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデを施す。10 ～ 19 は高台坏である。11・16・17・19 は高台の内径側が、10・14・15・18 は外径側が接地する。概ね底部内外面ナデ、他は回転ナデを施す。11 は小型で胴部下半外面は回転ヘラケズリを施す。15 は底部内面に磨耗が見られ転用硯として使用していた可能性



第 124 図　Ⅲ -C 区 3011 号土坑出土土器実測図（1/3）



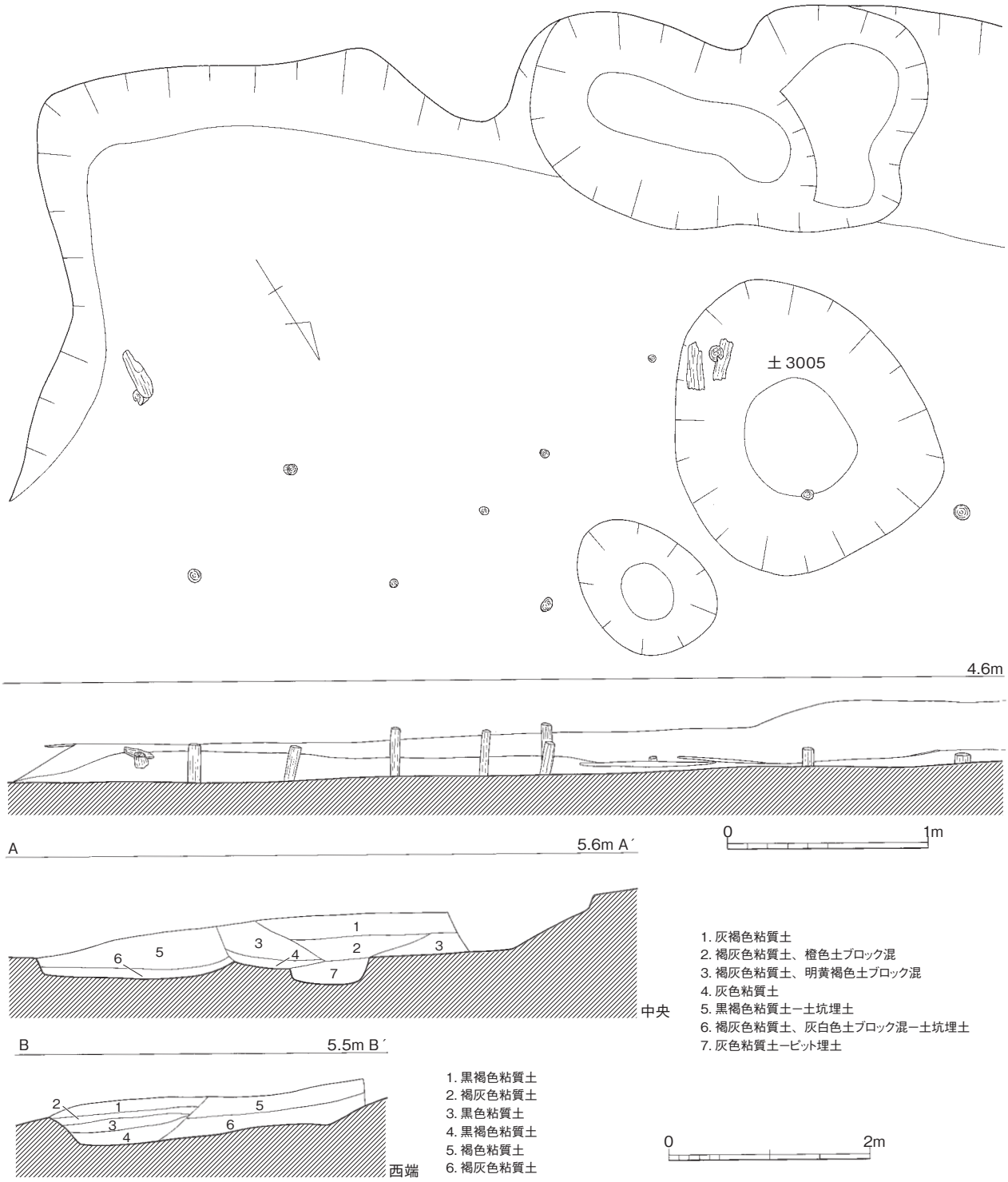
第 125 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝実測図①（1/80）

がある。20・21 は高坏である。共に坏部外面下位回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。22 ～ 24 は壺である。22 は底部が欠損し、胴部下半外面回転ヘラケズリ後ヨコナデ、他は回転ナデを施す。23 は平底を呈し、底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。24 は高台が外方に伸び、内面中央および外面に灰被りが見られる。25 ～ 28 は甕である。いずれも口縁部回転ナデ、胴部外面タタキ、内面当て具痕を施す。25 ～ 27 は灰被り、26･27 は自然釉が見られる。29 ～ 33 は土師器の坏である。29 は底部外面回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。30 は摩滅するものの、外面ミガキ、内面ナデを施す。口縁付近に煤が付着する。31 は外面中位指頭圧痕、他は回転ナデを施す。32 は摩滅するものの内面に暗文状のミガキが残る。外面に黒斑、内面に朱塗が見られる。33 は回転ナデを施す。34 ～ 36 は皿である。34 は外面ミガキ、内面ヨコナデ、底部外面回転ヘラケズリを施す。35・36 は底部外面に糸切りが見られ、混入品か。37 ～ 43 は甕である。38･39･41 はやや丸みを帯び、他は長胴甕である。いずれも口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面は、37・39・40 はケズリ、他はハケメを施す。42 の内面は一部ハケメ後ユビナデを施す。37 の内面、39 の外面に黒斑が見られ、40・41 は外面に煤が付着する。44 ～ 47 は移動式カマドの庇部分か。上面ハケメおよびナデ、下面ナデおよび指頭圧痕を施す。44・46 で本体への貼り付け面が残る。同一個体が含まれる可能性がある。48 ～ 51 は平瓦である。48・49・51 で側面端部が遺存する。外面はいずれも縄目のタタキ、内面は 49 のみ布目、他はナデを施す。

52 ～ 62 は上層出土である。52・53 は須恵器の蓋である。天井部外面回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。53 は外面に灰被りが見られ、天井部内面が磨耗する。転用硯の可能性がある。54 は高台坏である。内面が磨耗しており、転用硯の可能性がある。55 は坏である。底部内外面ナデ、他は回転ナデを施す。灰が飛散したように、表面に黒点が付着する。56 は長頸壺である。頸部外面回転ナデ、内面ナデを施す。外面の一部に灰被りが見られる。57 は高台付の椀ないしは皿か。底部内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。外面に灰被りが見られ、底部内面が磨耗する。転用硯の可能性がある。58 は甕である。口縁部回転ナデ、胴部外面タタキ、内面当て具痕を施す。口縁部内面に灰被りが見られる。59 は土師器の坏である。摩滅するが底部外面に回転ヘラ切りが残る。内面に線刻、底部外面に藁状の痕跡が見られる。60 は甑である。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面上位ケズリ、下位ハケメを施す。外面に煤が付着する。61 は移動式カマドの庇部分か。一部ハケメが残るが全体的にナデを施す。62 は平瓦である。外面縄目のタタキ、内面ナデを施す。端部にヘラ切りが見られる。

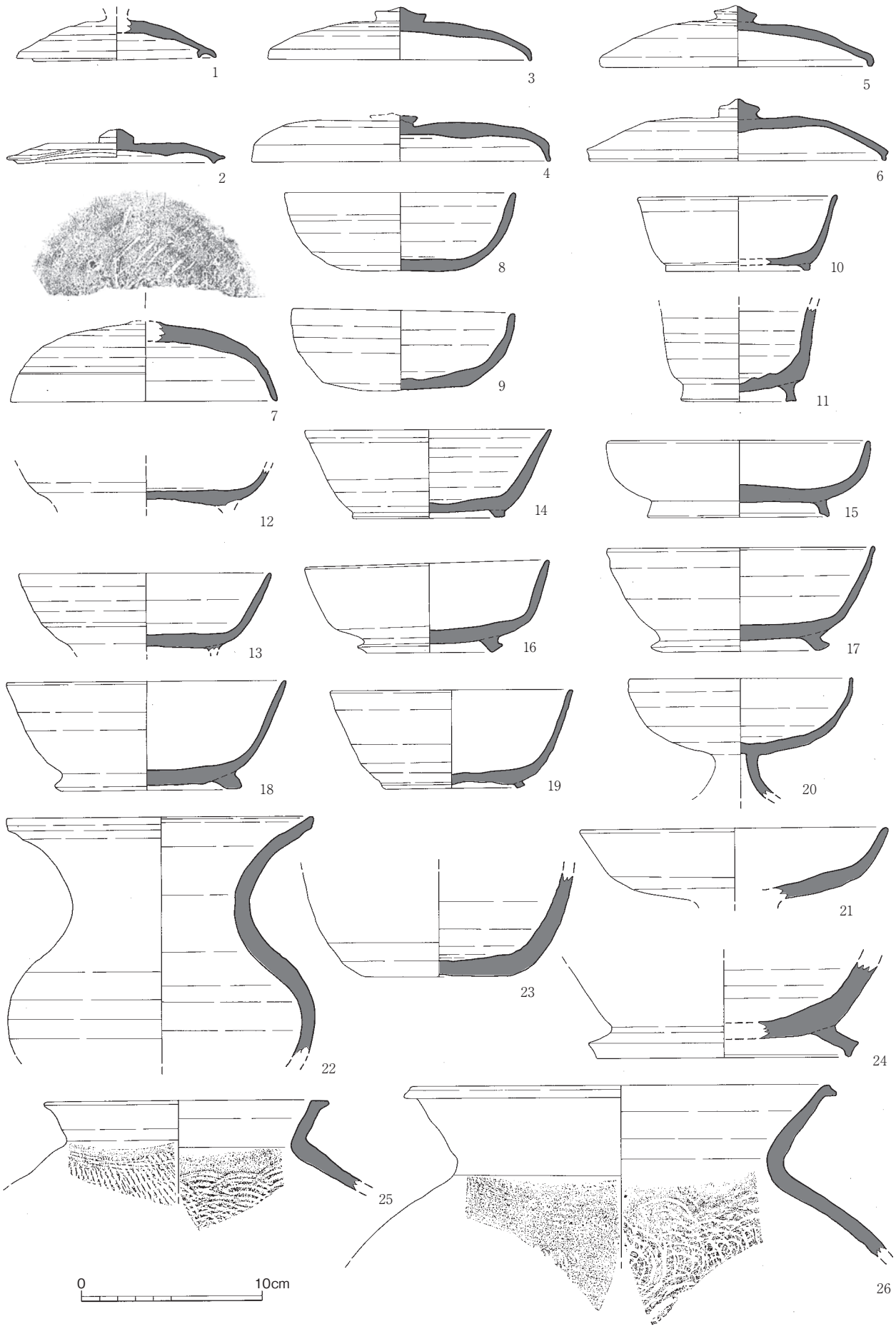
63 ～ 72 は中層出土である。63･64 は須恵器の蓋である。63 は天井部外面回転ヘラケズリ後ナデ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。64 はつまみが付くもので、天井部内外面ナデ、他は回転ナデを施す。65 は土師器の坏である。底部付近の外面にケズリ、底部外面ナデ、他は回転ナデを施す。66 は高坏である。口縁が直線的に伸び、一部ハケメが残るものの、ナデ消している。67 は甑である。外面ハケメ、内面ケズリが施される。68 は移動式カマドか。部位不明ながら、側面にハケメ、底部に板圧痕が見られる。わずかに煤が付着する。69 ～ 71 は平瓦である。69・70 は側面、71 は上下端部が遺存する。いずれも外面は縄目のタタキ、内面は、69 は布目、70・71 はナデを施す。72 は丸瓦である。外面ケズリおよびナデ、内面ケズリにより布目を消す。

73 ～ 93 は下層出土である。73 ～ 75 は須恵器の蓋である。73・74 は外面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。75 は宝珠形のつまみが付き、天井部外面回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、

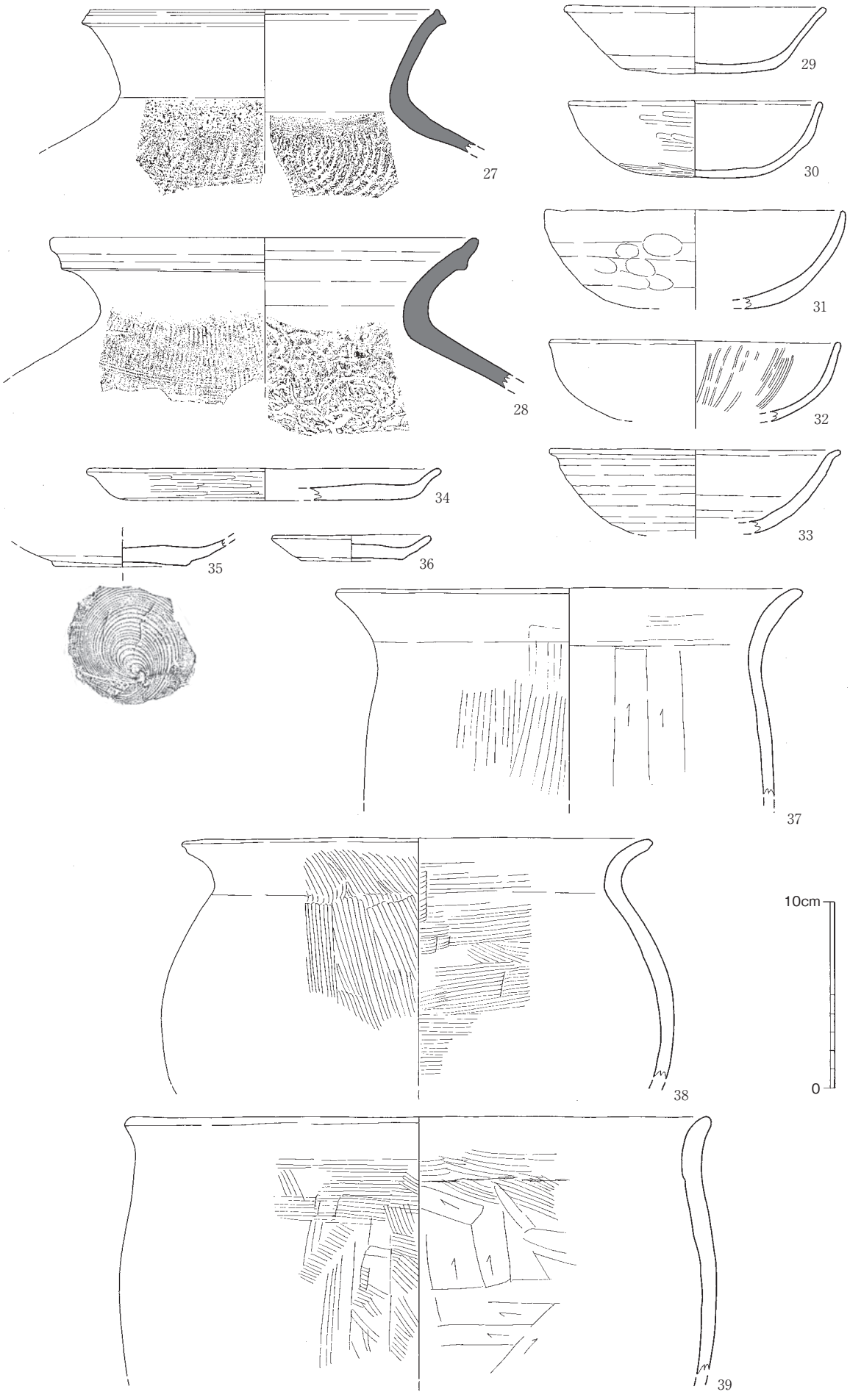


第 126 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝実測図②（1/30、1/60）

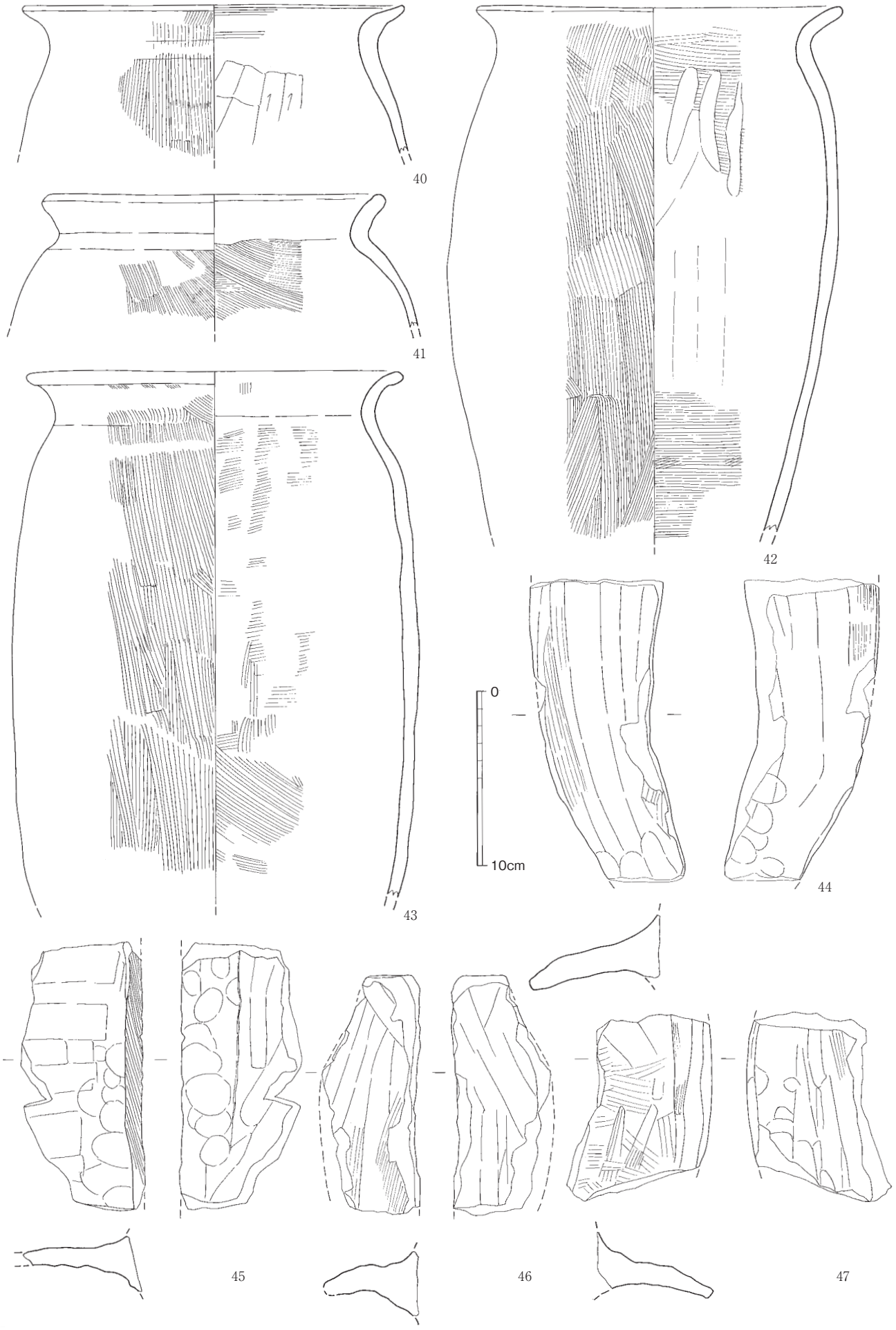
他は回転ナデを施す。76 は坏身である。蓋の可能性もある。底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。77 は高台坏である。底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。78 は坏である。底部外面回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。79 ～ 81 は高坏である。概ね回転ナデを施す。80 は坏部内面に条痕状の痕跡が見られる。82・83 は甕か。82 は内外面に一部ハケメが見られる。83 は回転ナデを施し、内面に灰被りが見られる。84 は平瓶である。口縁部回転ナデ、胴部カキメを施す。85 は鉢である。胴部下半から底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。外面に自然釉が見られる。86・87 は土師器の坏である。86 は外面ミガキ、内面ナデを



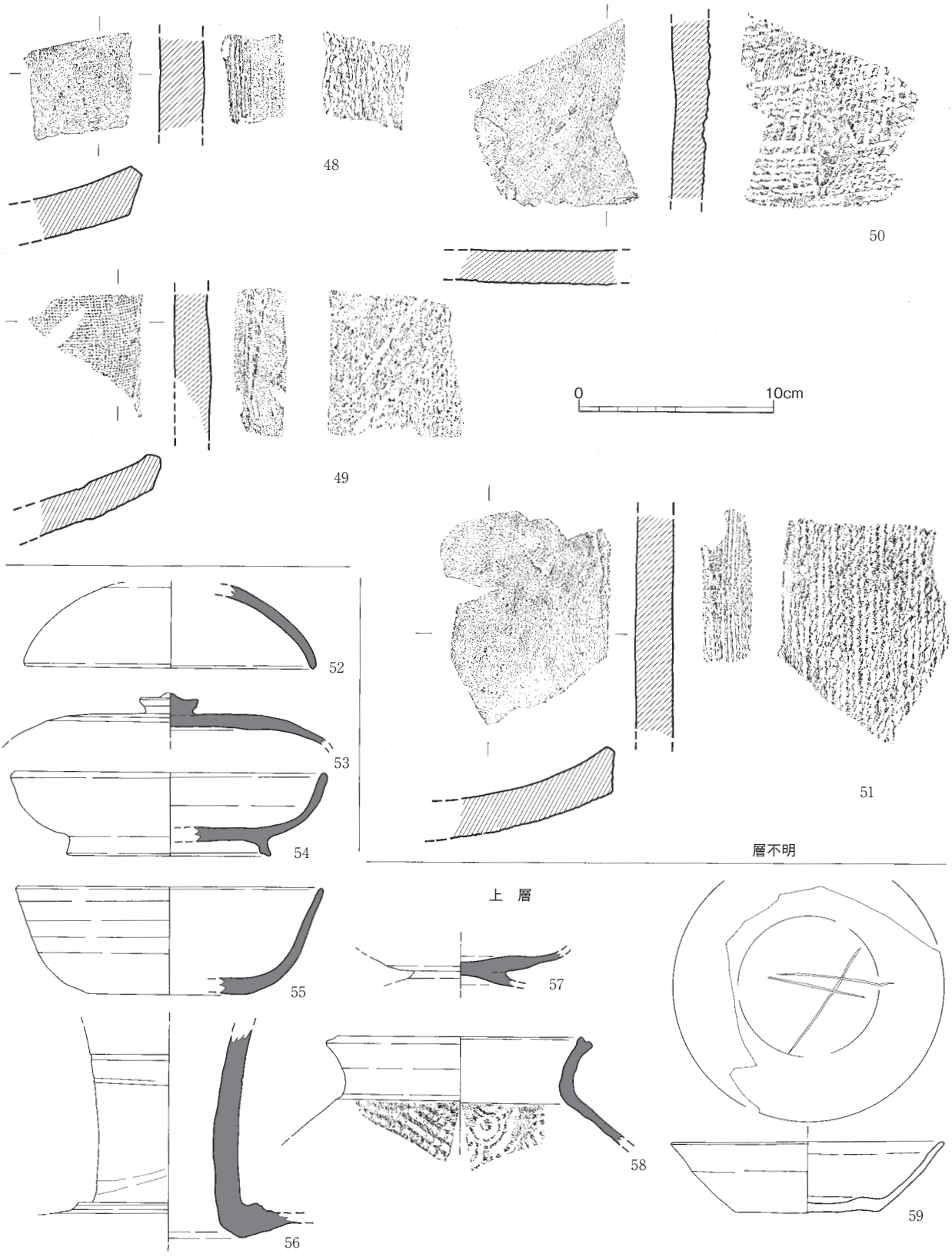
第 127 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図①（1/3）



第 128 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図②（1/3）

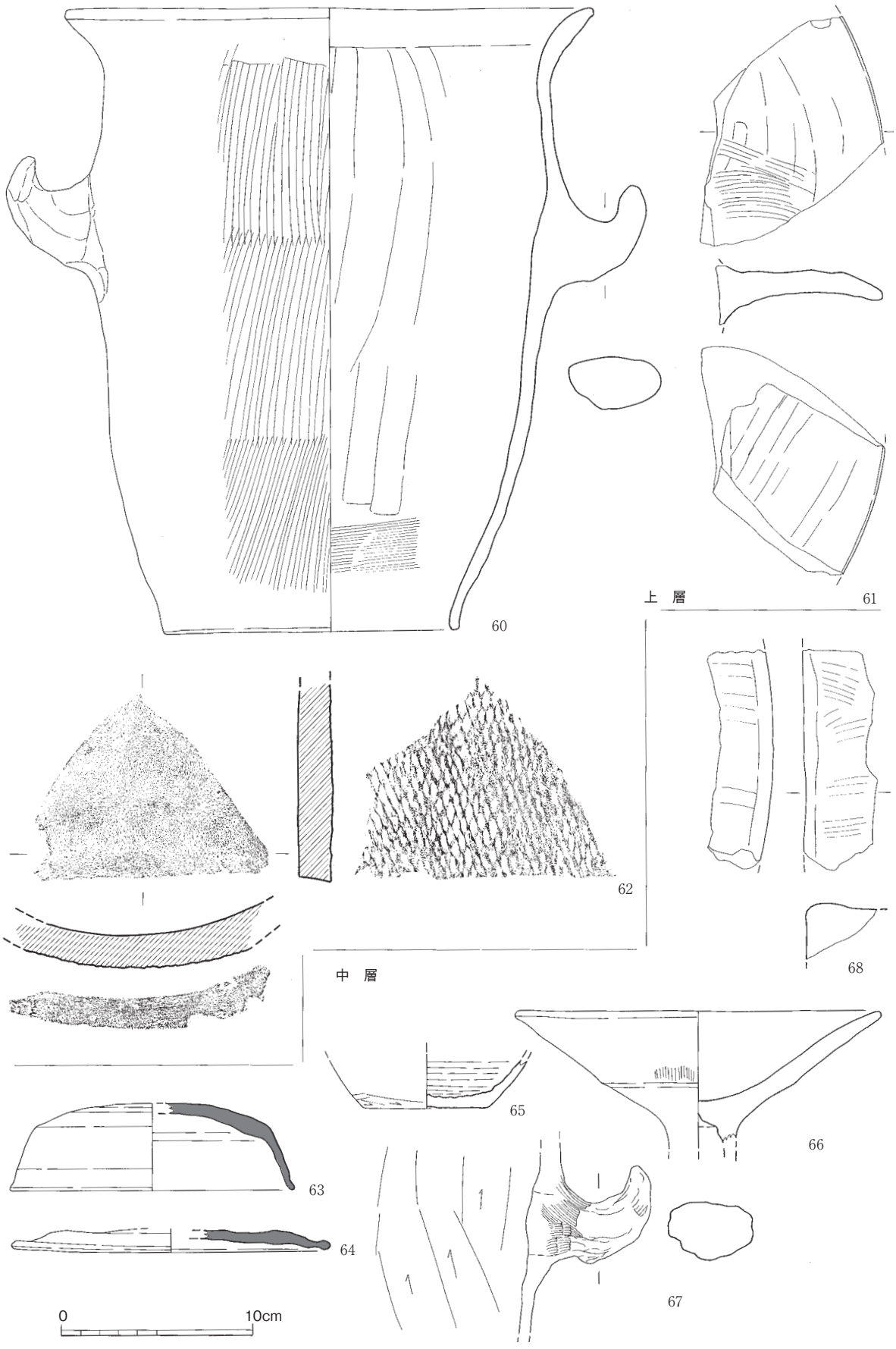


第 129 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図③（1/3）

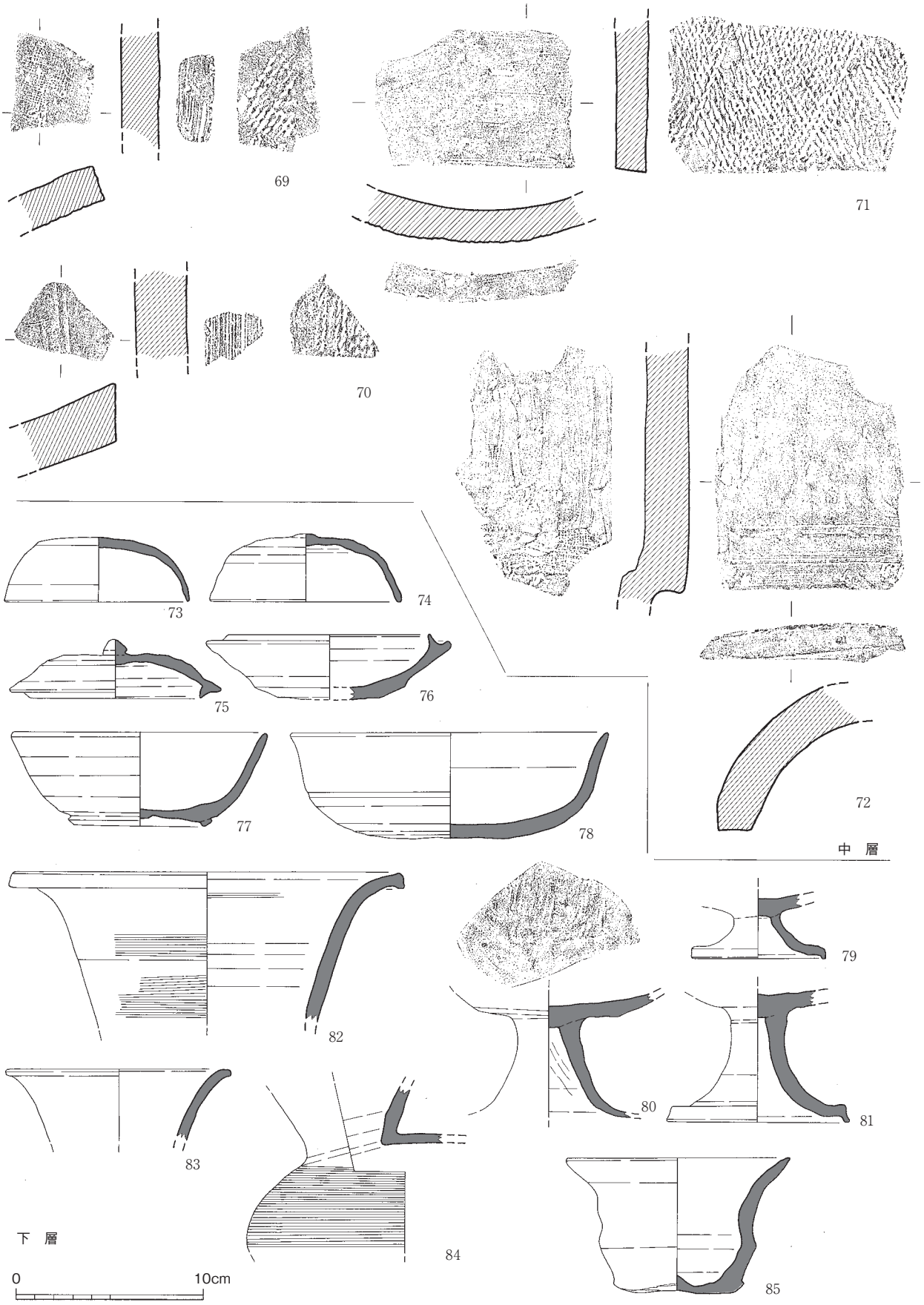


第 130 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図④（1/3）

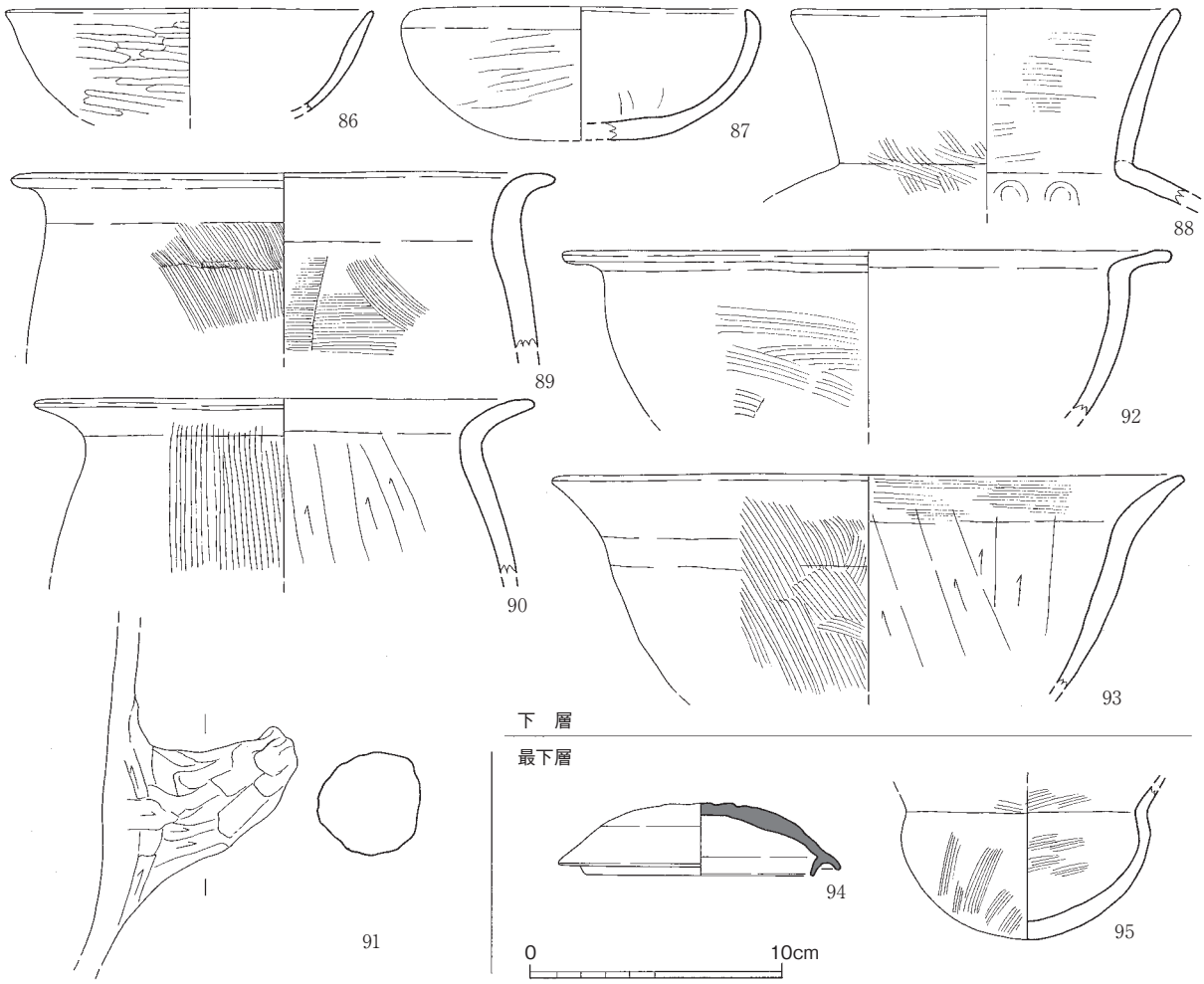
施す。87 は内外面共にケズリ後ナデを施す。88 は壺である。口縁部外面ナデ、内面ハケメ後ナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデを施す。89・90 は甕である。共に口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメを施し、胴部内面は 89 がハケメ、90 はケズリを施す。91 は甑である。把手部分はケズリおよびナデ、内面は工具によるナデを施す。92・93 は鉢か。92 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデを施す。93 は口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。



第 131 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図⑤（1/3）



第 132 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図⑥（1/3）



第 133 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土土器実測図⑦（1/3）

94･95 は最下層出土である。94 は須恵器の蓋である。天井部外面ヘラ切り、他は回転ナデを施す。95 は土師器の小型壺か。内外面共にハケメを施し、一部化粧土が見られる。

この他、遺存状態が著しく不良であるが、中層からヒトを含む中型動物の四肢骨、ならびに馬骨（歯牙:下顎左切歯 1 点、上顎左臼歯 1 点、上顎右臼歯 1 点、基節骨 1 点、中節骨片？ 1 点）、他破片（種不明）数点が出土している。馬は歯牙ならびに四肢骨が認められることから 1 体分が埋没していた可能性がある。この他、土・石・鉄・木製品（第 159・160・166 図）及びモモ核が出土している。

切り合いと出土遺物から、一部 6 世紀末～ 7 世紀前半の遺物が混ざることから掘削は当該時期になる可能性があるものの、基本的には 7 世紀末～ 8 世紀中頃を中心とする時期に機能していたものと考えられる。

3002 号溝

谷より南側に位置する。規模は長さ 2.1m、幅 0.55m、深さ 0.25m である。谷の落ち際で切られており、谷に向かって流れ込むないしは、削平されているものと考えられる。

出土遺物はなく、時期等は不明である。

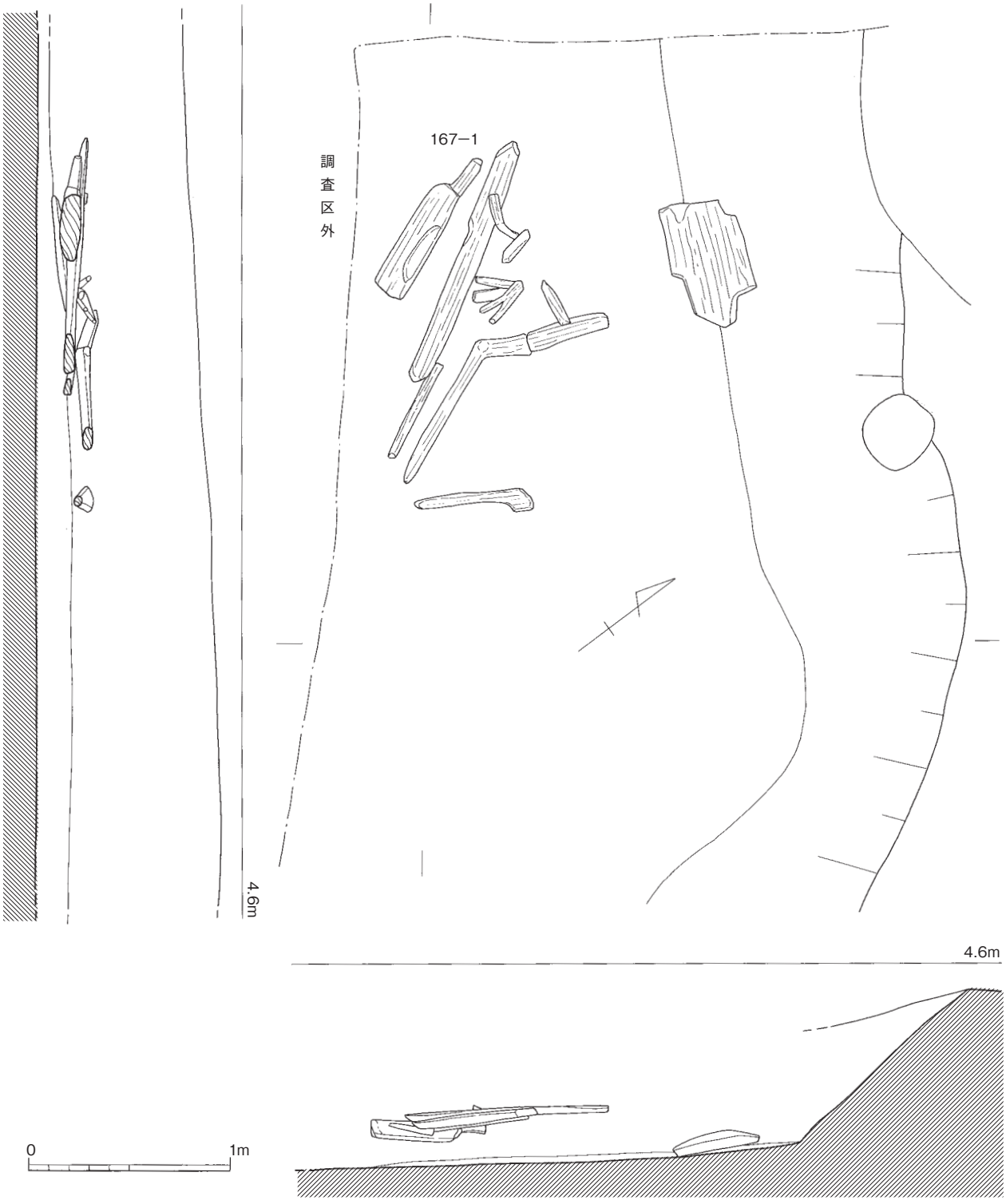
（3）水漬け遺構（図版 65・66、第 134 図）

谷の北端、調査区の北西端で木材が多数検出され、谷の落ち際もその部分で広がっていることから、水漬け遺構として報告する。

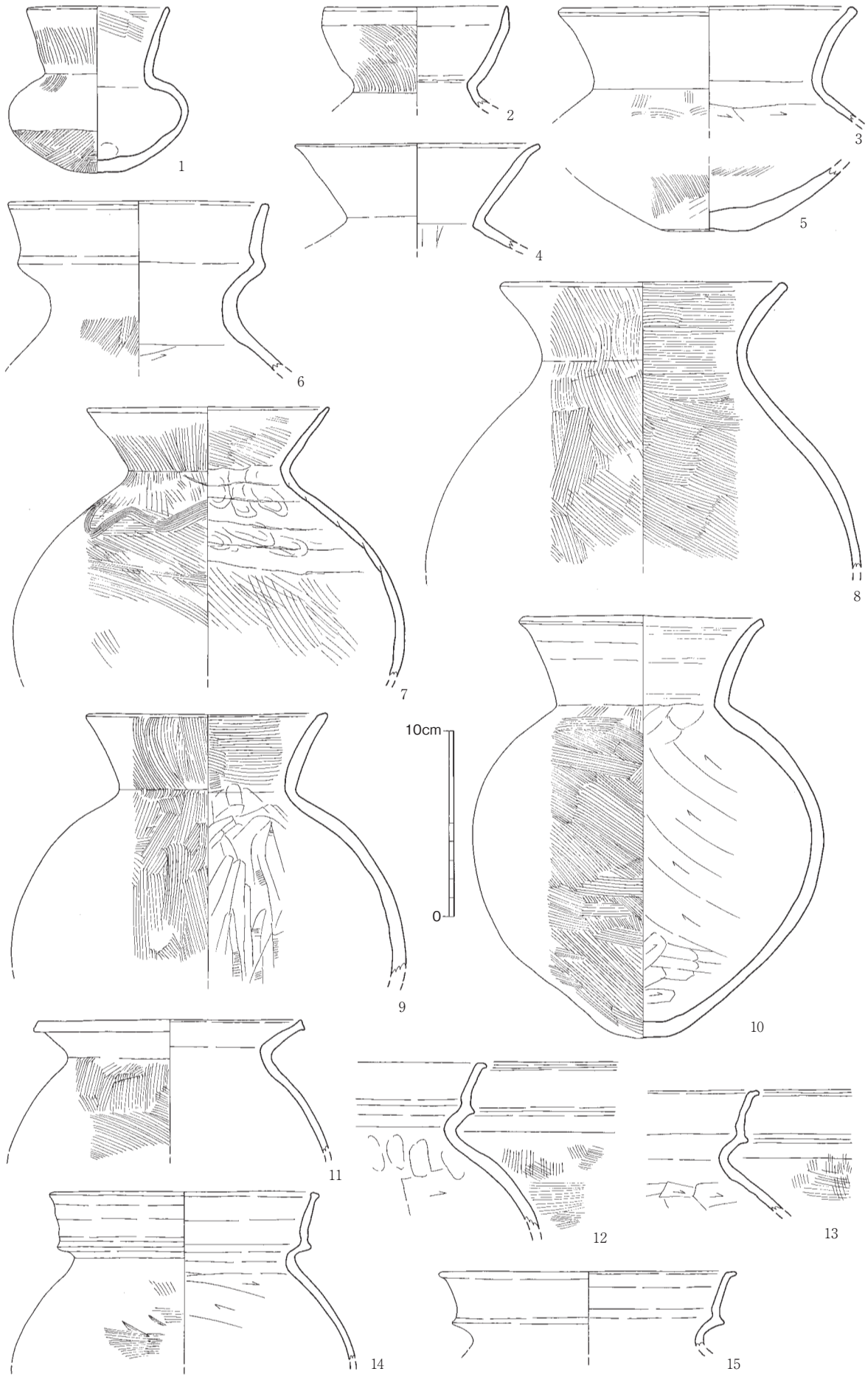
谷の下端付近、地山に近い部分で板や丸太、枝などの木材がまとまって検出された。谷の上端からの距離は 2.5m、比高差 0.6m 程である。床面付近はほぼ平坦になる。南西側および北西側は調査区外に延び、より広がっているものと考えられる。実際に木製品として加工されたものは少なく、枝打ちした木材を貯蔵していた場所と考えられる。掘削時は湧水が見られた。

出土遺物（図版 70・71、第 135・136 図）

1 は小型壺である。外面は全体的にハケメを施すが、一部ナデ消す。内面は口縁部ハケメ、他はナデを施す。2 ～ 10 は壺である。6 を除き口縁が直線的に伸びるものである。2 は口縁部が内湾し、

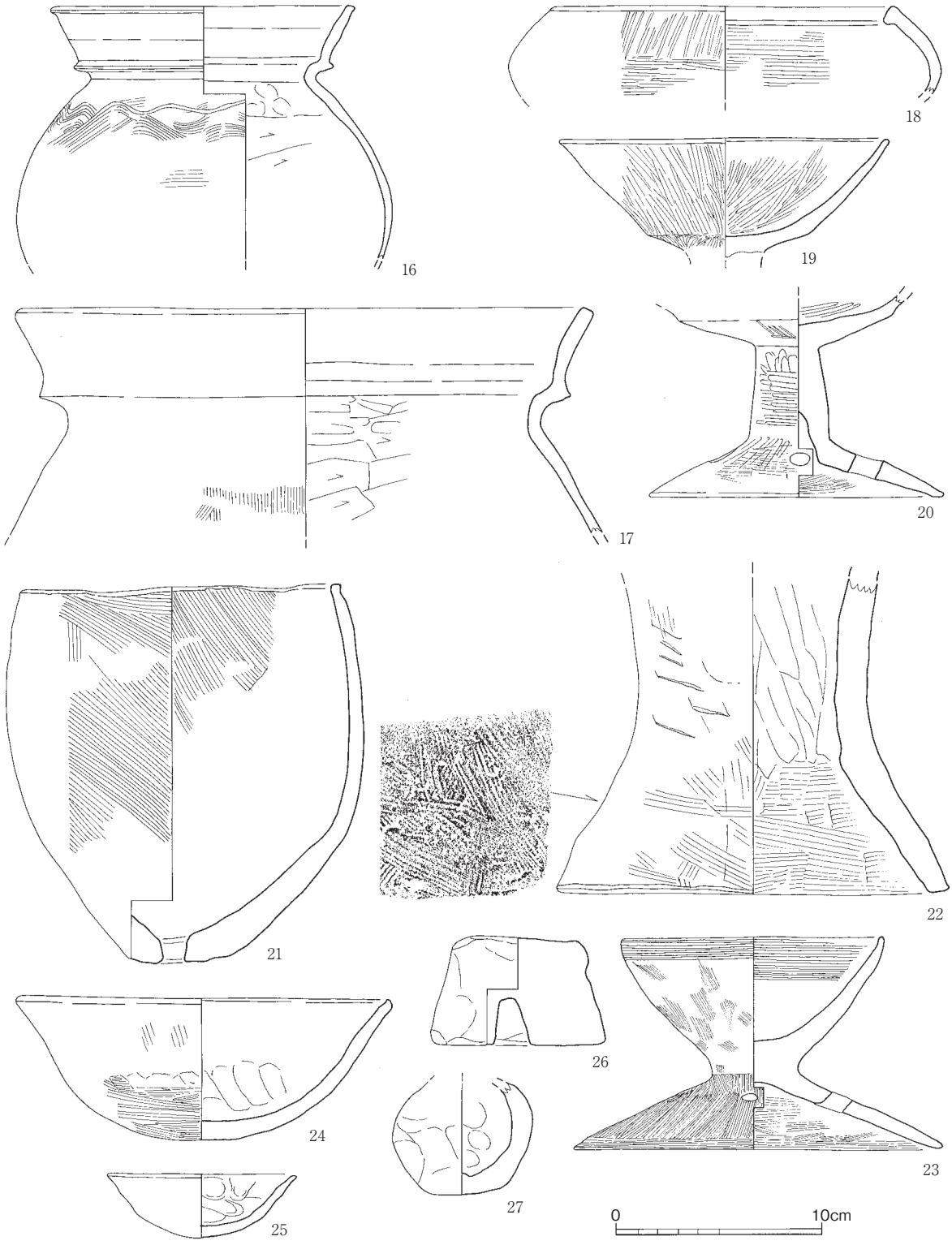


第 134 図　Ⅲ -C 区水漬け遺構実測図（1/30）



第 135 図　Ⅲ -C 区水漬け遺構出土土器実測図①（1/3）

外面ハケメ、内面ヨコナデを施す。３は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。４は口縁部ヨコナデ、胴部内外面ナデを施し、外面に煤が付着する。５は底部のみが遺存し、平底を呈する。底部内外面ナデ、胴部内外面ハケメを施す。６は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。７・８は共に内外面ともハケメを施し、７は肩部外面に波状文、内面に指頭圧痕および粘土紐接合痕が見られる。９は口縁部ハケメ、胴部外面ハケメ、内面ハケメ後ユビナデを施す。10 は口縁部工具によるヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面上位ケズリを施し、下位にミガキ状の痕跡が見られる。外面底部付近に黒斑が見られる。11 ～ 17 は甕で、12 ～ 17 は山陰系である。17 の



第 136 図　Ⅲ -C 区水漬け遺構出土土器実測図②（1/3）

みやや厚く、口径も大きい。11 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデを施す。12 ～ 17 は概ね口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。14 の胴部外面に工具痕、16 の肩部外面に波状文が見られる。11・12・14・16 は外面に煤が付着する。14・16 は口縁部と胴部中位以下に煤が濃く、胴部上半はやや薄い。18 ～ 20 は高坏である。18 は口縁が内湾し、端部を肥厚させる。外面ミガキ、内面ハケメを施す。19 は坏部のみが遺存し、内外面共にミガキを施す。20 は脚部のみが遺存し、脚裾内外面ハケメ、他はミガキを施す。孔が 4 ヶ所に穿たれる。21 は底部に穿孔のある鉢である。口縁がやや内湾し、端部を外方に突出させる。外面および内面上位ハケメ、他はナデを施す。22・23 は器台である。22 は上方が大きく抉れるタイプで、23 は脚付のタイプである。22 は外面上位ケズリ後ナデ、下位ハケメ、内面上位ユビナデ、下位ハケメを施す。脚裾部に布目の痕跡が見られる。23 は口縁部横方向のハケメ、坏部外面ハケメ、内面ナデ、脚部内外面ハケメを施す。孔が 4 ヶ所に穿たれる。脚裾部に黒斑が見られる。24・25 は椀である。24 は口縁部ヨコナデ、胴部中位工具によるナデ、下位ハケメ、内面ケズリを施す。内面に黒斑が見られる。25 は小型のものでナデにより成形する。底部外面に黒斑が見られる。26 は支脚である。断面台形で底部に径 1.5cm の孔が穿たれ、貫通しない。表面はナデで成形する。27 はミニチュア土器である。平底を呈し、ユビナデで成形する。この他、木製品（第 167 図）が出土している。

出土遺物から弥生時代終末～古墳時代前期前半に属するものと考えられる。

（4）導水施設（図版 66、第 137 ～ 139 図）

谷の南東、調査区の南東端で木樋が検出された。調査区境に槽部が見られたために、急遽拡張を行い、木樋部分の全体を検出した。他遺跡との比較等は後述し、ここでは事実報告を行う。

木樋

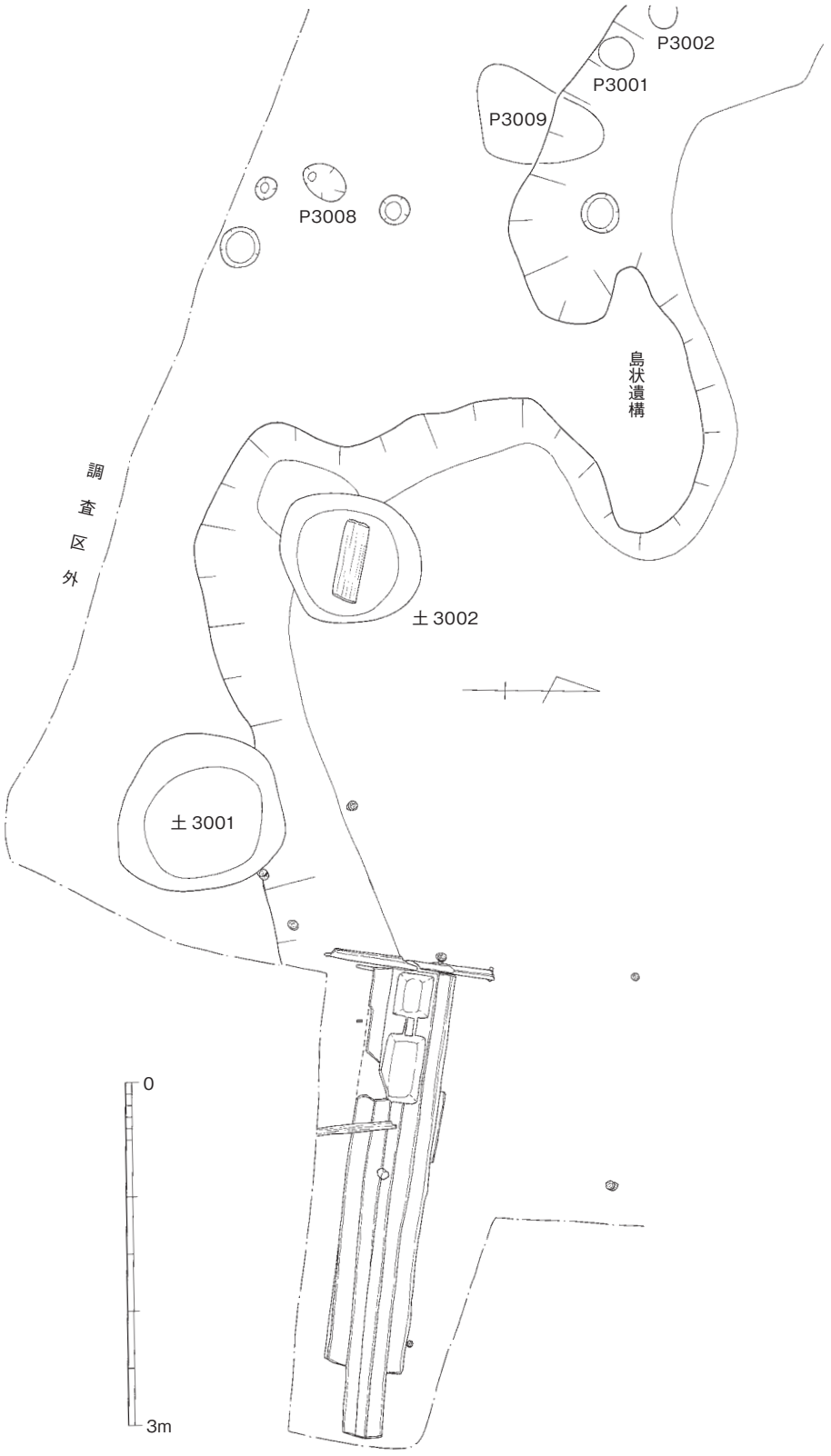
長さ 4.2m、幅 0.7m、厚さ 0.13m で中央の樋と左右の樋に分かれる。それぞれが一木造である。以下「木樋」と記述した場合は３本を合わせたもの、それぞれの部位は「中央木樋」、「左（右）木樋（上流側を上に見て南側が左）」と記述する。左木樋・中央木樋は一部欠損しているが、調査区境に水抜き用の溝を掘った際に傷つけたものであり、本来は完形品であった。樹種はいずれもツブラジイである。

中央木樋は幅 40cm で、下流側に向かってわずかに狭くなり、端部では 35cm を測る。上流部に 38 × 31cm、深さ 4cm の第 1 槽部が設けられ、そこから 16cm 下流側には 59 × 33cm、深さ 6 ～ 7cm の第 2 槽部が設けられる。槽部間およびその下側には、幅 10cm、深さ２cm の直線的な樋が掘り込まれる。上流側と下流側は５cm 程の僅かな傾斜を持つ。

左右木樋は共に長さ 3.5m、幅 15cm で外側の端部が２cm ほど高くなっており、中央木樋から溢れた水の受部となる。共に中央木樋より短く、木樋全体としては凸形を呈する。

木樋の側面に杭を４本打ちこみ、固定してあることから、現位置を保っていることは間違いない。木樋の底には３枚の板が置かれており、微妙な角度や位置の調整を行っているものと考えられる。また、上流側の槽部下には棒が設置され、これも調整に使ったものと考えられる。

木樋のさらに上流側で木樋と直行する形で横木が設置されており、長さ 1.5m、幅 10cm、厚さ５cm を測る。これも杭で固定されていることから現位置を保っている。横木の上端は本来より高くなるが、溝などは掘られていないため、常時水が流れるような状態にするためには他の木樋が必

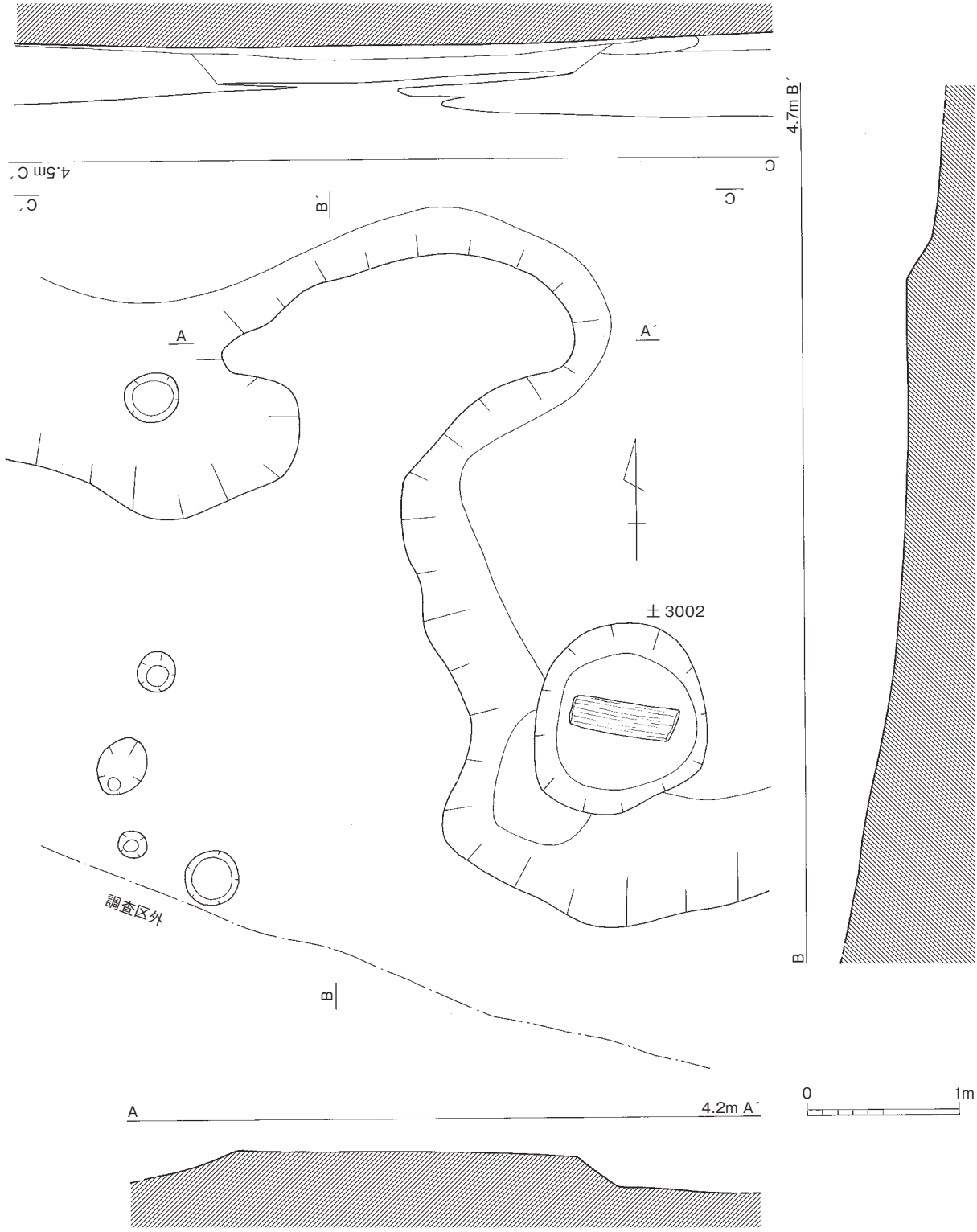


第 137 図　Ⅲ -C 区導水施設実測図①（1/60）

要となるものの、付近からは検出されていない。

覆屋

中央木樋の槽部からややずれた位置で径 10cm の杭が検出された。当初は木樋を固定するものと想定していたが、重機によって調査区を拡張した際に同じ規模の杭が２本検出され、既に発見していた１本と並ぶことから、覆屋があったものと想定される。全ての柱が検出されていないことから

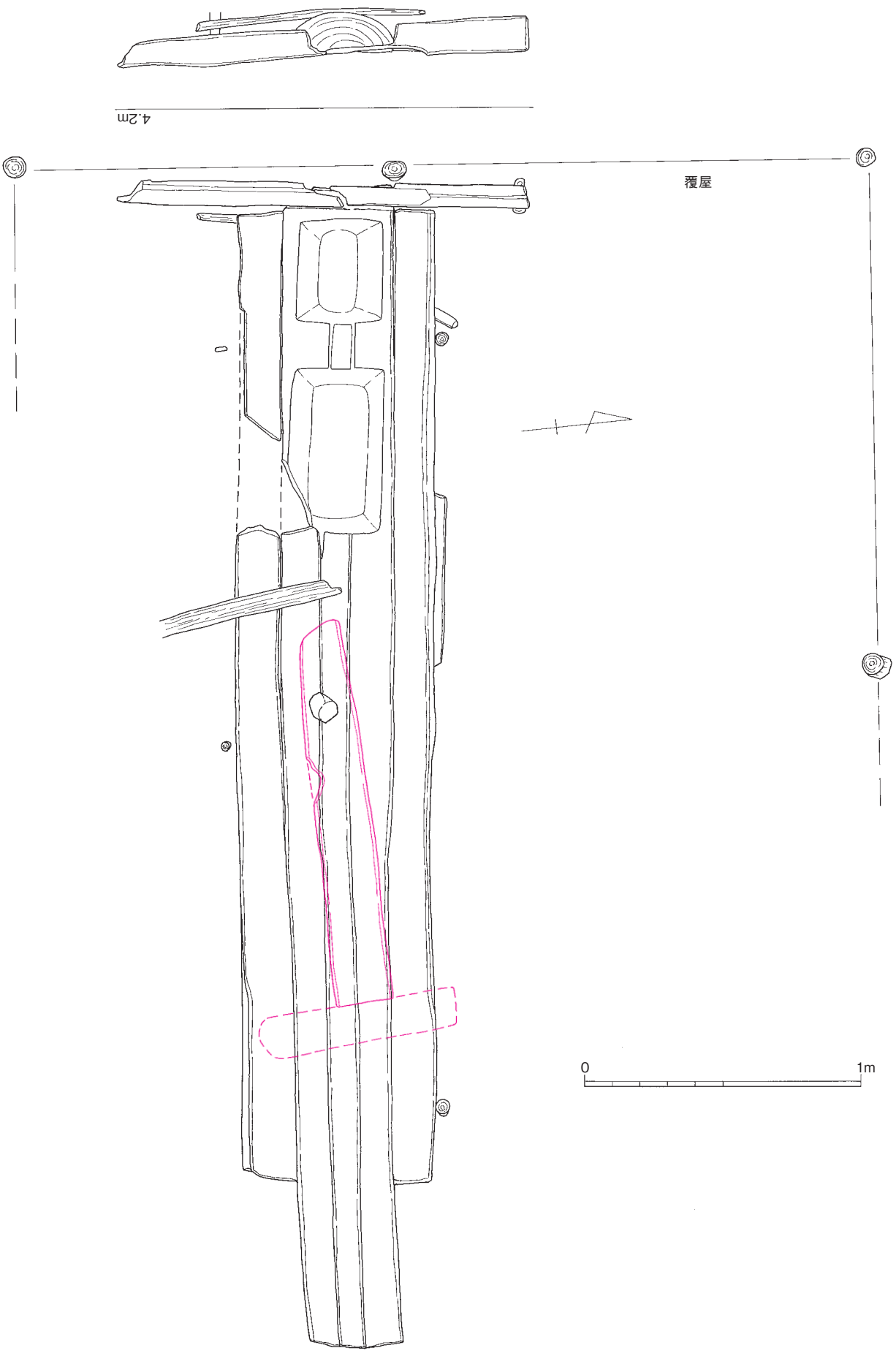


第 138 図　Ⅲ -C 区導水施設実測図②（島状遺構）（1/40）

不明瞭ながらも、規模は２間× 1 間以上で、3.05m × 1.85m 以上である。柱間は 1.35、1.7、1.85m と一定ではない。規模や杭の太さから考えると、床板を伴うような建物としての姿は想定しにくく、壁板と屋根だけのような簡単な遮蔽施設であったものと推測される。

島状遺構

導水施設を構成するものかどうか確証はないが、木樋の 4.5m 上流側で谷部の上端が突き出し、島状に伸びる部分が認められた。先端部は 2.3 × 1.2m ほどで、南側が幅 0.7m のくびれ部をなす。これより北側では少なからずピットが検出されているのに対して、島状遺構部分ではほとんどピッ



第 139 図　Ⅲ -C 区導水施設実測図③（木樋）（1/20）

トが検出されていない。南側が調査区外となるため、どれほどの範囲までが遺構の範囲か判断できないが、突出部から南に 2m ほどしか平坦ではないことから、さほど大きな規模ではなかった可能性が考えられる。

その他の施設

木樋の上流側で井戸と考えられる 3001・3002 号土坑が検出されている。時期を含めて後に検討するが、どちらかの土坑が水源となる可能性もある。また、木樋から 1.1m 西側に径５cm 程の杭が検出されている。

出土遺物（第 140 図）

導水施設そのものが「遺構」であるため、出土遺物としていいのか判断しづらいが、木樋周辺で出土した遺物について報告する。包含層の上部に据えられているため、包含層の遺物である可能性は否定できない。

１・２は壺である。１は口縁部が剥離しているものの、端部が直立するものと考えられる。頸部内外面にハケメを施す。剥離面に接合のためのハケメ状キザミが施される。２は二重口縁の口縁部のみが遺存し、内外面共にハケメ一部ナデを施す。３・４は大型の甕か。３は口縁部のみが遺存し、ヨコナデを施す。内面に黒斑が見られる。４は平底を呈するが、厚みが異なるため安定しない。外面タタキ後ハケメ、内面ハケメを施し、内面の下位に一部、粗く深いハケメが施される。外面下位に黒斑が見られる。

周囲の出土遺物は弥生時代終末～古墳時代前期前半に属するものであるが、先述のように導水施設自体が遺構であることから、土器が遺構に伴うものか確実ではない。時期に関しては、科学分析の結果等も含め、後に検討する。

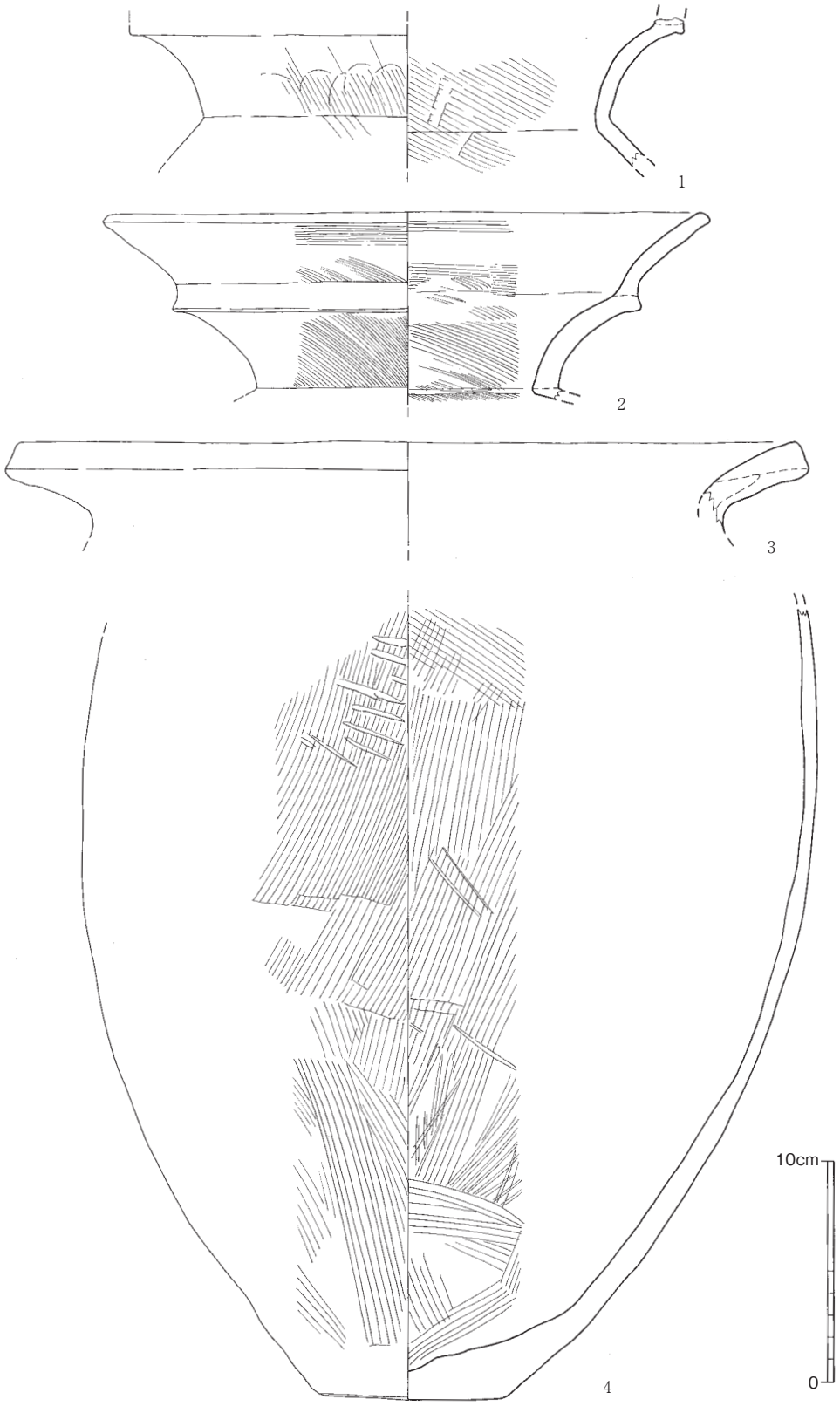
（５）その他の遺構（図版 71、第 141 図）

ピットおよび遺構外から出土した遺物について報告する。

１は土師器の壺である。レンズ状の底部をなし、外面タタキ後ハケメ、内面ハケメを施す。P3006 出土。２～６は表土掘削時に出土した遺物である。ほとんどは谷部包含層出土のものと考えられるが、確証がないことからここでまとめて報告する。２は須恵器の高坏である。脚部外面ケズリ、他は回転ナデを施す。全体に自然釉がかかる。３・４は土師器の壺である。３は口縁部ヨコナデ、胴部内面ケズリを施す。４は口縁部外面下位から胴部外面ハケメ、胴部内面ケズリ、他はヨコナデを施す。底部外面に黒斑および二次被熱痕跡、胴部内面に煤ないしはコゲが見られる。５は平瓦である。外面縄目のタタキ、内面ナデを施し、端部はヘラ切りする。６は移動式カマドの破片か。3001 号溝で出土しているものと同一個体になるものと考えられ、ナデおよびケズリを施す。７・８は出土地不明の土器である。７は土師器の甕である。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。外面に煤が付着する。８は椀である。外面ケズリ後ナデ、内面ナデを施す。

（６）包含層

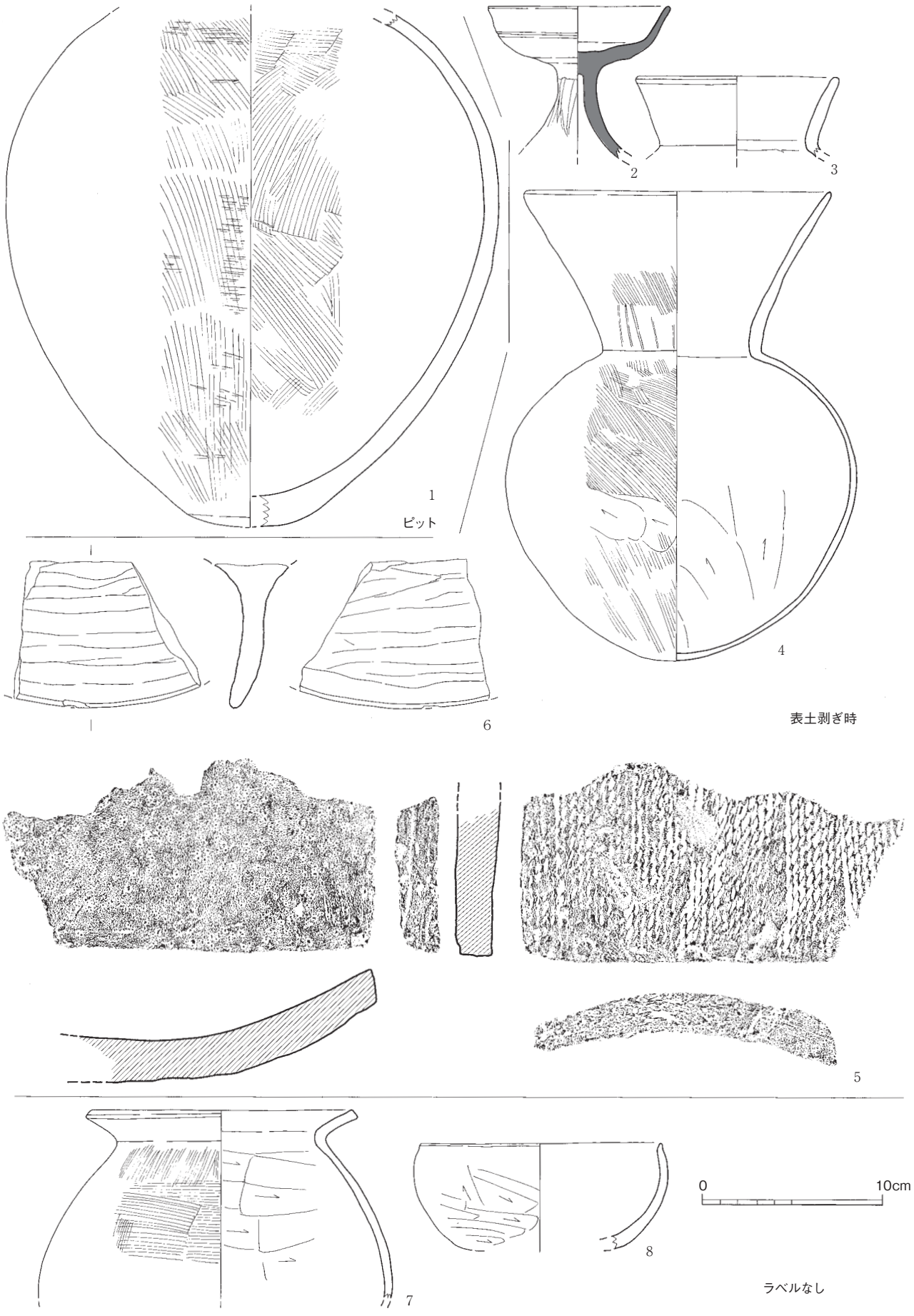
谷部の埋土（包含層）から出土した遺物を報告する。谷部を横断する形で設定したトレンチで３層に分層できることが判明したため（図版 67、第 142 図）、１～３層と分けて取り上げた遺物については、層ごとに報告する。



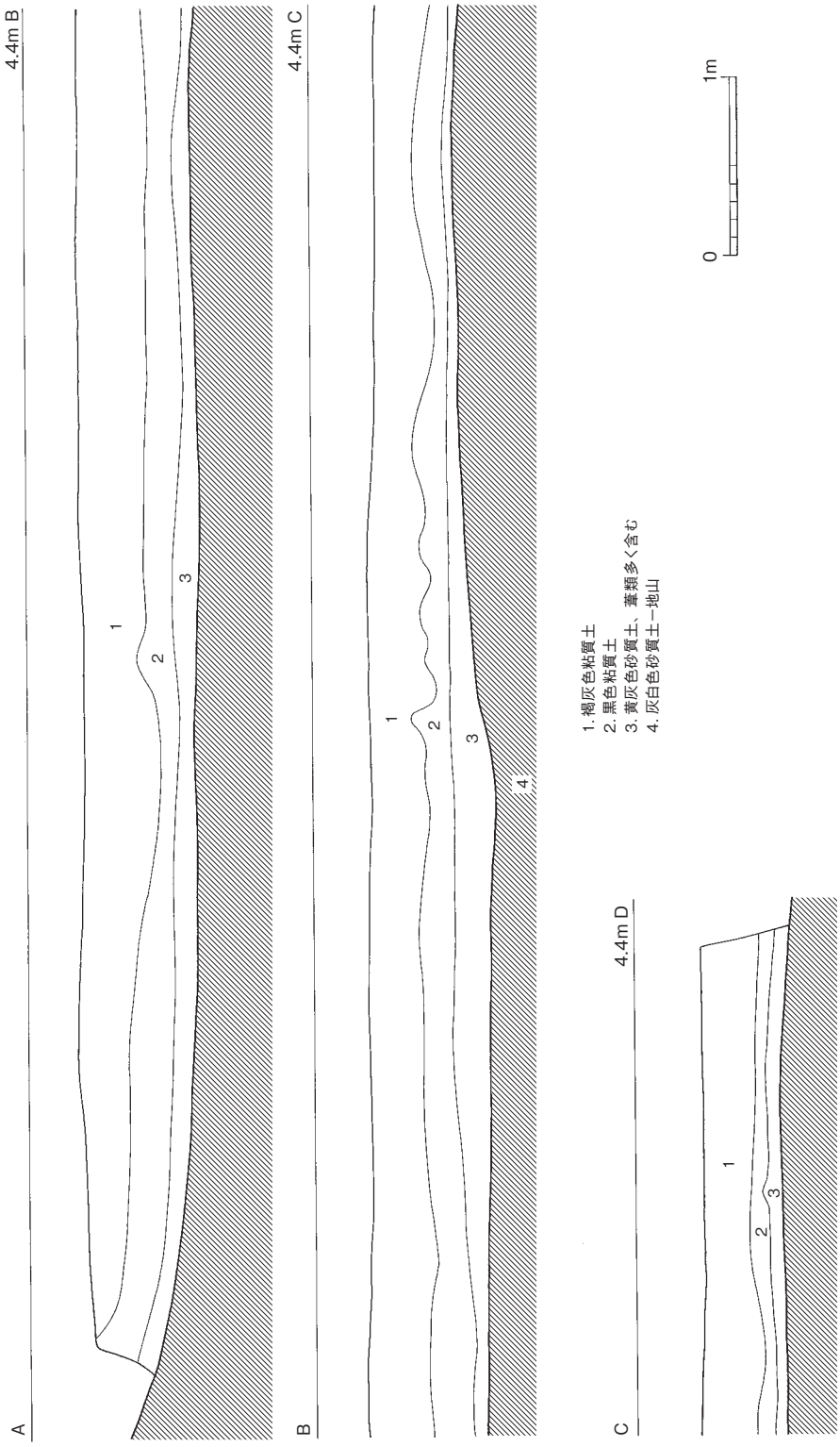
第 140 図　Ⅲ -C 区導水施設木樋周辺出土土器実測図（1/3）

谷部包含層出土遺物（図版 71 ～ 73、第 143 ～ 150 図）

1 は須恵器の蓋である。天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。外面に灰被りが見られる。2 は坏身である。底部内外面不定方向のナデ、体部下位回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。外面に灰被りおよびヘラ記号が見られる。3 は高坏である。低脚で、灰被りのため調整不明である。4 は壺か。回転ナデを施す。外面に灰被りが見られる。5・6 は甕である。5 は口縁部外面に断面三角形の突帯を 2 条付し、三段の櫛描波状文を施す。体部外面カキメ、他は回転ナデを施す。6 は胴部外面タタキ、内面当て具痕、他は回転ナデを施す。7 は瓶類か。灰被りのため調整は不明である。8・9 は甑である。8 は自然釉が見られ、外面に波状文を施す。9 は胴部外面下位回転ヘラケズリ、頸部内面絞り、他は回転ナデを施す。10 は須恵器模倣土師器の坏身である。口縁部ヨコナデ、底部外面ケズリ、他はナデを施す。11 ～ 18 は弥生土器・土師器の小壺である。11 は下膨れの形態を呈し、外面ミガキ、口縁部内面ヨコナデ、頸部内面絞り、胴部内面指頭圧痕、底部内面ナデを施す。12 はわずかに平底

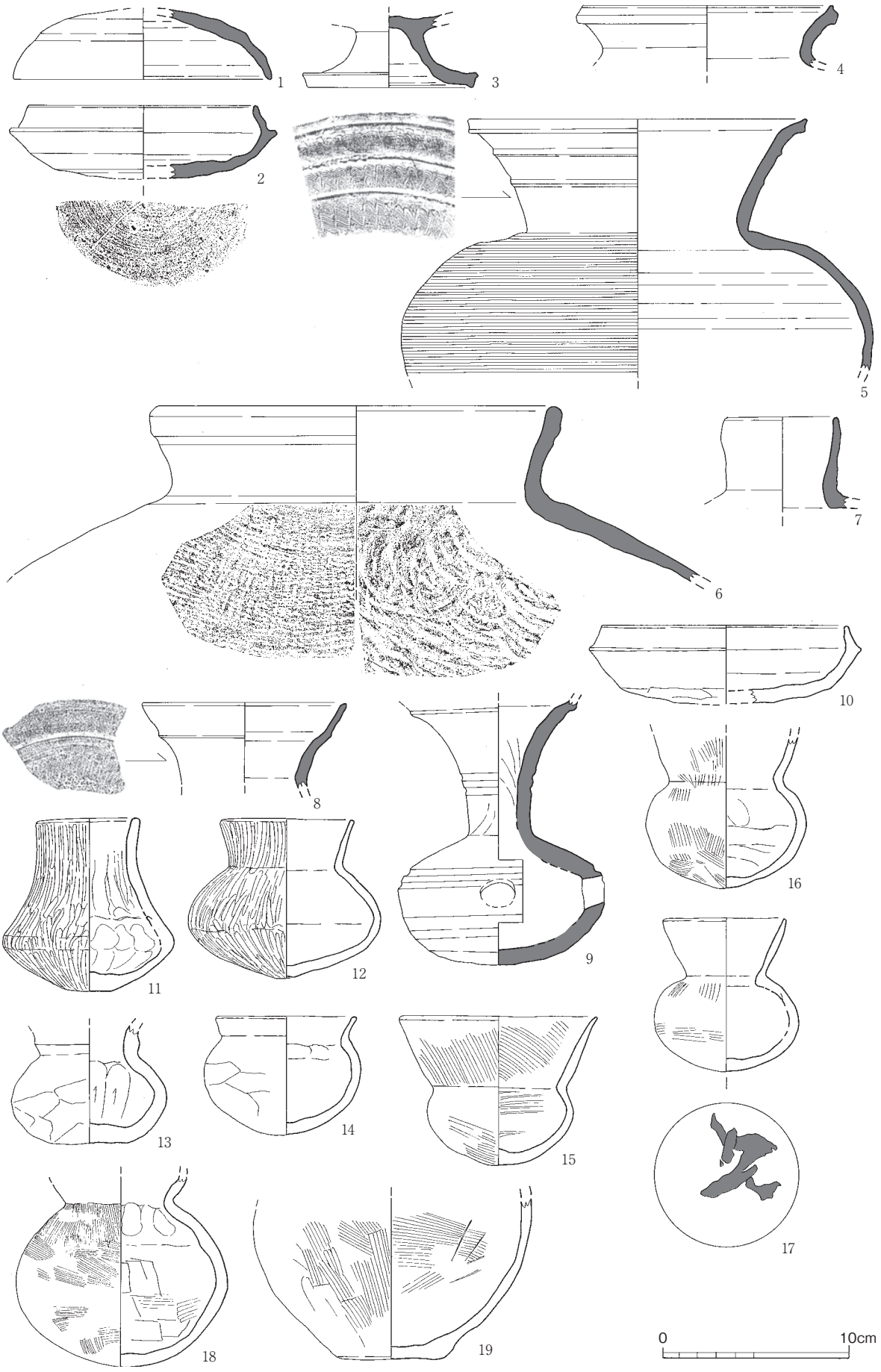


第 141 図　Ⅲ -C 区その他の遺構・遺構外出土土器実測図（1/3）

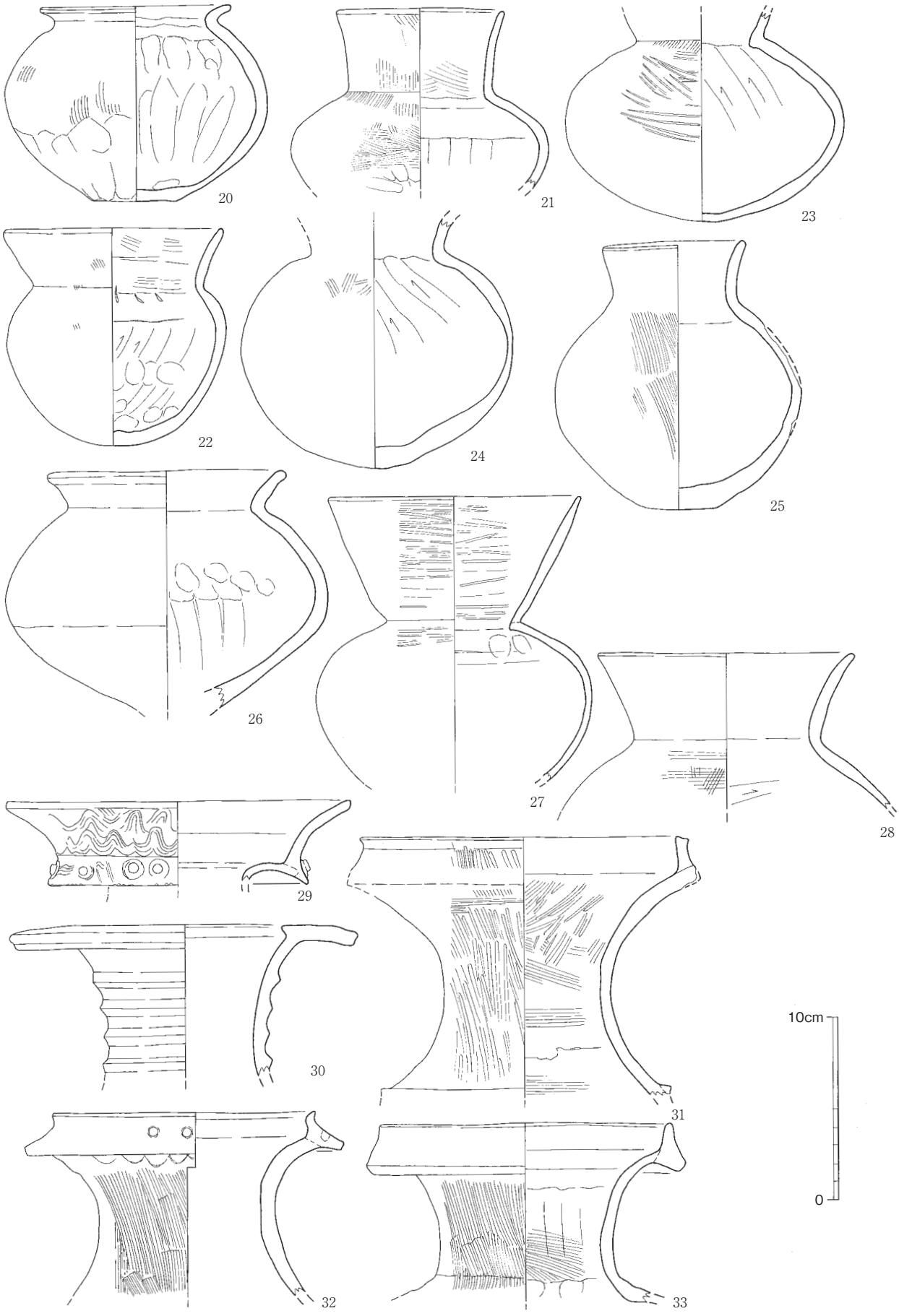


第 142 図　Ⅲ -C 区谷部土層実測図（1/40）

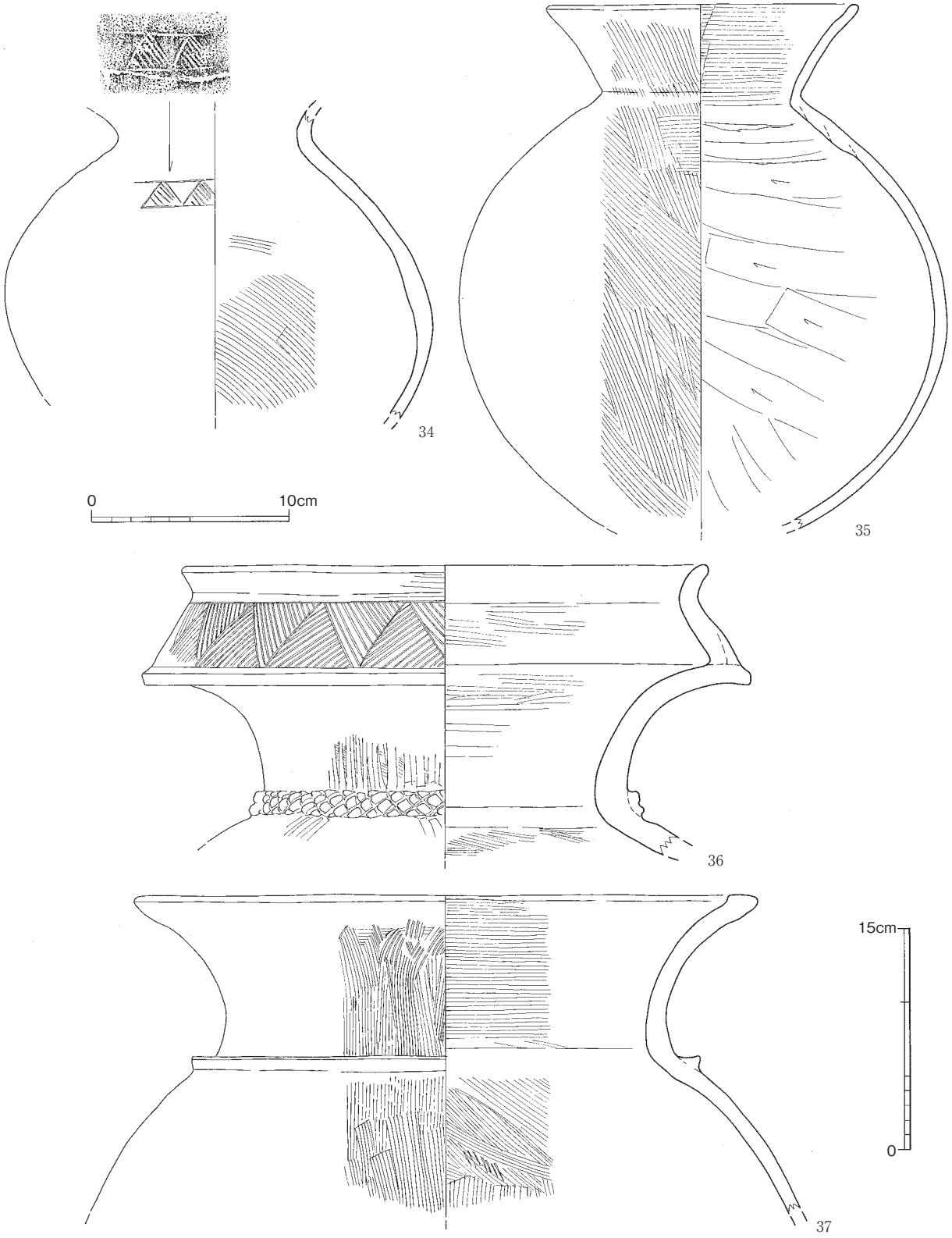
を呈し、外面ミガキ、口縁部内面ヨコナデ、胴部内面ナデを施す。13 は平底を呈し、口縁部が肥厚し帯状を呈する。摩滅するが、口縁部ヨコナデ、胴部内面強いナデアゲが残る。胴部外面に黒斑が見られる。14 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ケズリ後ナデ、内面ナデを施す。15・16 は口縁部ハケメ、胴部外面ハケメ後ナデを施す。15 の胴部内面は工具ヘラ先による成形、16 は上半指頭圧痕、下半ユビナデを施す。17 は口縁部ヨコナデ、胴部上半外面ハケメ後ナデ、他はナデを施す。底部外面に墨痕が見られ、筆書きの痕跡がみられるが、文字かどうかは不明である。18 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ後ナデ、内面工具によるナデを施す。胴部外面に黒斑が見られる。19 ～ 28 は中型の壺である。19 は平底を呈し、内外面共にハケメを施す。20 は口縁部が短く、口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ後ナデ、内面強いユビナデを施す。21 は口縁部ハケメ後ナデ、胴部外面上半ハケメ、下半ケズリ、内面ナデを施す。内面に黒斑が見られる。22 は外面ナデ、口縁部内面ハケメ、胴部内面ケズリ、一部指頭圧痕を施す。23・24 は摩滅が著しいが、口縁部ヨコナデ、胴部内面ナデを施す。23 は胴部外面にヘラ先による工具調整が残る。24 は胴部外面に黒斑が見られる。25 はレンズ状の底部を呈し、口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデを施す。外面に黒斑が見られる。41 の甕と胎土・焼成などが類似して



第 143 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図①（1/3）

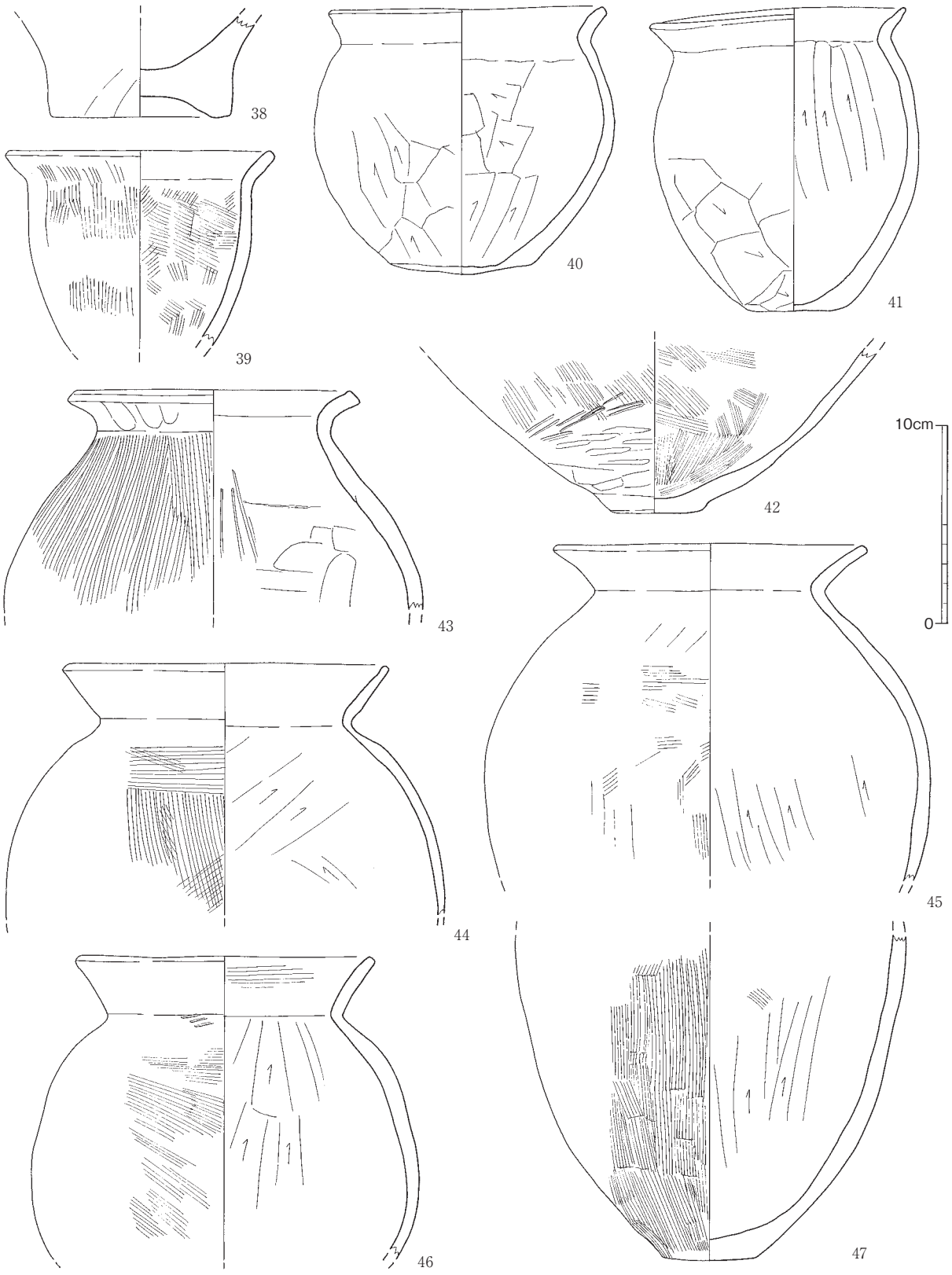


第 144 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図②（1/3）



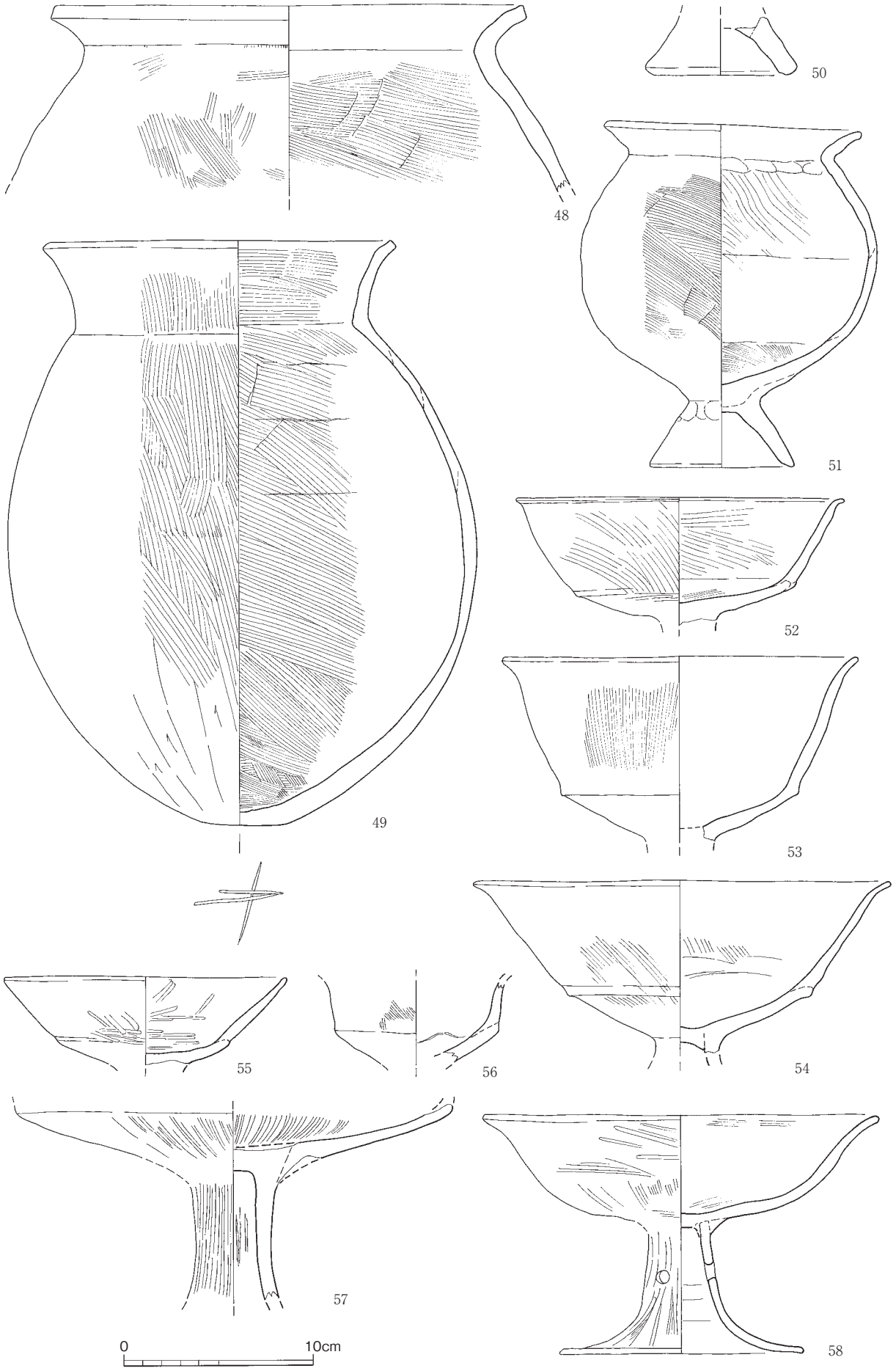
第 145 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図③（1/3、37 は 1/4）

おり、同一工人が作成したものである可能性がある。26 は摩滅が著しいが、口縁部ヨコナデ、胴部内面工具によるナデが残る。内外面に黒斑が見られる。27 は口縁部が直線的に長く伸び、摩滅するものの、口縁部にミガキが残る。28 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。外面に黒斑が見られる。29 ～ 37 は壺である。29 は口縁部外面に２段の波状文、屈曲部に１もしくは２個１セットの浮文を付し、その間に波状文を施す。内面に黒斑が見られる。30 は口縁部が鋤

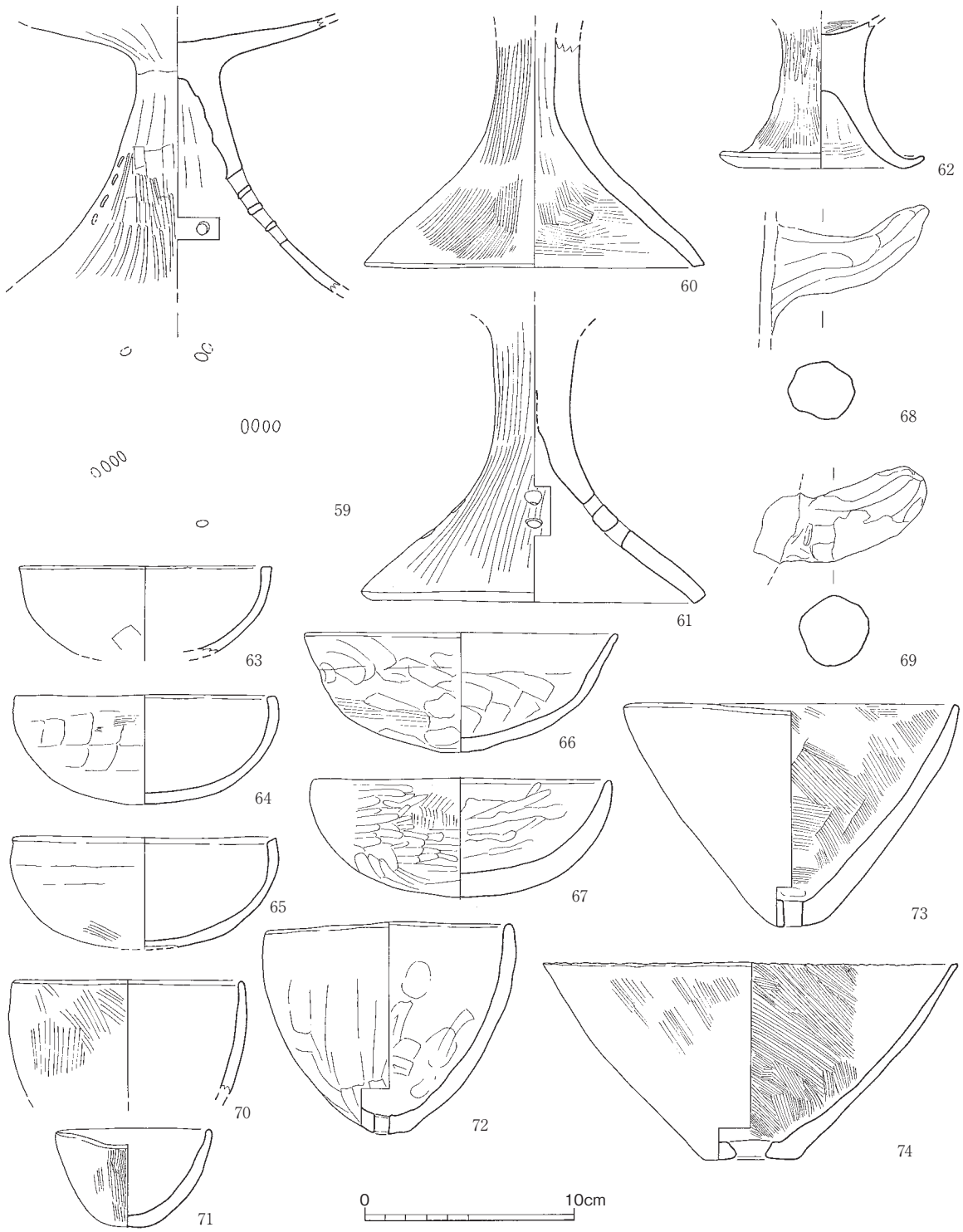


第 146 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図④（1/3）

先状を呈し、頸部には 4 条の突帯が付される。口縁上面に黒斑が見られる。31 は頸部内面ハケメ、他はミガキを施す。口縁屈曲部の剥離面下でハケメが見られ、接合前の粗成形はハケメで行ったものと考えられる。頸部に断面三角形の突帯を付す。32・33 は口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケメを施し、32 は頸部内面ナデ、33 はハケメ後ナデを施す。33 は頸部に剥離痕跡が見られ、突帯が付されていたものと考えられる。34 は摩滅が著しいが、肩部に鋸歯文が見られ、一周するものと考え

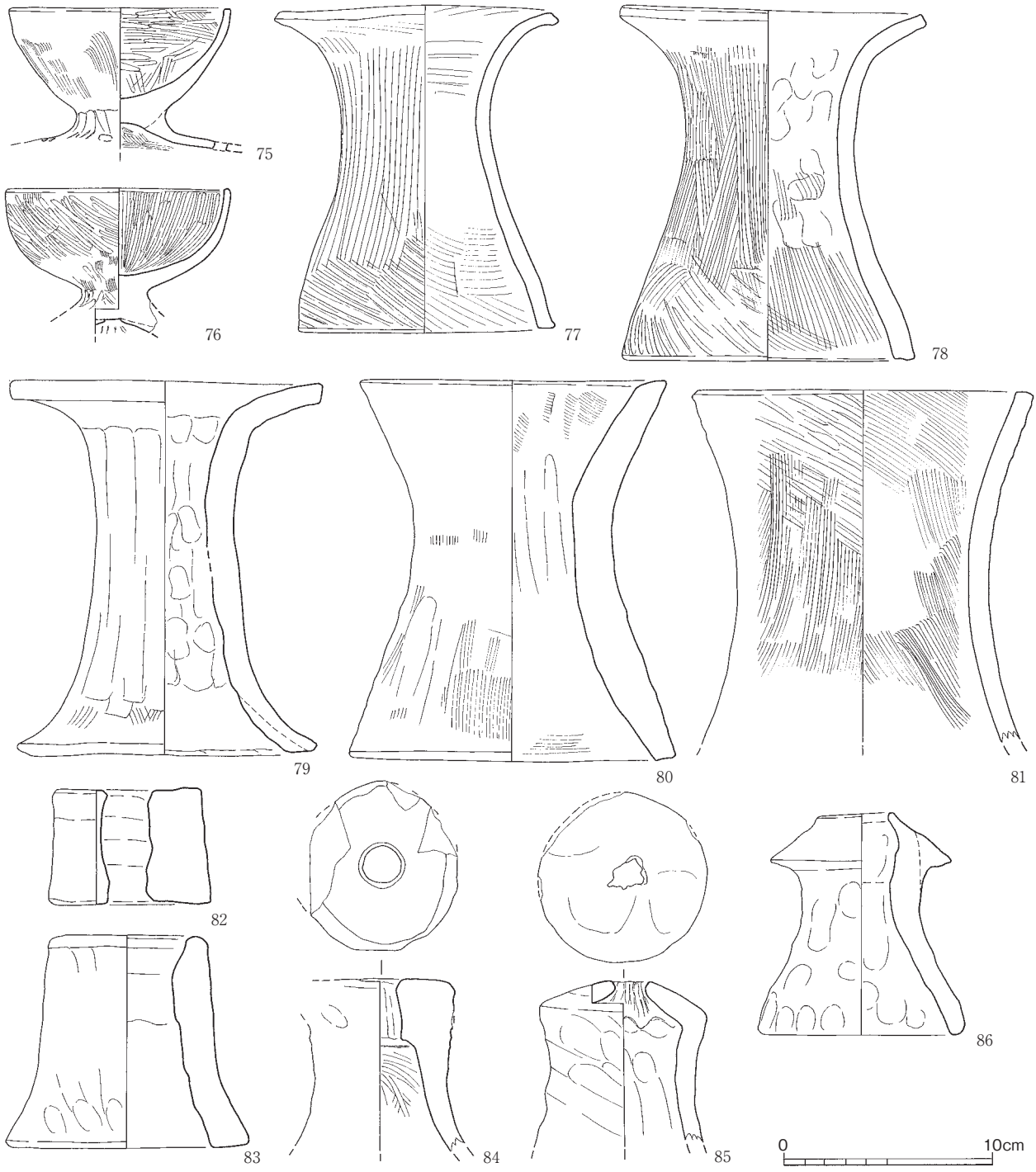


第 147 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図⑤（1/3）



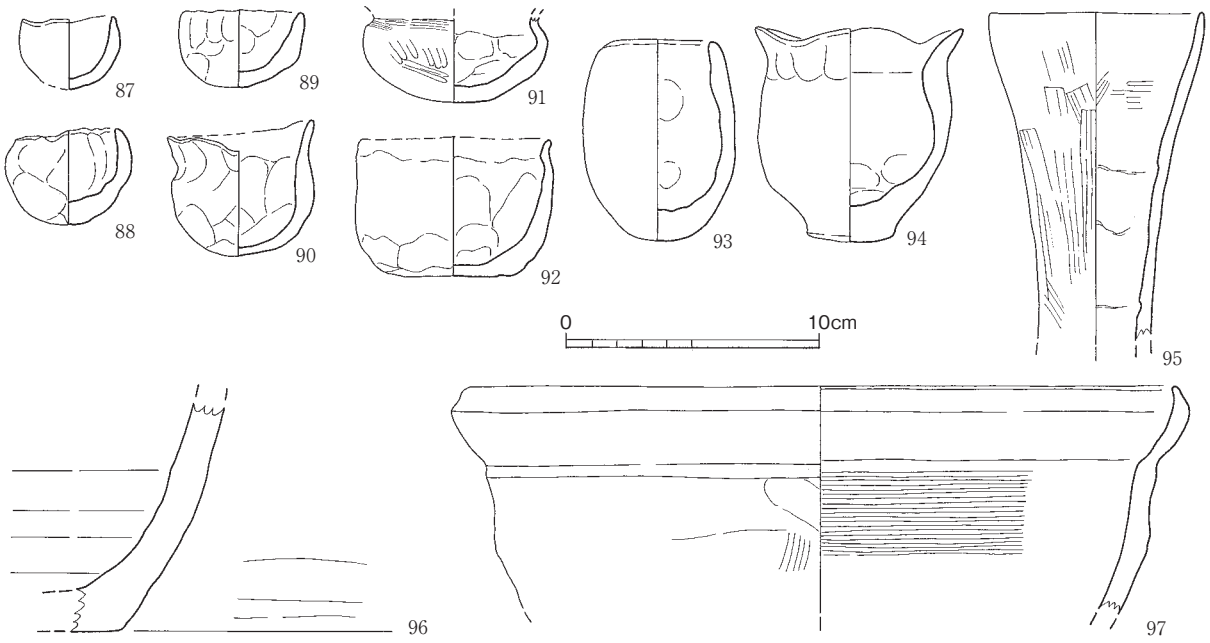
第 148 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図⑥（1/3）

られる。内面にはハケメが残る。35 は口縁部内外面ハケメ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。胴部外面下半に黒斑が見られる。36 は口縁端部が外湾し、外面にミガキ後線刻により連続鋸歯文を施す。頸部に突帯を付し、×字形のキザミを入れる。胴部内面ハケメ、他はミガキを施す。摩滅するが、外面に化粧土、内面に黒塗りを施している可能性がある。37 は口縁端部が内方に突出し、内外面共にハケメを施す。口縁部外面に黒斑が見られる。38 ～ 49 は甕である。38 は上げ底の底部である。摩滅するが、外面にナデが残る。39 ～ 41 は小型の甕である。39 は口縁部ヨコナデ、胴部内外面ハケメを施す。40 は平底で、やや体部が丸い。口縁部ヨコナデ、胴部ケズリを施す。41 は口縁部から胴部外面上半ナデ、下半ケズリ、胴部内面上半ナデアゲ、下半ナデを施す。外面に黒斑



第 149 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図⑦（1/3）

が見られる。25 の壺と胎土・焼成などが類似しており、同一工人が作成したものである可能性がある。42 は底部がやや突出した平底になる。外面タタキ・ハケメ後ミガキ・ケズリ、内面ハケメを施す。外面に黒斑が見られる。43 ～ 46 はやや下膨れ気味になり、概ね口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメを施す。43 は内面ケズリおよび指頭圧痕、44 ～ 46 はケズリを施す。46 は頸部外面にタタキ、口縁部内面にハケメが見られる。43 の外面に黒斑、44・46 の外面に煤が見られる。47 は平底を呈し、外面ハケメ、内面ケズリを施す。48 は口縁部ヨコナデ、胴部ハケメを施す。49 は長胴気味の甕で、胴部外面下半ケズリ、他はハケメを施す。底部外面にヘラ書きが見られる。外面に煤が付着する。50・51 は脚付甕である。50 は脚部のみが遺存しており、ナデを施す。51 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ハケメ中位のみナデ消し、脚部ナデを施す。脚部に被熱が見られる。



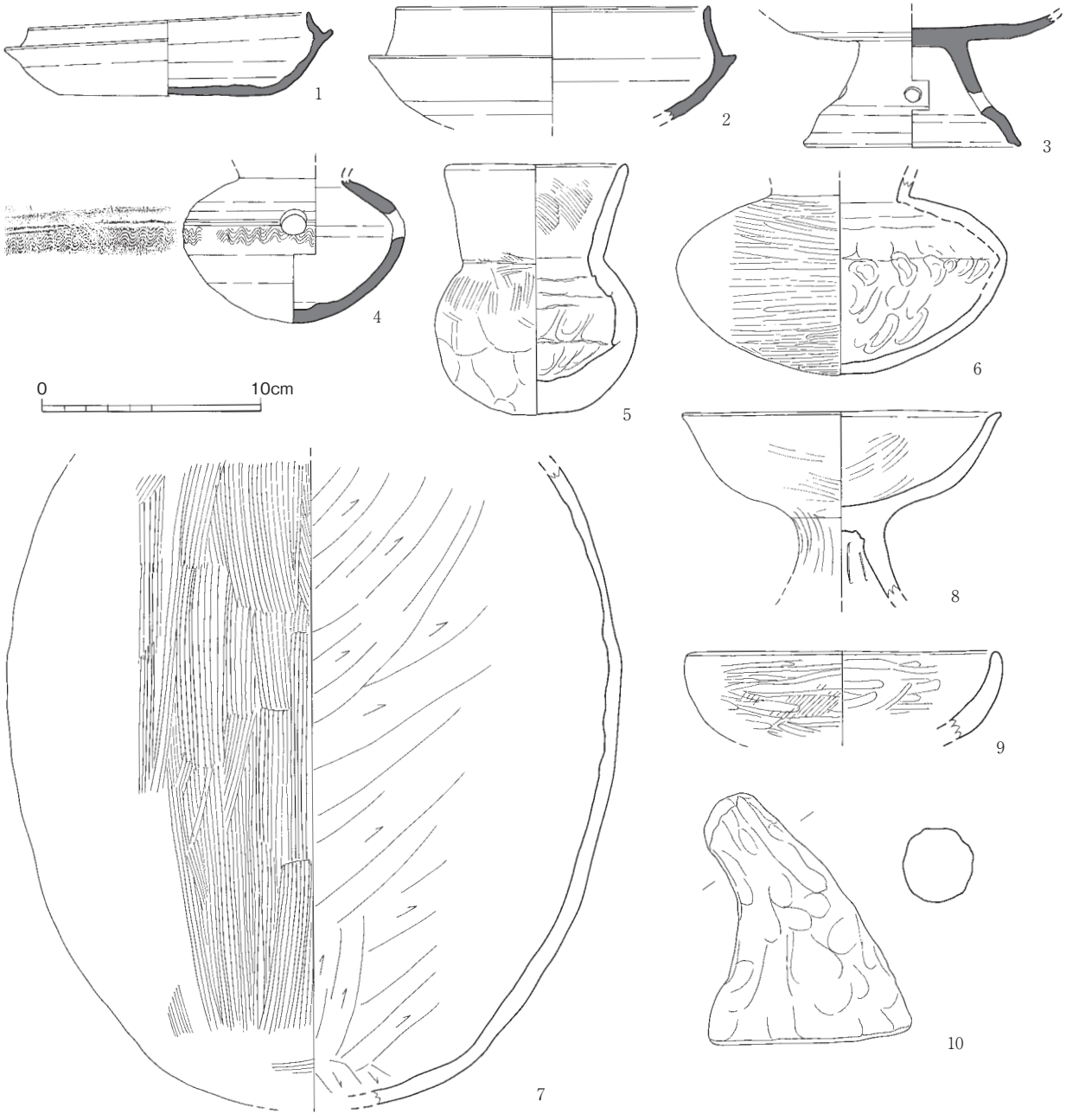
第 150 図　Ⅲ -C 区包含層出土土器実測図⑧（1/3）

52 ～ 62 は高坏である。52 ～ 54 は概ね内外面ハケメを施し、53 の内面はナデを施す。53 は坏部の器高が高く、54 は広く外湾する。55 は内外面ミガキを施し、径が小さい。56 は坏部に段差がつき上部が大きく開くタイプと考えられる。一部ハケメが残るが、内外面ともナデを施す。57 は坏部下半と脚部上半のみが遺存しており、坏部および脚部外面ミガキ、内面絞りを施す。58 は坏部と脚部が剥離しているが、同一個体と考えられる。摩滅するが口縁部内面ハケメ、坏部ミガキ、脚部ケズリが残る。脚部中位に孔が３つ穿たれる。59 は坏部ナデ、脚部外面ミガキ、内面工具ナデを施す。１～４個１セットの孔が５ヶ所に穿たれる。60 は内外面ハケメ後ナデ､頸部内面絞りを施す。外面に黒斑が見られる。61 は外面ミガキ､内面ミガキを施す。２個１セットの孔が２ヶ所残り､４ヶ所に穿たれていたものと考えられる。62 は低脚で外面上半ケズリ後ミガキ、下半ハケメ、内面上半ナデ、下半ハケメを施す。63 ～ 67 は椀である。63 ～ 65 は口縁端部に平坦面が形成され、内外面共にナデを施し、一部ハケメとケズリが残る。66 は外反し、外面指頭圧痕および工具ナデ、内面工具による調整後ナデを施す。67 は口縁部が内湾し、ハケメ後ミガキを施す。68・69 は甑の把手である。ナデにより成形する。70 ～ 74 は鉢である。70・71 は外面ハケメ、内面ナデを施す。72 ～ 73 は底部に孔が穿たれる。72 は内外面共に工具ナデ後一部ナデを施す。73 は外面ナデ、内面ハケメを施し、口縁部に黒斑が見られる。74 は平底を呈し、内外面共にハケメを施す。口縁部がやや波打っており、甕の底部が接合面で剥離したものである可能性がある。外面に黒斑が見られる。75・76 は脚付鉢である。75 は坏部外面ハケメ、頸部外面ケズリ、脚部内面ハケメ、他はミガキを施す。脚と坏の接合面にハケメが見られ、粗成形時のものと考えられる。脚部に孔が２つ残る。76 は脚部内面工具痕、他はミガキを施す。坏部外面に黒斑が見られる。77 ～ 81 は器台である。概ね、内外面ハケメを施すが、77 の外面下位、81 の外面上位にはハケメ前のタタキが残る。頸部内面は指頭圧痕ないしは絞りを施す。79 のみ外面ケズリを施す。81 の外面に黒斑が見られる。82 ～ 86 は支脚である。82 は筒状を呈し、内外面ナデを施す。上縁の一部が欠損しており、１ヶ所が突出していた可能性もある。83 は脚部が広がり、内外面ナデを施す。84 は１ヶ所が突出するもので、上方に径２cm 程の孔を穿つ。外面ナデ、内面ハケメおよびナデを施す。85 は上方が内湾するよう

になり、中央に径 1.5cm の孔が残る。内外面ナデ、天井部内面にシボリを施す。86 は上方を大きく肥厚させ、突出部を作る。内外面共に指頭圧痕を施し、上面に黒斑が見られる。87 ～ 94 はミニチュア土器である。いずれもユビナデで成形するが、91 の外面にミガキ及びハケメが見られる。87 ～ 89・93 は素口縁、他は外湾する口縁を持つ。92・94 は平底を呈する。95 は長頸壺ないしは製塩土器か。外面ハケメ、口縁部内面ハケメ後ナデ、胴部内面ナデを施す。被熱等の痕跡は認められない。96 は陶器の甕である。内外面ナデを施し、内面に灰被りが見られる。97 は土師器の鍋である。摩滅が著しいが、胴部内外面にハケメが残る。外面に煤が付着する。

谷部包含層第 1 層出土遺物（図版 73、第 151・152 図）

１・２は須恵器の坏身である。底部外面回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。１は外面に灰被りが見られる。３は高坏である。坏部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデを

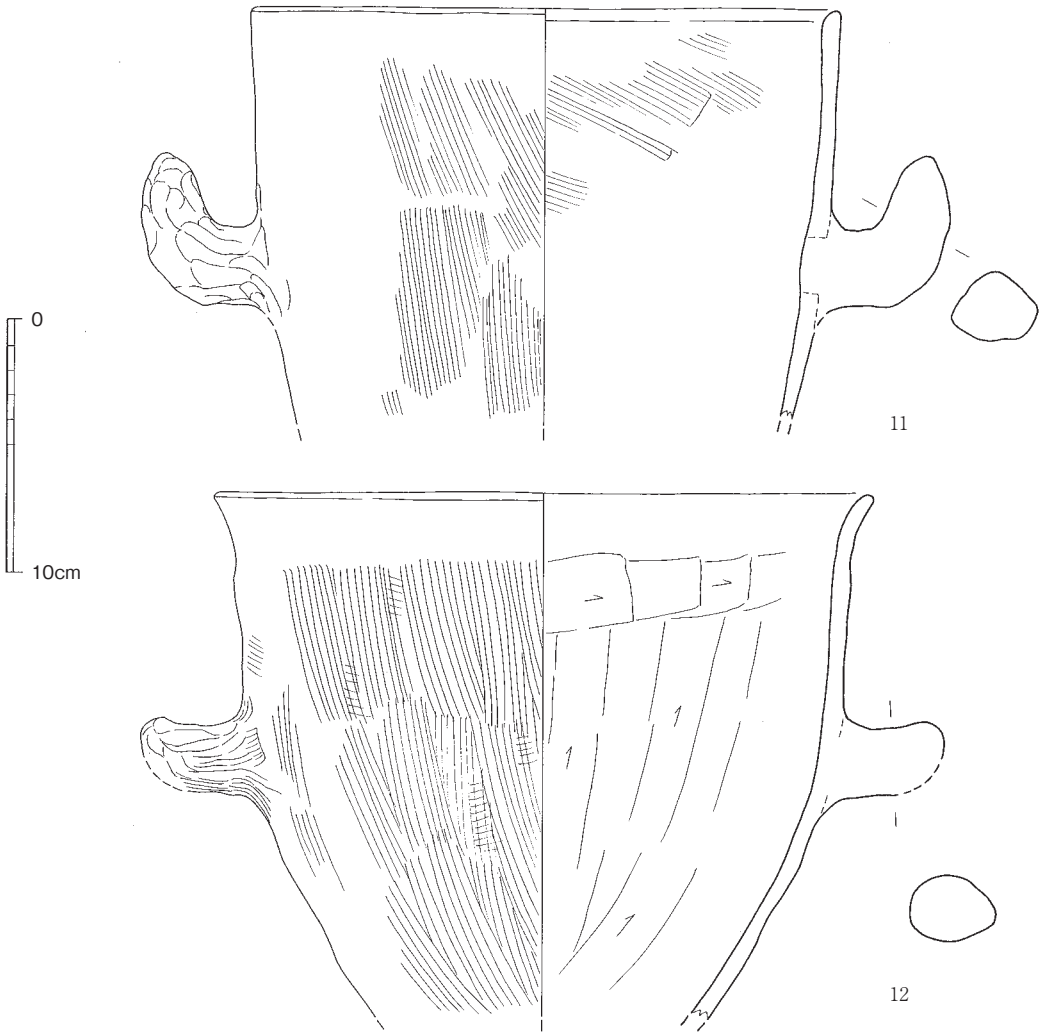


第 151 図　Ⅲ -C 区包含層 1 層出土土器実測図①（1/3）

施す。脚部に孔を４つ穿つ。脚部外面に灰被りが見られる。４は甑である。胴部下半回転ヘラケズリ、底部外面ナデ、他は回転ナデを施す。孔と同じ高さに凹線が巡り、その下位に波状文が施される。外面および底部内面に灰被りが見られる。５は土師器の小型壺である。摩滅するが、口縁部内面ハケメ、胴部外面ハケメおよびナデ、内面指頭圧痕が残る。外面に黒斑が見られる。６は壺である。外面ケズリ後ミガキ、内面ナデを施す。７は甕である。外面ハケメ、内面ケズリを施す。８は高坏である。坏部内外面ミガキ、脚部内外面ケズリを施す。９は椀である。外面ハケメ後ミガキ、内面ミガキを施す。10 は支脚である。先端が曲がる円錐形を呈しユビナデで成形する。外面に黒斑が見られる。11・12 は甑である。11 は把手が上方を向き、口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、胴部内面上半ハケメ、下半ナデを施す。12 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。外面に黒斑が見られる。

谷部包含層第２層出土遺物（図版 73、第 153・154 図）

１は須恵器の蓋である。天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。２は高坏である。坏部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。脚部に孔が穿たれ、４つあったものと考えられる。外面に灰被りが見られる。３は甕である。外面タタキ、一部凹線状に回転ナデおよびカキメ、肩部に波状文、内面ナデを施す。４～６は土師器の小型壺である。概ね外面ハケメ、内面ナデを施し、



第 152 図　Ⅲ -C 区包含層１層出土土器実測図②（1/3）

６は内面に一部ハケメが見られる。５の外面に黒斑、６の内面に煤が見られる。７・８は中型の壺である。７は口縁部ヨコナデ、胴部外面上半ハケメ、下半ナデ、内面ケズリ後ナデを施す。８は胴部内面上半ナデ、下半工具ナデ、底部外面タタキ後ミガキ、他はミガキを施す。外面に黒斑が見られる。９～ 12 は壺である。９は口縁部ヨコナデ、頸部外面ヨコナデ後キザミ、内面ナデ、胴部内面ケズリを施す。10 は内面に薄くハケメが残るが他はヨコナデを施す。11 は摩滅が著しいが、大部分はハケメ、口縁部内面に指頭圧痕が残る。12 は胴部が球形をなし、口縁部外面ハケメ、内面ヨコナデ、胴部上半ハケメ後暗文状のミガキ、下半ミガキ、胴部内面上半内面ナデ、下半ハケメを施す。13・14 は甕である。13 は口縁部および胴部内面ハケメ、胴部外面粗いハケメを施す。外面に黒斑が見られる。14 は山陰系の甕で、剥落が激しいものの、肩部に波状文、胴部外面にハケメが残る。15・16 は高坏である。15 は坏部のみが遺存しており、口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ後ナデ、内面ハケメを施す。16 は脚部のみが遺存しており、外面ハケメ後ナデ、内面下位ナデ、上位ケズリを施す。脚部に４つの孔を穿つ。坏部との接合部分に深さ 0.6 ～ 0.9cm の孔を２つ穿つ。接合をよくするための工夫と考えられる。17 は脚付甕である。口縁部ナデ、胴部外面工具ナデ、内面ケズリ、脚部ナデを施す。外面に黒斑が見られる。18 は器台である。口縁部および脚裾部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ケズリ後ナデを施す。外面に一部ハケメ状の工具痕が残る。19 は鉢ないしは山陰系の甑か。口縁が内湾し、断面三角形の突帯が付される。突帯には径５mm ほどの孔が縦方向に穿たれる。摩滅するが、内外面ともにナデを施すか。20 は椀である。外面ケズリ、内面ナデを施し、底部内面に工具痕が見られる。21 は鉢である。平底を呈し、外面ユビナデ後ナデ、内面板ナデ後ナデを施す。外面に一部ハケメ状の工具痕が見られる。22 はミニチュア土器である。ユビナデで成形する。外面に黒斑が見られる。

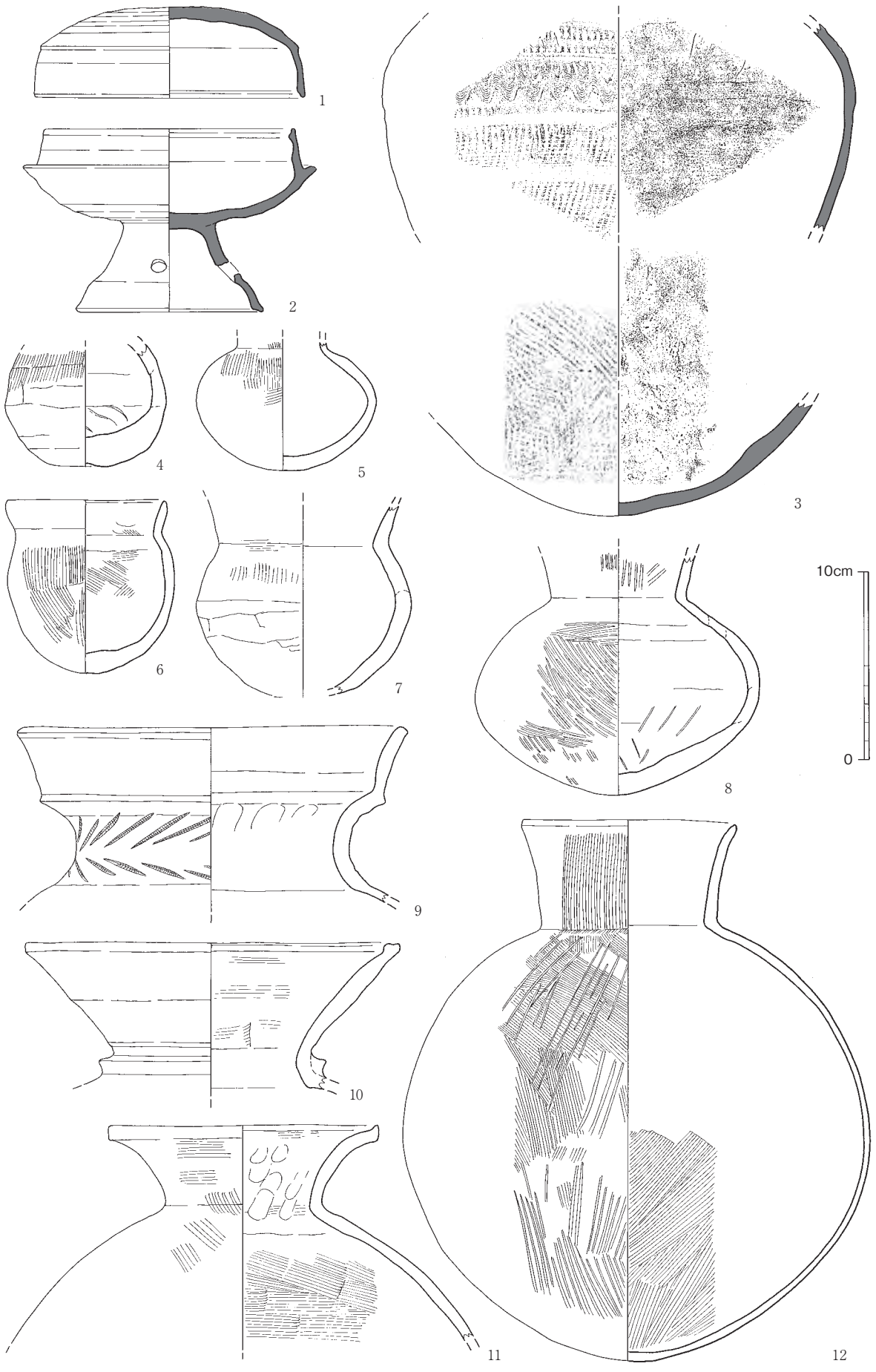
谷部包含層第２・３層出土遺物（図版 73・74、第 155 図）

２層および３層の遺物が混在してしまったものについて別に報告する。

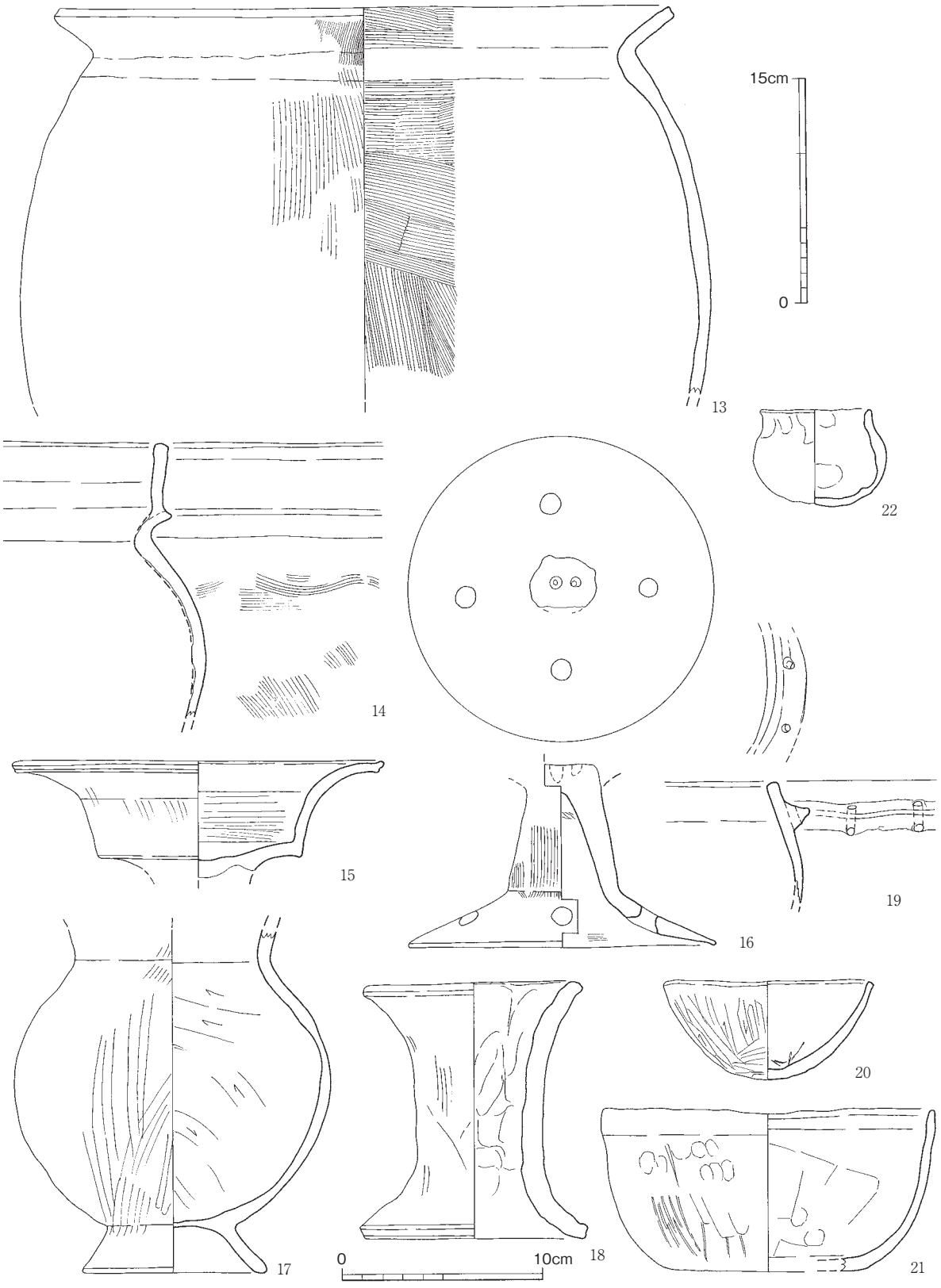
１は土師器の小壺である。外面ミガキ、内面ナデを施す。外面下位に煤が付着する。２～５は甕である。２は体部がやや丸みを帯び、口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。外面に煤が付着する。３は内外面共にハケメ後一部ナデを施す。４・５は小型の甕で、４は内外面ともハケメ、５は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ後ナデ、内面ユビナデを施す。５は外面に黒斑が見られる。６は高坏である。口縁部内面ハケメ後ナデ、他はナデを施す。７は椀である。口縁部ヨコナデ、胴部外面ケズリ後ナデ、内面ナデを施す。口縁部内面に工具痕が見られる。外面に黒斑が見られる。８は甑である。口縁部はほぼ直立し、端部がわずかに外方に突出する。内外面共にハケメを施す。口縁部外面下に黒斑が見られる。９は器台か。器壁が薄く、器形は緩やかに波打つ。内外面共にハケメを施す。10・11 は器台である。10 は口縁部および脚部内面にハケメ、くびれ部内面ケズリ、他はナデを施す。外面下位に黒斑が見られる。11 は上方が大きく抉れるタイプである。外面下位タタキ後ハケメ、他はハケメを施す。

谷部包含層第３層出土遺物（図版 74、第 156 ～ 158 図）

１は須恵器の坏身である。底部外面回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。２～９は土師器ないしは弥生土器の壺である。２・３は共に口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ後ナ

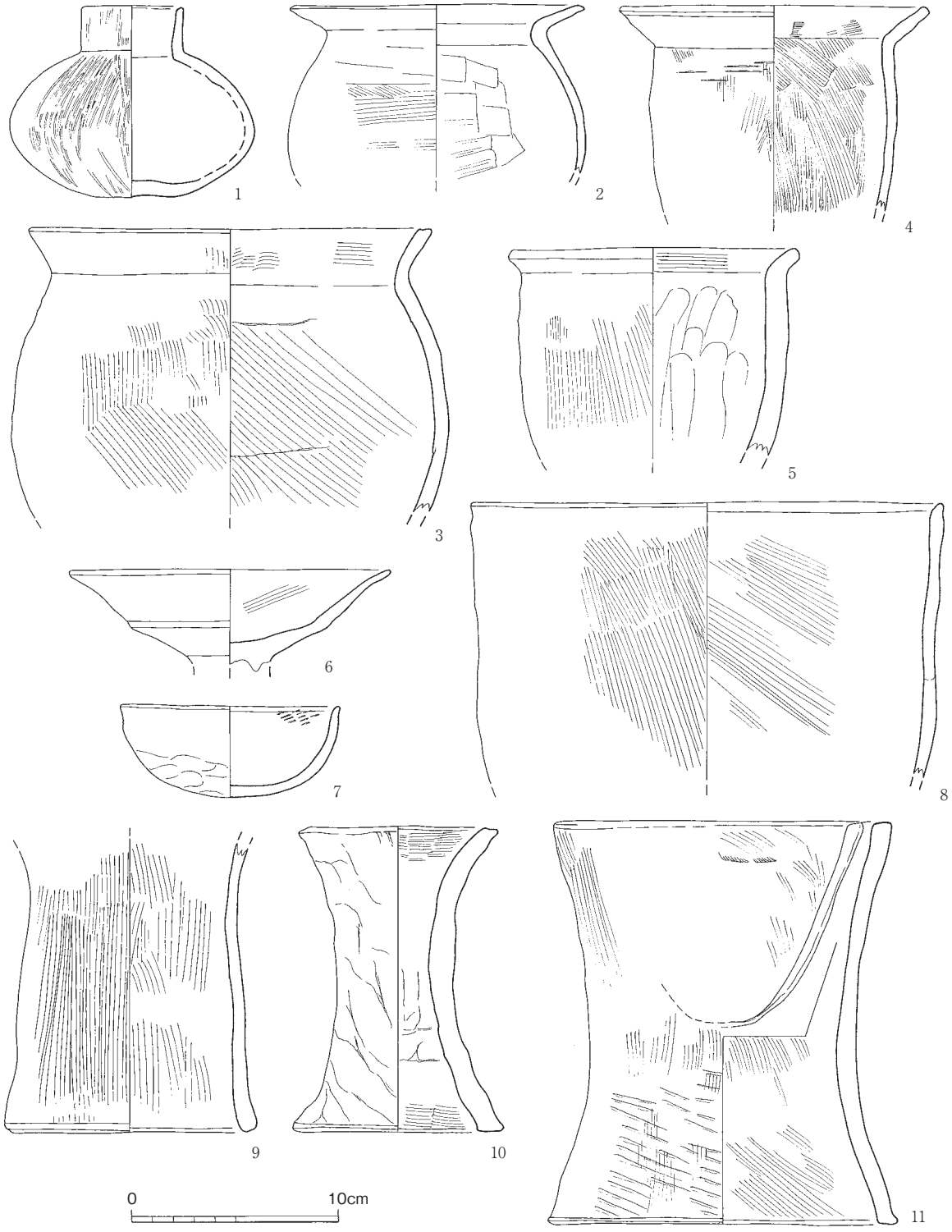


第 153 図　Ⅲ -C 区包含層 2 層出土土器実測図①（1/3）



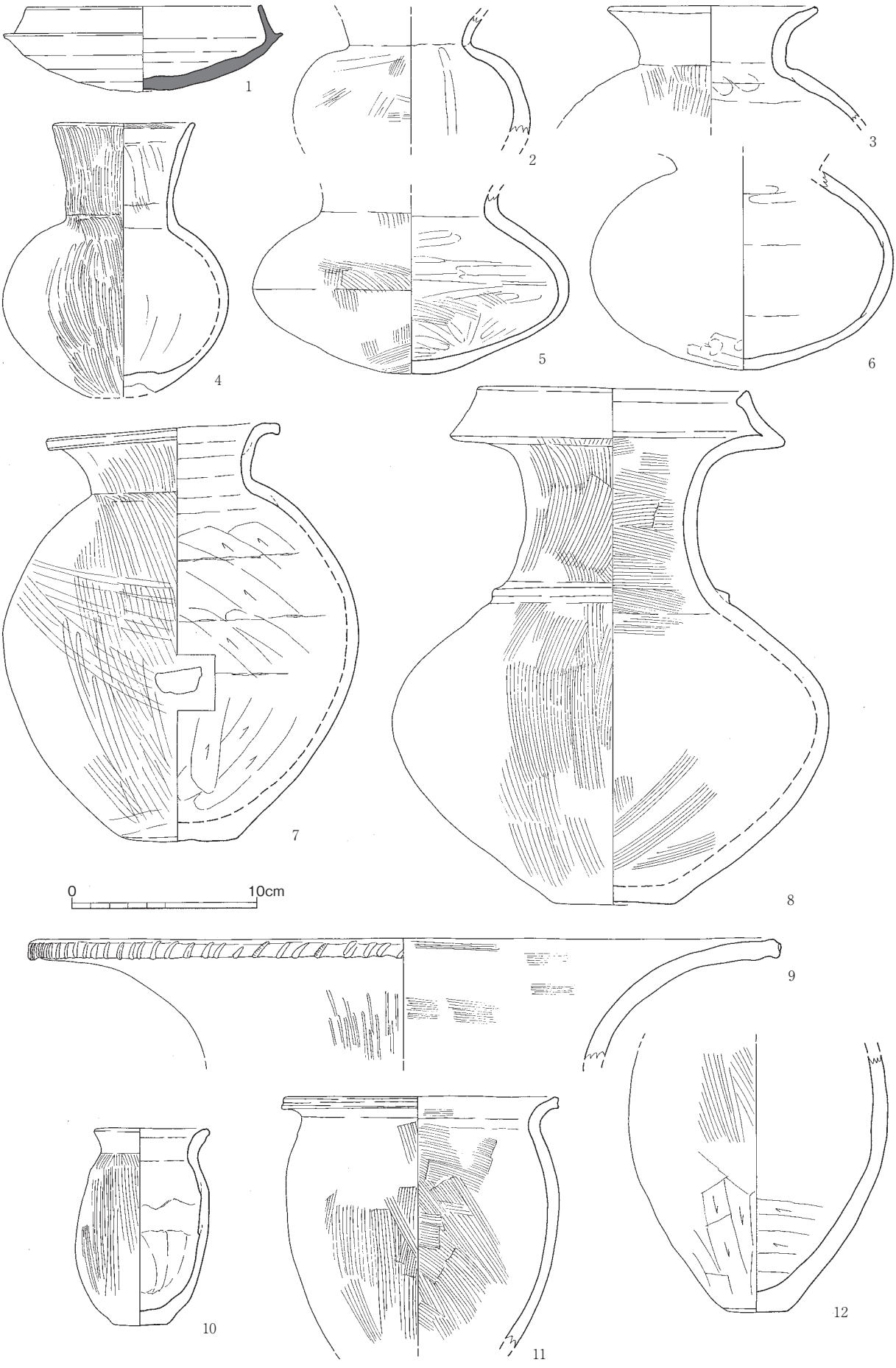
第 154 図　Ⅲ -C 区包含層 2 層出土土器実測図②（1/3、13 は 1/4）

デ、内面ナデを施す。胴部内面に工具痕が見られる。4 は小型の長頸壺で口縁部外面ハケメ後ミガキ、頸部外面ハケメ、胴部外面ミガキ、内面工具ナデを施す。胴部外面に黒斑が見られ、底部付近の器面が焼成中の破裂により剥離する。5 は口縁部から肩部ナデ、胴部外面ハケメ、胴部内面上半ミガキ、下半ハケメ後ミガキを施す。 6 は底部外面ケズリ後ナデ、他はナデを施す。外面に黒斑が見られる。7 は外面ハケメ、口縁部内面ナデ、胴部内面ケズリを施す。胴部中位に 2.5 × 1 cm の台形孔が見られ、

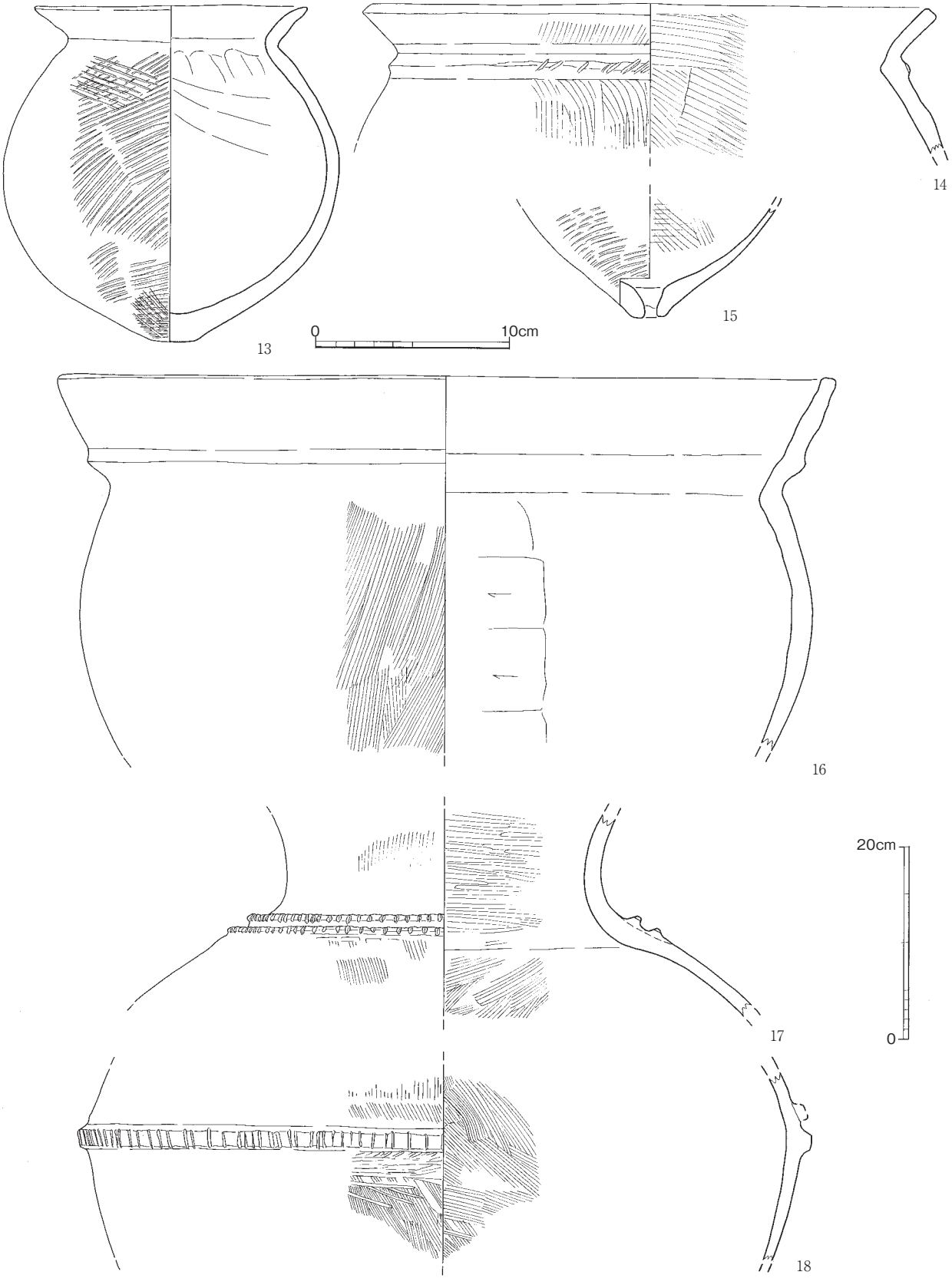


第 155 図　Ⅲ -C 区包含層 2・3 層出土土器実測図（1/3）

穿孔の可能性がある。外面に黒斑および二次被熱痕跡が見られる。8 は平底を呈し、口縁部は内傾する。口縁部ヨコナデ、胴部ハケメを施す。外面に黒斑が見られる。9 は口縁が大きく外湾するもので、外面ミガキ、内面ハケメ、口唇部にキザミを施す。10 ～ 16 は甕である。10 は小型の甕で、外面ハケメ、内面ナデを施す。11 は口縁部ヨコナデ、胴部ハケメを施す。外面に黒斑が見られる。12 は外面上半ハケメ、下半ケズリ、内面ケズリ後ナデを施す。外面に黒斑および煤が見られる。13 は底部が突出し、口縁部ヨコナデ、胴部外面タタキ、内面ナデを施す。外面に広く煤が付着する。14 は内外面ともハケメ調整を行ない、頸部に低い突帯を付した後粗いキザミを施す。15 は外面タ

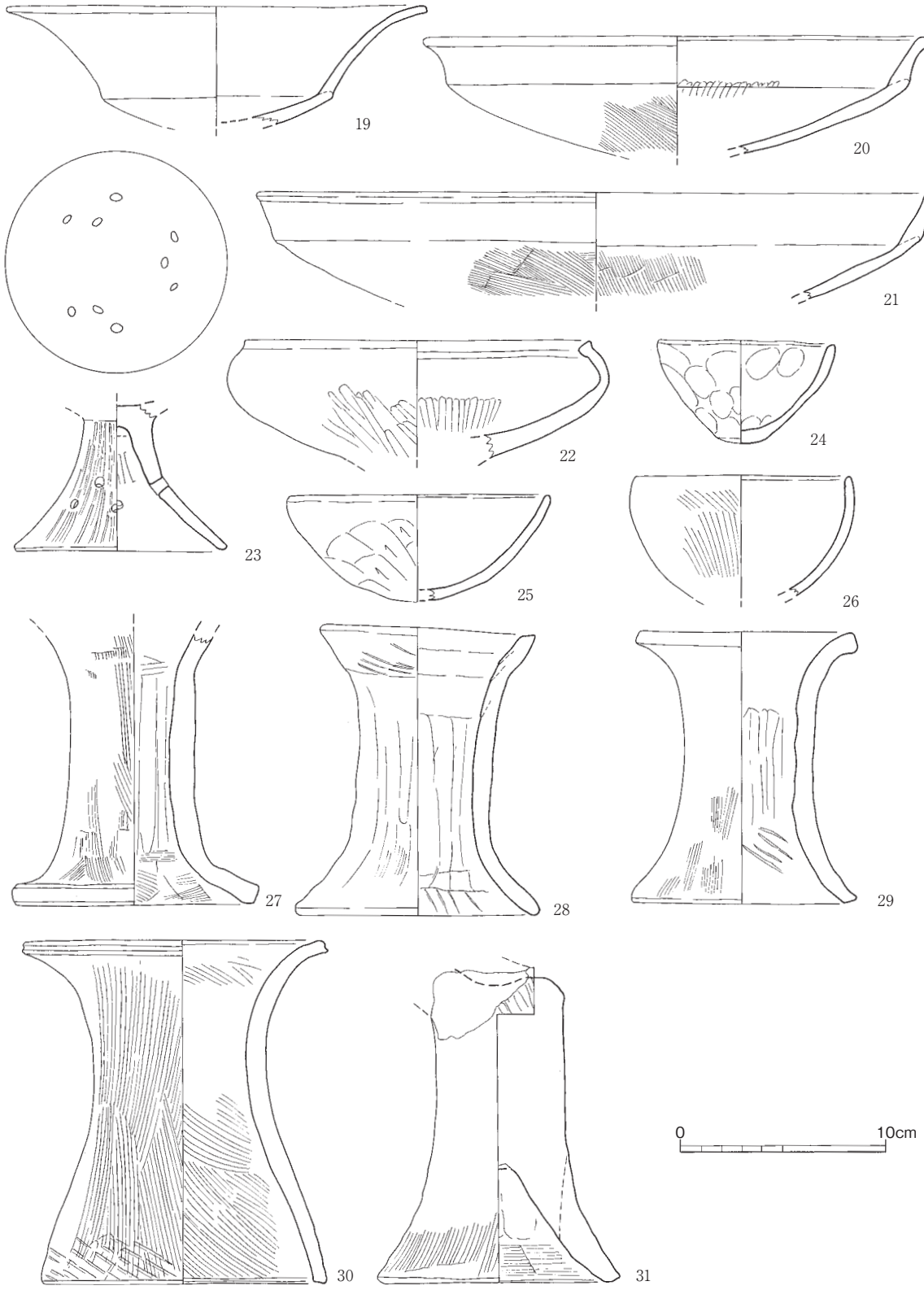


第 156 図　Ⅲ -C 区包含層 3 層出土土器実測図①（1/3）



第 157 図　Ⅲ -C 区包含層 3 層出土土器実測図②（1/3、17・18 は 1/6）

タキ、内面ハケメを施し、底部に径 0.8cm 程の孔を穿つ。外面に黒斑が見られる。16 は口縁部下位を肥厚させた、瀬戸内系の甕か。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ケズリを施す。17・18 は大型の甕である。同一個体と考えられる。17 は口縁部内面ミガキ、他はハケメを施す。肩部に断面台形の突帯を２条付し、端部にキザミを施す。18 は胴部のみが遺存しており、内外面ハケメ



第 158 図　Ⅲ -C 区包含層 3 層出土土器実測図③（1/3）

を施す。２条の突帯のうち１条が遺存し、端部に不均等にキザミを施す。口縁下はヘラにより調整し、突帯接合部にもハケメを施している。19 ～ 23 は高坏である。19 はやや摩滅するが、内外面共にナデを施す。20・21 は口縁端部が外方に突出し、口縁部ヨコナデ、坏部ハケメを施す。22 は口縁部が内湾するもので、端部が肥厚する。口縁部ヨコナデ、坏部ミガキを施す。内外面に黒斑が見られる。23 は外面ミガキ、内面ナデを施し、３個１セットの孔を３ヶ所に穿つ。24 ～ 26 は椀である。24 は内外面ともにナデを施す。25 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデを施す。26

は外面ハケメ、内面ナデを施す。外面に黒斑が見られる。27 ～ 30 は器台である。27 は外面ハケメ後ナデ、脚裾部内面ハケメ、頸部内面絞り、口縁部内面ナデを施す。外面に黒斑が見られる。28・29 は脚裾部外面ハケメ後ナデ、頸部内面絞り、他はナデを施す。28 の口縁部外面にタタキ状の工具痕、29 の脚裾部内面に工具痕が見られる。30 は頸部内面ナデ、他はハケメを施し、脚裾部外面のみタタキが残る。上下とも口唇部をやや凹ませる。31 は支脚である。欠損するが、１方向に突出部があったものと考えられる。脚部ハケメ、他はナデを施す。外面に煤が付着する。

出土遺物から、層ごとに明確に時期は分かれず、やや混入が見られるものの、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃の土器は下層に行くほど比率が高くなる傾向が見られる。また、全体的な出土土器量でも当該時期の遺物が多いことから、概ねこの時期に多量の土器を含んだ土が谷部に堆積したものと考えられる。ただし、谷としては埋没したわけではなく、その後も水は流れる状態で、古墳時代後期、古代、中世にも少量の土器が流れこみ、水を伴った撹拌を受けていたものと考えられる。谷部の土壌で花粉･珪藻分析を行っており、後に周辺地域の環境も踏まえた上で詳述したい。

（7）その他の遺物

ガラス製品（第 159 図１）

１はガラス玉である。緑色を呈する。3009 号土坑出土。

土製品（図版 74、第 159 図２～４）

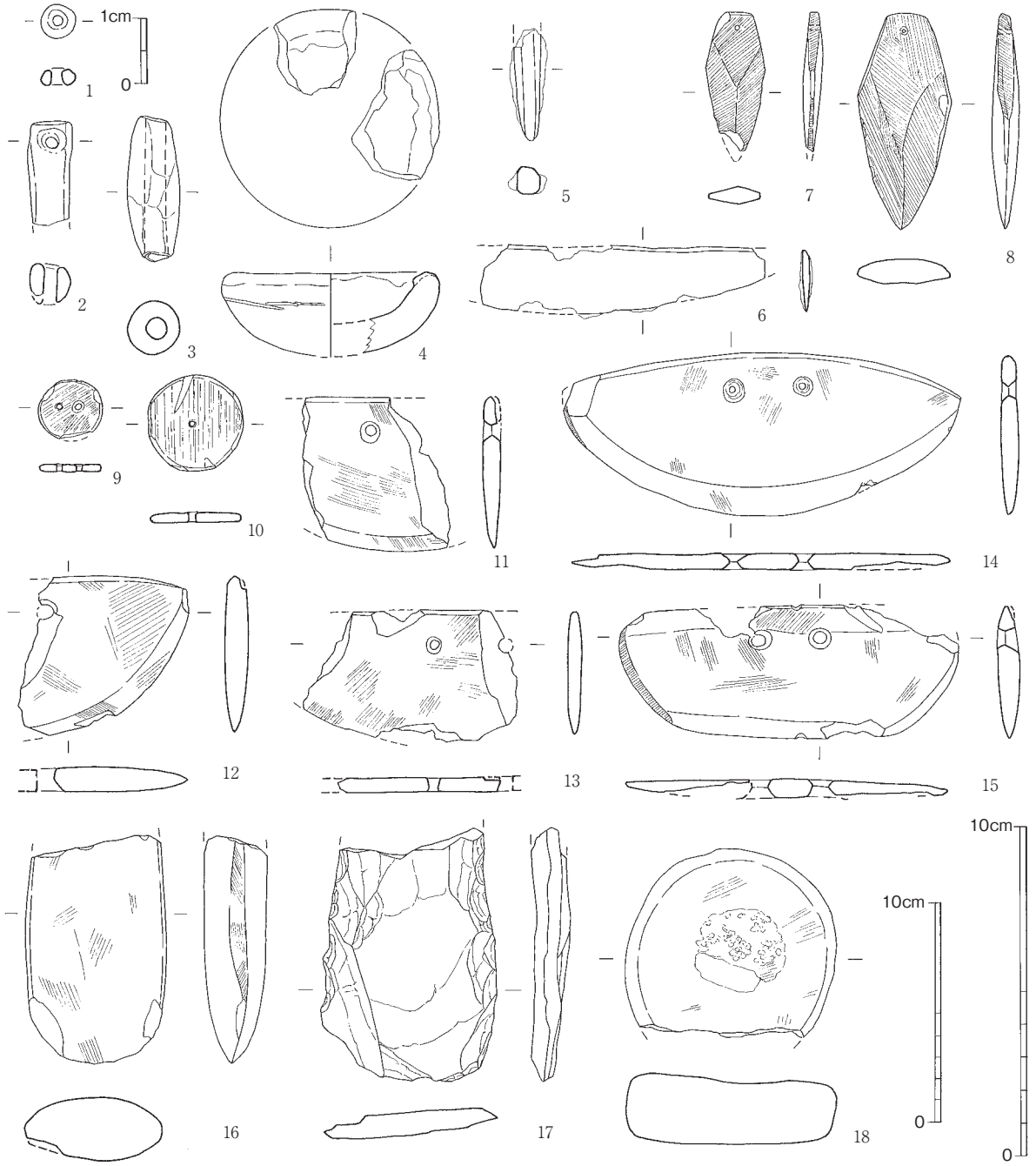
２・３は土錘である。２は短軸方向に孔が穿たれる。表面にわずかに赤色顔料が残る。３は長軸方向に孔が穿たれる。共に 3001 号溝出土で、３は下層出土。４は坩堝である。２片に分かれるが同一個体の可能性が高い。口縁部付近に鉄滓が付着し、内面が被熱のため変色する。外面に工具痕が見られる。3001 号溝出土。

鉄製品（図版 74、第 159 図５・6）

５は鉄鏃か。断面四角形で基部端のみが遺存する。排土中出土。６は刀子である。厚みが薄く、先端部付近のみが遺存する。3001 号溝中層出土。

石製品（図版 74・75、第 159・160 図）

第 159 図７・８は剣形石製品である。共に全面を精緻に研磨し、径１mm ほどの孔が穿たれる。共に緑色片岩製で包含層出土。９・10 は有孔円盤である。９は径 1.5mm の孔が２つ穿たれ、ボタン形を呈す。緑色片岩製。10 は径 1.5mm の孔が中央に穿たれる。滑石製。共に包含層出土。11 ～ 15 は石庖丁である。14 は杏仁形、他は外湾刃半月形である。13 はやや幅が短く、外孔と内孔の差が小さい。14 は幅が大きく、さほど使用していないものと考えられる。15 は刃部の角度が変化しており、使用・再研磨の結果と考えられる。背面に研磨によってわずかな窪みが見られ、紐掛けのためのものか。11・14 は輝緑凝灰岩、12 は凝灰岩、13・15 は片岩製。15 は水漬け遺構、他は包含層出土。16 は石斧である。精緻な研磨が施され、片岩であることもあり研磨痕は不明瞭である。包含層出土。17 は石鍬である。両側面に粗い剥離を両面から施す。使用痕は明確には確認できない。片岩製で、導水施設周辺出土。18 は磨･凹み石である。表面の中央のみ敲打によってわずかに凹む。その他の面ではすりが見られる。凝灰岩製。3001 号溝出土。第 160 図１は磨石である。両側面にすりを施す。凝灰岩系石材製。包含層出土。２～６は砥石である。２は裏面と上下面が剥離し、三面が砥面として残る。３は表裏面を砥面とし、下面は研磨による成形を施す。４は表裏面を砥面と



第 159 図　Ⅲ -C 区出土ガラス・土・鉄・石製品実測図（1/2、1 は 1/1、4・17・18 は 1/3）

し、左右側面は粗い研磨により成形し、筋状の痕跡が見られる。５は表面・左側面を砥面とし、右側面は研磨による成形を施す。６は表面のみを砥面とする。２・３は凝灰岩製、４は片岩製、５は細粒砂岩製、６は片岩系石材（片麻岩か）製。全て包含層出土。１～５は持ち砥の仕上げ砥、６は置き砥の仕上げ砥と考えられる。７は砥石か。表裏面が平滑となるが､研磨痕はほとんど見えない。石庖丁などに使用される頁岩質砂岩製であり、原石の可能性もある。3001 号溝出土。

木製品

既報告の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅰ』で報告した遺構で出土した木製品も合わせて報告する。遺構の性格や規模・時期等については再掲していない。また、木簡については遺構出土のものも合わせてまとめて報告する。なお、器種の判別については、福岡市経済観光文化局山口穣二氏のご指導

を得た。

遺構（本書報告分）出土木製品（図版 75 ～ 77、第 161 ～ 169 図）

第 161 図 1 は 3004 号土坑出土の羽子板状木製品である。持ち手と考えられる部分は 4 cm ほど細くなる。槌などである可能性もある。

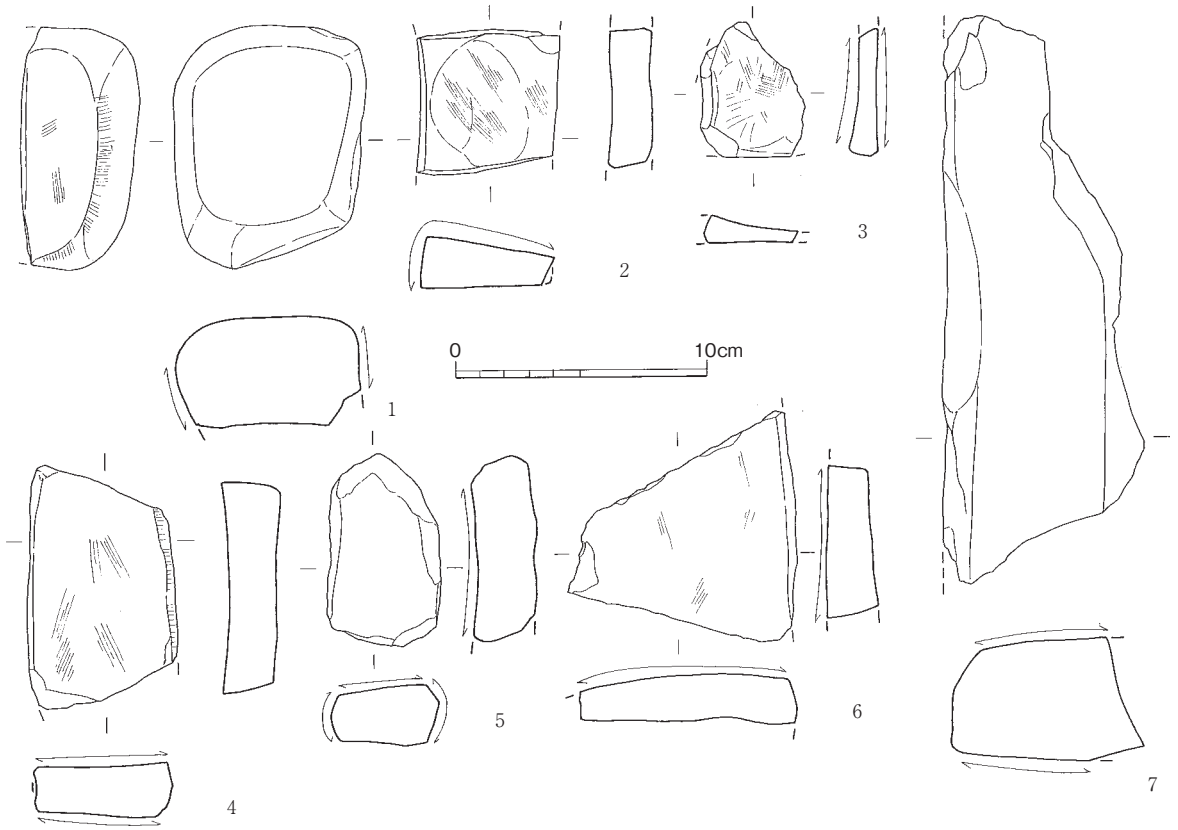
2 は 3006 号土坑床面出土の編錘である。リボン形を呈し、くびれ部分で欠損する。

3 は 3010 号土坑出土の棒状木製品である。断面四角形で下位中央部に径 2 mm の円形圧痕が見られる。

4 ～ 20 は 3014 号土坑出土木製品である。4 は編錘である。中央が棒状になるダンベル形を呈する。5 は編錘か。削り方が他の編錘とは異なっており、違う製品の可能性もある。6 は板状の施設器具材である。細い板状になる。7 は箸か。簪の可能性もある。断面四角形で基部端がやや丸くなる。8 ～ 17 は斎串である。8・10・13・15 は上部端が三角形を呈し、9 は上半部がやや細くなる。13・17 は他の例に比べ幅が広く、大型品である。11・12・16 は 8・10・15 などと同一品である可能性がある。18 は鳥形の腹部のみが遺存するものか。19 は形代か。二辺が直線的になり、馬形になるか。20 は鳥形である。中央部に上方への突出部があるが、全体的な形態は鳥である。いずれからも墨痕は認められなかった。

21 は 3021 号土坑出土の板状の施設器具材である。細い板状を呈し、薄さから札状の物になるか。墨等の痕跡は認められない。

第 162 図 1 ～ 3 は 3001 号土坑出土木製品である。1・2 は井戸枠である。端部近くに杭で留める彫り込みが認められ、その部分のみやや厚くなる。本来は 4 枚あったものと考えられるが、重機

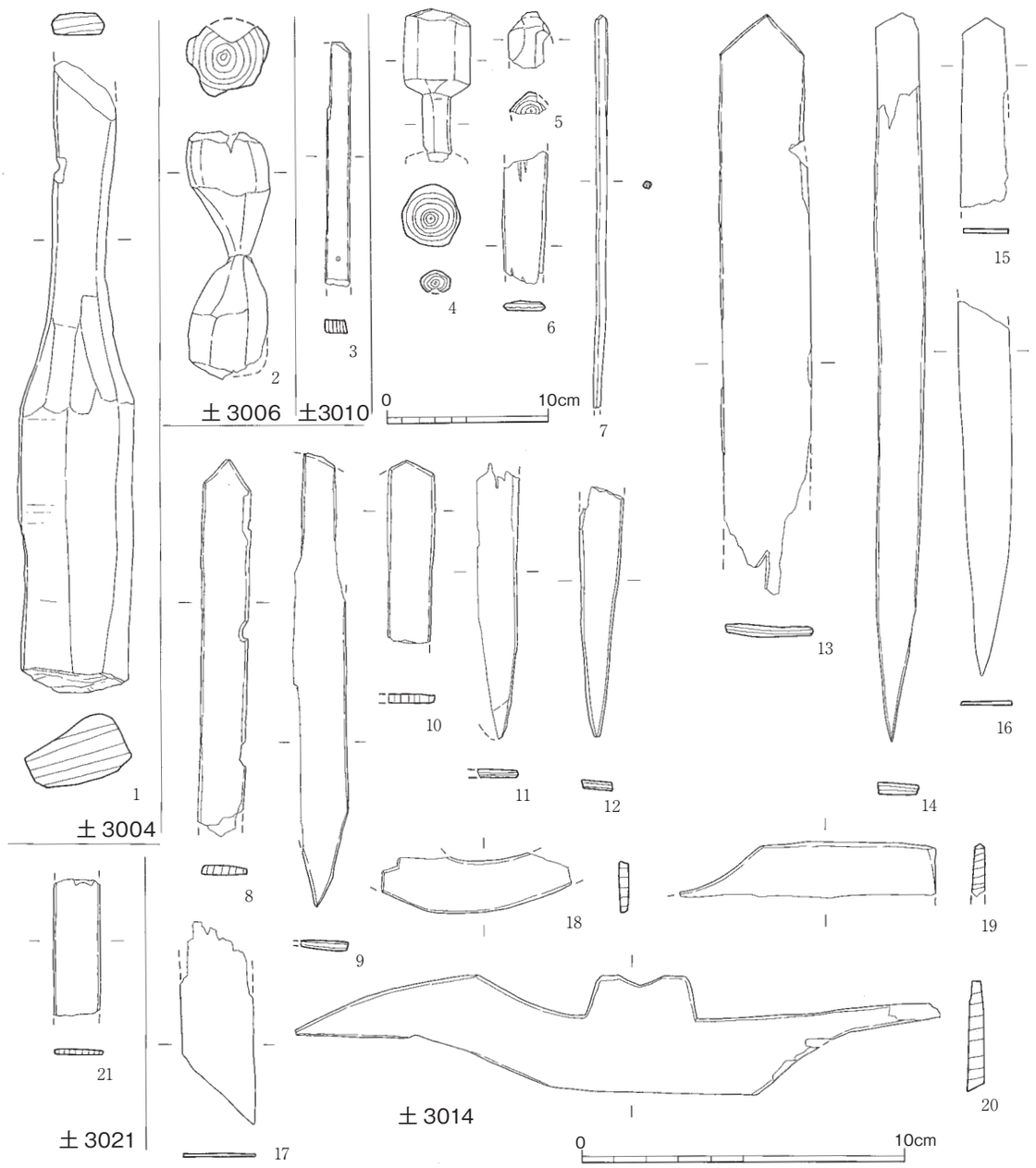


第 160 図　Ⅲ -C 区出土石製品実測図（1/3）

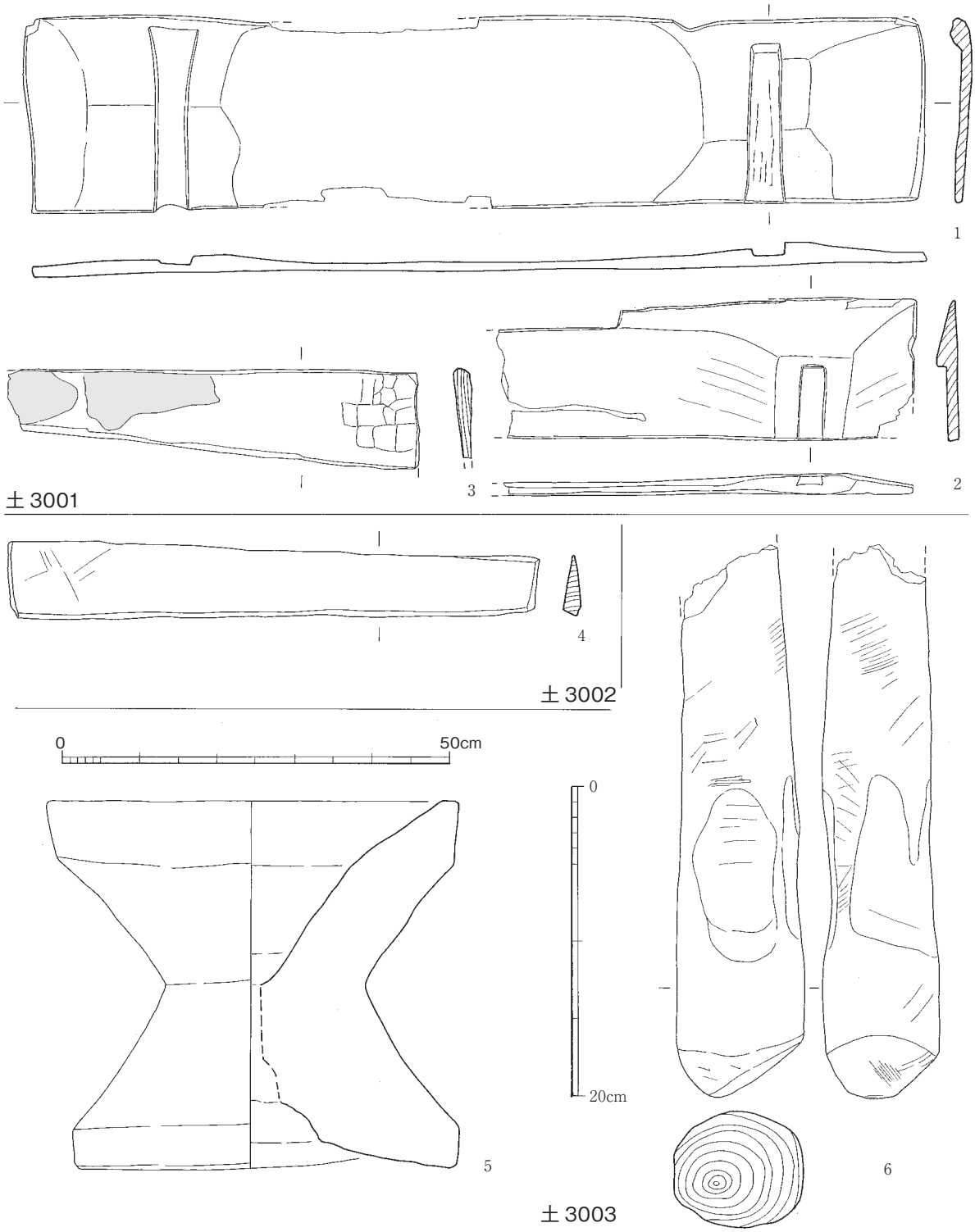
による掘削により、１枚と半分しか残存していない。３は井戸枠か。右端部に細かいケズリの痕跡が見られるが、その他は不明瞭である。左側は一部炭化する。

４は 3002 号土坑出土の板状施設器具材である。わずかにケズリ痕が見られる。床面近くから出土しているが、井戸枠の一部か底板かは不明である。

５・６は 3003 号土坑出土木製品である。５は臼である。中央部が腐食により抜け落ちる。上部内面はやや内湾しており、上下とも端部は帯状に平坦面が形成される。６は杵である。竪杵か。先端部は使用により斜めに磨り減っており、擦過痕が見られる。全体に傷および窪みが認められ、再利用品の可能性がある。



第 161 図　Ⅲ -C 区 3004・3006・3010・3014・3021 号土坑出土木製品実測図（1/4、8 ～ 20 は 1/2）

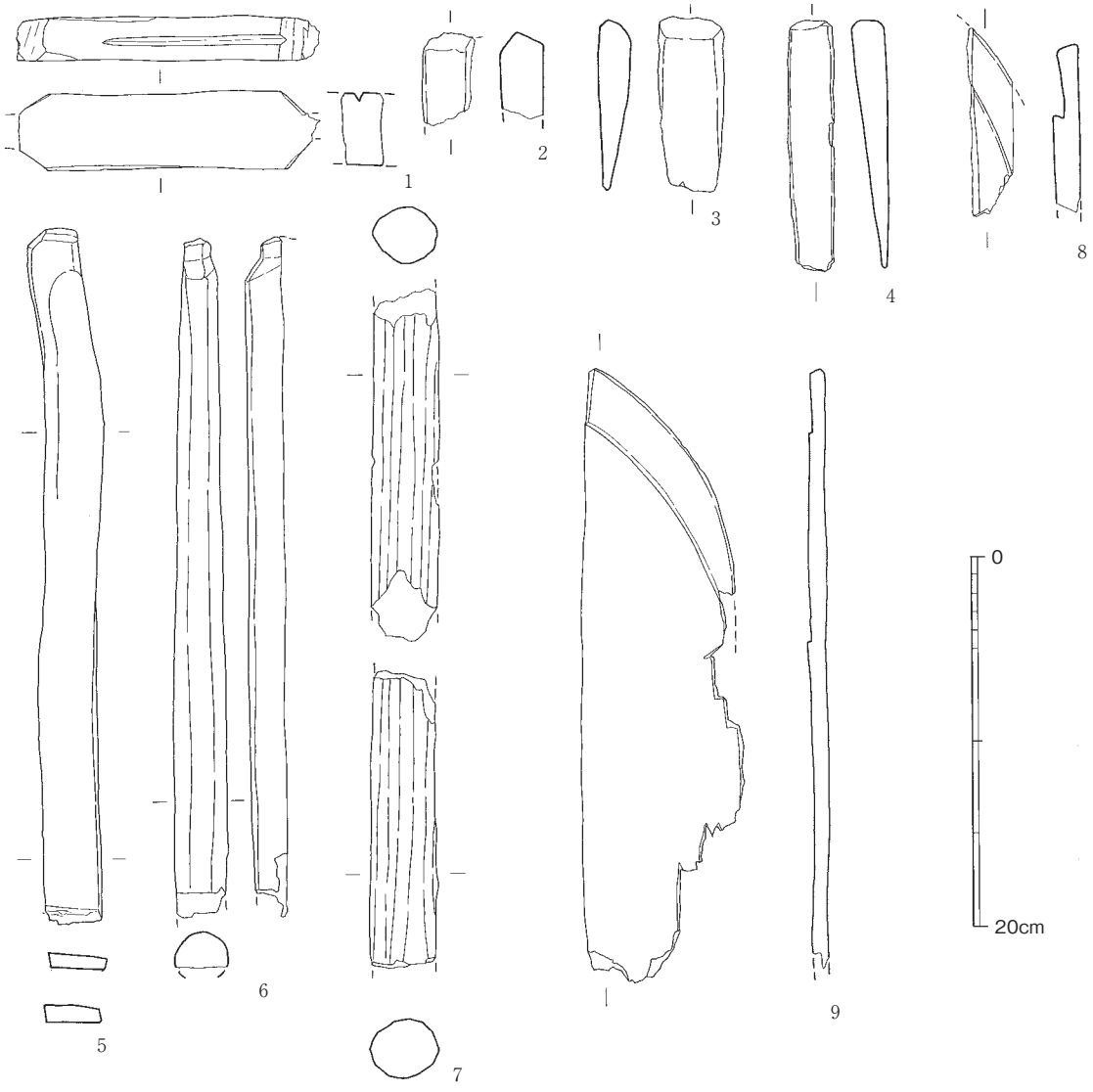


第 162 図　Ⅲ -C 区 3001 ～ 3003 号土坑出土木製品実測図（1/8、6 は 1/4）

第 163 図は取り上げ後にラベルが混入してしまい、3003 号土坑ないしは包含層出土である。1 は板状施設器具材である。側面は長八角形を呈し、上面に断面三角形の直線的な削り痕が見られる。側面は欠損しているものの木目に合わせて均一的に割れており、未製品である可能性もある。2 は板ないしは棒状施設器具材である。楔ないしは棒状の刻り込み部で破損したものか。3・4 は楔である。共に細長く、鍬等の柄との連結部に差し込まれたものであろう。5 は板状施設器具材である。表面を削って平滑に仕上げた完形品である。墨痕等は認められなかった。6・7 は棒状施設器具材である。6 は断面円形で先端が細くなっており、孔などに差し込む農具や織機などになるか。7 は

全面を細かく削っており杭などになるか。８・９は曲げ物板である。共に周縁部に段差がつき蓋になるものか。同一個体である可能性もある。

第164図および165図１～６は3009号土坑出土木製品である。第164図は準構造船の竪板である。１は保管時の不注意により乾燥して大きく形態が変化してしまったため、写真等で復元して作図している。前面が大きく膨らんでおり、膨らんだ部分には長方形の孔が１つ、ホゾが１つ施され、外側の孔には、桜の樹皮を巻いた栓が内面から差し込まれた状態で残っている。くびれ部分には左右に正方形の孔が穿たれ、２cm 程の段差が作られる。段差の下部分には左側に正方形、右側に長方形の孔が穿たれその内側に舟の舷側板を差し込む幅 1cm の溝が切られる。溝の両脇には 18cm 内外ごとに内外面に固定のための孔が穿たれ、左側長方形孔外側には木栓が内面から差し込まれた常態で嵌っている。中央は幅 20cm 程の範囲を削って凹みが作られる。２は１が乾燥しているため明確ではないが①の位置に接合するものと考えられ、孔と溝部分が遺存する。３も①の下方に接合するものと考えられ、溝部分が遺存する。４は桜の樹皮を巻いた栓である。上部の外側に嵌っているものと大きさが一致しており、長方形孔のいずれかに嵌っていたものであろう。全体の大きさおよび他遺跡出土例との比較等は後述する。第 165 図１は杵か。摩滅と腐食および炭化が認められ、擦

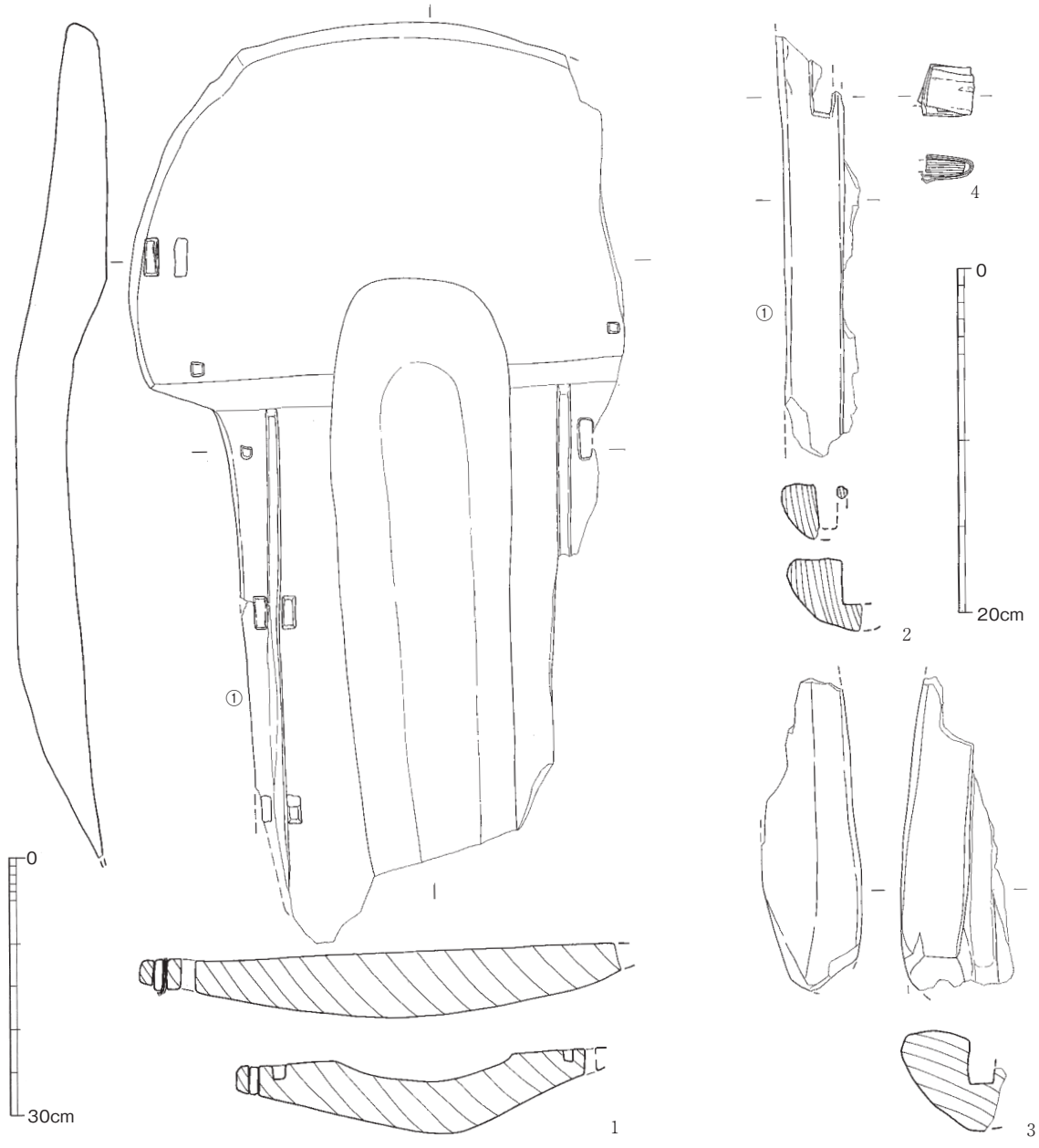


第 163 図　Ⅲ -C 区 3003 号土坑（包含層？）出土木製品実測図（1/4）

過痕等の痕跡は全く認められない。２は杵である。先端が使用により尖っており、基部側は炭化している。表面に一部樹皮が遺存しており、枝ないしは幹をそのまま利用したことがわかる。３は大足ないしは腰当である。平面舟形を呈し中央部がわずかに薄くなる。４は槽である。形態的に舟形の可能性も考えたが、底部に長方形の脚が２ヶ所残存していることから槽としている。側面は斜めに立ち上がり、一木作りである。全体の４割ほどが遺存しているものと考えられ、４脚の長方形容器になるものと考えられる。細片となっていたため、保存処理後に実測している。５は棒状施設器具材、６は板状施設器具材である。小片のため詳細は不明である。

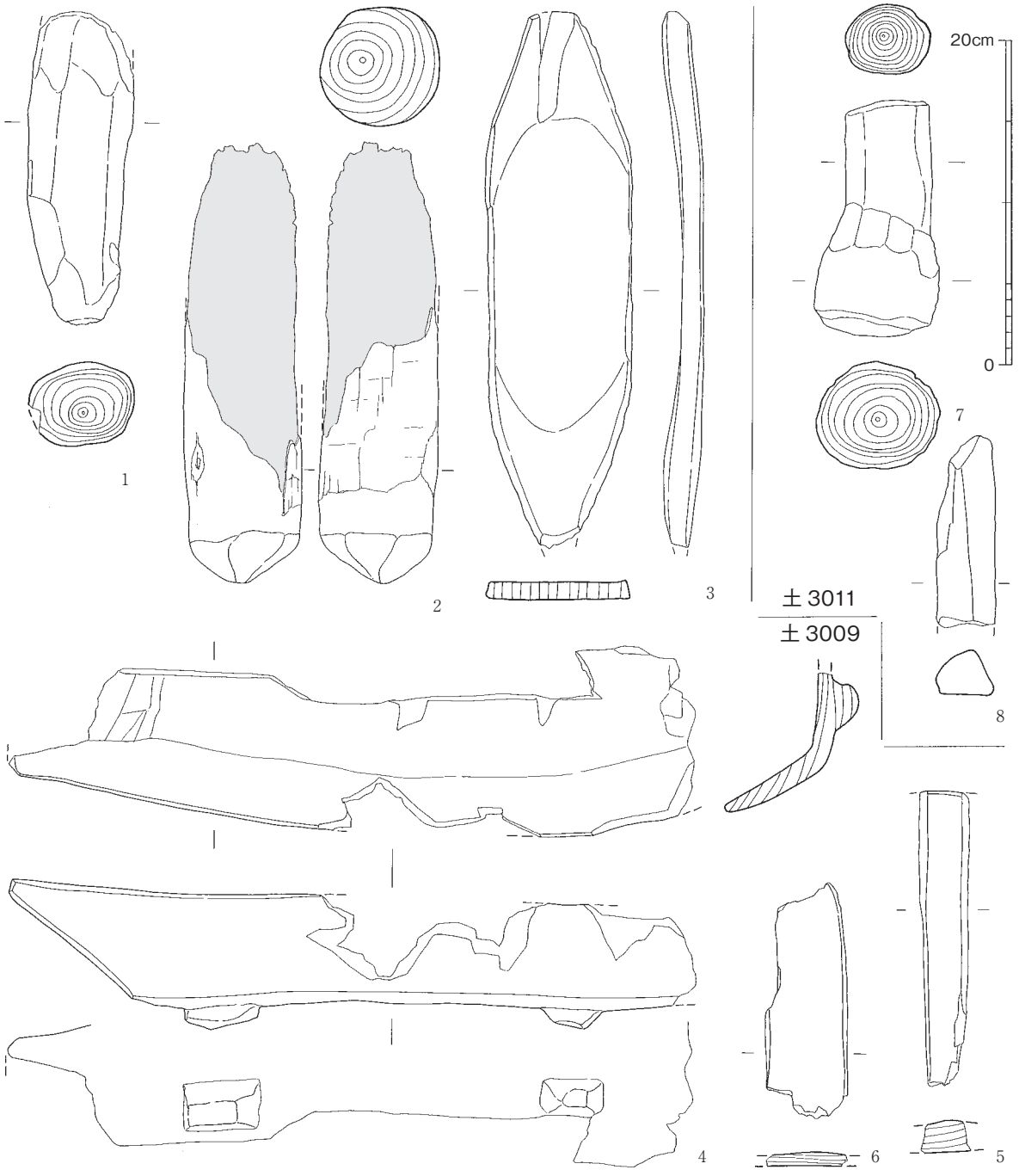
第 165 図７・８は 3011 号土坑出土木製品である。７は当て具である。持ち手部分がわずかに細くなる。下面部分は使用のためか摩滅が著しい。８は棒状施設器具材である。断面偏台形を呈する。

第 166 図は 3001 号溝出土木製品である。１・２は編錘である。共に中央が断面円形のダンベル形を呈する。１はやや膨らみ部分が小さい。３は鞍か。全体的に丁寧な研磨を行っており、中央部

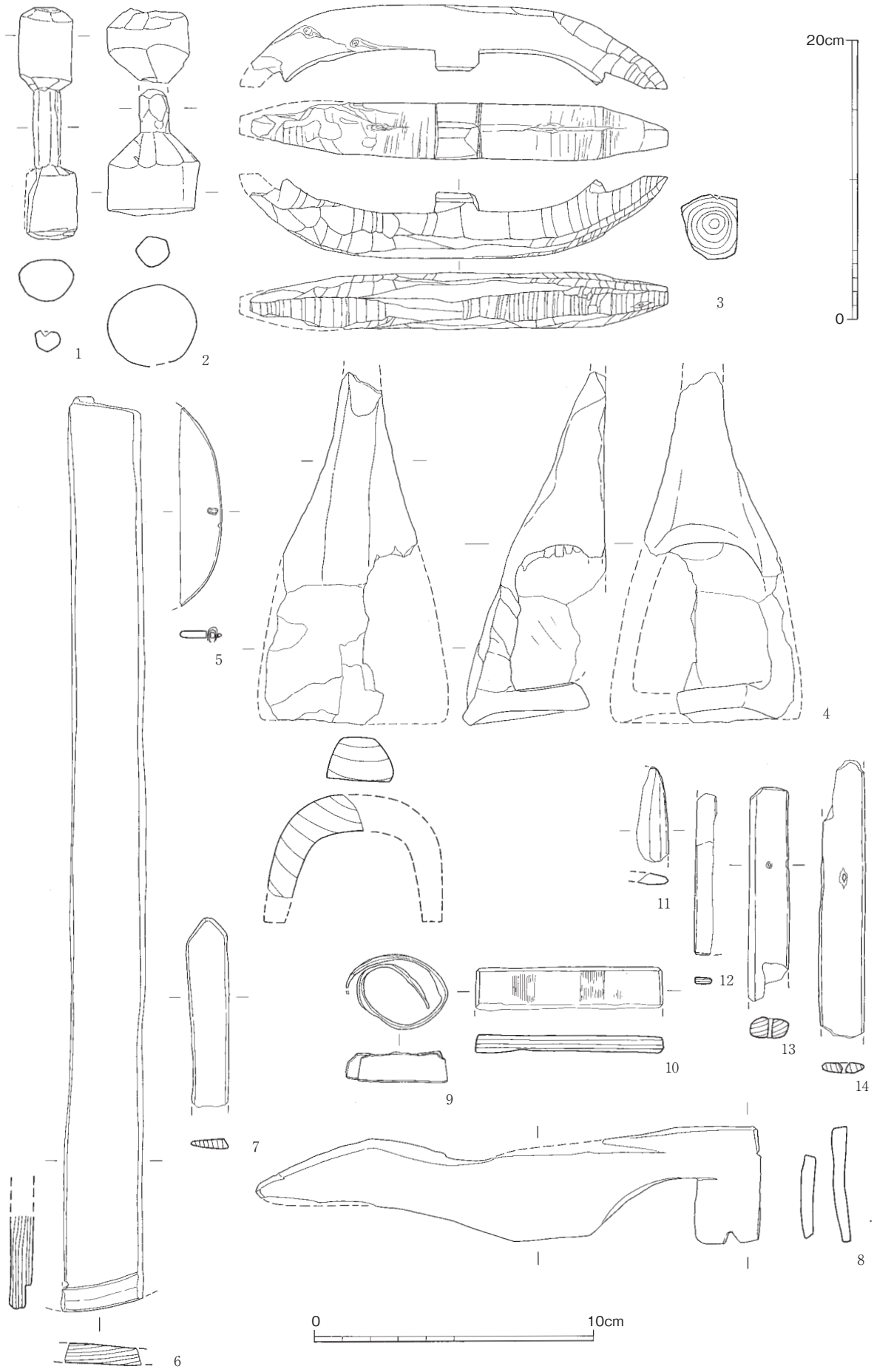


第 164 図　Ⅲ -C 区 3009 号土坑出土木製品実測図（1 は 1/8、2 ～ 4 は 1/4）

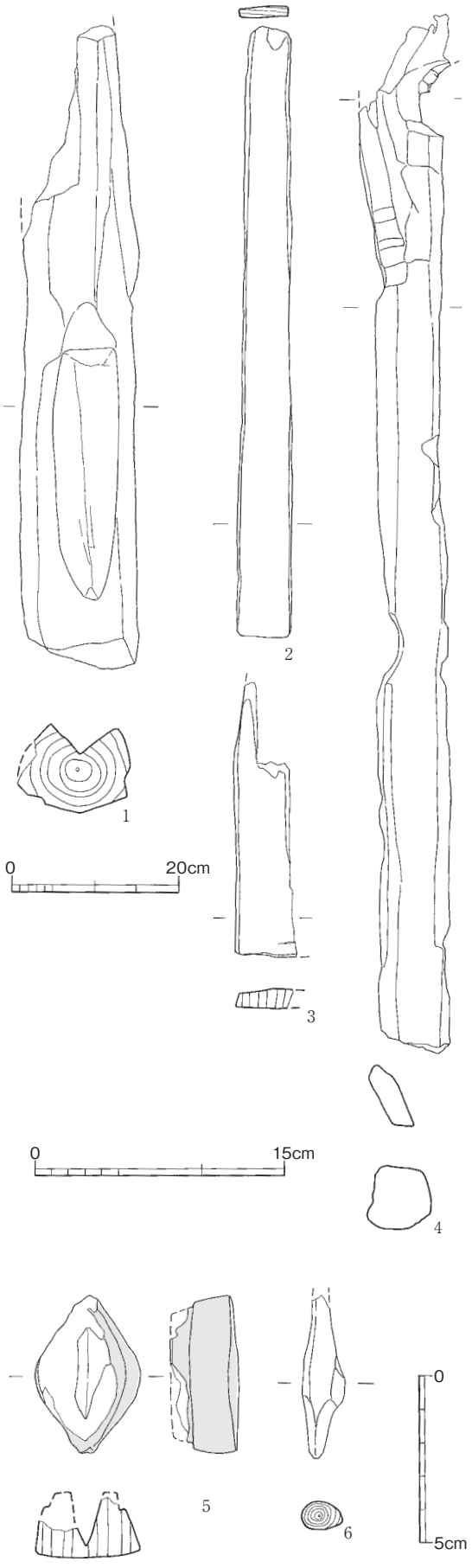
が 1.5cm ほど下位に突出する。他の部材に接合する組み合わせ式の鞍となるか。４は壺鐙である。欠損が著しく、腐食しているため加工痕は認められない。開口部 15cm × 9.5cm、奥行き５～ 8cm ほどと推測される。全体にこげ痕跡が認められる。５は曲げ物蓋である。綴じ孔に樹皮紐が残る。６は曲げ物板である。縁片部に段差が作られ、綴じ孔が半分遺存している。立板の当たり痕跡が見られることから底板か。７は斎串である。上部端は三角形を呈する。８は馬形である。背部を欠損するため、鞍の表現があった可能性もある。９は樹皮紐である。１周半分が遺存する。10 は琴の一部か。短軸方向に擦過痕が認められ、弦を張る部分の端部に当たる可能性がある。11 ～ 14 は板・棒状施設器具材である。11 は側面がわずかに曲がる。12 は細長い札状を呈する。13・14 は中央に孔が穿たれる。13 はやや厚く、農具等の組み合わせの一部である可能性もある。14 は孔がやや大きく、埋没環境により節部分などが抜けたものである可能性もある。



第 165 図　Ⅲ -C 区 3009・3011 号土坑出土木製品実測図（1/4）



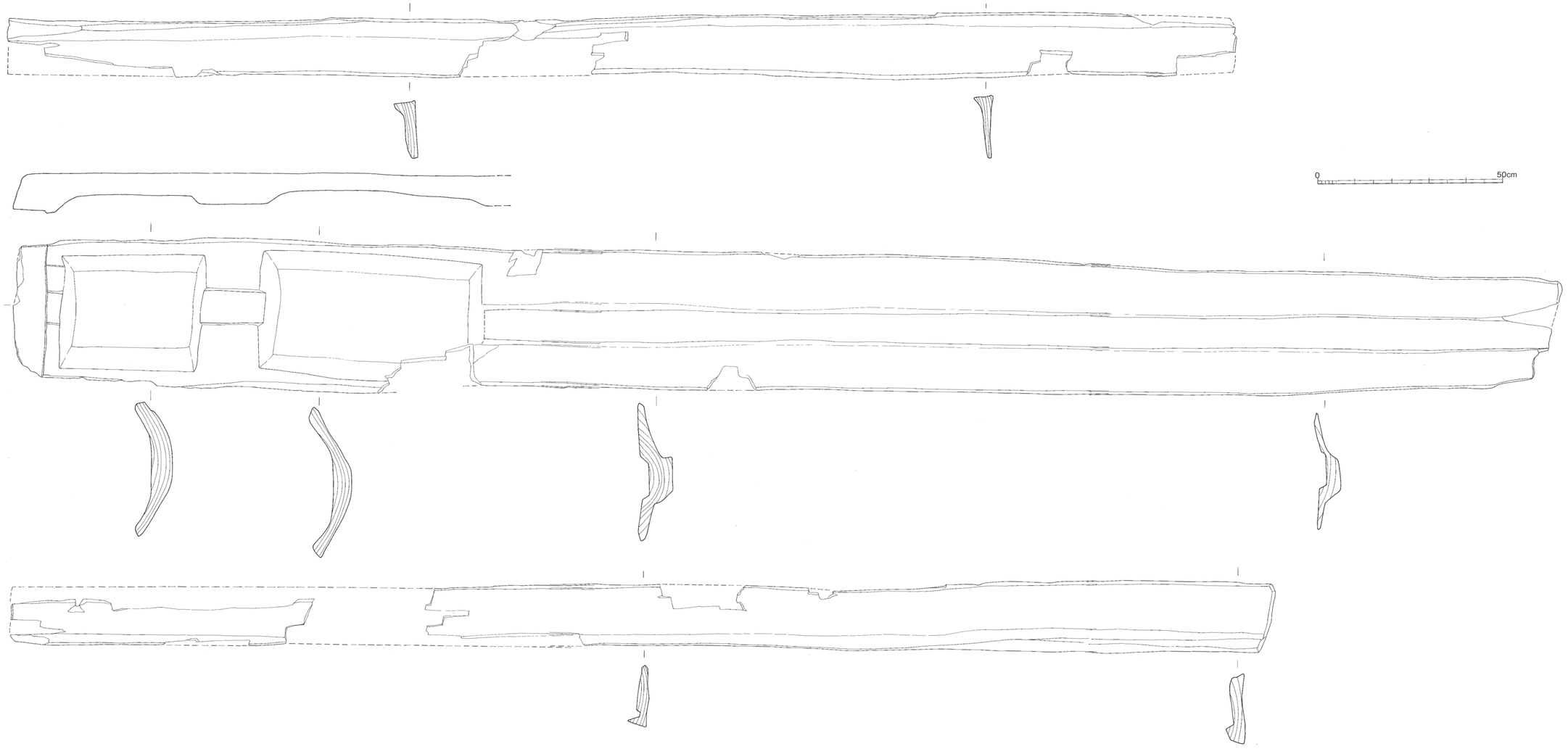
第 166 図　Ⅲ -C 区 3001 号溝出土木製品実測図（1/4、7・8 は 1/2）



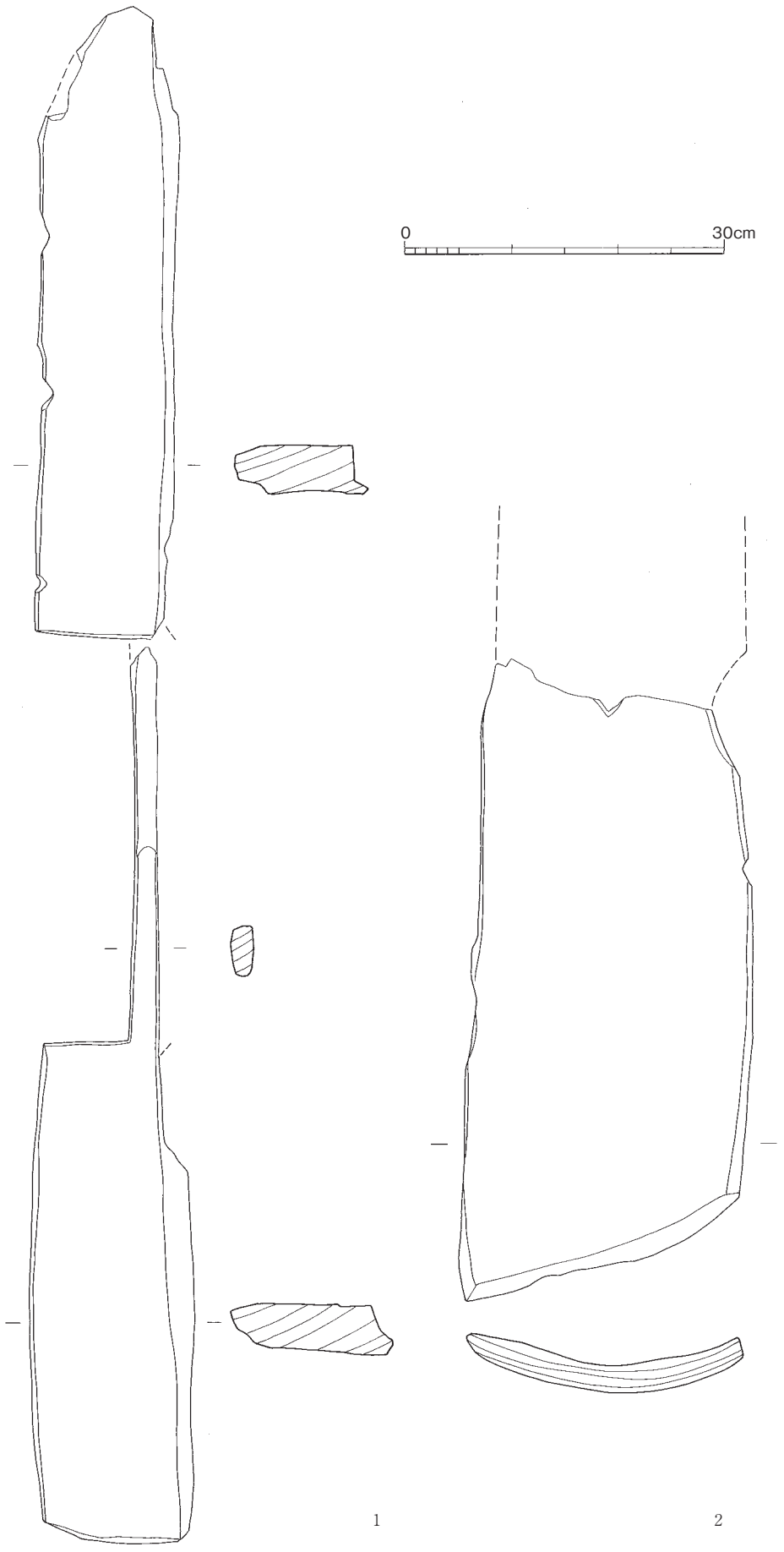
第 167 図　Ⅲ -C 区水漬け遺構出土木製品実測図
（1 は 1/8、2 ～ 4 は 1/4、5・6 は 1/2）

第 167 図は水漬け遺構出土木製品である。1 は部材である。柱状の木の一部分に 30cm × 8 cm、深さ 4 cm の断面 V 字形の刳り込みを施す。他の部材が当たる場所など何らかの組み合わせ部材と想定される。2・3 は板状施設器具材である。2 は 30cm 以上の細長い板で、壁や床材などが考えられる。4 は棒状施設器具材である。先端部が弧状に抉れており、柄の可能性が高い。一部木質や土壌の影響のためか抉りが見られる。5 は鞘先である。下部は平坦で、上方をわずかに細くしている部分が鞘本体に差し込まれ組み合うものと考えられる。内面は断面 V 字形に切れ込みが施されており、その形態から剣を収める鞘であったと考えられる。外面は全て黒漆が塗布される精製品である。6 は木鍬か。先端が尖らないことから栓などの可能性もある。

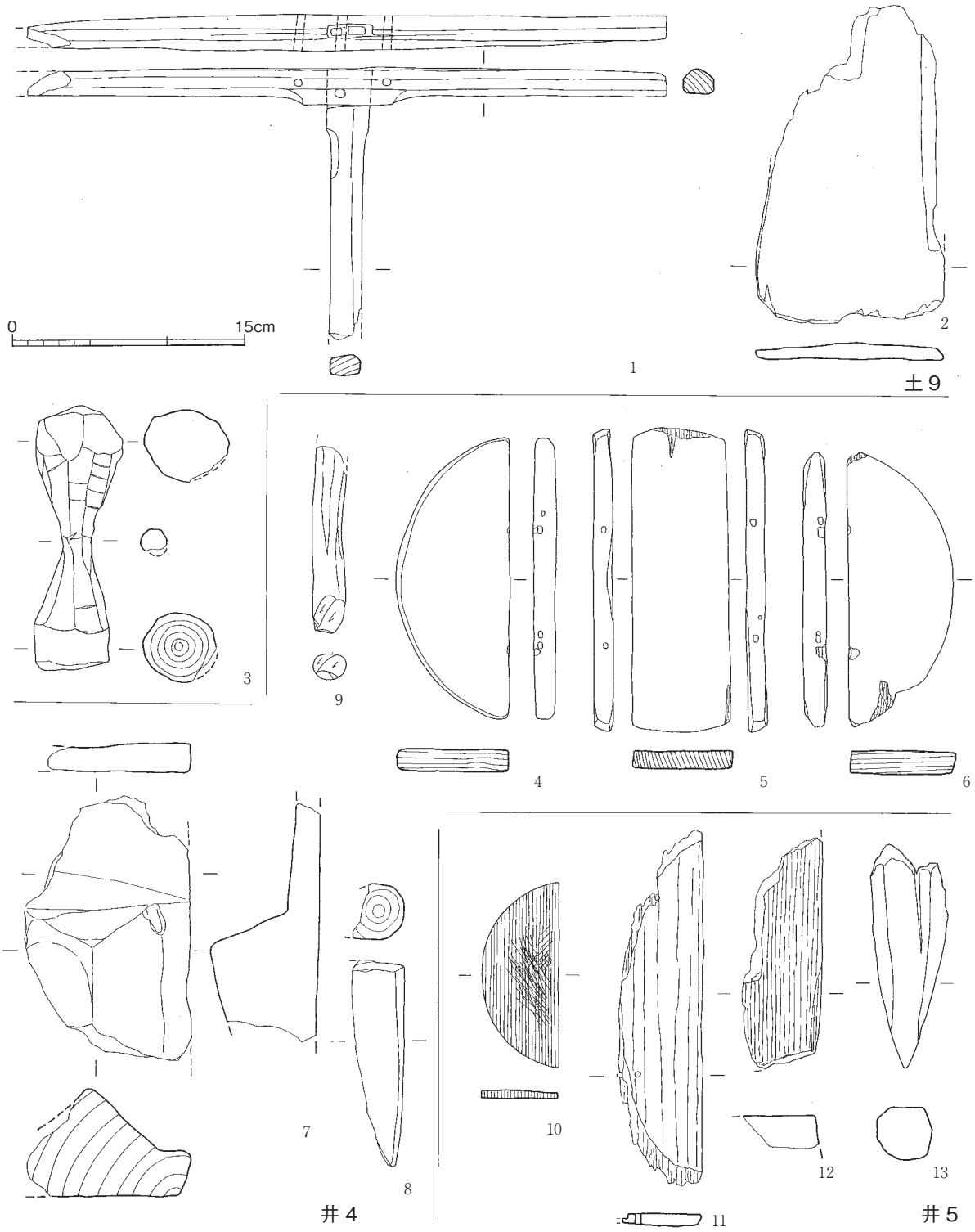
第 168・169 図は導水施設の木樋および関連木製品である。破片となっていたため保存処理後に実測を行った。第 168 図は木樋である。本来は完形であったものの、調査時ならびに取り上げ時に一部欠損してしまっている。点線で示した部分が本来の木樋の大きさと考えられる。木樋左右は端部が厚くなる断面 L 字形を呈しており、木樋中央は逆Ω字形を呈する。先に述べたように中央木樋上方に認められる槽部に水が溜まり上澄みが下方に流れることによって浄水を得る構造を呈する。中央木樋は先端に行くほど薄くなる。左木樋は先端ほど、端部の突出が低く、薄いが、右木樋は先端ほど端部の突出が高く、厚くなる。検出面では左右共に同一レベルを保っていたことから、意図的な加工ではないと考えられ、据える際に下方がやや低くなるよう調整したものであろう。木取りを見ると中央左右木樋で取り方が一体となっている様に見て取れ、巨大な一木から 3 本共に切り出した可能性が高い。第 169 図 1 は木樋西側の部材である。中央の刳り込み部分に木樋中央がはまり込む。中央の細い部分の上面には破断痕跡が認められ、本来は中央木樋の上面より高い位置まで本部材があったものと考えられる。木樋に直接水が流れ込まないよう、堰の役割を果たしていた可能性がある。2 は木樋下に据えられていた板状器具材である。中央木樋の断面形に沿うように弧を描くことから、先に述べたように、木樋の傾斜を補正するないしは沈み込むのを防止したものであろう。



第 168 図　Ⅲ -C 区導水施設木製品実測図①（1/8）



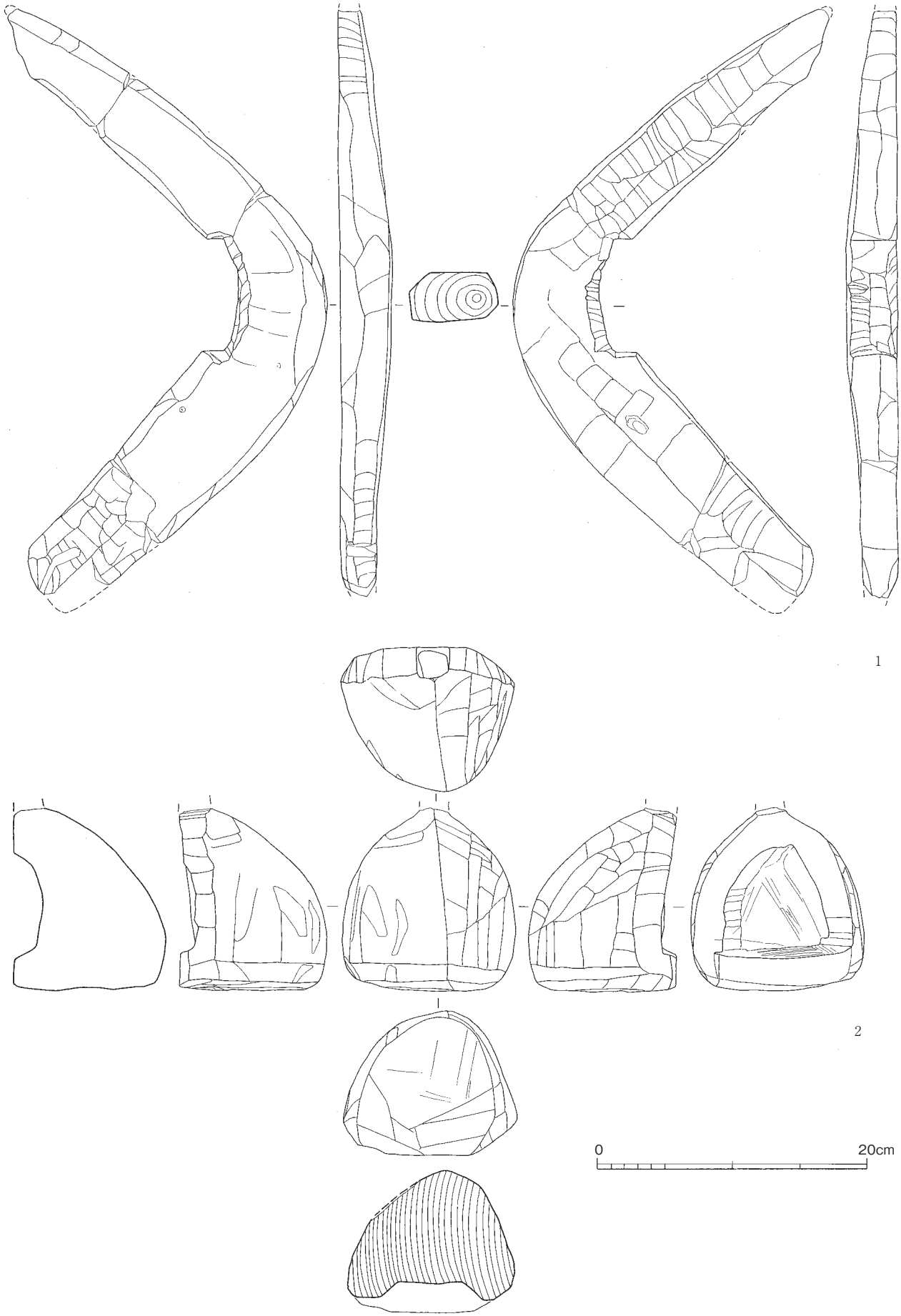
第 169 図　Ⅲ -C 区導水施設木製品実測図②（1/6）



第 170 図　Ⅲ -C 区 9 号土坑、4・5 号井戸出土木製品実測図（1/4）

遺構（既報告分）出土木製品（図版 77、第 170・171 図）

第 170 図１～３は「土９」とラベルに記されており、位置的には本書に所収している 3001 号溝に含まれる可能性が高い。１は枠である。２本の棒状木製品の１つに孔を穿ち、１つに突出部を作ることで丁字形に組み合わせる。２本の棒は中央の木釘で留められる。ホゾを差し込んだ際に、上側の孔横に亀裂が入ったことから左右の木釘を追加で打った可能性が想定される。２は薄い板状の木製品で蘭と考えられる。薄い板状で表面は剥落が激しい。３は編錘である。リボン形を呈し、下



第 171 図　Ⅲ -C 区 3 号井戸出土木製品実測図（1/4）

側には樹皮が残る。

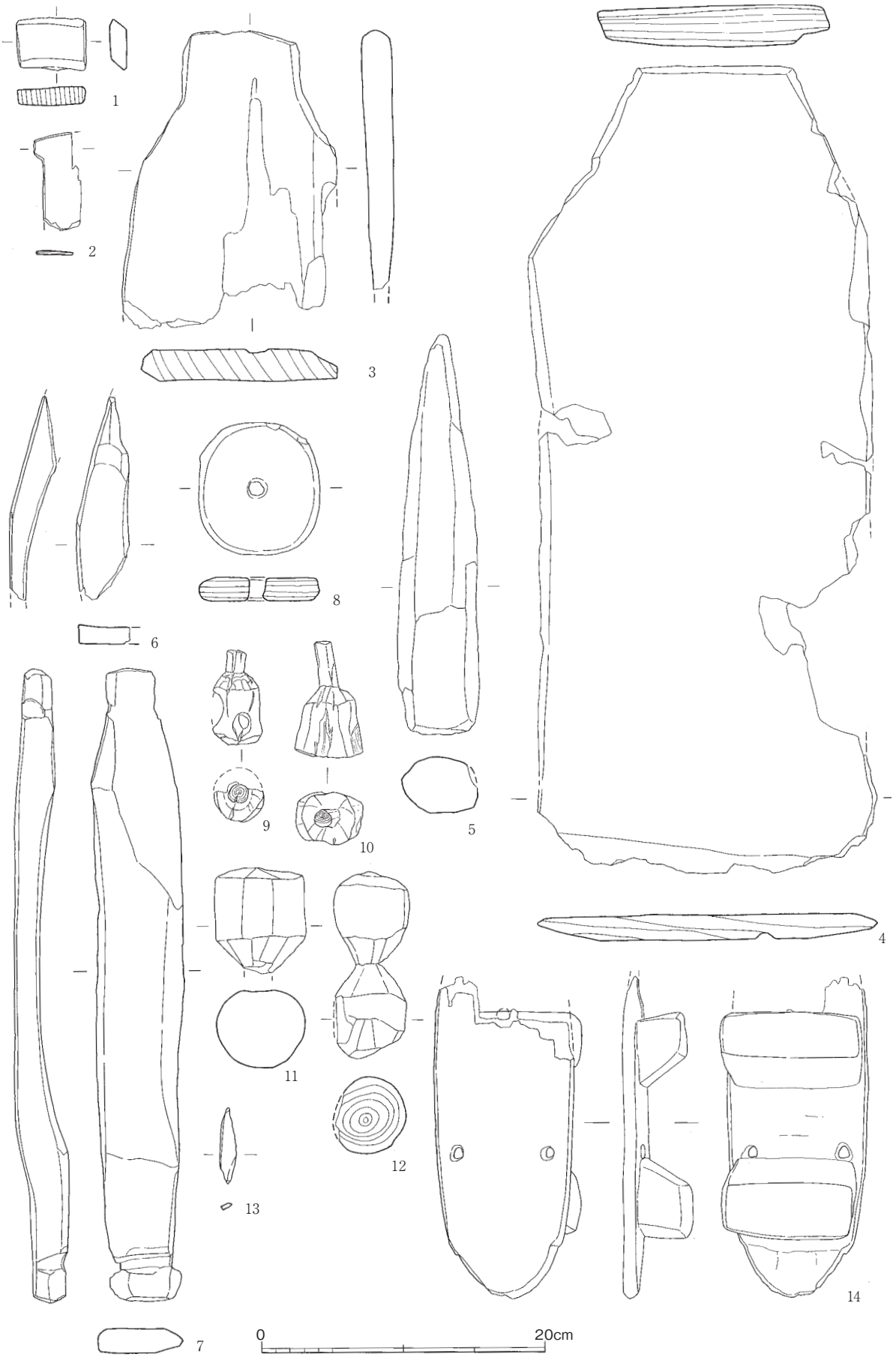
４～９は４号井戸出土木製品である。４～６は組み合わせ式の曲げ物底板である。側面に木釘で留めるホゾが作られる。４・６には２ヶ所にホゾ穴があるのに対し、中央の板には１ヶ所しか認められないことから中央の板のみ修繕などで取り替えられた可能性がある。７は梯子か。ステップ上面は平坦になるものの横断面形は三角形を呈しており、未製品ないしは再利用品の可能性がある。８は板状施設器具材である。井戸枠の一部である可能性もある。９は杭である。樹皮が多く残っており、先端のみを加工したものである。

10 ～ 13 は５号井戸出土木製品である。10・11 は曲げ物板である。10 は中央部に線状の痕跡が確認でき底板と考えられる。11 は留め穴が３つ残っており、底板になるか。12 は板状施設器具材である。上面および２側面のみが遺存する。井戸枠の一部である可能性もある。13 は杭である。先端のみが遺存し、円周の５分の３のみを加工し尖らせる。

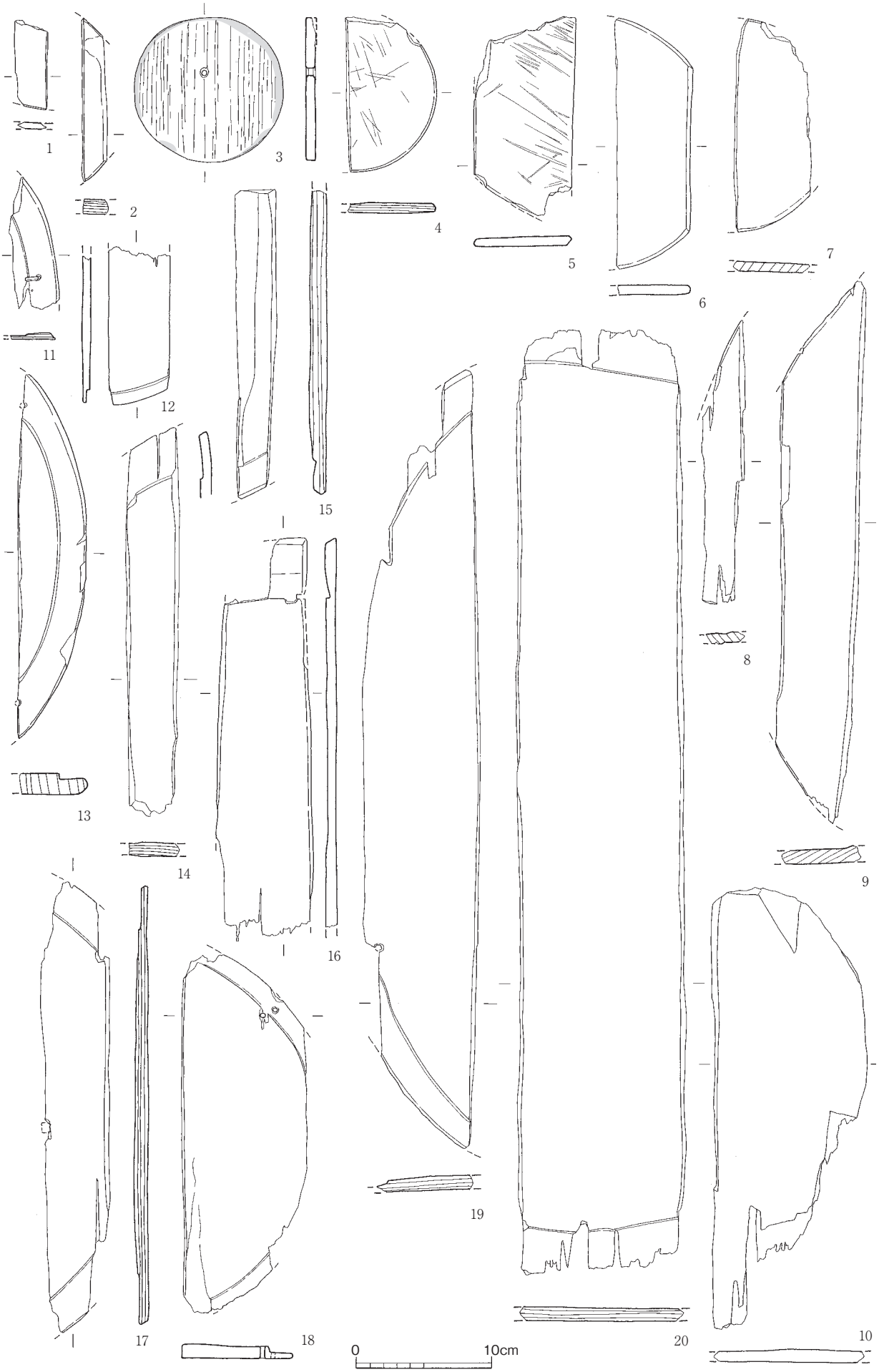
第 171 図は３号井戸出土木製品である。１は鞍である。組み合わせの鞍橋部に当たる。全面に細かいケズリを施すが、一部粗い部分が残っており、未製品の可能性がある。２は壺鐙未製品である。表面の加工はなされており、刳り込み部が途中までしかなされていない。開口部は 7.5cm × 8cm で奥行きは 1.5cm の位置で止まっている。刳り込みを削っていた際に、上面が欠損したため放棄したものか。この他、整理中に紛失したが、横櫛が出土した。

包含層出土木製品（図版 78・79、第 172 ～ 178 図）

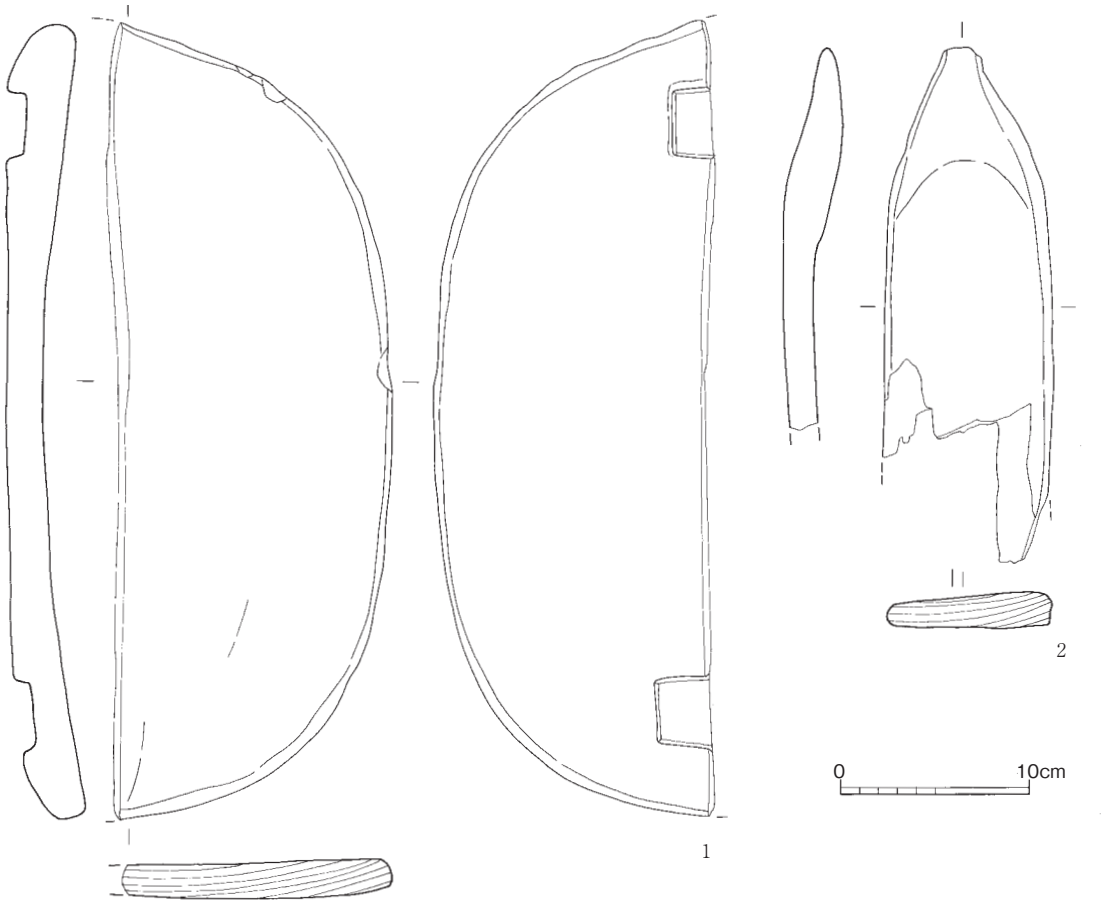
１は楔か。下端がわずかに突出しており、製品を切り出した残材の可能性もある。２は鍬か。非常に薄く形代などの可能性もある。３・４は鍬未製品か。3 は端部を細くしており、全体を薄くする途中で破損したものか。４は長大で、下端を刃部状に尖らせる。全体を薄くする途中で破損したものか。５は杵ないしは槌か。先端の一部が潰れており、槌として使用した可能性もある。６は大足ないしは腰当、槽などの可能性が考えられる。７は腰当である。中央部が薄くなり、両端部に紐掛け部が作り出される。８は紡錘車か。中央に径１cm 程の孔を穿つ。９～ 12 は編錘である。９・10 はダンベル形、11・12 はリボン形になるものと考えられる。９は木質が抜けた部分が孔のように残る。13 は木鏃か。栓などの可能性もある。14 は下駄である。前側の中央孔で折損する。刃はさほど磨り減っておらず、孔周囲にも紐ズレ痕は明確に認められない。第 173 図は容器類である。いずれも曲げ物板と考えられる。１・２は小片で、蓋か底板か判断できない。３は蓋である。中心よりややずれた位置に径４mm の孔が穿たれており、紐を掛けていたものと考えられる。側面には削り痕が見られる。縁辺部には圧痕が見られ、桶の痕跡と考えられる。４～７は底板である。４・５は表面に線条痕が見られる。６は側面に立板と接合するための木釘が２ヶ所残る。７は縁辺部に立板の圧痕が見られる。８～ 10 は蓋か底板か不明な板である。加工痕、圧痕等は確認できない。11 ～ 20 は削りによって周縁に段差が作り出され、蓋の可能性が高いものである。11 は外側が高くなっており、綴じ紐が残る。12 は側面が平行に割れており、組み合わせ式である可能性がある。13 は上下２ヶ所に綴じ紐の孔が見られる。16 は段差部分に方形の彫り込みが見られ、綴じ合わせのための孔と考えられる。17 は中央および側面の段差部分に孔が穿たれる。中央は紐掛け、側面は綴じ紐の孔か。18 は段差の内外に孔が穿たれる。桶との接合部の可能性がある。19・20 は大形品である。19 は側面の段差部分に孔が残る。20 は欠損が著しいが、中央付近の段差部分に孔が穿



第 172 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図①（1/4）

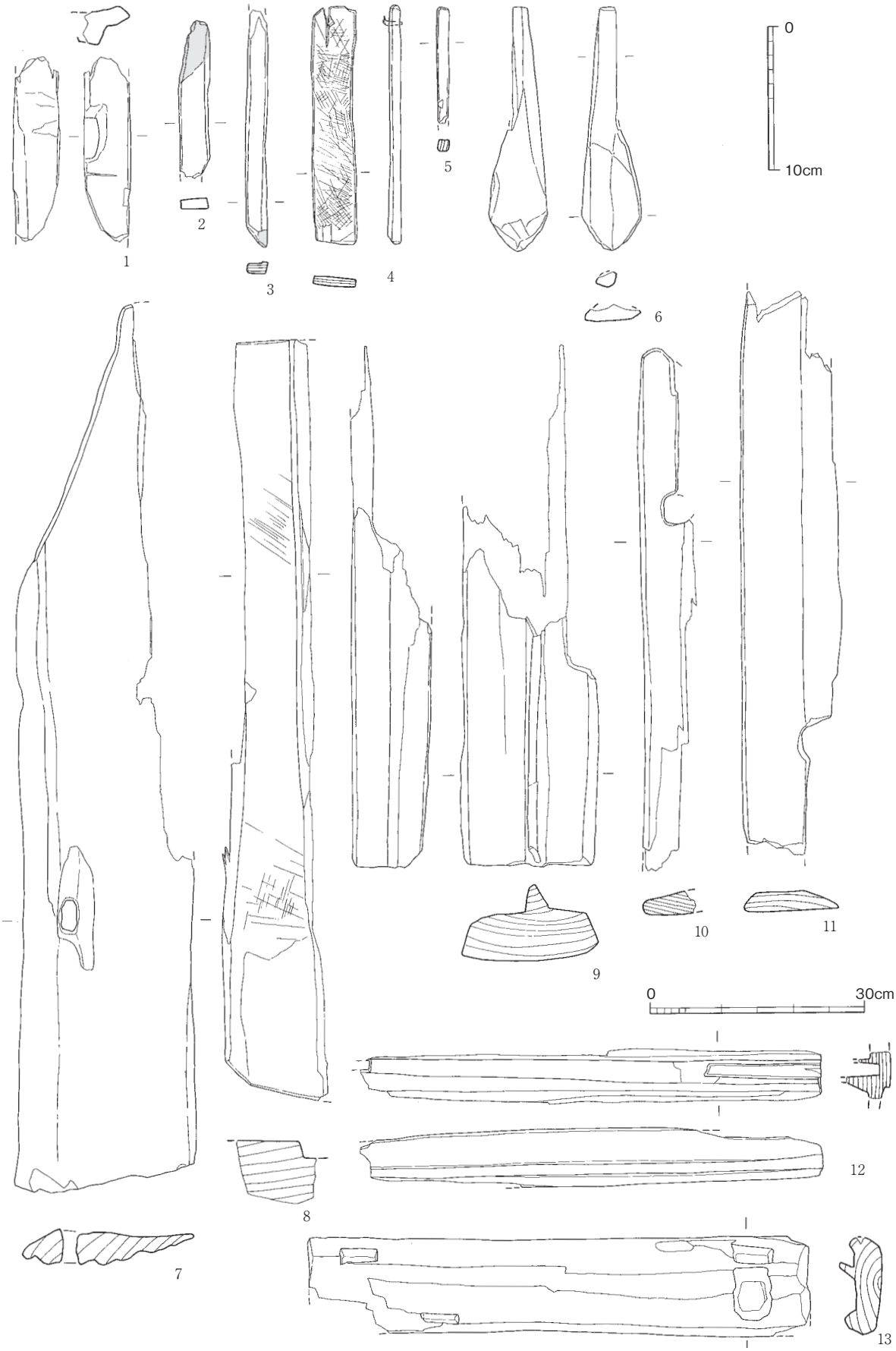


第 173 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図②（1/4）

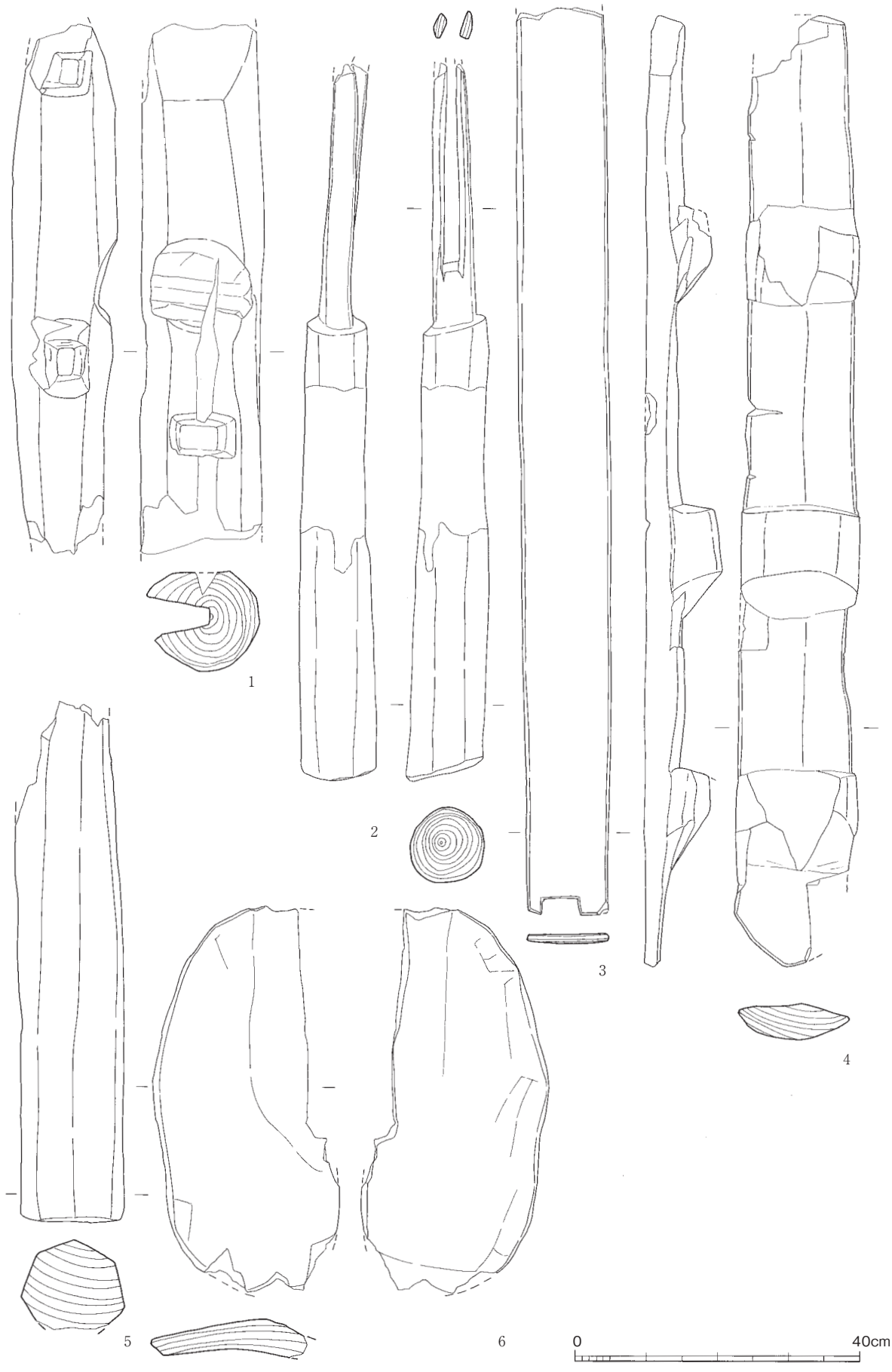


第 174 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図③（1/4）

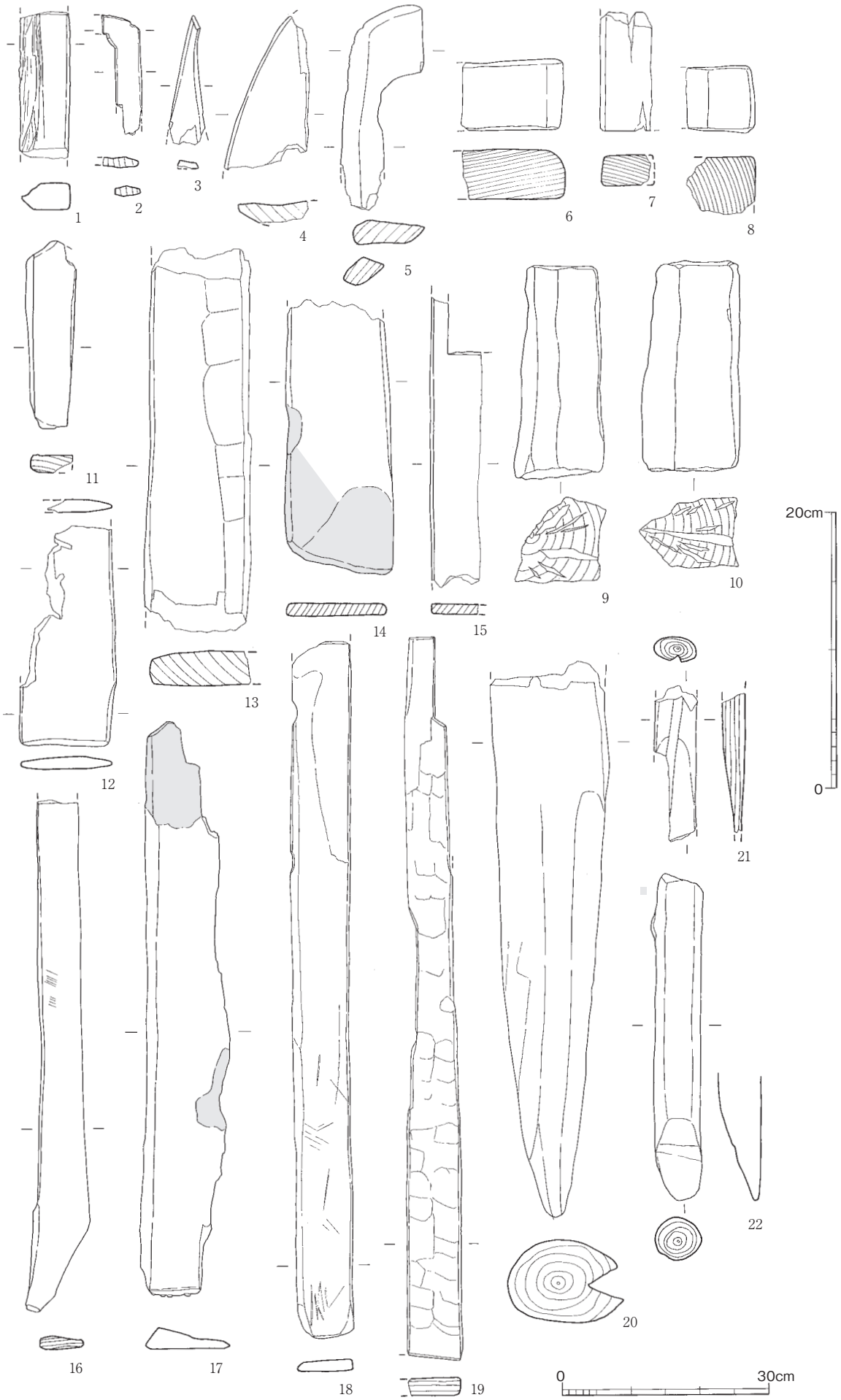
たれていた可能性が高い。第 174 図 1 は盤か。長楕円形の形態をなし、脚が付くと考えられる凹みが 2 ヶ所遺存する。2 は大足か。上半部のみが遺存しており、端部がやや上方に屈曲する。第 175 図 1 は槽か。欠損が多いものの脚が 1 つ残る。2・3 は燃えさしである。先端部分が炭化する。4 は荷札である。上方に孔が穿たれ、樹皮の紐が残る。表面に多くの擦過痕が見られる。5 は箸ないしは簪である。基部のみが遺存する。6 は匙ないしは鎌などの柄か。使用痕や緊縛痕は認められない。7 は扉ないしは天井付近の壁材か。壁材の場合、横方向に設置し、妻側の天井近くに当たるものと考えられる。中央の孔は湿度除去のためのものであろう。8 ～ 13 は建築部材である。8 は表面に擦過痕が見られ、下面はやや曲線を呈する。割れているもののホゾが残る。9 は中央が 2 cm ほど突出しており、蹴離しの可能性がある。10・11 は板の一部が半円形に抉れており、扉の軸などが嵌っていた部材の可能性がある。12 は中央部が 5 cm ほど突出し、更に一部には幅 2 cm、深さ 6 cm 程のホゾが彫り込まれる。9 と同じく扉関係の部材となるか。13 は右側に六角形と長方形のホゾ、左側のややずれた位置に長方形のホゾが 2 ヶ所彫り込まれる。長方形ホゾはいずれも斜め方向に彫られており、棟付近の部材の可能性がある。第 176 図 1 は建築部材か。側面に方形孔が 2 ヶ所、上面に長方形孔および断面弧状の彫り込みが作られる。何らかの組み合わせ部材である。2 は部材である。断面円形の柱状部から長方形の突出部が伸び、2 本に分かれる。突出部を差込む組み合わせ式の部材と考えられる。3 は壁ないしは床板か。端部中央を方形に彫り込み、爪状部分を差し込むものと考えられる。4 は梯子である。ほぼ完形で 3 段が作られる。上から 1・2 段目間 43cm、2・3 段目間 36cm と間隔が異なり、地面への差込部、建屋に掛ける部分などを考慮すると、地面と 3 段目間、建屋と 1 段目間を含め、全ての間隔が異なっていた可能性が高い。5 は柱か。一部欠損す



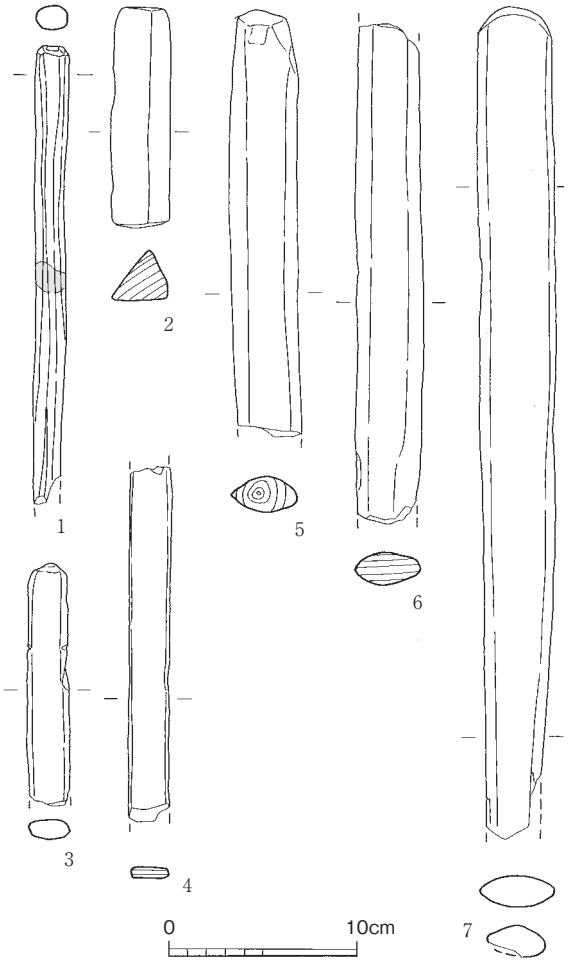
第 175 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図④（1/4、10 ～ 13 は 1/8）



第 176 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図⑤（1/8）



第 177 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図⑥（1/4、16・19 は 1/8）



第 178 図　Ⅲ -C 区包含層出土木製品実測図⑦

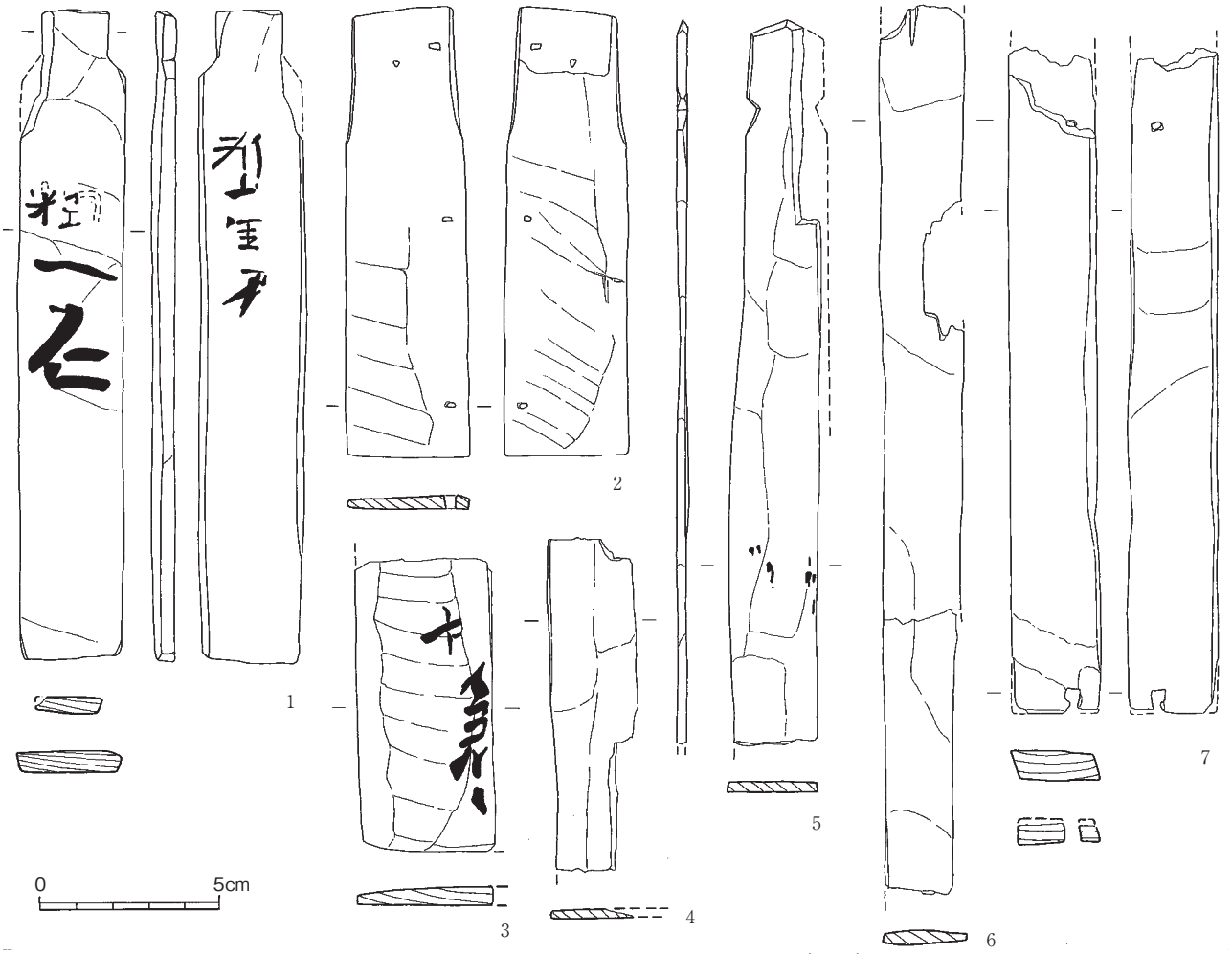
(1/4)

るものの八角形に削られていたものと考えられる。６はねずみ返しである。孔は幅 11cm で表面には樹皮が残る。全体的に一部分が炭化する。第 177 図１～ 19 は板状の施設器具材である。１は切断痕が見られ、鋸歯状のもので切断した残材であろう。２・３は両側面が遺存しており、形代等である可能性もある。４は側面が弧状を呈するが、他の曲げ物板と比べ、やや厚いことから板としている。５はＬ字状を呈し、組み合わせ式の部材の可能性もある。６～ 10・13 は厚く、井戸枠の一部である可能性がある。12 は右側面にわずかに段差が作られており、農具未製品の可能性がある。14 は先端および側面に被熱痕跡が見られる。15 は先端がＬ字状に彫りこまれ、部材である可能性もある。16 は一部擦過痕が見られ、何らかの柄の可能性がある。17 は上端および側面が一部炭化し、下端には切断痕が見られる。18 は表面を丁寧に削り平滑にしており、一部には使用に際しついたと考えられる擦過痕が認められる。19 は全面に粗い削りを施し、細長い板状に成形する。20 ～ 22 は杭である。20 は太く、全体を削って先端部を作り出す。21・22 は先端のみ半分に削り尖らせている。22 は瘤が見られ、枝材をそのまま利用したことがわかる。第 177 図は棒状の施設器具材である。１は断面円形に削り、中位に緊縛痕が見られる。２は断面三角形で欠損は見られない。３・４は細長い形状を呈する。痕跡等は認められない。５～７は断面楕円形を呈する。７は上端が丸く削られ、地面等に刺す結界杭の可能性もある。

出土木簡類（図版 80、第 179 図）

出土した木簡および札についてまとめて報告する。墨痕が確認されたものに関しては木簡、その他については札として報告する。文字の解釈については後に述べることとし、ここでは形態などについて報告する。また、この他にも薄い板状の木は出土しているが、遺構出土のものや削りが丁寧なもののみ図化している。

１は上端が削りにより細くなる。荷札木簡である。２は上端部がわずかに細くなり、端部は切断される。上位中央ならびに側縁に孔が穿たれる。わずかに表面に削りの痕跡が認められ、再利用品である可能性もある。３は呪符木簡である。表面のみ墨書が見られる。４は札で、１側面のみが遺存する。５は荷札木簡である。上端部付近に刳り込みが入れられ、端部は六角形状を呈する。表面にのみわずかに墨痕が認められる。６は札である。２片が接合し、表面には削りの痕跡が認められる。７は上端部やや右寄りと下端部に方形孔が穿たれる。いずれも墨痕等は認められなかった。１・７は包含層出土、２～６は３号井戸出土である。



第 179 図　Ⅲ -C 区出土木簡類実測図（1/2）

・釈文について

釈文は以下のとおりである[1]。

179-1　・□〔不知カ〕□山里□
　　・□〔籾カ〕一石　　180・28・6　6032

包含層から出土。上下両端および左右両辺ともに削り。表面 1・2 文字目は、「不知」と推定される。不知山里（いさやま）は、『倭名類聚抄』の豊前国京都郡諫山郷に相当する。裏面 1 文字目は、米偏の文字であり、籾と推定した。この木簡は、不知山里から納められた籾 1 石に付いていた荷札である。和銅 6 年（713）に畿内七道諸国郡郷名は「好字（よきもじ）」を着けよという制が出され（『続日本紀』和銅 6 年 5 月甲子条）、霊亀 3 年（717）に郷里制が施行されているので[2]、この荷札はこれ以前のものであろう。

不知を「いさ」と読む例は、『万葉集』に「不知哉川（いさやがは）」（巻 4、487 番歌）や「不知夜経月乎（いさよふつきを）」（巻 7、1084 番歌）などがあり、木簡にも、後の備後国沼隈郡諫山郷に相当する里名を記載した「不知山里俵五斗八升」（『平城宮木簡』7、11321 号）がある[3]。なお、京都郡周辺の人名としても、『本朝世紀』長保元年（999）3 月 7 日条に京都郡の平井寺檀越として豊前国掾不知山長松がみえ、『八幡宇佐宮神領大鏡』の豊前国築城郡仲東郷・城井郷横瀬浦の田畠の記事に不知山永正がみえる。このほか、『続日本紀』天平 12 年 9 月己酉条に、藤原広嗣の乱に際して、兵 70 人を率いて官軍に来帰した下毛郡擬少領の勇山伎美麻呂もみえ、京都郡周辺には「いさやま」を氏名（うじな）とする地域首長が存在していた。

179-3　・加□　急々□
　　・□〔浄欲カ〕□□　　（80）・（37）・5　6081

３号井戸から出土。上端折れ、下端二次的切断、左辺削り、右辺割れ。表面「急々」の文字の中ほどで割れているので、本来の幅は現状の二倍弱程度かと推定される。旧稿では１文字目を左に寄った小さい文字で「下」と読んだが(4)、再調査の結果、「急々」と同じ大きさで、「ほうへん」の文字のへんの部分のみが残り、つくりの部分が失われていることが判明した。ただし「急々」以下とあわせてどのような意味を持つのかは不明である。本木簡は「急々如律令」の文言を有する呪符とみられる。下端を二次的に切断しているのは、呪符の効力を抹消するための処置かと考える。

179-5　［　　］　(208)・(29)・4　6039

３号井戸から出土。上端を圭頭状につくり、下端折れ、左辺削り、右辺割れ。上端一か所、左辺側に切り込みがあり、右辺上半部は割れているが、本来はこちらにも切り込みがあり、付札状木製品であったとみられる。切り込み部分にひもの痕跡が認められる。

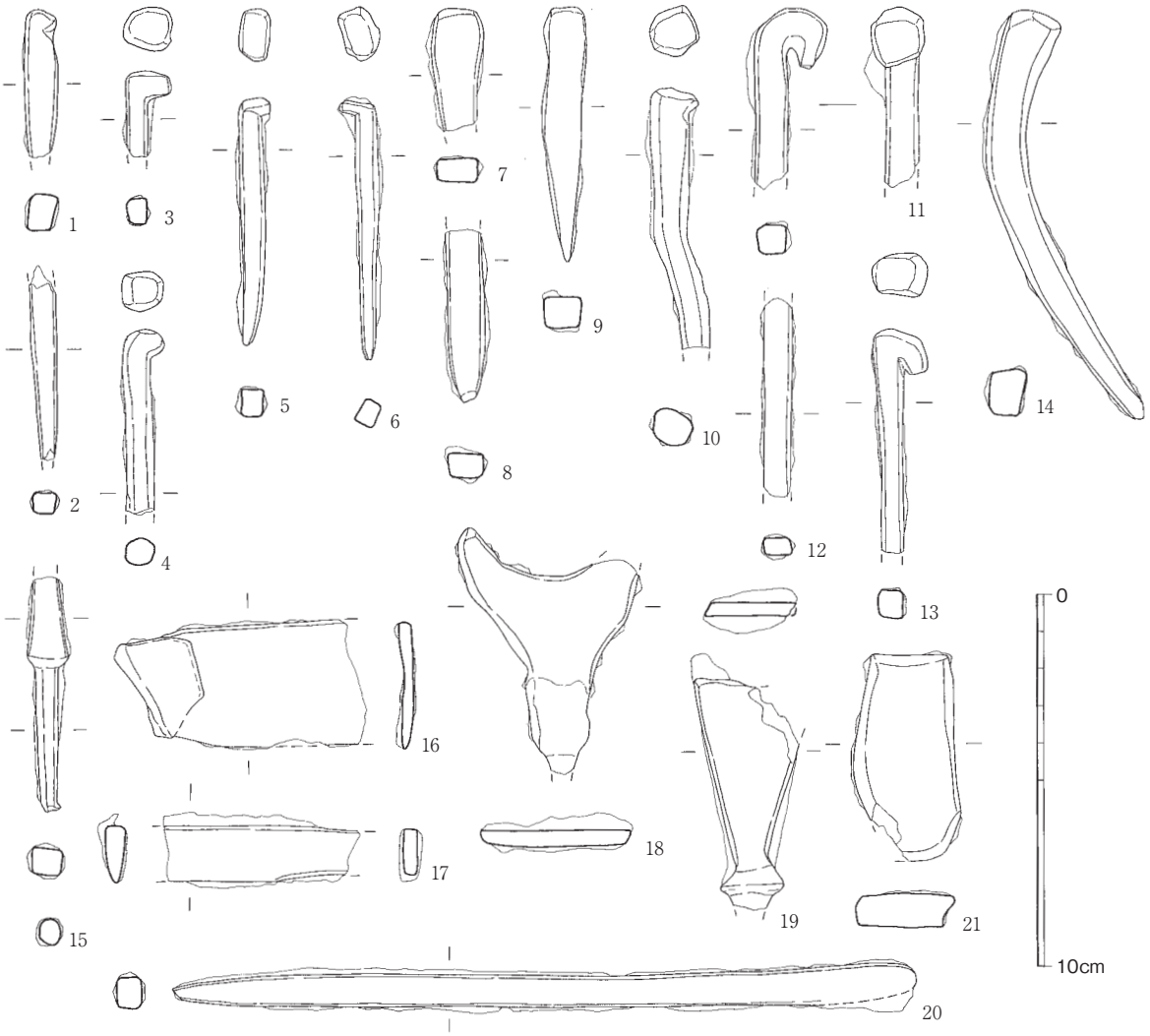
【注】

(1) 本報告書における木簡の釈文記載様式および型式番号は、奈良文化財研究所のものによる。九州歴史資料館編『大宰府政庁跡』2002年、551頁、凡例を参照。木簡の釈文は、松川博一と酒井芳司が、旧稿（酒井、松川「福岡・延永ヤヨミ園遺跡」『木簡研究』32、2010年）掲載の旧釈文を再検討した結果をもとに、酒井が執筆した。旧釈文の釈読にあたり、御教示いただいた研究者は多数に及ぶため、個々の御芳名の掲載は旧稿末尾の謝辞に譲り、割愛する。

(2) 鎌田元一「郷里制の施行と霊亀元年式」（『律令公民制の研究』塙書房、2001年）314～5頁

(3) 東野治之「『万葉集』と木簡」（『長屋王家木簡の研究』塙書房、1996年）163～4頁

(4) 酒井芳司・松川博一「福岡・延永ヤヨミ園遺跡」（『木簡研究』32、2010年）110～3頁



第180図　Ⅲ-C区既報告分遺構出土鉄製品実測図（1/2）

既報告遺構出土鉄製品（第 180 図）

2013 年に刊行した『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅰ』で報告した遺構から出土した鉄製品について、整理段階で新たに見つかったことから、追加で報告する。遺構名は以前の報告書に掲載したとおりに記載するが、遺構の内容については前掲の報告書を参照されたい。

１～ 14 は釘である。１～６が小型、７～ 13 が中型、14 が大型の釘である。３～６は頭部がＬ字形を呈し、１・７・９・10・14 はやや潰れたように太くなる。11・13 は釣り針状に屈曲する。１・７は 28 号土坑、２～４・６・８・11・13 は 24 号土坑、５は包含層、９は４号土坑、10 は 16 号土坑、12 は出土遺構不明、14 は７号溝出土。15 は不明鉄製品である。先端がややつぶれており、釘のように刺さっていた可能性がある。24 号土坑出土。16 は鎌である。端部を折り曲げて柄への装着部とする。５号竪穴住居跡出土。17 は刀子である。関がわずかに見られる。10 号溝出土。18・19 は不明鉄製品である。刺又状を呈し、下部には木質が付着する。30 号土坑出土。19 は下部に篦被状のふくらみを持つ。24 号土坑出土。20 は棒状鉄製品である。左側の端部がやや細くなる。24 号土坑出土。21 は鉄片である。28 号土坑出土。

（8）小結

Ⅲ -C 区は馬蹄形丘陵の中央谷部分に当たり、井戸をはじめとした土坑、溝、導水施設が検出された。また、谷部分には多くの土器が包含され、湧水が見られることから多くの木製品が出土した。

遺跡の形成時期については、他の調査区と同じく弥生時代後期後半～終末頃であり、井戸や土坑・水漬け遺構などが造られるほか、谷から遺物が出土している。水場である地形の特性を生かした土地利用がなされており、丘陵上の集落と一体のものであろう。弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃には谷から多量の土器が出土しており、当該時期には丘陵上から多くの土器が谷内に廃棄されていると言える。水場である地形の特性を生かした土地利用は古墳時代前期および後期においても認められ、特に古墳時代後期の 3009 号土坑から準構造船の部材が出土していることから、この時期には谷内に舟での往来が可能であったことがわかる。古墳時代中期の遺物がほとんど認められないことは、丘陵上の遺構の傾向と同様であり、集落自体が縮小したことが裏付けられる。

古代になると、土坑や既報告のⅢ -C 区北側で検出された井戸の他、3001 号溝が掘削される。この溝については、先述のとおり杭を敷設した船着場ないしは運河的な性格が想定される。木簡や墨書土器などの文字資料、形代などの祭祀遺物が出土していることから、遺物の面からは官衙的な性格が想定され、丘陵上で検出された建物との関連性が窺える。Ⅳ -C 区において「津」字の墨書土器が出土していることや郡符木簡などの存在から、『類聚三代格』に記述の見える「草野津」であると考えられ、当地区が船着場の大きな候補となろう。中世以降は少量ながらも谷から遺物の出土が認められる。

いずれの時期においても、地形の特性を生かした土地利用がなされており、廃棄所や集落の水場、入り口として利用されている。丘陵上の集落の盛行時期と重なることから、丘陵上の集落の動態を含めた上で考える必要があるだろう。

挿図	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	残存	備考
159-1		ⅢC	土3009	ガラス製品	ガラス玉	0.60		0.25	0.10	1	緑色
159-2	74	ⅢC	溝3001	土製品	土錘	(3.20)	1.40	1.30	(5.80)	0.4	
159-3	74	ⅢC	溝3001下層	土製品	土錘	4.45		1.60	9.60	1	
159-4	74	ⅢC	溝3001	土製品	坩堝	10.00		3.80	-	0.4	
159-5		ⅢC	排土中	鉄製品	鉄鏃？	(3.40)	(0.80)	(0.85)	(9.30)	0.1	
159-6	74	ⅢC	溝3001	鉄製品	刀子	(8.60)	2.10	0.20	(14.52)	0.4	
159-7	74	ⅢC	黒色土包含層	石製品	剣形石製品	(4.20)	1.80	0.60	(5.20)	0.9	緑色片岩
159-8	74	ⅢC	黒色土包含層	石製品	剣形石製品	6.60	2.85	0.75	17.30	1	緑色片岩
159-9	74	ⅢC	黒色土包含層	石製品	有孔円盤	1.80		0.28	(1.80)	0.9	緑色片岩
159-10	74	ⅢC	黒色土包含層	石製品	有孔円盤	2.90		0.30	5.30	1	滑石
159-11		ⅢC	黒色土包含層	石製品	石庖丁	(4.45)	4.70	0.60	(17.30)	0.3	輝緑凝灰岩
159-12		ⅢC	包含層南2層	石製品	石庖丁	(5.15)	4.90	0.75	(24.10)	0.3	凝灰岩
159-13		ⅢC	包含層1Tr.	石製品	石庖丁	(4.00)	(6.50)	0.50	(19.70)	0.5	片岩
159-14	74	ⅢC	包含層南2層	石製品	石庖丁	12.00	4.95	0.50	47.00	1	輝緑凝灰岩
159-15	74	ⅢC	水漬け遺構	石製品	石庖丁	10.35	4.10	0.70	(39.00)	0.8	片岩
159-16	75	ⅢC	黒色土包含層	石製品	石斧	(6.95)	4.30	1.90	(101.20)	0.6	片岩
159-17	75	ⅢC	木樋周辺	石製品	石鏃	(11.60)	8.00	2.25	(199.10)	0.4	片岩
159-18	75	ⅢC	溝3001	石製品	磨・凹石	9.65		3.25	(488.20)	0.7	凝灰岩
160-1		ⅢC	黒色土包含層確認Tr,	石製品	磨石	9.70	7.60	(4.70)	(586.90)	0.7	凝灰岩系？
160-2		ⅢC	包含層南3層	石製品	砥石	(5.70)	5.70	2.10	(101.40)	0.3	凝灰岩
160-3		ⅢC	包含層南3層	石製品	砥石	(5.40)	(4.20)	1.20	(29.70)	0.2	凝灰岩
160-4		ⅢC	包含層南2・3層	石製品	砥石	(9.70)	6.05	2.40	(224.30)	0.6	片岩
160-5		ⅢC	包含層南1層	石製品	砥石	(7.65)	4.60	2.65	(124.60)	0.6	細粒砂岩
160-6		ⅢC	黒色土包含層	石製品	砥石	(9.10)	(8.90)	(2.20)	(226.20)	0.1	片岩系
160-7	75	ⅢC	溝3001	石製品	砥石？	(22.60)	(8.10)	5.00	(1033.60)	0.3	頁岩質砂岩
180-1		3	28号土坑	鉄製品	釘	(4.00)	0.90	1.00	(5.75)	0.8	既報告分
180-2		3	24号土坑	鉄製品	釘	(5.20)	0.60	0.60	(4.86)	0.4	既報告分
180-3		3	24号土坑	鉄製品	釘	(2.35)	1.30	1.20	(3.76)	0.2	既報告分
180-4		3	24号土坑	鉄製品	釘	(5.00)	1.10	1.10	(7.09)	0.3	既報告分
180-5		3	包含層	鉄製品	釘	6.60	0.90	0.75	6.35	1	既報告分
180-6		3	24号土坑	鉄製品	釘	7.00	1.00	1.40	9.56	1	既報告分
180-7		3	28号土坑	鉄製品	釘	(3.35)	1.50	0.70	5.69	0.2	既報告分
180-8		3	24号土坑	鉄製品	釘	(4.65)	1.05	0.70	(9.68)	0.2	既報告分
180-9		3	4号土坑	鉄製品	釘	6.90	1.10	0.90	12.69	1	既報告分
180-10		3	16号土坑	鉄製品	釘	(7.00)	1.10	1.10	(14.13)	0.7	既報告分
180-11		3	24号土坑	鉄製品	釘	(4.90)	1.95	1.40	(12.67)	0.5	既報告分
180-12		3	不明	鉄製品	釘	(5.40)	0.70	0.50	(5.61)	0.3	既報告分
180-13		3	24号土坑	鉄製品	釘	(6.05)	1.45	1.65	(8.83)	0.8	既報告分
180-14		3	7号溝	鉄製品	釘	12.50	1.10	1.30	40.35	1	既報告分
180-15		3	24号土坑	鉄製品	不明鉄製品	(6.30)	1.10	1.10	(9.81)	0.8	既報告分
180-16		3	5号竪穴住居跡	鉄製品	鉄鎌	(6.80)	3.40	0.30	(25.29)	0.3	既報告分
180-17		3	10号溝	鉄製品	刀子	(5.30)	1.50	0.60	(11.75)	0.3	既報告分
180-18		3	30号土坑	鉄製品	不明鉄製品	(6.60)	(4.80)	0.50	(28.10)	0.8	既報告分
180-19		3	24号土坑	鉄製品	不明鉄製品	(6.90)	(2.80)	0.40	(29.95)	0.9	既報告分
180-20		3	24号土坑	鉄製品	棒状鉄製品	19.90	1.00	0.70	50.20	1	既報告分
180-21		3	28号土坑	鉄製品	鉄片	5.60	2.90	1.00	(33.20)	0.9	既報告分

（　）は残存値

木製品

挿図	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	樹種	残存	備考
161-1	75	Ⅲ	土3004	木製品	羽子板状	(39.20)	6.80	4.55	シイ属	0.8	
161-2	75	Ⅲ	土3006	木製品	編錘	15.10		5.10	散孔材	0.8	
161-3		Ⅲ	土3010	木製品	棒状器具材	(15.20)	1.55	0.85	ヒノキ科	不明	
161-4	75	Ⅲ	土3014or3009	木製品	編錘	9.40		4.30	散孔材	0.6	
161-5		Ⅲ	土3014	木製品	不明	(3.50)	(2.60)	(1.40)	散孔材	不明	
161-6		Ⅲ	土3014	木製品	板状器具材	(8.30)	2.80	0.50	ヒノキ？	不明	
161-7	75	Ⅲ	土3014	木製品	箸	17.00		0.70	スギ	0.9	
161-8	75	Ⅲ	土3014　№2	木製品	斎串	(11.60)	1.50	0.35	ヒノキ	0.6	
161-9	75	Ⅲ	土3014	木製品	斎串	(14.10)	(1.60)	0.30	ヒノキ	0.5	
161-10	75	Ⅲ	土3014	木製品	斎串	(5.60)	(1.45)	0.30	ヒノキ	0.2	
161-11	75	Ⅲ	土3014	木製品	斎串	(8.60)	(1.30)	0.20	ヒノキ	0.2	
161-12	75	Ⅲ	土3014	木製品	斎串	(7.85)	(1.35)	0.30	ヒノキ	0.2	
161-13	75	Ⅲ	土3014№5	木製品	斎串	(18.00)	2.60	0.30	ヒノキ？	0.7	
161-14	75	Ⅲ	土3014	木製品	斎串	22.70	1.50	0.40	ヒノキ	1	
161-15	75	Ⅲ	土3014	木製品	斎串	(5.80)	1.40	0.15	ヒノキ	0.3	
161-16	75	Ⅲ	土3014	木製品	斎串	(11.60)	1.70	0.15	ヒノキ	0.6	
161-17	75	Ⅲ	土3014	木製品	斎串	(6.35)	2.30	0.10	ヒノキ	0.2	
161-18	75	Ⅲ	土3014	木製品	鳥形？	(5.90)	1.90	0.30	ヒノキ	0.4	
161-19	75	Ⅲ	土3014　№3	木製品	形代？	(8.00)	(1.70)	0.45		0.1	
161-20	75	Ⅲ	土3014	木製品	鳥形	20.00	3.60	0.60	ヒノキ	1	
161-21		Ⅲ	土3021	木製品	板状器具材	(8.60)	2.90	0.50	スギ	不明	
162-1	75	Ⅲ	土3001	木製品	井戸枠	116.10	24.70	3.40		0.9	
162-2	75	Ⅲ	土3001	木製品	井戸枠	(54.20)	18.40	2.80		0.4	
162-3	75	Ⅲ	土3001	木製品	井戸枠？	(52.90)	12.50	2.00	ヒノキ科	0.3	
162-4	75	Ⅲ	土3002	木製品	板状器具材	68.30	(10.10)	2.30	ヒノキ	不明	
162-5	75	Ⅲ	土3003	木製品	臼	53.20		47.30	クスノキ科	0.6	
162-6	75	Ⅲ	土3003	木製品	杵	(35.70)	8.50	7.50	ツバキ属	0.4	
163-1	76	Ⅲ	土3003？	木製品	板状器具材	(16.30)	(2.40)	4.20	ヒノキ	不明	

（　）は残存値

第６表　Ⅲ-C 区出土特殊遺物一覧表

挿図	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	樹種	残存	備考
163-2		Ⅲ	包含層or土3003	木製品	板状器具材？	(5.00)	(2.75)	2.35	ヒノキ	0.1	
163-3		Ⅲ	包含層or土3003	木製品	楔	9.45	3.55	1.80	アカガシ亜属	1	
163-4		Ⅲ	包含層or土3003	木製品	楔	13.50	2.50	1.90	ヒノキ	1	
163-5	76	Ⅲ	土3003？	木製品	板状器具材	37.60	3.10	1.05	ヒノキ	1	
163-6	76	Ⅲ	土3003？	木製品	棒状器具材	(36.60)	3.00	(2.00)	スギ	0.3	
163-7		Ⅲ	土3003？	木製品	棒状器具材	(34.90)		3.70	散孔材	0.5	
163-8		Ⅲ	包含層or土3003	木製品	蓋板	(10.20)	(2.50)	1.40	ヒノキ	0.1	
163-9		Ⅲ	土3003？	木製品	蓋板	(33.20)	(8.80)	0.90	スギ	0.3	
164-1	76	Ⅲ	土3009	木製品	準構造船竪板	(107.10)	(57.80)	8.30	クスノキ科	0.6	
164-2	76	Ⅲ	土3009	木製品	準構造船竪板	(24.40)	(4.50)	4.20	クスノキ科	不明	164-1と付く
164-3	76	Ⅲ	土3009	木製品	準構造船竪板	(18.05)	6.70	5.85	クスノキ科	0.4	164-1と付く
164-4	76	Ⅲ	土3009	木製品	舟の栓	3.00	(3.30)	0.70	スギ	不明	164-1と付く
165-1	76	Ⅲ	土3009	木製品	杵？	(19.30)		6.50	アカガシ亜属	不明	
165-2	76	Ⅲ	土3009	木製品	杵	(27.10)	7.40	7.30	アカガシ亜属	0.3	
165-3	76	Ⅲ	土3009	木製品	腰当？	(32.90)	9.00	2.50	ヒノキ	0.8	
165-4		Ⅲ	土3009	木製品	槽	(42.20)	(11.70)	9.20	クリ	0.4	
165-5		Ⅲ	土3009	木製品	棒状器具材	(18.20)	(3.15)	2.05	ヒノキ	不明	
165-6		Ⅲ	土3009	木製品	板状器具材	(14.55)	(5.10)	0.90	ヒノキ？	0.2	
165-7	76	Ⅲ	土3011	木製品	当て具	14.55		7.60	散孔材	1	
165-8		Ⅲ	土3011	木製品	棒状器具材	(11.75)	3.70	2.90	散孔材	不明	
166-1	76	Ⅲ	溝3001中層黒褐色土	木製品	編錘	16.65		3.90	散孔材	0.9	
166-2		Ⅲ	溝3001最下層	木製品	編錘	14.20		6.40	散孔材	0.9	
166-3	76	Ⅲ	溝3001	木製品	鞍？	(29.90)	5.60	4.00	キブシ	0.9	
166-4	76	Ⅲ	溝3001	木製品	壷鐙	(25.20)	(10.90)	(10.20)	ケヤキ	0.5	
166-5		Ⅲ	溝3001	木製品	蓋板	(14.10)	(3.10)	0.65	ヒノキ？	0.2	
166-6		Ⅲ	溝3001	木製品	底板	(65.50)	(5.60)	1.60	ヒノキ	0.1	
166-7	77	Ⅲ	溝3001中層黒褐色土	木製品	斎串	(6.80)	1.50	0.45	ヒノキ	0.3	
166-8	77	Ⅲ	溝3001中層黒褐色土	木製品	馬形	18.10	4.20	0.40	スギ	0.9	
166-9		Ⅲ	溝3001最下層	木製品	樹皮	?	2.10	0.20	樹皮	0.8	
166-10		Ⅲ	溝3001	木製品	琴？	(3.00)	13.40	1.40	アカガシ亜属	0.1	
166-11		Ⅲ	溝3001中層黒褐土	木製品	板状器具材	(7.00)	(2.25)	(0.90)	ヒノキ	0.1	
166-12		Ⅲ	溝3001	木製品	棒状器具材	(11.50)	1.40	0.50	ヒノキ	不明	
166-13		Ⅲ	溝3001	木製品	棒状器具材	(15.35)	3.00	1.00	ヒノキ	不明	
166-14	77	Ⅲ	溝3001　ベルト3層	木製品	板状器具材	(20.00)	3.35	0.80	ヒノキ	不明	
167-1	77	Ⅲ	谷西北端水漬け遺構№2	木製品	部材	(77.10)	13.80	10.60	散孔材	不明	
167-2	77	Ⅲ	谷北西端水漬け遺構	木製品	板状器具材	36.60	3.20	0.75	ヒノキ	1	
167-3	77	Ⅲ	谷北西端水漬け遺構	木製品	板状器具材	(16.40)	3.70	1.20	ヒノキ	不明	
167-4		Ⅲ	谷北西端水漬け遺構№3	木製品	柄？	(62.10)	5.10	3.80	スギ	0.8	
167-5	77	Ⅲ	谷北西端水漬け遺構	木製品	鞘先	4.75	3.20	2.00	カヤ？	0.8	
167-6		Ⅲ	谷北西端水漬け遺構	木製品	木鏃	(4.85)		1.25	針葉樹	0.7	
168	巻頭	Ⅲ	導水施設	木製品	木樋中央	416.20	40.00	10.80	ツブラジイ	0.95	
168	巻頭	Ⅲ	導水施設	木製品	木樋右	338.00	174.00	5.20	ツブラジイ	0.9	
168	巻頭	Ⅲ	導水施設	木製品	木樋左	(302.40)	19.00	5.20	ツブラジイ	0.8	
169-1	巻頭	Ⅲ	導水施設	木製品	木樋西	143.20	15.40	4.90		0.95	
169-2	巻頭	Ⅲ	導水施設	木製品	木樋下	(59.90)	27.60	3.00		0.3	
170-1	77	3	土9	木製品	枠	(17.70)	41.60	1.70	ヒノキ	0.8	
170-2	77	3	土9	木製品	蘭？	(20.70)	12.20	1.20		不明	
170-3	77	3	土9	木製品	編錘	17.20		5.70	散孔材	0.9	
170-4	77	3	4号井戸	木製品	底板	18.30	7.40	1.50	スギ	1	3枚1セット
170-5	77	3	4号井戸	木製品	底板	19.60	6.30	1.20	スギ		
170-6	77	3	4号井戸	木製品	底板	17.90	6.80	1.60	スギ		
170-7		3	4号井戸	木製品	梯子	(17.20)	(10.90)	7.00	マツ属？	0.1	
170-8		3	4号井戸	木製品	板状器具材	(13.50)	(3.40)	3.60	クヌギ節	0.1	
170-9		3	4号井戸	木製品	杭	(12.20)		2.25	散孔材	0.1	
170-10	77	3	5号井戸	木製品	底板	(12.00)	(5.00)	0.50	スギ	0.4	
170-11		3	5号井戸	木製品	曲物板	(23.10)	(5.50)	0.80		0.3	
170-12		3	5号井戸	木製品	板状器具材	(14.90)	(5.30)	(2.20)	スギ	0.1	
170-13		3	5号井戸	木製品	杭	(14.50)		5.00	アカガシ亜属	0.1	
171-1	77	3	3号井戸	木製品	鞍	23.50	(43.50)	3.70	アカガシ亜属	0.9	
171-2	77	3	3号井戸	木製品	壷鐙未製品	(13.60)	12.90	10.80	シイ属(ツブラジイ)	1	
172-1		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	楔	3.70	5.00	1.40	スギ	1	
172-2		Ⅲ	南側包含層2・3層	木製品	鍬？	(7.00)	(3.30)	0.30	スギ	0.1	
172-3	78	Ⅲ	包含層1層	木製品	鍬未製品	(20.90)	15.20	2.25	モミ属	0.7	
172-4		Ⅲ	包含層北3層	木製品	鋤未製品？	57.05	23.50	3.05	アカガシ亜属	0.8	
172-5	78	Ⅲ	黒色土包含層	木製品	杵？	28.20	5.90	4.00	スギ	1	
172-6		Ⅲ	包含層北1層	木製品	腰当？	(14.15)	(3.80)	2.30	ヒノキ	0.1	
172-7	78	Ⅲ	包含層1層	木製品	腰当	44.60	6.10	1.80	スギ	0.9	
172-8	78	Ⅲ	包含層西側1層	木製品	紡錘車	9.35		1.70	スギ	1	
172-9	78	3	包含層	木製品	編錘	(6.70)		3.50	散孔材	0.3	
172-10	78	3	包含層	木製品	編錘	(8.20)		4.70	散孔材	0.5	
172-11	78	Ⅲ	包含層北3層	木製品	編錘	(7.40)		6.40	散孔材	0.5	
172-12	78	Ⅲ	黒色土包含層	木製品	編錘	13.15		5.40	散孔材	0.7	
172-13		Ⅲ	南側包含層2層	木製品	木鏃	5.50	1.20	0.30	マツ属？	1	
172-14	78	Ⅲ	黒色土包含層	木製品	下駄	(22.60)	10.40	5.00	ヒノキ	0.7	
173-1		Ⅲ	包含層1層	木製品	曲物板	(6.70)	(2.50)	0.60	ヒノキ	0.1	
173-2		3	包含層	木製品	曲物板	(12.10)	(2.00)	1.20		0.1	
173-3	78	3	包含層	木製品	蓋板	10.80		0.80	スギ	1	
173-4	78	Ⅲ	黒色土包含層	木製品	底板	(6.00)		0.90	ヒノキ	0.6	

（　）は残存値

第６表　Ⅲ-C 区出土特殊遺物一覧表

挿図	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	樹種	残存	備考
173-5		Ⅲ	包含層1層	木製品	底板	(14.70)	(7.60)	0.85	ヒノキ	0.3	
173-6	78	Ⅲ	包含層1層	木製品	底板	(18.50)	(5.50)	0.70	スギ	0.4	
173-7		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	底板	(15.70)	(5.65)	0.85	スギ	0.3	
173-8		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	曲物板	(21.20)	(3.25)	0.95	ヒノキ	0.1	
173-9		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	曲物板	(40.00)	(5.60)	1.55	スギ	0.2	
173-10	78	Ⅲ	包含層1層	木製品	曲物板	(32.75)	11.30	1.00	ヒノキ	0.5	
173-11		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	蓋板	(9.80)	(3.60)	0.60	ヒノキ？	0.1	
173-12	78	3	包含層	木製品	蓋板	(11.70)	(4.60)	0.70	スギ	0.1	
173-13	78	Ⅲ	黒色土包含層	木製品	蓋板	(27.00)	5.10	1.65	ヒノキ	0.15	
173-14		Ⅲ	包含層1層	木製品	蓋板	(28.80)	(4.00)	1.20	ヒノキ	0.1	
173-15		Ⅲ	包含層？	木製品	蓋板	(22.90)	(3.10)	1.30	ヒノキ	0.1	
173-16		3	包含層	木製品	蓋板	(29.60)	7.00	0.90	ヒノキ	0.4	
173-17		Ⅲ	包含層？	木製品	底板	(33.30)	(5.20)	1.00		0.1	
173-18		3	包含層	木製品	蓋板	(26.70)	(9.30)	1.10	ヒノキ	0.3	
173-19	78	Ⅲ	包含層？	木製品	蓋板	(57.50)	(8.75)	1.30	ヒノキ	0.1	173-20と同一か
173-20	78	Ⅲ	包含層？	木製品	蓋板	(69.80)	(12.00)	1.10	ヒノキ	0.1	
174-1		Ⅲ	青灰色砂質土	木製品	盤？	(42.20)	(14.50)	4.00	スギ	0.3	
174-2		Ⅲ	青灰色砂質土	木製品	大足？	(27.30)	9.00	3.20	モミ属	0.4	
175-1		3	包含層	木製品	槽	(12.80)	(3.20)	2.70	ヒノキ	0.2	
175-2		Ⅲ	南側包含層1層	木製品	燃えさし	(10.90)	2.00	0.80	ヒノキ科	不明	
175-3		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	燃えさし	(16.50)	1.60	0.85	スギ	0.7	
175-4	78	Ⅲ	包含層？	木製品	荷札？	16.70	3.00	0.60	ヒノキ？	0.9	
175-5	78	Ⅲ	黒色土包含層	木製品	箸	(8.10)	0.85	0.30	スギ	0.3	
175-6	78	Ⅲ	黒色土包含層	木製品	匙？柄？	16.90	4.05	1.20	散孔材	0.8	
175-7		Ⅲ	包含層	木製品	扉？壁材？	(61.80)	13.70	2.30	スギ	0.5	
175-8		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	部材	52.90	(7.20)	4.60	ヒノキ	0.5	
175-9	78	Ⅲ	南側包含層1層	木製品	蹴放し？	(36.30)	9.50	5.50	モミ属	0.2	
175-10	79	Ⅲ	南側包含層1層	木製品	扉軸受？	(72.80)	(7.60)	3.20	モミ属	0.3	
175-11	79	Ⅲ	包含層	木製品	扉軸受？	(78.60)	14.20	3.20	ヒノキ	0.5	
175-12	79	Ⅲ	南側包含層1層	木製品	部材	(64.20)	(7.50)	8.10	モミ属	0.4	
175-13	79	Ⅲ	南側包含層1層	木製品	部材	(70.00)	13.10	6.00	散孔材	0.9	
176-1	79	Ⅲ	南側包含層1層	木製品	部材	(74.20)	17.00	14.70	クスノキ科	?	
176-2	79	Ⅲ	黒色土包含層	木製品	部材	(101.00)		10.80		0.95	
176-3	79	Ⅲ	包含層？	木製品	部材	190.10	12.90	1.55	ヒノキ	0.9	
176-4		Ⅲ	包含層1層	木製品	梯子	133.70	17.00	10.80	スギ	0.9	
176-5	79	Ⅲ	南側包含層1層	木製品	柱	(73.10)		14.70		0.3	
176-6		Ⅲ	南側包含層1層	木製品	ねずみ返し	(54.20)	(26.40)	4.60		0.5	
177-1	79	Ⅲ	包含層北2層	木製品	残材	(10.50)	3.70	2.00	スギ	0.4	
177-2		Ⅲ	包含層北1層	木製品	板状器具材	(8.65)	(2.80)	0.80	スギ	不明	
177-3		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	板状器具材	(9.45)	2.40	0.60	ヒノキ科	不明	
177-4		Ⅲ	包含層西側1層	木製品	板状器具材	(11.10)	(6.10)	1.80	ヒノキ	0.1	
177-5	79	Ⅲ	包含層1層	木製品	板状器具材	(14.90)	(5.40)	1.80	スギ	0.6	
177-6		3	包含層	木製品	板状器具材	5.20	(7.40)	3.60	ヒノキ	0.1	
177-7		3	包含層	木製品	板状器具材	(8.70)	(3.70)	2.20	ヒノキ	0.1	
177-8		3	包含層	木製品	板状器具材	4.80	(5.00)	(4.10)		0.1	
177-9		3	包含層	木製品	板状器具材	15.40	(6.50)	6.20		不明	
177-10		3	包含層	木製品	板状器具材	15.30	(7.20)	5.00		不明	
177-11		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	板状器具材	13.65	3.60	1.30	スギ	0.8	
177-12	79	Ⅲ	包含層1層	木製品	板状器具材	(15.80)	6.90	0.95	アカガシ亜属	0.5	
177-13		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	板状器具材	(27.90)	(7.80)	2.60	スギ	不明	
177-14		3	包含層	木製品	板状器具材	(20.00)	7.80	0.90	ヒノキ	0.5	
177-15		Ⅲ	黒色土包含層	木製品	板状器具材	(20.80)	3.50	0.85	ヒノキ	不明	
177-16	79	Ⅲ	包含層1層	木製品	板状器具材	(74.20)	8.20	1.90	スギ	不明	
177-17		Ⅲ	包含層1層	木製品	板状器具材	(41.70)	6.10	1.55	ヒノキ	不明	
177-18	79	Ⅲ	包含層？	木製品	板状器具材	(50.40)	4.10	1.20	スギ	0.8	
177-19	79	Ⅲ	包含層？	木製品	板状器具材	104.60	8.00	2.70	ヒノキ	不明	
177-20	79	Ⅲ	南側包含層1層	木製品	杭	(40.30)		(8.60)	散孔材	0.3	
177-21		Ⅲ	包含層？	木製品	杭	(11.35)	(3.10)	(1.90)	ミカン科？	0.1	
177-22		Ⅲ	包含層？	木製品	杭	(23.60)		3.40	散孔材	0.4	
178-1		3	包含層	木製品	棒状器具材	24.30	1.70	1.30	針葉樹	0.7	
178-2		3	包含層	木製品	棒状器具材	11.70	3.20	2.70	スギ	1	
178-3		Ⅲ	黒色土包含層確認Tr.,	木製品	棒状器具材	(12.80)	2.20	1.10		0.5	
178-4		Ⅲ	包含層	木製品	板状器具材	(18.80)	2.10	0.65	スギ	0.7	
178-5		Ⅲ	南側包含層1層	木製品	棒状器具材	(22.60)	3.55	1.95	散孔材	0.8	
178-6		Ⅲ	包含層西側1層	木製品	棒状器具材	(26.40)	3.50	1.75	スギ	不明	
178-7		Ⅲ	南側包含層2・3層	木製品	棒状器具材	(43.90)	4.00	1.70	ヒノキ	0.8	
179-1	80	3	包含層	木製品	木簡	18.10	3.10	0.60	未同定	0.9	
179-2	80	3	3号井戸 No.13	木製品	木簡	12.50	3.50	0.40	未同定	1	
179-3	80	3	3号井戸 No.12	木製品	木簡	(8.10)	(3.90)	0.50	未同定	0.2	
179-4	80	3	3号井戸 No.15	木製品	札	(9.30)	(2.50)	0.30	未同定	0.1	
179-5	80	3	3号井戸 No.16	木製品	木簡	(20.10)	(2.60)	0.30	未同定	0.7	
179-6	80	3	3号井戸 No.14	木製品	札	(24.70)	(2.40)	0.40	未同定	0.8	
179-7	80	3	包含層	木製品	札	(18.50)	2.50	0.90	未同定	1	

（　）は残存値

第６表　Ⅲ-C 区出土特殊遺物一覧表

Ⅳ　科学分析

1　樹種同定

株式会社古環境研究所

（1）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、構造の特徴から概ね属レベルの同定が可能で、炭化しても特徴は残るため同定が可能である。木材や炭化材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。

ここでは、福岡県行橋市大字延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-AB 区 27 号竪穴住居跡より出土した炭化材の同定を行い、当時の木材利用について検討する。

（2）試料と方法

試料は、延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-AB 区 27 号竪穴住居跡内の大型方形土坑（古墳時代前期前半）から出土した炭化材２点である（第 25 図）。東西方向の炭化材中央部から採取したものを炭１サンプル、南北方向の炭化材中央部から採取したものを炭２サンプルとしている。

樹種同定の方法は以下の通りである。試料を割り折りして新鮮な横断面（木口）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面を作製し、落射顕微鏡によって 50 ～ 1000 倍で観察した。同定は、分類群の特徴を確認するとともに、必要な場合は現生標本と対比して行った。また観察時には破片に別れており別材の可能性があるため、観察可能なものはすべて観察した。

（3）結果

同定の結果、延永ヤヨミ園遺跡の２試料はヒノキ科とコナラ属アカガシ亜属と同定された（第７表）。いずれも消し炭（からけし）の状態であり、極めて軟質で焼き膨れが著しく、焼き膨れ部に土が入り込む保存状態の悪いものであった。以下に特徴を記し、顕微鏡写真を示す。

試料名		分類群	
		学名	和名
27号住居跡	炭１サンプル	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
	炭２サンプル	Cupressaceae	ヒノキ科

第７表　延永ヤヨミ園遺跡における木材同定結果

１）ヒノキ科　Cupressaceae　：炭２サンプル

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は接線状に配列し、燃焼により焼き膨れる。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔が燃焼により観察できない。接線断面では、放射組織は単列の同性放射組織型で、焼き膨れが認められる。

以上の特徴からヒノキ科に同定される。ヒノキ科の中で代表的なヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40m、径 1.5m に達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築などに広く用いられる。

２）コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　　ブナ科　：炭１サンプル

横断面では、中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面では道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面では、放射組織は同性放射組織型で単列のものと大型の広放射組織からなる複合

放射組織が観察される。

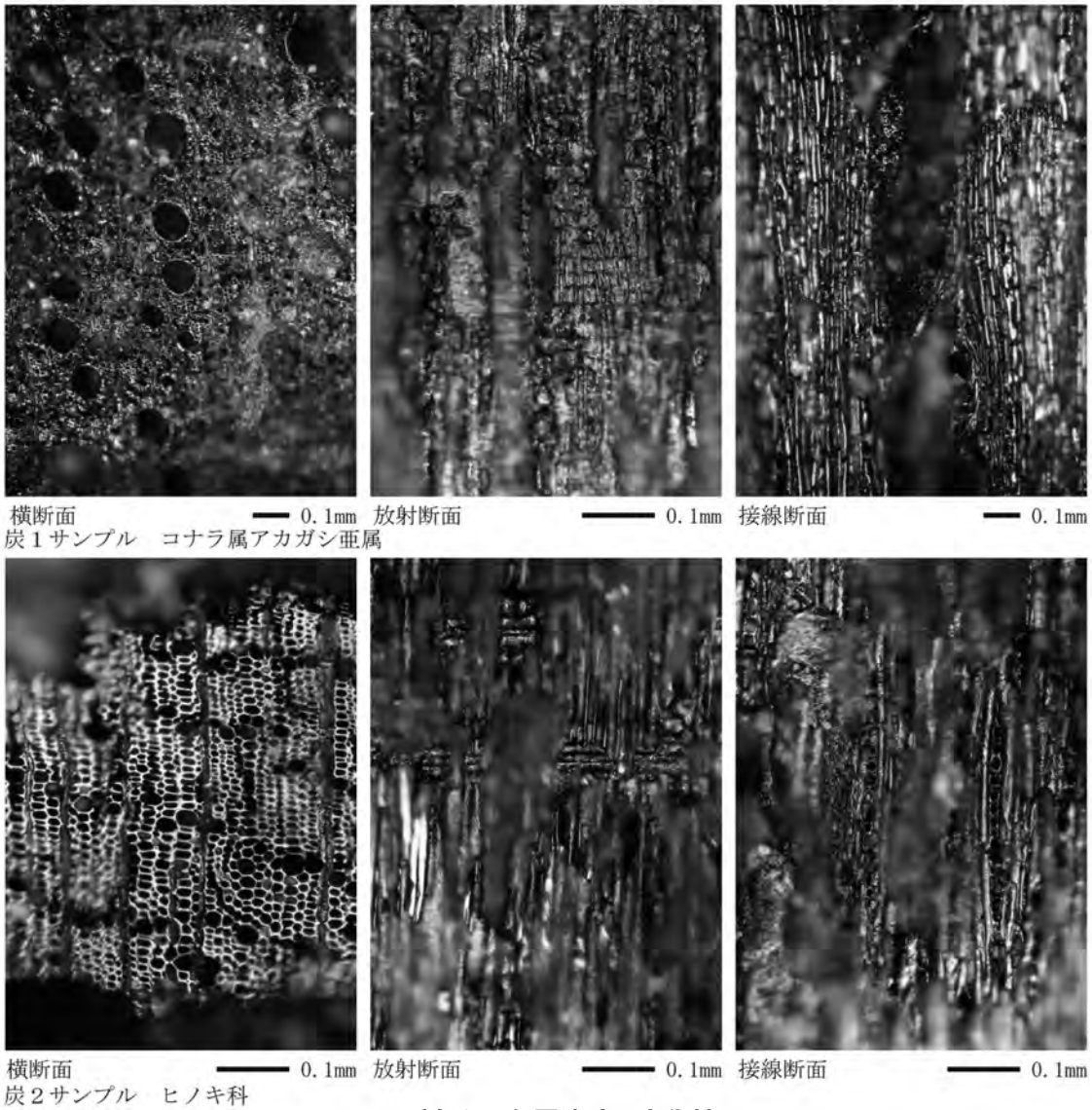
以上の特徴よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 30m、径 1.5m 以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

（4）考察

延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ - ＡＢ区 27 号竪穴住居跡（古墳時代前期前半）出土の炭化材は、ヒノキ科１点、コナラ属アカガシ亜属１点であった。

コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、照葉樹林の主要構成要素で西南日本の暖温帯に分布する。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。堅硬な材であり、建築部材などに広く用いられるが、西南日本では弥生時代以降、特に農耕具を中心に用いられる傾向にある。また薪などの燃料材としても有用である。なお、九州では古墳時代にコナラ属アカガシ亜属が多用される。

ヒノキないしヒノキ科の木材は、大きな材がとれる良材であり、ヒノキ科の樹木は適潤性であるが冷温帯から暖温帯にまたがる中間域に生育する。九州では古墳時代初頭においての針葉樹の利用率は低く、その中でもヒノキ科の利用は極めて低い傾向にあることが指摘されている。福岡県内で



延永ヤヨミ園遺跡の炭化材

は弥生時代後期～古墳時代初頭にヒノキ、アスナロ、ネズコなどの報告例が見られ、用途としては容器、調度品、土木材、木簡などに利用されているが、建築部材としての報告例は少ない。

本遺跡が分布する福岡県を含む九州地方では、古墳時代では広葉樹の利用が高く、針葉樹の利用は低いことがこれまでの研究で判明している。特に古墳時代初頭では、針葉樹の中でもヒノキ科の報告例は少ないことから、当地域ではあまり生育していなかったため、事例が少ない理由となっている可能性がある。したがって、本遺跡ではコナラ属アカガシ亜属は周辺地域のものを利用していた可能性が高いが、利用事例の少ないヒノキ科については今後の分析事例の蓄積が必要で、本事例は貴重な調査例となった。

また、２試料とも焼き膨れの著しい軟質の消し炭（からけし）の状態で出土したため、火災などで燃焼したと考えられる。

【参考文献】

佐伯浩・原田浩 1985「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版，pp.20-48.
佐伯浩・原田浩 1985「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版，pp.49-100.
島地謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣，p.296.
山田昌久 1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究特別第１号』植生史研究会 p.242.

２　種実同定

株式会社古環境研究所

（１）はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べることで、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。ここでは、延永ヤヨミ園遺跡で出土した種実の同定を行い、当時の植生について検討する。

（２）試料

試料は、弥生時代後期後半～古代、中世の包含層と、古代の 3001 号溝より出土した水洗選別済みの試料である。試料の詳細は結果とともに第８表に記載する。

（３）方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

（４）結果

１）分類群

樹木３、草本１の計４分類群が同定された。学名、和名および粒数を第８表に示し、第９表に計

遺構名		分類群		部位	個数	備考
		学名	和名			
黒色土	包含層	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	3	
		Unknown seeds	不明種実	果実(破片)	(+)	
黒色土	包含層　確認Tr	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	1	齧歯類咬み痕有
溝3001	ベルト3層	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	2	
	中層　黒褐土	*Prunus persica* Batsch	モモ	核　(完形)	4	
				(半形)	1	
				(破片)	13	
１Tr		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果	1	
南側	包含層　2層	*Myrica rubra* S. et Z.	ヤマモモ	核	1	
		Prunus persica Batsch	モモ	核	1	
土坑3014	№6	*Lagenaria siceraria* Standl.	ヒョウタン類	果皮(破片)	41	木片(1)

第８表　延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ -C 区における種実同定結果

測値を示す。主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　毬果　マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。

ヤマモモ　*Myrica rubra* S. et Z.　核　ヤマモモ科

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

モモ　*Prunus persica* Batsch　核（完形・半形・破片）　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

〔草本〕

ヒョウタン類　*Lagenaria siceraria* Standl.　果皮（破片）　ウリ科

果皮は、木質化しやや厚みがある。表面はなめらかで裏面は粗い。

藤下がヒョウタン仲間とするものには、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

・不明種実―種実ではあるが、細かい破片のため同定まで至らなかった。

2）種実群集の特徴

1.黒色土、包含層

樹木種実のモモ３、不明種実破片が同定された。

2.黒色土、包含層　確認 Tr

樹木種実のモモ１が同定された。

3.3001 号溝

・ベルト３層：樹木種実のモモ２が同定された。

・中層　黒褐土：樹木種実のモモ完形４、半形１、破片 13 が同定された。

4. 1 Tr

樹木種実のマツ属複維管束亜属１が同定された。

5.南側、包含層　２層

樹木種実のヤマモモ１、モモ１が同定された。

6.土坑 3014、№6

草本種実のヒョウタン類 41 が同定された。

遺構名		長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
黒色土	包含層	21.85	17.38	14.18
		23.08	20.02	16.09
		27.13	21.20	18.55
黒色土	包含層　確認Tr	22.92	—	14.71
溝3001	ベルト3層	23.41	17.24	13.28
		21.89	17.60	13.00
	中層　黒褐土	25.07	20.13	14.99
		22.58	16.94	13.24
		23.30	17.77	13.66
		20.54	17.68	11.98
		23.21	19.21	—
南側	包含層　2層	27.77	23.98	17.59
	平均値	23.56	17.43	13.44
	最大値	27.77	23.98	18.55
	最小値	20.54	16.94	11.98

第９表　延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ -C 区出土種実（モモ）計測値

（5）種実同定から推定される植生と農耕

延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ -C 区より出土した種実では、マツ属複維管束亜属、ヤマモモ、モモ、ヒョウタン類が同定された。モモがやや多く、マツ属複維管束亜属、ヤマモモ、ヒョウタン類は各１である。これらの中で、モモとヒョウタン類は栽培植物であることから、栽培され利用されたか、投棄された残渣であると考えられる。モモ核は金原（1996）に示される、丸く厚みがあり、稲作とと

もに伝播してきた最も古くからある形態のものに相当する。ヤマモモは暖地の海岸沿いに自生し、果実が食用となるため、採取され利用されたとみなされる。マツ属複維管束亜属は大型の毬果であるため移動性が低く、周囲に生育していたと推定される。二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツとがあるが、ここではクロマツであると考えられる。

（6）まとめ

延永ヤヨミ園遺跡のⅢ -C 区において出土した種実の同定を行った結果、樹木種実のマツ属複維管束亜属、ヤマモモ、モモ、草本種実のヒョウタン類が同定された。モモとヒョウタン類は栽培植物であり遺跡周辺で栽培され、マツ属複維管束亜属、ヤマモモはいずれも海岸沿いに自生分布し、果実が食用になるヤマモモは採取され利用された。

【参考文献】

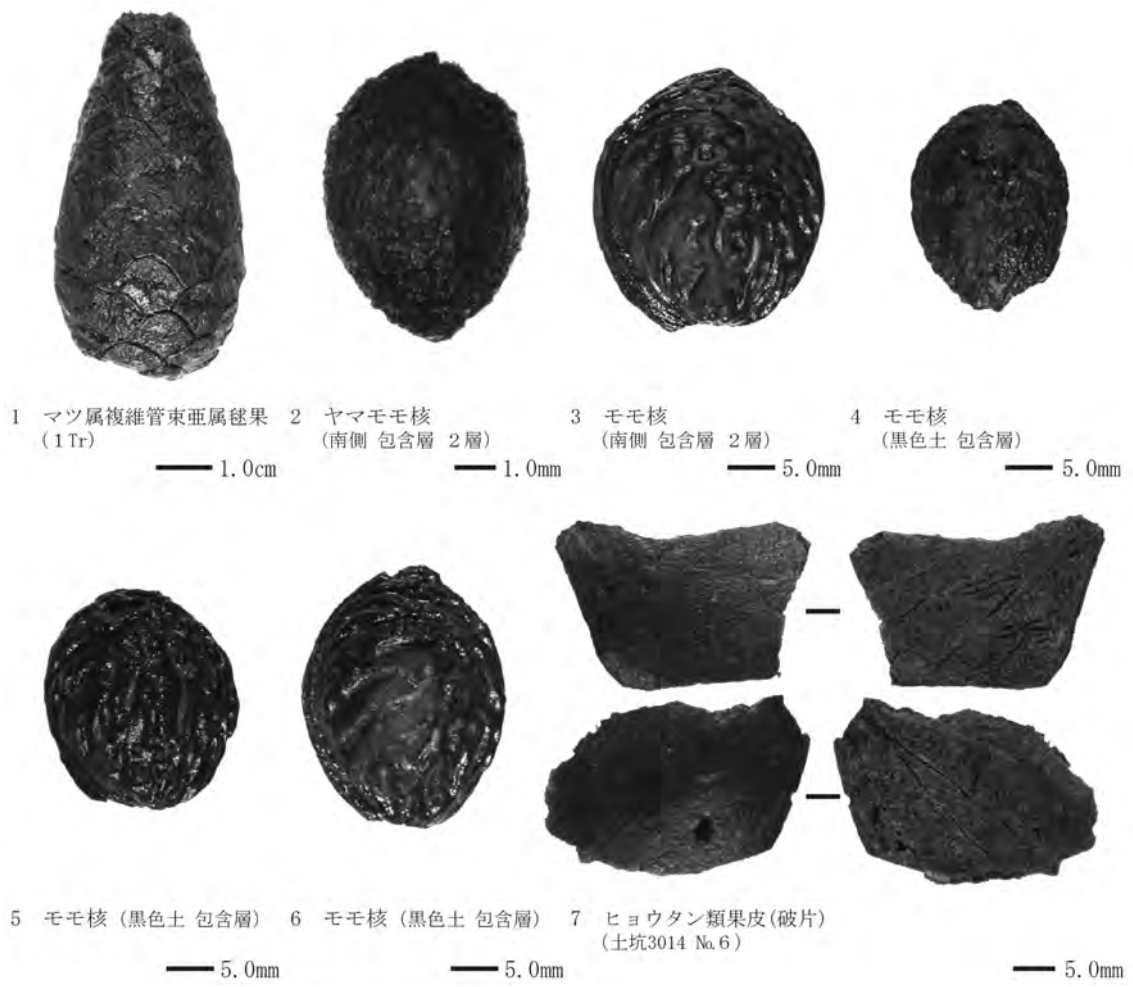
金原正明 1996「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル』409, pp.15-19. ニューサイエンス社

藤下典之 1982「菜畑遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L. とヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. の種子について」『唐津市文化財調査報告第５集菜畑遺跡』pp.455-463. 唐津市教育委員会

藤下典之 1992「出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、その種類、渡来、伝搬、利用について」『考古学ジャーナル』354 pp.7-13. ニュー・サイエンス社

南木睦彦 1991「栽培植物」『古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ』pp.165-174. 雄山閣出版

南木睦彦 1992「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナル』355 pp.18-22. ニューサイエンス社



延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ -C 区の種実

3　導水施設の 14C ウイグルマッチング

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・小林克也

（1）はじめに

福岡県行橋市に位置する延永ヤヨミ園遺跡の導水施設に用いられていた木樋について、ウイグルマッチング法による放射性炭素年代測定を行った。

（2）試料と方法

試料は、導水施設の木樋である生材で、試料の樹種はツブラジイである。試料の時期は、古墳時代と考えられているが、それ以上の時期の絞り込みが行なえていなかった。

試料の最外部では、最終形成年輪が確認できなかったが、樹皮に近い部分が残存していた。試料の年輪を数え、目印として５年輪毎にピンを打った後、ウイグルマッチング用に３ヶ所から試料を採取した。採取は４ないし５年輪をひとまとめで切り出した。採取した年輪は、樹皮側から順に、1 - 5年目、11-15 年目、21-24 年目である。また、測定試料の情報、調製データは第 10 表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理
PLD-23088	遺構:導水施設 種類:生材（ツブラジイ） 試料の性状:樹皮に近い部分を採取 年輪数:24 器種:木樋 状態:wet	採取位置:1-5 y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-23089		採取位置:11-15 y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-23090		採取位置:21-24 y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)

第 10 表　ウイグルマッチング測定試料および処理

（3）結果

第 11 表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ 13C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代、ウイグルマッチング結果を、第 181 図にウイグルマッチング結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代（yrBP）の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また､付記した 14C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正、ウイグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウイグルマッチング法]

ウイグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、１年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し､それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせることにより最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、４ないし５年輪をまとめた試料の中心の年代を表している。そのため、試料となった木材の最終形成年輪の年代を得るためには、最外試料の中心よりも外側にある年輪数を考慮する必要がある。

（4）考察

最外試料（1-5 年目）は、2 σ暦年代範囲（確率 95.4％）において、255 ～ 278 cal AD（61.7％）、318 ～ 346 cal AD（33.7％）で、３世紀中頃～３世紀後半、４世紀前半～４世紀中頃の暦年代範囲を示した。この暦年代範囲は古墳時代前期に相当する。

木樋（PLD-23088 ～ 23090）の測定部位は樹皮に近い部分を採取しているが、最終形成年輪は採取できなかった。木材の場合､最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。そのため木樋は古木効果の影響、すなわち実際の伐採年代よりも若干古い年代を示している可能性がある。

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-23088 (1-5y)	-29.65 ± 0.15	1690 ± 19	1690 ± 20	338AD(68.2%)397AD	260AD(11.6%)285AD 322AD(83.8%)414AD
PLD-23089 (11-15y)	-28.92 ± 0.14	1760 ± 19	1760 ± 20	241AD(23.1%)260AD 283AD(45.1%)324AD	230AD(95.4%)340AD
PLD-23090 (21-24y)	-30.07 ± 0.17	1783 ± 19	1785 ± 20	219AD(48.4%)259AD 297AD(19.8%)320AD	140AD(12.9%)195AD 209AD(53.7%)262AD 279AD(28.8%)328AD
		最外試料年代		259AD(53.4%)273AD 327AD(14.8%)335AD	255AD(61.7%)278AD 318AD(33.7%)346AD

第 11 表　放射性炭素年代測定、暦年較正、ウイグルマッチングの結果

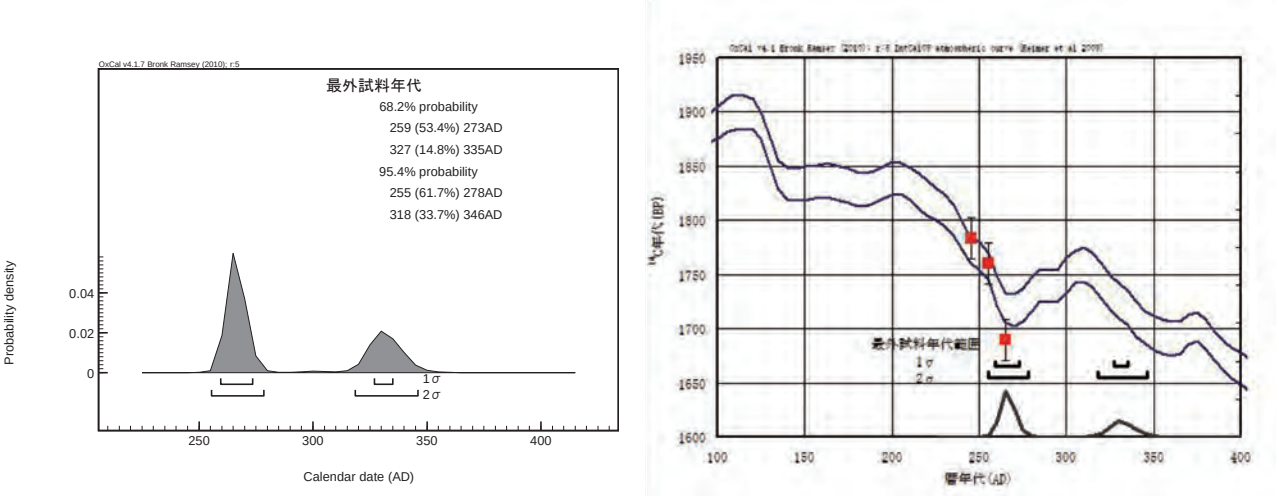
【参考文献】

Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. 2001 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon,* 43（2A）, pp.381-389.

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51（1）, pp.337-360.

中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」』3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. 2009 IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.



第 181 図　ウイグルマッチング結果

年代測定を行った試料（ピンは 5 年輪間隔）1. 木樋　全形（ツブラジイ；PLD-23088 ～ PLD-23090）
2. 木樋　年輪計測結果（ツブラジイ；PLD-23088 ～ PLD-23090）

4　寄生虫卵分析

森　将志（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

福岡県行橋市に所在する延永ヤヨミ園遺跡において、古墳時代の導水施設が検出された。この導水施設は、トイレに関わる可能性が疑われているが、確証は得られていない。そこで、導水施設直上に付着した土の寄生虫卵分析を行い、トイレ関連遺構の可能性について考察した。

（2）試料と分析方法

分析試料は、導水施設木樋直上付着土（砂混じり褐色泥炭質シルト質粘土）と包含層３層（植物遺体混じり褐色シルト質砂）の２点である。これらの試料について、以下の手順にしたがって寄生虫卵分析を試みた。

計量した試料に、10％の水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46％のフッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え 10 分間湯煎）を行う。水洗後、この残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。なお、試料１ｇ中の寄生虫卵含有数は、次式で求める。

X ＝ BD/AC

X：試料１ｇ中の寄生虫卵含有数、A：分析に用いた試料の重量（g）、B：濃縮試料＋グリセリンの重量（g）、C：濃縮試料＋グリセリンのうち、封入に用いた重量（g）、D：プレパラート中の寄生虫卵数

（3）分析結果

検鏡にあたって、計量した値を第 12 表に示す。検鏡の結果、今回の分析試料からは寄生虫卵の産出は確認できなかった。

	3層	付着土
分析に用いた試料(g)	2.076	2.411
残渣＋グリセリン(g)	0.777	0.987
封入に用いた量(g)	0.053	0.043

第 12 表　寄生虫卵分析に用いた試料の計量値

（4）考察

今回の分析試料からは寄生虫卵の産出が認められなかった。さらに、３層と導水施設木樋直上付着土の花粉分析結果では、ソバ属やアカザ科 - ヒユ科などの食用や薬用となる分類群の顕著な産出は見られず、トイレ関連遺構特有の花粉組成を示しているとは言い難い（花粉分析の項参照）。よって、導水施設がトイレに関わる可能性は低いと思われる。

5　花粉分析、プラント・オパール分析

森　将志（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

福岡県行橋市に所在する延永ヤヨミ園遺跡において、遺跡周辺の古植生を検討する目的で花粉分析とプラント・オパール分析用の試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

（2）試料と方法

分析試料は、包含層の１～３層から採取された３点と、導水施設木樋直上付着土１点の計４点である。１層は褐色有機質シルト、２層は黒色泥炭質粘土質シルト、３層は植物遺体混じり褐色シルト質砂、導水施設木樋直上付着土は砂混じり褐色泥炭質シルト質粘土である。包含層１～３層の堆積時期は、いずれの試料も弥生時代～古墳時代後期後半と考えられている。導水施設の時期は古墳

時代と考えられている。これらのうち、花粉分析では全ての試料を、プラント・オパール分析では３試料（１～３層）を用いて、以下の手順で分析を行った。

2-1. 花粉分析

試料（湿重量約３～４g）を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは、樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本を作製し、写真を撮った。P241 に載せた分類群ごとの単体標本（PLC.877 ～ 883）は、パレオ・ラボに保管されている。

学名	和名	1層	2層	3層	付着土
樹木					
Podocarpus	マキ属	-	-	-	1
Abies	モミ属	7	2	7	3
Tsuga	ツガ属	4	2	4	2
Picea	トウヒ属	2	-	-	-
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	11	11	29	13
Sciadopitys	コウヤマキ属	-	-	-	1
Cryptomeria	スギ属	32	29	22	8
Taxaceae－Cephalotaxaceae－Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	-	3	1	-
Salix	ヤナギ属	1	-	-	-
Myrica	ヤマモモ属	2	-	1	2
Pterocarya－Juglans	サワグルミ属－クルミ属	3	1	3	-
Carpinus－Ostrya	クマシデ属－アサダ属	4	2	-	4
Corylus	ハシバミ属	1	-	3	-
Betula	カバノキ属	1	-	2	-
Alnus	ハンノキ属	-	1	35	1
Fagus	ブナ属	3	2	-	-
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	19	21	67	16
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	65	37	67	112
Castanea	クリ属	10	38	52	48
Castanopsis－Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	35	53	34	16
Ulmus－Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	-	-	3	4
Celtis－Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	4	1	4	-
Euptelea	フサザクラ属	1	-	-	-
Phellodendron	キハダ属	1	1	1	-
Ilex	モチノキ属	-	5	-	-
Aesculus	トチノキ属	-	-	1	-
Vitis	ブドウ属	1	-	1	-
Ampelopsis	ノブドウ属	-	-	19	-
Araliaceae	ウコギ科	-	-	3	-
Ligustrum	イボタノキ属	-	-	24	-
Fraxinus	トネリコ属	-	-	1	1
Callicarpa	ムラサキシキブ属	-	-	1	1
Viburnum	ガマズミ属	1	-	-	-
草本					
Typha	ガマ属	3	2	1	5
Sagittaria	オモダカ属	28	-	-	-
Gramineae	イネ科	612	127	88	146
Cyperaceae	カヤツリグサ科	37	41	42	17
Monochoria	ミズアオイ属	33	-	-	-
Moraceae	クワ科	140	19	5	27
*Polygonum*sect. *Persicaria－Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	2	-	3	4
*Polygonum*sect. *Reynoutria*	イタドリ節	3	-	1	-
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	46	7	2	5
Caryophyllaceae	ナデシコ科	4	-	-	1
Brassicaceae	アブラナ科	79	24	2	6
Rosaceae	バラ科	-	-	2	2
Leguminosae	マメ科	-	5	2	-
Impatiens	ツリフネソウ属	-	5	-	1
Lythrum	ミソハギ属	1	1	-	-
Apiaceae	セリ科	5	7	-	3
Nymphoides indica	ガガブタ	1	-	-	-
Solanum	ナス属	1	-	-	-
Actinostemma－Gynostemma	ゴキヅル属－アマチャヅル属	-	-	1	1
Ambrosia－Xanthium	ブタクサ属－オナモミ属	-	1	-	1
Artemisia	ヨモギ属	23	47	23	48
Tubuliflorae	キク亜科	8	3	2	2
Liguliflorae	タンポポ亜科	1	1	-	1
シダ植物					
monolate type spore	単条溝胞子	5	1	2	2
trilate type spore	三条溝胞子	3	2	4	-
Arboreal pollen	樹木花粉	208	209	385	233
Nonarboreal pollen	草本花粉	1027	290	174	270
Spores	シダ植物胞子	8	3	6	2
Total Pollen&Spores	花粉・胞子総数	1243	502	565	505
Unknown pollen	不明花粉	7	9	6	-

第 13 表　産出花粉化石一覧

	イネ（個/g）	ネザサ節型（個/g）	ササ属型（個/g）	他のタケ亜科（個/g）	ヨシ属（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）
1層	11,400	55,400	4,300	1,400	1,400	51,200	19,900
2層	44,500	31,200	2,200	0	180,300	102,400	71,200
3層	14,300	2,000	6,100	0	4,100	42,800	16,300

第 14 表　試料 1g 当たりのプラント・オパール個数

2-2. プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後､再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレ

パラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、P242 に載せた。

（3）結果

3-1. 花粉分析

検鏡した結果、検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 33、草本花粉 23、形態分類のシダ植物胞子２の総計 58 である。これらの花粉・胞子の一覧表を第 13 表に、分布図を第 182 図に示した。図表においてハイフン（-）で結んだ分類群は､それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科やバラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

樹木花粉ではマツ属複維管束亜属やスギ属､コナラ属コナラ亜属､コナラ属アカガシ亜属､クリ属､シイノキ属 - マテバシイ属の産出が目立つ。マツ属複維管束亜属は５～８%、スギ属は３～ 15%、コナラ属コナラ亜属は７～ 17%、コナラ属アカガシ亜属は 17 ～ 48%、クリ属は５～ 21%、シイノキ属 - マテバシイ属は７～ 25% の産出率を示す。

草本花粉ではイネ科が 16% ～ 49% と最も多く産出している。その他では、全ての試料から産出している分類群としてカヤツリグサ科やクワ科、ヨモギ属が挙げられ、それぞれ３～８%、１～ 11%、２～ 10% の産出率を示す。また、水生植物のガマ属（全ての試料）やオモダカ属（１層)、ミズアオイ属（１層)、ガガブタ（１層）や好湿性のツリフネソウ属（２層、付着土）やゴキヅル属 - アマチャヅル属（３層、付着土）などがわずかに産出している。

3-2. プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（第 14 表)、分布図を第 183 図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料１ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の７種類の機動細胞珪酸体が確認できた。イネ機動細胞珪酸体は 11,400 個～ 44,500 個、ネザサ節型機動細胞珪酸体は 2,000 個～ 55,400 個、ササ属型機動細胞珪酸体は 2,200 個～ 6,100 個産出している。他のタケ亜科機動細胞珪酸体は１層から産出しており、1,400 個である。ヨシ属機動細胞珪酸体は 1,400 個～ 180,300 個、キビ族機動細胞珪酸体は 102,400 個～ 51,200 個、ウシクサ族機動細胞珪酸体は 16,300 個～ 71,200 個産出している。

（4）考察

まず、１～３層の花粉分析結果を見ると、照葉樹林要素のコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属 - マテバシイ属や、スギ属の産出が目立つ。よって、遺跡周辺の丘陵地などにはカシ類やシイ類からなる照葉樹林やスギ林が存在していたと思われる。次いでマツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属、クリ属の産出が多い。これらの分類群には里山の二次林を構成する種類が含まれるため、遺跡周辺にはアカマツやコナラ、クリなどからなる二次林が広がっていた可能性がある。プラント・オパール分析ではネザサ節型機動細胞珪酸体やウシクサ族機動細胞珪酸体が産出しており、二次林の林縁部や明るく開けた場所には、ネザサ節型のササ類やススキやチガヤなどのウシクサ族が生育し

ていたと思われる。以上の樹木花粉について産出率に注目すると、コナラ属コナラ亜属とクリ属は上位層で減少傾向にあるため、コナラやクリなどからなる二次林は分布を減少させた可能性が考えられる。一方で、スギ属とコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属 - マテバシイ属は上位層に向かって増加傾向を示しているため、遺跡周辺のスギ林や照葉樹林は分布を拡大させていた可能性がある。後述するように、１層では水田稲作が行われていたと考えられ、活発な人間活動が窺えるため、上位層で増加する照葉樹林はアラカシやシイなどの二次林であったかもしれない。

導水施設直上付着土では、１～３層と同じくマツ属複維管束亜属やスギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、シイノキ属 - マテバシイ属の産出が目立つが、１～３層に比べるとコナラ属アカガシ亜属の産出が突出している。このような花粉組成の相違が生じる原因は不明であるが、導水施設木樋直上付着土と包含層（１～３層）とでは堆積様式が異なっていたため、このような違いが生じたのであろうか。

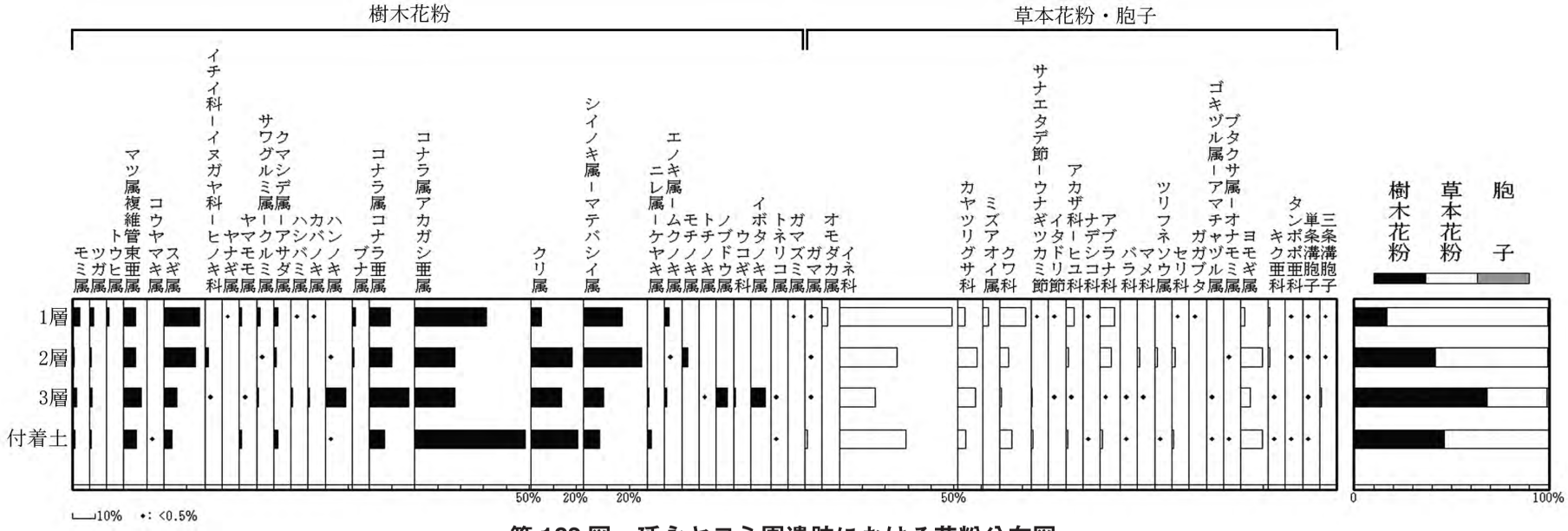
次に、草本花粉に注目すると、１～３層ではイネ科の産出が多く、上位層に向かって増加している。さらに、１層では水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属の産出が見られるため、１層堆積時には遺跡周辺で水田稲作が行われていたと思われる。プラント・オパール分析においても多量のイネ機動細胞珪酸体が産出しており、稲作の存在が窺われる。ここで注目すべきは２層と３層である。花粉分析では稲作を示す顕著な証拠は得られなかったが、プラント・オパール分析においてはイネ機動細胞珪酸体の産出が確認された。イネ機動細胞珪酸体については、試料１g 当り 5,000 個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で確認された水田址の範囲とがよく対応する結果が得られており（藤原 1984）、試料１g 当り 5,000 個が水田土壌か否かを判断する目安とされている、２層と３層のプラント・オパール分析の結果は、水田土壌の目安とされる量と比較しても十分に多い。水田からもたらされたのか、人為的に運ばれてきたのかは不明であるが、２層と３層の堆積時期に試料採取地点周辺にイネが存在していたのは確かであろう。

その他の草本花粉では、水生植物のガマ属（全ての試料）やガガブタ（１層）、好湿性のツリフネソウ属（２層、付着土）やゴキヅル属 - アマチャヅル属（３層、付着土）の産出が見られる。プラント・オパール分析においても湿地に生育するヨシ属の産出が全試料に見られ、特に２層では突出した産出量を示している。よって、遺跡周辺の低地や水田周辺などの湿地的環境には、これらの分類群が生育していたと考えられる。前述したウシクサ族には、乾燥的環境に生育するススキやチガヤなどの他に、湿地的環境に生育するオギなども含まれるため、ウシクサ族機動細胞珪酸体には、湿地周辺に生育するオギから供給された機動細胞珪酸体も含まれている可能性がある。

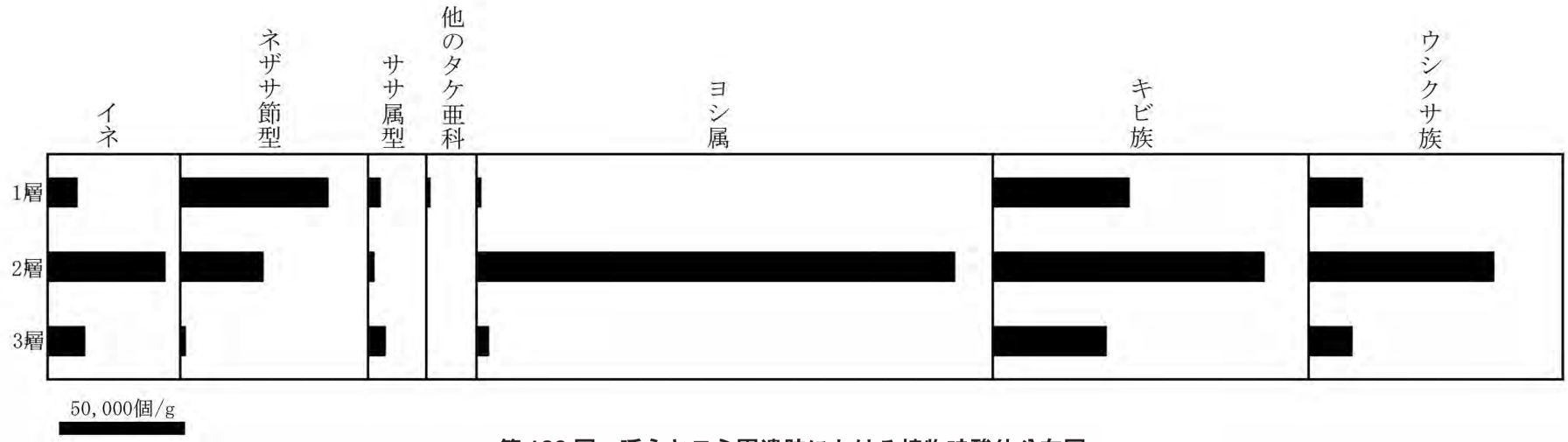
さらに、全ての試料からキビ族機動細胞珪酸体が産出した。キビ族にはキビやアワ、ヒエなどの栽培やエノコログサやイヌビエなどの野生種が含まれるが、栽培種か野生種かを機動細胞珪酸体の形態で区別するのは難しい。栽培種か野生種かは不明だが、キビ族も遺跡周辺に生育していたと考えられる。

【引用文献】

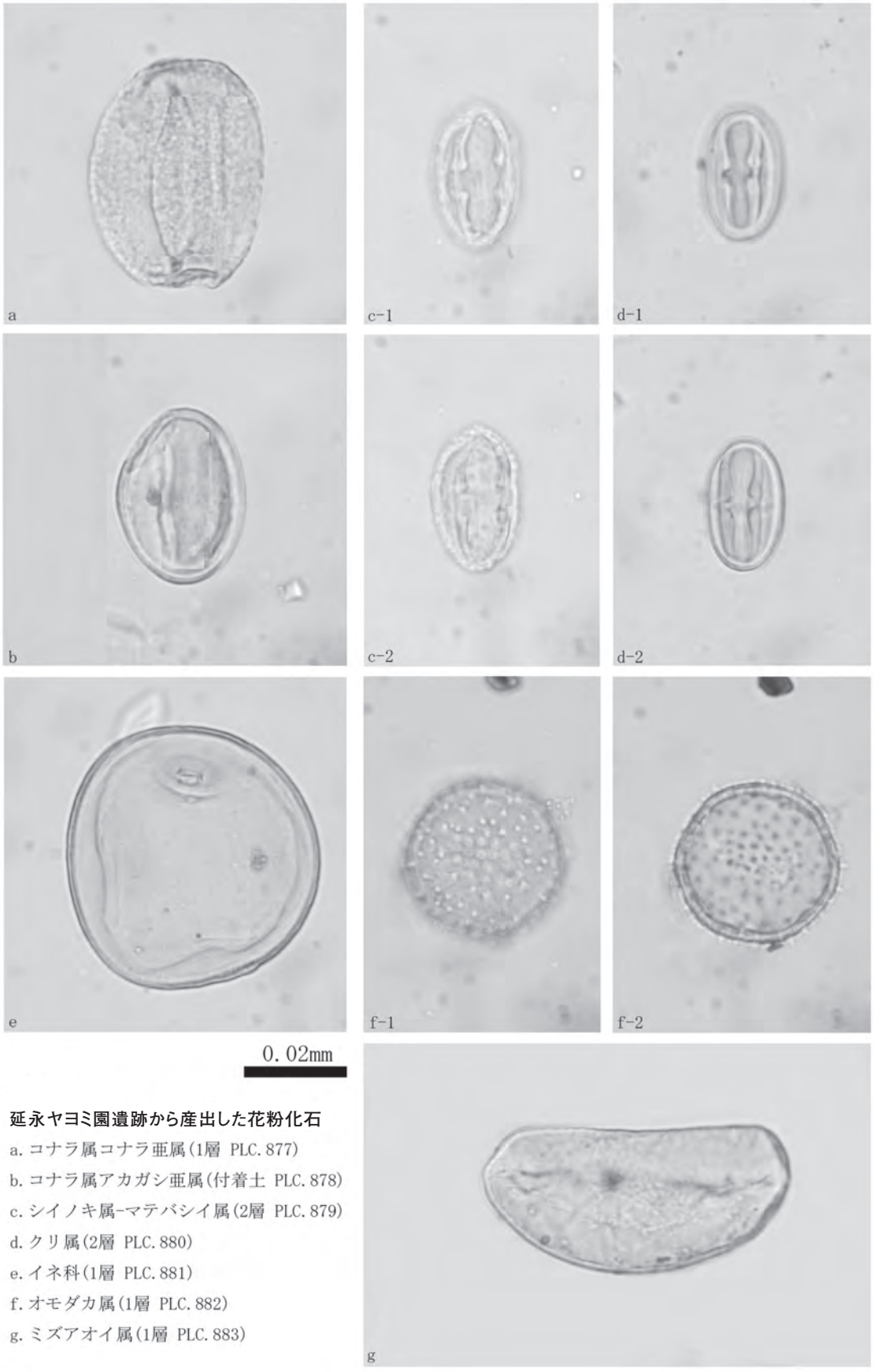
藤原宏志 1984「プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－」『考古学ジャーナル』227, pp.2-7　ニュー・サイエンス社



第 182 図　延永ヤヨミ園遺跡における花粉分布図
樹木花粉は樹木花粉総数、草木花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で産出した。

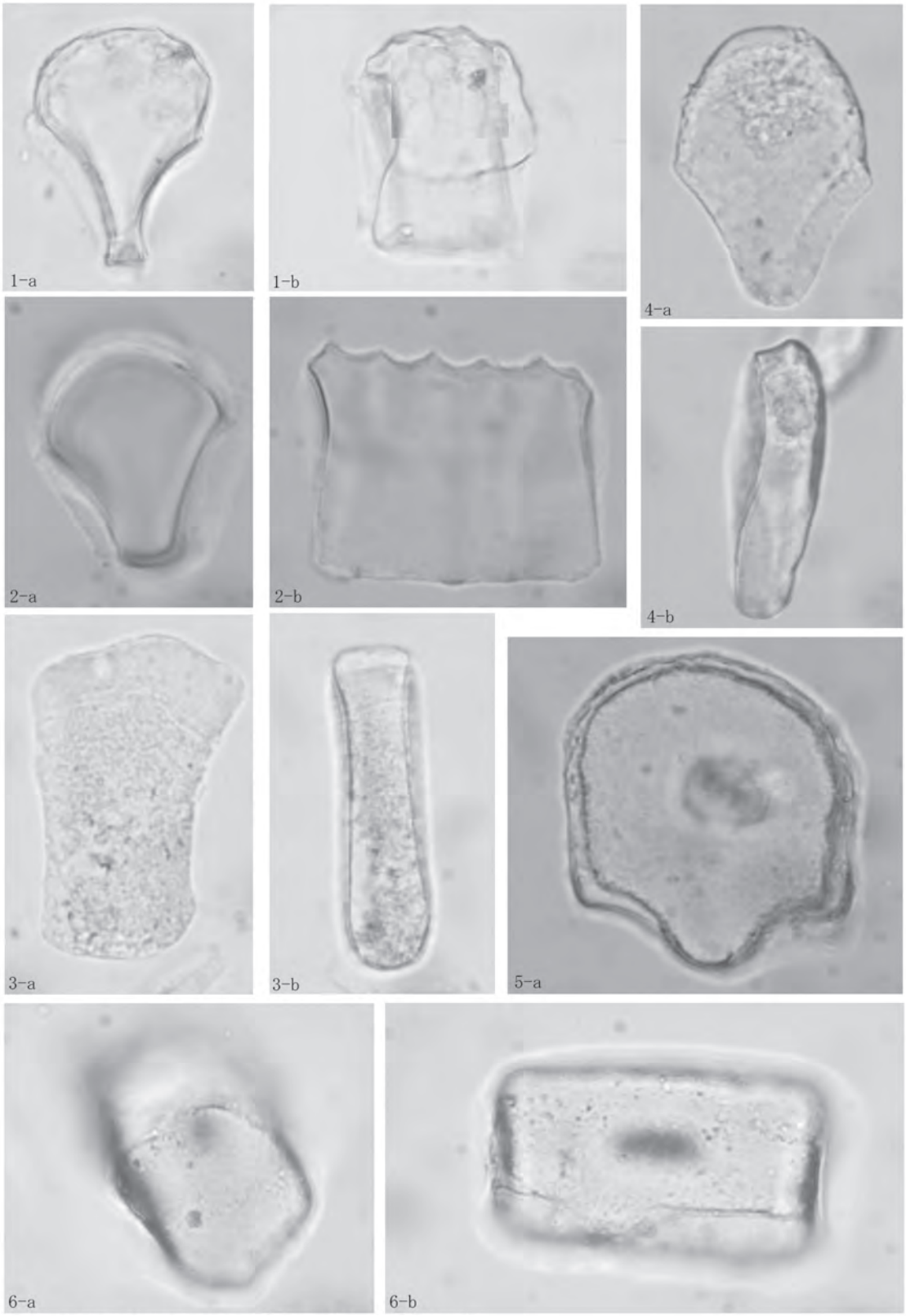


第 183 図　延永ヤヨミ園遺跡における植物珪酸体分布図



延永ヤヨミ園遺跡から産出した花粉化石

a. コナラ属コナラ亜属(1層 PLC.877)
b. コナラ属アカガシ亜属(付着土 PLC.878)
c. シイノキ属-マテバシイ属(2層 PLC.879)
d. クリ属(2層 PLC.880)
e. イネ科(1層 PLC.881)
f. オモダカ属(1層 PLC.882)
g. ミズアオイ属(1層 PLC.883)



延永ヤヨミ園遺跡から産出した植物珪酸体

0.02mm

1. イネ機動細胞珪酸体（2層）　2. ネザサ節型機動細胞珪酸体（1層）
3. ウシクサ族機動細胞珪酸体（2層）　4. タケ亜科機動細胞珪酸体（1層）
5. ヨシ属機動細胞珪酸体（2層）　6. キビ族機動細胞珪酸体（3層）　a. 断面 b. 側面

6　堆積物中の珪藻化石群集

藤根　久（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

珪藻は、10 ～ 500 μ m ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉 1988、安藤 1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などに生育する珪藻種（陸生珪藻）が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

延永ヤヨミ園遺跡は、福岡県行橋市の標高 10m 前後の高台から標高 4 m 前後の低地にかけて立地し、弥生時代末～古墳時代初頭や古墳時代後期の竪穴住居や古墳時代の導水施設が検出されている。ここでは、遺物包含層と導水施設木樋直上に付着した土について珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

（2）試料と方法

試料は、包含層の堆積物 3 試料と導水施設木樋直上付着土 1 試料の合計 4 試料である（第 15 表）。各試料について、以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

分析No.	位置	層位	時期	堆積物の特徴
1	包含層	1層	弥生時代末～古墳時代後期後半	褐色有機質シルト
2		2層		黒色泥炭質粘土質シルト
3		3層		植物遺体混じり褐色シルト質砂
4	導水施設木樋直上付着土	-	古墳時代	砂混じり褐色泥炭質シルト質粘土

第 15 表　珪藻分析を行った試料

①湿潤重量約 1 g 程度を取り出し、秤量した後ビーカーに移して 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。②反応終了後、水を加え 1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を 7 回ほど繰り返した。③懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下 600 ～ 1000 倍で観察し、200 個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1 g 当たりの殻数を計算した。

（3）珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種（W）として、海水～汽水種は不明種（?）としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、小杉（1988）が設定した汽水～海水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群（A）]：塩分濃度が 35 ﾊﾟｰﾐﾙ以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群（B）]：塩分濃度が 26 ～ 35 ﾊﾟｰﾐﾙの内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群（C1)]：塩分濃度が 12 ～ 35 ﾊﾟ-ﾐﾙの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。
[海水砂質干潟指標種群（D1)]：塩分濃度が 26 ～ 35 ﾊﾟ-ﾐﾙの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。
[海水泥質干潟指標種群（E1)]:塩分濃度が 12 ～ 30 ﾊﾟ-ﾐﾙの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。
[汽水藻場指標種群(C2)]:塩分濃度が 4 ～ 12 ﾊﾟ-ﾐﾙの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。
[汽水砂質干潟指標種群（D2)]：塩分濃度が 5 ～ 26 ﾊﾟ-ﾐﾙの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。
[汽水泥質干潟指標種群（E2)]：塩分濃度が 2 ～ 12 ﾊﾟ-ﾐﾙの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。
[上流性河川指標種群（J)]：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため､流れによってはぎ取られてしまうことがない。
[中～下流性河川指標種群（K)]：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。
[最下流性河川指標種群（L)]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。
[湖沼浮遊生指標種群（M)]：水深が約 1.5m 以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。
[湖沼沼沢湿地指標種群（N)]：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。
[沼沢湿地付着生指標種群（O)]：水深 1 m 内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。
[高層湿原指標種群（P)]：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。
[陸域指標種群（Q)]：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている)。
（４）珪藻化石の特徴と堆積環境
４試料から検出された珪藻化石は、海水種が 1 分類群 1 属 1 種、汽水種が 4 分類群 4 属 4 種、淡水種 103 分類群 26 属 87 種 2 変種であった。これらの珪藻化石は、汽水域の 1 環境指標種群（E2)、淡水域の 5 環境指標種群（K、L、N、O、Q）に分類された（第 16 表)。
以下に、各珪藻帯の特徴について述べる。
[遺物包含層]
遺物包含層の堆積物は、環境指標種群の出現傾向からⅡ～Ⅳ帯の 3 帯に分帯された（第 184 図)。
Ⅱ帯（分析 No.3： 3 層）

検出された珪藻化石は淡水種が多く、汽水種も出現した。環境指標種群は、沼沢湿地付着生指標種群（O）や陸域指標種群（Q）が多く、中～下流性河川指標種群（K）や汽水泥質干潟指標種群（E2）も検出された。こうした環境指標種群の特徴から、主にジメジメとした陸域環境を伴う沼沢湿地環境が推定され、汽水の影響を受ける河川環境を伴っていたと考えられる。

Ⅲ帯（分析 No.2：２層）

検出された珪藻化石は、淡水種が多かった。環境指標種群は、沼沢湿地付着生指標種群（O）や陸域指標種群（Q）が多く検出された。こうした環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域環境を伴う沼沢湿地環境が推定される。

Ⅳ帯（分析 No.1：１層）

検出された珪藻化石は、淡水種が多かった。環境指標種群は、沼沢湿地付着生指標種群（O）が比較的多く検出され、中～下流性河川指標種群（K）や陸域指標種群（Q）も検出された。こうした環境指標種群の特徴から、主に河川～沼沢湿地環境が推定され、ジメジメとした陸域環境を伴っていたと考えられる。

［導水施設木樋直上付着土］

Ⅰ帯（分析 No.4）

検出された珪藻化石は淡水種が多く、海水種や汽水種も出現した。環境指標種群は、沼沢湿地付着生指標種群（O）や陸域指標種群（Q）が多く、中～下流性河川指標種群（K）や汽水泥質干潟指標種群（E2）も検出された。こうした環境指標種群の特徴から、主にジメジメとした陸域環境を伴う沼沢湿地環境が推定され、海水や汽水の影響を受ける河川環境を伴っていたと考えられる。

（５）おわりに

包含層（１～３層）の堆積物と導水施設木樋直上付着土の珪藻化石群集について検討した。その結果、遺物包含層の堆積物では、汽水の影響を受ける河川環境を伴う、主にジメジメとした陸域環境を伴う沼沢湿地環境（Ⅱ帯）、ジメジメとした陸域環境を伴う沼沢湿地環境（Ⅲ帯）、ジメジメとした陸域環境を伴う主に河川～沼沢湿地環境（Ⅳ帯）が推定された。

一方、導水施設木樋直上付着土では、海水や汽水の影響を受ける河川環境を伴い、主にジメジメとした陸域環境を伴う沼沢湿地環境（Ⅰ帯）が推定された。

【引用文献】

安藤一男 1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42，pp.73-88，東北地理学会

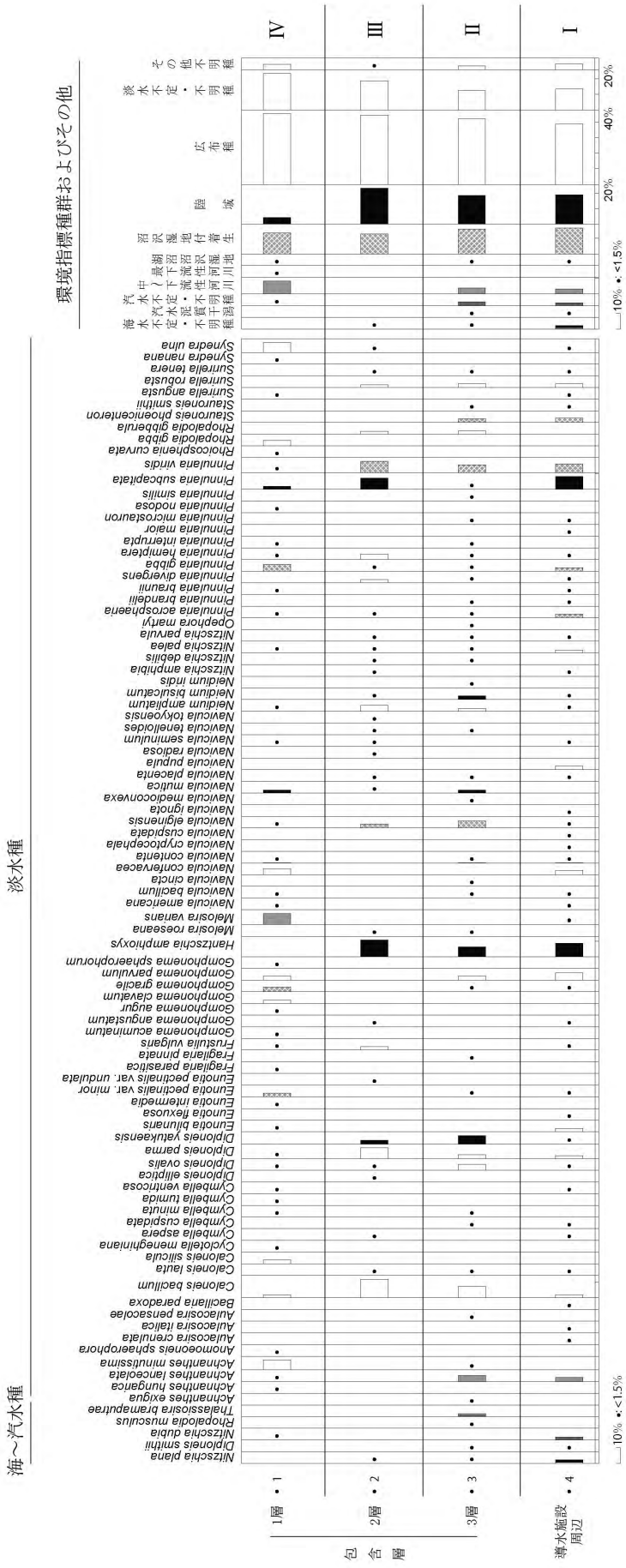
小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27，pp.1-20，第四紀研究会

No.	分類群		種群	1	2	3	4
1	*Nitzschia*	*plana*	?		1	1	5
1	*Diploneis*	*smithii*	E2			1	1
2	*Nitzschia*	*dubia*	?	2			4
3	*Rhopalodia*	*musculus*	?			1	
4	*Thalassiosira*	*bramaputrae*	?			4	
1	*Achnanthes*	*exigua*	W			1	
2	*A.*	*hungarica*	W	3			
3	*A.*	*lanceolata*	K	2		8	6
4	*A.*	*minutissima*	W	13		3	
5	*A.*	spp.	?	1		1	2
6	*Amphora*	*ovalis*	W	3	1	1	1
7	*Anomoeoneis*	*sphaerophora*	W	1			
8	*Aulacosira*	*crenulata*	W				3
9	*A.*	*italica*	N				2
10	*A.*	*pensacolae*	W			2	
11	*A.*	spp.	?		1	1	3
12	*Bacillaria*	*paradoxa*	W				1
13	*Caloneis*	*bacillum*	W	4	28	15	4
14	*C.*	*lauta*	W		2	2	1
15	*C.*	*silicula*	W	5			
16	*Cyclotella*	*meneghiniana*	L	1			
17	*Cymbella*	*aspera*	O		2		3
18	*C.*	*cuspidata*	W			1	1
19	*C.*	*minuta*	W	3		1	
20	*C.*	*tumida*	W	1			
21	*C.*	*ventricosa*	W	2			1
22	*C.*	spp.	?	1	1	1	1
23	*Diploneis*	*elliptica*	W		1		
24	*D.*	*ovalis*	W	1	3	8	1
25	*D.*	*parma*	W	1	16	5	4
26	*D.*	*yatukaensis*	Q		6	11	1
27	*D.*	spp.	?			2	
28	*Eunotia*	*bilunaris*	W	2			5
29	*E.*	*flexuosa*	O				1
30	*E.*	*intermedia*	W	2			
31	*E.*	*pectinalis* var. *minor*	O	5		2	1
32	*E.*	*pectinalis* var. *undulata*	O		1		
33	*E.*	spp.	?	8		1	4
34	*Fragilaria*	*parasitica*	N	1			
35	*F.*	*pinnata*	N			1	
36	*F.*	spp.	N			1	
37	*Frustulia*	*vulgaris*	W	1	5		2
38	*Gomphonema*	*acuminatum*	O	3			
39	*G.*	*angustatum*	W		1		2
40	*G.*	*augur*	W	1			
41	*G.*	*clavatum*	W	4			
42	*G.*	*gracile*	O	6		1	1
43	*G.*	*parvulum*	W	5		5	10
44	*G.*	*sphaerophorum*	W	1			
45	*G.*	spp.	?	19		1	2
46	*Gyrosigma*	spp.	?			1	
47	*Hantzschia*	*amphioxys*	Q		25	13	19
48	*Melosira*	*roeseana*	Q		1	1	
49	*M.*	*varians*	K	14			1
50	*Navicula*	*americana*	W	1			1
51	*N.*	*bacillum*	W	3		2	1
52	*N.*	*cincta*	W			2	
53	*N.*	*confervacea*	W	8			6
54	*N.*	*contenta*	Q	1		1	2
55	*N.*	*cryptocephala*	W				2
56	*N.*	*cuspidata*	W				1
57	*N.*	*elginensis*	O	1	6	9	2

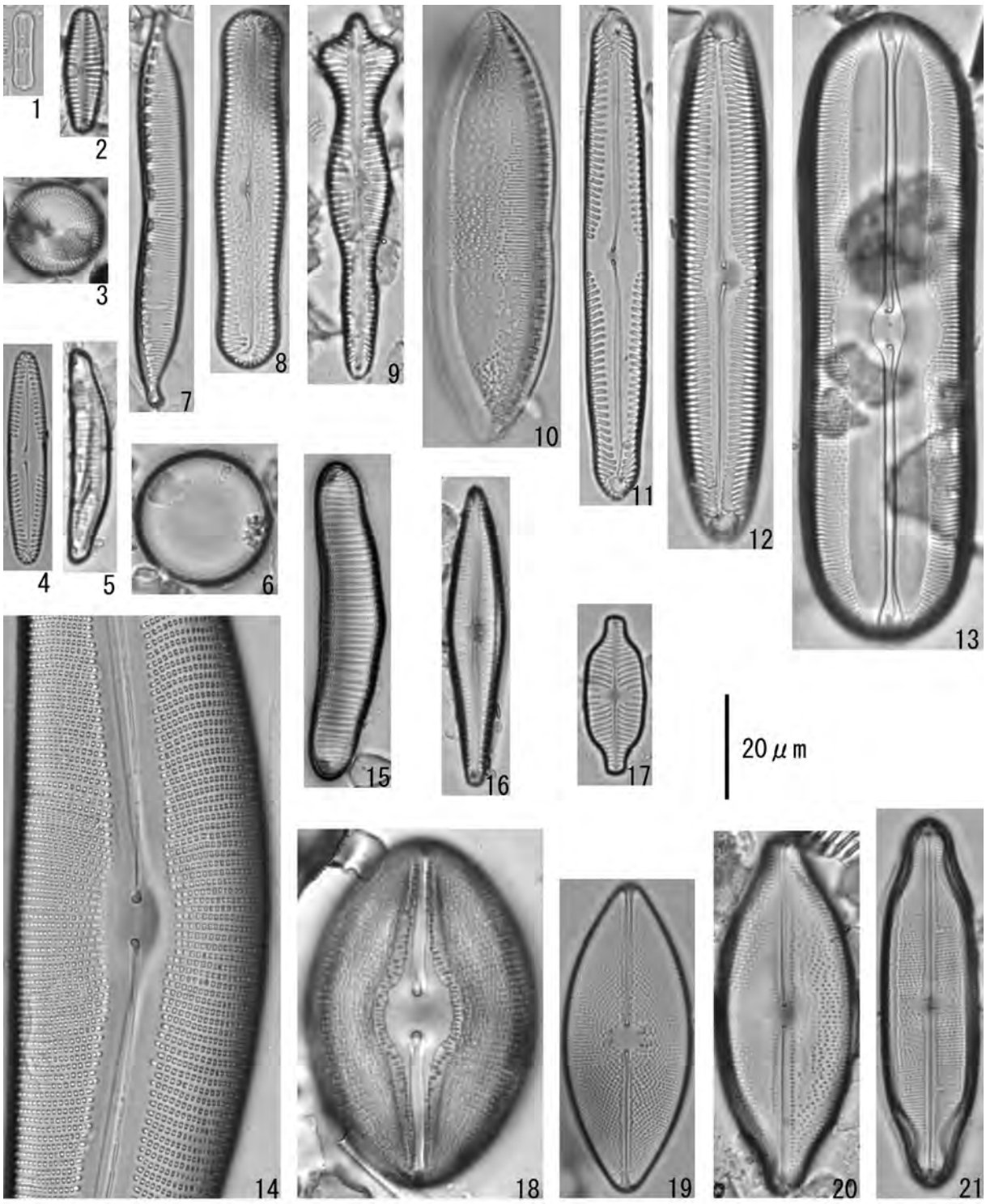
第 16 表　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、小杉（1988）および安藤（1990）による）

No.	分類群		種群	1	2	3	4
58	*N.*	*ignota*	W				1
59	*N.*	*medioconvexa*	W			1	
60	*N.*	*mutica*	Q	4	2	4	
61	*N.*	*placenta*	W		3	1	1
62	*N.*	*pupula*	W				5
63	*N.*	*radiosa*	W		1		
64	*N.*	*seminulum*	W	1	2		1
65	*N.*	*tenelloides*	W		1	2	
66	*N.*	*tokyoensis*	W		3		
67	*N.*	spp.	?	2	4	1	2
68	*Neidium*	*ampliatum*	W	1	9	4	2
69	*N.*	*bisulcatum*	Q		3	5	1
70	*N.*	*iridis*	O			1	
71	*N.*	spp.	?	1	2	2	3
72	*Nitzschia*	*amphibia*	W		1		3
73	*N.*	*debilis*	W		1	1	
74	*N.*	*palea*	W	1	1	2	4
75	*N.*	*parvula*	W		2	3	1
76	*N.*	spp.	?	9		1	2
77	*Opephora*	*martyi*	W			1	
78	*Pinnularia*	*acrosphaeria*	O	1	2	2	5
79	*P.*	*brandelii*	W			2	1
80	*P.*	*braunii*	W	1			1
81	*P.*	*divergens*	W		5	1	3
82	*P.*	*gibba*	O	9	2	3	5
83	*P.*	*hemiptera*	W	1	8	1	2
84	*P.*	*interrupta*	W	1		2	
85	*P.*	*maior*	W				1
86	*P.*	*microstauron*	W			1	1
87	*P.*	*nodosa*	O	1			
88	*P.*	*similis*	W			3	
89	*P.*	*subcapitata*	Q	4	17	3	18
90	*P.*	*viridis*	O	2	17	10	12
91	*P.*	spp.	?	4	34	12	10
92	*Rhoicosphenia*	*curvata*	K	1			
93	*Rhopalodia*	*gibba*	W	7			
94	*R.*	*gibberula*	W		4	4	
95	*Stauroneis*	*phoenicenteron*	O			5	6
96	*S.*	*smithii*	W			3	2
97	*S.*	spp.	?	1	2	1	
98	*Surirella*	*angusta*	W	1			1
99	*S.*	*robusta*	W		4	5	5
100	*S.*	*tenera*	W		1	1	1
101	*S.*	spp.	?	2		1	
102	*Synedra*	*nanana*	W	1			
103	*S.*	*ulna*	W	13	1		1
		Fresh-Unknown	?	7	1	5	8
1		海水不定・不明種	?		1	1	5
2		汽水泥質干潟	E2			1	1
3		汽水不定・不明種	?	2		5	4
4		中～下流性河川	K	17		8	7
5		最下流性河川	L	1			
6		湖沼沼沢湿地	N	1		2	2
7		沼沢湿地付着生	O	28	30	33	36
8		陸　域	Q	9	54	38	41
9		広布種	W	93	104	86	84
10		淡水不定・不明種	?	48	44	26	29
11		その他不明種	?	7	1	5	8
		合　計		206	234	205	217
		完形殻の出現率(%)		72.2	40.3	50.2	41.5
		堆積物1g当たり殻数(個)		5.2E+06	1.1E+06	2.6E+05	2.2E+05

第 16 表　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、小杉（1988）および安藤（1990）による）



第 184 図　堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示）



堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

1. *Navicula contenta*(No. 4) 2. *Achnanthes lanceolata*(No. 1) 3. *Melosira roeseana*(No. 2)
4. *Pinnularia subcapitata*(No. 2) 5. *Eunotia pectinalis* var. *minor*(No. 1) 6. *Melosira varians*(No. 4)
7. *Hantzschia amphioxys*(No. 2) 8. *Pinnularia acrosphaeria*(No. 4) 9. *Gomphonema acuminatum*(No. 1)
10. *Nitzschia plana*(No. 2) 11. *Pinnularia gibba*(No. 1) 12. *Pinnularia viridis*(No. 2)
13. *Navicula americana*(No. 4) 14. *Cymbella aspera*(No. 2) 15. *Anomoeoneis sphaerophora*(No. 1)
16. *Eunotia pectinalis* var. *undulata*(No. 2) 17. *Gomphonema gracile*(No. 1) 18. *Navicula elginensis*(No. 3)
19. *Diploneis yatukaensis*(No. 3) 20. *Navicula tokyoensis*(No. 2) 21. *Neidium ampliatum*(No. 4)

7　獣骨の同定

中村賢太郎（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

福岡県行橋市に所在する延永ヤヨミ園遺跡の発掘調査では、弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後期、古代の遺構、遺物が検出された。ここでは、延永ヤヨミ園遺跡から出土した動物遺体の同定結果を報告する。

（2）試料と方法

試料は、Ⅲ-C 区 1 号井戸とⅣ C 区包含層の淡黒褐灰色土から出土した獣骨各 1 点、計 2 点である。試料の時期は、２点とも弥生時代末～古代とされている。同定は、肉眼で現生標本との比較により行った。計測は、Driesch（1976）を参考に、ノギスで行った。

（3）結果と考察

Ⅲ-C 区 1 号井戸から出土した獣骨はウマ（Equus caballus）であった。部位は右肩甲骨であった。右肩甲骨の計測値は、関節部最大長（GLP）が 75.7㎜、関節窩の長さ（LG）が 49.1㎜、関節窩の幅（BG）が 38.0㎜、肩甲頸の幅（SLC）が 51.3㎜、破損のため正確ではないが肩甲棘を軸とした高さ（HS）が 260㎜以上であった。ウマ右肩甲骨の他に、おそらくウマの四肢骨破片２点と部位不明破片 1 点も見られた。ウマの利用法としては、運搬用、農耕用、軍用などの可能性が考えられる。また、井戸から出土した点は、何らかの意図を持ってウマの遺体が扱われた可能性を示唆しており、獣骨以外の出土遺物と合わせた検討が望まれる。

Ⅳ-C 区包含層の淡黒褐灰色土から出土した獣骨はニホンジカ（Cervus nippon）であった。部位は右下顎骨であった。第 3 後臼歯が萌出しており、成獣である。第 3 後臼歯の近遠心径は 26.4㎜、頬舌径は 12.3㎜であった。第 3 後臼歯の直後で測った下顎体の高さは約 37㎜であった。ニホンジカは、おそらくは狩猟の獲物として遺跡に持ち込まれ、食用にされたと思われる。

【参考文献】

Driesch, Angela von den 1976 *A guide to measurement of animal bones from archaeological sites*. p137, Peabody museum.

延永ヤヨミ園遺跡出土獣骨

1. ウマ右肩甲骨（3 区 1 号井戸）

2. ニホンジカ右下顎骨（Ⅳ-C 区包含層）

8　Ⅲ -AB 区 27 号竪穴住居跡出土土器の顔料分析

（1）はじめに

当区 27 号竪穴住居跡の竪穴部床面直上で出土した完形の土師器直口壺（第 27 図５）は、口縁部外面及び内面に薄く赤色顔料が付着していた（図版 49)。この赤色顔料の種類を同定することを目的に科学的分析による調査を行った。

（2）調査方法

測定は九州歴史資料館にて行い、測定機器及び分析条件は以下のとおりである。

・使用機器：エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SPECTRO　MIDEX）

・分析条件：電圧 45kV/ 電流　0.3 m A/ 対陰極　モリブデン（Mo）検出器　シリコンドリフト検出器 / 測定雰囲気　待機 / 測定範囲　0.3 ミリ / 測定時間　300 秒

（3）調査結果

測定にあたっては､主たる元素の存在を､検出されたスペクトルのピークから定性的に判断を行った。この直口壺については、Fe（鉄）にピークが明瞭にみられることから、この赤色顔料はベンガラ（主成分は酸化第二鉄）と推定できる。

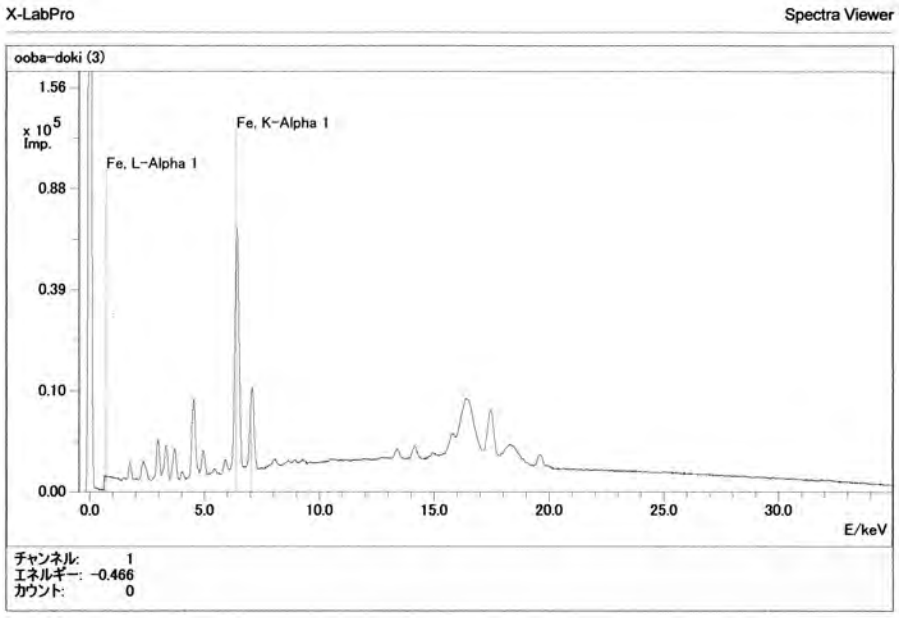
このベンガラは口縁部内外面と胴部内面に付着することからスリップ（化粧土）ではないと判断される。また土器自体への付着状況については、口縁部外面は薄く、胴部内面は濃く付着する。さらに直口壺の出土状況から、ベンガラを入れたまま床面上に意図的に置かれたものと想定される。

以上のことから、この直口壺はベンガラの容器として利用されていたもので、口縁部外面に薄く付着するものは土器内のベンガラが外に流れた痕跡と考えられる。

（4）まとめ

当地域においては、弥生時代後期中頃の行橋市辻垣畠田・長通遺跡で多数の内面朱付着土器が出土する。特に瀬戸内地域と同形態である甕を半裁し把手を付けた形状の把手付広片口皿（広片口三耳鉢）の出土は、北部九州で最も早く弥生時代後期中頃から朱精製技術・道具が一体となって地理的に瀬戸内地域からの窓口となる当地域に伝播し、さらに当地域から北部九州各地へとこの技術・道具が伝播したと考えられる。

一方ベンガラについては、弥生時代を通じて利用されていたと思われるが、古墳時代前期に住居廃絶行為の一つとしてベンガラを入れた土器を置くことは､弥生時代から続く、当地域における赤色顔料の価値を表す可能性がある。今後の類例の増加に期待したい。



第 185 図　赤色顔料元素分布図

V　総括

1　谷周辺の環境について

既に 2014 年刊行の『東九州自動車道関係埋蔵文化財報告書 11　延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区２』で言及したように、延永ヤヨミ園遺跡における旧地形は第 186 図のように復元される。大きくは現在と変わらず、馬蹄形の丘陵状をなし、中央には東側に開口する谷部が入り込む。丘陵上特に頂部付近では、弥生時代終末～古墳時代前期および古墳時代後期に多くの住居跡を中心とした集落が展開する。北側の水田地帯では、試掘調査によって河川堆積物が見られたことから、丘陵北側は現在と同じく比高差 2m ほどの絶壁に近いものだったと推測され、北側から丘陵にいたるアクセスは制限されていた可能性が高い。本調査区の北西側に位置する延永水取遺跡の丘陵の北側裾部では椿市廃寺に至る運河と推定される溝が確認されていることから、丘陵の北側裾部ならびに丘陵南側に航路があったものと想定される。

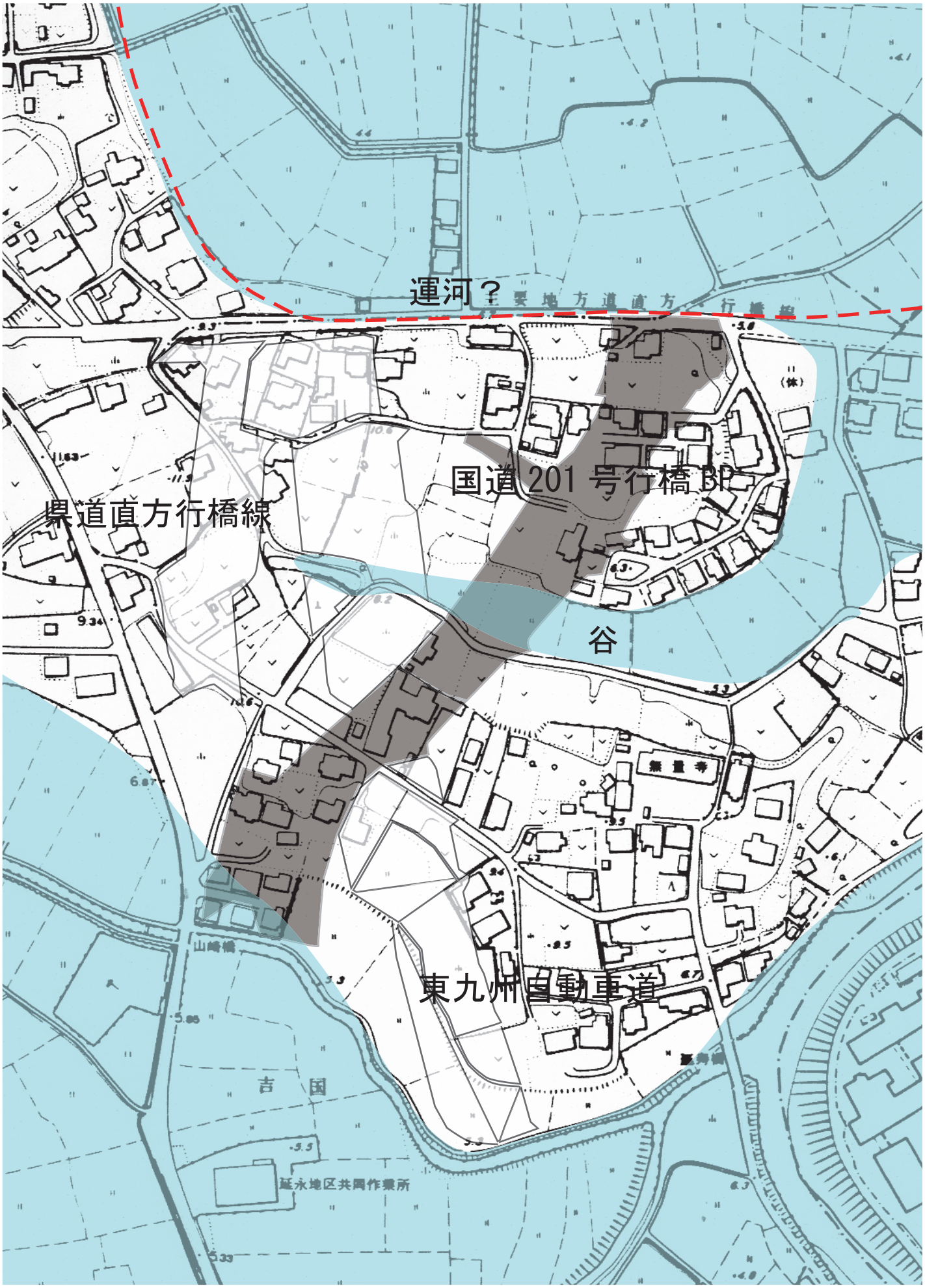
丘陵地には花粉分析によってカシ属やシイ属からなる照葉樹林やスギ林を中心として、アカマツやコナラ、クリなどの二次林が存在した可能性が指摘されている。また、上層堆積時に稲の栽培が想定されているが、後の珪藻分析で湿地環境であったこと、元は水田であったことから、付近に水田があった可能性は指摘できるものの、谷部で水田耕作を行っていたかどうかは不明である。中央部の谷は、珪藻分析によって「ジメジメとした陸域環境を伴う沼沢湿地環境」が推定されており、最下層の３層および導水施設木樋付着土（１層より上層）では、「汽水や海水の影響を受ける河川環境を伴っていた」とされる。また、１層では河川～沼沢湿地が推定されている。

以上のことから、土器で明確に時期が分かれなかったが、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃の包含層が形成された時期には汽水域に近い湿地であったと推測される。ただし、先に述べたように、古墳時代後期、古代、中世にも少量の土器が流れこんで撹拌されているため、谷としては埋没したわけではなく、その後も水は流れる状態であったと考えられる。また、上層の導水施設木樋付着土から海水や汽水の影響が想定されていること、古墳時代後期の準構造船ならびに７世紀末～８世紀中頃の係留のための杭を伴う船着場と考えられる溝が検出されていることから、基本的には湿地状態であるものの、比較的短時間で海水の影響の有無が繰り返されていたのであろう。そのため、弥生時代後期～古代まで船でアクセスできる環境は、概ね確保されていたものと考える。

2　時期ごとの遺構

既報告遺構も含め、時期ごとの遺構の変遷について示したものが第 187 図である。

Ⅲ区では他の区と同様、弥生時代後期末頃に住居跡並びに溝が造られる。弥生時代終末期～古墳時代前期になると継続して住居跡や溝が見られる他、谷に近い位置では井戸が掘削され、建物も一部に認められる。弥生時代終末～古墳時代前期頃には、方形周溝および円形周溝が掘削される。一部住居跡を切っていることから、住居跡の存続時期はさほど長くないものと考えられる。また、谷の中には水漬け遺構が、南側には導水施設が造られる。同時に最大 12 軒ほどの住居が存在可能であるが、Ⅲ -C 区の谷の落ち際まで住居跡が認められることから、本来は緩斜面でⅢ -C 区中央部分にも住居跡が存在しており、より多くの住居があったものと考えられる。ただし、方形周溝掘削時にはその周囲の住居跡は廃絶している。遺跡内の他調査区では、丘陵頂部を中心として当該期の住



第 186 図　周辺地形復元図（1/2,500）

第 187 図　Ⅲ区遺構変遷図（1/800）

居跡が多く、時期が下るにつれて下方まで進出していくのに対し、当地では比較的早い時期から丘陵下まで遺構が展開し、住居跡が多い傾向にあることから、当地周辺が弥生時代終末～古墳時代前期前半にかけて集落の中心域であった可能性がある。方形周溝ならびに導水施設の存在からも集落の中心域であった蓋然性が指摘される。

古墳時代中期には、住居跡が８軒、丘陵の頂部付近にのみ検出されている。切り合いがあり同時に最大５軒程度の住居数であったと想定される。遺構数が極端に減少することは遺跡内の他調査区と同様であるが、やや数は多い。ただし、全体として当該時期の遺構は希薄であり、集落としてどのような景観であったのかは、現段階では不明である。

古墳時代後期後半頃には多数の住居跡が造られ、丘陵下方まで分布する。遺跡内の他調査区に比べ、切り合いがさほどなく、最大 15 軒程度存在していたものと考えられる。弥生時代終末～古墳時代前期と同様、Ⅲ -C 区中央にも住居跡が存在していたものと考えられ、削平されたものを勘案すると、これ以上の軒数が想定される。また、谷近くで井戸が検出され、建物跡・土坑・溝も若干数であるが認められる。

７世紀前半に１軒のみ住居が残存するものの、その後は住居跡は認められず、７世紀後半には掘立柱建物が造られる。10 号掘立柱建物は２間×９間以上の長大なものであるが、他の掘立柱建物跡とは軸がずれており、どのような建物配置であったのかは不明である。丘陵上にはⅡ・Ⅴ区で大型の掘立柱建物跡が検出されており、7 世紀末頃には「草野津」の関連施設があったと考えられる。谷近くでは「京都大」の墨書土器が出土した井戸や船着場の可能性がある溝が検出されており、郡司層が管理する津の関連施設であった可能性が想定される。

古代末～中世以降では、掘立柱建物、溝、土坑、井戸、墓が認められる。溝は周辺の調査区と同様、区画溝を形成すると考えられ、特に９号溝は 32m × 68m 以上の規模で、幅５ｍの間隔を持って北側の５号溝および南側のⅢ - Ｃ区 11 号溝と併行する。また、東側にも同じ５ｍの間隔で１号溝が併行しており、長大な区画が５つほど連続して造られていた可能性がある。区画間は道路として使われていた可能性が高いが、硬化面などの痕跡は確認されていない。内部には掘立柱建物がほとんど検出されておらず、屋敷地内の構成は不明である。谷に近い位置では、前時期までと同様、井戸が掘削され、区画溝のすぐ脇で土壙墓が２基検出されている。

以上のように、古墳時代中期に一部遺構の減少が認められるが、弥生時代後期末から８世紀代まで連綿と遺構が造られており、特に 11 世紀代以降多くの区画溝が造られる。９・10 世紀においては、包含層や検出面から僅かながら土器が出土しているものの、遺構は全く検出されていない。この傾向は遺跡内の他調査区でも同様であり、「草野津」の廃絶時期にかかることから、今後の発掘調査が行われた段階で、再度検討が必要であろう。

３　準構造船竪板について

3009 号土坑から準構造船の竪板が出土した。準構造船は丸木を船底に使用し、側板を継ぎ足したもので、弥生時代～古墳時代における絵画や船形埴輪などに見られる。時期は弥生時代の後期には出現していたとされ、古墳時代になると埴輪の他、船体自体の出土例が認められる。

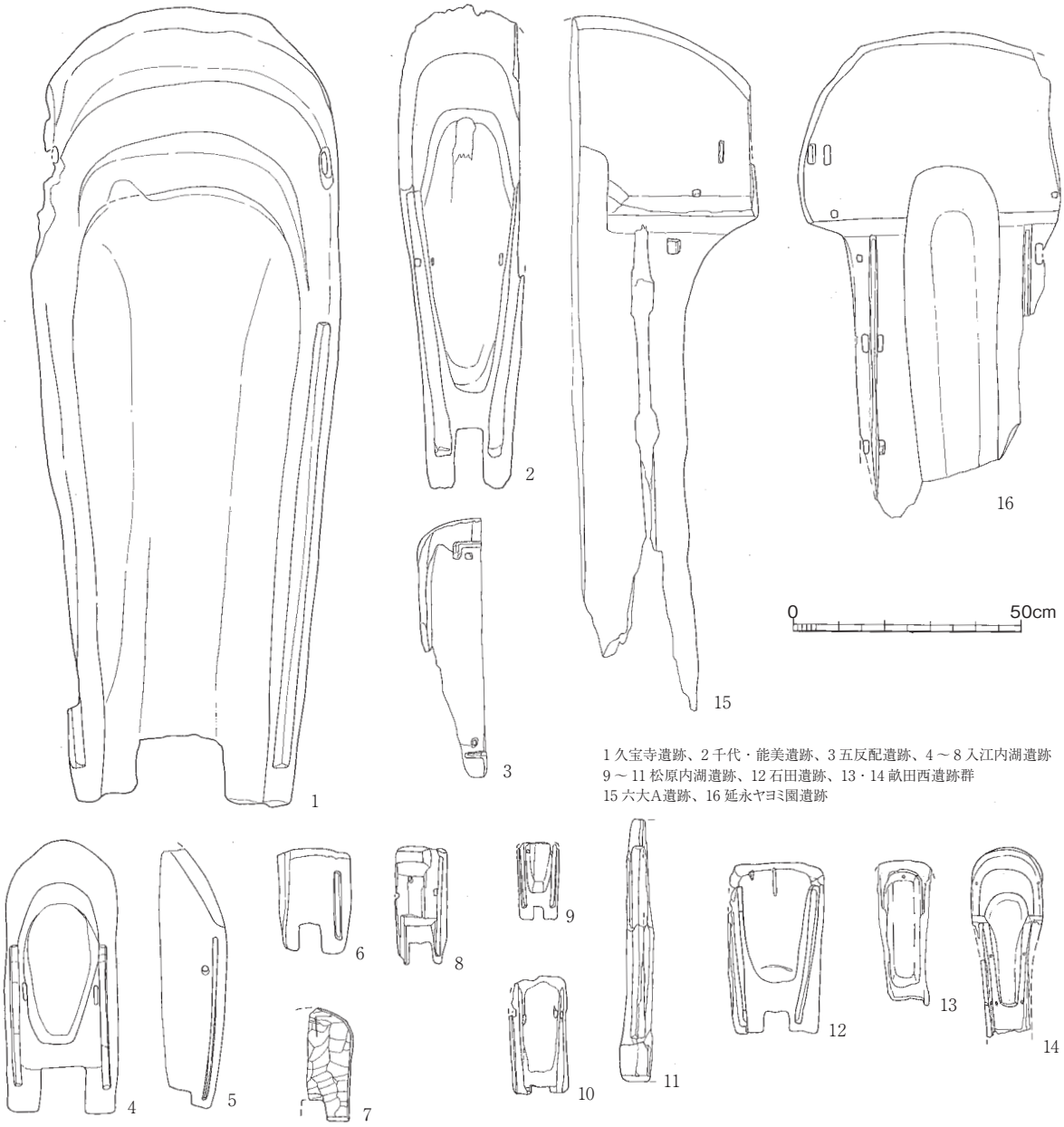
形態は船形埴輪に表現された構造上の特徴から、竪板型（西都原式）、貫型（菩提池西式）に区分され、本遺跡出土例は竪板型に属する。大きさは舷側板をはめ込む溝の幅が 33cm を測り、下部

構造が久宝寺遺跡出土例と同一の凹形を呈するとすれば、最低でも長さ 130cm ほどはあったものと考えられる。他遺跡出土例の船形や埴輪などから推測すれば全長 6m ～ 12m、幅 0.6m ～ 2m 程度の規模であろう。

船体自体の出土例は、福岡県では糸島市潤地頭給遺跡で弥生時代後期後葉～終末期に属する船底部が井戸枠に転用された状態で出土している。福岡市今宿五郎江遺跡では弥生時代後期初頭の船底、糸島市上鑵子遺跡では弥生時代中期の舳先と考えられる船材が出土しているなど、県内では糸島地域で多く見つかっている。

全国的に見れば、鳥取県青谷上寺地遺跡や大阪府蔀屋北遺跡で船体や舷側板が出土しているのをはじめ、近年出土数が増加する傾向にある。竪板に限れば、管見の限り第 188 図・第 17 表に挙げた例が認められる。関西を中心として出土しており、特に琵琶湖周辺で多く出土している。時期が判明している例では古墳前期に属するものが多いものの、先に述べたように絵画や埴輪、他の部材の出土状況から考えれば前期に偏って存在していたとは考えにくく、今後時期のわかるものが増えるものと想定される。樹種はほとんどがスギで、その他にクスノキ属およびヒノキが認められる。九州内出土の他の船材を見ても、スギ材が多く、クスノキ材も使用される。これは、『日本書紀』に記されるスサノヲノミコトの「杉及び橡樟（クス）、此の両の樹は、以って浮寶（船）とすべし」という記述と合致しており、これらの材が好んで使われたものと考えられる。

大きさは 20 ～ 60㎝の小型品、100cm 程の中型品、100cm 以上の大型品に分けられる。小型品は琵琶湖周辺でほとんどの資料が出土しており、内湖用の小型船に使用されていたものと考えられ、中大型品は外洋での航行が可能な船と考えられる。畝田西遺跡例は小型であることから形代の可能性が指摘されているものの、小型の実用船である可能性がある。構造は基本的に側縁部に舷側板を差し込むための溝が掘られており、緊縛の為の孔が穿たれる。１～ 13 までは側面が下に向かって窄まるように直線的に伸び、上部に孔が左右１つずつ穿たれ、下端は凹形を呈する（以下、久宝寺型と呼称する）。14 ～ 16 は上部が大きく膨らみ、側面が弧状に窄まり、屈曲部では厚みが変わることによって段が形成される。また、孔も上部の他、差込み溝付近や屈曲部にも穿たれ、ホゾも見られる（以下、延永型と呼称する）。このような２種類の表現は船形埴輪でも認められる。久宝寺型は多少わかりづらいものもあるが、大阪府皿池古墳・同中田遺跡・同菩提池西３号墳・京都府ニゴレ古墳出土埴輪で認められる。延永型は大阪府長原高廻り２号墳・静岡県堂山２号墳出土埴輪で認められる。ただし、皿池古墳例など中には船体側に向かって幅が広くなる表現がなされているものもあり、もう１型式存在している可能性もある。このような竪板の型式差は、製作段階で明確に作り方が異なると考えられ、延永型は久宝寺型に比べ孔が多いという特徴がある。孔は舷側板などと緊縛するためのものと考えられ、久宝寺型よりも強固に緊縛することが可能であろう。延永ヤヨミ園遺跡出土例では孔に桜の樹皮とスギの木栓がはまっており、舷側板と竪板を桜の樹皮で緊縛し、木栓を差し込むことで隙間を埋め、固定していたものと考えられる。ただし共に小型・大型品の両方が認められること、時期も大きく変わらないと考えられることなど、緊縛構造以外に差異を認めることは難しく、船形埴輪でもその他の表現に差異は認められない。また、出土地域での差異も認められないため、構造的な差異が機能的な差異と結びついていたかどうかは現段階では不明である。また、延永型の完形品は出土していないため、下部構造が凹形にならず、久宝寺型とは船底との接合方法が異なっている可能性はある。資料数が少ない現段階では、出土量から基本的には久宝寺型



第 188 図　準構造船竪板（1/15、各報告書より再トレース）

	遺跡名	所在地	時期	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	樹種	文献
1	久宝寺遺跡	大阪府八尾市	古墳前期	175.5	(67.5)	25.5	スギ	一瀬 1987
2	千代・能美遺跡	石川県小松市	古墳前期	104.8	(27.3)	8.0	スギ	林 2012
3	五反配遺跡	島根県出雲市	古墳前期	(57.7)	(13.7)	4.0	スギ	中川 2006
4	入江内湖遺跡	滋賀県米原市	古墳	60.4	24.0	5.4	スギ	中井 1988
5	入江内湖遺跡	滋賀県米原市	古墳	(57.4)	(16.3)	2.3	スギ	中井 1988
6	入江内湖遺跡	滋賀県米原市	古墳	31.0	21.0	7.2	スギ	中井 1988
7	入江内湖遺跡	滋賀県米原市	古墳	33.0	(12.0)	4.1	ヒノキ	中井 1988
8	入江内湖遺跡	滋賀県米原市	古墳	25.2	11.1	5.9	ヒノキ	中井 1988
9	松原内湖遺跡	滋賀県彦根市	弥生・古墳	16.8	8.8	3.2	スギ	吉田 1992
10	松原内湖遺跡	滋賀県彦根市	弥生・古墳	26.0	9.0	4.8	スギ	吉田 1992
11	松原内湖遺跡	滋賀県彦根市	弥生・古墳	58.0	(7.3)	4.0	スギ	吉田 1992
12	石田遺跡	滋賀県東近江市	古墳前期	37.6	20.8	7.3	スギ	杉浦 2005
13	畝田西遺跡群	石川県金沢市	古墳前期	(32.0)	11.7	3.0	スギ	安 2006
14	畝田西遺跡群	石川県金沢市	古墳前期	(41.6)	15.6	2.2	スギ	安 2006
15	六大 A 遺跡	三重県津市	古墳	(153.3)	(39.7)	(11.6)	スギ	穂積 2000
16	延永ヤヨミ園遺跡	福岡県行橋市	古墳後期	(107.1)	(57.8)	8.3	クスノキ属	本書
17	米野遺跡	岐阜県大垣市	弥生終末～古墳初頭	(24.0)	(34.5)	3.0	クスノキ属	高田 2007

（　）内は残存値、米野例は先端のみ

第 17 表　出土準構造船竪板一覧表

が主体を占めているが、一部何らかの理由で緊縛方法が異なる延永型も時期を問わず併存する可能性があると指摘するに留めたい。

【参考文献】

一瀬和夫編 1987『久宝寺南（その 2)』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
一瀬和夫 1992「弥生船の復元」『弥生文化博物館研究報告』1: pp.75-82, 大阪府立弥生文化博物館
岩瀬透編 2012『蔀屋北遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告 2011 － 1　大阪府教育委員会
岩波書店 1967『日本書紀　上』日本古典文学大系 67
江崎靖隆 2005「準構造船」『潤地頭給遺跡』前原市文化財調査報告第 89 集　前原市教育委員会
江野道和 2014「北部九州の船と交流～伊都国を中心に～」『石川県埋蔵文化財情報』31: pp.20-23, 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
金山哲哉 2014「石川県内の船関係資料」『石川県埋蔵文化財情報』31: pp.30-32, 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
君嶋俊行 2014「山陰地方の船と水上交通～青谷上寺地遺跡出土資料を中心として～」『石川県埋蔵文化財情報』31: pp.24-26, 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
杉浦隆支編 2005『石田遺跡』能登川町教育委員会
高田康成編 2007『米野遺跡』大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集　大垣市教育委員会
田中勝弘 1998「古墳時代における水運技術」『紀要 第 6 号』:pp.1-17, 滋賀県立安土城考古博物館
塚本浩司編 2013『弥生人の船　モンゴロイドの海洋世界』大阪府立弥生文化博物館
中井均編 1988『入江内湖遺跡（行司町地区）発掘調査報告書』米原町教育委員会
中川寧編 2006『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』島根県古代文化センター調査研究報告書 33　島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
中川寧 2009「山陰の船～出雲市五反配遺跡の竪板と考えられる木製品～」『木･ひと･文化～出土木器研究会論集～』pp.135-146, 出土木器研究会
南部裕樹・菅博絵編　2013『原始・古代の船Ⅰ』立命館大学考古学資料集第 5 冊　立命館大学考古学論集刊行会
林大智編 2012『小松市　千代・能美遺跡』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
深澤芳樹 2003「弥生時代の船、川を進み、海を渡る」『弥生創世記』大阪府立弥生文化博物館 26: pp.78-83, 大阪府立弥生文化博物館
深澤芳樹 2014「日本列島における原始・古代の船舶関係出土資料一覧」『国際常民文化研究叢書 5―環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究―』pp185-233, 神奈川大学国際常民文化研究機構
穂積裕昌編 2000『六大 A 遺跡発掘調査報告（木製品編)』三重県埋蔵文化財調査報告 115-17: 三重県埋蔵文化財センター
安英樹・松尾実編 2006『金沢市畝田西遺跡群Ⅳ』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
横田洋三 2004「準構造船ノート」『紀要』17　pp.21-28, 財団法人滋賀県文化財保護協会
横田洋三 2006「準構造船の時代へ」『丸木舟の時代―琵琶湖と古代人―』pp.38-39, 財団法人滋賀県文化財保護協会･滋賀県立安土城考古博物館
横田洋三 2012「青谷上寺地遺跡出土の船」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 8　木製農耕具・漁撈具』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 47: pp.176-185, 鳥取県埋蔵文化財センター
吉田秀則編 1992『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅱ―木製品―』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

4　船着場について

先に、3001 号溝について、係留用の杭を伴う船着場である可能性を指摘した。ここでは他遺跡で確認された船着場遺構との比較を行うことで、本遺跡例の検討を行う。

井上尚明氏は全国の運河遺構を集成したうえで、以下の３タイプに分類している。

A 類：河川を大きな改変をせずに航路として利用したと考えられる遺跡（新潟県蔵ノ坪遺跡・静岡県伊場遺跡など）

B 類：河川を一部掘削・加工したタイプの遺跡（福島県矢玉遺跡・山形県古志田東遺跡など）

C 類：人工的に水路を掘削して運河としたもの（宮城県十郎田遺跡・石川県加茂遺跡など）

さらに井上氏は、上記の A 類を運河として理解するには接岸施設などの遺構が必要なことから、

埠頭遺構の構造として以下の４類型を示している。

１類：運河を拡張した入江状・池状の施設（矢玉遺跡・古志田東遺跡など）

２類：沿岸にテラス状の平坦面を造成（新潟県門新遺跡・上荒屋遺跡など）

３類：運河内に構造物を設置する（伊場遺跡・大分県飯塚遺跡など）

４類：水面と河岸を階段状施設で接続（埼玉県中宿遺跡・市辺遺跡など）

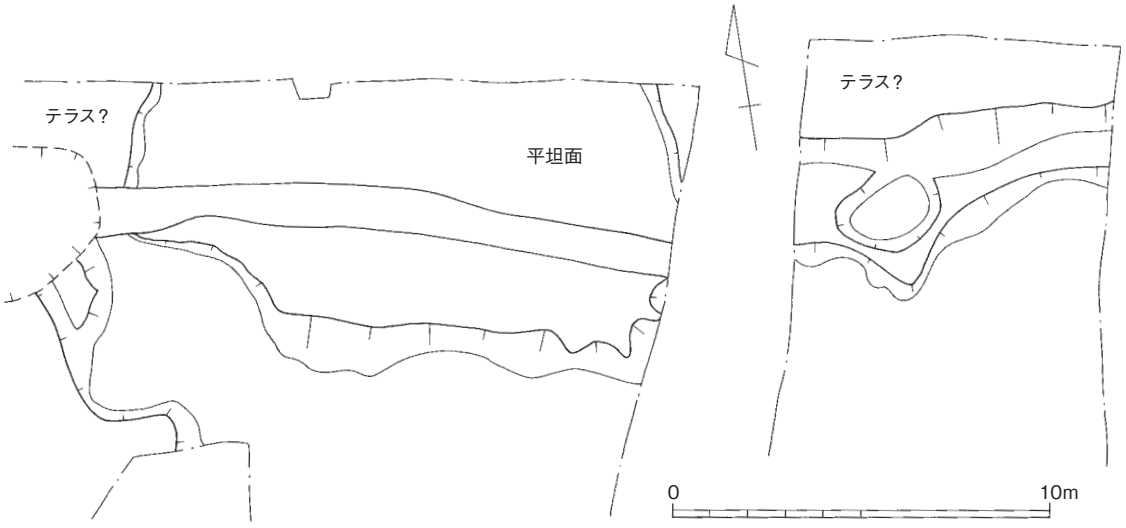
構造物を設置する例を見ると、大分県飯塚遺跡では道路状遺構の延長線上で杭列が検出されており、桟橋状になっていたものとされる。静岡県伊場遺跡では伊場大溝と呼ばれる旧河川の内部にいくつかの杭が確認されており、一部は桟橋状の遺構とされているが、それ以外にも係留のための杭があるものと考えられる。また、一部には旧河川に向かって階段状遺構やテラス状遺構が形成されており、旧河川中に多くの船着場があったことが想定される。

以上のように、船着場遺構については、古代においても運河や河川を溜り状に掘削したり、平坦面を作ったりなどの他、桟橋や杭列などの構造物を作るだけでも十分機能を果たしていたことが推測される。

本調査区で確認された溝以外でも南側のⅣ-C 区では低地から 60 ～ 70cm 高い平坦面が見られる（第 189 図）。調査区外に続いているため、テラス状になるかどうかは不明ながら、自然地形の落ちとしては不自然な段になっており、人為的な段である可能性が高い。形成時期は明確ではないものの、段直下で土坑や遺物が見つかっていることから古墳時代には現況の地形になっていたものと考えられる。幅 16m 程が南側に向かって突出しており、さらに東西にもう１つテラス状の段が形成される。このような平坦面も他遺跡の船着場遺構で認められるものであり、当遺構もその可能性が指摘できる。

延永ヤヨミ園遺跡では、船着場遺構の可能性がある地点がⅢ-C 区の 3001 号溝、Ⅳ-C 区の平坦面と２ヶ所が挙げられる。いずれも決定的な証拠ではないながらも、墨書土器や木簡などによって「草野津」と想定されることを考え合わせると、可能性は高いものと考える。Ⅲ-C 区中央谷部分では、古墳時代後期に属するものであるが準構造船の竪板が出土していることから当該時期に船でアクセスできたことは間違いなく、７世紀以降にも同様の環境であった可能性は低くないだろう。

【参考文献】



第 189 図　Ⅳ-C 区検出船着場？遺構実測図（1/200）

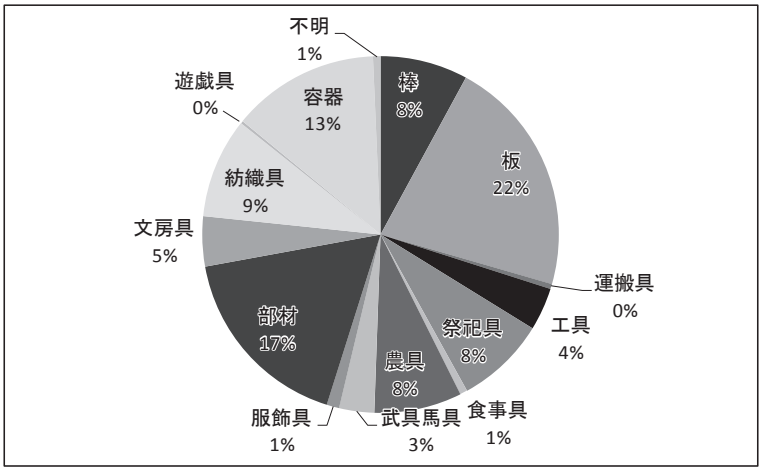
井上尚明 2012『古代東国社会の成立と展開』
井上尚明 2013「古代の運河と港湾遺跡」『古代交通研究会第 17 回大会資料集　古代の運河』pp.47-58, 古代交通研究会
鈴木敏則ほか 2008『伊場遺跡総括編（文字資料・時代別総括）』伊場遺跡発掘調査報告書第 12 冊　浜松市教育委員会
舘野和己編 2002『飯塚遺跡』大分県国東町文化財調査報告書第 26 集　国東町教育委員会
向坂鋼二ほか 1977『伊場遺跡遺構編』伊場遺跡発掘調査報告書第 2 冊　浜松市教育委員会

5　木製品について

Ⅲ -C 区では井戸や谷部の包含層より多数の木製品が出土した。出土木製品を種類別に示したものが第 190 図である。器種不明品である板状施設器具材が多いが、それを除くと容器類・部材・紡織・祭祀具と続く。しかしながら、遺構外出土の加工痕がほとんど見えない板状施設器具材は実測しておらず、細片になっていた遺物等もあり、どの程度実際の出土比を示しているものなのか不明である。時期は包含層出土のものは弥生時代後期～古墳時代前期を中心として、古墳時代後期・古代・中世のものが含まれる可能性がある。個別では遺構出土のもの以外は不明であるが、形態に特徴がある遺物を見ると、古墳時代後期～古代に属するものが多い傾向にある。

個別に見ていくと、運搬具は船のみで、工具は楔や当て具が出土している。Ⅲ -AB 区では古代の粘土廃棄土坑が出土しているが、窯は付近では見つかっておらず、土器製作を行っていた状況は見られない。祭祀具は斎串や形代・燃えさしが出土しており、斎串に関しては古代に属する。燃えさしは時期不明であるが、古墳時代の導水施設周辺で検出されることがあり祭祀具に含めた。食事具は箸が出土しているが簪であった場合服飾具に含められる。農具は弥生時代終末～古墳時代前期の杵と臼のセットが出土した他、ねずみ返し、鍬・鋤等稲作関係の資料が出土しており、付近で稲作を行っていたことが示唆される。武具・馬具類は木鏃・鞘先・鐙・鞍が出土している。鞘先は黒漆を塗った精製品で古墳時代前期に属し、方形周溝を掘削した首長に関連するものであろう。鐙は未製品と製品が出土しており、当遺跡で製作していたものと考えられる。共に７世紀後半～８世紀前半にかけての遺構から出土しており製品は細長い刳りこみを持っているなど、形態的にも合致する。鞍は組合せ式と考えられるものと、平面逆Ｖ字形を呈するものが７世紀後半～８世紀前半の遺構から出土しており、これも形態から見た時期と一致している。服飾具は下駄が出土しており、形態的に古墳時代後期～古代の所産と考えられる。部材は柱・杭・梯子・蹴放しなどの建築部材が多く、井戸枠・導水施設の木樋もここに含めている。文房具は木簡の他、付札と考えられる荷札が

Ⅲ・Ⅳ区 N=441	
棒	35
板	95
運搬具	2
工具	17
祭祀具	36
食事具	3
農具	35
武具馬具	14
服飾具	5
部材	76
文房具	20
紡織具	40
遊戯具	1
容器	59
不明	3



第 190 図　Ⅲ -C 区出土木製品割合

出土している。紡織具は編錘が最も多く、腰当・杼などが出土している。遊戯具は琴の一部と考えられる部材が出土しているが明確ではない。容器類は曲げ物板が多く、槽が若干見られる。地域内では古墳時代まで刳物が多いという指摘があることから、曲げ物類に関しては古代以降の所産である可能性があり、一部は中世の井戸から出土している。板状器具材の中に、容器類の板が含まれている可能性があり、数はこれより多くなると考えられる。棒状器具材も中には、農工具の柄などが含まれる可能性がある。Ⅳ-C 区まで含めた遺跡出土木製品の検討は『Ⅳ区Ⅱ』の中で行う。

【参考文献】

井口あけみ 2010「臼と竪杵の周辺遺跡の出土例」『大道遺跡群 3』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 99 集 :pp.196-202, 大分市教育委員会

本村充保 2006「遺跡出土下駄の全国集成に基づく編年および地域性の抽出に関する基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要 考古學論攷』29: pp.1-95, 奈良県立橿原考古学研究所

本村充保・高橋敦 2009「遺跡出土下駄に関する製作技法および使用樹種に関する基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要 考古學論攷』32: pp.53-83, 奈良県立橿原考古学研究所

山田昌久編 2003『考古資料大観８ 木・繊維製品』小学館

６　方形周溝（方形環溝）について（予察）

（１）はじめに

当区では、弥生時代後期終末～古墳時代前期前半にかけて存続したと考えられる方形周溝が１基検出されたことはⅢ章２で報告したとおりであるが、本遺跡Ⅱ - ２区及びⅤ - ２区において当区方形周溝とほぼ同時期の方形周溝がそれぞれ１基検出されている。このことから、南北２つの丘陵及びその間の谷部からなる本遺跡では、弥生時代後期終末～古墳時代前期にかけて、北側丘陵３ヶ所に方形周溝が存在し、かつこれらは一定期間併存していた可能性があることが判明した。

以下では本遺跡の方形周溝について若干の検討を行うが、本来本遺跡内の同時期の竪穴住居跡の配置など、弥生時代後期～古墳時代前期の集落構造の中での方形周溝の位置づけ・関係性の検討を行った上で、他事例との比較検討が行われるべきであろう。だが、本遺跡調査報告書は今年度末刊行の４冊で終了し、現段階では調査成果の一部しか把握できないため、十分な検討は無理である。

よってここでは、現段階の情報で本遺跡集落構造の中での方形周溝の位置づけを主に検討し、加えて近隣の苅田町山口遺跡方形周溝との比較を行うという予察的な考察を行うこととしたい。

なお、当遺跡方形周溝については、武末純一氏の「方形環溝」（武末 2001 他）に含まれると考えているが、ここでは調査当時の名称である「方形周溝」として取り扱い、当遺跡の報告書がすべて刊行された後に、名称も含めて今後の検討に委ねることとしたい。

（２）Ⅲ - ＡＢ区方形周溝の区画としての在り方について

当周溝の南溝がさらに東側に延長されたような形態の 30 号溝は、当周溝との接続部分にあたる場所がちょうど中世の９・10 号溝によって切られているため、実際に繋がっていたかどうかは不明である。しかし、当周溝と軸がほぼ一致し、かつ同じ逆台形状の断面で、溝埋没に伴い古墳時代前期前半の土器群が多量に廃棄されていたため、状況証拠から当周溝と 30 号溝とは本来は繋がり、一連の区画として一時期機能していた可能性が高いと考えられる。

なお一時期とした理由は、30 号溝は古墳時代前期前半の多量の土器を廃棄する行為自体が方形区画の在り方を示すと考えられるが、当周溝では埋没過程での土器の量が 30 号溝に比べ明らかに少なく、当時の機能および在り方が異なると思われる。さらに 30 号溝では溝の掘り直しがなく、

30 号溝は当周溝の掘り直しの際に南溝を延ばす形で新たに掘削した溝と予想している。

方形区画が２つ並列する様相については、近年再検証に伴い新たに発見された山口市下東遺跡Ⅳ区方形環溝では、方形環溝北東隅から溝が北側に延長されたような状態で発見されており、平面形態が「日」の字状になる可能性が指摘されている（北島 2012、第 191 図）。その他に古墳時代前期前半の福岡市野多目Ａ遺跡４次調査 SD10 が「日」の字状の方形環溝に復元される（吉武編 1997、第 191 図）。これらの類例の存在も、30 号溝と当周溝が一連のものであった可能性を高める。

また弥生時代後期終末に掘削される当周溝の軸は西に 20° 程度と、弥生時代後期終末の竪穴住居の多くが主軸 40° 程度を示すのと大きく異なり、かつ当周溝は地形に沿っていないことから、当周溝は本遺跡における弥生時代後期後半からの集落の一定の法則に則らない形で成立したと予想される。その後当周溝は外側に拡張し掘り直されるが、その際に南溝を東に延長したものが 30 号溝で、新たな区画を作り出したと推測される。このことは、当周溝での行為が継承していることを示すだけでなく、古墳時代前期前半にその行為・機能が拡大したことを示していると考えられる。なお、当周溝内はⅢ章２で報告したとおり内部施設が不明確である。

石野博信氏は豪族（首長）居館を構成する要素として、①方形の環濠と土塁・柵。②居館内の祭・政と経の区画分離。③居館の門と突堤の役割。④居館周辺の集落の計画配置の有無を定義する（石野 1990）。当周溝では、①の柵は確認されていないものの、方形の環濠（周溝）と土塁（外土塁）が存在することから、豪族（首長）居館とすることに問題はないと考えられる。

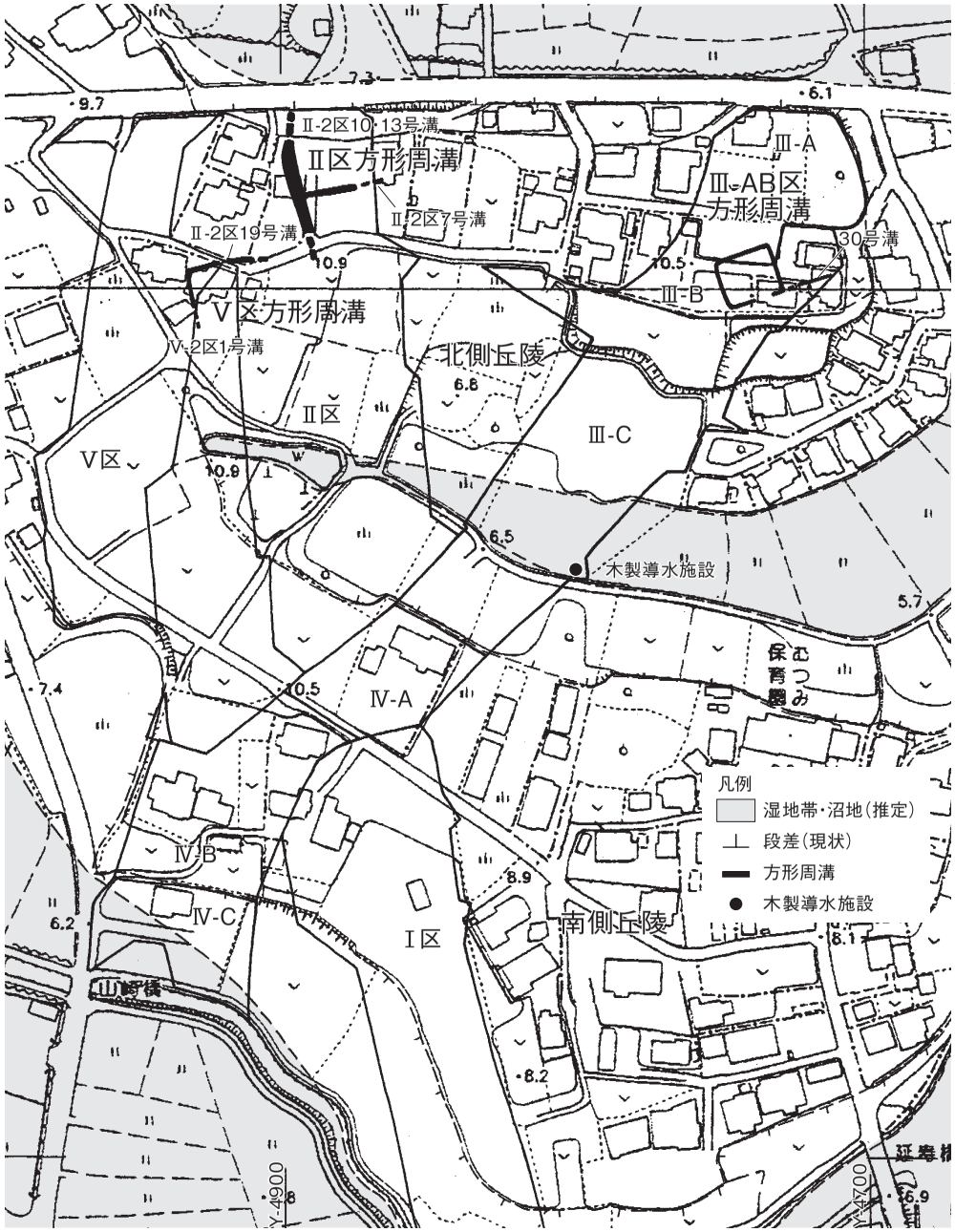
なお北部九州における特定環溝区画を検討した久住猛雄氏は、方形環溝内に内部施設が存在しない例もあることから、方形環溝には倉庫群や工房（群）を囲むもの、祭祀場と推定されるもの等があり、全てが「居館」ではないことに注意すべきと指摘する（久住 2003）。

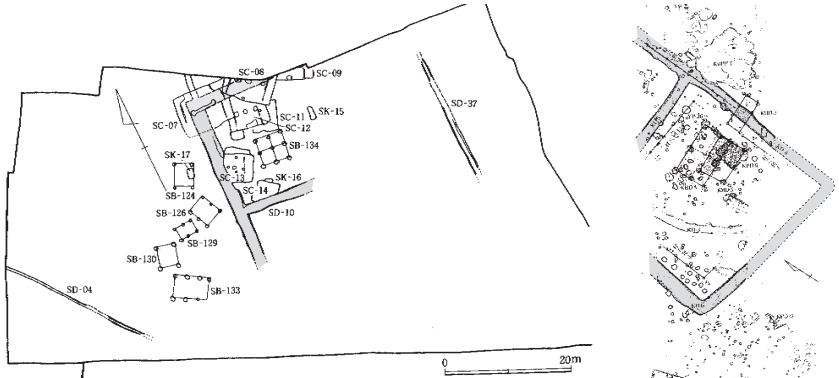
当周溝内では内部施設は確認されていないが、当周溝北西部で古墳時代前期の大型竪穴住居である 13・28 号竪穴住居跡が検出されており、石野氏が指摘する④居館周辺の集落の計画配置の有無も含めて集落の中での配置や位置づけを検討することが今後必要であろう。

（３）本遺跡および苅田町山口遺跡Ａ区の方形周溝について

本遺跡では、当周溝以外にⅤ - ２区の１号溝と「ヒ」の字状の区画溝となるⅡ - ２区７・10・13 号溝が古墳時代前期の方形周溝として調査されている。また当遺跡の北東 1.9㎞に位置する苅田町山口遺跡で古墳時代前期の方形周溝が調査されている。ここでは、山口遺跡を含む当周溝以外の３例についてみていくことで、当周溝の位置づけを検討してみたい。

まず本遺跡内の方形周溝からみていく。当周溝の 170 ｍ西側に位置するⅤ - ２区１号溝は、調査区内でＬ字状に屈折し、規模は南北 20 ｍ以上×東西 10 ｍ以上になる。調査区は異なるが、Ⅱ - ２区 19 号溝は直角というよりややカーブしながら屈曲し、位置･軸･幅、溝上層からの出土状況から、Ⅴ - ２区１号溝と一連の溝となる可能性が高いが、出土土器からⅡ - ２区 19 号溝が古墳時代前期後半に埋没しているため若干様相が異なる。想定通り一連の溝で、方形周溝であったとすると、東西は溝心々で 23 ｍ、区画内法で 22 ｍ、南北は 20 ｍ以上の方形周溝となる。Ⅴ - ２区１号溝の土層から溝の掘り直しはなく、溝外側土塁が想定される。溝断面は逆台形状である。溝の埋没時期については出土土器からⅤ - １号溝が古墳時代前期前半、Ⅱ - ２区 19 号溝が古墳時代前期後半で、掘削時期はいずれも古墳時代前期前半になると思われる。区画内部施設は未確認で、また同時期の竪穴住居跡は区画外に存在する。

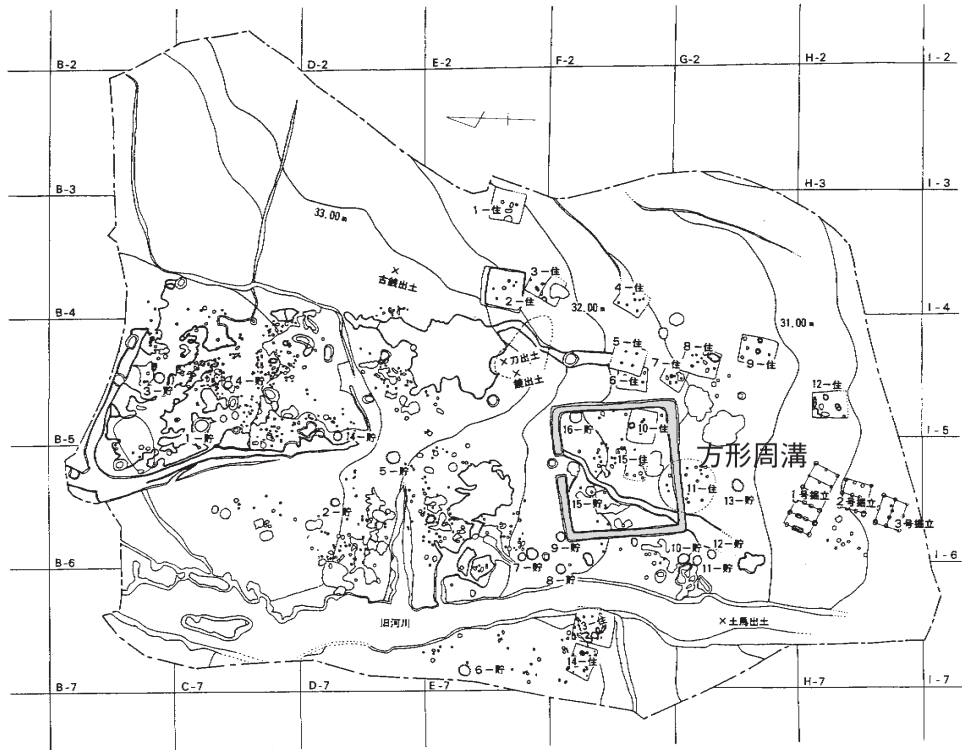




↑ 福岡市野多田 A 遺跡（1/1,200）

山口県下東遺跡（1/1,200）→

↓ 苅田町山口遺跡（1/1,200）



←延永ヤヨミ園遺跡（1/2,500）

第 191 図　延永ヤヨミ園遺跡方形周溝および関連遺跡（1/2,500、1/1,200）

次に当周溝の120ｍ西に位置するⅡ-２区の10・13号溝と、10・13号溝に直交する７号溝は、出土土器から一定期間一連の溝として機能したと考えられ、そうすると南北36ｍ以上×東西20ｍ以上の「ヒ」字形を呈し、方形周溝の中に区画溝を持つ構造となる。13号溝は断面Ｖ字形で、その13号溝を掘り直し、断面が逆台形の10号溝が掘削されたと考えられる。また７・10号溝からは埋没過程で廃棄された土器が多量に出土している。出土土器から13号溝が弥生時代後期終末～古墳時代前期前半古相に埋没し、７・10号溝が古墳時代前期前半に掘削され、古墳時代前期後半に埋没したと考えられる。区画内部施設としては、弥生時代後期終末の10号竪穴住居跡の１棟のみであり、同時期の竪穴住居跡は西側の区画外に展開する。

以上、本遺跡では古墳時代前期の方形周溝が３ヶ所検出され、その軸も西に20°程度振れるという共通性があり、かつ出土土器から古墳時代前期前半の一定期間同時併存していた可能性がある。このことは、同一丘陵上に複数の方形周溝が確認され、古墳時代前期の首長居館構造が明らかになった日田市小迫辻原遺跡に近い集落構造になる可能性がある。

小迫辻原遺跡では、弥生時代後期終末において台地西側に、突出部を有する隅丸方形の１・２号環濠が成立するが、この環濠内外には竪穴住居が展開する。続く古墳時代前期初頭には台地中央を分断する形の１号条溝が出現し、台地東側に方形周溝である１号居館が成立、また１号環濠を踏襲する形で３号環濠が成立する。次の前期前半には台地東側では方形周溝が２号居館にかわり、さらにその西側に小規模な方形周溝である３号居館が成立する（久住2003）。小迫辻原遺跡の集落構造について、辰巳和弘氏は３号環濠が首長とその一族の居住空間・工房・倉庫、１～３号居館が祭儀空間と位置づけている（辰巳2003）。

本遺跡では、弥生時代後期終末段階で西側にⅡ-２区13号溝の方形周溝、東側にⅢ-AB区方形周溝が成立する。古墳時代前期前半段階ではⅡ-２区13号溝を掘り直し、10号溝と区画内を分ける７号溝、掘り直された当区方形周溝と東側に周溝を拡張した30号溝、またⅤ-２区１号溝とⅡ-２区19号溝からなる方形周溝が併存したと考えられる。これらの方形周溝は前期前半には機能が失われ、最終的にⅡ-２区７・10・19号溝が前期後半に最終的に埋没するという変遷過程をたどったと考えられる。

当周溝については、他の方形周溝に比べ当周溝埋没過程での土器が非常に少ないことから、居住空間でなく祭儀空間であったと想定され、先ほど祭儀空間とした小迫辻原遺跡１・２号居館も当周溝と同じく集落東端に位置することも何か示唆的である。そうすると、当周溝東側の30号溝は、埋没過程において多量の土器が出土しており、同時期の竪穴住居も存在することから、居住空間に含まれていた可能性がある。Ⅱ-２区７・10・13号溝で構成される方形周溝については、内部施設は竪穴住居１棟のみであるが、溝内から出土した多量の土器から弥生時代後期終末～古墳時代前期後半まで長期間存続した居住空間、つまり想像をたくましくすれば首長一族の生活空間であったと想定される。また、遺跡中央に位置するⅤ-２区１号溝とⅡ-２区19号溝で構成される方形周溝は、溝内から出土した多量の土器から、居住空間に属すると思われ、首長一族の居住空間の一部を構成していた可能性がある。

なお、本遺跡の類例を調査していく中で、苅田町山口遺跡において古墳時代前期の方形周溝が検出されていることを発見し、本遺跡例は京築地域において２例目となることが判明したため、ここで簡単に山口遺跡方形周溝についての説明を行いたい。

この苅田町山口遺跡Ａ地区方形周溝は、1993 年の概報では方形周溝墓として報告されていたが（長嶺 1993）、2009 年苅田町歴史資料館特別展示図録において、報告者は方形周溝と訂正している（長嶺 2009）。遺跡は谷部最奥部の低丘陵中央部に位置する。調査区内では古墳時代前期では２本柱方形住居跡を方形周溝東側で３棟検出しているが、方形周溝内にある 10 号竪穴住居跡は周溝に切られるため周溝に伴うものではなく、周溝内の建物配置や柵跡などの構造は不明である。方形周溝の規模は溝心々で東西 20.5 ｍ×南北 18.5 ｍ、内法で東西 19 ｍ×南北 17 ｍ、内法面積 320㎡程度を測る。北にある陸橋部の幅は３ｍである。周溝の幅は 1.2 ｍ、断面は逆台形状を呈する。周溝内からは布留系土器群が多量に出土しており、古墳時代前期前半の埋没が考えられる。

以上山口遺跡Ａ地区方形周溝は規模と陸橋部を有する形態から、本遺跡と同様の方形周溝の可能性が高く、Ⅲ -AB 区方形周溝及びⅤ - ２区１号溝とⅡ - ２区 19 号溝で構成される方形周溝と、規模と内容、時期とも類似する。しかし、谷部最奥部に立地すること、本遺跡に比べ竪穴住居数も含めて遺構密度はあまりないことから、方形単郭の比較的下位の首長層に関わる施設と考えられる。

しかし、当遺跡の方形周溝に比べ、布留系土器がまとまって出土する。久住氏は北部九州における小規模な方形環溝の役割について、地域内の他集落よりも外来（畿内）系土器の受容が早いことが共通し、地域内における交易や情報交流、外交のセンターであったことを示す可能性を指摘しており（久住 2003）、山口遺跡方形周溝は久住氏の指摘を良く示す事例になると思われる。

（４）まとめ

地理的に西部瀬戸内地域との窓口であった、当地域の弥生時代後期終末～古墳時代前期前半の川沿いに立地する集落である行橋市辻垣畠田・長通遺跡では出土土器の多くが外来系である。苅田町町上片島遺跡群や同町山口遺跡Ａ地区方形周溝と比べ、本遺跡内での外来系土器の割合は高くはないものの、本遺跡は海や湿地帯に突き出した丘陵上に立地し、当該期の多数の竪穴住居の存在、今回検討した複数の方形周溝の存在から、当地域の拠点集落であったことは疑いないであろう。本遺跡より内陸部の、弥生時代後期終末前後の集落であるみやこ町黒田下原出口遺跡においても外来系土器の割合は非常に低く、当地域では内陸部でも遺跡により外来系土器の出土比率に差が認められる。集落を営んだこの要因は集団の性格による可能性がある。なお、当地域において外来系土器が多く出土する遺跡については、海沿い、川沿い、内陸部に問わず主に瀬戸内海を用いた活動を行った交易・交流センターとしての位置付けも可能であるが、大規模集落である本遺跡で外来系土器が少ないことは、当地域の新たな検討課題を提供したと言える。

一方、本遺跡では北側丘陵のみ「首長居館」と想定される方形周溝３基が検出され、また北側丘陵東端で前期古墳の可能性がある円形周溝および周辺にはビワノクマ古墳、吉国木実堂古墳という古墳時代前期と考えられる古墳が確認されている。さらに北側丘陵と南側丘陵の間の谷には４世紀前後に比定される導水施設が発見されていることから、弥生時代後期終末～古墳時代前期にかけて、本遺跡では北側丘陵が首長居住空間及び祭儀空間を構成していた可能性が考えられる。また外来系土器の割合が低いことは、逆にこの首長は在地首長の系譜を引くことを示唆していると思われる。

今年度で本遺跡報告書がすべて刊行されることから、今後あらためて検討したい。

【引用・参考文献】（調査報告書は紙数の関係で参考文献から除く）
石野博信 1990「集落と居館」『古墳時代の研究』第２巻　雄山閣出版
長嶺正秀 1993『山口遺跡』苅田町文化財調査報告書第 21 集　苅田町教育委員会
吉武学編 1997『野多目Ａ遺跡４』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 527 集　福岡市教育委員会
武末純一 2001「北部九州の弥生集落」『弥生時代の集落』学生社
久住猛雄 2003「北部九州における弥生時代の特定環溝区画と大型建物の展開」『日本考古学協会 2003 年滋賀大会資料集』日本考古学協会 2003 年滋賀大会実行委員会
辰巳和弘 2003「古墳時代の「居館」と大型建物」『日本考古学協会 2003 年滋賀大会資料集』日本考古学協会 2003 年滋賀大会実行委員会
長嶺正秀 2009『厚葬の時代Ⅰ』苅田町歴史資料館 2009 年秋の特別展示図録　苅田町教育委員会
北島大輔 2012「山口における古墳出現期の首長居館－下東遺跡の方形環溝と朝田墳墓群－」『古文化談叢』68 九州古文化研究会

７　導水施設について

（１）本遺跡出土例の概要

Ⅲ -C 区の南東端で古墳時代の導水施設が検出された。導水施設の木樋は、谷の落ち際（下端）ほどに槽部が位置し、下流側はわずかに谷の真ん中に傾けて据えられていた。ただし、下流部は調査区外に延びるため詳細は不明である。位置は木樋の両脇が杭で固定されていたことから、現位置を保っていることは間違いなく、他の遺跡と同じように集落の縁辺部に敷設されていたことがわかる。構造は、槽部に２つの窪みを持つ２槽式で、法量は全長 4.2m、幅は槽部 70cm、下端部 35 cm、槽法量は上が 35 × 30cm、下 60 × 35 cm、覆い屋と考えられる杭間は 170 ～ 180cm である。上流側は、溝が切られておらず、普段から流れる状態にするためには他の木樋が必要となる（未発見）。また、井戸がすぐ横に２基あるが、時期的な問題から水源として可能性があるのは 3002 号土坑のみと言える。また、落ち際が島状に残る部分があり、島状遺構となる可能性がある。水は調査中には、いたるところから湧いてくる状態であり、谷地形で丘陵斜面の水が集まる場所に当たることから考えても、当時から湧いていたものと考えられる。樹種はツブラジイで、木樋付着土壌と包含層土壌で寄生虫卵分析を行ったものの、共に寄生虫卵は検出されなかった。

時期は、周辺からの土器だけでは判断できないため、放射性炭素年代測定ウイグルマッチング法で木樋の年代測定を行った結果を勘案し、検討したい。年代測定の結果は以下の通りである。

２σ暦年代範囲＝ 255 ～ 278cal AD(61.7%)、318 ～ 346cal AD(33.7%)

３世紀中頃～後半、４世紀前半～中頃（古墳時代初頭～前期）

表皮は残存していないため、伐採年代はこれより新しいとはいえ、削り出しの煩雑さや木取りの仕方を考えると 50 ～ 100 年ほど古い樹木を使ったものとは考えがたく、年代測定の結果からは古墳時代前期に属するものとして差し支えないものと考える。付近から出土している土器は、弥生時代終末～古墳時代前期前半、古墳時代後期に属するものが含まれる。ただし、弥生時代終末～古墳時代前期前半頃の土器が最も多く包含されていることから年代測定の結果と矛盾せず、当遺跡の導水施設は古墳時代前期の所産と考える。

（２）導水施設および埴輪の類例と水辺の祭祀の類例

他遺跡の導水施設および導水施設を模したとされる埴輪、水辺の祭祀として共に言及されることが多い井泉遺構などとの比較を通じて、本遺跡出土例の位置づけを行いたい（第 18 表）。

そもそも導水施設は滋賀県服部遺跡や大阪府西ノ辻遺跡で検出されたことを端緒とし、1990 年

遺跡	所在地	時期	形態	備考
纒向遺跡	奈良	3世紀後半～4世紀初頭	木樋 井泉	
延永ヤヨミ園遺跡	福岡	3世紀中頃～4世紀中頃	木樋	
服部遺跡	滋賀	4世紀	木樋	
浅後谷南遺跡	京都	4世紀前半	木樋	
畝田遺跡	石川	4世紀前半	木樋	
千代・能美遺跡	石川	4世紀前半	木樋	
磯野北遺跡	奈良	4世紀前半	木樋	
瓦谷遺跡	京都	4世紀前半～中葉	木樋	2点
南郷大東遺跡	奈良	5世紀前半～中頃	木樋	
大柳生宮ノ前遺跡	奈良	5世紀中頃～6世紀中頃	木樋	
神並・西ノ辻遺跡	大阪	5世紀後半	木樋	2点
水衛遺跡	三重	6世紀	木樋	
三ッ寺Ⅰ遺跡	群馬	5世紀後半～6世紀初頭	導水	石敷
池上曽根遺跡	大阪	弥生時代中期末	井戸	
藤江別所遺跡	兵庫	弥生時代後期以降	井泉	
八王子遺跡	愛知	3世紀？	井泉	
古轡通りB遺跡	三重	4世紀	井戸	
本位田遺跡	兵庫	4世紀	井泉	石組
中溝深町遺跡	群馬	4世紀～5世紀前半	井泉	石組
天白磐座遺跡	静岡	4世紀後半～5世紀	井泉	
城の越遺跡	三重	4世紀後葉～5世紀中頃	井泉	石組含む
清水内遺跡	福島	5世紀	井泉	
屋代遺跡	長野	5世紀	井泉	
駒沢新町遺跡	長野	5世紀	井泉	
砂行遺跡	岐阜	5世紀	井泉	
南紀寺遺跡	奈良	5世紀	井泉	
八尾南遺跡	大阪	5世紀？	井泉	
阪原阪戸遺跡	奈良	5世紀～	井泉	石組
京ヶ辻遺跡	福岡	5世紀	井泉	
六大A遺跡	三重	5世紀後半～6世紀	井泉	
熊野堂遺跡	群馬	5世紀後半～6世紀？	井泉	
三室間ノ谷遺跡	群馬	6世紀	井泉	
上之宮遺跡	奈良	6世紀後半～7世紀初頭	井泉	
沢代遺跡	三重	古墳・奈良時代	井泉	
古宮遺跡	奈良	飛鳥時代	井泉	
三田谷Ⅰ遺跡	島根	古代	井泉	
山添遺跡	奈良	奈良時代後半	井泉	
大園遺跡	大阪	奈良時代後半	埴輪	
野毛大塚古墳	東京	5世紀前半	埴輪	2槽、石製
宝塚古墳	三重	5世紀前半	埴輪	
芝ヶ原古墳群	京都	5世紀前半	埴輪	
五条猫塚古墳	奈良	5世紀前半	埴輪	
ナガレ山古墳	奈良	5世紀前半	埴輪	
心合寺山古墳	大阪	5世紀前半	埴輪	
野中宮山古墳	大阪	5世紀前半	埴輪	2槽
行者塚古墳	兵庫	5世紀前半	埴輪	2槽
月の輪古墳	岡山	5世紀前半	埴輪	2槽
御塔山古墳	大分	5世紀前半	埴輪	2槽
狼塚古墳	大阪	5世紀中頃	埴輪	

第 18 表　導水施設・湧水点祭祀および埴輪の類例

代には奈良県南郷大東遺跡、大阪府狼塚古墳の調査を通して、導水施設と古墳から出土する囲形埴輪で示されるモチーフとの同一性が指摘され、古代における王権祭祀やカミマツリ、聖なる水に関わる祭祀として評価されてきた。水辺の祭祀の中でも「導水施設」と井泉遺構を含む「湧水点祭祀」はその建設規模の大きさから特に近年研究が深化してきたといえる。

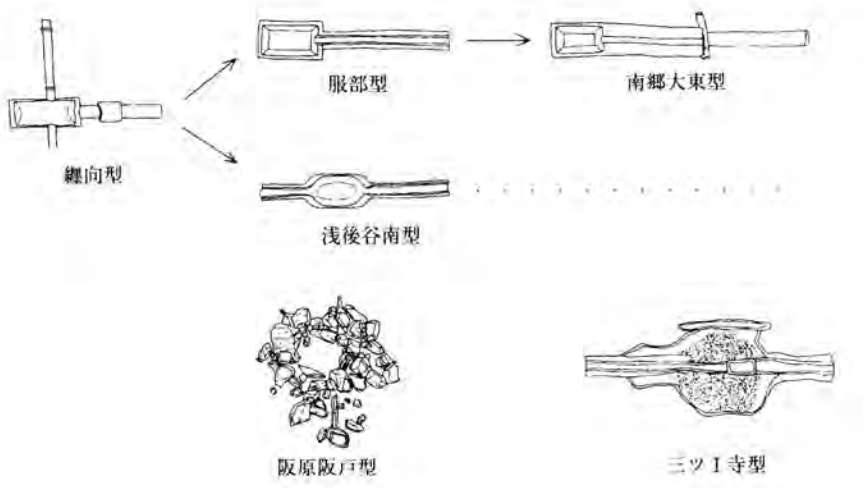
概ね、水辺の祭祀の中で導水施設（木樋）を用いたものと、井泉などの湧水点を含むものとの２型式に分かれることは指摘されており、機能が異なるであろうことは研究者間で共通している。その差異を水の祭祀の中での系統差に帰するものと、明確に機能が異なるとする説に分かれる。

前者は南郷大東遺跡を調査した青柳泰介氏に代表される。青柳氏は貯水池から木樋によって導水する「導水施設Ａ類」と湧水点から導水する「導水施設Ｂ類」とに分類し、首長権力の基盤を支える重要な儀礼として、特に埴輪に示される頻度が多い「Ａ類」が重要視されたとした。Ａ類は古墳時代中期に貯水池の構造や埴輪などから画期が想定され、Ｂ類については弥生時代以来の伝統的な儀礼で、古墳時代中期に特に重要視されるようになった儀礼と捉えた。また、朝鮮半島系の文物が多く出土することから半島系渡来人の存在を背景に想定した。滝斎氏は囲形埴輪の分類から、実際の導水施設との比較を行い、それらを「浄水祭祀遺構」と捉え、変遷を示した（第 192 図）。また、実際の遺構が検出されていない地域からも埴輪が出土していることを指摘し、当初の水利システムの構築といった紐帯を促す儀式から首長権への確立へと発展していくと述べた。坂靖氏は導水施設の系譜を、上記の系統ごとに

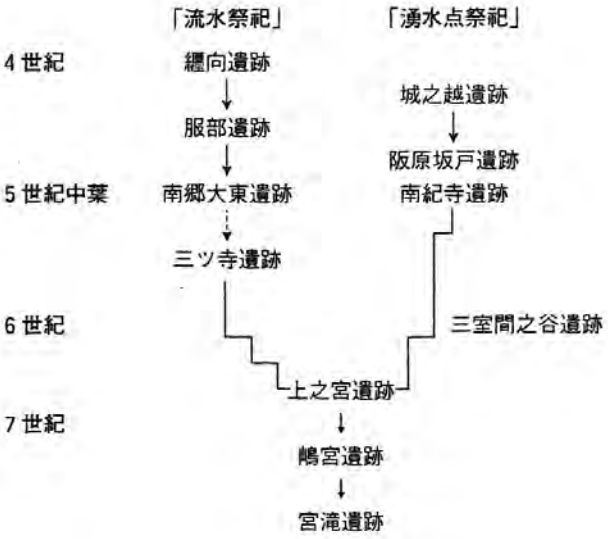
示し、最終的に古代遺構の園池遺構に続くものと指摘し(第193図)、南郷遺跡群の祭祀に関して、治水の英知を象徴したもので、工人たちの「生産」への祈念が託されたものとした。

一方、穂積裕昌氏は湧水点祭祀を古墳時代首長による最上位の祭祀と位置づけ、祭祀の階層性を示している（第194図)。各地で大型建物が伴うことが多いこと、祭祀空間の存在することを指摘し、建物は「斎殿」的機能が想定され、地域を越えた共通の祭式が存在した可能性を指摘した。一方、導水施設については、湧水点祭祀が開放的なのに対して、遮蔽施設を伴うなど閉鎖的であるため異なるものであるとし、古墳上で埴輪として表現されることなどから「殯所」説を提起した（他に米田敏幸氏など)。

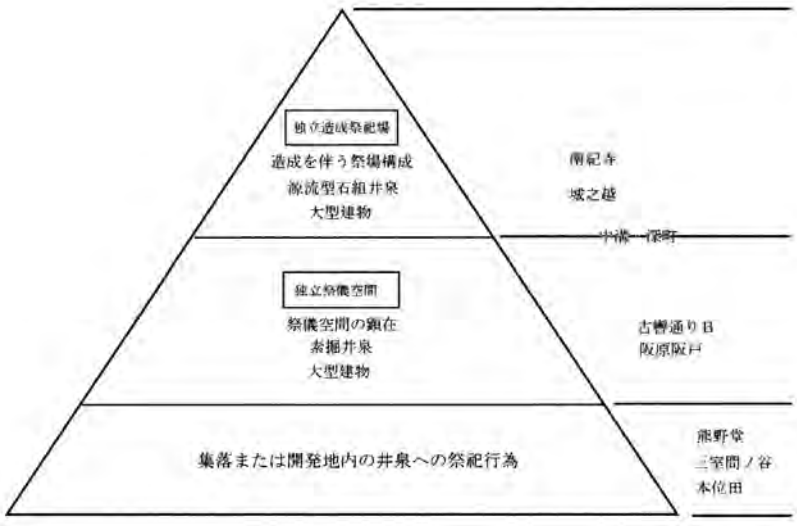
この他にも、導水施設の機能に関しては多くの言及がなされており、黒崎直氏は木樋の下流から寄生虫卵が発見されていることから、「カワヤ」とし、その周辺の覆屋等の遺構群を「ウブヤ」として解釈し、宮本繁雄氏は古墳での葬送儀礼の後、「穢れ」を落とすための「禊」を行った施設とした。また、寺沢知子氏は遺跡の立地から領域の認定に伴う祭祀であったと想定している。他にも、首長による聖水供献儀礼（辰巳和弘氏）や水田からの導水を象徴的に示した（亀田博氏）と



第 192 図　浄水施設の変遷図（滝 2005 より転載）



第 193 図　導水施設の系譜（坂 1996 より転載）



第 194 図　井泉の存在形態モデル（穂積 2012 より転載）

する説などが指摘されている。

（3）延永ヤヨミ園遺跡検出例の位置づけ

木樋の出土位置については、谷部に設置され、谷の開口方向に向かって流れるなど多くの遺跡に共通しており、埴輪の配置にも認められる。形態は２槽を持っており、埴輪では大阪府野中宮山古墳や兵庫県行者塚古墳、岡山県月の輪古墳、大分県御塔山古墳にはあるものの、これまで木製品では出土例がなく、埴輪のモチーフとしての２槽式というものが実際にあったことを示すものと言える。また３枚で両側にＬ字状の端部を持つものも同じく類例がなく、三重県宝塚１号墳出土埴輪で木樋の両側に平坦面が表現されているものが最も近いと考えられる。周辺施設では、水源がはっきりしないものの、島状施設が本施設に伴うものであれば、三重県城の越遺跡などの湧水点祭祀との類似性が窺われるところである。また、木樋の周囲を覆屋で囲う例は、南郷大東遺跡（第 195 図）や大阪府神並・西ノ辻遺跡で認められる。下流が調査区外で掘削していないため確実ではないものの、現況では生垣などの施設は認められず、周囲から精製器種やミニチュア品が多く出土する状況は見られない。また、遺跡内でも初期須恵器や朝鮮半島系土器などの出土はほとんどなく、むしろ畿内や瀬戸内地方の土器が搬入されている。

地域的には、今まで 12 遺跡 14 点の木樋が知られており（第 18 表）、近畿地方がほとんどを占め、わずかに石川県で見られるのみである。埴輪についても、やはり近畿地方が中心となり、東京都・岡山県・大分県で認められる。今回本遺跡出土例は関西より西の地域での初めての実物資料の出土となり、埴輪と含めて考えると、実物・埴輪共に広い地域に広がっており、分布圏がほぼ重なっていたことが示されたと言える。

時期は、先に述べたように３世紀後半～４世紀中頃に位置づけられると考えられる。これまで発見されている中では纒向遺跡出土例が最も古く、３世紀後半～４世紀初頭頃に位置づけられるものの、三方向から水を集積し、槽と樋部分が別作りのものであり、形態としては異なっている。服部遺跡、浅後谷南遺跡出土例（４世紀前半）が、槽を持ち一方向に水を流す点では初現期と考えられ、４世紀代に属する。埴輪を含め、他の例を見ても、大筋では４世紀前半に出現し、５世紀代になって南郷大東遺跡のように大規模な導水施設が誕生し、埴輪に取り入れられるなど盛期を迎える。構造などを見ると本遺跡出土例は５世紀代のものと最も類似しており、年代測定の結果を無視すれば５世紀の所産と考えるのが妥当だろう。しかし、先にも述べたように伐採した４ｍ以上もの木材を 100 年も放置した、または外皮から 100 年分の年輪を除去して作成したとは到底考えられず、初現期の導水施設木樋であり、「現在発見されている中で最古級の一方向に流れる一木型の木樋を用いた導水施設」と言える。

その場合、①そもそも朝鮮半島や大陸で誕生し、北部九州に伝来し、近畿地方に伝わったというこれまでの逆方向の伝播の可能性、②発見されていないだけで、今後早い時期の類例が増加し、近畿地方とほぼ間を置くことなく九州地方にも伝播していた可能性、③そもそも別系統であり、両地域で同時期に概念が発生した可能性などが考えられる。①に関しては、高知県埋蔵文化財センターの山崎孝盛氏の教示によれば、半島を含めた大陸での導水施設の類例は現在のところなく、埴輪が出土している御塔山古墳が５世紀に属しており、畿内の影響が色濃く認められる古墳であることから、類例の少ない現段階では想定し難い。また、③に関しては、形態的な類似性や他の文物の交流の状況から可能性は極めて低いだろう。②は現在のところ、埴輪も井泉遺構も含めて、近畿地方出

第 195 図　南郷大東遺跡導水施設（1/150、報告書より転載）

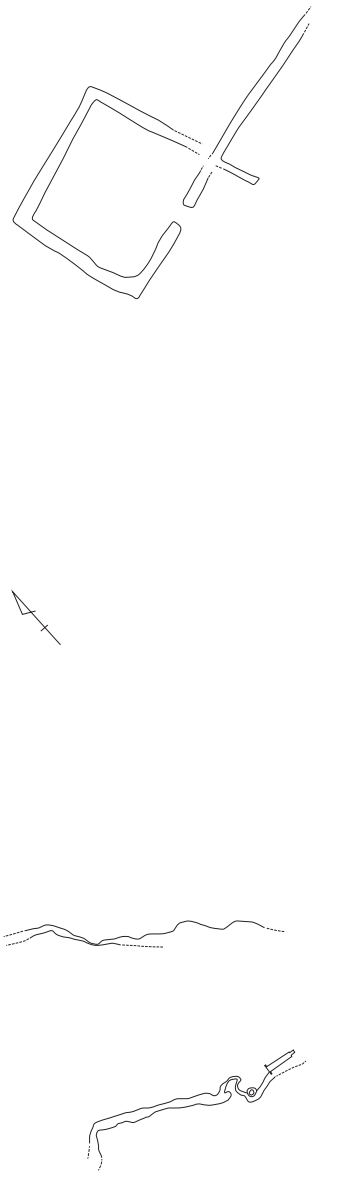
土例が多数を占めており、畿内が中心となることは間違いないであろう。また、埴輪でも九州地方に類例が少ないことから、九州一円に分布していた可能性は低いだろう。九州で唯一出土している御塔山古墳が国東半島に位置していること、また本遺跡も周防灘に面する東九州地域に位置していることから、現状では近畿地方で出現後ほとんど間をおかず東九州にも伝来したものの、点的な流入でさほど受け入れられなかったものと考えられる。現段階では、本遺跡出土例は４世紀前半～中頃という最も新しい時期まで下げて考えるのが妥当であろうが、より古い時期のものが今後近畿地方で発見される可能性はある。ちなみに、石川県千代・能美遺跡、畝田遺跡、三重県水衛遺跡出土例は木槽を持たなかったり、別作りであったりするため、近畿地方以外で見つかった初めての一木造りの木槽を持つ木樋を用いた導水施設とも評価できる。

（4）延永ヤヨミ園遺跡出土導水施設築造の背景

遺跡内で検出された古墳時代前期の遺構ならびに同時期の周辺遺跡を含めて検討し、本遺跡出土導水施設の機能ならびに背景に潜む首長などの要素を検討したい。

機能としては、寄生虫卵分析で寄生虫が検出されなかったことから、トイレ遺構である可能性は低いと考えられる。少なくとも、２槽を持つことから清浄な水を得ることに関しては意図が認められるものの、それが首長による「水」を対象とした祭祀であるのか、「殯所」や「交通の要衝」などの場所に対する祭祀であるのか判断できない。下流を掘削していないので、祭祀行為に使用したと考えられる遺物がほとんど得られなかったためでもあるが、そもそも考古学的に上記の説を検証するために何が確認されればいいのか不明である。例えば、殯所であるならば蛆などの虫類が確認される可能性はあるだろうが、水で流してしまっているとすれば全て下流側に存在するものと考えられる。一方、水を得る祭祀であればそれを示すような遺物が一括で出土するなどといった「証拠」が必要であろうが、本遺跡では共に確認できない。また、交通の要衝にしても周防灘に面しており、古代には「草野津」が設置されたと考えられることから可能性は指摘できるものの、古墳時代前期においては多様な搬入系土器が著しく認められるという状況ではない。以上のことから、「覆屋を持ち、他所から見えないような遮蔽施設があり、包含層からは燃えさしが出土するなど、祭祀性は見て取れるものの、現時点では機能に関しては不明」としたい。

周辺の同時期の遺構としては住居跡がいくつかあるが、最も関連が深いと考えられるのがⅢ-AB 区で検出された方形周溝である。他遺跡では、古墳時代初頭～中期において、大規模集落や首長居館が周辺にあることが多いことから、導水施設と方形周溝の位置を示したのが第 196 図である。方形周溝の入口とは直線距離で 110 ｍほど離れており、谷部を迂回して廻っていくとすれば 200m 以上の距離があると想定される。また、方形周溝の入口は導水施設から 45° 程ずれており、共に丘陵部先端の方向を向く。さらに東側にもＬ字状



第 196 図
導水施設と方形周溝（1/1,000）

の溝が検出されており、前項で古墳時代前期前半に拡張したものと指摘されている。また、導水施設に関してもさらに下流に他の木樋などの構造物が存在していた可能性がある。そのため、これ以上の関係性は不明であるが少なくとも同時期に存在していたことは間違いなく、同じ首長層によって建設され、使われていたものであろう。なお、方形周溝内部では建物などの施設は検出されていないが、前項で他例との比較から祭祀性のあることが指摘されており、一連の遺構群を形成していた可能性は高い。

周辺遺跡では、苅田町上片島遺跡で古墳時代前期の集落がわずかに発見されている他は、さほど大きな遺跡は見て取れない。仮に導水施設が殯所であった場合その被葬者がどこに葬られたのかが問題となるが、殯所でなかった場合でも大規模な祭祀を行うことが出来た首長の墓という観点において重要性が考えられることから「造営主体の葬られた古墳」について考えたい。同じ丘陵上には、ビワノクマ古墳が位置しているものの、４世紀末～５世紀初頭に位置づけられており、若干時期が異なる。他に同時期の古墳を探すと、３世紀末～４世紀初頭に建造されたと考えられる苅田町石塚山古墳が挙げられる。石塚山古墳は全長130mの大型前方後円墳で当該時期の盟主墳とされる。出現期の古墳であり三角縁神獣鏡７面以上や武具類など多くの副葬品を持つ畿内型前方後円墳である。副葬品や墳丘、石室などから畿内ヤマト政権と密接な関係を持ち、北部九州にヤマト王権の勢力を築く上で重要な役割を果たしたとされ、副葬品に飯蛸壺を含むことから漁労関係も総括する首長層と想定されている。ほぼ同じ時期に同じく畿内的な要素が色濃い建造物が造られていることもあり、関連性は想定されるものの、直線距離で北東方向に６km離れており、共に畿内的な要素を持つという指摘のみに留めておきたい。また、遺跡東側の丘陵端部には古墳時代前期とされる未掘の吉国木実堂古墳が位置しており、詳細不明ながら関連する可能性はある。

（５）おわりに

本遺跡で検出した導水施設は、九州で初めて見つかった導水施設で、時期的には初現期に近いものであり、「現在発見されている中で最古級の一方向に流れる一木型の木樋を用いた導水施設」と言える。畿内で多くの検出例が認められることから、その関連性を強く窺い知ることが出来、他遺跡との比較でも背後に大規模な土木事業が可能であった首長の存在が浮かび上がる。下流が未掘のため機能などについて不明な点は残るものの、形態および時期、立地などの点において、古墳時代における導水施設および水辺の祭祀の復元に大きな意味を持つものであると言える。

【参考文献】

青柳泰介 1999「囲形埴輪小考」『同志社大学考古学シリーズⅦ 考古学に学ぶ』pp.447-466, 同志社大学考古学シリーズ刊行会

青柳泰介 2003「導水施設考―奈良県御所市・南郷大東遺跡の導水施設の評価をめぐって―」『古代学研究』160: pp.15-35, 古代學研究會

青柳泰介編 2003『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 75 冊　奈良県立橿原考古学研究所

青柳泰介 2005「導水施設の意義についてー南郷大東遺跡の調査を中心にー」『水と祭祀の考古学』(奈良県立橿原考古学研究所付属博物館編): pp.16-47, 学生社

有井宏子編 2006『水にうつる願い』大阪府立狭山池博物館

伊賀高弘 1991『京都府遺跡調査概報第 46 冊』財団法人京都府埋蔵文化時調査研究センター

石崎善久編『京都府遺跡調査概報第 93 冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

石野博信 1999『纒向遺跡の研究』(奈良県立橿原考古学研究所付属博物館編) 社団法人橿原考古学協会

伊藤雅文編 1991『畝田遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

今尾文昭 2003『カミよる水のまつり』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館

宇野愼敏 2010「豊前首長系譜にみる画期と歴史的意義」『九州における首長墓系譜の再検討』第 13 回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集 : pp.83-104, 九州前方後円墳研究会
梅本綾 1999「水辺の祭祀の諸相とその意義」『古事』天理大学考古学研究室紀要第 3 冊　天理大学考古学研究室
大阪府立近つ飛鳥博物館編 2012『王と首長の神まつり』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 57
大橋信弥・大道和人編 2010『導水施設と埴輪群像から見えてくるもの』滋賀県立安土城考古博物館
金子裕之編 1998『日本の信仰遺跡』奈良国立文化財研究所学報第五十七冊　奈良国立文化財研究所
木下亘 1993『奈良県遺跡調査概報　1992 年度』奈良県立橿原考古学研究所
黒崎直 1999「古墳時代のカワヤとウブヤー木槽樋の遺構をめぐってー」『考古学研究 45-4』pp.53-69, 考古学研究会
黒坪一樹 1998「浅後谷南遺跡出土の導水施設について」『京都府埋蔵文化財情報第 68 号』pp.17-20, 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
黒坪一樹 2011「木樋について（浅後谷南遺跡）」『京都府埋蔵文化財情報第 115 号』p.38, 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
下城正編 1988『三ッ寺Ⅰ遺跡』群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社
高瀬要一編 2006『古代庭園研究Ⅰ』奈良文化財研究所学報第 74 冊　独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
寺沢知子 2004「王権の祭祀とマツリ」『考古資料大観 10』(寺沢薫編): pp.140-154, 小学館
長嶺正秀編 1988『石塚山古墳発掘調査概報』苅田町文化財調査報告書第 9 集　苅田町教育委員会
林大智編 2012『小松市千代・能美遺跡』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
林部均編 2001『奈良県遺跡調査概報 2000 年度』奈良県立橿原考古学研究所
坂靖 1996「古墳時代の導水施設と祭祀―南郷大東遺跡の流水祭祀―」『考古学ジャーナル 398』pp.16-20, ニュー・サイエンス社
船越重信編 1997『水衛遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 148　三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌編 1992『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 99-3　三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌 1994「古墳時代の湧水点祭祀について」『同志社大学考古学シリーズⅥ 考古学と信仰』pp.185-200, 同志社大学考古学シリーズ刊行会
穂積裕昌 2001「井泉と大形建物～八王子遺跡にみる井泉祭祀～」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 92 集　財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
穂積裕昌編 2002『六大 A 遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 115-16, 三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌 2004「いわゆる導水施設の性格についてー殯所としての可能性の提起ー」
穂積裕昌 2004「水にかかわる祭儀―井泉と導水施設―」『考古資料大観 10』(寺沢薫編): pp.155-168, 小学館
穂積裕昌 2005「もうひとつの水のまつりー湧水点祭祀の世界ー」『水と祭祀の考古学』(奈良県立橿原考古学研究所付属博物館編): pp.163-187, 学生社
穂積裕昌 2006「古墳時代祭儀空間の成立―古墳時代庭状遺構の評価を巡って―」『研究紀要第 15-1 号』pp.1-14, 三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌 2012『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣
松田順一郎ほか編 2002『神並遺跡第 4 次、西ノ辻遺跡第 10・16 次発掘調査報告書（遺構編）』財団法人東大阪市文化財協会
消斎 2001「「水の祭祀場を示した埴輪」についての覚書」『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書』八尾市文化財調査報告 45・史跡整備事業調査報告 2: pp.94-110, 八尾市教育委員会
消斎 2005「水の祭祀場を表した埴輪と導水施設」『水と祭祀の考古学』(奈良県立橿原考古学研究所付属博物館編): pp.87-103, 学生社
宮本繁雄 2009「葺石から見る導水施設と導水施設形埴輪」『古代学研究』166: pp.1-20, 古代學研究會
三好玄 2012「大園遺跡出土埴輪の概要」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』16, pp.32-37, 大阪府教育委員会
三好玄 2013「大園遺跡出土埴輪の再検討」『百舌鳥・古市古墳群出現前夜』pp.145-159, 大阪府立近つ飛鳥博物館
山崎孝盛 2012「古墳時代の祭祀」『平成 24 年度第 3 回考古学講座』（資料）公益財団法人高知県文化財段埋蔵文化財センター
吉田和彦編 2013『御塔山古墳発掘調査報告書』杵築市埋蔵文化財発掘調査報告書第 15 集　杵築市教育委員会
米田敏幸 2012「古墳時代のおくりびとたち」『菟原Ⅱ―森岡秀人さん還暦記念論文集―』pp.401-436, 菟原刊行会

8　出土木製品の樹種同定

（1）はじめに

延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C 区の調査では大量の木製品が出土している。本稿ではこれら木器の樹種同定の結果と器種による用材傾向について報告する。

延永ヤヨミ園遺跡は福岡県行橋市延永・吉国に位置する弥生時代後期から古墳時代・古代・中世にかけての集落跡である。遺跡は低丘陵上の全面に展開し関連遺構は谷地にまで広がっており、弥生末～古墳時代を中心とする集落としては県下でも有数の規模をもつ遺跡である。出土遺物には、古墳時代前期の導水施設木樋（第 168・169 図）や奈良時代（９世紀代）の「津」の文字が書かれた墨書土器などが出土しており重要性が指摘されている。

遺跡内の調査区はⅠ～Ⅴ区にわかれ全体でおよそ 45,000㎡の広範囲におよんでいる。本稿で扱うⅢ-C 区の他、Ⅰ区やⅣ-C 区からも木器が出土しており、これらの資料とあわせて検討することで当遺跡における木器の用材傾向を詳細に把握することが期待できる。

（2）資料

樹種同定の対象となる木器は 184 点であり、土坑・井戸・水漬け遺構・包含層などから出土している。遺物の時期は古墳時代（５世紀後半）から平安時代（10 世紀）と時期差があるが、一部を除き資料の中心は古墳時代後期や古代と考えられている。器種は容器・農工具・紡織具や木簡や祭祀具、部材など用途は多岐にわたり、その中には導水施設の木樋や船材など全国的にも出土例の稀有な資料も含まれている。

（3）方法

木製品の樹種同定は以下の手順により行った。はじめに木器の木取りや形状を観察し、破断面などできるだけ形状を損なわない箇所から、木口・板目・柾目面の切片をカミソリで採取した。採取した切片をプレパラートに載せ、その上からガムクロラールを滴下しカバーガラスを被せて標本プレパラートを作製した。標本プレパラートのガムクロラールが固化した後、光学顕微鏡（Nikon ECLIPSE E200）で観察した。各切片の組織構造を原生標本や参考資料と比較して樹種を同定した。

（4）結果

樹種同定の結果、木器 184 点の中から針葉樹分類、広葉樹分類が検出された。その内訳として、針葉樹はスギやヒノキなど 129 点、広葉樹はアカガシ亜属・ツブラジイ・クスノキ・ツバキ属など 44 点、樹皮や未同定資料など 11 点である。木器の実測図を第 161 ～ 179 図に示し、形状や出土遺構などの詳細や同定結果について第６表に示す。

この他、以下に器種毎による同定結果と用材傾向などについて記す。なお、器種の時期・用途・分類等は第６表に準じるものとする。

※本報告では樹種鑑定上の解剖学的記載や各断面の顕微鏡写真について紙面の関係上掲載することができなかった。不備について記してお詫びする。

容　器

容器は 32 点が出土しており、曲物蓋板・曲物底板・曲物板・槽・盤がある。同定の結果、針葉樹３分類（28 点）、広葉樹１分類（１点）が検出された。未同定資料は３点あり、年輪の状況などからいずれも針葉樹と考えられる。

蓋板は 13 点全てが針葉樹である。内訳はヒノキ８点、スギ３点、ヒノキ科２点である。点数が

少ないため詳細な用材傾向を示すには至らないが、スギよりヒノキの使用率が高くなる結果は他の器種でも同様の傾向が確認されている。

底板は未同定の１点を除き９点全てが針葉樹である。内訳はスギ６点、ヒノキ３点である。蓋板と同様、全て針葉樹であり底板ではスギの使用率が高い。底板も点数が９点と少ないため同定結果を提示するに留める。なお、第 170 図４～６（いずれも樹種はスギ）は同一個体である。

曲物板は未同定の２点を除き４点全てが針葉樹である。内訳はヒノキ３点、スギ１点である。曲物板は蓋板または底板と考えられる資料であり、同定結果はヒノキの使用率が高い。

槽は２点出土しており針葉樹１種、広葉樹１種が検出された。内訳はヒノキ１点、クリ１点である。北部九州における弥生時代から古墳時代の槽に使用された樹種は、ケヤキ・アカガシ亜属・クリなどの広葉樹の使用例が多く報告されているが、当遺跡では針葉樹のヒノキが確認されている。

盤は１点出土しており針葉樹のスギである。盤は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ -C 区からも１点が出土している。Ⅳ -C 区から出土した盤は広葉樹の散孔材である。盤も上記する槽と同様に刳物であり、広葉樹の使用例が多くみられる。本遺跡では、点数は少ないものの槽と同様にスギ・散孔材と針葉樹、広葉樹共に検出されている。

食膳具

食膳具は３点が出土しており、匙（柄か）・箸がある。同定の結果、針葉樹１分類（２点）、広葉樹１分類（１点）が検出された。

匙は１点が出土しており広葉樹の散孔材である。匙が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ～Ⅴ区においてⅢ -C 区の１点のみである。他の遺跡における匙の出土例をみると、アカガシ亜属・ユズリハ属・シイ属・ツバキ属・モクレン属など多様な樹種が確認され広葉樹が多く見られる。本稿では新たな出土例の蓄積として同定結果を提示するに留める。

箸は２点が出土しており全て針葉樹のスギである。箸に使用される樹種は、割裂の容易なスギやヒノキなどの針葉樹が多く見られる。

服飾具

服飾具は２点が出土しており、下駄･櫛がある。同定の結果、針葉樹１分類（１点）、未同定（１点）が検出された。

下駄は１点が出土しており針葉樹のヒノキである。下駄は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ -C 区からも出土（１点）している。Ⅳ -C 区出土の下駄は広葉樹のキリ？である。キリ？の下駄は出土例が稀有である。服飾具の櫛は未同定である。

農　具

農具は 11 点が出土しており、鍬・鍬未製品・鋤未製品・柄・杵・臼・大足・ねずみ返しがある。同定の結果、針葉樹２分類（５点）、広葉樹３分類（６点）が検出された。

鍬未製品は１点が出土しており針葉樹のモミ属である。鍬は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ -C 区からも４点が出土しており、樹種はいずれもアカガシ亜属である。モミ属にはモミやウラジロモミがあり、組織構造のみでは両者を区別することはできない。また、モミ属の材質は比較的軟弱で強度も中程度であり鍬には不向きな樹種といえる。Ⅲ -C 区出土の鍬は未製品であるため他の農具または全く別の器種の可能性も考えられる。

鋤未製品は１点が出土しており広葉樹のアカガシ亜属である。鋤は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ -C 区か

らも４点が出土しており、樹種はいずれもアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアラカシ・シラカシ・イチイガシなど複数種があるが、組織構造のみではこれらを区別することはできない。強靭なアカガシ亜属は鍬や鋤など農具の樹種として一般的であり出土例も多い。

杵は４点が出土しており針葉樹１種、広葉樹２種が検出された。内訳はスギ１点、アカガシ亜属２点、ツバキ属１点である。杵は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも２点が出土しており、樹種はいずれもツバキ属である。

臼は１点が出土しており広葉樹のクスノキ科である。臼が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ～Ⅴ区においてⅢ-C 区の１点のみである。

大足は１点が出土しており針葉樹のモミ属である。大足は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも５点が出土しており、樹種はスギ（３点）・ヒノキ（２点）である。大足にはいずれも針葉樹が使用されている。

柄は１点が出土しており針葉樹のスギである。柄は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも２点が出土しており、樹種はアカガシ亜属（２点）・散孔材（１点）である。Ⅲ・Ⅳ-C 区出土のいずれの柄もどのような器種の農具であったかは不明である。

ねずみ返しは１点が出土しており広葉樹のクスノキ科である。ねずみ返しは延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも５点が出土しており、樹種は全てクスノキ科である。

工　具

工具は６点が出土しており、当て具・楔・羽子板状木製品・工具残材がある。同定の結果、針葉樹２分類（３点）、広葉樹３分類（３点）が検出された。

当て具は１点が出土しており広葉樹の散孔材である。当て具が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ～Ⅴ区においてⅢ-C 区の１点のみである。

楔は３点が出土しており針葉樹２種、広葉樹１種が検出された。内訳はスギ１点、ヒノキ１点、アカガシ亜属１点である。楔は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも２点が出土しており、樹種はヒノキ（１点）、アカガシ亜属（１点）である。

羽子板状木製品は１点が出土しており広葉樹のシイ属である。羽子板状木製品は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも１点が出土しており、樹種はヒノキ（１点）である。

その他、工具（残材）として１点が出土しており針葉樹のスギである。工具（残材）は器種・用途共に不明、同定結果を提示するに留める。

紡織具

紡織具は14点が出土しており、杼･腰当･編錘･紡錘車がある。中でも編錘は９点と比較的まとまって出土している。同定の結果、針葉樹２分類（５点）、広葉樹分類（９点）が検出された。紡織具の広葉樹は全て編錘である。

杼は１点が出土しており針葉樹のヒノキである。杼が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ～Ⅴ区においてⅢ-C 区の１点のみである。細い棒状を呈する形状から割裂の容易な針葉樹のヒノキが利用されたと考えられる。

腰当は３点が出土しており全て針葉樹である。内訳はスギ１点、ヒノキ２点である。腰当は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも１点出土しており、樹種はモミ属である。上記の杼と同様、その形状から割裂の容易な針葉樹が利用されたと考えられる。

編錘は９点が出土しており全て広葉樹の散孔材である。形態差による樹種の偏りは見られないようである。編錘は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも 24 点が出土しており、１点（スギ）を除き大部分が広葉樹を使用している。

紡錘車は１点が出土しており針葉樹のスギである。紡錘車が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ～Ⅴ区においてⅢ-C 区の１点のみである。Ⅳ-C 区で紡織具の糸巻が出土（１点）しており、樹種は針葉樹のヒノキである。

武具・馬具

武具・馬具は７点が出土しており、鞍・鐙・鞘・木鏃がある。同定の結果、針葉樹３分類（３点）、広葉樹４分類（４点）が検出された。

鞍は２点が出土しており全て広葉樹である。内訳はアカガシ亜属（１点）、キブシ（１点）である。鞍は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも４点が出土しており、樹種はカヤ、コナラ節、ニレ属、クスノキ科である。鞍の樹種は、広葉樹の使用率が高い様子が伺える一方、特定の樹種を使用する傾向は見られない。多様な樹種の使用は、鞍の形態差によるものか時期差によるものかは本稿の同定結果のみでは不明である。

鐙は２点が出土しており全て広葉樹である。内訳はケヤキ（１点）とツブラジイ（１点）である。鐙は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも１点が出土しており、樹種は広葉樹のニシシギ属である。延永ヤヨミ園遺跡から出土した鐙は、３点と点数は少ないが全て広葉樹であり、いずれも異なる樹種が使用されている。

鞘は１点が出土しており針葉樹のカヤである。鞘が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ～Ⅴ区においてⅢ-C 区の１点のみである。

木鏃は２点が出土しており全て針葉樹である。内訳はマツ属複維管束亜属（１点）と樹種不明の針葉樹である。マツ属複維管束亜属にはアカマツやクロマツがあるが、細胞組織の観察で両者を識別することが困難だったため属レベルの同定に留まった。樹種不明の針葉樹は遺物がほぼ完形のため、切片採取により遺物の形状を損なう可能性が高く、樹種同定に必要な全ての断面での切片採取を行わず非常に大まかな分類に留めた。

楽　器

楽器は１点が出土しており、琴がある。同定の結果、広葉樹１分類（１点）が検出された。

琴は１点が出土しており広葉樹のアカガシ亜属である。琴が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ～Ⅴ区においてⅢ-C 区の１点のみである。短軸方向に擦過痕が認められ、弦を張る部分の端部に当たる可能性がある。

祭祀具

祭祀具は 20 点が出土しており、斎串・形代（馬形、鳥形）・木樋・燃えさしがある。中でも斎串は 11 点と比較的まとまった点数が出土している。同定の結果、針葉樹３分類（17 点）、広葉樹１分類（３点）が検出された。

斎串は 11 点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ（10 点）、ヒノキ科（１点）である。唯一ヒノキ科と同定された資料（第 163 図 13）は、形状保護を最優先としたため柾目面の切片を十分に採取できず詳細な同定には至らなかった。他の斎串の同定結果から本資料もヒノキである可能性が考えられる。

形代（馬形･鳥形）は４点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ（２点）､スギ（１点）､ヒノキ科（１点）であり、斎串と同様、全て針葉樹が使用されている。形代は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも 11 点が出土しており、樹種は広葉樹のアカガシ亜属が１点あるが、それ以外は全て針葉樹である。

燃えさしは２点が出土しており全て針葉樹である。内訳はスギ（１点）､ヒノキ科（１点）である。燃えさしは延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ -C 区からも５点が出土しており、樹種はマツ属複維管束亜属やヒノキ科など全て針葉樹である。

木樋は５点が出土しており針葉樹１種、広葉樹１種が検出された。内訳はヒノキ科（２点）、ツブラジイ（３点）である。木樋は木取りを見ると中央及び左右の木樋で取り方が一体となっている様に見て取れることから、巨大な一木から３本共に切り出した可能性が高いと考えられている。同定の結果、中央・左右の木樋はいずれもツブラジイであった。この他、木樋西側の部材（第 169 図１）及び木樋下に据えられていた板状器具材（第 169 図２）が出土しており、これらは木樋の本体とは別材となる。樹種はいずれの資料もヒノキ科である。

文房具

文房具は８点が出土しており､全て木簡である。同定の結果､針葉樹１分類（１点）が検出された。

木簡は８点が出土しておりこのうち樹種同定を行った資料は１点（第 175 図４）である。内訳はヒノキ科（１点）である。木簡は、墨痕が確認されたものに関しては木簡、その他については札として報告しており、樹種同定を行った資料（175 図４）は札である。木簡は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ -C 区からも 12 点が出土しており、全てスギやヒノキなどの針葉樹である。

木簡のうち墨痕が確認されたもの関しては、資料の形状保護を優先して切片採取による樹種同定を行っていない。これらの資料は、目視により木目の状態などを観察した結果では全て針葉樹と推測される。

部　材

部材は 25 点が出土しており、柱･杭･扉･梯子･井戸枠･その他（部材･器具材･用途不明木製品）がある。同定の結果、針葉樹５分類（10 点）、広葉樹５分類（８点）が検出された。部材のうち５点は未同定である。

柱は２点が出土しており全て広葉樹である。内訳はクスノキ科（１点）と未同定（１点）である。未同定の資料（第 176 図 5）は､目視により木目の状態などを観察した結果では広葉樹と推測される。

杭は５点が出土しており全て広葉樹である。内訳はアカガシ亜属（１点）、散孔材（３点）、ミカン科（１点）である。杭は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ -C 区からも４点が出土しており、樹種はカヤ・クヌギ節・散孔材である。

扉は２点が出土しており全て針葉樹である。内訳はスギ（１点）､モミ属（１点）である。扉は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ -C 区からも１点が出土しており、樹種はスギである。

梯子は２点が出土しており全て針葉樹である。内訳はスギ（１点）､マツ属（１点）である。マツ属と同定した資料（第 170 図７）は、垂直・水平樹脂道が共に存在し放射柔細胞の内壁には不鮮明ではあるが鋸歯状の肥厚が確認された。しかし､採取した切片は木材組織の劣化が進行しており、鋸歯状の肥厚も不鮮明なためより広義の同定に留めた。梯子は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ -C 区からも１点が出土しており、樹種はアカガシ亜属である。

井戸枠は３点が出土しており全て針葉樹である。内訳はスギ（２点）、ヒノキ科（１点）である。スギ（第 162 図１・２）は井戸枠、ヒノキ科（第 162 図３）は井戸枠ないしは井戸を構成する板材である。井戸枠は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ -C 区からも 38 点が出土しており、樹種はモミ属・クスノキ科・シイ属（ツブラジイ・スダジイ）である。

その他の部材は７点が出土しており針葉樹２種、広葉樹１種が検出された。内訳はヒノキ（４点）、モミ属（１点）、散孔材（２点）である。第 175 図９は蹴放しと考えられる資料で樹種はモミ属である。第 170 図２は薄い板状の木製品で蘭と考えられる。薄い板状で表面は剥落が激しく未同定であるが目視からは針葉樹と推測される。

運搬具

運搬具は４点が出土しており、舟である。同定の結果、針葉樹１分類（1 点）、広葉樹１分類（3 点）が検出された。

舟は４点が出土しており針葉樹１種、広葉樹１種が検出された。内訳はスギ（１点）、クスノキ科（３点）である。第 164 図１～３は準構造船の竪板であり、接合して同一個体となるものと考えられる。樹種は全てクスノキ科である。第 164 図４は船の栓であり、樹種はスギである。船の竪板には内外面に固定のための孔が穿たれ木栓が内面から差し込まれている。

９　導水施設木樋の保存処理

（1）はじめに

延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ -C 区の調査では古墳時代後期の大型導水施設が出土している。本稿ではこの大型導水施設の保存処理に係る一連の作業について報告する。

木樋は本来完形であったものの、調査時ならびに取り上げ時に一部欠損してしまっている。点線で示した部分が本来の木樋の大きさと考えられる。木樋左右は端部が厚くなる断面Ｌ字形を呈しており、木樋中央は逆Ω字形を呈する。先に述べたように中央木樋上方に認められる槽部に水が溜まり上澄みが下方に流れることによって浄水を得る構造を呈する。中央木樋は先端に行くほど薄くなる。左木樋は先端ほど、端部の突出が低く、薄いが、右木樋は先端ほど端部の突出が高く、厚くなる。検出面では左右共に同一レベルを保っていたことから、意図的な加工ではないと考えられ、据える際に下方がやや低くなるよう調整したものであろう。木取りを見ると中央左右木樋で取り方が一体となっている様に見て取れ、巨大な一木から３本共に切り出した可能性が高い。

（2）トレハロース含浸処理法の特徴

国内で糖アルコール含浸処理法の開発･実用化が進められたのは 1994 年頃からであり、当初、様々な糖類の中から安定性や安全性、価格等を検討した上でラクチトールが選択されてきた。しかし、近年、バイオ燃料の高騰に伴いラクチトールの価格が急激に上昇し、大量且つ大型の木製品を保存処理するにあたり、価格と安定供給の面から実用的とはいえない状況となった。そこで、ラクチトールと同様に安定性や安全性を備え、より安価に入手できる糖類が求められるようになり、選定されたものがトレハロースである。

トレハロースは、従来の糖アルコール含浸法においてラクチトールにトレハロースを添加することにより、高濃度溶液の維持や安定した結晶の形成に利用されてきた（2010 伊藤）。また、糖アルコール含浸法の開発当初から、トレハロースの安定性は高く評価されていた。しかし、当初は希少糖で

あるがゆえに価格が高く、安定供給の面でも大量の木製品の保存処理を行うには実用的ではなく適用されていなかった。しかし、近年、トレハロースの大量生産技術の確立により安価で安定的な供給が行われるようになり、以後、トレハロースを主剤とした保存処理が進められるようになる。現在では保存処理の作業性、環境への安全性、処理後の安定性、価格など従来のラクチトールによる保存処理を凌ぎ、より実用的な保存処理方法として適用範囲が広がっている。

	ラクチトール	トレハロース
融点	102～105℃（1水和物）	97℃（2水和物）
溶解度（g/100g水）	169.7g（25℃）	91.4g（25℃）
甘味度	40（対砂糖100）	45（対砂糖100）
分子量	362（1水和物）	380（2水和物）
吸湿性	RH90%以下吸湿性なし	RH90%以下吸湿性なし

第19表　ラクチトールとトレハロースの基本的な物性（2010伊藤）

（3）保存処理方法

導水施設の保存処理は以下の手順により行った。以下に各工程の作業内容と写真を記す。

① 事前調査

事前調査では、遺物の洗浄・推定含水率の測定・樹種同定・写真撮影（処理前）・脱色（脱鉄処理）などを行った。脱色作業はまずエチレンジアミン四酢酸３ナトリウム（EDTA・3Na）3%水溶液に１～２日間浸漬した後、流水に１～２日間浸漬させた。

② 含浸処理

含浸処理では木樋内部の水分とトレハロースを置換するため木器を浸漬させた。トレハロース水溶液の濃度は30%から含浸を開始させ、数週間～１ヶ月の期間をかけて徐々に濃度を上げる。最終含浸濃度は約73%前後とした。濃度上昇の際は、含浸槽からトレハロース水溶液を汲み出し、加温しながらトレハロースを加え、追加したトレハロースが完全に溶けてから含浸槽に戻す工程を繰り返し行った。含浸処理中の温度は約40℃～80℃であり、含浸濃度と共に徐々に上昇させた。

③ 取り上げ

３～５ヶ月間かけて最終含浸濃度の73%前後まで含浸が終了した木樋は含浸槽から取り出し、乾燥･結晶化を促す。木樋は発掘調査の段階で30cm～100cmに分割している。大きさに差異はあるが、高濃度トレハロースを含浸した木樋は重く､破損せぬよう２人１組で含浸槽から取り上げを行った。

④ 結晶化

取り上げ後の木樋はまだ脆いため、内部に含浸したトレハロースの結晶化を促進するため、木樋を冷やし結晶化のスイッチを入れる。素早く結晶化を進めるため送風機により風乾を行い、取り上げ後２～３日は数時間毎に木樋の天地返しを行った。

⑤ 表面処理

木樋表面に付着しているトレハロースの結晶を除去するためスチームクリーナーによる表面処理を行った。表面処理の際、スチームクリーナーの蒸気で濡れた箇所は、しっかりと水分を拭き取り木樋に水分が浸み込むことを抑える。

⑥ 組立・接合・補彩

写真１　含浸槽からの取り上げ

写真２　結晶化

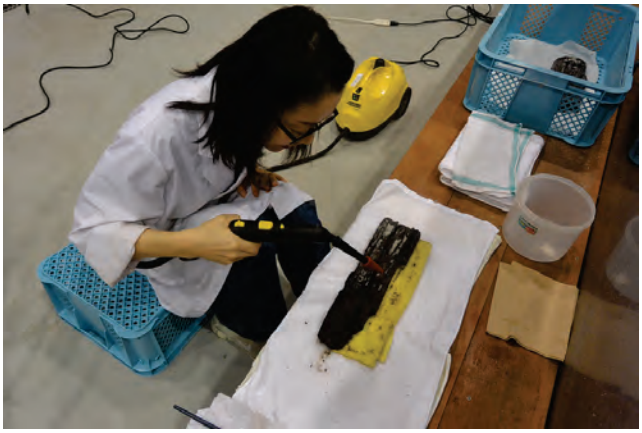


写真３　表面処理

写真４　組立

写真５　接合

写真６　補彩

写真７　写真撮影

写真８　保存処理後の木樋

分割している木樋を出土状況の写真等と比較して組立、接合面をエポキシ樹脂で接合する。接合面のエポキシ樹脂が固化した後、樹脂表面をアクリル絵の具で彩色して木樋と違和感のないように仕上げる。補彩は木樋に約 30㎝の距離に近づくと補彩と分かる程度に仕上げた。

⑦ 処理後調査

上記①～⑥の工程終了後、処理工程の記録作成や処理後の写真撮影を行った。また、処理後は変化の有無を確認するため現在においても経過観察を行っている。

【引用文献】

今津節夫 2003「大型木製遺物の野外含浸処理 - 南郷大東遺跡出土導水施設の保存処理 -」『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所報告第 75 冊

伊藤幸司・藤田浩明・今津節夫 2010「糖アルコール含浸法からの新たな展開 - トレハロースを主剤とする出土木材保存法へ -」『日本文化財科学会第回大会要旨集』

伊藤幸司・藤田浩明・今津節夫 2013「ラクチトールからトレハロースへ - 糖類含浸法の新展開 -」『考古学と自然科学』第 65 号

10　おわりに

延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区では、集落遺跡が検出され、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世以降に区分される。この傾向は他の調査区と同様であることから、丘陵一帯で同一集落をなしていたと考えられる。

本報告内では多くの重要な発見がなされた。遺構では古墳時代前期の方形周溝や導水施設が挙げられ、古墳時代の首長や祭祀についての議論について大きな情報を提供するものである。特に導水施設は古墳時代前期に属すると考えられ、纒向遺跡や服部遺跡に並ぶ日本最古級のもので、かつ九州初出土の実物資料である。古代においても、船着場の可能性を指摘した溝の他、大型掘立柱建物跡が検出されている。古代ではⅣ区の包含層で「津」字の墨書土器や郡符木簡が出土していることから、『類聚三代格』に記される「草野津」と考えられ、地域内の古代史を復元する上で重要な発見と言える。（「草野津」については、本館発行の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区Ⅱ』において詳細に報告している。）

遺物では、多量の土器や木製品のほか、多くの文字資料が出土している。木製品および古代の木簡・墨書土器類については『Ⅳ区Ⅱ』で検討されている。これらの他に、第 143 図 17 の墨書土器が出土している。土器の形態から古墳時代の前期、遅くとも中期には属すると考えられ、筆で書かれた事は間違いが、既存の「文字」には該当しない（本館の松川・酒井との検討、独立行政法人奈良文化財研究所の教示による）。墨書の文字および筆の出現について、初現的な例となり、今後詳細な検討が必要である。

延永ヤヨミ園遺跡は、国道 201 号のほかに、東九州自動車道、県道直方行橋線の建設に先立って、合計 45,000㎡ほどの調査を行っており、本館だけでこの 4 カ年で 10 冊の報告書が刊行されている。刊行時期がほぼ同時期に集中していることから、報告書毎の検討に留まっており、いずれの時代においても、遺跡全体の状況の中で再評価していく必要があり、今後の課題である。

ふりがな	のぶながやよみそのいせき３く２
書名	延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅱ（第１分冊）
副書名	福岡県行橋市大字延永・吉国所在遺跡の調査
シリーズ名	一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第５集
編著者名	城門（きど）義廣（編集）、大庭孝夫、吉村靖徳、小林啓、酒井芳司、株式会社 古環境研究所、パレオ・ラボ株式会社
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838 − 0106　福岡県小郡市三沢 5208 − 3　（Tel：0942-75-9575，Fax：0942-75-7834） HP：http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/
発刊年月日	2015 年（平成 27 年）3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
のぶながやよみそのいせき 延永ヤヨミ園遺跡	ふくおかけんゆくはししおおあざのぶなが・よしくに 福岡県行橋市大字延永・吉国	402133	14115010	33°43′45″	130°56′50″	20101217〜20120608 20120820〜20120930 20130508〜20130608	19,000㎡	国道建設

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-AB 区	集落	弥生時代	竪穴住居跡 土坑	弥生土器・石器 金属器	
		古墳時代	竪穴住居跡 溝・方形周溝	土師器・須恵器 石器・金属器	古墳時代前期方形周溝
		古代	掘立柱建物跡 溝	須恵器・土師器	
		中世	溝	土師器・陶磁器	
延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C 区	集落	弥生時代	土坑	弥生土器・石器 金属器・木製品	
		古墳時代	土坑 導水施設	土師器・須恵器 石器・金属器 木製品	準構造船竪板・導水施設
		古代	溝	須恵器・土師器 木製品	木簡

要約

延永ヤヨミ園遺跡は、現在の海岸線から約 5km 内陸に入った標高 10 m前後の低・中位段丘上に位置している。北側は小波瀬川、東・南は長峡川による低地が広がっている。丘陵は、中央が東に向かって開口する馬蹄形をしており、古墳時代においてはすぐそばまで海岸線が入っていたことが推定される。

遺構および遺物は、概ね弥生時代終末～古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世の 4 時期に分かれている。主要な遺構については、弥生時代終末～古墳時代前期及び古墳時代後期については竪穴住居跡や井戸、溝など、古代には井戸、掘立柱建物跡、溝など、中世には溝などが検出されている。

竪穴住居跡はⅢ -AB 区で 38 軒が検出された。ほとんどが調査区北側の丘陵上に位置しており、他の調査区と同様切りあいが著しい。逆に南側は既報告のⅢ -C 区分を含め、井戸や土坑が検出されており、馬蹄形丘陵中央の谷部分が含まれる。特筆すべき遺構として、古墳時代前期の方形周溝ならびに導水施設が挙げられ、当時の拠点集落であったことが窺われる。また、古代においても丘陵上で掘立柱建物跡が検出され、谷に近い位置では木簡出土の井戸・船着場の可能性がある溝などが検出されている。

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
ＪＨ	2117104
登録年度	登録番号
26	0010

延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅱ（第１分冊）
福岡県行橋市大字延永・吉国所在遺跡の調査

一般国道 201 号行橋インター関連関係
埋蔵文化財調査報告　第５集

平成 27 年 3 月 31 日

発行　　九州歴史資料館
〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷　　片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園１丁目 8-15